

なのたばねちふゆ

凍結する人

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

高町なのはと篠ノ之束、二人は大の親友同士。ある日なのはは魔法に出会い、束は魔法に興味を持ち、そして千冬は魔法に挑む。

なのはと束と、時々千冬。あと助手（ユーノきゅん）。そんなお話。A's編、はじまります。

追記：支援絵を頂きました、許可を得ているので掲載しています。描いて下さった方にはこの場を借りて深く感謝いたします。

……てなわけで、手間かけて「挿絵表示有」設定にしてくださいませ、（第一章の）最終話をより美味しくお召し上がり頂けると幸いです。

目次

なのたばねちふゆ（本編）

なのはと束と時々千冬

ISの魔法使

凄惨！女子小学生に魔の手迫る！昼過ぎの神社で起こった悲劇！

お茶会へようこそ、フェレットさん

天災の外付け良心回路

いつか空に届いて（Ⅰ）

いつか宙に届いて（Ⅱ）

その頃の一夏さん（おまけ）

なべて世は事ばかり（Ⅰ）

なべて世は事ばかり（Ⅱ）

なにも世に事はなし（Ⅲ）

境界線を飛び越して（Ⅰ）

境界線を飛び越して（Ⅱ）

篠ノ之束の空飛ぶサーカス（Ⅰ）

篠ノ之束の空飛ぶサーカス（Ⅱ）

篠ノ之束の空飛ぶサーカス（Ⅲ）

篠ノ之束の空飛ぶサーカス（Ⅳ）

篠ノ之束の空飛ぶサーカス（Ⅴ）

軽歌劇の終演（Ⅰ）

軽歌劇の終演（Ⅱ）

軽歌劇の終演（Ⅲ）

舞い散る雪と桜を束ね（Ⅰ）

210 194 185 175 160 153 146 134 126 119 109 95 82 71 64 53 44 35 27 20 15 1

終わる命の手向けに贈る (II)	221
戦い済んで日が暮れて (I)	241
戦い済んで日が暮れて (II)	253
平和の朝日がまた昇る (III)	266
月のワルツ	278
仲良きことは? (おまけ)	298
なのたばねちふゆA's 第一幕 (本編)	
篠ノ之東のとある一日	304
はやて・いん・ばーちやるらんど	318
人それぞれの暗中模索 (I)	327
人それぞれの暗中模索 (II)	336
人それぞれの暗中模索 (III)	344
歯車は動き出す (I)	353
歯車は動き出す (II)	360
歯車は動き出す (III)	368
旅の最中に出会うもの (I)	377
心の底からねがうこと (II)	385
狂気の最中に望むもの (III)	394
それは綺麗な夢でした (IV)	406
機械仕掛けの神はいない	418
けれども、幕は未だ降りず	428
The show must go on (I)	442
The show must go on (II)	450
The show must go on (III)	461
閉じられかけた幕の中	474

なのたばねちふゆA' S 第二幕

ここまでのあらすじ

予告みたいなもの

本局解体事件 (I)

本局解体事件 (II)

本局解体事件 (III)

本局解体事件 (IV)

幕間の終わり (I)

幕間の終わり (II)

幕間の終わり (III)

そして—— (IV)

悲劇の始まり (V)

アフエクシヨン (I)

アフエクシヨン (II)

アフエクシヨン (III) (最新話)

おまけ (IS編)

いつかどこかの一夏さん

いつかどこかの千冬さん

いつかどこかの一年一組

いつかどこかの束さん! (前編)

いつかどこかの束さん! (後編)

いつかどこかの用務員室

いつかどこかに、なのはさん。

おまけその2 (対セシリア編)

IS パーツ争奪戦!

706

696

686

673

666

657

649

640

631

616

607

594

582

571

562

554

538

528

516

500

496

489

持つべきものは幼馴染 (I)	723
持つべきものは幼馴染 (II)	734
平穏無事な人間模様	749
決戦はアリーナの上で (I)	760
決戦はアリーナの上で (II)	768
決戦はアリーナの上で (III)	780
なまえをよんだら	788

なのたばねちふゆ（本編） なのとはと束と時々千冬

この世界は全部、篠ノ之束の想定内だ。

地球の外周は40077kmで、私の頭囲は51.1cm。

私の頭を7億倍にしても届かない大きな星。でもその表面で起こっている事故、事件、スキャンダル、発見、発明、そして戦争ですら。

物心ついてからの私の予想を、一片たりとも超えたことはない。

私は天才だ。

別にカッコつけている訳でもないし、誇大妄想でもない。だって、本当にそうなんだもの。

理不尽に思ったことはない。私にとってはそれが当たり前だったからだ。

まだ周りがひらがなだつてロクに書けないような発育段階で、大学の図書館にこっそり入り込んで、数学の本を読んでいた。

聞いた言葉をすぐに覚えて、足し引きを覚えた次の日に掛け割りを思いついた。

漢字が難しくて読めない本がある時は、ベッドの中に入ったまま、寝ずに常用漢字を全部覚えて、それでも眠気一つ感じなかった。

あの時は楽しかったなあ、と思う。一つ分かったら三つ謎が生まれて、それを解いたら五つ不思議が生まれる。目の前の世界は無限に広がっていて、それを全部解き明かしてやろうと息巻いていた。

変な子だと噂されていたのに気づいたのは大分後になってからだ。親にも何かしら言われていた。もっと小さい子らしくしろ、だったっけ。

今思っても反吐が出る。私は私らしく生きているのに。それをどうして阻まれなきやいけないんだろう。

でも、ひよつとすると、その言葉はちよつぴりだけ正しいのかもしれない。

まだ六年しか生きていなかったけど、もう全部知ってしまった。
物理学、数学、化学、地理学、語学、歴史学……並べてみると数だけ
は多いけど、皆大したことはない。

みんなみんな単純だった。

私は知識を積み上げる過程で、知識を予想することを覚えた。

この事象はああなるだろう、あの出来事があるから次はこうなるだ
ろう。今まで積み上げてきた情報や知識から、未だ見ぬ事象を想像す
るのだ。

それを思いついてから、私の見る世界は急速に色褪せてしまった。
だって、何もかも予想した通りになってしまっただもん。

あーあ、まだ知らないことを軽く予想して、それが寸分違わず合っ
ていた時の失望感と言ったら！

要するに、クイズの答えが合っていることより、間違っている方が
嬉しいのだ、私は。

だって、それは自分がまだ「知らない」事があるって証拠なんだ。
知らないから間違える。分からないから迷ってしまう。知ってい
るのに、分かっているのに間違えるなんて愚かな真似はしない。

知らないこと、分からないことで一杯な世界が、私は好きだった。
でも、たった三年、物心ついてから三年間掘り尽くしてみただけで、

私はその全てを分かってしまった。

これが自惚れや勘違いだったらしいのに。

でも、今朝のニュースを見ても、予想していないことは何もなかつ
た。

交番に掲示されている交通事故や死者の数だって大体は言い当て
られる。人間の行動全部を数学に当てはめることは出来ないけれど、
それでも端数を含めて、一番確率の高い数字を当てはめれば、それが
必ず当たってしまう。

だから、この世界はつまらない。つまらないと思ったらつまらない。
「つままない」

小学校に入学してからちよつと経った時、クラスも学校も何一つ自
分の予想をはみ出なかったことへの失望から、普段は完璧に隠してい

たその本音が、つい、ポロリと口から漏れてしまった。

「つまらないの？」

という返答が、隣で歩いていたのから出ることも分かっている、それが尚更つまらなかつた。

普段なら何も無かつたように歩いていく所を、ついカツとなつて言い返してしまつた理由はそれだつた。

「つまらないよ」

「なにが？」

「全部」

とはいえ、こんなのに付き合つていても時間の無駄だし面白くない。だから、二言だけ吐いてとつと行つちやおう。

そう思つたけれど、*「それ」*は生意気にも言い返してきた。

「つまらなくないよっ」

何の理由もなしに、ただ感情だけで自分を否定する。私の一番嫌いで、聞きたくない言葉だ。

普段なら、そういう言葉は聞こえない。自然と耳からすり抜けてしまふ。

でも、あの時私はとてもムカついていた。ちーちゃん風に言えば、虫の居所が悪かつた。

「どうして？ 私にとつてはつまらないけど」

「どうしてもっ！」

「理由になつてないじゃん」

「なつてないけど！ でもつまらなくないんだよっ」

思わず襟を掴み上げた。私は録に運動とかはしていないのだけど、何故か力は強くて、自分と同じくらいの*「それ」*は簡単に持ち上がった。いた。

あの時の私の顔といえば、それは凄まじい物だつたと思う。

いつだつたか、脳内であの時の感情をエミュレートして、それを鏡越しに写真で撮つたら、自分でもちよつと引いたくらいだ。

「どうして？ 何の理由もなしにそういうこと言わないでよ。私にはつまらないんだから、いいでしょ」

「だ、だって……だってっ」

私の顔を見た“それ”はとても怯えただろう。怖くて怖くて、逃げ出したかっただろう。

私には簡単に予想できる。でも、“それ”がどうして逃げなかったのかだけは、あれから二年間ずっと考え詰めた今でも『分からない』。「そんなの、だめだよ。ぜんぶつまんないなんて言っちゃうの、だめだよ」

「どうして?」

「だめののっ、そんなの……いやじゃないの?」

そうだ、私はイヤだ。この世界が。そんなことはとっくのとうに分かっている。

またムカつてなって、今度は直接首を掴んだ。

「う、あう」

「嫌だよ? でも、何もかも分かっちゃう。全部自分の思う通りになるんだよ。だからつまらないよ。ね、君がどうにかしてくれる? っというか誰、君? このつまらない世界、面白くしてくれるの?」

底冷えした言葉の最後の方は、怒りではなく願望だった。

だって、“それ”は。あの娘は逃げなかった。

あの時私は手加減していなくて、恐らく窒息する寸前まで首を締めていた。

その手は痛くて、塞がれた息は苦しくて、あの娘の意識は朦朧としていたことだろう。例え理性がNOと訴えても、本能の方で勝手に手を振りほどもいくらい、あの娘は追い詰められていた。

でも逃げない。それどころか、潤んだ目で、それでもはつきりまっすぐと、自分の目を見つめて来た。

それは、久しぶりの予想外だった。

「……う、うん」

絞りだすような、一声。それも私の想定外。真っ正面から放たれる、でも勢いだけでない、ちゃんとした決意がある言葉。

「きみ、が、たのしくないなら、おしえてあげるっ」

「何を」

「つまんなく、なん、か、ないの。みんな、みんな、みんな、みんなっ！」
手が振りほどかれた。思いつきり首を締め上げていた筈の手が。

目の前の彼女のデータを改めて確かめる。飛びきりの運動音痴のはずだ。自分の手を振りほどくくらいの腕力は無い。そのはずなのに。

私は思わず、信じられないような表情で自分の手の平を見つめた。
はずなのに、という言葉を使うのはどれくらいぶりだろうか。

「みんな、いるからっ！ おとーさん、おかーさん、おにーちゃん、おねーちゃん！ 他にもいっぱい、このせかいにはいっぱい、いっぱいひとがいて、みんな……それが、みんな、つまんないなんて、そんなことないよっ！」

訳がわからない。でも、何故か、私の中へと焼きつく言葉。

体当たりされた。反射的に受け流して、あの娘は床へドサツと転ぶ。
顔を強かに打ち付けて。でも立ち上がって、また向かってくる。

それからは、引つ搔こうとしたり、叩こうとしたり。皆払い除けたが、でも向かってくる。

ああ、何だか、楽しい。このやりとりが。無駄にしか見えないこのやりとりが。

「つまんないなんて、かなしいよっ、そんなのいやだよっ、わたしがいやだよっ！」

「どうして？ 私がつまらないのが、嫌なのが、どうして嫌なの？」

「いやだよっ！ わかんないけど、そうして、となりで、いやだっと思ってるの、ほっとけないよっ！」

「面倒くさいからっ？」

「ちがう！」

向こうはとつくに泣き出して、喚きながら引つ搔きに来る。払い除けても払い除けても、諦めない。

この娘はどうしても、私を放っておけないみたいだ。何の理由も因縁もないこの私を。

「つまらないって、そんなのぜったい、ぜったいぜったいぜったい……」

終いには泣きじやくりながら此方に抱きついて、縋りつくように抱きしめてきた。

密着することで伝わる、他人の体温。今までは気に入らない物だったけど、それよりもっと暖かくて、生臭くない熱さが、私の心にぴとつと触つて来た。

「……ね」

「うう……」

始めて、自分から言葉をかける。さつきまで、有象無象のモノとしか思えなかった、ただ息をして、生命活動をする物体にしか思えなかった個体に。

彼女に。

私はこう言った。

「君、名前、なんて言うの？」

「え……」

「だってね、君の名前、覚えてないんだ。思い出せないんだ。なんて言うの？」

記録としてはちゃんとInputされている。でも記憶として、思い出としてはRememberしていない。

「聞いたかった。名前を、彼女の口から語られる、熱のある『なまえ』を。」

それは多分、私が父親と母親以外で始めて記憶する名前。

「たかまち、なのは……私、なのは！ 高町なのは！」

「うん、なのちゃんね……私は、篠ノ之束」

「たばね、ちゃん……うああああっ」

名前を聞いてなぜだか緊張が一気に弛緩したようで、大泣きに泣き出しながら、また、強く抱きしめてきた。

私は、思わずなのちゃんを抱き返していた。

「なのちゃん……私、忘れないよ。一度覚えたことは、もう忘れないんだ」

「うんう……」

「私、ずっと覚えてるからね。なのちゃんのこと、ずっと」

忘れるもんか。心の中ではそうぶつきらぼうに言い張った。

こんなに真つ直ぐで、愚直なまでに真つ直ぐで——そのまま一直前に、自分に向かってくれる人。

私にはなのちゃんが分からない。どうしてそこまで私に拘るのか。私に反対するのか。何の理由も無いのに私を否定して、でも私を救いたいと思ってくれる。正直怖くなるくらいに、私はなのちゃんを理解できない。

逃げ出したくもある。彼女から。今まで理解したどんな数式でも分析できない、訳の分からないものから。

だからこそ、素敵に思える。面白いと、言える。

やつぱり、逃げたくはない。大体、こんな理屈も何も無い理論を解析できないようでは、自分を天才だなんて言えないし。

ああ、こんな娘が居るなんて。やつぱり、世界は自分の思っていたより、少しだけ鮮やかで、美しいのかもしれない。

結論を急ぎすぎていたみたいだ。少なくとも、もう20年くらいは待つてもいいだろう。

それまで、もう少しだけこのままの世界で暮らしてみよう。面白おかしく。

なのちゃんとなら、この色褪せた世界でも、少なくとも白黒くらいには塗り替えてもらえそうだから。

織斑千冬、御年9歳の小学3年生は、非常に大きな頭痛の種を抱えていた。

それは、篠ノ之束。小学三年生にして何十個も特許を持っている、天才発明少女。

なぜだかいつも同じ青いドレスを着込み、機械じかけのウサミミ型カチューシャを頭にくつつけている彼女は、何も知らない一般人から

すればとにかく陽気でハイテンション少女にしか見えない。

しかしその実、とんでもなく人当たりが悪く好き嫌いも激しいので、気に入らない人間にはどんなことをするか分からない。その、超弩級に自分本位な考え方と行動は、周囲（主に千冬）を引っ切り無しにトラブルへ巻き込んで、離してくれない。

出会った当初など、挨拶してもそこに「誰もいない」かのように通り過ぎられたりもした。その辺りは何回かの教育的指導によって改善したのだが、それでもなお社会的に生活するにはネジが数十本溶けて蒸発しているのではないか。

篠ノ之家と自分とはそこそこ深い付き合いだし、彼女が騒動を巻き起こしていたら無視する訳にはいかないのが千冬の辛いところだ。

そうした苦労の果てに、ついに持て余した、もうダメだ、と思った時——月に三度は下らないが——千冬は決まって、ある人物に教えを請うことにしている。

「……聞いてくれ、なのは」

「千冬ちゃん、どうしたの？ ……また束ちゃんのこと？」

高町なのは。

自分より遥か二年前から篠ノ之家という女の子と付き合い合っていて、恐るべきことに彼女の「友達」になれた同級生。

彼女の言うことには、その時の束は今よりずっと排他的だったらしい。あれ以上があるのかと思うと、いささか信じられないものの、なのはがそう言うなら本当なのだろう。

「そうだ！ なのはも聞いただろう、あの騒動……」

「騒動というより、活躍、なんじゃないかな？ あのおかげで、アリサちゃんもすずかちゃんも何もされずに助かったんだし」

「そんな生温いことか！ 確かに誘拐なんて企む奴らは自業自得だが、それにしても、もう少しやり過ぎていたら……死んでいたぞ!」

話題の中身は先週の休日、なのは、千冬、束との共通の友人である二人の少女が誘拐された事件であった。

この事件を偶然（と本人は証言している）目撃した束は、車のナンバーと車種をすれ違った一瞬で暗記。そしてどうやってか町外れの

廃ビルを探し当て、そこに立てこもる犯人グループに、彼女の発明「いい夢見てますか? verU・3G」とやらを使用した。

数十分後に千冬の通報で警察が突入した時には、グループの内半分が狂声を挙げながら助けを求め、残り半分はそれすら出来ずに虚ろな目で、無抵抗のまま逮捕されたという。

「大丈夫だよ、束ちゃんそこら辺はちゃんと考えてるし。大体その発明品、ちゃんと危なくないように、テストはしてるんだよ?」

「どうやって!……まさか、また」

こういう時、千冬の嫌な予感は95%くらいの確率で当たる。

「うん、私が試してみたの」

「この大馬鹿っ!」

ノータイムで頭をポカリと叩く。「にやああつ!」と大きさに頭を抱えてしゃがみ込む姿は束そっくりで、尚更叩きたくなくなっていました。

「ひどいよ千冬ちゃん」

「お前が悪い! またあいつのモルモットになったのか! 何だか訳の分からん機械を使われて怖くないのか!」

「モルモットなんかじゃないよ、お願いされたただだよ。それに、束ちゃんに限って絶対、酷いことはしないよ。ね? だから、怖くない。だよね?」

どこまでもものほほんとしたなのはの返答に、千冬はかくり、と頭をうつむけた。

自分よりもずっと長い、二年来の付き合いだというのに。いや、だからこそなのか。天災の危険性を全く考えず、その渦中に突っ込む大馬鹿者が、千冬にとっての高町なのはだった。

なんだかんだで束と付き合い続けている自分も、何時かはああなるのだろうか。なんて考えてしまい、ぞくぞくする寒気が背筋を這いまわった。

「で、どうだった」

「何が?」

「お前はもうなったか、だ。悪質な犯罪者に自首させて、余罪も自白さ

未来予知の出来る機械。それがどれだけ偉大で、しかし危険なものなのか。小学3年生の千冬の頭でもはつきり理解できる。

「大体、お前はその未来予知でああいう……破天荒な、夢を見たんだろう？ 本当に魔法少女になって、戦い続けるんだぞ？」

「そうだね。でも、束ちゃんが正夢にはならない、って言ってくれたから」

「あんなアパーウサギの言う言葉を良く信じられるな！」

「だって、束ちゃんは私の友達だもん」

ぴしゃりと言いつけられた。なのはにとつて「友達」とは、それ程に重みのある言葉なのだろうか。

大体なのはのように明るく真っ直ぐな女の子と、束のように根性が螺旋迷宮になっているヤツが、どうして友達なんかになれたのだろう。

千冬は、なのはが「友達」という一言で束を表現する度に、いつもそのことを考えてしまう。

「それにね、束ちゃんが言ってたけど、私は『特別』なんだって」

「特別？」

「そう、私は……」

「そうそう、なのちゃんは特別なんだよーっ！」

突然、大空のど真ん中から聞こえてくる声。

話し込んでいた二人が見上げると、逆三角形の人参型で、ちょうど葉の部分がローターになっているヘリコプターが浮かんでいた。

そして、なのはと千冬の間、勢い良く落っこちてきた。

人参の先端が舗装されたコンクリートに突き刺さる。いつも思うのだが、こういう破損は一体誰が弁償しているのだろうか。

とりあえず、千冬はパカッと開いた人参から出てきたうさぎ耳の青ドレスの顔面に向かって通学カバンを叩きつけることにした。

「もすもすひねっ……痛っ！ 痛いよおちーちゃん！ 私まだ何もしてないのにく！ かばんでぶった！ この天才的で人類の至宝な頭脳をぶったあー！」

「黙れ。お前みたいなのを至宝にするほど、人類も落ちぶれてないだ

ろ」

噂をしていたらなんとやらである。何処で聞いていたのだろうか。いや、最初から最後まで全部、聞いていなくても予想の範囲内だ、くらいは言うのかもしれない。

「あ、束ちゃんおはよう」

「なのちゃんおはよーっ！ 今日もいい天気だね。なのちゃんも可愛いね。篝ちゃんと同じくらいぶにぶにして可愛いねくぐふふふ」
「にやははは、くすぐったいよ束ちゃん」

早速過激なボディタッチに移行する束。服の中に手を入り込ませる束。何処を揉んでいるのやら、千冬としてはこの不純さだけでも公衆の面前で見せたくはないのだが、しかしなのは拒否せず、されるがままになっている。

こういう時、一歩間違えると服も下着も亜空間に消し去ってラビッツダイブしてしまうだろう束を止めるのは千冬か、そうでなければここにはいないアリサかすずかの役割だ。

という訳で、もう一度学生鞆を遠投。

「ぐふっ！ しかししかし、なのちゃんの胸の発育に貢献できた私に一片の悔いなしっ」

「よし、覚えてたての空中コンボを叩きこまれたいようだな」

「つて思ってたけど今のナシ！ ストップストップ、ストップ・ぎ・ウオーー！」

「もう少し心のドアを開けておいてから言え」

そのままパンチパンチキックからの、空中で三連撃、それから投げでめた。

千冬の運動神経、もとい戦闘力は元からはかなりのものだったが、篠ノ之神社にある剣道場での鍛錬、そしてなのはから紹介された彼女の父親、高町士郎直々の指導によって、人間が持つには結構非常識なレベルにまで高まりつつある。

千冬自身は自分を常識人と位置づけて、非常識な束やそのブースト剤であるなのはの抑え役に回ろうと自負していたが、そんな彼女も非常に非常識である。

「あたたた……痛いよおちーちゃん、うさぎは痛めつけられると簡単に死んじゃうんだよ?」

「それはどんな小動物でも同じだ。それにお前はか弱い小動物ではなく、どちらかと言えばヴォーパルバニーじゃないか」

「カニバリズムの気はないよつ、今予測したけど、ちーちゃんもものちゃんも絶対不味いし」

「考えんでも分かることだろう、わざわざ口に出すな!」

「あつ、ちーちゃんたら考えちゃった? ねえねえそうなの?」

「くつ……相変わらずひねくれてるな!」

勿論、今の空中コンボをまともに食らってから五秒もしない内にけろつと立ち直る束が非常識でないはずもない。

まともな訓練もせずに日がな一日神社の脇にあるラボ(という名のバラック建ての秘密基地)に引き籠もりながら、まともに戦えば千冬と互角なのだ。

流石に手榴弾が直撃すればバラバラになるだろうが、それはそれで自力で肉体の再構築くらいは成し遂げてしまうかもしれない。

「にやははは、二人共、あんまりケンカしてると学校に遅れちゃうよ?」

しかしながら。

そんな二人の実力を正確に把握し、目の前で起こった半分スプラッタなシーンを見ても大丈夫だろうと見切りをつけて、何より二人を「友達」として信頼しているから、平然とした口調で割り込んでのける。

「む、そうだな。おい東、とつとと行くぞ」

「はぁーい☆」

そうした一言で、この二人の天災に言うことを聞かせるのだから、実のところ彼女がこの中で一番、非常な人物であるのかもしれない。た。

その後、通学路を三人で歩きながら、千冬は東に問いかけた。

「ところで東、なのはが見たという『夢』のことなんだが、あれは本当に、正夢にはならないんだな?」

「そうだよ？　ぶつちやけアレ、何故か不完全な予測になっちゃってるから。私の『いい夢見てますか？』は人間の行動パターンを完全に予測して、周囲の環境やデータも加味して未来予測を構築できる代物なんだ。けどなのちゃんはね、多分予測から大きく外れた行動を取るよ？」

「……つまり、お前のマシンにしては珍しく、欠陥品か」

「そうとも言えるねー。でも、他の人間は皆予測通りに動いた。あの犯罪者だって、自首したら懲役、もし自首してなかったら、助けに来たなのちゃんの兄から御神流剣術を食らって、それからバニングス家と月村家の権力で闇に葬り去られるよ！　っていう予測通りになっただもん」

「それが、なののは『特別』だということか？」

「うん。長い間付き合って、どんなに計算し直しても、私の予想の上を行く。真っ直ぐで単純だから予想は楽だ、と思うでしょ？　でも、真っ直ぐ過ぎて追い切れないよ」

「そんな、ものか……とてもそうは見えんがな」

「でしょー？　だから分かんないの。だからね、楽しいよ」

そう言って、自分の三歩先を歩くなのはを見つめる束の顔は、いつもよりちよつとだけ普通の女の子に近づいていて。

千冬はそれを見ると、なぜか安心してしまうのだ。

同時に、もし束がなのとは出会っていなかったら、その情熱の対象が何処へ向かっていたかと考えると、そこはかとない恐ろしさを感じてしまうのだが。

千冬は知らない。束が呆気無く否定した『魔法少女』になる夢が、その後現実になってしまうことを。

束は知っている。しかし、夢では無く現実の中で、なのはどう行動し、決断するかは分からない。だから、正夢にはならないと言った。そしてなのは何も知らず、分かりもせず。

だけど、例えどんなことが起こっても、自分を支えてくれる人が、大切な友達がいるのだから、絶対に大丈夫だと信じていた。

ISの魔法使

「……あはっ」

言葉が漏れた。ビデオカメラを持つ手が震える。いけない。既に定点カメラ、自動操縦のヘリカメラなど、二十数個のレンズである光景を追っているが、それでも自分の手で撮るこの光景をブレさせる訳にはいかない。

両手でカメラをガシッと抑えた。しかしそれも、数秒後には地震の最中のように震えまくる。心の震えが身体に反映するなんて、初めてだ。

「ああ、あ、はああ……」

目の前に、ピンク色の光がちか、ちか、ちか。そうして、光の柱が登る。その美しさに、思わず熱い吐息が漏れた。

その中で何が起こっているのかまるで検討がつかない。その事実だけで、心臓がカートウーンのアニメのように、身体を突き破って吹き飛びそうになる。

それを抑えようとして左胸を手で抑えると、年に似合わず膨らみかけている胸が鷲掴みにされ。

「はあうっ」

と、緊張に似つかわしくない声が出てしまった。

一体何をやっているのだろう。目の前には、既存の科学や常識をひっくり返すような現象が起こっているのに。

光の柱がバラバラに砕け散る。そして現れたのは——白い悪魔。私の仮定したつまらない世界の壁を打ち砕き、未知なる混沌の世界へと誘惑してくれる悪魔。

——ふえっ、え、な、なにこれえっ!?

——やった！ 成功だ！

驚いている彼女が持っている杖は、一体何処から現れたのだろうか。

彼女の服装は何故より白く派手になっているのだろうか。その材質は？ 構造は？

盗聴器から聞き取れる少年の声は、一体その場にいる誰が発したも

のだろう。フェレットしかいないのだが、小動物の発声器官でどうやって複雑な人語を発しているのだろうか？

「ああっ、ふあ、あ……」

考える。頭の中に詰まっている既存の知識や理論をフル回転させて考える。でも理解できない。

彼女が今対峙している怪物もそうだ。その跳躍力、耐久力、どれを見ても、生物学なんて当てはめるのがバカバカしいくらいのおかしさだ。

——落ち着いて、あいつを封印するんだ！

——そ、そんなこと言われてもっ！

オカルトだって参考にならない。つまらない人間の想像力を、はるかに上回る超常的存在。

大体、怪物が保有しているエネルギー量はどうかだろう。脳内で計算してみたなら、なんと、この町を十回消滅させてなお余りある程だ。それがあんな小さな不定形生物に収まっているのはどうしてだろう。

未知の論理、未知の数式。

その仔細、それによって成り立つ世界を妄想する度に、お腹の奥がずきずき疼く。

未知。この世界のどこにも存在しなかった現象。それは無限の可能性。

考えられる全てを予測し演算すると、たちまち頭がパンクして、沸騰したような熱が身体全体に伝搬する。

「あ、すごい、す、ご、ひい」

ふと気づくと、全身が汗でびっしり濡れていた。

ドレスの中はきつと大惨事だ。

——ええと、とりあえず……きやつ！

そして、撮影対象が動いた。目の前の黒い怪物に襲い掛かれて、慌てて避難したようだ。

それに合わせてカメラを動かそうとしたところで、足がもつれて倒れてしまった。

「うあつ、うう」

転げた勢いで、大好きなウサミミのカチューシャが外れる。夜の冷えた、しかもゴツゴツの路面が痛い。それでもカメラと、自分の目を眼前から離すことは出来ない。膝立ちになって注視し続ける。

皮膚に残る痛みすら、今は何だか気持ちがいいし。

——今だ、封印を！

——う、うん、やってみる！

戸惑いから転じ、覚悟を決めて一気に真剣になる彼女の顔。それはとても美しく、思考の熱が渦巻く身体が更に燃え上がって、意識が溶けてしまうようだった。

決然とした表情で構えられる杖、その先端に光が宿り、暗黒物質の化け物を四方八方から絡めとる。

そして。

——リリカルマジカル！

呪文なのかそれとも認証コードなのか、とにかく少女らしい叙情的な呪文が聞こえた後に、真っ黒い怪物は何の脈拍もなく姿を消した。

さつきまで感知されていた、測定器が振りきれられるほど膨大なエネルギーはどこに消えたのだろう。まさか、全部杖の中に入っているのだろうか。

ああ分からない。分からない、分からない。

自分は天才なのに。この世界で理解できないものなんて無かったはずなのに。

それが楽しい。

それが嬉しい。

それが——とつても、気持ちいい。

「うあ、あ、あ、あっ——!!」

お腹の奥の奥から湧き上がった衝動が全身をわななかせ、身体に溜まった熱が一気に発散し、ついに私は辿りついた。

これが、これが私の待っていたもの。モノクロに見えていた世界が、彼女の発したピンク色の光を軸に、テクニカラーで一気に色彩されていく。

ウサ耳の外れた、水色ドレスの私はドロシー。

ハリケーンのように破天荒な少女が、私を魔法の国へと連れて行ってくれる。

その先には、黄色のレンガ道もエメラルド・シティも、きつとあるはずだ。

「あははははは、あははははははー！」

笑う。子供は笑うものだけど、私は全然笑わなかった。

9年間そうだったのを取り返すくらいに、今、私はひまわりのように笑っている。

だって、ここは夢の世界だもの。女の子がどれだけ笑っても、文句なんて言わせるものか。

「あはははは、あは、あは、あははははははー！」

私はそのまま走り寄る。真っ直ぐ、出来たてホヤホヤの魔法少女の方へ。

「え、東ちゃん……？」

戸惑うなのちゃん。その顔も可愛い。でも、今はそれより先にやるべきことがある。

両手を広げて走りながら、すれ違い様に——別の世界からやってきたフェレットを回収した。

「ちよ、ちよつとー！」

引つ掴むとキューキュー何か喚いたがスルー。こいつには聞いたことが山ほどあるのだ。

東さんは謎を謎のまままで終わらせることはしない。魔法について、あのエネルギー結晶体について、なのちゃんの持つ杖について。

全て根掘り葉掘り聞き出して、自分のものにしてやる。

自らを偉大だと偽り、魔法という名前だけを借りて偉ぶるような、何の力も持たないただの発明家には、絶対になりたくないから。

「あーっ、東ちゃん、それ私のペットになるんだよー！」

「だいじょーぶだいじょーぶ、多分3日ぐらいすれば、全部理解して用

済みになると思うし！ それに、色々するけど、ちゃあんと怪我は直して、五体満足にして返すから☆」

「え、ちょ、なんなの君、怖いよ、凄く怖いんだけど!？」

「見当外れな心配をするなのちゃんだけど、私の一言で安心したみたいだ。」

「そっか。東ちゃん獣医さんにもなれるんだね！ じゃあ、お願いでも、私のペットなんだから、なるべく早く返してね？」

「え」

あつけなく見放されて間抜けな声を出すフェレット。

当然だ。出会い立てのペットと、三年目の友人にして天才東さん。どっちがより信用できるか、小さい頭で考えてみるといい。

「あいあいまむまむ！ さあ、私のお友達を大きなお友達アーンド私好みにコーデイネートしてくれたフェレットくんはラボにしまっちゃおうねー！」

「だ、誰かー！ 変態です、それも大分特殊な部類の変態です誰か助けて！」

「鳴いても無駄無駄つ。大丈夫、ちゃんと質問に答えたら、東さん特製の赤クリームをたっぷり食べさせて、ちゃあんと馴致させてあげるから☆」

「なんかそれ凄く凶悪そうなんだけど！ 助けて！ キューー！ キュウウウウ！」

魔法少女の格好のまま立ち尽くすなのちゃんを置き去りにして、フェレットの悲鳴を町に響かせながら、私は止まらずに走り続ける。

だって、全てはこれからだもの。

可憐な乙女の周りで起こる、楽しい楽しいおとぎ話は、ここから始まるんだから。

凄惨！女子小学生に魔の手迫る！昼過ぎの神社で起こった悲劇！

その日、織斑千冬は苛立っていた。

どうしたのだろうか、彼女をいつも悩ますあの束が、珍しく学校をサボっているからだ。

そのせいで、元々ある他人を寄せ付けない刺々しさが、更に磨きを増していた。

「た、たまにはそういう日もあるんじゃないかな？ 束ちゃんだし」

それを見かねたアリサとすずかは、昼休みに昼食がてら、彼女を屋上へ呼び出した。

教室から離れた、という方が正しいかもしれない。凜々しく何処か張り詰めていて、余り子供らしくない性格千冬は、孤高、という言葉が似合うほどにクラスの中で際立っている。悪く言えば浮いている。それがあの有り様では、クラスの空気が淀んでしまうのだ。現に、彼女の隣に座っていた不幸な生徒など、黒いオーラに当てられてしまっただけで、始終びくびくしっぱなしだった。

「そうよ、大体あいつみたいに変な奴って、学校を休んで当たり前のタイプなんじゃないの？」

「それがな……」

違うのだ、と千冬は忌々しげに首を振る。

そして、ぶすつとした顔つきのまま、手だけを動かしてある座席を指さした。

「考えても見ろ。なのはが学校に来ているというのに、あいつが学校に来ないはずがあるまい」

「あー……」

「そういう……」

言われた途端見当が付き、二人はなんとも言えない顔で宙を見上げる。

束の偏執的な迄のアプローチと、それを平然と受け入れてしまうな

のは。アリサにもさすがにも、もはや日常風景の一つになっていた。「確かに、おかしいよね……なのはちゃんと束ちゃんが一緒じゃないなんて。私達がなのはちゃんと知り合った時も一緒だったし」
「ちよつとすずか、思い出させないでよ……悪いことするんじゃないな、つて身にしみたまん、あの時は……」

すずかのりボンを取ったことをめぐってなのはと喧嘩し、仲直りしたその瞬間に、割り込んできた束の顔は今でもはつきりと思い出せる。

別にアリサが悪いわけではないが、その時の束はとてつもなく怒っていたのだ。

——ちよつと君、金だけ持つてる凡百の分際でどうしてなのちゃんの隣にいるの？ ふぎけないでよ。なのちゃんの隣に凡人は要らないんだよ？ なのちゃんの隣にいるのは、私みたいな天才じゃないと。でも、私以上の天才はこの世界にいないんだから、私だけでいいんだよ。ぶつかることで分かり合う友情、育むのは何人もいらないよ。大体あんた何様のつもりなの？ なのちゃんの大事な大事なありがたーいお説教聞いたくせに逆上するなんて——

凄まじい形相で瞬き一つせずにアリサを睨みつけながら、束は怒鳴り散らしていた。

それはアリサにとって、地獄の釜が開いたのではないかと思いたくなるほど恐ろしい光景であった。

「……どうせ、嫉妬してたんだろう？ なのはと友達になったお前に」「ご名答。だけど、あの時はそんなこと全然分かんなくてさ。藪をつついて出てきた蛇と仲良くなったら、いきなりライオンが出てきたみたいで、とにかく怖かったのよ」

鋭い直感、というか諦観で真実を言い当てた千冬に、アリサは苦い表情のまま首を振って肯定する。

束がああまで不機嫌だった理由、それは、なのはを傷つけた怒りなどではなく、単純な嫉妬、それに尽きていた。

自分が知り合った時の大喧嘩を棚に上げ、しかし同じようなシチュエーションでなのはと知り合ったアリサに嫉妬する。そんな幼稚さなんて、あの時のアリサに分かるはずもない。

昔のアリサは、良く勉強ができてお父様に褒められてばかりの自分は天才なんじゃないのかな、と子供らしい自信さえ持っているほど我儘だったのだが。この一件で、本当の天才は自分なんか比較にならないほど、とてつもなく傍若無人で凶悪な存在なのだと理解したのだ。「だから、高慢ちきな自分の鼻をへし折ってくれた、というか、ああいう奴にはならない、むしろなりたくない！　って反面教師になつてくれた……んだけど、正直、私今でもあいつ怖い。あいつには悪いけど、顔合わせなくてホツとしてる自分がいるわ」

「でも、束ちゃんが暴れ過ぎたら、なのちゃんが必ず止めてくれるよね？　それこそ、あの時みたいに、『いけないよ』って」

あの場にはさすがも居合わせていたが、仲直りの場が一瞬にして天災吹きすさぶ鉄火場になつてしまい、すっかり怯えきつてしまつていた。

そこでなのはが進み出て、終いにはアリサを正座させて大演説を続けていた束の目の前にすつくと立ってくれないければ、最後には怖くて逃げ出していただろう。

『こらっ、人を馬鹿にしちゃだめだよっ、束ちゃん！』

『えー、でもこいつはなのちゃんを』

『だめなものは、だめ！　アリサちゃんも仲直りしたから、もう私の友達なんだよ！　分かってくれないなら、もう束ちゃんのお話聞いてあげないっ』

『あぐうっ……！』

その瞬間、怒髪天を突く状態だった束が、みぞおちにアップパーを食らったような潰れた呻きを出した後、あつという間に鎮まる。そして暫くしてから、一転して切ない表情を浮かべつつ、なのはに抱きついて許しを請うた。

『ううう、それだけはご勘弁をお、神様仏様なのはさまあー！』

『ふんだ、束ちゃんなんか知らないもんね。ぷいつ！ アリサちゃん、
すずかちゃん、行こっ』

『やあああん……』

そっぽを向くのはに、本物のうさぎのようにぴよんぴよん飛び跳
ねて気を引こうとする束。

呆然とするアリサとすずかは、何だかどつもない乱入者の恐怖を
心に深く刻み込み、同時にその手綱を完璧に握りきっているのはの
凄さを感じたのであった。

「そうよねえ……なのはってば、どうやってあんな奴の手綱握ってる
のかしら」

「本人にその気は全くないと思うぞ。向こうが勝手に首輪をつけて、
手綱を握らせて、適当に引つ張られているだけだ。何の酔狂だが知ら
ないが、とにかく、なのはが奴の外付け安全装置になってくれている
のはいいことだろう」

「そうすると……千冬ちゃんが心配なのは、なのはから離れた束ちや
んが今何をやってるかってこと？」

すずかの言葉に、自分の不安はまさしくそれだ、と言いながら千冬
は拳を握り締めた。

「あんな奴がノーリミットで野に放たれてみる！ 次の瞬間頭上に隕
石が降ってくるかもしれないというのに、おちおちのんびりしてい
れるか！」

「だからって、そんなに焦って食べる必要ないでしょ……あーあ言わ
んこつちやない」

焦りを食べつぷりに反映し、サンドイッチを喉に詰まらせてむぐむ
ぐ苦しむ千冬。すずかはその肩を、ぽんぽんと叩きながら微笑んだ。

「千冬ちゃん、そんなに束ちゃんのことを気になるんだね」

「知るか。私はな、ただあいつが……良からぬことを始めやしないか
と、そう思ってたな……そうすると、なのははともかくとして、外に
止められるのは私しかないというだけだ」

「はいはい、二重の意味でごちそーさま。千冬、あんたも変なのに惚れ

込むよね。なのはのこと言えないじゃん」

「なんだとっ！」

ちやうど自分の分を食べ終えて弁当箱を仕舞ったアリサは、千冬の噛み付きなどどこ吹く風である。

「そんなに気になるなら探せばいいのに。早退の言い訳考えてあげるから」

「するか、そんなこと。生徒として、学業はきちんと修めるべきだろうが。私事はその後だ」

また不機嫌な顔になった千冬だが、その周囲にもう陰鬱な雰囲気は漂っていない。貴重な友達との会話が、一種の清涼剤になったみたいだ。

その様子を見たアリサとすずかは、二人揃って千冬に気付かれないようにくすくす笑った。

しかし放課後、織斑千冬の苛つきはまたぞろぶり返しつつあった。「見つからん」とぼやきつつ、竹刀袋をぶら下げながらほうぼうを走り回っている。

何が見つからないかというと、当然あの天災怪人ウサギ女である。最初は当然篠ノ之家のラボにいるはずだ、とガサ入れするかのように入れたものの、そこはもぬけの殻だった。ついさつきまでいたであろう痕跡があるのに、束自身は何処かへと消え失せている。しかも、一枚の張り紙を残して。

『はろはろ千冬ちゃん！ 残念ですがこの部屋は密室です、またのご来場をお待ちしております☆』

プチンときた。腹いせに『あひゞき くたばってえしめえ！』と書かれたラボの看板を真つ二つに折ってやったが、そんなことで収まる怒りではない。

剣道場で動きやすいジャージ姿に着替え、竹刀を携え猛然と走りだした。

しかし、こんな時に限って神出鬼没の本領を發揮し、その影どころ

か心配すら見えてこないのだ。

ひよつとすると、何処か別次元にでも出かけているんじゃないのか、と疑ってしまう程だった。

そうして、苛立ちを紛らわすように石段を駆け上り、町外れの小高い丘の上にある神社へ辿り着いた、その時――

「……ッ!!」

感覚が張り詰める。嗅覚には、微かな獣の匂い。

脳内で、自分の首筋に鋭い牙が刺さる、というビジョンが見えた。

だが、来ると分かっていたらどうとでもなる。千冬は一瞬で竹刀袋から竹刀を抜き取り、襲い掛かってくる奴の鼻面にぶつけて受け流すように構えた。

思惑通り、大口を開けながら飛び込んでくる獣の鼻を、強かに打ち、その衝撃で怯んだ隙に体勢を整えることが出来た。

千冬は改めて、不貞にも自分の背後を取って襲ってきた肉食獣の姿を見る。黒い体毛に険しい顔、ギラついた目と紫色の舌。どう考えても平和な町には相応しくないモンスターだ。

だが、千冬はうろたえない。

「ほう、こいつは中々……面白い」

むしろ格好の獲物を見つけた、という様子で、口の端を吊り上げた。その表情は攻撃的で、しかし何処か年に似合わぬ妖艶さすら感じさせるくらいに美しい。

千冬は竹刀袋から、もう二つ、中身を取り出す。それは、先程出した得物より短いが、脇差ほどではない。

さっきの迎撃に面食らったのか、警戒している獣を尻目に、長い竹刀を捨て、短い竹刀を両手で持ち、構えた。

それは、剣について、裏の世界について『分かる』者が見れば、ほう、と息をついてしまう程に実戦的で、しかも独特な構え。

「師範の鍛錬を盗み見たものだが、人前で使うと叱られる。まあ所詮付け焼き刃にしかならんだろうが……お前のようなのが相手なら、十分だろう？」

永全不動八門一派・御神真刀流、小太刀二刀術。通称、御神流。

高町士郎の旧姓、不破に代々伝えられていた古流剣術であり、当然不破と関係のない千冬が習うのは禁じられていた。しかし、千冬は早朝の稽古などでこつそりと行われている修行や鍛錬を覗き見し、不完全ながら構えや技を習得していたのだ。

かつては暗殺剣として伝授されていたその剣法を、千冬は対籙ノ之束用の切り札にしようと目論んでいる。正統派な籙ノ之流では、そこそ外道の最北端を走っている束には敵うまい。外道には外道を、という思考法だ。それには勿論たゆまぬ修練が必要なのだが、一人こつそりトレーニングしているだけではなんとも手応えがない。

「練習用のよく動くターゲットが必要でな……お前、良いところに来たぞ。褒めてやる」

言葉とは裏腹にますます歡喜に歪む千冬表情。あまりにも凶悪な笑顔で、とても少女が浮かべていいものではない。

逆に獣の方がその氣迫に吞まれ、慌てて獰猛さを引っ込めていくようにも見える。

「さて、もつと言えば、今の私はかなり機嫌が悪い。とつとと終わらせるから、それまで精々良い的になってくれよ」

9歳の少女対、血に飢えたモンスター。絶望的で凄惨な殺戮劇が始まった。

お茶会へようこそ、フエレットさん

篠ノ之束秘密ラボ。表のラボの地下に増設したそれを知るのは、製作者本人以外には高町なのはしか存在しない。

彼女にしてみれば、地上にあるボロ屋はダメーも良いところだ。あの中には特許を取得した数々の発明品が並んでこそいるが、一度発明してしまったものにもはや価値など存在しない。本命はあくまで、地下にあるこの研究所。どこから仕入れてきたのか、もしかしたら自分で作ったのか。世界全体で見ても最新鋭の機器、工作機械、コンピューターがずらりと並ぶ豪華な場所だった。

「はい、次はこれ！」

その中から、嬉々満面の笑みを浮かべる束が持ってきたのは円柱形のガラスケース。台座にしっかりと固定され、左右に電極のようなものがくっついている。

一方の小さな『実験台』は、テーブルの隅っこで息も絶え絶えだ。

「ね……も……勘弁、して……」

この薄暗いラボに入れられてから、ユーノ・スクライアに降り注いだのは質問の嵐だった。

まず、なのはが持っていたレイジングハートや、魔法のシステム、魔法世界について問われる。それはいちいち的確なので、細緻に渡って答えなければならなかったが、魔法学院卒のユーノにとって少なくともそれはまだ単なる質問にしか過ぎなかった。

問題はそれからである。三時間という長丁場な質問攻めを乗り切ったユーノが、夜も更けていたのどうとうとしながら眠ろうとする時、ナチュラルハイな束は目を爛々と光らせたまま、

『なぜベストを尽くさないのかなユーノきゅん？ 私はぴんぴんだよ？ ワクワクしすぎて質問の度にきゅんきゅんじゅんじゅんびつくんびくんしてるよ？』

などと言われた意味も分からず動転し、眠気が吹き飛んでしまったユーノは、その隙に両手でがっしりと掴まれてしまう。いくら身動きしても、万力のように抑えてくる力から逃れられない。

『人語を喋るフェレットなんてこの世界で初だからね。なんだかシステマチックな魔法の基礎理論程度じゃ、束さんの旺盛な知識欲は満たされないのさ』

ユーノにとつての地獄はここからだった。

回し車に乗せられて1時間ほど走らされたその次は休む暇なく知能のテスト。それも機械でがちりと頭部を抑えられて拒否権なし。その後は四肢を固定されて全身をCTスキャン。ちなみに睡眠薬ではなく筋弛緩剤を注射された。この他にもおぞましいほどに粘着質かつサディスティックな実験が続く。古代遺跡で遭難し、3日間飲まず食わずで生き延びた時よりも長く、苦しい戦いだっただけ。

「いい加減にしてよ……も……モルモットじゃないんだよ、僕……」
「フェレットでしょ？」

精一杯反駁しようとしても取り付く船はない。

ユーノはもはや抵抗すら出来ず、細長いガラスケースの中にポトリと落とされた。

「大丈夫、これは実験じゃなくて検証だよ。うまーく行っても行かなくてもこれで終わり。成功の確率としてはまあ、20%位だけど」

「とても安心できる情報をありがとう……で、何するつもり？ 身体に電流流して、僕が帯電体質の電気フェレットかどうか、調べるっていうの？」

長いこと監禁されて実験漬けなので、いつもは大人しいユーノもすっかりいじけて、思わず愚痴を吐いてしまう。

しかし束はどこ吹く風だ。

「んふふ、それはねそれはね……おおっと せつめい しようとおもった けど てが すべった ー！」

被験体に何も語る事無く、台座にあるスイッチをぽちつと押した。

その瞬間、ガラスケースの内部がユーノの身体と共に青白く光り始める。

「うわーっ、ちょちょちょよ、なにこれどうして僕光ってるの!? 何!?

何か凄い不吉な青白さなんだけど!?!」

「大丈夫大丈夫、チェレンコフ光ほど危なくはないし」

「程つてなに!? 比較対象がやばすぎて対して安心できないって!」
ユーノの意識はそのままだが、青白い光はますます広がり、ケースを覗きこむ束の顔を下から不気味に照らした。

「さあもつともーつと出力あげていこうね? ポチポチポチッと十六連射」

「え、調整ツマミとかじゃなくてボタン連打!? ってうわ、僕ってば綺麗過ぎ……青白くて! 怖いよどうなっちゃうのこの身体!」

「さあ、そのまま時計職人のごとく全身を再構成していくのだっ!

油圧ボタンを押し込めば♪ 出るのは三種の神器なり♪

ぐりぐりぐり、と指先一つでボタンが押し込まれる。そのままの状態で数秒間が経つと、ユーノの身体から溢れ出る青白い光が、段々と彼の魔力色である緑へと変わっていった。

驚いたのはユーノ本人である。光が溢れるにつれて、自分のリンカーコアが強制的に活性化されていくのだ。それも、フレット形態の身体では受け止めきれないくらいに。

「わわわ、出して!」

「はいはいだいまー」

段々と膨張していく緑色のシルエット、束はそれを分かっていたかのように手袋を付け、ケースからユーノをポイ、っと放り出した。

宙に浮いた身体は、小動物特有の反射力で、地面に対し逆さな姿勢から一気にひっくり返る。しかし四足で着地はせず、地面に接したの
は二本の足だった。

「拡散していく緑色が収まり、不安定だった輪郭がしつかりと形を結んだ時。それはフレットではなくて、落ち着いた民族衣装を着た少年になっていた。」

「は……はあ……はあ……し、死ぬかと思った……」

「おお、君はやっぱりフレットと偽り、実は愉快的なシヨタつききゆんだったんだね!」

「バカ言わないでよ! あのままだとホントに死ぬところだったんだよ!?!」

「リンカーコアの暴走に、省エネな身体が耐え切れず内部崩壊し

「ちやつて？」

「そうそう、フェレットモードは消費量が低いけど許容量も……つてなんで分かったの!？」

変身の様子を凝視していた束だったが、今は興奮も収まったように、涼しい顔でちつちつち、と指を振った。

「大体分かるよ。君の反応と変身現象を見てたらね。大体、アレは君の中の生体器官を活性化させる機械で、デンキウナギなんか入れたらもうビリビリ来てますー、なんだけど、やっぱりリンカーコアもそういうのと同じ体内器官なんだね！」

「……そういう切もあるけど、あれは、魔法の中でもまだ謎だらけで……つて僕、そんな危ない事されてたんだ。でも、もう驚けなくなっちゃった。君つて、何というか凄いから」

「当たり前だよ？ 束さんは天才だもん。凄いに決まってるんだ」

そう言った束はキーボードを取り出し、指先が見えなくなるほどの速度で何やら打ち込み始めた。

覗いてみると、半日前にユーノから聞いた魔法理論が、驚くべきことにそっくりそのまま、しかもユーノが説明していなかった事象まで、推測ではあるがこうではないか、と打ち込んでいた。恐るべきなのは、それが殆ど正しい解釈である、ということだ。

天才というより変態じゃないか、とユーノは思う。管理外世界の、魔導のまの字すら世に出ていない世界で、この少女は唯一その原理を解析し始めている。自分というイレギュラーを拾ったことがきっかけだとしても、ゼロからたった一日で、自分の変身魔法を見抜いてしまうほど理解するのは、大変に非常識で、異常なことだった。

「やっし」

束の指がタンツ、とエンターキーが打ち込まれたら、キーボードはすぐに横へ退けられる。記録終了まで僅か五分。数時間掛けて聴取した内容を打ち込むのにこの時間。打鍵速度は勿論、それに耐えられるキーボードも凄いものだ。

「ねえ君、結構頭いいよね。とても9歳とは思えないくらいに。魔法の理論なんか、こつちだと高等数学みたいなものだし……もしかして

君や、向こうの子供はみんなそんな感じなの？」

「き、君にだけは言われたくないなあ」

あ、言ってしまった。ユーノは答えながら、思いつきり顔をひきつらせていた。女の子に褒められるのは悪くないけれど、こんな女の子に褒められるのは何やら底知れぬ闇を感じて、むしろ恐ろしい。

だから、つい口に出してしまった言葉。普通に考えれば悪口になってしまう。ああいうプライドが高そうなのは、馬鹿にされると何をするか分からない。

ひやひやししながら返答を待ったが、帰ってきたのはより斜め上の解釈だった。

「そうだよね！ 束さんが人を褒めることなんてめったに無いんだから、畏れ多くて困っちゃうよね！ 返上しちゃいたくなるよね！ いやー、分かってるじゃないかあチミイ、このこのー！」

何故か気に入られてしまったようで、うりうり、という効果音が出そうなくらいに頭を撫でられた。ユーノは妙ちきりんな理屈に呆れながら、人間のままで小動物のように扱われていることに気づき、なんだか憤然としてしまう。

「で、さ……そろそろ、あの娘の所に戻して欲しいんだけど？」

「あの娘って、なのちゃん？」

「そう。ジュエルシード回収なんて、危険なこと頼んじやったから。出来る限り助けたいんだ。あの娘まだ魔法は初心者だし、僕が教えてあげないと」

「んー、その必要、今の所は無いと思うよ？」

「ええっ!？」

なんで、と迫るユーノに対し、束が差し出したのはタブレット型の端末だった。

そこには、ジュエルシードに取り込まれて巨大化した四足の怪物が写っており——束と同じくらいの年の少女にしかたま打ちのめされ、メタメタになって倒れていた。

「な、何これ……!?! え、あれ、ジュエルシードの暴走体だよね！ しかも野生動物取り込んで凶暴化してる！」

「ピンポン大当たり！ 映像だけなのに良く分かったね。まあ私は天才だから、昨日の夜起こったエネルギーの波長と同一なものを探知するというスマートな方法で探したんだけど。あの宝石、魔力を発してみたいんだけど、余りに強いから家のレーダーでもキャッチできるんだよ」

「そんな方法が……って、そうじゃなくて！ あそこでトドメ刺そうとしてる女の子って誰?! 暴走体だよ！ 魔法を持ってないと歯が立たな……そうか、実体化したから物理攻撃も通じるのか、ってそれでもおかしいって！」

驚き喚くユ一ノに対して、うん、おかしいね、と束は笑う。

実際、束も笑うしかないのだ。あのモンスターとの戦闘力は、ジュエルシードが取り付いてから今までの記録映像だけで概算してみても大人のクマを軽く上回る。それにその皮膚は、恐らく鉄板並みに厚く、硬い。物理攻撃が通じるとしても、銃弾くらいなら軽く跳ね返すだろう。

それが、ただ竹刀の打撃のみでグロッキーになっているのだ。

「ちーちゃんてば、そこまでは強くなかったはずなんだけど。なのちゃん来るまであいつと互角くらいかな、と思って放置したらこの有り様だよ！ ね、おかしいよね！」

あはははは、と笑いながら束は確信する。

ああ、ちーちゃんもなのちゃんと同じだ。きっと、私に対抗するために必死で技を練り上げたんだ。一人で。こんなに危険な技をなのちゃんのパパが許すはずがない。だから夜更けに、一人で隠れて必死で自分をいじめ抜いているんだろう。

面白い。やっぱりちーちゃんも素敵だ。なのちゃんと同じで、私の心を楽しませてくれる。更にいいのが、なのちゃんは私がやりすぎるとそつぽを向いちやうけれど、ちーちゃんの場合はいくらやり過ぎて叩きのめしに来るとのことだ。

そうしたら、更にそれを上回ってしまえばいい。そうすれば、向こうももつと私の予想を裏切ってくれるのだから。

ああ、なんて素晴らしい永久機関だろう！

「うふふ、ふふ、ふふふふふ」

「……」

そんな束の心を察することなんて、誰にもできない。何が楽しいのか分からず、狂い笑う束の前でただただ苦い顔をするユーノであった。

そして、数分間ずっと笑い続けた後、束はようやく正気に戻り、ユーノに記録映像の続きを見せてくれた。

「でね、この後なのちゃんも来てね、正夢じゃないか、だの大丈夫だよ、だの。なんやかんや言い合いがあったみたいだけど……ちーちゃんが協力してくれることになったみたい」

それは良かった、と思わず安心してしまうユーノ。何しろあの少女、モンスターをいたぶる動画を見れば、地上戦に限ってはD S A Aの優勝者より強いかもしれない。

巻き込む人間が増えてしまうのは心苦しかったが、あれなら暴走体なんて問題にならないだろう。

そして、気づいてしまった。封印魔法だけなら、インテリジエントデバイスのレイジングハートだけがコーチ役になってもさほど問題はないということに。セットアップの場面からして、もう呪文の省略まで習得してしまっているようであることだし。

——え、じゃあこれ、僕の出番無いんじゃないの？

「お気づきに なられましたか」

ぎくり、と背筋に悪寒が走る。ふと液晶から顔を上げると、何処からか出したトランプの扇で口元を隠しふっふっふ、と怪しく笑う束の姿。

これから魔法の深奥へと迫っていく上で、彼女には一つの欲望があった。役に立つ道具がほしい。地球の学問を学ぶ上では全てを書物に頼ったが、魔導におけるそれは持ち合わせていないのだ。

さて、ここに異世界から降って来たのが二つ。片方はなのちゃんに

持って行かれた。だから、もう片方を半分こするのは、至極当たり前のことではないだろうか？

「ね、ねえ君、何を、言いたいの、かな……」

「君じゃなくて、教授、って呼ばせてあげる。復唱！」

「き、教授っ」

学院での体育の鬼教官を思わせる鋭い叫びに、思わず背筋を伸ばして答えてしまう。この時点で、二人の立場関係はほぼ決まってしまったと言えるだろう。

「私ねー、ちょうど助手が欲しかったところなんだ。魔法に関しては教科書も参考書も何も無いし、私にリンカーコアは無いから……君に……その代わりを、して欲しいんだ。ね、お願い？」

底抜けな笑顔で、上目遣い。そして首を傾げながら尋ねて来る束。何も知らなければ、可愛い女の子の心からのお願いだ。ユーノも男として、是非とも引き受けたくなくなってしまいうくらいに魅力的な。

しかし彼女のその笑みは、形のない悪魔との奴隷契約書である。きつと、今日みたいな実験体扱いや、そうでなければ無茶ぶりの限りを尽くされて、いつの日かぽいっと捨てられてしまいうに違いない。

だが、ユーノは断れない。無言で振り向こうとするユーノ。肩に優しく手をおいて抑える束。

どんなにしても立ち去れない。ここは海鳴東ラボ、絶対に断れない。

「……………」

苦悶の顔で、しかし逃げ出せず、ユーノは顔を正面に戻し、ゆつくりと首を縦に振った。

こうして、篠ノ之束の助手は誕生したのである。

天災の外付け良心回路

高町なのはと織斑千冬。コンビを組んだ二人のジュエルシールド回収はそれなりに順調であった。

最初、ジュエルシールド・モンスターの前で出会った時、千冬はなのはを思いつきり問い詰めた。どうしてすぐに話してくれなかったのかと。さつきまで叩きのめしていた黒い獣モンスターも、なのはの仮装してみたドレスや機械的な杖も、全て束が仕込んだことだと思っただらだ。

「何が正夢じゃないだ。あいつめ、またなのはをダシにして大掛かりなことをしようとしているな。なのはもなのはだ。何の疑いもなしにそんな奇妙な格好で町中を……」

「ち、違うよ、違うってばー!」

奇妙じゃなくて可愛いのに、と内心で反論しつつも、慌ててなのははバリアジャケットを解き、それから杖のままのレイジングハートを差し出した。

だが、先端の紅い宝石がチカチカ光り言葉を発しても、千冬はどうせ束の発明品だろうと決めつけ取り付く島もない。

「考えて見ればおかしい。鉄のような皮膚を持つ凶暴なモンスター。束め、ついに遺伝子改造に手を出したか。いや、あいつにしては案外遅いというべきか?」

「な……うー、どうしよう、レイジングハート……!」

話題にしている本人が盗撮していることも知らず、千冬は決めつけて譲らなかった。

困ったなのはが、賢い杖の助言通りに実際にモンスターからジュエルシールドを取り出す場面を見て、ようやく納得したが、今度はその魔法すら束が作ったものだと思っただかか。

「えと、いくら束ちゃんでも、そこまでは……!」

「いいや、やる。束のやつはそういう人種だ。自分が愉快なら物理法則の一つや二つは簡単に無視するタイプだろうが!」

そんなんじゃないってば、となのはが何回言っても千冬は頑として信用しなかった。この辺り、いつも束を過剰に擁護するなのはと、過剰に敵視する千冬は何処までも平行線を通る。事態を収集したのは、レイジングハートが記録していた映像データだった。そこには昨日起こった高町なのはと魔法との出会い「のみ」が映され、その後起こった束の狂乱は完全にカットされていた。ここまで疑心暗鬼に陥っている人間にあの狂態を見せれば、ますます疑ってかかるだろうという配慮であろう。

なのはは自分の持つ無機質な杖に心底感謝し、それと同時に、（こんなに気遣いの出来る子を束ちゃんは作らない、というより作れないよね……）

なんて確信したりもした。実のところ、なのはも全てが束の仕込みであるという可能性を、完全には否定できないでいたのだ。

「納得した……だが、それでも見捨てて置く訳にはいかないな。良ければ協力したいのだが、構わないか？」

「もちろん！ 千冬ちゃんが一緒なら百人力だよ！」

千冬のこの提案に、なのはは呆気無く即答した。少しぐらい悩むと思っていた千冬は、少々意外に感じながら付け加えた。

「珍しいな。こういうことには巻き込みたくない、とか言って断るのも思ってたんだが」

「だって、千冬ちゃんだったら大丈夫だもん。ジュエルシード集めは危ないけれど、千冬ちゃんは強いし、おとーさんは、千冬は自分の力をよく弁えている、って言ってたし」

「む、そうか……」

師範の褒め言葉を伝えられ、照れくさいように横を向く千冬。なのはから見れば、自然とにつこりしてしまふ光景である。

少し前まで刺々しかった彼女は、高町家の面々のお陰で随分と丸くなった。いや、丸くなって、いいようになった。それが、なのはには嬉しい。

「それにね、私もなんだか不安なんだ。レイジングハートが居てくれて、魔法も教えてもらえたけど、でも、やっぱり、隣に束ちゃんか、千

冬ちゃんが居て欲しいかなって思ってた。」

「えっ……あ、いや、それは……」

「迷惑かな？」

「そ、そんなことはないぞ？ 師範からは、なのはのもう一人の姉になつてくれとも頼まれてるからな」

だから、頼つてくれるのは素直に嬉しい。けれど、東と同一視されたのには、ちよつとだけ困惑してしまう千冬であった。

とにかく誤解が解ければ後はすんなり進むものである。千冬は友達であるのはそのため、そしてこつそり御神流を鍛え抜くため、ジュエルシールド集めに加わることにした。

それから一週間。二人が集めたジュエルシールドはゆうに五個を超えた。これは千冬の強さとなのはの行動力が、上手い具合に噛み合った結果である。コンビネーションも理にかなっていた。攻撃は千冬。防御と封印はなのはが担当。運動が苦手で鈍臭いなのはを待機させ、千冬が獲物を追い回してなのはの所まで連れて行く。これが行動の単純な暴走体には滅法効いた。

レイジングハートの補佐のおかげか、それまで埋もれていたなのはの才能故か。最初は千冬の足を引つ張りっぱなしだったなのはも、数度の戦闘を経験した現在、大分さまになつてきている。彼女にも高町の、引いては不破の血筋が流れているからだ、と千冬は直感した。封印する直前にきりつと引き締まる顔。それが、道場で向かいあう面の隙間から見えた師範や兄弟子、姉弟子の顔に重なるのも、きつと空目ではないだろう。

「束ちゃん？ 抱きついてくるのはいいけど、どうしてかな？」

「んー、それはねそれはね、なのちゃん分の補給だよ！ こーやってべつたりくつついてるとね、なんとも言えない甘ったるいオーラが私の鼻孔へ……はあうっ、き、きくううっ！」

「にやはは、束ちゃんお外でそんなお顔したらいけないよ、なんとかしようね？」

唯一の問題は、今千冬の隣でなのはにべつたりくつついている束

が、表立っては何のアクションも起こしていないということだった。「くああ、これ麻薬だよ発禁だよ。ダメダメこんなフェロモンのすぐ近くに居させるなんてダメだよん。やっぱり私が引き取って正解だったね」

「え、何のこと？」

「おおーっと束さんお口をチャック！ これ以上は聞かねえでおくんなせえ！ それはともかく、ユーノくんのことなんだけどねっ」

話題がそれに移った途端、千冬の顔は一瞬で緊張した面持ちに変わった。

「ユーノ？ なのは、それはあの映像に出ていたフェレットの名前か？」

「うん、レイジングハートから聞いたの。大怪我してて、動物病院に送ったんだけど、でもあんな風になっちゃって……どうしようって思ったら、束ちゃんが来て、怪我を治すって言って預かってもらったんだ」

「なにっ!？」

聞き捨てならない言葉が聞こえたので、即座に束を睨む。

「やだなあちーちゃん。なのちゃんからの預かり物だよ。ちーちゃんが考えているみたい、実験台扱いとか絶対しないよ？」

「しているに決まっているだろう！ 今まで私たちに干渉しなかったのもそれが理由か！」

ユーノは少なくとも現在、実験台扱いはされていない。束のラボの地下室にて保護され、衣食住もきっちり整えられていた。今の所は。

過去にどうだったか、また未来にどうなるかは、また別の話である。「だーかーら、してないって。この束さんの純真な瞳を見てもそんな残酷なこと言えるの？ ねえー……」

「余裕で言えるぞ。お前のことだからな。いくら外身を取り繕っても内側は何を考えているか」

「がびーん、束さんの信用度ゼロ!! このままだどちーちゃんルートはバッドエンド確定じゃん！ よし、乗り換えよう。セーブアンドロードでなかったことにするのだ」

そう言つて、今まで媚びるように千冬へ迫っていた態度を一変させ、今度はなのはを口説き落とそうとする。

「ねーなのちゃん！　なのちゃんは私を信じてくれるよね、ね！」

コンマ数秒もかからない、見事な変わり身だった。額に青筋を何本も立て、竹刀二本を取り出そうとしている少女が真後ろに居なければ完璧だったろう。

「うん、束ちゃんは私の友達だもん。信じてるよ？」

「ね、そうだよね♪　私もなのちゃんの友達でよかった☆」

これで何もかも問題ない。当の本人であるなのちゃんさえ納得させれば、ちーちゃんが何を言っても他人事。なのはの微笑みに釣られてにつこりしながら、腹の中ではそういう計算を立てるのが篠ノ之束であった。

だが彼女は、すっかり失念していた。

高町なのはという存在は、天才の頭脳の予測、その一步先を行く人間だと。

「だからね、束ちゃん……？」

突然、束の手が取られる。それをぎゅっと握ったのはは、いつもと変わらぬ笑顔で。

「束ちゃんもジュエルシード集め、頑張つてね！」

「え」

その言葉に、束の笑顔は辛うじて変わらなかったが、内心は大きく揺らいだ。

「え、な、なんで私がジュエルシードを集めるのかな？　私、魔法使えないよ？」

「でもだって、束ちゃんそれでも集めたいんでしょ、ジュエルシード。ご近所の平和のために！」

「え、う……」

なのはの言葉は完璧に凶星を突いていた。単なる高エネルギー体であるだけでなく、太古に生まれた魔法技術の結晶であるジュエルシード。束が集めたくなるのも当然のことだ。

だが、それはあくまで研究するため、しかも秘密裏に、である。そ

うしななければ、いくら集めてもユーノの手元に戻り、あえなく別世界へと持ち運ばれてしまうから。

世界を滅ぼせるほどのロストロギアなんて破滅的ロマンに溢れる産物は、一つでもいいから手元に置いておきたい。魔法を分析する者としてだけでなく、一人の科学者として。

だからそんな、後で必ずユーノに渡さなきゃいけないような理由をくつつけないで！ 私そんなに正義じゃないよ！むしろ世間一般で言えば悪の科学者だって！

だが、なのはそんな束の願望を突き崩すように立て続けた。

「モンスターと戦うのは危ないけれど、束ちゃんなら絶対に大丈夫だし……それに、束ちゃん、こういうことは放っておけないと思うんだ。アリサちゃんとすずかちゃんを助けてくれた時みたいに。だから、ユーノ君を預かってくれたんでしょ？」

「あー、えーと、そのね、うん……」

なのちゃんちがうよ。放っておけないのはあくまで知的好奇心と探究心からだよ。

そういいたくとも言い出せない。

「まさか……ユーノ君を手伝わない、なんて、言わないよね？」

そして、ここでNO、ときっぱり断ったらどうなるだろう。

なのちゃんはそれでも納得してくれる。そして、束のことを一切責めることはないだろう。

でも、それが束には何故かきつい。理由なんて無いはずなの、物凄く心苦しい。ひよっとすると失敗作を作ることより、後悔するのも、しれない。

「う、ううん、そ、そ、そんなこと無いって！ やだなあなのちゃん私は天才束様だよ、この程度のトラブルには引かない媚びない省みないよぶつぶつぶ！」

結局、集めるとはつきり宣言してしまった。

くすみも不純物も無い、純真な瞳で見つめられているから。束にそんな瞳を向けてくれるのは高町なのはただ一人だけだから。こうまで期待されているのに、それを裏切りたくはなかった——のだと、自

分の心を無理に解釈しながら。

「そうだぞ……ふつ、束は倫理感はずゼロだが実は、その裏にある正義感
は誰よりも強い、そうだろう？ ……くく、くくっ」

千冬の冗談のような援護射撃が、なのはの勘違いを更に煽る。

ちーちゃんのバカ。今度なのちゃんの父親と兄に御神流のことバ
ラしてやる。精々こっぴどく叱られるがいいさ。

「だよなー、やっぱり！ そういえば知ってた？ この前の大木事件。
あれもジュエルシードのせいなんだよ。街があんな酷いことになる
なんて、やっぱり束ちゃん、放っておけないでしょー！」

ごめん、それ、知ってたよなのちゃん。最初から最後まで全部監視
してた。あの魔法を撃つなのちゃんかつこ良すぎてモニタ越しだけ
ど一瞬くらってきちやったよ。

「うん。あれは厄介だったな！ 大木相手では私の剣術もどうにもな
らん！ なのはが砲撃魔法を覚えていかなかったらどうなったことや
ら!!」

「うんうん、危なかつたよね！」

「だがまあ束、お前なら何とか出来ただろう？ 枯葉剤を撒くとかな
！」

「そっかあ、流石束ちゃん！」

あああ、ちーちゃんの大バカ、魔法で出来た植物に化学物質なんて
効果が無いと分かってて、適当に大げさに言っちゃうんだから！ ま
すますなのちゃんが納得しちゃうー！

「あは、あは、あはははは……」

と、このように追い詰められても束はいぜん笑顔のまま、しかしそ
れは段々と引きつり始めていた。それを知らずに天然で追い込むな
のはと、それを知っていて、しかし引きつる理由は分からぬまま、本
能で束の窮地を察しここぞとばかりになのはを援護する千冬。

二人の数少ない友人に、意図的ではないにしろ牙を剥かれた束の心
はまさしく四面楚歌だ。

「危ないけど、とにかくそっちも、ユーノ君と一緒に頑張つて！ 私達
も私達で、一生懸命頑張るから！」

「二組のほうが探索の効率も上がるというものだ。後でメールを使って、街の区域分けでもしたらどうだ？」

「それいいね。じゃあ、私はこれから塾だから」

「私は高町家に帰って、道場で素振りだ。荒事に関わっている以上、訓練は欠かせないからな」

納得して、二人それぞれに去ろうとするのを止めることは出来ない。

東に出来るのは、

「あ、うん、行って、らっしやい？」

と、黙って敗北を認めることだけだった。

こうなったら帰った後に助手をいじめてスッキリしてやろうと考えたが、

「じゃあ、また夜にメールするから！　そうそう、ユーノ君の写真とか欲しいな！　元気にしてるかなって、家族もみんな言ってたから」

最後の最後、見事にその逃げ道すら塞がれてしまったのは極めつけと言えよう。

「あは、は、はあ……」

アリサとすずかに合流するため少し走り気味で去っていったのはと、何だか分からないが東を負かすことができて上機嫌な千冬。二人を見送った後、東はどつと疲れて近くの壁に体重を預け、へたり込んだ。

「あうあ、どーしよ、どーしよ……」

これで、ジュエルシードのサンプルを手に入れるという計画はおしやかだ。

ユーノ一人ならいくらでもだまくらかせる。形のそっくりな偽物程度なら、この事件が終わるまでも簡単で作れるはずだ。

だが、事の次第が多少なりともなのはには知れた今では、それを騙してまで偽物を紛れ込ませるといふのは論外だ。自分が影に隠れれば誰のせいにも出来るが、表立っていてはそれも出来ない。どっちみち騙すのは同じだが、なのはにその事実がバレるとバレないのでは雲泥の差なのだ。

そう考えてしまう点では、天才の束もその感性は案外俗っぽいかもしれない。

「うぐぐ……いや、ちょっと待て私。く、ふふふ」

だが。束は、問題をいい方向へと考え直すことにした。

これで自分が魔法に関わることも、またそれを研究することも秘密にしないで済む。もしなければジュエルシードの暴走体には勝てない、という正当な理由があるからだ。

「そうすれば……なのちゃんの砲撃魔法を生でじっくり見られる！」

以前、監視カメラでこっそりと見た光の軌跡、ピンク色の閃光は、まるで高町なのはそのものを表すかのようになっすぐで、美しかった。生で見たい。魔法としての分析、解析、それ以上に一個の芸術として。

なのはだつて魔法の練習はするだろうから、その時にじっくり見せてもらおう。ユーノも連れて行ってあげよう。なのはは喜ぶはずだ。ユーノも喜ぶだろうがそんなことはどうだっていい。

「サポートだつて全面的にしてあげられる！ 色々作ってあげちゃおう！ まあ、今の所必要無さそうだけど、タフすぎて そんはないのですから！」

本当は強敵が現れた時に、謎のウサミミ仮面とでも名乗ってプレゼントしようと考えていたが、直接届けられるならそちらの方がよっぽど都合がいいし、ありがとう、という声を聞けるから嬉しい。

「とりあえずはジュエルシード用のリーダーでも作ってあげよう、助手くんをこき使つてあげながら♪」

などと考えながら、束は今やすっかり元気になって立ち上がり、スキップなどしながら研究所へと走り始めた。

篠ノ之束。彼女を小さいながらマッドサイエンティストたらしめているのはその才能だけではなく、転んでもただでは起きぬポジティブさも含まれる。のかもしれない。

いつか空に届いて（Ⅰ）

さて、思わぬことからなのは・千冬と束・ユーノの共同戦線が出来上がってから更に暫く後。ジュエルシードを狙う、もう一人の魔導師が現れた。

彼らが始めて二人と相まみえたのは、月村亭の庭園で、猫を大きくしたジュエルシードを確保した、その瞬間である。

先に気づいたのはなのはだった。何かが来る、それも、かなり危険な何かが。

自分たちの真後ろまで迫っていた魔力の弾頭を、なのはははつきりと知覚していた。

「……っ！ 千冬ちゃん、下がって！」
「なっ!?!」

雷色の光弾がなのはと千冬に迫る。プロテクションを展開したなのはが振り向き、千冬はその後ろに下がった。魔力と魔力がぶつかる独特の衝撃音が響き、外れた光弾が地面を抉った。

「これは……」

「そのまま！ 後三発来る……たぶん！」

感覚で発したなのはの言葉は正しかった。三発の内二発はプロテクションに当たり、一発は大きく逸れて木にぶつかって弾けた。

二人の身体よりもずっと大きな老木。その薄黒い樹皮が剥がれ、熱で溶かしたような穴が穿たれている。

その威力を見て、アレに当たる訳にはいかない、と千冬は実感した。死にはしないだろうが、魔法に対する防御がない以上、一発でも当たれば即ダウンだ。

「威嚇だな……これ以上動くなということか。何処に居る！ 姿を見せろ！」

堂々として森の中に大きく響く声。それは計算された挑発ではなく、姿形を表さない敵手への苛立ちだった。

それに応じて、木陰に隠れていた襲撃者が姿を現す。闇夜に溶け込

む黒い防護服を身にまとい、金色の髪と赤い瞳。年頃はなのは達とほぼ同じだが、しかしその目の色は昏く、何かしらの尋常でなさを感じさせる。

千冬は思った。これは、今までの敵とは訳が違う。師範に木っ端微塵に叩きのめされた時も、束と本気で喧嘩をした時も、こんな気分になったことはない。戦いの中で感じる高揚感が、今は奇妙に底冷えしている。これは強敵だ。木刀を握る手に力が入り、頬を冷や汗が伝った。

一方、なのはは思っていた。

この子、とつても綺麗だ。でも、何だかとても、寂しそう。

「……貴方たちのジュエルシード、貰っていきます」

瞬間、二人とも思考を中断し、言葉と同時に迫り来る4つの光弾に意識を集中させた。

今度は全て直撃する。なのははレイジングハートに祈り、プロテクションの術式を強化した。術の難度にに応じて、身体のがかなりの勢いで抜けて行くが、今果たすべき自分の役目は後ろにいる千冬を守ることである。バリアジャケットのある自分はまだしも、魔法に対する防御力がゼロに等しい彼女が直撃を受けたらどうなるか。

幸い、その心配は杞憂に終わる。さっきの威嚇よりも威力を増した光弾は、プロテクションへまともにぶつかり消え去った。ただし、プロテクションの方もかなり削られ、もう一回同じ強度の攻撃をされたら防壁を維持できなくなるだろう。

この状況をジリ貧だ、と先に気づいたのは、流石に千冬の方だった。「なのは、このままだと不味いぞ。向こうは間違いなく魔導師だ。お前の砲撃魔法みたいな大技を繰り出してきたら、耐えられなくなるだろう」

「分かった……分かったけど、どうすれば!?!」

どうするか。千冬の運動能力なら、あの程度の弾幕は掻い潜れる。向こうの防御がどれほどのものかは知らないが、一つ近づいて剣戟勝負を掛けてみるのも面白い、とは千冬も思うが、そう出来ない唯一にして最大の足枷がある。

千冬は空を飛べない。

彼女は確かに身体的には同年代の殆どを上回っており、俄仕込みの御神流も大分様にはなってきた。しかし、空は飛べない。いくら身体をいじめ抜いても、剣術を鍛え上げても、生身の人間に空をとぶことなど不可能だ。魔法を使えば話は別だが、彼女に魔力はない。「なのは、私を抱えて飛べ！ 私達を見下しているあいつに、目にも見せてやる」

だから、魔法の使えるなのはに、空を飛ばせてもらう。竹刀の届く距離まで近づけば、後はどうにでも出来る。

千冬は自分の剣術に、戦闘能力に、絶対的な自信を持っていた。今不利な状況にあるのは、向こうが此方の射程外にある、というだけでしかない。近づくことが出来さえすれば。

この時、彼女は珍しく視野狭窄に陥っていた。

自分の攻撃が届かない、ただそれだけの理由で防御に回り、負けへ追いやられていく。それが彼女のプライドを傷つけ、勝てはしなくても、せめて一撃食らわせてやりたい、という自暴自棄な思考へと陥ってしまったのだ。

そのつかけを、戦いの後、彼女は痛いほどに味わうこととなる。

「え、えっ?!? そんな、無茶だよ」

「無茶でもやれ。それしかあいつに勝てる方法はない！ それとも、むぎむぎジュエルシードを取られて悔しくないのか!」

千冬の激しい口調に、最初は戸惑っていたなのはもついいには折れた。実際守るばかりではどうにもならなかったし、千冬ならなんとかしてくれるかもしれない、とも信じられたからだ。しかしなのはのそれも、信頼を飛び越えた過信であった。二人が二人が突然現れた未知の敵に混乱し、判断を誤っていた。

なのはが千冬を後ろから抱きかかえ、飛行魔法を発動させて飛ぶ。浮力に関しては全く問題なく、二人の体は無事宙に浮いた。

「……!」

が、問題はそこからである。

空を飛んだ千冬の両手には、竹刀が握られている。それに気づいた

敵の少女は、自分の前に数秒で光の輪——スフィアを作成した。それは、魔法の発射台。その中から黄色い槍の穂先に似た魔法の弾が創り出され、続け様に宙を浮くターゲットへと発射される。

なのはは勿論回避しようとするが、その動きは鈍重で、反応も遅い。千冬を抱きかかえているから、元から未成熟な飛行魔法の機動性が、更に大きく削がれているのだ。速射を重点にしてまともに狙いを付けず放たれていなければ、ノーガードの状態で光弾を残らず食らうていただろう。

しかし、ともかくは回避できた。後は接近して、打ち合えばいい。

「なのは！」

「分かってるー！」

二人が声を重ね、いぎ、黒衣の少女へ一撃を叩き込むため近づこうとした、その瞬間。

既に向こうの方から、一直線に迫り来て、黒色の戦斧を展開し、金色の刃を煌めかせた鎌に変えて大きく振りかぶっていた。

やられる。一瞬驚いた千冬は、その凄まじい早さに飲まれ、しかしそれでも必死に身体を動かした。それが功を奏し、二本の小竹刀が一瞬で十字に重なり、同じくらいの早さで迫る鎌の刃をどうにか受け止める。千冬にとっては待ちに待っていた剣戟の鏢迫り合いだが、状況は彼女の望んでいたように動かない。むしろ、地を這って戦っていた時よりよほど危険で、勝機のない戦いだっただった。

「くう、う……い！」

一度刃が重なった以上、それを打開するには贅力に頼り押し切るか、躲してから返す刀で一撃を叩き込むしか無い。もし、千冬と敵が地上で相まみえていたなら、千冬の技術と実力によって、どちらか1つの手段を取り得ていただろう。しかし、ここは空中。千冬の身体を抱きかかえるなのはは動くに動けず、その場に踏ん張る力も弱い。よって当然、向こうが力を入れれば、何も出来ずに押し切られてしまうのだ。

そして、決着。

黒い魔導師の一撃が、二人の精一杯の抵抗を押しつけ、跳ね飛ばし、

吹き飛ばされた二人は、そのまま飛行魔法による浮力を失い落下。意識をなくしたなのは代わりにはレイジングハートが尽力してくれたおかげでどうにか地面への激突だけは防げたが、それでもかなりの衝撃が、千冬の身体に強く響き、全身に痺れと痛みが拡散していった。「ごめんね」

呻く千冬の耳に聞こえたのは、敗者への侮蔑ではなく、小声での、冷淡に聞こえる謝罪。だからこそ、千冬にとってはとても悔しい言葉だった。

敵の少女は手加減していたのだ。魔法を持たない千冬に。魔法を覚えたてのなのはに。だから、彼女は威嚇した。そして、無謀な行爲に出てきた二人を止めるために射撃し、それでも止まらぬ二人を、鎌でのたった一撃で地面へ叩き伏せた。

しかも、その鎌には刃が無かった。だから、竹刀で競り合えたのだ。その気になれば竹刀を切り裂き、自分に致命傷を負わせることも出来たのに。彼女は敢えて千冬の勝負に乗った。そして、正面から倒してみせたのだ。

「ジユエルシードは、諦めて」

倒れた二人を尻目に、悠々と青い宝石を回収してから、最後にポツリとそう言い残し、黒い魔導師の少女は飛び去っていった。

残されたのは、傷つき倒れた二人の女の子。

千冬は今になって、自分の下敷きになっているのはに気づいた。さっきまで目の前にいた敵にのみ意識が集中してしまっていたのだ。いくら地面に軟着陸したといっても、千冬と地面に挟まれたのはダメージはかなりのもので、バリアジャケットを解き、意識を失ったままであった。

千冬の心は深い後悔に苛まれた。たがが暴走体、と油断していた。何回も封印に成功していて、気が緩んでいた。空を飛ぶタイプの敵だっているかもしれない、そう考えていればまだまともに戦えたはずだ。

いや、違う。今回の敗北の理由は、もっと根本的な所にある。それは、千冬自身の考えの甘さだ。普段の束との喧嘩、剣術の修行の延長

線上として、この戦いを捉えてしまった。けれど、あの魔導師は。そんなものよりもっと重い理由で、ジュエルシードを手に入れるために戦っている。千冬の鋭い直感が、それを見抜いていた。

だから強い。戦う理由がちゃんどある。それと比べれば、友達を助ける？ 秘密のトレーニング？ そんな自分の理由など、たかが遊び半分じゃないか。剣というのは心を表す。その心が弱ければ、負けるのだって当たり前だ。心の弱さが、ムキになる自分を生み出し、そしてこうして、守らなければならぬ人を、傷つけてしまう。

頭では、ちゃんと分かっているのに。カッとなつて飛び出して。無様に負けた。全ては自分が弱いせい。師範や兄弟子が、御神流を見せたくない理由だって、今初めて分かった。危険だからとかそういう訳ではない。殺人剣を使いこなす程の心が、まだ身についていないからだ。

それでも、止まる訳にはいかない。止まりたくない。一度関わりあったのだから、もう逃げたくはないし、精一杯戦ってみせる。確かに空を飛ぶ相手に、剣では致命的に敵わない。だが、正面からではなく、追跡、待ちぶせ、奇襲など、戦う場所や戦い方に知恵を凝らせば、十分に戦えるはずだ。

しかし、そうするのは、私一人だけで十分だ。こんな浅ましい理由で戦う私に、共連れなど必要ない。

「んう……」

「なのはっ！ 大丈夫か！」

「……んー、なんとか……」

「すまない」

まるで、いつもの寝起きのように、ぼんやりとした顔で起きてきたなのはへ、千冬が最初にぶつけたのは謝罪の言葉だった。

「私が甘かった。考えてみれば、あんな方法で勝てるわけがないんだ。お前を守らなければいけないはずなのに、逆にこうして怪我をさせてしまった。本当に、ごめん……」

千冬は決心した。これからは、なのは抜きでジュエルシードを集めよう。そうでなければ巻き込んでしまう。また、怪我をさせてしま

う。東の手からユーノを取り返して、封印は彼に頼めばいい。なのはが怪我をしたと言え、彼も承知してくれるだろう。これ以上、なのはを危険な目に合わせる訳にはいかない。

もちろんなのはは承知しないだろう。自分だって一緒にやれる、そう言っただけならいい。もしそう言ったら、レイジングハートを無理矢理奪ってでも止めて見せる。なのはの友達として、守るために。そんな思いを込めて、頭を下げた千冬を、なのははきよんとした顔で見つめ。そして、申し訳ないような顔で言葉を紡いだ。

「負けちゃったね」

「ああ……完敗だ」

なのはが自分を責めはしないことは、千冬には分かっていた。だが、まるでなのは自身が原因で負けてしまったような顔を見せられては、なんだか自分が庇われているような気がして、千冬は自分を惨めに思い、ますます落ち込んでしまう。

だがその後に、なのはは表情を少しだけ明るくして、またこう言った。

「もうちよつと、頑張ろう。私も、千冬ちゃんも」

「……え？」

「だって、ジュエルシードを集めていったら、また、あの子と戦うことになるでしょ？ そのためにも、私は魔法を、千冬ちゃんは剣術を、それぞれもつと頑張らないと」

「だ、だが、なのは……お前、痛くなかったのか？ それに怪我もしているじゃないか！」

「うん、痛いよ。でも、負けたくないもん」

負けたくない。それは千冬の本心であったが、同時になのはの本心でもあったのだ。

「なのは……」

「千冬ちゃん？ 私に、戦うのをやめろ、って言うつもりだったでしょ」

「っ、それはっ……だが、お前が傷つくなら」

「うん、分かっている。でもね。傷ついても、痛くなくても、私、続けたい。」

ジュエルシード集め。あの子と戦わなきゃいけないって……ううん、戦って、ジュエルシードを争わなきゃいけないって、思う」

その言葉に千冬は目を見張った。いつも大人しいなのは、ここまです自分の意志をはっきり示すのは、千冬が見た限りでは初めてだ。

「どうして?」

「……んー……分かんないや」

「なっ!? お、お前なっ」

「あはは、ごめんね頭悪くて。でも、何だか色々あつて……ユーノ君を助けたいとか、危険なものをほっとけないとか、後、あの金髪の女の子と、もう一度、会ってみたいとか……なんでだろうね。あんなに痛いことされたのに。……あ、もしかして私、束ちゃんがいつか言っていた『まぞひすと』なのかな!」

「な、なな、そんなわけ、あるかつ」

いつもの癖で、ポカリ、となのはの頭を叩いてしまった。直後に気づき、ごめん、とまた謝ろうとしたが、なのはの顔はさっきまでとは違い、晴れやかに笑っている。

その顔を見ると、さっきまでの自分の悩みが、何だかバカバカしく思えてきてしまって、千冬も漸く、落ち込み顔から立ち直り、くすつと笑った。

「にやはは、千冬ちゃん、やっと元気になった。攻撃が直撃したから、私よりもダメージ大きかったし心配したよ」

千冬はその言葉で、なのはが自分の事を考えて、冗談を言ってくれたのだ、思った。もしかして、全てが素の行動なのかもしれないけど、それならそれでいい。冗談を言わず、人を笑顔にさせられるのはとても素晴らしいことであるはずだから。

「ん……そう、だな。すまない、心配させてしまって……」

「いいよ。ね、千冬ちゃんは、何のためにジュエルシード集め、続けたいのかな?」

「なに?」

「ほら、私が言ったんだから、千冬ちゃんも言つて? そうじゃないと、公平じゃないでしょ?」

そう言われて、千冬はふっと思い悩む。だがそれも、一瞬だけの煩わしさにしかならなかった。

「そうだな……色々あるぞ？ あんな危険物を束のやつに渡さないようにする。あいつと戦うために最強の剣術を鍛え上げる。それに、一度負けた、あの黒いヤツに、土をつけてやる」

「うんうん」

「だが、一番大きいのは……お前を守りたい、ということだ」

二人、土に倒れながら、それでもすすきりした顔で話し合う。

自分の戦う理由は、黒いヤツのそれより軽い。けれど、理由の重さ軽さではなく、それにかかる思いなら、今の自分は、ヤツには負けない。

少なくとも、なのはを、この、底抜けに明るくて疑うことを知らなくて、だからこそ強い女の子を守りたい気持ちは、他の誰にも負けてはいない。

「私は飛べない。だが、飛べないなら飛べないなりに足掻いてやる。お前の後ろを、私が守る」

「……あ、私と、同じだ」

「なに？」

「えへ、私もね。千冬ちゃんを守りたいの。今は守られるだけだけど……何時か、互いの背中を守る。そうなれたら、いいなって……ちよつと、無茶かな？」

千冬は無言で首を振った。

無茶じゃない。だって、なのはは飛べるのだから。どこまでも高く、高く高く高く――

「うん、千冬ちゃんだって飛べるよ？ いつかきつと」

いつの間にか、声に出してしまったそのつぶやきに反応したなのはの言葉は、単なる理由のない励ましなのか。もしかすると、また、予言じみた確信を言っているのかもしれない。

いつか宙に届いて (II)

こうしてなのはと千冬が、共にジュエルシードを集めよう、という決心を強く固めていた時。

少し遠くの草むらで、這いつくばりながらカメラを回している一人の少女が居た。

篠ノ之束である。

そしてその隣には、最近束の助手として三食おやつ付きで無理矢理雇われたユーノもいた。

「……ねえ、束」

「なんだいユーノ君、君は今貝になったように黙っているべきなんだよ。こんなに熱い友情シーンめつたに無いんだから。あと私のことは『教授』って言ったよね、助手なんだし」

「……」

君は、こんな所でどうして、二人の盗撮なんてしているんだい？

その言葉を呑み込むのに、ユーノは自分の忍耐を大半使い果たしたような気持ちだった。

そして、束の機嫌を損ねぬように、柔らかい口調で言い直すことにした。

「ええと……教授？ その、なのはも千冬も怪我しているのに、僕達は どうして仲間である二人を助けず、こんな所で隠し撮りみたいな真似をしている……のかな？」

聞こえるか聞こえないかの小声で伝えられた今度の問いは、一応束のウサミミまで届いたようだった。機械じかけの長耳を消音モードでピコピコと動かしながら答えていく。

「だって、撮って後で二人に見せたら、なのちゃんは喜んでくれて、ちーちゃんはとっても恥ずかしがってくれるじゃん。そんな二人の顔、良いと思わない？」

「そ、そ、そういうことじゃ、ないんだって……!!」

ユーノとしては、ボロボロではないにしろダメージを受けた二人に今すぐでも駆け寄って治療魔法を行使したかった。

「まあまあ、焦らない、一休み一休み」

そして、予想外の事態が起きたというのに、いつも変わらぬ顔のこの天才が、二人や自分に比べて何処かのんき過ぎる、と、怒りに似た感情すら抱き始めていた。現に傷ついている二人は束の友達だというのに。そんなんで本当に、友達だといえるのだろうか。

ユーノがこうした義憤めいた感情を抱き始めたのは、この盗撮だけが原因ではなかった。

「それに……教授、さっきの戦いだけど」

「んー？ あの黒い子と、もう一人、使い魔っぽい赤犬が現れたからすたこらさっさーした、アレがどうしたの？」

そう。ユーノと束は、なのはと千冬が黒い魔導師と戦うほんの少し前に、別の場所で彼女に遭遇していたのだ。しかも、彼女が連れてくる、大型の使い魔の存在も掴んでいた。月村亭とは別の場所で発生した動物型の暴走体を、束の発明品「学芸会のソーラン節用電磁ネットワイヤーin上海」で捕獲し、ユーノが封印魔法を掛けようとした時。最初は赤い狼が襲撃してきた。

牙でしつこく噛み付こうとするのに対し、ある時はラウンドシールド、ある時は煙幕で右へ左へと逃げ回っていた二人であったが、金髪の少女が割り込んできたら、束は即座に、

『ごりや言われなくてもスタコラサツサだね！　いくよーユーノ君、ラボへ引き返すのだ！』

と言って、あつという間に逃げ出してしまったのだ。一人きりになればユーノに勝ち目はない。だから、ユーノも仕方なくついていくように撤退したのだが。

「あの時、もし逃げ出さなかったら……そしたら、時間を稼げてた！　なのはたちがジュエルシードを回収する時間を！」

その時、なのはと千冬がジュエルシードを見つけていた、ということが分かっていれば。ユーノはたとえ一人でも戦い続けていただろう。

「何を言ってるのかなー、ユーノ君？　そんなのは後出しジャンケンじゃん。私達は私達の仕事に集中してたんだからさ」

束が言ったことは正論だ。ぐうの根も出ないほどに。しかし、いやだからこそ、納得出来ないこともある。

「じゃあ、どうして……あの時、すぐに退却したんだい？ 教授らしくないじゃないか」

そう、ユーノの知る篠ノ之束は、予定外の敵が二人現れた程度で引腰になるような女性ではない。むしろ予定外を面白がって、ひと当たりして確かめてみよう、くらい言っただけのけるはずだ。

ユーノのこの発言を聞いて、束はカメラを固定したまま振り返り。「らしくないー、だなんて言われたくないね。大体私と君はたった一週間の仲だよ？ そんなんで、私を理解しようとしなくてよ」

「う……」

発言の内容そのものよりも、むしろらしくない、と言われたことに對して怒り、鉄のように冷たい口調で言い放った。

普段の口調とはおおよそ違いすぎるその冷酷さは、ユーノが初めて垣間見る、天才の心の裏側。それは、ユーノの言葉の短慮さの証明でもある。だから、固まって何も言い返すことが出来ないまま、束の言葉の続きを待つしかなかった。

「それにねユーノ君？ 私に退いたのも、単に怖かった、とかじゃないんだよ？ だって、私達、今の所は、アイツには絶対敵わないんだもん。10分持たずにばたんきゅー」

それは、黒い魔導師の挙動と攻撃を見た束が、一瞬で組み上げた未来予測だった。

「私は対暴走体用の装備しか持ってこなかったし、ユーノ君も回復しただけで未だ本調子じゃない。確か、この星の魔力素が悪さしてるんだっけ？ 時差ボケみたいな感じで段々慣らしていかないといけないんだよねー。それがまだ途中なのに、ちゃんと訓練を受けたデバイス持ちの魔導師——しかも、魔力はAAAランク。敵うと思う？」

それは、敵わない、絶対。ユーノは心の中で納得した。

魔導師の戦闘において、デバイスを持っているか持っていないかはかなりの差になって現れる。しかもそれだけでなく、魔導師の中でも5%しかいないという、AAAランク。さらに向こうは斧という戦闘

向けのデバイスを持っていて、此方の適正は補助専門。出来る攻撃魔法は初歩的なものでしかない。

「悔しいけど……ちよつと無理だね」

「無理があるよねー。私もね、今の所、あれを倒すのはほんのちよつとつとだけ……ちよつとだけだよ？　でも、きついかも。いやあ、まさか他の魔導師が来るだなんて。ってかき、ユーノ君。ジュエルシードの情報って、本当に君たちのスクライア族と、管理局しか知らないの？　見たところ、アレはそのどちらにも当てはまらないと思うんだけど」

ユーノは、自分の大体の事情について既に東へ話していた。スクライア族の一員であること、ジュエルシードは彼らが掘り出して管理局へ譲渡する途中、輸送船の事故によってばら撒かれたこと。だから、東が疑うのも最もであると納得できた。確かにあれは、管理局でもスクライア族でもない。

「恐らく、ジュエルシードが発掘された当初、いや、もっと前から、狙いをつけていたんじゃないかな？　僕らだつて無意味に発掘ばかりする訳じゃない。昔の文献から遺跡を見つけていることもあるし……今回も、そのパターンだった。恐らく向こうもそうして情報を得たんだろう」

「ふーん、つまりあの子は、下手すれば次元が割れちゃう宝物計21個をほしがって、わざわざ管理外世界、こつちで言えばド田舎の農村みたいなとこまでわざわざ来たのかな？　いやあ、えらいねえ、私なら思わず餞をあげちゃうよ」

他人事のようなその言葉で、ユーノは気づいた。

あの子は、あの魔導師は、自分の意志でここまで来たのではない。自分のように事件の関与者ならまだしも、只の子供魔導師が何の理由もなしに地球への渡航を認められるほど、次元港の税関はザルではないはずだ。

「じゃあ……あの子は、自分の意志ではなくて、誰かの命令を聞いてここに來てるんだ！」

「その通り！　あんなに上等そうなデバイスを用意して、しかも維持

出来るってことは、組織であれ個人であれわかりかし強力なバックアップを得ているってことにもなるよね」

地面に伏せながら、まるで先生のような口調で答える束。その推論は確かに腑に落ちるものではあったが、それだけにユーノにとっては悪い予感を覚えずに居られなかった。

「じゃあ、仮にあの子を倒したとして……それで、解決はしないって、こと?」

声を震わせながら出されたユーノの問いに、束は顔色一つ変えず答えた。

「そうだよ? ひよつとするとあの子は尖兵で、倒したらすぐに『ふふふ、金髪ロリでちよつと危ない衣装の女の子など我ら四天王の中では最弱』なんて、残り三人が一斉に襲ってくるかも!」

「あんまり楽しくない想像だね、それは……」

AAAランクの少女が尖兵なら、それ以上の刺客はどれほどのものになるか。もし四人が一斉に集結出来たとしても、オーバースランク魔導師の相手なんて状況はどうあがいても苦しくなる。もしかすると、今隣で再びカメラを覗き始めながら顔を紅潮させている天才なら、それでも何とか出来るかもしれないが。それはそれでまたなんとかした以上の厄介事が起こるのだろう、という危険を、今は肌ではつきり感じられるのだ。

しかしまあ、自分も半ば強制的とはいえ、よくまあこんな厄介事の種に付き合っているられるものだな。とユーノが自分の数奇な状況を慨嘆した時。

「そうだよね?……だからさ、ユーノ君」

その歩くトラブル発生器は、心ここにあらず、といった趣でカメラを覗き込み続けながら、事も無げにのたまった。

「ちよつとあいつら、つけてきてくれない?」

「え……えええつ、あいつらつて、あの、黒い服の魔導師!」

「それ以外の何があるのかな? ほらこれ」

今さつきここを去って、探知範囲外まであつという間に飛び去っていた人間相手に何をどうやって後をつけろというのか。そんなユー

ノの反論を封じるように、東は黒くてとても小さなチップのようなものを、をエプロンのポケットから取り出し、ユーノへと放り投げた。慌てて手を伸ばし受け取ると、それは大きめのガラス玉くらいの小ささだが、モニタと、簡易的なコンソールがくっついている。

「フレットモード用の端末だよ。こつそり隠れて様子を探るのにはそっちの方がいいでしょ？」

ユーノは戦慄した。

果たしてどんな工作機械を使って、こんなに微小で精密な端末を作ったのだろうか。それに、こんな物を設計する手間と製作する時間が一体何処から捻出されたのか、てんで分からない。東はここ2週間魔法の研究に、文字通り寝食を惜しんで没頭していた。録画したなのは戦闘データを解析したり、ユーノが教えた魔法の術式のエミュレートなどをしてばかりの彼女を、毎朝学校に間に合うよう起こす。それがユーノの日課にすらなっていた。

そんな日常の中の一体何処でこんな機械を作ったのだろう。指先で弄びながら怪訝な顔をしていると、それを察したのか東がありがたくも解説してくれた。

「こんなものはね、ちよちよいつと片手間でやれば簡単に出来上がったやうの。技術としては既にあるものを小さくするだけだからだから、ちよつとつまんないくらいだよ」

「コンパクトにするのが一番大変なのに……ところで、これって一体何の役に立つの？」

「ああ、起動させてみて？」

、言われたとおりに起動すると、あつという間にOSが立ち上がり、そうして映し出されたのは、海鳴市全域の地図と、その一点に光る紅い光点。ビルに重なり表示されているこれが、一体何を意味するのか。話の流れから、ユーノは完璧に当てることが出来た。

「ね、これ……あの子のいる所？」

「だいせいかい、流石は我が助手！ まあ正確に言えば、あの子にくっついてた使い魔の居場所何だけだね。でも、これで大丈夫でしょ？」

「そうだけど、探知機なんていつ付けたの、教授」

「もちろん、あの時戦い合っていた間に、こつそりとね。煙幕で視界を奪ってると案外バレないものなんだよ？ 大丈夫、鼻から入って体内に潜り込ませて固定する、微小なワームタイプの発信機だから、下剤でも使われない限り外れる心配はなし！」

「えええつ、それつ、て……」

体内に潜り込む、虫のような発信機。考えてみて、ユーノは胃がひっくり返るようなゾツとする思いでいっぱいだった。もしかすると、寝ている間に自分の中へも入り込んでいるかもしれない、そして自分を監視しているのかもしれない。そう思ってしまうだけに尚更恐怖だった。

一回戦っただけで名前も知らない狼の使い魔へ、ユーノは深く同情した。

「まさか向こうも監視されてるとは思ってたはずだけど、くれぐれも気をつけてね？ それじゃあ、行ってらっしやーい」

「あ、はい、行ってきます……つて、今から!？」

「当たり前じゃん、出来る限り多くの情報を掴んでおかなきゃ。敵を知り己を知れば百鬼夜行だよー。さ、ここは私に任せて早く行け！」

「えええ……」

一体何を任せればいいんだろう。

ユーノにはツツコミたいことは山ほどあったが、それら全部を気にしては耐えられやしない。逆らいでもしたらどうなるか。先程束の灰暗い一面を垣間見たが、あれは多分氷山の一角なんだろう。とても考えたくなかった。

少し遠くにいるのはと千冬は一休みして元気になったのか、立ち上がって月村亭に向かって歩き出す。所々にある擦り傷は木から登って落ちた時のことにするようだ。つまり、それほど大きな怪我ではなかったということだから、とりあえずは一安心である。

「分かったよ……じゃ、夜になったら帰ってくるから」

「おっけー！ あ、お母さん今日は肉じゃがだつてさ、多分美味しいと思うから期待しててよ」

それは、夜になったら帰ってきていいよ、という命令だった。

ユーノは変身魔法でフェレットになってから、レイジングハートのように首に下げられる端末を装備し、草むらにその小さい姿を紛れさせて、その場から去っていった。

「あははー……さて、と」

なのはと千冬も庭から去っていき、残ったのは東ただ一人。

鬱蒼と茂る森の中で、彼女もまた立ち上がり、録画に使ったビデオカメラを愛おしそうに持ちながら、自分のラボへ向かおうとしていた。

「いい拾い物したよねー、私」

拾い物、とは勿論先程カメラの前で繰り広げられた熱い友情——ではなく、ユーノ・スクライアのことだった。

第一に、彼は頭がいい。東と較べたら圧倒的な差があるが、それでも彼女の論理に辛うじてついていける程度には理解力がある。もう一つ、根気があって、無茶ぶりに屈しない。

そして最後に、彼はとても『要領』がいい。

一度、東が今まで無秩序に纏めた研究メモの整理を半ば無茶ぶりでも頼んだ時、一分の隙もなく纏めて提出されたのには流石の東も少し驚いた。本人に聞いてみると、

『こういう作業はスクライアでも散々やらされてたからね。とりあえずこの端末から研究年・分野でソートできるようにしておいたから。後、もう一つ重要度って項目があるけど、それは自分で分類しておいて。なんというか……良く分かんない発明ばかりで僕じゃ決められないからさ』

東が作った数百の発明に関する膨大な資料。それも作りっぱなしで後は放置しておいたものが、一つ残らず参照できるデータベース。ぶつちやけて言うとうと、東の頭の中にはその何もかもが入っているから全く必要ないのだが、これを見た時東は確信した。

あ、こいつ使える。とてつもなく。

「ま、天才じゃあ無いけど」

東が見たところ、ユーノに発明の才能はない。だが、こと整理や纏

めといった処理能力においては、余人を遙かに上回っている。

今までの研究のデータベース化、というのは束にだってやってやれないことはなかった。只、とてつもなく面倒で、それに気を取られていては魔法という新しい分野にも進めない。第一、一度発明してしまった物、解明してしまった原理には何らの興味も持てないのである。

だから、今の束にとってユーノは、あつて嬉しい腕利きの助手なのだ。これから先、その需要がどうなるかはわかったものではないが。「……それに、今の私には、敵情視察よりももつと面白そうなることがあるからね」

月村亭の警備をゆうゆう掻い潜りながらそう呟いた束は、先程録画した映像を見なおし、その中のある部分をリピートし続けていた。

——ううん、千冬ちゃんだつて飛べるよ？ いつかきつと。

「あはは、あははははは……」

笑みが漏れる。こんなにあからさまで、しかも挑戦的な言葉。

しかもその時、高町なのはの目線は、束の真正面——カメラの方を向いていた。よもや気づかれたか、とは思わない。自分のスニーキングは完璧だ。

どうせ単なる、神がかつた偶然なんだろう。そう、なのはと関わりあう度に、何度も何度も起こる素敵な偶然。数学なんてちやちなものでは絶対に計算出来ない。誰にも何にも縛られない、なのはだからこそ言える、奇跡に等しい言葉の欠片。

だけど。

「なのちゃん。あんまり私を甘く見ないでね？」

友達の夢一つ、奇跡一つ、叶えられないで何が天才か。飛ばしてやろう、千冬を。遙か空高く、なのはと同じ場所まで。それが、自分のもう一人の友達、千冬の為にもなるから。

自分を本気にさせたな、と、束は心の中で呟いた。なのははどうせ何も考えずに言ったんだろうが、自分の言葉に対しては責任をもつ必要があるはずだ。

明るい笑顔のまま、ウサミミを揺らしてぴよんぴよんと歩く。

その瞬間にも、東の脳内は東を飛ばすためのアイデアを全力で構築していた。温存されていた雑多なアイデア、理論。その一つ一つが、なのはの言葉を軸にして重なりあい、集まり、混じり。

そして、単一の結論へと行き着いた。

「……あはっ」

なんだ。簡単じゃないか。

『あれ』を使えばいい。

東は一瞬立ち止まり、それからダツシユで町中を走りだした。月村亭は海鳴とは大分離れた隆宮市にあり、海鳴にある篠ノ之神社からも結構な距離がある。しかし、そんなことはお構いなしだ。どうせ数十キロ走つても、汗一つ流れないのだから。

三年前に原理を考案したあれを実現させるためには、かなりの技術的ブレイクスルーが必要だった。しかし、次元世界の進んだ科学技術さえあれば、そして、魔法というテクノロジーを応用することさえ出来れば、その過程を一気に省略できる。

ああ、まさかこんな形で実現できるとは。魔法さまさま、そしてなのちゃんさまさまだ。流石の東さんだつて、あれを開発するためには後五年間ぐらい必要だと予測していたのに。

あらゆる問題は解決され、活躍するための舞台も晴れて整った。後はそれに間に合わせるだけ。

むしろ、一番難しいのがそれかもしれない。ジュエルシードは全部で21。なのはと千冬の今までのペース、そして割り込んできた魔導師の少女の戦闘力と、将来必ず関わってくるだろう管理局の勢力も含めて計算すれば、季節が変わるまでには決着がついてしまいうに違いない。

短い。余りにも短すぎる。これから東が作ろうとする物を思えば、絶望的とも言える猶予だ。

だが、それでこそ。

だからこそ燃える。自分は天才だ、という巨大なプライドが煮ええたぎる。

「待っててねなのちゃん、待っててねちーちゃん、そして、首を洗って

待っている、この世界の常識！ この東さんが何から何まで、ぜえーんぶ！ 初めてラボを作った時のお父さんが激怒の余りひっくり返したちやぶ台の如くに！ 逆転させてあげよう！ 楽しみに待ってねー、あははははははー!!」

国道沿いの歩道を車と同じスピードで爆走しながら叫び捲るウサミミドレスな女の子。

その写真が複数の人物に映され、その夜多数のSNSのトレンドになった。

世界を変える偉業の始まりは往々にして些細で、かつ滑稽なものである。

その頃の一夏さん（おまけ）

春も半ばにさしかかり、そろそろ桜が散るか散らないか、といった頃。連休、ということが高町家で温泉旅行の計画が提案されたのはその何ヶ月も前。

それに、まずは姉妹共々親しい付き合いの月村家が乗り、アリサ・バニングスも父親から許可を取り付けて参加する。そして、今や半分高町家の居候となつている織斑千冬、そしてその弟も勿論一緒になつて、これで合計12人の大所帯になつてしまった。

高町家の自家用車と月村家の車、合計二台。六人ずつ入った車内の片方では、男一人に女四人のハーレムが展開されていた。

「かわいいー！」

「にやはは、ふにふにだあ」

男の両隣に座るのは、金髪を長く整えた、外国仕立てのお嬢様と、茶髪にツインテールで笑顔が似合う元気な女の子。

「あんまり触つてやるな、むずがるだろう」

「そうだよ、慣れない車の中なんだから」

後ろの席から顔を出しているのは、長い黒髪を後ろのポニーテールで纏めた凛々しい少女と、おっとりとしながら周りを気遣う可憐な乙女。

四人の中央に座り、自らでは何もせぬまま、四人の美少女の寵愛を受ける。

そんな世界の男性の殆どが羨む待遇を受けている男こそ——織斑一夏。

今年、満1歳になる赤ん坊であった。

「ね、ね、私の名前呼んで、アリサよ、アリサ！」

「アリサちゃんだけずるい！ 私も！ ね、一夏君、私はすずかだよ」

「ええい、二人ともそんなに一気に喋るな！ 混乱してしまうだろうが」

勿論、まだ性別の区別もつかないほど未成熟な赤子に全員惚れ込んだわけではなく、子供からすれば珍しい赤ちゃんという生き物に、只

の興味本位で迫っていただけだ。

一夏自身も別に、目の前で微笑む存在が女性であるとか、しかも飛びきりの美女だとか、拳句の果てには全員年若い少女であるとか、そういう思考は全くない。

ただ与えられる言葉、刺激に対して反応し、時折舌つ足らずの言葉を返すだけだった。まだ物心がついていないのだ。後々このとてつもなく男の夢に近い状況を思い返すのは不可能だろう。

それは本人にとって大損になるのか、あるいは後年こんがらがった彼の女性事情を更に混沌とさせない幸運になるのか。それはまだ、誰にも分らない。

「それにしても、千冬ちゃん」

「なんだ、なのは」

千冬がとりあえず過剰に迫るアリサとすずかを押し退けた後、不意に浴びせかけられたなのはの質問は、いかにも一家の末娘らしいものだった。

「千冬ちゃんももうすっかりうちの子みたいなものだし……そしたら一夏君って、千冬ちゃんだけじゃなくて、私の弟くんにもなるのかな？」

「ん……そう、なるな」

少し迷っていたが、肯定的な千冬の答え。

なのは手を叩いて喜ぶ。高町家の雰囲気は暖かいのだが、なんだかんだ言って、なのはにも末っ子なりの悩みや憧れというものがあるのだ。例えば、出来の悪い弟に、しょうがないなあ、なんて言いながら、姉として世話を焼くとか。

「ふふ、いっくん、なんて呼んじやったりして。私はなのはお姉ちゃん……お姉ちゃん！ いい響きだよね」

にへー、とぼんやりしながらそういう妄想に浸る所は何ともまつたりしていて、昨日の夜も張り詰めた顔でジュエルシードを探していたとは思えない。

千冬としては、この旅行が緊張の連続であるジュエルシード探しの息抜きになればいいと思っていた。だから、ああやっていつもの様に

笑ってくれるのはありがたいことなのだが。

どうも姉として、血の繋がっている弟を取られるのは。何というか、悩ましい所だった。

「ちよおつとお、なによなのはだけ！ ずるいわ！」

「そうそうなのはちやん、私達だって弟、欲しいんだから」

下らないことで悩んでいるうちに、アリサやすずかまで弟争奪戦に加わり始めた。

そういえばアリサは一人っ子だし、すずかはなのはと同じく年上の兄弟しかいない。ひよつとすると、もしかして、これは、姉としての立場の危機なのだろうか？

そう考えると、千冬の手は無意識に、ベビーシートの上できやつきやとはしゃいでいる一夏を庇うような動きを見せた。

「あ、ちよつと千冬邪魔しない！ あんただけ弟持ちなんてずるいんだから！」

「私に文句を言うな！ 言うなら不公平なこのとりにでも言うんだな！」

「あの一、それを言うならキャベツ畑なんじゃないかな、千冬ちゃん？」

批判の矛先が両親に向かないというのは、なんと純真であることか。この場に居ないウサミミ発明家がいたら死ぬほど笑っていただろう。

そして、赤ちゃんの出来る本当の理由を、自慢気に喋っていたかもしれない。

なのはの両親の目の前で。

この場に束がないことは、この四人だけでなく、運転に集中している高町夫婦の精神衛生にも幸いであった。

「どつちにしても一、いっくんは私の弟なんだよ！ 千冬ちゃんはともかく、アリサちゃんとすずかちゃんのじゃないんですっ！」

それぞれ勝手なことを言いながら、にわかには盛り上がる後部座席。言い合いは段々ヒートアップしていった、終いにはじゃれあいのように互いを押し合ったりし始めた。

「……おい、あれ、止めた方がいいんじゃない？」

「いいのよあなた。暫く好きにさせておきましょう?。」

運転中の態度としては些か問題のある行動なので、運転手の士郎が苦言を呈したが、助手席の桃子は敢えてそれを止めなかった。友達同士のちよつとしたスキンシップであることが分かっていたし、そんな事をしなくても、いずれ止まるだろうと思っていたから。

そして、一分も立たない内にその推測は当たる。争う女の子達に挟まれ、わやくちやにされた一夏が不快さを感じ勢い良く泣きだしたのだ。

「あ、い、一夏?!」

「いっくん!」

途端に、四人が四人ともやばいと感じて一斉に互いから手を引き、どうにかして一夏を慰めようとする。しかし、一度ぐずった赤ん坊というのは、母親以外の手によっては中々止まらないものだ。

「やあん、泣き止んでよ一夏くん、ね、おねがい?。」

「ほーらよしよーし……さっぱりダメみたい」

アリサもすずかも、泣き始めた赤ん坊を止める術など知っていない。それぞれに思いつきであやしはじめたが、一夏の目にも入っていないようだ。

慌てて、なのはは一夏の本来の姉を呼んだ。

「ち、千冬ちゃんっ」

「ええい、三人共不甲斐ない! こ、ここはだな、私がとっておきの方法を見せてやる!」

見栄を張った千冬の顔も切羽詰まっていて、しかも何処か恥ずかしそうに頬を紅潮させている。これは今まで、一番の親友であるものにも秘密にしていたのだ。それほどまでに深刻な技を、この状況で解き放つ。その後がどうなるか非常に危険だが。

一夏のためだ。やるしかない!

「とっっておき!?! 一体どんな技なの?。」

すずかが問いかけると、千冬はふとこの秘技を編み出すのに掛けた日数を思い出し、感慨深そうに語り始めた。

「これはだな、まだ私が一夏と二人きりだった頃。どうしても泣き止まないので何回も試して、漸く閃いた必殺技でな……」

「どうでもいいから、早くしなさいよ!」

「千冬ちゃん、お願い!」

「む、そうだな。よし……」

アリサとなのはの二人に急かされた千冬は、まるで剣道場で敵手に向き合うかのような面持ちで精神を統一させる。その雰囲気には押されて、周りの三人がごくり、と唾を吐くのと同時に、ゆっくり息を吸い。

そして。

「あつかんべえのべろべろばああ!」

思いつきり舌を出し、レロレロと左右に動かす。下の脛を思いつきり引き下げて、目の中の赤い部分が丸見えになっている。顔の表情自体もなんだか道化のように笑っていて、いつもの鉄面皮でクールな織斑千冬は何処へやら。まるでピエロのようだった。

とっておき、と自称しただけあって、一夏からの受けは上々。泣き腫らした瞳をぱちくりさせて、パンパン手を叩きながら、途端にまたきやつきや、とはしやぎ始めていた。幼稚な赤ん坊に対しては、まさしく必殺技と言えよう。

問題は、それ以外の観衆にとってもある意味必殺技だったことだ。

「ッ……」

「ああ……」

アリサは車窓の外を見つめ、すずかは申し訳無さそうに俯いた。普段は自分にも他人にも厳しく、冷たいくらいに厳格な千冬が、あの顔をする。旅行の最初の最初で、文字通り一生忘れられない思い出が出来てしまいうさだ。

おかしいとか笑いたいとか、そんな感情はとっくに通り越し、同情や哀れみすら感じる——しかし、唇の端は引きつっている——そんな顔で、二人は淡々とコメントした。

「お、弟持つのって、案外大変なのね。いやー、凄いわ千冬。改めてリスペクトする。うん、ほんとに。超スーパーすごいリスペクトよ」
「その、千冬ちゃん……ごめんね、私、やっぱり弟持つにはちよつと力不足かも」

「く、ううう……」

その反応は、千冬にとって鋭く大きな、言葉の刃だった。どういふことなのか、その表情は、その瞳は。正直、予測はできていた。できていたが。こうして中途半端に返されると、まともに大笑いされるより遙かに苦しい。

これでも弟をあやすために一生懸命考え、三人の前で清水の舞台から飛び降りる心持ちで、全力全開で実行に移したのだ。結果的には大成功だが、後味がこれでは、恥ずかしいのと無様なので、ここから消えてなくなりたくなる。

ドアがロックされていなければ即座に開けて飛び出しただろう。
この場にもし真剣があれば――

「あの、千冬ちゃん？」

なのはの一声が、千冬を現実へと引き戻した。そうだ、なのはだ。なのはなら分かってくれる。優しいなのはなら、私が払った犠牲を分かってくれて、無言で慰めたりもしてくるはずだ。

しかし、白い救いの天使は、千冬に対して、黒い混じりけ一つ無い笑顔でのたまった。

「凄いやー、凄いやー！ いっくんあつという間に泣き止んじゃった！

ね、私にも教えて？」

がふうつ。

無形の刃に腹部を貫かれ、千冬はゆっくりと脱力して横になった。すずかの膝元に頭が乗っかってしまうが、全てを察した彼女は何も言うこと無く只膝を枕として預ける。

ああ、その発言に邪気はない。全くない。なのはなりに気遣い、落ち込んだ千冬を励ますための健気な一言だったんだろう。この状況、もし束でも同じようなことを言うだろうが、あつちは友達を絶望に陥れるための悪意と皮肉がたっぷり入っているはずだ。

そうではない。そうではないのだ。そうではないのだが。

「……………いつそ、ころせえ……………」

「ち、千冬ちゃん!? な、なのは、もしかして酷いこと言っちゃった!？」

「なのはちゃんも面白い、もういいからっ……………私のお膝でどうにかするからっ」

「なのは。ブシのナサケよ、ほっといてあげなさい……………」

妹代わりの前でも、弟の前でも涙は流せない。だから千冬は、車が温泉に付くまで空虚な瞳で座席とすずかの膝に横たわっていた。

そんな愉快的な狂乱の中、一夏は我関せずと指を啜えてのんびりしているのだから、赤ん坊というのは幸せものである。

なべて世は事ばかり（I）

ジュエルシードを探すために地球へやってきた、フェイト・テストアロツサの住む場所は、海鳴の都市区にある高級マンションだ。

彼女にとって、ここは言わば、仮の住まい。だから、元の部屋から持ってきて、座り慣れているソファ以外は、新品の家具ばかりで奇妙に生活感がない。未だ、9歳の少女である。そういう引っ込み思案というか、ホームシック的な一面はあつて当たり前と言ふべきだろう。

しかし、いつも彼女の隣に佇んでいる、狼型の使い魔アルフとしては、この小さなご主人様にもう少し行動的になってもらいたかった。いや、物理的な行動範囲という点で見ると、フェイトは実に良く動いていると言えよう。夜は飛行魔法を駆使して街中を飛び回り、雑多な人混みや街並みの中から、あるかどうか分からない青色の小さな寶石を探す。

しかし、探索の時間が終わると。その疲れも溜まっているのだろうが、すぐにこの拠点へと引っ込んで、口数の少ないまま眠りにつく。起きたら起きたで、食事を取る以外は殆どソファに座りっぱなしで、やることといえばデバイスのバルディッシュと仮装訓練をこなすだけだ。

別にぐうたらしている訳ではないだろう。マルチタスクを利用しての訓練というのは頭を使うし長時間続けるのは確かにきつい。だがしかし、フェイトは別の意味で行動的になるべきだ、とアルフは考えていた。

例えば、何の目的もなしに街をぶらついたり。リニス折角フェイトに似合う可愛い服をたくさん残してくれたのだから、それを毎日着替えて、デパートとか、ゲームセンターとか、とにかく、そういう所で遊んだり。不真面目ではあるだろうが、もう少し気を抜いた、というか、気楽な感じでこの世界を歩く時間を取って欲しかった。

「ねえ、フェイト」

人間形態で食事をとった後、思い切って話しかける。おかしかった。自分は使い魔でフェイトは主人。話しかけるのに、肩の力を入れ

る必要はないけど、自然とそうなってしまう。

「なに、アルフ？ ご飯、量が足りなかったかな？」

デバイスを右手に握りながら目を閉じ、終わりのないトレーニングに没頭していたフェイトだが、アルフの一言にはすぐに気づいて中断する。これもよくあることだ。けえど今は心の中で、折角フェイトが集中していたのに、と罪悪感がこびりつく。

「いや、そうじゃなくてさ」

「何？」

「その、あの、さ」

二人、数秒間の静止時間。

考え過ぎだ、というのは分かっている。フェイトは何も変わっていない。今まで通りの優しいご主人様なんだということは、理屈でない、精神リンクから伝わってくる。

それでも、悩みに悩んで漸く発せられたアルフの言葉は、この閉塞的な状況を壊し得ない、ごくごく当たり前の話題だった。

「あいつらってさ。一体、何なんだろうね」

「あいつら？」

「アタシたちのこと、邪魔するガキの魔導師と、そいつのへんちくりんな仲間たちさ」

彼らが一体何者なのか。考えこんでしまうというのは単なる出任せではなかった。

「ああ……あの子の、こと？」

「そ、この前名前聞かれたよね。あいつ、魔力量だけは大したもんさ。そりゃあ、空戦技術についてはフェイトの足元にも及ばないけどさ。でも……」

どうして、こんな管理外世界の、しかも辺境に居るのだろう。素人だとしても、ミッドの魔法学院なんかに居るべきで、こんな辺鄙な地で、しかも独学で魔法を学ぶような身ではないはずだ。

そう言ったアルフに、フェイトもゆっくり首肯して同意した。彼女の存在は二人にとって全くのイレギュラーである。だからこそ、本来すぐに手に入るはずのジュエルシード集めも、休みなしで毎日探索し

なければいけないほどに難航しているのだから。

「だいたい、あのデバイスはなんだい。所有者のへボな所をカバー出来るような高度なデバイス、どうやってあんな世界で……」

「分からない。けど、あの一人と一体は、かなり手強いと思う。今はまだ有利に戦えるけど、色々戦ってる度に、段々成長していつてるし」
「そうであつてもさ。フェイトには敵わないって！」

ぽんぽん、と励ますようにアルフが肩を叩いたら、フェイトはくすり、と微笑んだ。それはアルフが久しぶりに見たフェイトの笑いだ。嬉しい事は嬉しいのだが、少しだけ、無理に笑っているようにも見えしてしまう。

だから、アルフは話題を変えることにした。

「それより変なのがさ、ガキのお付きだよ。ほら、木で出来た刀を持つてるの」

「あの子？ 魔力は持っていないみたいだけど……でもアルフ、押されてたよね。近接戦闘で」

「んー……悔しいけど、アイツの剣術、結構強いよ。動きは早いし間合いを離してもすぐ詰めてくる。魔力弾なんかも使ったのに、それでも食らいついてきちゃうなんて」

苦々しげに語るアルフ。主の魔力を分け与えられる使い魔として、魔力も持たない人間に苦戦してしまうのには、何かプライドを傷つけられてしまうような悔しさがあつた。

「まあ、飛んじまえば、なんてことはないけどさ」

「でもノーマークだとあの時みたいに、封印したばかりのジュエルシードを無理矢理掠め取られたりもしちゃうから……」

フェイトの心配は最もである。事実、いつかの戦いでなのはに二人がかりで襲いかかり、飛べない、魔力も持たない少女を完璧に無視した結果、なのはが囷となつてジュエルシードから二人を離し、その隙に千冬が奪取する、という作戦に負けてしまったこともある。

千冬本人はそこまで自分を評価してはいなかったが、魔力がないにしろ純粹に戦闘力が高く、かつ放っておくと何をしでかすか分からない戦力というのは、フェイトとアルフの悩みの種になるには十分す

ぎる程に厄介だった。

「それに、あの緑の方の魔導師も。あの防御を貫くのは、結構難しいと思う」

更にもう一人、厄介なのが緑色の魔力を持つ少年だ。攻撃能力は皆無に近いが、その分結界だったり防御魔法だったり物が凄く上手い。

前は二人とはまた別の場所で戦うことが多かったが、最近は合流したのか、共闘して此方に向かってくることが多い。まず間違いなく二人の仲間だと思っただろう。

——実は、自分に対する評価を聞きながら嬉しがるべきか複雑な気分になっていくフェレットが家具と家具の隙間に忍び込んでいたのだが、この時二人はまるで気づいていなかった——

「アイツかあ。白いのと組まれるともっとキツイよ。向こうが防御を捨てて砲撃に集中できるんだから、どうしても近づけない」

「それで接近戦は、あの剣を持った子が居るんだしね。地面すれすれから搦手で攻めることもできない。向こうの知恵と戦術、そのどっちも、試行錯誤から段々固まりつつある」

打開しない状況を再確認させられ、陰鬱になる空気。この話題を選んだのは失敗だったかと、今更のようにアルフは後悔した。自分がリニスのように器用で気遣いも出来るのなら、もう少しフェイトの心を癒やすことができたのだろうか、と思うとイライラも募ってきて、思わず床を拳で叩きたくなってくる。

無論そんな事をしてはますますフェイトを心配させてしまうので、その代わりにアルフは自分たちの家の主を叩くことにした。

「大体、プレシアもプレシアだよ！ あの糞ババア、こつちが苦勞してるのは分かっているはずなのに、増援一つ送ってきやしない！ 倉庫で埃かぶってる傀儡兵の一つも出してくれりゃいいんだ！」

「アルフ、それは」

フェイトが止めるように、それは無意味な仮定であった。こんなに平和な街で、傀儡兵なんかを動かしてみればたちまち大騒ぎになってしまう。仮に結界の中で運用するにしても、転送して運用し、傀儡兵の乱暴さに耐えうる強装結界を貼るまでの魔力を考えたら、フェイト

一人では無茶にすぎる。

だけど、無茶な理由だとしても、文句の一つも言ってやりたくなるのがアルフの心情だ。

「でもさ……」

だから、例え言葉に詰まっても、何かを訴えるように犬歯を噛みしめる。

嫌味ばかり言うアイツの事だ。どうせ、この会話もモニターしているんだろう。だったら聞け。こっちの苛つきと恨みを思う存分ぶつけてやる。

「アイツは、フェイトのお母さんなんだよ!? それがつ、どうして!

娘がどうにもならなくて困ってるってのに、こんな、こんな……!」

「……」

あぐらをかいてしやがみ込み、それから俯いて黙りこんだアルフ。その姿を見て、そして、隠しているけど悲痛に歪んでいるだろうその顔を幻視して。フェイトはゆっくり、座り込んでいたソファから離れて、アルフの頭を優しく撫で始めた。この使い魔がもつと小さく、自分と同じ背丈だった時と同じように。

「ごめんね」

だが、フェイトが掛ける言葉はあの時とは全く違い、暗く、そして切ない。

「私が、もつとちゃんとしなきゃ。アルフにも、苦勞をかけちゃうね」

「……そんなこと、ないっ……」

「ううん……私のせいだよ」

ああ、どうして。

私のご主人様は、こんなことを言う女の子じゃなかった。少なくとも、教育係を受け持っていたリニスが、まだ生きていた時は。

我儘を言っただけで困らせたり、おつちよこちよいな所もいっぱいあつて。でも、いつもいつでも笑顔でいる。そんな女の子が、今はなぜだか背伸びしたように寡黙で、無理して笑っている。

彼女の名前は“Fate”。運命という意味だけれど。彼女自身の運命は何処までも彼女に辛く、厳しい。

「く、そおっ……」

そしてそれは、勿論使い魔である自分が不甲斐ないせいだ。なんて考えたアルフが、自責の念にこらえ切れず、潤んだ目から涙を零そうとした正にその時。

キリキリ、と摘まれるような痛みが、唐突に彼女の腹部を襲った。

「っ!? あ、アルフ、どうしたの!？」

「う、あ、うっ……いた、いっ」

「い、痛いって、お腹が? だ、大丈夫……じゃ、無いんだね? たいへんっ」

別にそれは、アルフの心が悲しみきった果ての幻痛ではなく、単なる腹痛だ。

しかし、状況が状況なので、フェイトは驚き、精神リンクから流れてくるアルフの苦しみも相まって焦り、慌てて外へ出る支度を始めた。

「フェ、フェイト……? どこ、行くんだい?」

「何処って、この世界の薬局だよ。お薬なんて用意して来なかったし、その様子だと、治療魔法も集中出来なくて使えないでしょ? だったら急いで買いに行かなきゃ」

「そ、そんな……いいよフェイトは、疲れてる、から。アタシが」

「ダメだよ、お腹痛いんでしょ! リンクしてるから分かるよ、アルフが苦しんでるの」

はっと気付き、アルフは精神リンクを打ち切る。だが、フェイトはそれでも納得せず、財布を持って出かけようとしていた。

情けない。私はリニスに託されたのに。フェイトがきつと幸せになれるようになって。それでも、何も出来ない、何もしてやれない。それどころか、今なんてこうして、世話を焼かれてしまっているじゃないか。

「フェイト……ごめんね。本当はフェイトを守らなきゃいけないのに、こんなざま見せちゃって……アタシ、使い魔失格だ」

「ううん、そんなことない、そんなことないよ。私との契約、思い出して(っ)らんっ?」

「……『生涯を、ともに過ごすこと』」

「そう。だからね、アルフ？ 色々気を使ってくれていてみたいんだけど、そういうのじゃなくてもいいんだ。アルフが隣にいてだけで、私は凄く助かってる。居なくなったら……困るんだ。だから、楽しんで、ちゃんと休んで？ 主命を果たすために。これ、ご主人様からの命令だよ？」

「……あ」

自分を責めるアルフに対して、フェイトの言葉はどこまでも暖かく、そしてその顔は、ほんの少しだけ、あの時に戻ったような自然な笑顔だった。

だから、冗談めいて締めくくったフェイトの言葉に、アルフは素直に従うことが出来た。

「うん、分かった。じつとしてるよ……ありがとう、フェイト」

「ごめんね、と言おうとしたが、ありがとうと言い直す。そっちの方がちよつとだけ明るいから。」

「じゃあ、行ってくるね！」

勢いきって部屋から飛び出すフェイト。どっちみちこれが初めて、戦闘以外での外出にもなる。その点ではアルフの献身も、無駄ではないのかもしれない。安心して、アルフは目を閉じ、フェイトに代わってソファの上で横になった。

——この時、もしアルフがもう少し気を張っていたなら、フェイトがもう少し焦っていなかったなら、気づいていたはずだ。余りに焦ったフェイトが、いつのまにやら手に握っていたバルディッシュを取り落とし、そのまま家を出てしまったことに。

フェイトはマンションの廊下を走る。幼いころ、アイスを一度に10個食べても頭痛も腹痛も起こさなかった、そんな使い魔の一大事

だ。自分がどうにかしなければ。

そうして、エレベーターに乗った所で——ぷつり、と真上の電灯が消え、下る動きも停止し、僅かに浮き上がるような感覚が止まった。停電か、と目を見張るフェイト。しかし、密閉されているエレベーターは真つ暗闇で、視界が効かない。

本来ちよつといけないことだが、仕方が無い。と魔法を使って明かりを灯そうとしたその矢先。

「はろー」

ぞくり、と背筋に緊張が走る。後ろへと振り返れば、そこには暗くてぼやけた、しかし、自分と同じくらいだとはつきり分かる、女の子の姿が。

そしてこの声、フェイトには聞き覚えが合った。何度か戦い、競いあった白い魔導師——とは良く似ているが、それではなく。一度だけ、ジュエルシードを回収し始めた時遭遇し、拍子抜けするくらいにあっさり撤退していった、ウサミミの付いた女の子。

「あな、たは……」

「私？ 私はね、天才だよ！」

その一言と同時に、ウサミミに取り付けたライトを使ってフェイトの瞳を照らす。怪しげな光が密室内に乱舞し、それを見つめたフェイトは、アルフトの精神リンクで助けを求める前に、意識を失いバタリと倒れた。

「うむむむ、流石は束さんの発明品。『ねんねころりよ催眠生物ライト』のこうかは ばつぐんだ！」

篠ノ之束。

全ては彼女の仕込んだことだ。

アルフの体内に仕込んでいたハリガネムシ型発信機ロボットを使い腹痛を起こさせ、フェイトをたった一人で外出させるように仕向けていたのだ。

「後は……つと、デバイスは持ってないみたいだね。これで完璧、おやすみなさーい」

まあ、もし持っていないでも、EMPでシステムダウンさせればいいの

だが。

東は元々、フェイトとアルフの動向について把握し、ユーノに監視を行わせていた。モニタした記録をもとに、自分たちの敵である二人について知り、その行動原理を理解しようとした。それも、最初はその為になるかもしれないという浅い理由で行っていたのだが、記録を続ける度に、東はこの卑怯な覗き見へと興味を示すようになっていた。

記録だけでは見えてこないのだ、フェイトの人格が。フェイト・テスタロッサという人間の深層心理が。二人だけの部屋だと認識しているはずなのに、フェイトとアルフの会話は少なく、フェイトの行動も僅かなもので、このままでは彼らが何者か全然分かりやしない。

辛うじて、彼らの上にプレシアなる女性が居ることだけは分かったが、それだけでは東の欲求など到底満たされず、だからこうして、止まったエレベーターという密室の中で彼女を眠らせるという強行措置に出た。

「私が直接出張ってきたんだから、眠ってなかつたら有り難がつて泣き出してもらわなきゃ許せない所なんだよ？ だって、最初はユーノ君に任せようかなとも思ってたんだもん」

エレベーターのセキユリティは既に切断している。だから東は密室で誰も聞いてくれない独り言を紡ぐ。

「でもね、ユーノ君の性格的にこういう仕事は無理だろうし。それにね、私は君に興味が……ううん、君の『記憶』に興味があるんだ」

フェイトの『記憶』。一見意味のないようなアルフとのやりとり、日々の行動の中で、東が唯一掴めた手がかり。東にとっては珍しく、理屈ではなく直感によって得た発想だ。

「だから」

普段と全く同じ、なのはに甘える時、千冬をからかう時、発明に狂喜乱舞する時と同じく目を細め、心から笑っている——ように見える笑み。

「君の頭、ちょくつと、覗かせてもらおうね？」

それをフェイトに——ではなく、髪の毛と肌と頭蓋骨に隠れた彼女

の脳味噌へ向けながら、銀の光沢があったヘルメットのような機械を、フェイトの頭へセットした。

アルフが横になって、ぎつと20分くらい経っただろうか。かちやり、とドアが開き、薬局のポリ袋を持ったフェイトが駆けつけてきた。「ただいま、アルフ。大丈夫？」

「ん？……ああ、おかえり、フェイト。いや、寝てたら結構楽になってきたよ。でも、一応飲んでこうかな」

「そっか。それがいいよ。じゃあ、今お水持ってくるから」

フェイトがテーブルに置いた袋の中には、腹痛に役立つだろう薬が何個も入っている。別にそこまで買ってくることはないのに、とアルフは心の中で苦笑しつつ、多分店頭で必死に選んだんだろうな、と想起されて何だか心が暖かくなって来た。

この分なら、腹痛も夜には治りそうだ。そうしたら、ジュエルシード探しを手伝える。

アルフはホツとして、起こした身体をまたソファへとうずめた。たまには子供の頃のように、こうして甘えるのだっていいかもしれない。

「ね、フェイト。所で、どの薬局で買ってきたんだい？」

「え？……えと、えーと……」

いきなりの間にフェイトは戸惑い、思い出せずにポリ袋に描いてあったロゴを見て答えた。だが、そこもフェイトのおちよちよちな、所謂素が出てきてるんだと思えば、さほどおかしいことではない。アルフは、小さな声でくすくす笑った。

「フェイトってば……」

「あー、アルフ？ 今おちよちよちよいだなって思ったでしょ！」

「思っていない、思っていない」

「思ってた！ リンクなんて無くて、ちゃんと分かるんだからね！
はい、嫌がらないで飲むこと」

「なんだよお、フェイト。アタシもう子供じゃないってば、嫌がらな
いって」

ちよつとムスツとしたフェイトの顔は、ある意味笑顔より貴重かも
しれない。

そう思いながら、アルフは錠剤二つを水と一緒に飲み干した。

なべて世は事ばかり (II)

東が『空を飛ぶ』ための研究に乗り出してから、おおよそ二週間。その二週間の間に、なのは、そしてフェイトのジュエルシード争奪戦は大きく進展していた。

今現在、なのはが手に入れているのは8個。フェイトが手に入れたのは6個。先だって5個ほどリードがついていたにしては、なのは側はフェイトにしてやられすぎている、というところだろう。

現に最初は、なのはも千冬も、フェイトに負け続けであった。なのはは機動力と近接戦闘面ではどう頑張ってもフェイトに対応できず、距離を離れた砲撃戦に持ち込もうとしてもあつという間に距離を詰められてしまう。千冬も千冬で更に剣術の腕を磨き、竹刀を木刀に持ち替えたが、それでも空を飛べないという足枷は重く、戦闘ではどうしても支援がメインになってしまう。

この所、ユーノが合流して三対二に持ち込めることもあつたが、それでもどうにか対等に戦えるといったところだ。会つて数週間の即席トリオでそこまで戦える方が凄いかももしれないが。

「……千冬ちゃん、もうちょっと、お願い」

「む、いや、だが……」

篠ノ之神社に併設されている、剣道場。普段は数多くの門下生が切磋琢磨し合い、竹刀のぶつかる音と掛け声が響く場所である（これも、練習時間外である今は、しんと静まり返っていた）。

その真中で、向かい合っている面胴小手姿の少女が二人。

片方の構えは堂に入ったもので、いかにもな雰囲気から当な実力者だと見て取れる。何回も剣を振るつたが、汗一つかいていない。

対してもう片方は散々に打ち込まれ、息も絶え絶え。どうにか竹刀を構えているが、もう少しで倒れそうなほどふらふらである。大体、持っているのは竹刀ではなく、竹で出来た棒であるのがおかしい。最もこれは、彼女が持つべき武装の類似系であるのだから、それで正しいのだ。

「もう疲れただろう。そろそろ休憩を」

「ううん、まだっ！」

何日か前から始まった、特訓だった。きつかけはなのはが、近寄られるとどうにもならない、フェイトの動きを見切りたと言ったことだ。ならば地上でフェイトと同等に動ける千冬の早さに慣れよう、と言うわけで、練習前の剣道場を貸し切ったの秘密特訓と相成った。

許可を取り付けてきたのは束である。篠ノ之家の大黒柱であり同時に神社の神主、そして剣道場の主でもある柳韻は厳格な人物だが、このとんでもない長女のやることにはある種の諦めを持って接しているらしく、何に使うかも聞かずに許可を出したという。千冬たちにしては有難いことだが、後で菓子折りの一つでも持って頭を下げなければいけないだろう。

「……全く。分かった。だったらそのへろへろな構えを少しでもどうにかしろ」

「うんっ！」

なのはにしては珍しく表立って強情だな、と千冬は思う。いつも他人の言うことをよく聞き、時には信じこみすぎてしまう面もあるのだが、今は変に意地を張り、疲れ果てた身体をなんとか立ちあがらせている。この前まで、運動なんて嫌いだ、と言っていた女の子が。

その心意気は頼もしい。だが、オーバーワークは身体に毒だ。今日の夜も探索を控えているというのに、これ以上の負担は掛けられない。自分が良く体を動かすのだから、向こうが無理を仕切っているのは良く分かっていた。

だが。千冬はそれを口に出せるほど素直ではない。特に、こうして剣を構えている時は。

「……いくぞ」

「はいっ！」

そう言うなり、千冬は気を張り、竹刀を上段へと構える。今まではなのはの体力に合わせてだしぶ手加減していたのだが、眼の色は今や、敵であるフェイトか、天敵である束と戦うときと同じように鋭く、険しくなっていた。

そうまで無理をしたいのなら、その前に徹底的に叩き潰して、無理

を出来なくさせてやる。これが今の限界、であることを身体に叩き込ませるのだ。

妹みたいななのに対して、少し険しさが過ぎるのではないかとも思うが、元来織斑千冬という人間は力だけが取り柄の不器用な女だ。だったら、自分が表現できる、精一杯をぶつけてやろう。

今、目の前で必死に此方を見つめ、何処から攻撃が来るのか予測しているなのはそのために。

「はあああっ！」

烈火のごとき叫びの後に、竹刀が振り下ろされる。来ると分かってきたその一打はどうか防いだなののだが、続け様に浴びせられる連撃にはとても対応できず、それでもなんとか棒を愛杖のように持って防ごうとするが次々と掻い潜られ、防具越しに散々打ち付けられている。

それまでならそこで終わったのだが、今回は千冬も容赦はしない。相手が立ち上がっている限り、手加減せず滅多打ちに打ち込んでいく。

乾いた音が道場の中に、そして外へも響く。それは、まるで集団で稽古をやっている時と同じくらい大きく、激しい。事情を知らない者が脇を通ったら、練習時間が変わったと思うだろう。

なのはの強情も大したもので、数回打ち込んで壁の端まで追い込んでまだまだふらつきながら立っていたが、最後に面を思いつきり打ってやると張り詰めた線が切れたようにくたりと倒れこんだ。

「はあ、はあ……千冬ちゃん、強いね」

「当たり前だ。生まれてこの方これだけが頼りだったからな」

腕の力こぶを見せる千冬に、なのはは面の中力ない顔で精一杯笑いを表現する。千冬のこの冗談めいた言葉は、実は半分ほど真実だった。そのことをなのはは良く知っていて、だからその裏にあるものは触れず、表側の冗談でにやははと笑った。

なのはの面が外されると、汗の水滴に塗れた頭部が出てきた。息は荒く、熱い。普段運動していない子供が、僅か30分でも全力で稽古を続けたらこうもなるだろう。

千冬は、なのはをシャワーに入らせることにした。幸い道場の近くにシャワールームがある。汗まみれのまま家へ返したら、姉として申し訳が立たない。

二人、道着を脱いで裸になり、一つのシャワーだけがある狭い部屋へと入る。なのはの汗を流してやりながら、千冬は何となく落ち着かなくなつて、口を開いた。

「しかし、お前が自分から面を被るとはな。正直意外だったぞ。師範に何度薦められても、剣道は自分に合わないと言っていたらしいじゃないか」

「んー、でもね。今はそれが、必要なくなつて。フェイトちゃんと、戦うために」

戦うために。猛々しい単語を口にしたなのはは、シャワーノズルを握り、自分の口元で戦う、という言葉を反芻した。

それしか方法はない。あの悲しい目をした女の子と、まともに向き合うには。もし、今からでも街中を探せば、戦っていない、海鳴の街で日常を過ごす彼女に会えるかもしれない。ひよつとすると、束ならその在処を知っているのだろうか。何でも知っている彼女のことだ。きつと、喜んでなのははに協力し、全力で案内してくれるだろう。でも、それではいけない。

そうしたところで、彼女からは静かな拒絶を受けるだけだ。人見知りなのか、それとも何か辛いことでもあったのか。彼女は口数を少なくして、自分に何も話そうとしてはくれない。

だから、なのはは戦わねばならない。

フェイトと空の上で戦っている時、互いに知恵を絞って手を読み合っている、戦術の優劣を競うこの方法だけが、二人の間で辛うじて生まれていたコミュニケーションだった。

「そんなに戦いたいのか……いや、違うな。あの敵のことが、そんなに気になるのか？」

「敵じゃないよ。話し合えたら、分かり合えると思う」

「しかし、向こうも譲れない理由があるようだ。どうやって止める？」

千冬はなのはの戦う理由を正確に承知していた。

その上で敢えて、なのはの気持ちの向く対象である女の子に『敵』という単語を使った。そして、なのはの気持ちを試すように、挑戦的な問いも投げかける。それは仲の良い友達が他の人間を見つめて離さない、そのことへの嫉妬の発露なのかもしれない。

なのははそんな千冬の少し意地悪な問いに、さつきまでやっていた稽古と同じように、真正面から向き合った。

「止めるとか止めないとか、そんなんじゃないよ。あの子のこと、知りたいの。あの子がどんな子で、何を思っで戦っているのか。気になるんだ」

止まらないなら止まらないで、それでもいい。自分のものでないジュエルシードを奪うように集めるのは、フェイトの勝手だし、止めたいとは思っていない。勿論、それを貫くならなのはも全力で戦い合っで勝利して、ユーノへとジュエルシード全てを渡してきつちりと終わらせるつもりだ。

なのはが気にしているのは、フェイトという人間そのものについて。人のものを奪うのは犯罪、それは多分この世界と一緒で、次元世界でも変わらない。でも、なのははそれを善悪の二元論で終わらせるつもりはなくて、どうして、と問いかけていきたかった。

ぶつかって、そして『どうして』を理解して――

『なのは！』

それから何をしようか、というなのはの思考は、一言の念話によって打ち破られた。

焦りに震えるその声は、束の助手として資材集めや潜入捜査などにこき使われつつ、最近なのはと千冬の援軍にも駆けつけてくれるユーノだった。

最近は何しろ、束がある新研究に取り憑かれたように励んでいるらしく、此方の方に集中できて嬉しい、とも二人は聞いたことがある。

「ユーノ君!」

「ん、なのは? ユーノからか?」

「あ、うん、千冬ちゃん、ちょっと待ってて」

魔力のない千冬に念話は届かない。だから、千冬なのはとユーノ

の会話を待つて、行動を起こさなければならなかった。とにかく何が起こってもいいように、シャワーを止め、なのはの手を引つ張つて脱衣所へ行き、自分と会話に集中するなのはの身体、両方をタオルで拭いて準備を整える。

『ごめんね、遅くなつて！ どうしたの？ まさか、ジュエルシールド!?!』

『そのまさか。しかも、ほら、レーダーを見てよ。最大倍率で』

なのはは慌てて、学生鞆から丸いコンパクトのような機械を取り出す。これぞ東特製の「掴もうぜジュエルレーダー」。ジュエルシールドに限定されるが、最大倍率で街一つの範囲をあつという間に探知できる優れたものである。

ちなみに、その余りの効率の良さに、サポート魔法のプロフェツシヨナルな少年が仰天したという逸話もあるのだが、それはまた別の話である。

『うそ……もう光が赤くなつてる！ 異相体になつちやつてるの!?!』
『見つけて数分も経たないのにこれだ。恐らく……あの子だね。あの子が強制的に魔力流を流して発現させてる。そんなことをしたら、下手すれば暴走するのなんて分かりきつてるのに!』

震えるユーノの声。ジュエルシールドが暴走すればどうなるか、彼が一番よく知つているのだから当然だった。なのはもその声で、本能的に危険を理解する。そして、今すぐ飛んでいかなければならないというのも。

「千冬ちゃん!」

「ジュエルシールドか」

「うん、それも結構危ない感じだつて！ 行こう、千冬ちゃん!」

訓練終わりの疲れなど何処へ行ったのか、急いで服を着終わったなのははそのまま、レイジングハートを起動させようとする。

慌てて止める千冬だが、なのはも魔力は今日1日、1分足りとも使っていない、だから大丈夫、と譲らず止まらなかった。

「もしかすると、フェイトちゃんだつて危ないかもしれない。だつたら、助けなきや!」

自分には、誰かを助ける力があつて、それで助けたい人が近くにいるなら止まってはならない。なのはの精神の根底にある、父親の教えだ。

それは、助けた後に敵になるかもしれないけど。今度もまた、分かり合えないかもしれないけれど。進まなきゃ、やらなきゃ何も始まらない。

「……わかった。よし、行こう。こんな所でぬるま湯を浴びるのは終わりだ」

そのなのはの気持ちを汲んだのか、苦笑しながら千冬は頷いてくれた。

「つ……い……こいつつ、ひよろつちいくせに中々しぶとい！」

アルフは毒づいた。中々見つからないので、魔力流を直接流してジュエルシードを活性化させる。森を焼いて燻り出すように強引なその方法も、途中までは計算通りだった。しかし、その周りに偶然いた蜘蛛を依代に選び、異相体として巨大化してしまったのだ。

当然、放っておく訳にはいかない。フェイトとアルフ、二人は即座に結界を構築し戦闘態勢へ入ったのだが。これが只の暴走体にしては、中々に手強い。六本の足を器用に使い、そこかしこへ跳んで攻撃をかわす。バインドで押さえつけようとすれば、その時一瞬、足が止まるのを知っているのか、口から白い糸を吐き出し、逆に此方を捉えようとする。

特に、空を飛ぶ対象には、滅法強いタイプのようなだった。二人が戦っている場所には、異相体の糸によってネットのようなものが作られ、下手に飛び回ればそれに引っかかってしまう。

一度攻撃を当てれば倒せるだろうが、そこに至るまでがかなり遠い。厄介な敵だ。

「…………このままだと…………！」

特に高速機動戦を得意とするフェイトにとって、この敵はとてつもなく相性が悪かった。

まず、得意の機動が糸の膜によって遮られてしまう。ならば射撃で仕留めようとしても、向こうの機動性の高さに翻弄され、中々決定打を与えることが出来ない。

このままジリジリと消耗戦に持ち込まれたら。そう考えると焦りが生まれる。フェイトもアルフも魔力は有限。しかし、ジュエルシードから異相体に供給されるそれは無尽蔵と言っている。

只の異相体とはいえ、油断できない理由はそこにあるのだ。

「アルフ、離れてて。ちよつと消費がきついけど、アレで…………！」

「フェイト、無茶はダメだよ！ あたしがなんとか一撃出来れば！」

「ううん、なるべく早めに終わらせないと」

バルディツシュか掲げられ、その形態が金色の魔法刃の鎌から、漆黒の鉄の穂先を持つ槍へと変わる。そして、刃と柄の接続部分から伸びるのは、三本の羽根のように見える、余剰魔力の噴射。主の魔力を全て受け取り、大魔法を放つために全機能を開放させるバルディツシュ・グレイブフォームだ。

この状況を打開するためにフェイトが放つ大魔法、サンダーレイジ。周囲一帯に雷撃による大ダメージを与え、異相体が何処へ逃げようとも逃さず、即座に封印できるという計算だ。

しかしこの攻撃、魔力の消費が著しく高い。恐らくフェイトに余力は残らないだろう。そんな時に、邪魔をする白い魔導師に巡りあってしまったら。

フェイトの頭脳は十分にその事態を仮定出来たが、しかし敢えて短期決戦に踏み切った。

「…………フェイトっ！」

アルフには、その気持が痛いほど理解できる。

この暴走体が結界を抜けだして、もし街を襲ったらどうなるか。フェイトはそこまで考えて、自分の消費を度外視して決着をつけようとしているのだ。

それが、何とももどかしい。どうでもいいじゃないか、そんなこと、と訴えたくなる。

ジュエルシードを集められなかったら、またプレシアから叱責され責め苦を浴びせられるというのに。母親のようにどうしても非情に徹しきれないその優しさが、今のアルフには齒痒かった。でも。

「詠唱の隙は私が守る！ フェイトは術に集中して！」

「アルフ……！」

だからこそ、優しいからこそ、アルフはフェイト・テスタロッサが好きなのだ。その甘さは私が救う。私だけが守らなきゃいけない。フェイトには、他に誰も居ないんだから。

蜘蛛型異相体の複眼が、近づきあつた二人へ向けられる。攻撃が来る。

アルフが防壁を構築し、フェイトが術式を組みつつづけていたその時。

「よし、二人で投げるから、思いっきり突っ込んで！」

「いくよ、せえー、のっ！」

狼の聴覚が、デバイスのセンサーが遠くから感知する声。そして。

「とおうっ！」

はるか遠くから投擲された黒い人間弾丸が、片足を突き出し、冗談のような早さで蜘蛛の横っ腹へと突っ込んだ。

その勢いで、メンコがメンコをひっくり返すように、巨体はあっさりと裏返る。六本足が宙に浮き、あるはずの地面をジタバタとかき回す醜態を見せていた。

「なのは、いいぞー！」

「うん、大きいの行くよ、離れて！」

最早何度も戦い合い、聞き慣れた凜々しい声と、張り詰めた声。

「ディバイン・バスター！」

そして、何度か喰らい掛けたピンク色の光の渦は自分たちではなく、ひっくり返った大蜘蛛に直撃した。情けなく蠢いていた足はしなしなと力を失い、そして萎んでいく。後に残ったのは、封印された

ジュエルシードとちっちゃな蜘蛛。見慣れない場所に突然現れた蜘蛛は驚き、地を張って逃げ去っていった。

「良かった、間に合った！ えと、大丈夫……？」

「……」

それでも臨戦態勢を解かない二人。封印したジュエルシードに近づこうとするのはも千冬も、そしてユーノも、その険しい目線に押され、浮かぶ青い宝石越しに向かい合う。

無言で、斧に戻したバルディツシユを構えるフェイトを見て、なのも対抗するように杖を両手で持ち、先程救った敵手へと向ける。

ここでフェイトかアルフのどちらかが「ありがとう」の一言も言ってくれば、それなりに話し合いの道も生まれるだろう。だが彼女たちには、そう出来ない理由がある。だから、喉の先まで出かけた言葉を抑え、戦闘態勢を取るのだ。

「フェイトちゃん……」

しばし俯いたなのは、きつと顔を上げ、決然とした表情でその無言の返答に答えた。

「譲れないんだね。うん、私も譲れない。ジュエルシードを、それからフェイトちゃん、貴方のことも」

「……」

「知りたいんだ。どんなに拒絶されても傷ついても、分からないのは嫌だから。分かり合えないのも嫌だから。だから、私が勝ったら……お話を、聞かせてもらおうよ」

「……っ！」

二人の魔導師の隣で、此方も互いに向かい合う、使い魔と剣士。「アタシの相手はアンタかい……いいね、クロスレンジは望むところだ」

「こちらも。躰の悪い犬に、なのはの背中を渡せないからな」
「アンタ……なるほど、そういうことかい」

アルフは理解する。こいつは自分と同じだ。こちらは使い魔と主人、向こうは友人同士。立場こそ違えど、守りたいという気持ちは違わない。だから、魔力も持たない只の少女が、二本の刀を持って戦場

へと赴いている。

「そういうことさ。奇遇だな。お前とは気が合いそうだ」

「気に喰わないけどね。ま、容赦しないよ。隙あらばアンタの守り掻い潜って、アイツの喉笛に噛み付いてやる」

「それはこちらと同じだ。気がついたら可愛いマスターの頭が潰れていても、不思議じゃないぞ。私はなのはと違って、手加減というのが苦手だからな」

「言っただなー」

千冬の左肩には、フェレットに変身したユーノが居る。そして魔法陣を展開し、次々と空中へ浮かばせていった。足場にして、これで相手が空を飛んでもどうにか追撃出来るといったところか。苦肉の策だが、アルフも飛行は正直言ううと苦手だし、これで条件は五分になったと考えるべきだ。

2組の間の緊張はもはや限界に達し、誰が言うでもなく、互いに駆け寄って攻撃をぶつけ合おうとした。

その時である。

「っ、千冬、下がって！」

それをまず探知したのはユーノであった。五人の中で唯一戦闘以外の事柄へ集中していたので、上空から奇襲のように振ってくる魔力弾の雨を迷わず察知できたのだ。

千冬は殺気には人一倍鋭敏でも、魔力の反応に対してはそうではない。ユーノの言葉によって急いで後方へ下がらなければ、一人青い針を全身に受け、気絶していたかもしれない。

「え、ええっ!？」

「っー」

「なにっ、まさか……!？」

その他の三者も、ある者はデバイスの進言、またある者は持ち前の探知能力で攻撃を予測し、下がっていた。

だが、それは介入者の作戦の内である。なのはとフェイト、二人が足を踏み入れた床から青い魔法陣が現れ出て、二人の両手両足を同色の太い輪っかが拘束した。

「え、うそっ!」

「バインド!? アルフっ!」

一人は突然の拘束にあたふたともがいていたが、もう一人は即座に、未だ縛られていない自分の使い魔へと助けを求める。経験の差が完全には埋まっていないことの現れである。

「フェイトーッ!」

この非常事態に対しアルフの反応もまた素早かった。

先ほどまで殺気を向けていた相手に無防備な背を向け、フェイトにかかったバインドを砕こうと、身動きできない彼女へ近づくと、当然、その行動に追撃が被さった。

再び、群青色の雨。アルフの背中には幾つもの直撃弾が突き刺さり、その跡からはうつつすら血がにじみ出る。しかし構わずフェイトの場所まで辿り着き。バインド破壊に長けた己が拳で、硬い術式を無理矢理打ち消した。

「逃げるよフェイト!」

「アルフ! でも、ジュエルシードが、まだ!」

「こうなっちまったら、どうしようもないよっ!」

そのままフェイトを抱きかかえて、ダンッと地を蹴り飛び去っていく。

三回目の追撃は来なかった。これ以上追っても魔力の無駄だと気づいたのか、それとも、傷ついた使い魔と消耗した魔導師一人、後でどうしてもなると判断したのか。

どちらとも決めさせない無表情の少年が、自分のかき乱した。決闘の場に降り立った。現れた第三勢力。その正体を、ユーノは消去法と、少し前にかけられたある言葉から思い出した。

——時空管理局。ユーノ君から聞いた通りの規模だったら、そろそろやってくるかもねー。事故の報告を聞き取って、その辺りを調査して。それから次元航行部って、地方のドサ回りもやってるんでしょ? だったら、わざわざ本局から出向かなくても近場の艦船が向かえるよね? 事件発生から一ヶ月の経った今、そろそろ来てくれないと流石に無能ってことだよ——

「僕は時空管理局本局次元航行部所属、クロノ・ハラOWN執務官だ。
手荒いやり方ですまないが、君たちの事情を聞かせてもらおう」

なにも世に事はなし (Ⅲ)

その日の朝に、時を遡って。

ユーノ・スクライアは相も変わらず、篠ノ之東の助手として西へ東へと飛び回っていた。

彼の仕事の一つにフェイト・テスタロッサ宅の監視があるが、最近はその頻度も少なくなっている。その代わり、もう一つの任務として、各地からのパーツ集め、というものを命じられていた。

なんでも、東の今度の発明には、どうしても世界各地から『超一流』の部品を集めないといけないらしい。東の地下研究所にも工作機械は存在するが、それでも賄えないほどの貴重品だったり、あるいは世間一般で価値の認められない風変わりな独特な部品がどうしても必要である、とのことだった。

東に命じられ、ユーノが赴いた場所はまさに多種多様だった。国立の研究所や大会社、昔ながらの町工場、果てには個人で発明をやっている同類、もとい風変わりの住処まで。自分みたいな子供が入り込んで大丈夫なのか、と聞くと、

『人間はね、これさえあれば白を黒と見間違えることもできるんだよ？』

なんて言われながら小切手を渡された。帳面に書かれていた目を白黒させるほどの金額は、果たして何処から出ているのだろうか。

自分の精神衛生を鑑みて、ユーノは敢えて触れずに終わった。

『そりゃあね、弘法筆を選ばずとは良く言うけどさ』

ある日、ゼロが7個ほど書かれた小切手を手に持たされ、北アフリカの砂漠のど真ん中であるという研究所までお使いに行つて来いと言われた時。流石に呆れ顔のユーノを見て、東は珍しく愚痴を零すように呟いた。

『今回ののはそれじゃあいけない。全てが最高級品で、調整に調整を重ねてようやく実現するのさ』

『教授がそう言うからには、さぞ凄いなだね……』

『凄い？ そんなんじゃないよ？ 君も完成したこれを見れば、感謝

感激雨あられだろうね。偉大なる束さんの深慮遠謀に恐れおののき、その助手を務めたことが後代までの誉れとなるね!』

今のところ、誉れというか苦勞談なんだけど。とはおくびにも出さず、ユーノは転送魔法を起動した。魔力のある限り、一瞬で地球の裏側にも行けるこれがなければ、ひよつとすると部品が集まらずに、束の発明も流石に途中で頓挫したかも知れない。

さて、そんなユーノは本日、朝の七時からロシアの某機密研究所に転移しトランクに入れられた電子部品を受け取った後、束のラボで支給されたウサギ柄のコートを脱ぎ、地下の奥の奥で作業に取り掛かっていた束へ篠ノ之家本宅で出来上がった朝食を持っていった。

「教授ー、朝ごはんだよ」

こうして階段の上から束を呼ぶのにもすつかり慣れてきたな、とユーノは思う。事件が始まってから、ずっとここで寝泊まりさせてもらっているので、勝手知ったる、という感じで階段を降りていく。本人の応答がないが、どうせ持っていた所で大して邪魔にはなるまい。

むしろ、自分が来たことにも気が付かないはずだ。という、予測通りであった。ライトが眩く照らす中、束はコンソールに向かい合っていて、何やら難解なプログラムを作り上げているようだ。

「教授ー、ご飯あるよ、食べないの?」

口元に手を合わせて大声を出しても、束は何ら反応しない。ユーノのどんな失言も逃さずいじめまくるご自慢のウサミミも、今はすっかり麻痺してしまっているようだ。

いつその事、肩でも叩いて知らせてやろうか。いや、こんなに集中しているのだから、服に手を入れて色々弄つても気づかないかもしれない。ユーノの心の中の悪魔がそう呟いたが、それを粛清したのは天使ではなくユーノ本人であった。

そうしたところでどうなる。確かに束はなのはや千冬に比べて少し若干ながら大人っぽいスタイルをしているけれど、中身は悪魔なんではない、漆黑そのものだ。またぞろ被験体になるつもりはない。

それに、もつと嫌な空想がある。

巫山戯た口調で、責任とつてね★なんて言われながら一生助手を続けさせられることだ。ユーノにとつては正しく悪夢である。今朝のように裏取引の片棒を担がされたり、新発明の実験台にさせられてしまうのはもうまっぴら御免だった。

「……もう、教授つたら……」

だが。一心不乱にキーボードを叩き、目の前にある物言わぬ機械へと、命を吹き込もうとしている束の姿を見ると、どうしても冷徹に、朝ごはんだけ置いて帰ることが出来ない。このまま去つても務めは果たしたのだし、本人も大して気にしないだろう。それでいいはずなのに、何故か放っておけないのだ。

だってこの女の子、もう何日も、いや、何週間も徹夜しているのだ。ただの一つの発明品にかかりきりになって。最初は何回か止めようとしたが、勿論束は聞く耳持たず、段々濃くなる目の隈も気にせずに研究所の最深部から動かない。

束が外にでるのは日に一度、風呂に入る時だけだ。学校も丸2週間休んでいる。一度、これ捨ててきて、と不透明なペットボトルを渡されたこともあった。ユーノは中に何が入っているのかという思考を徹底的に放棄して、それを処理した。

そんな束であるから、せめてご飯だけは食べて貰いたい。

散々こき使われた人間にそんなことを願う辺り、ユーノも中々にお人よしである。

ふう、と1つため息を付いて、こういう時にピッタリのセリフを唱えた。

「束ちゃん、なのはだよ。私の手作りのご飯、食べないの?……ぐすん、悲しいなあ」

精一杯の作り声と、へぼい演技。しかし、元々声変わり前の高めの声だったため、鈍りきった束の聴覚を騙すには十分だったらしい。

「な、なのちやああん!? 手・づ・く・りい!?!?」

その瞬間、飛び出してきた束にがっと思みかかられ、押し倒される。女性に押し倒されるというのは中々ドキドキするシチュエーション

ンだが、今回の場合相手が相手なので、興奮するどころかむしろ緊張する。

いつ寝技をかけられてしまうのか。首筋を極められたらどうしよう。なんて考えていたが、束は暫く胸元を嗅いだ後、がっかりした顔で、

「なあんだ、君かあ」

と、あつという間に興味を失ったよう立ち上がり、椅子へ戻ろうとした。

「待つて待つて、待つて！ ご飯あるよ！」

「ふえ？ ……あ、ほんとだ」

ユーノに言われて初めて、束は自分の空腹に思い当たったらしい。お盆の上にあるご飯、味噌汁、鮭の塩焼きという和食3点セットをじいつと見つめ、やがて箸を手に取り、ががつと猛スピードで食べ始めた。その間に、ユーノも立ち上がり、改めて、束が取り掛かっていた発明品を見る。

それは、人型の装甲と、一本の大型剣。それなりに考古学を修めてきたユーノから見れば、全体的に白く詭えられている塗装はまるで白磁器のように美麗だ。何かしらの武器と言うよりは、それ自体が一個の芸術品のようにも思える。

なるほど最高級というだけはある。それに、まだ内装が剥き出しのフレームを見ても、調達を担当したはずのユーノですら記憶のない部品が取り付けられている。恐らく、前々から計画を立て、密かに組み上げていたのだろう。それが今回の事件で、完成を急ぐ必要に迫られたということか。

「ごちそうさまっ……あ、ユーノ君、見学時間ここまでね」

と、ここまで推測した所で、5分も経たずに食べ終わった束に視界を遮られた。

「秘密にしたいってこと？」

「ま、ね。特になのちゃんちーちゃんにはナイショだよつ。私とユーノ君だけのヒ・ミ・ツ★」

うっかり漏らした後の仕打ちを考えると、出来れば知りたくない秘

密である。

その一言を最後に再び作業に没頭し始めた束に、ユーノはもうひとつだけ質問を投げかけた。

「でさ、教授。ご入用のものって、まだあるかい？　まだあるんだよね？　この前は窓のない部屋で怖そうな黒スーツの人と取引したからね、もうなんでも来いつて感じだよ」

皮肉めいた口調ではあるが、ある意味自分から仕事を求めているようにも聞こえる。嫌々ながら働いてきた毎日でも、長く続けば助手としての根性が染み付いてしまうかもしれない。

「ん……あ、じゃあね。お昼ご飯を持ってきたら、その時私に転移魔法を掛けて。座標はその時言うから」

「転移魔法？　君自身が行くの？」

「私だってね、あんまり出不精じゃられないかなって思うんだ。それにこれ、ユーノ君には任せられないことだから」

その言葉を聞いたユーノは自分に任せられないほど大事なパーツなのだろうかと考えた。

だが、束が脳内で想起した転移座標は、地球上のものではない、全くの異次元に繋がるものであった――。

緑色の魔法陣。その真ん中から、半球体の光が広がり、縦へ伸びて一本の柱となる。そして、再び収縮した後、一つの人形を後に残して完全に消え去った。

「ふうん……まーこんなものかな？　小規模の結界で転移用の空間を確保して、私の周りの空間ごと転移、と。私の身体を一度分解するか、そんなんじゃないかねー。流石魔法」

束にとって、生涯初の転移魔法である。どのようなシステムになっているか、改めて身体で把握した事実を口先で反芻し、確認した。

彼女が転移したのは、広い広い廊下だ。丁度真後ろに門があれば、巨大な館の入り口だとも解釈できる。だが、振り返ったそこには高く厚い壁しか存在せず、ドアがあるのは廊下の向こう。まるで紐で縛った袋の先端みたいだ。

束意外には誰も居らず、しんと静まり返った通路。その静けさと、どこか空虚で質素ではあるが、例えば貴族の館を思い出させるくらい、それなりに華美な外装が、外部の者を近寄らせない威圧感を醸し出している。

だが篠ノ之束、慌てず騒がず。こつこつ、と陽気な靴音を立てて歩き出し、自分の四倍ほど大きく、二倍くらい重さの有りそうな木製の扉を、片手であっさり押して開いた。

「じゃーんじゃーん、束さんですよー！」

そこはまた、がらんどうの大広間である。

上や下へと通じる階段、広間全体を灯すシャンデリア。そのどれにも大分ホコリが被っており、掃除されなくなってから何ヶ月も経っているようだ。

この館に人が住んでいるとはとても思えない。だが、束は既に知っている。掃除の出来る人間が居なくなっただけだということ。

だから館の奥には、自分が会わなければいけない人が居る。

天才である束だからこそ、会って確かめたい人間が。

「……………」

ガシャリ、と金属の音。鎧の摺り合う音と、機械の駆動音が混じりあつた、耳障りな効果音が広間全体に反響し、束の耳にも入った。

ふと右上に目が向くと、そこには銀色の鈍い光沢を放ち、片手にハルバードを持った鎧騎士の姿。しかし、その大きさは人間と同一ではなく、何倍にも拡大したように大きい。だからそれが近づいていく度、束は段々と首の角度を上げなければならなかった。

「ねー、君い。この家の執事さん？」

自分よりはるかに巨大な鉄巨人へ、恐れること無くのんきな声で問いかける束。だが、巨人は応答せずに只々歩く。足が地面を踏む度に響く衝撃は、その重さと力強さを感じさせるように、束の全身へと響

いていた。

「ちよつと、この素敵なお館の主人さんに会いたいんだけど。え、招待状持つてない？ やだあ、ちゃんとここにありませんよお」

などとふぎけながら取り出した便箋は、折り目が曲がって不恰好で、蓋を止めるシールもちよつとずれている。不恰好で、いかにも子供が作った感満載だ。

束はそんな封筒をこれ見よがしに取り出し、中にある手紙を、オバサンのような嗄声を作つて、時たまクスクス声を交えて読み始めた。

「えー、『拝啓束様。新緑の候、束様にはますますご健勝のこととお慶び——』」

ブオン、と空気が切られる。束の目の前まで迫っていた鎧騎士が、ハルバードを真上に構え、一直線に振り下ろしたのだ。巨人が持つ常識はずれなサイズの斧は地面に当たり、大質量の鉄塊が当たった廊下の一部は砕け散った。もちろん地面と斧の中間点にいたウサミミ娘など、呆気無くぷちりと押しつぶされて肉塊へと変わっている。

そのはずだった。

『——申し上げます』つと」

斧を振り下ろし、持ち上げようとした巨人の頭の真横。鎧騎士の肩の上に、潰された筈の少女は悠然と座っていた。

もし、この鎧の中に人間が入っていたとすれば、当然慌てふためき、肩に居る断ち切った筈の少女を振り落としていたことだろう。だが、それは予想外の状況に何も動かず、まるで意識を失ったかのように停止している。

「あーあ、君い、館壊しちやつたねえ。いけないなあそういうの。このままだときつと、こわーい魔女に首をちよん切られちゃうよ?」

何も言わずに静止する鎧の肩で、束はケラケラ笑いながら、その首筋へと近寄つて。

「だから、私が先にちよん切つてあげよう」

十本の指が冷えた鋼鉄をなぞり、重金属の落下音。

鎧騎士から首なし鎧になった巨人は、この後片付けられるまで、永遠に動くことはなかった。その断面から見えるのは、無数の部品。機

械で作られ魔力によって動く巨人の名前を傀儡兵と言う。

束は自らが『分解した』首の結合部、その一つ一つを改めて見直し、それからヒョイツと飛び降りて、今襲ってきた魔法のロボットに対し評価を下した。

「んー、駄目だ、ダメダメ。まーた詰まらぬものをバラしてしまったよ。悪い子悪い子、この指悪い子！」

余りにつまらなさ過ぎて、意味のない戯言を呟いていた束の全身を、今度は光線が襲った。魔力砲だ。上の大扉から打ち込んだのは、先ほどの傀儡兵とはまたサイズと色の違う、二体の巨人。

だが、束は遙か上空に飛び上がっていた。砲撃は無効だと気づいた二体は、それぞれ蝙蝠のような翼を広げ、追撃に掛かった。相手は宙に浮いていて、飛行魔法もなく、後は只重力のままに落ちるだけ。翼を持ち、空中で自由に動ける二体に取っては格好の獲物だ。

籠手にある鋭い爪を剥き出しにして、衣服と柔らかい人肌と切り裂こうとする二体は、束を取り囲んで左右から同時に攻めかかり。

これまた、見事なまでに『解体』された。

今度は首だけではなく、全身が細かくネジ一本に至るまでバラバラに散らばって、屋敷の床に落ちてチャラチャラと、様々に小うるさい音を立てる。解体した当の本人はすたつと着地し、ぱんぱん、と両手を払った。

「センスが無い。もうサイテーだよ、非効率の極み。ふああ」

などと口々に罵りながら、開いた大扉に向かって進むのにもれつきとした理由がある。

最初の傀儡兵の首を『解体』した時、彼女はその感触、そして断面から、傀儡兵の構造そのものから設計思想まで、全てを見切っていた。簡単にいえば、魔力で駆動する室内防衛装置。基本的に主が命令しないと動かないが、極単純な人工知能も備え、共同で敵に当たるなどという原始的な戦術行動も取ることが出来る。

「でも、欠点のお陰でまるでダメ。とてもじゃないけど量産できないのに、どうしてこんなにあるんだろうね。採算度外視してロマンに走ったのかな？」

階段を登りながら束は喋り続ける。確かに、このロボットが世間に出回るには欠点が大きすぎた。

まず、魔力やエネルギーを非常に多く消費する。だから、動かすには最低でも、次元世界の中でもかなりの高レベルに分類されるAAランク以上の魔導師、もしくはそれに値する出力を発せられる動力炉が必要になり、大勢を動かすには更に高ランクの魔導師を専門で配属する必要があった。

そして、何よりその大きさ。小型サイズは比較的融通が利くものの、今利用されているような大型は、広い場所でないとその能力を十分に発揮できない。かと言って、屋外で使うにも難があった。エネルギー供給の可能な範囲が、著しく狭くなってしまったのだ。

「結局、こおんなに広いお屋敷で、高ランク魔導師と動力炉の合わせ技じゃないとまともな運用は不可能。他の所じゃ絶対お役御免だ。うん、欠陥兵器だね」

理論的な面からバツサリ切り捨てた束は、今度は個人的な美意識から叩き始めた。我慢ならない、と言うよりは手慰みにからかうという感じでボロクソにけなしていく。

「だいたいこいつら、外見にこだわり過ぎて中身が伴ってないよ。単純で単調。でも剛健ってわけじゃなくて、殺した相手が肩に乗ったぐらいですぐにエラーを起こしちゃう。大勢で攻めかかることでデメリットを補えるってのは分かるんだけど、仕様上、ほぼ不可能だからね」

そこまで語った所で、束は上の階層まで上り詰め、恐らく館の主まで通じているであろう廊下の扉を開き、一歩進み出た。

「……へえ」

今度束を迎えたのは、紫色の拘束魔法。

——この時丁度、外では高町なのはが青い縄に縛られている。奇しくも、友と互いに誓った二人、全く同時に行動の自由を抑えられていた。そのまま、バインドに引っ張られて宙に浮き、連れられていく先には、紫色の魔法陣があった。

「面白い手を使うね。流星は大魔導師さま」

その中心へと引き寄せられていった束の見たものは、傀儡兵の群れ。そのどれもが、手持ちの武器の切っ先や砲身を、束ただ一人に向けている。打てば何個かは相打ちになってしまおうに、しかしその犠牲を甘受してまで、この少女を抹消したいのだ。

ここは、元々誰かが入ってこれるような場所ではなかったから。

しかし、誰も侵入できないように次元空間を彷徨い、小さな手駒のみを使って、陰に計画を進めていたというのに。侵入者が入ってきた。

今、束は絶体絶命の状況へ追いやられていたが、本当に追い詰められているのは、むしろこのもてなしを企画した、館の主であるのかも知れない。

「ま、いくら罫を張っても、いくら策を弄しても」

パキン、と気味の悪い音を立てて、バインドが割れる。解かれるのではなく、ひび割れ、そして砕け散る。バインドを解く方法は、何も対抗する術式だけではない。力。そう、バインドの耐久力を上回る圧倒的な力があればそれは物理的に崩壊してしまう。

ただし、それは一般的な常識で言えば、机上の空論というべきものだ。その論旨を、束は軽々と達成させてしまった。

傀儡兵たちの銃口にエネルギーが貯まり、剣や斧が振り上げられ、槍が突き立てられる。未だそのど真ん中に居る筈の束は、今度もまた音もなく姿を消して。

「この束さんを倒すには程遠いんだよねえ」

自分に迫ってくる武器、狙うライフル、キャノン、その全て。

バラバラに『分解』しつくした。

たちまち無力化した傀儡兵を尻目に、束は軽々と魔法陣から脱出。

ふう、と溜息を吐きながら、その思考は先程起こった舞踏劇の感想戦に移った。

「いやまあ、でもちよつとだけ、危なかったかな？」

大廊下を埋め尽くす程の傀儡兵。その武装全ての解体に、流石の束もまるっと15秒は掛けていた。しかし、粗末なAIの予想を遥かに上回る事象は、その機能を全て停止させ、だからこそ束は15秒で終

わらせることが出来たのだ。これで各個に迎撃をされていたら、巨体の八艘飛びだけではなく、銃弾避けまでしななければならない。

「そしたら、持って1分位は足止めできたのね。いやあ、勝負はああ無情。残念無念また来てねん」

1分。その時間さえあれば、大魔導師である館の主は余裕を持って大魔法を放てただろう。事実、相手もそれを狙って、傀儡兵の殆どを囮にする気でいた。

しかし、それは束の脱出と傀儡兵の無力化という、考えられる中でも最悪の方向へと裏切られてしまったのだ。

もはや何者にも縛られない束は、館の深奥、主人の執務室へと通じる最後の扉をちよつとだけ開き、大声で呼びかけた。

「もしもし、ここまで来たんだから、いい加減顔くらい見せたらどうかな？ 館の主さん？ ううん、プレシア・テスタロッサ」

その言葉が通じたのかは分からないが。

ドアが全開に開かれた時、その先の台座には、紫髪で目元に浅く皺の刻まれている険しい顔の女性が座っていた。

「歓迎、お気に召していないようね」

「当たり前だよ。私を毘にはめるならもうちよい高等な兵器を使って欲しいなあ。もしそうならバラすのも楽しくなるし、気合が入るつてもんだよ」

「それはごめんなさいね」

全く心の籠もらぬ謝罪をした彼女こそ、プレシア・テスタロッサ。かつては大魔導師として名声を手に入れたこともある、フェイト・テスタロッサと『同じ性を持つ』女性である。

そして、束はこの次元空間移動式住居「時の庭園」へ、ただ一人、プレシアと会って話をするためだけに乗り込んできたのだった。

「でもまああいう兵器の方が、仕入れ値も安いし、足がつかないのよ。こちらでも騙し騙し使っているのだから、余り文句を言われても困るわね」

「苦労してるんだなあ。いや、分かるよ分かる。あんなもの、こんな特異な環境じゃないとランクはテックス以下だもん」

しかしながら、二度、壮絶な戦闘をくぐり抜けてきた割には、二人の会話は張り詰めているものの何処か馴れ馴れしく、互いに対し手加減がない。

プレシアは気兼ねなく自分の窮状を話、束はそれにうんうんと頷きっぱなしだ。

「で？ 貴方のような『天才』が……こんな辺鄙な場所へ、何をしに来たのかしら」

プレシアは束を天才と呼ぶ。それは憧憬や尊重から来るものではなく、勿論無く、しかし侮蔑や皮肉すらも含まれていない。

彼女は事実として、束を天才と呼んで、認めていた。

または、全く同格の相手として、天才という言葉を使っていた。

今までの行動から、この庭園を見つけて直接乗り込んできたこととそして、直接会った彼女と自分の、雰囲気、佇まいから感じる、どうしようもないほどの同類さに。

真理を、大切なもの、自分のほしいものを求め、その為には何もかも犠牲にして、それに何ら罪悪感を抱かない。プレシアはそういう人種だ。

だから、目の前で笑う自分より遥かに年下の少女が、自分と同じくらい傲慢で、それでいて純粹な欲求を持っていることに気づけた。

対する束も、そのことに対して否定をせず、むしろそう扱われることを光栄だと思っっているような素振りを見せる。

そして、真っ直ぐその瞳を見つめながら、返答した。

「それはね……あの良く出来たクローンを作る『天才』が、一体どんな顔をしているのか、確かめたかったからだよ」

「ッ！……」

束が初めて他人を『天才』と呼んだ。その言葉に、プレシアはまる

で謎かけを掛けられたような顔をして、数秒考え、答えを出した。「なるほど。人形の記憶を読んだのね。確かに、あの転写は不完全だったわ」

「あつたりい、流石は『天才』」

ふふ、ふふふ。

二人、唇だけを吊り上げて笑う。

フェイトの記憶を分析した時に東が感じたのは、その奇妙な違和感。三歳から五歳までの思い出が、まるで取ってつけたような非現実さを孕んでいるということだ。

それ以降の思い出はリアルだ。リニスという使い魔との生活。アルフとの出会い。リニスの消滅から、ジュエルシードの収集まで。どれも、フェイトが現実で体験したことであった。

だが、その根底にあるプレシアとの親子関係。そこを徹底的に突き詰めてみると、それだけが偽りの、アリシア・テスタロッサという少女からの借り物だったのである。

それを突き止めたプレシアに、東は何かを認めるような笑みを送った。それを見て、プレシアも微笑する。

「科学者という人種。それが二人の共通点だ。年も、性格も違う二人は、その一点においてのみ、完璧に意気投合していた。」

「貴方こそ。人の記憶を読み取るなんて、まるきりレアスキルよ」

「貴方だって。記憶はともかく、こうも成熟したクローン技術は、私もまだ発明出来ていなかった。凄いよ。同じ一人の科学者として、純粹に尊敬させてもらおうね！」

東は褒める。

彼女が今まで生きてきて、数少ない友人にしかやって来なかった行為を、プレシアという初対面の女性に対して平然と行う。

それだけ、彼女にとってのプレシア・テスタロッサは特別ということだ。

「光栄ね。で、貴方。まさかこの私の顔だけ見て、帰るのではないのでしょうか？」

「うん、でもね、ホントは色々お話とかもしたいんだけど、一応こつち

も新開発の真つ最中なんだ。手短に行かせてもらおうよ！」

「なんなりと」

プレシアは余裕を持って答えを待つ。同じ科学者として、彼女は自分の願望を分かってくれている。これから束が自分に対してすること全てが、少なくとも、自分の損にならないだろうと心から確信していた。

「貴方が何をしたいのか知りたいな。ジュエルシードを手に入れて、それから一体何をするつもりなのか。ただ願いを叶えるなんて、つまらない使い方はしないでしょ？ 大丈夫、守秘義務は守るよ。ユーノ君にも、管理局にも言わないから……ね、お話、聞かせて？」

そして十数分後、時の庭園のメモリーに残された音声の一部がこれだ。

『ジュエルシードに願うわけではない。その熱量のみを利用して、私は行くわ、禁断の地へ。アルハザードへ』

『アルハザード!? なにそれ、すごいすごい！ 面白そう！ 私も行きたいな！ こんな世界から抜けだして、なのちゃんと、ちーちゃんと一緒に！』

『共に行きましょう。こんなはずじゃなかった世界に、別れを告げて』

境界線を飛び越して（I）

時空管理局所属のL級巡航艦船「アースラ」。その艦長室で、なのはとユーノ、そして千冬はこの事件に関する管理局側の代表、リンディ・ハラオウンとクロノ・ハラオウンに対面していた。

「そういうことで、今後この件——ロストロギア『ジュエルシード』の回収については時空管理局が、そして我々『アースラ』スタッフが担当します」

「君たちには、今後この事は忘れて、元の世界でいつも通りに過ごして欲しい」

誠実な口調で、二人はこの件の重大さとロストロギアの危険性を説明した。

そして、ことはたった三人の少年少女だけで解決できるものではないし、だから、危険なことは専門家である自分たちに任せて、民間人には安全に暮らして欲しい。それが二人の、ある種突き放すような発現の真意だった。

「でもっ—」

当然ながら、反発は来た。先に口を切ったのは当然、この件に対して並ならぬ思いと拘りを持っているのはだ。正座しながら、身を二人へと近づけて精一杯訴える。

「事は次元干渉に影響する。軽犯罪ならとにかく、民間人に介入してもらおうレベルを飛び越えてる。それに、君も今まで関わったのなら分かるだろう。暴走したジュエルシードの危険性を」

「っ……それは」

言葉に詰まって、俯いた。今までずっと最前線でジュエルシードに関わってきたのだから、その危険性も十分に承知している。

例えば、街全体を覆い尽くす大樹。もし砲撃という手段がなければ、何時間も居座る木に街は大混乱していたことだろう。そして、フェイトとジュエルシードを争った何度目かの戦いで、互いがジュエルシードに干渉しあって始まった暴走。どうにか停めることは出来たものの、あの魔力の奔流を生身生肌で感じたのはにとって、クロ

ノのいうことは痛いほど理解できてしまった。

「でも、でもっ！ 私、魔導師です。そちらのお役に立てると思うんですけど……」

「その理屈は分かるわ。でも、確かに貴方は魔力で言う中々のものだけれど、訓練が足りていません。フェイト・テストロッサ……でしたっけ。彼女と、そして恐らくはその裏にいる敵。我々「アースラ」のみで対応可能だと、判断しています」

リンデイがそうまで言い切るのには、確固とした理由があった。

フェイト・テストロッサ。恐らくはなのはより高度な訓練を受けている彼女も、時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンの実力には及ばない。十回戦って、一回チャンスがあるかどうかだろう。

そして、テストロッサという家名から、アースラのデータベースが導き出した、プレシア・テストロッサという女性も。例えオーバーSランクの大魔導師とはいえ、個人で管理局の巡航艦船の人員と装備に對抗するのは、不可能と言わざるをえない。

「でもっ、それでも……！」

「そうだ！ ここまで関わってきて、今更やめろと言われてはいそうですかとは言えない！」

なのはを援護するように言い張る千冬。だが、彼女はある意味なのは以上に、事態に介入する必要性を欠いていた。

「だが、君は魔法を持っていないだろう。確かに接近戦の実力は相当なものなんだろうが……これからの戦いを考えると、魔法無しでは必ず限界が来る」

「っ……」

クロノの言葉は冷徹だが、それでも真実だった。使い魔相手に互角と言っても、これからはそれよりもっと強い存在が居るかもしれない。

千冬も、頭の中ではとっくに理解していた。自分は無理をしているだけで、それを続ければ、必ず何処かで綻びが生まれる。自分の意地が原因で、取り返しの付かない事になるかもしれない。

しかし、心の中で、まだ諦めたくないと呼ぶ。どんな形でも、戦う

なのはの背中を守りたいと願い、しかしそう言えない悔しさに、歯を食いしばった。

余り正直過ぎるクロノの言い分を、リンデイは宥めるように言った。

「まあ、三人共色々思うこともあるでしょう。まだ時間はあるから、ゆっくり話し合ってから、結論を聞かせて欲しいわ」

リンデイとしては、なのはやユーノのような魔導師が、危険だと覚悟してあえて協力を申し出るなら、それを断るつもりは無い。千冬だって現地の地理や環境には詳しいのだから、協力してもらおう利点は十分にある。敢えてクロノの言葉に乗って厳しいことを言ったのは、彼女たちの思いの程を確かめるためだ。

最も、クロノの生真面目で白黒はつきりさせる性格の悪い面が出てしまい、全体として考えていたより若干きつい言い方になってしまったが。

SFチックな艦船内にある、和のテイストをごちゃ混ぜにした風変わりな茶室で、問われた二人は暫く互いを見つめ、考え込んでいたが。

「……ユーノ君？」

「……おいユーノ。お前はどうかんだ」

同じく正座をして腕を組みながらも、心ここにあらずといった表情で、小さいデバイスのような機械を掴みながら渋い顔をして唸っていたユーノに気づき、その無関心さに苛立つように声をかけた。

「え、えっ!? あー、いや、その……」

「おいおい、今の話、真面目に聞いていなかったのか、君は」

「全く、弛んでいる」

千冬とクロノ、声を揃えて責める。先程は突っかかっていた二人だが、どうも性格の一部分、真面目で自分にも他人にも厳しいという所だけは、似たもの同士のようなだった。

だが、ユーノもユーノで、今の話に構っていられる暇が無いほど忙しかった。いや、今の話などどうでも良くなってしまおうような事態に陥っていたのだ。

「うええっ!? それでもいい!? とうか都合がいいの!? で、でも

さ……」

愕然として立ち上がった後、意味ありげに、チラチラとリンディ、クロノの方を見て、それから助けを求めるようになるのは、それから千冬の方を向いた。

なのははきよとんとしているままだが、千冬はいち早く気づく。これは「あれ」絡みだ。何だかんだでこの歳にしては冷静な方のユーノが冷や汗をかくほど慌てているのだから。

「……おい、ユーノ、まさか……アイツか？」

自らも若干焦り気味になって問う千冬に、首をかくかくつ、と短く素早く縦に振ったユーノ。

脇から見ているクロノには訳の分からぬ光景で、怪訝な顔をした所で、気を回したユーノが焦燥した顔のまま説明しだした。

「えーと、実はもう一人、僕らには仲間がいます……」

「仲間……と、いうと？」

「え、えと、こういうのも作ってて、とにかく、凄い技術者なんです」
そう言つてクロノに渡したのは、ジュエルレーダー。その機能も同時に解説する。

すると管理局側の二人共、手元にある懐中時計大の精密機械をしげしげと眺め、魔法のない世界で良くも作れたものだ、と関心した顔をしていたのでそのまま一気に畳み掛けることにした。

「そう！ 魔法を知ってからとんでもないスピードでこういう便利なガジェットを作り続けて……性格には多少、あー、いや、言っちゃおう。かなり、問題があるんですけど……」

ユーノが口を濁しながら必死に束の印象を良くしようとしている理由は、要らぬ先入観を持った二人が色々問い詰めて暴走させるのを防ぐのもさることながら、助手としてそれくらいはやってあげないといけないんじゃないか、という使命感でもあった。

「で、その協力者さんがどうした？」

「あ、いえ！ ちょっと遠くに居たんですけど、僕の方に送還させて欲しいってことです。あの、僕が管理局の船にいて言っても、どうせ面会するんだからそっちの方が都合いいって聞かなくて……いい

ですか、提督？」

聞き返したクロノを無視して、直接訴えられたリンディは、ほんの少し考え込んだだけで結論を出してしまった。

「ええ、分かりました。転送魔法の使用を認めます」

「あ、ありがとうございますっ！」

ユーノは相当急かされていたようで、言われた途端に術式を組み始めてあつという間に完成させる。現役の管理局執務官と提督二人が、思わず舌を巻くほどの速度だった。

和室の一角に小さめの魔法陣が現れ、光の柱が伸びて——天才は、初めて、次元の海を航行する船へと足を踏み下ろした。

彼女が目をぱちくりとつむっている間に、ユーノは口を開こうとする。あの子のことだ、このままにしておけば、出会い頭にとんでもない爆弾を放つに違いない。そうしたら向こうの心象を著しく悪くするし、もしかしたらちよつとは残されている共同戦線の可能性すら潰えてしまう。

しかし。

「え、ええと、この人！ この人がっ」

「どうもー、篠ノ之束です。よろしくお願ひします☆」

出始めに言葉を遮られたユーノと、それから脇で臨戦態勢だった千冬は目を疑った。

篠ノ之束が、まともに挨拶をしている。

「束さん？　なのはさんから聞いたけど、同級生なんですってね」

「はい！　なのちゃんとは大の仲良しで、今回の事件にもその縁で関わったんです！」

「そう。千冬さんもそうだけど、友達思いなのね」

しかも、まともに会話をキャッチボールしている。人当たりの良さそうな笑顔で。

「見たところ地球の民間人のようだが……この探知機械、どうやって作ったんだ？」

「ああ、それですか？ 魔力というのも不思議パワーじゃなくて、一種のエネルギーじゃないですか。ですから、その発生パターンと出力を分析すれば、魔導技術無しでもそれを探知することが出来るんです」

そして、親切。見ず知らずの、しかも男性に笑顔を向けて、懇切丁寧に解説している。

「なるほど。流石、ユーノさんが凄い、というだけの事はあるわね。ウチで雇っちゃいたいくらい」

「なっ、母さんっ」

「やあですよー！そんな冗談♪ 私なんてちよつと機械いじりが上手いだけの、ごくごく普通の女の子ですってば♪」

極めつけに、謙遜までこなした。照れた。頭を搔いて苦笑した。

一体何が起こったのか。

二人共、必死に彼女の凶行を止めようとしていた。特に千冬などは、束が口を開く前に御神流の打撃法「徹」を使って、強制的に減らず口を叩けないようにしようとして考えていたのに。

「……ユーノ」

「なんだ千冬」

「目の前にいるの。あれはなんだ？」

「何って、篠ノ之束——」

がしっ、とユーノの肩が掴まれる。千冬の険しいながら整った顔が間近まで来ると、苦勞していようと男の子であるユーノは少々ドキドキするが、目の前で髪の毛が揺れるほど首をブンブン横に振られると、その必死さに引いてしまう。

「あれが束であるものか」

断言した。言い切った。真顔で。

むしろそうあって欲しくないという願望すら込められた、かすれた声がユーノの耳朵へと響く。

「いや、僕もそう思うよ？ 思いたいよ？ でもさ、どういう理屈か知らないけど、次元空間内まで通じる通信を放ってこられるのはどう考えたって」

「違う。絶対に違う！ 変装した偽物か、それとも、良く出来たクロールかもしれない。どっちみち、アレを完璧に真似することなど不可能だったようだがな！」

はっはっは、と笑いながら、千冬はどこから取り出したのか、木の小太刀二本を手に持ち今度こそ技を繰り出そうとする。管理局の船のど真ん中で殺傷沙汰など起こしたくないユーノは、チェーンバインドまで使って千冬を捕縛。背中に回りこんで暴れまわる彼女を必死に押さえ込んだ。

「わああっ、落ち着いて千冬っ、殿中、殿中だから！」

「問答無用だっ！ 離せ！」

すっかり現実から逃避して、今度こそ不埒な偽物へ一撃を叩き込もうと、腰を入れて必殺の構えを取った千冬。それを必死に抑えようとしながら、ふと気になったのはなのはこのことだ。

三年來の親友である彼女は、唐突過ぎる束の変化に同反応したのか。

「ううん、束ちゃんは天才ですよ！ 私もこのレーダーには随分助けられたし、ユーノ君の怪我を治したのも束ちゃんなんです」

「あははは、そんなに言われると束さん照れちゃう☆」

何も変わらない。

いつもと明らかに違う社交的で、何より全く常識的な雰囲気を出す友人に眉一つ動かさず、それが今まで当然であったかのように和気あいあいと会話に加わった。

ユーノにとっては、この対応が一番意外な事実だ。友達を大事にする人間なら、それが急に変わったとすれば驚きの反応を一つくらい返すはずなのに。

高町なのは、疑うという行為を知らないのだろうか。それとも、

何もかも全て見切っていて、只適応力が高すぎるだけなのか。

どつちにしろ、暴れる女の子とそれを抑える男の子が居なくなつた会話は、始終穏やかな雰囲気が進んでいった。

「それですね。管理局の皆さんがこの件を引き受けてくれるというのは此方としても有難いんですよ。ですけど、私達も一度は当事者となつた身ですし、それに何より、この街にあの危険な宝石が後6つも残つてると思えば、夜も眠れない日々が続くんです」

ほんの数日前まで、「ジュエルシードが151個あればもつと面白いよね！」なんてのたまつていた人間の言う台詞ではない。だが、初対面での印象の良さと、いかにももつともらしい言い分に、リンディもクロノもすっかり信じこまされてしまった。

「なるほど。只単にジュエルシードを集めたいのではなくて、この街の平和のため、もつと言えば、自衛のために集めたい、と言うのね?」
「はい。この街にはなのちゃんもちーちゃんも居ますし。あなた方を信頼出来ない訳ではなくて、私達も自分で出来る事をしたい。街の平和に協力したいんです!」

次元市民の平和を守るために活動している、管理局員の二人にとつて、その言葉は何か共感めいた感情を覚えさせたらしい。ちらり、と互いに視線を向けあい、しばし無言のまま静止する。表には出せない言葉を念話として伝え合つていた。恐らく作戦内容や命令系統といった、『まだ』無関係の子供には余り聞かせたくないシビアな話なのだろう。

その間にも、束は言葉を続け、二人の心をさらに揺らがす。説得としては非常に効果的だ。

「なのちゃんの魔力は、皆さんにとつて多少なりとも有用なはず。ちーちゃんも海鳴の地理には詳しいですし、私も……ええと、機械関連とかで、皆さんのお役に立てるかと思えます。ですから……」

他の二人のことを持ち上げ、自分は一步引き下がって、それでもなんとかして状況に加わりたいと請い願う。それは二人からするとまるで、魔力も腕っ節も無いけれど、友達のために必死でついでいこうとする、健気な少女そのものに見える。

「ここまで言われて、まだ断る理由は考えられない。」

「そうね、そこまで言うのなら……協力してもらいましょうか」

リンデイの決断に、クロノも渋々頷いたがまだ納得出来ないような顔をしている。その強引さの理由も分からないではない。けれど、ここで善意を無視するなら、それこそ悪役ではないか。局員として、時にはシビアな決断が求められるにしても、必要以上に厳しくするのは逆効果だ。

「本当ですか!? うわっ、やった、やったねなのちゃん!」

認められたのがとても嬉しいという風に、隣に居たなのはへ抱きつき、くつつく束。なのはも嬉しいのか抱き返し、自分や千冬だけだと一旦断られる所を、弁舌でもってひっくり返してくれたことに強く感謝した。

「束ちゃんのおかげだよ! 私達がうまく言えなかったことを、言ってくれたみたいで、かつこ良かった!」

「か、かつこいいい! ……えへ、すっごく嬉しい♪」

珍しい褒め言葉を使われて、更になのはへ密着する姿。一見するとそれはいつもの束と同じようだが、しかしどこかマイルドである。

普通なら、抱かれた腕の中で悶絶するように震えたあげく、もしかしたら人目を気にせずに押し倒したりもするかもしれない。

「ただし! こちらの命令には従うこと。それと、有事の時はちゃんとこのアースラへ集合すること。いいか?」

「はーい! 束ちゃんも、いいよね」

「うん! 分かりました!」

クロノの若干きつい念押しにも、仲良く頷く。そして、いつの間にか平常に戻っていながら呆然として事を見守っている千冬と、疑り深い目線を向けるユーノへ揃って向き合った。

「で、ユーノ君も、ちーちゃんも、それでいいよね? 私となのちゃん

の二人で勝手に決めちゃったけど」

「えっ、あ、いや……構わないが……」

千冬の躊躇いがちな同意に、ユーノも頷く。二人共、それでいいのか篠ノ之束、と聞き返すことは出来なかった。それほどまでに、束の

変節は見事なものだ。まるで生まれた頃から善良な一科学者であったかのように振る舞うその姿。それはある意味、余りにも異常だったので――

その裏に、何かがあるのではないかと思えてしまう。

管理局に対して表側は善良を装うことで、何かとんでもない秘密を、本性とともに隠しているのではないか。

そう考えてしまい、薄気味悪くなつて何も言えなかつたのである。

「じゃあなのちゃん、もう夜だし、帰ってご飯を食べよう！　子供は食べないと大きくなれないもんね！」

「そうだね、束ちゃん。私もそろそろ帰らないとだし」

「うんうん！　それじゃあこれからも、ジュエルシード探し頑張ろう！　えいえいおー！」

「おー！　ほら、千冬ちゃんも、ユーノ君も」

「お、おー……」

なのはと束、二人元気に両手を上げながら、転送ポートまでエスコートしようとするクロノについていく。千冬もユーノは、その非常に常識的でしかしある意味異常な光景についていきながら、心の奥底に何とも言えない嫌な予感を感じていた。

境界線を飛び越して (II)

アースラの転送ポートで送り戻されたのは海辺の公園。優しい潮風が絶えず吹き付ける憩いの場は、すっかり更けた夜の闇の中でも、幾つもの電灯に明るく照らされていた。

「じゃあ束ちゃん、またね!」

「うん、なのちゃんもまた明日!」

過剰なほどに元気よく、ぶんぶん手を振り別れる二人。その隣にはそれぞれ、千冬とユーノがくつついている。なののがユーノを預かる件は、ユーノが人間になったことでいつの間にか立ち消えになってしまったらしい。任意でフェレットに戻れるとしても、同じ年の男の子と一緒に自室で二人きりというのは、色気づく気配のないのにはとっても中々抵抗のある状況なのだろうか。

束に付き添うように去っていくユーノへ、千冬が無言のサインを送る。

(ユーノ。束があんなふうになった理由、必ず聞いてこいよ)

必死な目線を、ユーノはこくこくと頷くことで安心させた。いつも束に対しては情け無用な千冬も、流石になのはが居る所で変節を面と向かって指摘する程の度胸はなかったのだ。それに、束がどんなにボロを出したとしても、なののは方で勝手にフォロオされていつてしまふのだ。無論、天才である束は己の弁護にも最善を尽くすだろう。しかし、1対2より1対1の方が有利なのは明らかだ。

だからユーノは、束が篠ノ之神社のすぐ側まで来た時に、それとなく切り込んでみることにした。

「ねえ、教授」

「なんだいユーノ君。ご飯食べたくないのかい?」

きよとん、とした顔で見返されると、やっぱり変だなと感じられる。なんというか、雰囲気。まるでここではない何処かへ視線が向いていて、夢中になっているようなビジョンが浮かぶ。

「なんで、管理局の人にいい格好をしたの?」

「なんでって」

今更何を聞いているのかな？　なんて窘めるような表情も、今日は少し、残酷さに欠けている。どうでもいいことに、どうでも良く答えたいに。

しかし一先ず、理屈にあった答えが帰ってきた。

「そりゃあ、ソッチの方が得だからだよ。向こうは未知の技術の結晶だよ？　だから、ちよつといい格好すればそれもらくらく研究できるし、そうしたら追い越すことも出来る。あははと笑うのはその時だけでいい。後はこの天才の技術に恐れ戦かせてやるのさ。簡単な事だよユノソン君☆」

その言い分を聞くと、あの変節はやはり冷酷な計算に基づく擬態だとも納得できる。

彼女を真つ先に疑った千冬も、そんな見方をしていた。アースラ艦内で密かに話し合った所、

『アレは素直なフリをしているだけだ。全力でな。内心は反吐の出るような気持ちだろう』

と熱心に言っていたりもした。

だが。たったそれだけの、技術を学ぶというそれだけの理由で、篠ノ之束程のプライドの塊がそれを打ち壊すような真似を果たしてしてくるのだろうか。

「教授……本当に、それだけなのかい？　もつと他に、管理局を『騙さなきゃいけない』重大な理由があるんじゃないの？」

それは、一ヶ月間ひたすら弟子としてこき使われ、同時に間近で篠ノ之束という人物を目の当たりにしたユーノの、直感であった。

彼女はひたすらに傲岸不遜だ。それは同時に、どんな状況でも誰に対しても同じように接する、ということでもある。どんな勢力にも与さず、ただ篠ノ之束として自分の思うがままに動く。それが彼女のやり方だった。だが、今日は何かがおかしい。いくら腹芸を使うにしても、それだけの理由で、束本人の高すぎるプライドが、果たしてあの急激な変節に耐えうるものなのだろうか。

「らしくないよ、教授」

いつか言って、大いに束の不興を買った台詞を、敢えて今一度口に

出す。それはユーノなりの挑発であった。

天才の高慢ちきなプライドを利用して、怒らせることで自分のような凡人と同じフィールドへと落っこちてもらう。そう表現すると、少々卑屈すぎになるだろうか？

思った通りにスキップするような歩みを止めて此方を振り返ること無く静止する動きが、いつもとは違い予測から一片足りとも外れていなかったのも、そんなことを考える余裕まで出来た。

これまで、彼女の無茶を受け止めるだけで一杯一杯だったのに。

「ユーノ君、私言ったよね。らしくないなんて、そんな分かったような台詞吐かないでって」

その言葉すら何処か上滑りするようで、空虚だ。問いを適当に投げやるような答えにも聞こえてしまう。

確か自分と束は、教授と助手というごっこ遊びのような関係で、いつ無くなるか分からないような間柄だ。でもそれはそれなりに、自分の問に対しては一切手抜きせずに答えてくれていたというのに。今はそうでない。束は自分から逃げている。

そう思うと、ユーノは何だか怒ってしまふ。いつも理不尽さや強引さを感じるそれとは違う、もっと深い、心の奥底から来る怒りを。

「あの時とは状況が違うよ。僕もあれからまた随分教授に使われて、多少なりとも教授がどういうことを考えて行動しているのかは分かっているつもり、いや、分かってはいるはずさ」

「そんなこと無いよ？ どうあがいたって、私は君とは分かり合うつもりは無いもの。なのちゃんとかーちゃんと、君は違うよ？ 友達でも何でもない、一時契約の助手なんだから」

無碍無く突き放されてもユーノは挫けない。それどころか、どうせ何を言っても取り付く島もないのだから自分で勝手に話してしまおうと決意し、去りゆくこうとする束の背中に向かって叫ぶように声を張った。

「教授があの時、僕に伝えた転移座標。あれ、もしかしてこの地球じゃなくて、別の次元に繋がるものだったりしないかい？」

ウサミミの揺れは、三歩進んだだけで止まった。相も変わらず後ろ

を向いたその表情は分からないけれど、その仕草で今の指摘が凶星だということとは分かる。

「そうなんだね？　僕もあの後、なのはたちとジュエルシードを確保しようとしたり、管理局に事情を聞かされたりで、すっかり忘れていたけどさ。教授が変なことをし始めたから、もしかしたら転送した場所に原因があるんじゃないかと思って」

お使いを命じられるようになってから今まで、使ってきた次元転移座標は全て頭の中に入っている。多次元理論を元にして算出されるそれは、0からfの十六進数のみで構成されると言ってもなおおまじい桁数だ。

しかし、一度束が異常な行動を取り始めた直後、ユーノは自分の持つマルチタスクのリソース、その大半を割いて今までの転移座標全てを分析し始めていた。今日の昼まで通常運行だった束が、自分が転送した先でおかしくなったとしか思えなかったからだ。

今までの座標をA、今回の座標をBと分類して、どのような差異が存在するか。アースラから出た後もずっと思考し続けていたのだが、ここに至って漸く答えが出た。

今回知らされた座標は、地球上のどこでもない。明らかに地球外の、次元空間に浮遊する構造物への転移である。

「それに、もう一つ当てようか。教授はあの時、フェイトの本拠地へと転移した。どうやってかは知らないし、僕が潜入していた時に聞いた覚えもないけど、教授は何かをして、フェイトから転移座標を聞き出した。ううん、教授のことだし、頭の中を覗いたりするくらいはやっただかもしれない」

まだ肌寒い春の夜に、一陣の風が吹き、赤紫色の長い髪が揺れた。「別にそれはいいんだ。教授のことだし、僕は助手だから、止めようとは思ってない。僕が怖いのは——教授が、大切な友達の思いを裏切ろうとしているんじゃないかってことだ」

ユーノはこの3週間、束がなのはにくつついたり、千冬に追い掛け回されていたりする光景を、すぐ側について飽きるほどに見てきた。だから、その時の束の顔が、研究に一心不乱に打ち込む時と同じくらい、

もしかするとそれよりもずっと楽しげに笑っていることにも気づいていた。

これがもしなかったら。彼女の楽しみが穴蔵に引き籠もつての研究のみであるとすれば、彼女の精神はどれだけ鬱屈に歪んでいたことだろう。

ひよつとすると、自分が来る前にこの世界くらい、彼女の癩癩で真つ二つに割れて無くなっていたかもしれない。馬鹿げた妄想だが、彼女が全力を注ぎ込んだら何が起こるのか考えてみれば、そんな空恐ろしい思考も出来てしまう。

「僕が言うのも何だけどき……友達って、大切にされた方がいいよ。自分のことを考えてくれてる友達を、裏切っちゃいけない。教授としては、やっぱりなのはや千冬のことを深く考えて、今みたいな事をするのかもしれないけど——それで二人の気持ち踏みにじったら、それってやっぱり、良くないよ」

堰を切ったように溢れる言葉が、自分でも不思議なくらいスムーズに発せられる。

どうしてだろう。どうして僕はこんなはた迷惑な女の子に、ここまでお節介を焼いているんだ。

迷惑なだけのはずなのに。

付き纏われて、こき使われて、飽きたらポイツと捨てられるだけの。

なぜだか分からないが、ユーノはまだ、ほんの少しだけ、束の助手でいたかった。

「……」

沈黙が場を支配する。

馬の耳に念仏、暖簾に腕押し。彼女の性格を考えれば、ユーノが今言っているような言葉は正しくそれに当てはまる。モラルを完全に無視する人間へ、モラルで以って説教するのだから。

だが。

届かないはずの言葉は、どうしてか耳に入り鼓膜に響き、只の波長としてではなく、意味のある単語へと変換され、解釈されたようだった。

た。

「裏切ってないよ」

漸く振り向いた束の顔は、笑っていた。

いつものどこか紙で貼り付けたように薄っぺらい笑いとも、小馬鹿にするような皮肉っぽい笑みとも違う。

本当に、年老いた教授が出来ない弟子を窘めるような、困ったように優しい微笑。

「なのちゃんも、ちーちゃんも。裏切るつもりなんかはないよ」

「でもっ！ だったらどうして、敵の本拠地なんか——」

口元へ、人差し指が伸びて近づく。慌てて口を閉じたら、その真ん中に、指先がぴとつと触れた。

しーっ、とジェスチャーされているようだった。

「私はね。なのちゃんが居ない世界なんて、ちーちゃんが居ない世界なんてつまらないんだよ。だから、二人と一緒にいたい。それから、二人に笑顔で居てもらいたい。二人のために、私はどんなことでもやるんだ」

どんなことでも。

稀代の天才が言うその言葉は、ユーノが立てたあらゆる理論をハンマーのように打ち砕く。

「……じゃあ、あれも、二人のために？ 二人を、管理局に受け入れてもらうために？」

「うん。むしろ、それ以外の理由があるのかな？」

正直に肯定される。だが、正直に言えば、ユーノは未だこの謎めいた少女のことを信用出来ない。不可解な態度、不可解な行動は、さつきから何ら変わっていないのだから。

だが、少なくとも友達を貶めようとはしていない。それだけは、はつきりと理解できた。だから、ユーノにとってこの話は終わりになる。

道を踏み外そうとしていないのが分かったのだ。手伝う以外に何も出来ない助手としては、一先ず、それで満足するしか無いのだから。「……分かったよ。とりあえず、二人のこと、忘れてないのは分かった

から」

「そっか」

東は返答した途端、また顔を背けて歩き出す。その後ろで、ユーノは立ち尽くして少し悩んでいたが、結局後を追うように彼女のラボへと走ることにした。

篠ノ之束の空飛ぶサーカス（I）

高町なのは、ユーノ・スクライア、織斑千冬、そして篠ノ之束の四名が時空管理局次元航行部巡航艦船「アースラ」所属の民間協力者となつてから、おおよそ5日余り。フェイト側が確保している6個と合わせて、合計15個の存在が確認されているジュエルシードだが、その後一向に発見されなくなつていった。管理局側のワイドエリアサーチ、東のジュエルレーダーでさえもまるで反応しない。これまで様々な状況で見つけ出されていたのに、まるで一斉に雲隠れしたようだ。

もしかすると、残りは地球ではなくまた別の次元にばら撒かれたのかもしれない。アースラ艦内のミーティングではそういう意見も出た。しかしリンディは、これ以上の搜索範囲の拡大に関しては消極的な態度を取る。複数の世界で同時に探索を行うには、武装局員の人員が足りないのだ。本局から増援部隊を要請すればいいのだが、それでは余り大規模な行動になつて、ジュエルシードの他にもう二つある搜索対象に感づかれ逃げられてしまう。

それは、既に確認されているフェイト・テスタロッサと、更に優先度の高い目標がもう一つ。彼女の母親と予想され、26年前に大魔導師として次元世界に名を馳せたプレシア・テスタロッサだ。

アースラ艦内のメインコンピュータに保管されているパーソナルデータによると、ミッドチルダ中央技術開発局に務めていた彼女は、魔導実験の事故による影響で中央から地方へと放逐され、数年間地方での研究に従事していたが、その後行方不明となつていた。家族と行方不明になるまでの詳しい行動は綺麗に消去されている。恐らく足が付くのを嫌った彼女自身、もしくはは研究関係者によって、何らかの方法で消去されてしまったのだろう。

このことから、データの追跡するのは現時点では不可能。本局からのデータは一兩日中に届く予定だが、果たしてそれでどれほどの証拠が掴めるものか。また、ジュエルシード争奪という表舞台にも全く姿を表していないことから、逆探知による魔導的追跡も不可能だ。

一方フェイト・テストアロツサも、巧妙に姿を隠しているのかはたまにプレシアと合流したのか、何度かジュエルシードの捜索隊とニアミスを繰り返した以外は全く足跡を掴めていない。

要するに、アースラ側としては今のところ全くの手詰まりなのである。

折角協力してくれたなのは達にも、ひたすら艦内における戦闘訓練や魔法に関する知識の教授以外何も成すことがない。彼女たちだけが動いていた時は状況もかなり激しく動いていたようだが、アースラが参加した途端にぷつぷつ、と停滞してしまっていた。

しかし、それらは全て、嵐の前の静けさ。なのは達と管理局、そしてプレシアの持つ風が奇妙に合致して収まった言わば嵐の状態。いずれ崩れる、仮初めの平穏であった。

そして、アースラ介入後から6日目の真昼。厚く黒い雲に覆われた空の上、一人の少女の身を砕くような献身が嵐を起こす。それは、この事件に関わるもの全てを巻き込み、そして“ほとんど”全ての予想を裏切る方向で荒れ狂う。

「なんとも、呆れた無茶をする娘だわ」

凶行に出た驚きと、年幼い少女に対する若干の労りを込めて、リンデイはそう状況を纏めた。

海に隠れていた、残り6つのジュエルシード。その全てに、同時に魔力流を流し込み、強制的に活性化させて詳細な位置を突き止めた上で、纏めて封印する。なるほど見事な作戦だ。位置の確定、そして封印、この二つを同時にやられては他所が介入する隙は生まれえない。撤回する際の追撃さえ凌げば、残りの6個は丸ごと自分のもの、ということになる。

だがそれは、余りにも無謀すぎた。一つでさえごく小規模ながら次

元震を起こしうるジュエルシード、纏めて6個分。封印するだけならともかく、活性化させて、それで更に発生するエネルギーまで抑えることを計算すると、AAAランクの魔力でも補いきれないのは当たり前だ。

今までの戦術からして、その程度のことは当然分かっているはずなのだが。敢えてこのような机上の空論に頼らざるを得ない限り、フェイト、そして後方に居るプレシアさえも、相当に追い詰められているのではないかと、いい方向に勘ぐることも出来る。

「とにかく、ここまでの無茶に僕らまで付き合う道理はない。彼女がダウンした時を狙ってジュエルシードごと彼女を確保。よしんば封印に成功したとして、力尽きた彼女をほぼ無抵抗で捕縛できる。だから、ここで何もせず見ているのがベストなんだ」

クロノが語る。それは、緊急時ということでのブリッジに集合していた、なのは、ユーノ、千冬に対しての説明だった。

しかし、数回同じことを説明されても、未だ納得の出来ていない少女が一人。

「でもっ！ それじゃあ、フェイトちゃんを見殺しにするってことじゃないですか!？」

高町なのはだ。小さい口を精一杯開いて、クロノに、そしてその場に居るアースラクルー全員に問いかけるような訴えだ。

なのはは単にフェイトを倒し、ジュエルシードを集めるために参加したのではなく、フェイトの事情を知りたくてぶつかり合う。その程度のことは、リンデイもクロノもとつくに承知していた。彼女自身その方針を隠すことが無かったからだ。

当然、今回の管理局側の作戦に対し反発するのも想定の内だった。だから、少女の心からの訴えに、周囲の大人は皆苦い顔をしながら何も言わずに目を背け、自らの責務に没頭する。

「別に見殺しにするというわけじゃない。彼女のバイタルを観測して、危険値に達した瞬間に君たちと一緒に突入する予定だ。万が一はあるかも知れないが、可能な限り未然に防ぐ。彼女も重要な証人になるのだから」

ある意味ダダを捏ねるようなのには対して、まともに向き合い説得するのは、まだ子どもと大人の境界線上にいて多少なりともなのは気持ち的理解できるクロノと、

「なのはさん？　これが一番、犠牲と消耗の少ない解決法なの。私たちにはフェイトちゃんだけではなく、その裏にいる存在への対処だつて控えている。ここだけに、全力を投入する訳にはいかない。頭のいいなのはさんなら、きつと分かってくれると思うのだけど」

艦内の統括者にして四人の少年少女の責任者でもあるリンディだけだった。

二人は根気よく話し、説得していた。それは、なのは以外の三人が不承不承ながらも一応は承知してくれた事からも受け取れる。

しかし、なのはは頑固だった。何度話しても首を縦に振らず、その目はクロノやリンディから離れ、ひたすらにモニタへと向けられていた。

そこに映っていたのは、6つのジュエルシード相手に振り回され、痛めつけられるフェイトの姿。側に寄って防御に尽力するアルフの力も届かず、バリアジャケットの傷は段々と増えていき、デバイスの刃に宿る金色の光は薄れていく。

——フェイトっ！　もう無理だよ！　そんな魔力じゃ！

——大丈夫、大丈夫だから……

モニタの音声はとつと切られているはずなのに、なのはの胸の中ではそんな悲鳴が確かに響いていた。

泣いている。口では強がって、歯を食いしばって、目をきつと開いているけれど。

フェイトちゃんは、心の中で泣いている。

——もう、ちよつとで……うあっ！

ああ、ジュエルシードの一つに、今にも手が届きそうだったのに。敢え無く跳ね飛ばされて、そのまま別のジュエルシードにも吹き飛ばされる。

そのまま弾かれたピンボールのように飛ばされ続けるところを、どうにか踏ん張って、また強大な竜巻、嵐へと挑んでいく。

助けたい。あれは、幼い時の高町なのはに似ているから。

お父さんが怪我をして、家族皆が苦勞していても、自分だけが何も出来ない無力感、悔しさ。

それと同じものを今、制御できない魔力の渦の前で、あの子もきつと感じているはずだから。

勿論、なのはの心の中にあるのはそれだけではない。命令を破り、飛び出すことのデメリットだって気づいている。

そう、確かに、あれはフェイトの無茶だ、無謀だ、自業自得だ。そしてそれを助けることなんて、もつと無意味だ。頭の中の理屈がそう判断していた。

それは、なのはが今までフェイトを倒すために練り上げてきた戦術と、それを考えるための頭脳。ひたすら熱いものに突き動かされて鍛えられてきたはずのそれが、皮肉にも今はひたすら冷たい決断を促して譲らない。

それに、今フェイトの所に駆けつけるのなら、なのはは自分だけでなく、ユーノや千冬の力も借りなければいけない。転送魔法を組むことは今のなのはには出来ないし、ひよつとすると誰かが止めに来るのかもしれないのだから。

けれど、二つの暖かい声によって、その迷いもあつという間に打ち破られる。

(なのは、僕がゲートを開いて転送するから、早くあの子を！)

(なに、後のことは気にするな。執務官とかいうプロの魔導師と、一度やりあってみたかつたしな)

二人の優しい念話が届くのだ。自分たちにまで責任が被る事を恐れず、共犯者になってくれるという。

ああ、私はなんて恵まれているんだろう。

こんなに自分のことを理解してくれる友だちが居るのだ。

そして、トドメとばかりに、レイジングハートの通信回路から飛び込んできた声。

『なのちゃんは飛べるよ。その翼で、どこまでだって。その手で打ち

抜けるよ、涙も、痛みも、運命も。だから、飛ぼうよ』

そうだ、その通りだね、束ちゃん。

今の自分には、フェイトちゃんを助けるための、小さいけど杖を握って離さない手があつて。

フェイトちゃんが居る空高くまで飛んでいって、肩を貸してあげられる翼があつて。

そして、自分の足元を支えてくれて、送り出してくれる友だちがいる。

そんな時、飛び出さなかつたら、きつと、一生後悔する！

「な……何をするんだ、君はっ！」

ユーノの魔法によつて、突如として開いたゲート。行き先は、海鳴市海上。クロノは驚愕して振り返るが、リンデイは目をそつと閉じて、これあるかな、と閉じた口の中で呟いた。

千冬が木刀を持って立ち塞がる。ユーノも両手を広げ、誰も一步も通さない覚悟だ。二人の頼もしい背中を見ながら、なのはは凜とした声で宣言した。

「ごめんなさい！ 高町なのは、命令を破つて勝手な行動を取ります！」

転送の光の柱。それに包まれて、なのはの身体は海上上空へと放り投げられた。

「よし！ ユーノ、私たちも行くぞ！」

「うんっ、て、ちよつと、千冬も行くの!？」

「当たり前だ！ 空は飛べんから、ちゃんと近くの陸地に降ろしてくれよ！」

無茶言うなあ、という愚痴と一緒に展開される、二回目の転送魔法。先程よりちよつとだけ慌ただしく、残りの二人も魔法陣の中に掻き消えた。

「艦長！ 直ちに——」

三人の蛮行を見て、僅かな怒りと危険事態への焦りに顔を歪ませたクロノが、三人の確保と事態への介入の許可を求めるが。

リンデイは無言で首を振り、やんわりと止めた。

「何故です!?! 母さ……いえ、艦長」

「これもある意味、ベストではないにしろ、ベターな作戦になり得るからです」

公人としての態度を振り切り私人としての憤りを発するクロノだが、リンディは既に、なのはたちの独走をも作戦の計算に入れていたのだ。

「考えてみなさい? もしフェイト・テストロッサが封印に失敗したとして、それで私たちが突入する間には少しだけタイムラグが発生する。その間に、6つのジュエルシードが全て、完全な暴走状態に突入したら?」

「ツ……間違いなく、中規模から大規模の次元震が引き起こります」

「そうしたら、私たちの装備ではもう手のつけようがない。無論、そうなる可能性は限りなくゼロに近いけれど——決して、ゼロではない」
実のところ、リンディとしてはフェイトが完全に追い詰められてからではなく、もっと早期に部隊を投入するのも、安全策としてはアリなのではないかと考えていたのだ。

問題はそのタイミングを計ることにある。フェイトにまだ十分な余力が残っていたら脱出される可能性も起こるからだ。だから、クロノは確実な確保を重視して、フェイトがノックダウンした後突入する作戦を提案していた。

これは両者の見方の問題である。安全なジュエルシード確保を優先して、折角手の平に舞い込んできた事件早期解決のチャンスを逃し、雲隠れされても仕方ない状況へ持ち込んでしまうか。それとも逆に、ほんの僅かな危険性を無視して、解決への最も確実な糸口を掴み、これ以上の戦闘を回避するか。

「……なるほど。浅慮でした」

一方の可能性を考慮から外していたクロノは深く頭を下げたが、どちらが正しいかは、リンディにも判断できない。

とかくデリケートな判断である。それが正しいかも、事件が終わってみないと分からないのだ。

「とにかく、もう状況は動いてしまったわ。だとしたら、今の私たちに

出来る事は、それを出来るだけ有利な方向へと持っていくことだけ。
どうします、執務官？」

「……でしたら、暫くここで待機します。一人で駄目でも、なのはと二人の魔力量なら、6つのジュエルシードを完全に制御下における可能性も高くなつてきますから」

「どっちみち、フェイトさんは限界に達するでしょうしね。もし二人がかりで駄目なら、その時こそ、お願いね？」

提督として、信頼ある執務官に対する目線。それにクロノも深く頷き、手に握っているカード型のデバイスを更に強く握り直した。

しかし、この戦いが終了するまで、クロノもリンディも結局アースラのブリッジで待機したまま、何も身動きを取ることが出来ず終いになつてしまう。

何故か。

それは、なのはとフェイトの合体魔法で、ジュエルシードが纏めて封印されたその時。

極めて大きな質量の転移反応と同時に、海鳴市の海浜、その全体が、強固な多重結界によって完全に覆われ、外部からの介入を完全に防いでしまったことと。

アースラに次元跳躍魔法が直撃し、一時的な機能不全から復帰した直後。メインコンピュータがハッキングを受け、完全に機能を停止してしまつたからだ。

篠ノ之束の空飛ぶサーカス（Ⅱ）

「サンダー・レイジー！」

「デイバイン・バスター！」

同時に放たれる、金とピンクの閃光。片方は空間全体に広がり、渦巻くエネルギーを抑えこむ。そしてもう片方は一気にそれらを貫いて、青い結晶の中へと封じ込めた。

高町なのは、フェイト・テスタロッサ、両者即席の合体魔法。これまでろくに言葉をおぼわす事もなかった二人は、阿吽の呼吸というべき完璧なタイミングで制御と封印を同時にやってのけた。

海の上からひと纏まりになって浮上してきた、6つのジュエルシードを挟んで、白と黒の魔法少女は向かいあう。固唾を呑んで見守るのは、周囲でフォローに務めたオレンジの狼、緑の魔導師。そして、遙か遠く、海岸線のぎりぎりに立って、唯一魔法を持たない織斑千冬もまた、二人の行く末を見つめている。

それぞれの耳に聞こえていた、ひたすら続く小うるさい波と風の音は、最初になのはが発した声に掻き消された。皆、それだけしか意識していないのだ。

「フェイトちゃん」

その場にあるすべての目が、なのはただ一人へと向けられる。感情に任せ飛び出し、今こうして様々に戦ってきたライバルと向かい合った彼女は、果たして何を為すのか。ジュエルシードを半分に分けるのか。それとも、また何かを賭けて、ぶつかり合うのか。

なのはは言葉を紡ぐ。今度は話し相手の目も心も、自分の方へと向いてくれている。

だから、伝えなければならぬ。自分がフェイト・テスタロッサという女の子に、果たして何が出来るか、何をしたいのかを。

「私ね、貴方と出会った時からずっと……考えてた。私は何をしたいのか。ぶつかるだけじゃきつと足りなくて、だったらその先に何が出るのか。それで、やっと気づいたんだ」

胸の震えを抑えこむように、手を当てる。言いたいこと、したいこ

とは沢山あるが、それを全て出したら本当に伝えたいことは見えなくなってしまう。だから、精一杯考えて、見つけ出した答え、それだけを言うことにした。

「私……フエイトちゃんと、友達に」

その時。

ぞわり、とした言いようなない悪寒が、魔導師達の肌を撫でるように通り抜けた。それは単なる錯覚ではない。静まりまた凧いだ筈の空気に、再び魔力の波動が響き渡ったことを、全員が感じ取ったのである。なのはも、一旦発した言葉を差し止めて、杖を両手で握り、警戒の体勢を取った。ただ一人、フエイトだけが動かない。これから来るものをはつきりと予感し、しかしそれを信じる事が出来ず 呆然と飛びつくすだけだった。

「これは……転移反応?! でも、こんなに大きな……」

元から不安に揺れていた顔を更に青ざめさせて、ユーノは呻くように言葉を出した。転送魔法が来ることは簡単に分かった。問題は、それが今まで見たことも聞いたこともないような規模でやってくるということだった。

同じく、此方は直感的に危険を感じた千冬が、しかし詳細までは分からずに聞いただしてくる。

「大きい!? 何が来る! 説明しろユーノ!」

「な、何って……分からない! 次元航行艦でもない。それよりも、もっと大きい……」

集った少年少女達を覆うように、上空から巨大な魔法陣が展開される。その色は、禍々しく濁った紫。雷と共にゆつくりと現れ出たのは、ちっぽけな子供たちを押し潰すくらい大きな物体だ。

「これは……遺跡!」

ユーノが見間違えたのも無理はない。黒い木の幹のような外壁に刻み込まれた年月は深く、青白い稲妻に照らされる巨体は、何者も近づけないような威圧感に満ちている。

先の丸く底面の大きな円錐を反対にしたようなものが、全体の底部である、ということに気づくまでは数十秒掛かった。それほどに、転

送速度は遅い。巨大な質量を処理するわけだから当然なのだが、唐突な登場からの遅々とした現れようは、恐怖を煽る意図的な演出にすら思えてくる。

ふと横を見れば、そこに浮いているアルフは手をだらんと下げて肩も降ろし、ただただ目を見開いて、震えていた。どうやら、アレに見覚えがあるらしい。ということとは。

これが、敵の本拠地。今までフェイトを手先として、ひたすら裏に隠れていた事件の元凶が、遂に姿を表したということか。

だとしたら、その標的は、ジュエルシードを持つ――

「なのはっ、逃げてー!」

叫びよりも早く、一条の雷光が、静止した二人の少女へと舞い降りた。

しかし、それはユーノの予想を裏切り、縫針に糸を通すような正確さでもって、なのはではなく、同士であるはずのフェイトへと降り注いだ。

「あああああああつ!!」

直撃音と、悲鳴。間近に居たなのはの聴覚は、それのみに支配された。

唯でさえ傷つき疲労していたフェイトの身体は、鞭を打たれるが如く更に痛めつけられていく。太腿から、腕から、次々に赤い線が生まれ、血が飛び散る。非殺傷ではなく、ともすれば彼女を八つ裂きに出るほどの一撃だ。

数秒間の攻撃が終わり、帯電しながら糸が切れたように落ちていくフェイトへ、なのはは全力で追いついて抱きかかえようとする。そして、海面ギリギリで、なんとかキャッチ出来た。

「う、あ……かあ、さん……」

虚ろな目をしたフェイトの呟き。なのはには最初、それが母親へ助けを求める無垢な叫びであるように聞こえた。しかし、直後に響いてきた不機嫌な声が、その希望的な解釈を打ち壊した。

「全く、とつとと消えて無くなってくれればいいものを。フェイト。貴方はとつても、手間のかかる子ね」

その言葉と同時に、今やその全容を表した巨大な構造体——時の庭園の中枢部から、封時結界が展開された。なのはとフェイトだけでなく、ユーノ達外野も巻き込んで、海鳴市の臨海ほぼ全てを覆う大規模な結界である。それは、転移してきたものを外界から隠すためだけでなく、その場に居る全てを閉じ込めて、支配するためのものだった。

「プレ、シア……」

「なんだって?」

「アレは、プレシアだ……フェイトの母親だよ……アイツ、ジュエルシールドが全部揃ったこの時を狙って、こんなことを!」

「その通りよ。だから黙りなさい、薄汚い犬」

第二撃。アルフはとっさに避けられず、シールドで防御をしてどうにか耐え抜こうとするが。この場合、攻撃する側の技量が防御側のそれより圧倒的に上回っていた。

「う、ぐああああっ!!」

複数展開されようとも、薄紙のように貫かれるシールド。再び響く電撃と叫び。

人の形を維持できず、狼に変わりながら落ちていくアルフを、ユーノはチェーンバインドを器用に使いながら回収した。そのままなのはとも一緒に後退したかったが、しかし、二人分の重みを抱えつつ庭園の近くまで飛行するのは厳しい。ひとまずは、千冬の居る海岸線まで後退することにした。あそこなら落ち着いて防御を整えられるし、暫くは安全だろう。

「フェイトちゃん! フェイトちゃん!」

なのはは悲痛な声で、弱々しく気絶した少女を抱きかかえながら、必死でその名前を呼ぶ。同時に、その身体に幾つもの傷跡や、ミミズ腫れが走っているのにも気づいた。何度も見た黒衣の下、綺麗だな、と思った外見の裏には、こんなに深い傷が走っている。きっと彼女の心も同じく、古傷に塗れ、痛みきっているのだろう。

そう思うと、沸々と湧いてくるのは憤りの感情だった。フェイトが頑張ってジュエルシールドを集めているのは、敵として何度も向かい合ったなにはよく分かっている。しかも、向こうはフェイトの母

親だというのに。頑張る娘にこんな仕打ちをする母親なんて、なのはの記憶には存在しなかった。

「どうして!?! どうしてこんなことを!?!」

だから、問う。このような状況下でも、なのははその理由を知らずには居られなかった。

以外にも、答えはすぐに帰ってきた。

『簡単なことよ』

今や着水し、底部を殆ど海上へと沈めながら、幾つもの刺のような柱とひとときわ大きい円柱で成り立っている上部を見せた庭園。その随所に埋め込まれている紅い球体から、青くぼんやりとしたホログラムが映し出された。

いかにも魔導師然として、しかし胸元を大きく開きへそや太腿が露出しているローブに、外側が黒く内側が紫色のマント。シンプルな作りの杖を振りかざし、状況の全てが自分の思うがままになっている事に残酷な笑みを浮かべながら、プレシア・テストアロツサは姿を表した。『あの子は、フェイトは私の娘ではない。本当の娘は……ここにいる、アリシアだけ』

ホログラムに、今度はカプセルのような物体が現れる。その内部に浮かんでいるのは、今なのはの腕の中にいるフェイトと瓜二つの身体。まるで時計を巻き戻して縮めたように小さいが、しかしそれでも、顔はまるで区別がつかない。

月村家の姉妹だってここまででは似ていない、となのはは考えた。あれもそっくりの部類には入るが、それでも見分けが付くくらいの僅かな違いがある。しかし、あの虚像とフェイトの顔を分けるのは、さつき付けられた深い傷だけ。

まるで、鏡に写したようにそっくりだ。

「かあさん、なに、を……」

「フェイトちゃん、気がついたの!?!」

「あら、まだ意識があったの。まあ、いいわ」

先程から響く声に反応したのか、フェイトの目が開く。弱々しい声で目の前の母親の虚像に救いを求めた。

「そんな……嘘だよな？ 私が、かあさんの娘、じゃないなんて……」
『物分かりが悪いわね。アリシアを見なさい？ これこそ本当に私が産んだただ一人の娘。我儘も沢山言ったけど、いつも私に優しくかった。だから、私はアリシアを取り戻す、そのためにはジュエルシードが必要で、だから「それ」を利用したの』

まるで今プレシアが宣言したことを、悪い冗談として否定する。
しかし、悲痛な訴えは真正面から打ち砕かれ、フェイトの精神とともに、粉々に崩れてしまう。

プレシアはフェイトを、それ、と言った。人としてではなく、モノとして。それは、この場にいる誰にも、理解出来ない価値観であった。『フェイトはアリシアのクローン。アリシアの代わりにするために作って、それが出来なかった壊れた人形。結局、丁度いい廃物利用だったけど……もう、お終いね』

そう嘯くプレシアの手には、フェイトのバルディッシュから回収した6個と、宙に浮かんでいた6個、計12個のジュエルシード。なのはが持つ9個以外のジュエルシードは、完全にプレシアの手中へと収まった。

つまり、人形はもう要らない。

「あ、あ、うああ……」

フェイトにはその理屈が理解できた。でも、言わないで欲しい。

そんなことを言われたら、今まで自分はなんのために生きてきたのか分からなくなるから。魔法の勉強をして、『お使い』のために色々な世界を巡って、戦って。時には罪も犯して、でも母さんは笑顔を見せてくれない。

今、自分を抱きかかえている子にも酷いことばかりした。斧で斬って、鎌で引き裂いて、雷で打ち砕いて。でも今、自分を抱きかかえてくれる程に、優しい女の子。

彼女に酷いことまでして、痛いこと辛いことも沢山我慢して、ジュエルシードを集めたのに。そしたら、褒めてくれるんじゃないの？ 昔に見せてくれた、あの優しい笑顔を本当に見せてくれるんじゃないの？

そう、記憶。私は記憶している。優しいプレシアを、自分の母親であるはずの——いや、これは違う。単なる記憶だ。臃げな、忘れ去ってしまったような記憶だ。実体験ではない。私は本当に母さんの笑顔を、見たことはない。記憶と体験は違う。

だから、理解する。目の前で母さんがしがみつくと、カプセルの中の『自分』を見て。都合のいいように無意識で書き換えていた記憶が、真なる記憶へと変換されていった。

——フェイトは、本当にいい子ね。

——○○○○は、本当にいい子ね。

——アリシアは、本当にいい子ね。

ああ、そっか。母さんの言う通りだった。母さんの一人娘は、私じゃなくて、アリシア。カプセルの中でずっと眠っていた女の子。

フェイト・テスタロッサは、アリシアの写身。何もかもが、アリシアの借り物。母親も、ペットも、そして優しく甘い記憶すら——。

『折角アリシアの記憶をあげたのに、貴方は全てが駄目だった。だから私は——』

ああ、でも駄目。そんなことを言わないで。私が私で要られなくなる。私が、母さんの娘の私が、消えてしまう。

そんなフェイトの想いを踏みにじるように、プレシアは憎しみに満ちた顔で告げた。

『あなたを作ってからずっと——あなたのことが大嫌いだったのよ』

フェイトの中でずっと張り詰めていた何かが、ぷつりと切れた。それを最初に感じたのは、絶望に精神を浸らせたフェイト自身ではない。辛い話に身を震わせる彼女を、ずっと両手で抱いていた、なのはどうだった。

そのまま崩れ落ち、自らのデバイスであるバルディッシュすら取り落としかけたフェイトを、自分の体温を分けてやるように優しく抱きかかえる。そして、体内の魔力を殆ど使い果たしていることを示すかのように、足元で弱々しく点滅するピンクの翼を懸命に羽ばたかせ、地上のユーノの元へと辿り着いた。

一方その頃、はるか遠くの次元空間で、事態を静観していたアースラは。

「エイミィ、復旧はまだか!」

「待って、あと、後ちよつとだけ……!」

次元跳躍攻撃の余波で、艦内全体が一時的な機能不全に陥り、この緊急事態に即応出来ないでいた。

クロノの焦りに満ちた声が、直属の部下にしてオペレータのエイミィを急かす。その右手には、既に展開形態となったデバイス、S2Uが握られていた。転送システムさえ復旧すれば、すぐにでも現場へ突撃していくだろう。

リンディの顔は、まだ平静を保つ事ができていた。無論その内心は、驚愕と焦りで押し潰されそうな程に追い詰められていたが、クルーの目の前で艦長が調子を狂わせてはいけな。どんな時でも平常心に、状況を分析して決断を下す。それが艦長としてあるべき資質なのだから。

それにしても。悔しいがこれは予想外だったと認めざるを得ないだろう。いくらジュエルシールドが全て集まる場とはいえ、まさか使い走りのフェイトだけでなくプレシア本人が出てくるとは。プレシアの独白を聞けず、未だフェイトがプレシアの実の娘だと思い込んでいたリンディにとつて、娘を信賴していない母親というのはまさに想像の範疇外であった。

現場には分厚い多重結界が貼られ、今や内部の様子は何も分からな。だが、転送魔法で舞い降りてきた敵の本拠地は、要塞じみた構造体である。魔力の大半を消費したなのはと、後衛であるユーノ。そして本来非戦闘員として割り振られて然るべきはずの千冬が、どのような窮地に追い込まれているのか。

全ては艦内が復旧した後、クロノと武装局員を転送して結界を破壊

してみなければわからない。

「後5秒で、システム復帰します！ 3、2、1……！」

コンソールを叩いていたエイミイが、切羽詰まった声で宣言する。カウントダウンが終わると、艦内の電力が一斉に戻り、暗闇に包まれていたブリッジにも明かりが戻った。

「執務官！ 武装局員と共に直ちに現場へ向かって下さい」

「了解です！」

リンデイが指示し、クロノが勇躍して大型の転送ゲートへ走り出そうとした時。

「待って下さい艦長！ クロノくんも！」

艦内システムのある異変に気づいたエイミイが二人を止める。焦る気持ちを冷や水で差し止められたクロノは、今度はエイミイの元へ駆け寄り、怒鳴るように状況を確認する。

「今度はどうした！」

「アースラのシステムがおかしいの！ ……艦長！ 転送が、転送ゲートの管制システムが何者かによって凍結されています！」

「なんだって!？」

「そんな……！」

それと同時に、他のオペレータからも次々と悲鳴混じりの報告が届く。

「航行システム、制御不能！ エンジン出力20%に制限されています！ ……これでは最低限の航行活動しか出来ません！」

「レーダーも録に動きません！ サーチャーだって封じられて……これじゃあまるでめくらだ！」

「艦内警備システムに異常！ 此方側からの問い合わせに応答しません！」

この状況は、一体どういうことなのか。クロノは必死に推測し、やがて、絶望的な可能性に行き当たった。

「まさか……ハッキングか!？」

「嘘っ！ そんな、管理局の艦船のファイアーウォールに通じるハッキングなんてっ！」

エイミイには信じられなかった。管理局の次元航行船は、現代の魔導工学だけでなく、電子工学の粋を結集して作られている。いくら大魔導師とはいえ、それをやすやすと抜いてシステムに干渉するハッキングを行うことは不可能に近いはずだ。

だが、現に今、アースラのメインコンピュータは完全にクルーのコントロールから外れている。

リンディの決断は流石の素早さだった。

「エイミイ。全システムの強制シャットダウンを」

「りよ、了解！ 強制介入コード、入力……駄目です！ 此方側からの操作を全く受け付けません！」

しかし、エイミイが神速の早さで打ち込んだ49桁のコードはたちまち無効化される。電源を切断しようとしても、応答なし。悲鳴混じりの報告を挙げながら出来る限りの手段を試してみるが、一度自分の手から離れたシステムを取り戻すのは至難の業だった。

「もしかして、あの攻撃はおとり……いえ、布石だった？」

リンディは誰にも聞こえない小声で呟く。あの次元跳躍攻撃は雷撃。それは、アースラのメインコンピュータのシステムを、ほんの数秒間ダウンさせた。そう、ほんの数秒。それでも、その際にシステムと同じくダウンした防壁をかくぐり、ウイルスを仕込む事は不可能ではない。

つまり、敵は最初から、この状況こそを狙いだっただけだ。

「艦内全てのドアにロックが掛けられました！ 隔壁も全て……閉鎖されています……！」

トドメとばかりに伝えられる報告。これで、アースラクルーは各個に分断されて身動きが取れない状況だ。隔壁を手動で開こうにも、ロックを解除するにはかなりの時間がかかるだろう。既に作業にとりかかるクルーもいたが、彼ら以外は何も出来ず、ただ無効化されたコンソールを見つめることしか出来ない。

結界の中で孤立した、なのは達民間協力者の救助も、これでほぼ不可能になった。

「くっ！」

ガン、拳を壁へと叩きつける音。そのクロノの行いを、責める人間は居ない。艦内の誰もが、同じような気持ちだったからだ。

身動きがとれない。すぐ側の世界で、敵の首領が仲間を襲っているというのに。その絶望と悔しきで、誰もが無言のまま、沈黙がブリッジを支配していた。

「クロノ」

いち早く復帰したのは、艦長であった。

「一応、やらなければならぬことがあるわ。デバイス整備室にいる束さんに、状況を伝えましょう」

「艦長」

「彼女には自分のお友達がどうなっているか知る権利があるわ。それに今頃、すべての機械がダウンした個室で心細い気持ちになっているでしょうし。私たちに出来るのは、それくらいしかない」

皆、協力者の中でも一番元気で、快活だったウサミ少女のことを回想する。

彼女はアースラに寝泊まりしていて、艦内の仕事を進んで手伝ってくれていた。例えば、オペレーターをしているエイミーに紅茶を出したり、資料室での探しもの手伝いをしたり、メインエンジンルームの点検から帰ってきた局員に冷たいアイスを出したり。

そして今も、整備室を使ってデバイスの整備を手伝ってくれていた。

高町なのはの友達らしく、とても実直で気の回る、礼儀正しい女の子だった。

そんな彼女に、今その友達が絶望的な状況に陥っているのを伝える。悪魔になり切るようなその役割に、クロノの心も流石に躊躇い、なかなか通信を発せられない。

結局、リンデイが直接、通信を繋げることにしたのだが。

「え……？」

「艦長、どうしたんですか？」

「応答がない？ どうして？」

数秒後、同じ部屋にいるはずの整備主任マリエル・アテンザや、他

の船員へと問い合わせたリンディは、思いもよらぬ事実気づき、今度こそ驚愕に目を見開いた。

「いない……艦内の何処にも居ないですって!?!」

謎めくウサギは何処へ消えたか。

答えは、嵐の中にある。

篠ノ之束の空飛ぶサーカス（Ⅲ）

「妙なる響き、光となれ、癒しの円のその内に、鋼の守りを与えたまえ……よし、なのは、こっちに！　この中なら、魔力を回復できるから」
ユーノが、護岸された水際のコンクリートの上に展開したのは、ラウンドガード・エクステンド。手馴れている彼ですら詠唱を必要とする高位結界魔法だが、なのはが来るまでにどうにか唱え終えた。傷つききったフエイトと、魔力消費の激しいのはがその中へと逃げこむ。

急展開した状況に、理解が追いつかない千冬が叫ぶ。

「こんな時に……アースラはどうしているんだ!？」

「多分、向こうも向こうで身動きが取れていない。何らかの手段で妨害されてるんだ。そうでなきゃ、敵の本体がここで正体を表すなんて考えない。それに……」

自分たちの周りに展開された結界を見る。空をいびつな色に染めているそれは、ユーノの目で見て一分の隙もない。異なる構成の結界が何層にも展開され、そのどれもが強固極まりない。結界を解くためには、その構成を読み取り術式そのものを破壊するか、あるいは力尽くでぶち抜くかしかないのだが、この結界相手ではそのどちらも困難だろう。

故に、この場でユーノたちに来る最善の手段は、アースラがどうにかして復帰し、結界を外側から破壊してくれるのを待つことだけだった。

最もその頼みの綱も、システムを完全に掌握されてしまい身動きが取れなくなっているのだが。

結界の中で外部からの通信を断たれているのではそれすら知りようがなかった。

「こんな状況じゃ、向こうも僕らを逃してくるはずがない。大体、ジュエルシードが目当てなんだから、まだレイジングハートの中にある残り9つ、全部手に入れるまで追撃してくるよ」

「逆にジュエルシードを渡せば、見逃してくれるかもしれないよ」

とか？」

「確かにそうだろうね。向こうに用があるのはジュエルシードだけで、僕達じゃないから。でも、ここで逃げたって状況はあんまり変わらない。全てのジュエルシードを使って、向こうがどういう儀式を行うかは分からないけど、確実に次元断層が起こる。そうしたらこの世界は」

「終わる、か。駄目だな、それこそ洒落にならん」

21個の青い宝石、全てを使って何が起きるかは安易に想像がつく。大規模な次元震どころの話ではない。次元断層が起これば、いくつもの世界が崩壊してしまう。その中には、起爆点となるこの世界、この街だって含まれるのだ。

こうなつたら、元々の目的はどうだつていい。なんとしても、せめてなのはが今持つジュエルシードだけは、あの要塞じみた移動庭園の中で笑う張本人に渡してはならない。

「千冬、なのはと一緒に、フェイトとアルフを連れて逃げるんだ。できるだけ遠くに」

「だがユーノ、お前は」

「僕はここに残るよ。向こうがタダで返すとも思えない。まだ消耗してない僕なら、あの雷撃も一度二度くらいなら防げるしさ」

決意を決めて立ち上がったユーノだが、内心では、正直カツコつけすぎだなとも思っている。

あの早さで二撃を打ち込めるのだ。恐らく相当な使い手であろう。結界魔法に習熟しているとはいえ、いまだ未熟で攻撃手段の殆ど無いユーノが、まともに受け止められるような敵ではない。

怖い。今まで遺跡の中で迷ったりトラップにはまったり、命の危機を感じた場面は幾つもある。しかし、孤立無援でたった一人、あんなに大きな敵へ立ち向かうと言うのは、それとは比べ物にならないくらい肝が縮み上がるものだ。

けど、そんなことは関係ない。自分のせいでジュエルシードに巻き込まれ、今、その最終局面でピンチに陥った女の子。自分が助けられないで、誰が助けるのか。

「それに、この程度。教授……でいつか。うん、教授からの無茶ぶりに比べればなんともないって。はは……」

その冗談は、半分は真つ赤なウソで、でも残り半分は本当だった。「ユーノ……」

何か吹っ切ったような微笑みすら見せて、庭園と少女たちの間に立ち塞がるただ一人の男の子。それに比べて、千冬は表情も内心も苦く、悔しさに溢れていた。

自分だって、ユーノの隣に立ちたい。なのはが逃げるのを、出来ることなら最前線で守り抜きたい。だが、千冬は海の上を歩くことは出来ないし、真上から撃たれて来る雷を、見ながら避けられる程器用でもない。暴走体相手か、せめてフェイトのような魔導師単体が相手なら、どうにか隙を突けないこともないのだが。巨大な庭園の奥に潜む大魔導師相手では、いささかアウトレンジの度が過ぎている。

「そんなに暗い顔しないでよ。千冬には、なのはの側について欲しいんだ。向こうもこっちが逃げられると不味いから、負担の大きい跳躍攻撃じゃない、直接叩ける戦力くらいは用意してるはずだ。だから、なのはの側には千冬が居てくれないと」

そんな千冬の気遣うようにユーノは述べたが、敵が直接なのはとレイジングハートを捕らえようとする可能性は高かったし、事実庭園内部では、起動済みの傀儡兵が出番を今か今かと待ちわびていた。膨大な数の巨体を庭園内に納め、転送魔法によって将棋の持ち駒宜しく随所に配備される手はずだ。

それが予測できていたから、ユーノは千冬に後を託したのだ。千冬もその理屈は理解できたので、今一度木刀を強く握り直し、勇んで目の前の優男な少年の硬い決意に同意した。

「……分かった。すまない、ユーノ」

「気にしないでよ。お互いさ、守りたいじゃないか」

その言葉に、千冬は大きく首肯した。

二人の気持ちは一つ。ジュエルシードを、そして高町なのはと、彼女が友達にしたかった少女。この、たった3つの、しかし大事なものを守ることだけだった。

ユーノとなのはは出会ってたった一ヶ月。千冬となのはだつて、そんなに長い間友達だったわけではない。それでも、彼や彼女が見た高町なのはの姿は、ひたむきに真つ直ぐで、豪速球で迷いない。だから、守りたくなる。振り向かない背中にもひつつく、危なっかしさを支えてあげたかった。

しかし。

「千冬ちゃん、ユーノ君……いいよ」

疲労に耐えられず荒い息を出しつつ、全身の魔力が肉体の回復に割かれ余剰を減らしていくことを感じながら、それでもなのはは首を横に振った。

言葉自体は遠慮しているようだったが、彼女の目にはそういう後ろめたさを感じさせる光は一切ない。ユーノの決意も、千冬の想いも受け取って、しかしあるのは固い決意と、強固な意志。

「いいよって、なのは！ そんな身体じゃ何も出来ない！ 悔しいのは分かるけど、今は一旦逃げることにだけに集中して」

「ううん。私、まだやり残したこと、あるから。まだ、飛んでいたいから」

「無茶だなのは、よせ！」

二人が制止しても、なのはは構わず立ち上がる。

「お願い、レイジングハート」

手に持つ魔導師の杖は、逆らわずに自らの全機能を開放した。損傷したバリアジャケットや杖が瞬く間に修復されていく。が、それは同時に、なのはの魔力を限界ギリギリまで消費するということだ。

身体には全力疾走した時に似た倦怠感が重くのしかかり、釣られて思考も鈍りそうになる。しかしそれを押し退け、きつと目を上げたなのはは、目の前の海に浮かぶ巨大な構造物を視界に入れる。

なぜ、どうして。禍々しい魔力の波動と、来るものを拒むようなその威容を見る度、心の中から疑問が湧き上がってくる。あの中にいるのがフェイトの母親だとして、何故撃つのか、何故傷つけるのか。何かを傷つける度に悲しい顔と寂しい目をするフェイトが、その気持を押し殺してまで母親のために頑張っているのに、ものだけを受け取っ

て、その気持ちは受け取らない。

不思議と怒りは感じなかった。なのはの心にあるのはただ、分からない、だから確かめたいという思いだけだ。

「ユーノ君。千冬ちゃんと、それからフェイトちゃんも、よろしくね。あとこれも。元々ユーノ君に渡すものだったから」

レイジングハートの宝玉から、9つのジュエルシード全てが外へ出され、ユーノの手元に戻る。今からやるのが無茶に無理を重ねた自分の我儘だということが、なのはにはよく分かっている。だから、今の内に心残りはできるだけ無くしておきたかった。

「……なのは」

ユーノはバインドを使ってでも止めようと思ったが、飛び立つなのはの後ろ姿にデジャビュを感じ、出そうとした手を出し切れなかった。

それは、篠ノ之束に、不可解な行動を繰り返す真意を聞いた時。あの時見た後ろ姿に、どうしようもなくそっくりだ。

そう。なのはと束は全然違うように見えて、実は鏡写しのようにそっくりだ。

どちらも自分の信じるものを貫いて、周りには理解できないような無理を、無茶を、そして理不尽を繰り返す。その目の前にどんな壁があっても、何度も挑んだ末に、撃ちぬいたりぶち壊したりして飛び越えて、そのまま飛んでいってしまう。

ただ、なのはが目指す物とそこに至る方法はとても分かりやすく、束のそれは殆どの人に理解されない。束は他人の意見を聞かずに自分を貫くけど、なのははそれに耳を通して、でも、心の奥の奥までは真っ直ぐなまま変わらない。それだけが二人を分ける差だった。

要は、色合いが致命的に異なるだけで、二人の心象の中には全く同じ模様が描かれている、ということだ。だから、ユーノが見た二人の背中とは、どこか似通っているのだ。

ユーノには、あの時、篠ノ之束を止めることが出来なかったのと同じように、高町なのはを止めることは出来ない。

本音を言うなら止めたかった。自分がこの世界に持ち込んだ魔法

の技術で無茶をやられるのは嫌だし、その結果、無残に撃墜されるのを見るのも堪えられない。

でも、ああいうしやんとした背中や、決意に満ちた目を見ると、その一言がどうしても、口から出てこなくなる。

ちらと横を見れば、千冬も何も言わず、引き止めようとした手をそつと下に戻している。言っても無駄だということが分かったのだろう。

だけど。

あの時教授の後ろで助手としてついていったのと同じように、去っていく背中へ、何かを贈りたかった。

「なのは、これを」

目を瞑り、念じる。体内の隅から隅まで絞り切り、自分の持つ魔力をありつたけかき集めて一つにし、緑色の光球に変換する。そこから複数の光の線が飛び出して、なのはのもつ、レイジングハートの杖頭に集う。本来魔力を供出される対象の杖から、なのはの体内へ逆流するように魔力が溜まり、鈍った身体は元の澁刺さを取り戻す。

「ユーノくん！ これって……ユーノくんの魔力だよな？ 嬉しいけど、でもこんな……そんなことしたら、ユーノくんの方がっ！」

「いや、大丈夫だよ。何も死ぬまで供給する訳じゃないんだ。それにほら、僕にはこれがあるから……」

ユーノの身体が光に覆われ、再構成されていく。人の形は瞬く間に崩れ、不定形から更に縮み、構築され終わったその姿は、全高30cmの小動物。

「あ……」

「ね？ 別にどうともなかったでしょ？ ただまあ、殆どの魔力を分けちゃったから、今日一日どころか、暫くはこうしてないといけないけど……とにかく、僕は大丈夫だから」

獣の顔で笑顔を作る。これでもう、結界魔法は維持できない。緑色の魔法陣と、その上の膜が溶けるように消えていく。逃げ場が無くなったということだが、どうせあった所であの強力な雷撃に対してはそこまでの効果はないだろう。

だったら、なのはに賭けてみる。二人は無言の内に決断した。なのはが敵の本陣を叩いてくれれば、それで全てが終わるのだから。確率は天文学的だが、どうせ分のない勝負だ。捨て鉢になっても、あの世で閻魔の台帳に書かれて、責められることはないはずだ。

「ほんとにありがとう、ユーノくん……じゃあ、私行くね。千冬ちゃんも、ユーノくんも、無事で、居て」

決戦場へ赴く自分を見送る決意を固めた二人に、なのはも何がしか感じるものがあつたのだろう。震える声で、それでも前を見たまま振り返らず、魔法陣を展開。

消えかけていた翼、フライヤーフィンを再び光らせて、嵐の中へ猛然と舞い上がった。いった。

篠ノ之束の空飛ぶサーカス（Ⅳ）

自分の方へ飛んで行く白い姿を見て、プレシア・テスタロッサが思ったのは煩わしさだけだった。

白い魔導師。偶然にもフェイトと同じくらいの少女が、ジュエルシードの確保を邪魔し、計画を大幅に乱した。本当なら管理局に気づかれる前に全てが終わるはずだったものを、不甲斐ないフェイトも相まってずるずる引き伸ばされ、終いには管理局、それも地方警防どころか「海」の巡航艦に介入されてしまっている。

プレシアは時の庭園という拠点を持ちある程度の武力を確保しているが、あくまで犯罪組織や反管理局組織に与していない個人での行動だ。財力、権力など確かなバックボーンを持たない彼女の犯行は、管理局に目を付けられた時点で既に破綻していた。

いや、破綻していたはずだった。

「でも、もう貴方が何をしようが、遅いわ」

彼女のその一言は、この場の状況を絶対的な自信で纏める言葉だった。

プレシアはまず、海に落ちていた残りのジュエルシードを把握した後即座にフェイトを呼び出し、自ら命令を下した。なんととしても、ジュエルシードを管理局に渡す訳にはいかない、だから魔力流を流して一気に捕獲しなさい、と。フェイトの無茶は、プレシアの入れ知恵だったのである。

しかし、それは表側に過ぎない。本当の目的は、その無茶に対して命令を無視して飛び出してくるなのはと、その仲間たち。ジュエルシードを保有する彼らを、アースラから離脱させるように仕向けることであった。

彼ら、特に高町なのははフェイトに対して友好的な関係を結びたがっている。プレシアからすれば笑いたくもなる事実だが、この場合はそこに付け入る隙があった。フェイトが無茶をすれば、高町なのは必ず出張ってくる。命令無視すら厭わないだろう。幼い少女の情緒というのは激烈で、理性や理屈を無視するものだ。

そして、なのはとフェイトに協力させ、暴走しかけたジュエルシードをまとめて封印させ。互いに魔力を消費したその時。

時の庭園で直接転移する。広範囲かつ硬い結界で閉じ込め、アースラも次元跳躍魔法とハッキングの合わせ技で行動不能にすれば、残るのは傷ついた少女二人と、少年一人。彼らを組み伏せることなど、大魔導師にとっては赤子の手をひねるようなものだ。

なのに、まだ向かってくる。絶望的な状況は子供の頭でも容易に想像し得るだろうに、それでもなお、真っ直ぐこちらへ迫り来る。

聞いた通り、馬鹿な子だ。

ならば、盛大に迎えてやろう。全力を賭したちっぽけな抵抗が、この自分の前でいかに無力か教えてやる。

「それくらい、構わないわよね?」

そう言うと、モニタの中から笑顔のまま頷く頭が見えたので、プレシアは自分の手駒を動かす準備を始めた。

なのはが、庭園の外壁からおおよそ100mの所まで接近した時。レイジングハートが光り、転送魔法陣の展開を警告した。前方に小型が8つ。大型が4つ。転送完了までに急いで通り抜けるのは不可能だし、仮に出来ても来るだろう第二陣と挟み撃ちになってしまう。

迎え撃つしか無い、そう決まっているなら。迷いのないなのはの意志は魔杖に伝わり、魔法弾のチャージが開始される。転送が完了した瞬間に射出し、何もさせずに撃破する。言わば抜き打ちの構えであった。

浮遊しながら杖を持つ左手を振りかぶって腰を捻り、テニスのサーブを打ち込む寸前の体勢で待機する。自らの身体を投石機のように使って、少しでも早く攻撃を放たなければ先制は失敗してしまうのだ。数秒経って、大小10個を超える魔法陣から一斉に光の束が上があったその瞬間。

「ダイバインシューター・フルパワー!」

なのはは貯めていた体の力と魔力を一斉に開放し、合計6つのピンク色の光弾を放った。

本来この魔法は誘導弾であるが、今回はそれを切り捨て、威力と弾

速のみに特化させている。何しろ狙うのが静止した魔法陣なのだから、誘導しなくても明後日の方向に飛んで行くことはない。

ひゆう、と空を切りながら奔っていく魔法、その全てが、実体化したての固まった傀儡兵へまとめて直撃した。当たった瞬間、球体状に固まった魔力が散り、鋼鉄の装甲はいともたやすく貫かれる。魔力弾は、徹甲弾のように敵の外壁を貫き、榴弾のように魔力を拡散させて内部構造を傷つけていく。たちまち耐久の限界を迎えた傀儡兵は爆散し、その爆風に連鎖して他の個体も爆発したり、吹き飛ばされて無力化されたりしていった。

しかし、運良く当たらず、爆発にも巻き込まれなかった小型が4つ、プレシアから定められた命令をプログラム通りに実行すべくなのはの元へと飛んで行く。大型の撃墜を優先したからか、予想よりも撃ち漏らしが多い。

もう少し、頑張らなきゃ。なのははそう心の中で独りごちながら、今度は此方からも接近し、庭園との距離を詰めるがたら残りを能動的に排除しようと決意した。

もう一回弾頭を形成。今度は誘導性を重視して、小さく比較的素早い小型傀儡兵に当てるための調整だ。戦闘中に僅か短時間で術式の構成を変換するというのは、インテリジェントデバイスの高性能さも去ることながら、なのはの思考とマルチタスクの柔軟さを示している。

こちらは向かい、向こうは迫る。だから、互いの距離は瞬く間に詰まっていくな。傀儡兵四体、小型といえども、なのはからすれば自分より遙かに大きな巨体だ。しかし今更この程度の敵に恐れたりはしない。それくらいなら、最初からそっぽを向いて逃げ出している。

それに今、自分に宿る魔法の力は託されたものだ。ユーノ・スクライアという優しい男の子に。自分のやりたいことをやってと、だから、余計に負けられない。

一直線に飛ぶなのはの正面に二体、壁になって立ち塞がり、もう二体が左右から挟み込む。

なのははレイジングハートを片手から両手に持ち直し、両足に流す

魔力を増して、更にスピードを上げる。いくら機動力が低いといえども、ただ一直線に突っ込むだけなら、中々の速度が出るものだ。

最終的には弾丸のような早さに達し、傀儡兵の壁にぶち当たったなのは――

左右の傀儡兵をすれ違い様の射撃で片付けつつ、目をつむって顔面に展開したプロテクションで、鉄の兵士をひしやげさせ、吹き飛ばした。

高町なのはが、今までに行ってきた練習の質はともかく、量から見るとたかが知れている。たった一ヶ月。それは、この場にいるどの魔導師よりも少なく浅い。

しかしなのはは、その分射撃と防御に練習のリソースを殆ど割いている。天性の素質を十分に活かせる射撃魔法と飛行魔法、そして、ユーノ・スクライア直伝の防御魔法。この三者が合わさってこそその荒技だった。

「やったね、レイジングハート」

術式のサポートに腐心してくれた相棒に感謝の言葉を送ったら、また前を見据える。しかし、その瞳に映る光景は、なのはにとつて予想外のものだった。

「これって……入り口？　ここから、入れるのかな？」

なのはの前にそびえ立つ庭園、その壁の一箇所から、穴が開いていた。それは奇妙に歪み、紫色の魔力の波動も感じられる。恐らく、庭園そのものについていた突入口ではなく、転送魔法の応用に寄って無理矢理開かれたものだろう。

こうもあからさまに目の前へ出されたら、流石のなのはも少し躊躇する。毘だというのは分かりきったことだ。きつとこの中には、さっきの倍どころではない無数の傀儡兵が自分を待ち構えていて、下手に入ればたちまち袋小路の中で追い詰められてしまう。

向こうは、無鉄砲に歯向かうか弱い女の子が、どれくらい馬鹿な子なのか試しているのだろう。ここまで無茶をやって、それでまだやり通すつもりなのかと問うているのだ。そう思うとなのはは思わずおかしくなつて、口だけを吊り上げくすりと笑った。

わざわざテストなんてされなくたって、答えは決まっているからだ。

「いくよ、レイジングハート。入った途端奇襲されるかもしれないから、プロテクション。それと、シユートバレットもすぐに打てるようにしておこう」

とにかく敵の本陣に突入するのだから、無防備のままというのはいけない。事前に用意できる術式は思い切り使うことだ。

空中に数十秒踏みとどまって、全ての準備を整えたのはは、いざ、といった顔で突入口を睨み——後ろには消して振り向かず——庭園の内部へ潜り込んだ。

そうして飛び出たのは、がらんどうな大広間である。長い眠りについていた古代遺跡のようで、見るものを威圧する外見に比べ、内部の構造は以外にも豪華にして華美だった。ただし、その広さの割には人っ子一人存在せず、待ち伏せているかと警戒した傀儡兵すら見当たらない。

なのははひとまず展開した射撃や防御を解除した。ただし、魔力を格納するのではなく雲のように散らす。

そのまま予断なく続け、小走りで進みゆく。その途中、眼に入るものがいくつかあった。

「これって……なんだろう。損傷……もしかして、戦闘の後？　まだ直ってないってことは、誰かがこの中で戦ったってこと？」

壁のそこかしこにある黒い煤、そして破片。ヒビが入っていたり、酷い所には穿ったような穴が空いている。念のため、レイジングハートに探知させる。もし傷跡に魔力の残滓が残っているとすれば、魔法を使う人間が近くで戦闘している事になるからだ。フェイトとの競争で先を越された時も、現場には戦闘の跡と魔力が残っていた。そんな経験則に基づく行動である。

結果は白。何らの痕跡も見いだせない。となると、目の前にある戦闘痕はかなり前に付けられたことになる。しかし、戦闘が起こってから暫く経っているというのに、この人間はそれを一つも直さずにいるのだろうか？　そこがなのはにはおかしく思えた。普通、こういつ

た大きな屋敷、例えばすずかやアリサの屋敷内では、もし汚れや傷がついたとしても、次に来る時には必ず掃除されているはずだ。

襲いかかってきた機械の兵隊は完全な戦闘用だし、掃除ができるとは思えない。フェイトもアルフも、ずっとこの世界へ出さずぱりだった。と言うことは、もしかして、この広い館の中には、フェイトとアルフ、そしてフェイトの母親しかいなかったのではないか？

だとしたら、なんて寂しい所なんだろう。空洞のように広い廊下を、アルフと二人ぼつちで歩くフェイトの姿を、レイジングハートと共に歩む自分に重ね合わせて想像し、なのはは暗鬱な気持ちになった。

とはいえ、重要なのはそこではない。今までずっと影に伏せてきて、管理局ですらその位置を掴めなかった敵の本拠地に誰かが入り込んでいる。しかも明確な戦闘の跡を残して。

ジュエルシードを狙う人物がまた一人存在するというのだろうか。それは考えられない。もしそうならこんな奥まった所ではなく直接地球へ来て争うだろう。

では、一体誰が？

そこまで考えた所で、なのはの思考は中断を余儀なくされた。

「壁の向こうにいる？ ……ほんとだ、熱源が一杯」

エリアサーチを担当していたレイジングハートが、チカチカと発光しながら警告を発してくれたのだ。自分が進もうとする扉の向こうに、大量の敵が手ぐすね引いて待ち構えているという。

なのはも予想はしていたが、それでも敵の数は多い。さつき軽々と突破したのは小手調べで、数で押し潰すこちらが本命なのだ。

「でもー」

なのはのデバイスの先端が、丸くていかにも魔法の杖然とした形状から、鋭利かつ砲口のようにも見える攻撃的な形へと変わっていく。杖の柄からは魔力がオーバーフローして噴き出し始め、ピンク色の翼を形取った。

ドアの前でデバイスを構える。前面に出す防御の形では無く、浅く握って叩きつける近接攻撃の形でもない。なのはが得意な、腰だめの

砲撃体勢だ。

術式を展開すると同時に、反動から身体と足場を守る魔法陣を展開。デバイスにありつただけの魔力がチャージされ、砲口には帯状の魔法陣を纏わせ、魔力の収束を行わせる。

待ち構えているというのが分かれば、突撃する前に少しでも数を減らすべきだった。

だからなのは直接ドアを開かない。

乱暴に、砲撃魔法による壁抜きで押し入るのだ。

「デバイス・バスター！ フルパワー！」

桃色の閃光。そして魔力の奔流があっけなくドアを破壊し、奥で待ち構えていた傀儡兵をも巻き込んで直進した。

数秒間に渡る照射で、なのはの魔力もそこそこ削られている。ふう、と一息ついて光の収まったドアの先を見れば、床まで抉られた破壊の跡でしかなかった。

しかし、状況はなのはに予断を許さない。

新たな傀儡兵が、廊下のさらに奥から続々と湧き出してきたのである。

これではきりが無い。しかし、先に進んで、自分の目的を達するためには、やるしか無い。

なのはは第二射の準備を始めた。

篠ノ之束の空飛ぶサーカス（V）

「……………くそっ」

傀儡兵と戦闘し、鮮やかな勝利を収めていざ庭園内へと突入したなのは。一連の行動は、海岸から俯瞰すれば豆粒のようにしか見えないが、目のいい千冬にはその全てを見て取ることが出来た。

強くなったと思う。最初はへっぴり腰で自分の後ろに下がってばかりいたなのはが、ああまで自由に空を跳び、戦うとは。もちろん、手放しで喜ぶことは出来ない。本当なら戦いなんて知らなくてもいい、ごくごく普通の女の子なのだから。

しかし、空を飛び戦うのははとても生き生きとしていて、まるでずっと昔からそうしていたように自然であり、またそうあることが当然のようにも思えてくる。

千冬の見る限り、なのはには趣味、というより、一つ飛び抜けて熱中しているものが殆どなかった。おしやれや料理など女の子らしいことはひと通り出来るが、そこまで熱意を持っているとは思えない。ただ友達がやるから、母親に教えられたから習熟している程度のことだ。

それがどうだろう。魔法を手に入れた途端、毎朝練習し、学校中も暇さえあれば脳内で訓練を繰り返し、毎夜ジュエルシードの探索を繰り返して。それで弱音一つ吐いていない。

なのはには体力がない。碌に運動が出来ない所だけを見ていたの、千冬はずっとそう思い込んでいた。しかし、それは誤りであり、本当は他人が想像するよりずっと体力があつて、なおかつ根気強かつた。

フェイト相手に、なのはは何回負けただろう。痛めつけられただろう。目の前でジュエルシードを持ち去られたことも一度や二度ではない。千冬にとっては苦く、悔しい敗北の記憶だ。

自分が打ち込んだもので敗北するのは、初めての経験だろうし、打ちのめされてもおかしくはなかった。現に千冬など、最初に負けた時など変に気負って、一人きりで戦おうと無理な決意をきめてしまうく

らいショックを受けたのだ。

だが、なのははへこたれず、負ける度にいつも言っていた。もう少し頑張ろうと。

成長しているんだな、と千冬は思う。魔導とか戦闘能力といった単純なものではなく、もっと根底にある言わば心の強さが、今のなのはには備わっている。

いや、元から強くあったものが、魔法と戦いという非日常を触媒にして表に出たのだろう。

いいことだ。姉代わりとして常々なのはの事を気にかけて、束の魔の手から救うなどして守ってやっていた千冬にとって、その成長は素直に嬉しく思える。

だからこそ、自分の無力が情けない。

今、千冬はユーノと一緒に、傷ついた魔導師と使い魔の治療に務めている。

竹刀袋や学生鞆の中に治療用具を入れていて、だからこういった急場の手当てもできるのだが、そうし始めたきっかけが彼女ら強大な魔導師との出会いというのは皮肉だった。

フェイトの全身に刻み込まれた傷は、それぞれは浅くとも多く、鮮血が白い肌を濁らせるようににじみ出ている。千冬に出来る事は、その一つ一つに消毒液を撒き、包帯や絆創膏で覆うだけだ。

それは確かに大事な仕事だ。放っておいたら怪我した一人と一匹は、ひよっとすると息絶えてしまうかもしれないから。

しかし、湧き出る無力感と無念さは、とても我慢できるものではなかった。

「私には」

口が動いてしまう。

「この程度のことしか出来ないのか……今、なのはは海の向こうで、たった一人で戦っているというのに」

改めて戦おうと決意したあの時、自分に課した務めは何だ。なのはを守ることだ。

だのに、こうして後ろで、ただ彼女が戦う姿を見守ることしか出来

ない。

力がないなりにやることはある。例えばこうして怪我人の手当てを行い、管理局の突破を待って状況を伝えること。それだって必要で、為すべき立派な仕事だろう。

しかし、高町なのはが空を飛ぶことに長け、それが性分になっているのなら。織斑千冬のそれは剣を振るうことにこそあるのだ。

ひたすらに悔しい。そんな千冬を氣遣ったのか、ユーノが慰めるように話しかけてきた。

「そんなに、悔しいのかい？　なのはの隣で戦えないことが」

「ああ、悔しいきー！　悔しいとも！　あいつを守るために私は今まで戦ってきたんだから！」

千冬は怒鳴るように返した。

ユーノは、なんとも言えないような目で歯を食いしばる彼女を見つめる。もちろん、倒れた少女と狼を治療する手を休ませることはない。フェレットの身体であっても、包帯を巻くことくらいは出来る。

唇を噛んでしまうくらいに食いしばる口の力を緩め、自嘲するように息を吐いた千冬は更に続けた。

「まだ割り切れてないのさ。妹のような存在に、いつの間にか追い抜かれたってことをな。あの家に来てから……年下のなのはを守ってやること、それが私のやらなければいけないこと、いや、恩返しだと考えていたから」

「恩返し……？　千冬って、元からなのはの家に居たんじゃないんだ」
ああ、と短く首肯して、ユーノの顔を見る。短い間だが苦楽を共にしてきた仲間でも口も硬く、信頼できる男だ。時には鬚を並べ、いや肩に乗ってもらって一緒に戦ったこともある。

話してもいいだろう、と判断した千冬は、ゆっくりと口を開いた。
「いやな。身内の恥を話すようで恥ずかしいことだが、1年前、親に捨てられたんだ。それから師範に救われて、その後も色々とお世話になっっている」

流石にユーノも驚き手を止めた。

千冬は何処か遠くに、在りし日の風景を投影させたのを見つめなが

ら、淡々と話す。

「父は乱暴という概念を人の形に整えたような男でな。その横暴を一手に受けた母は、どこかに恨み節をぶつけたかったんだろう。目の前にある、自分より弱い者に当たるとなっている。そうやってからは、まあ負のループというやつだ。空気が荒んでいく度に父は荒れ、母もますます陰湿になり、歪みは全部私に押し付けられた」

一息にそこまで語ると、彼女はほう、と溜息を付く。忌まわしい思い出のはずだが、不思議に心は熱くならず、石のように固く冷たく動かない。

結婚してからずっといたぶられ続けていた母親の心はすっかり荒んで、千冬に対する扱いもどんどん非道になっていった。一人きりで部屋の隅に閉じ込められ食事もろくに与えられない。たまに外に出されると思ったら、殴られ、蹴られの繰り返しに苛まれる。

父親も見ても見ぬふりをするどころか、自分の娘が弱者の母親にも逆らえないか弱い存在であることに気づき、嬉々として虐待に加わり始めた。

止めるものの居ない暴力行為は段々とエスカレートしていく。幼い千冬の肌には生傷と青アザが絶えず唇は常時切れていて、更には不潔なのでしばしば病気にかかり高熱を出しても病院にかかることすら出来ない。

「自分のことだが、よくもまああそこまで、ボロ雑巾のように扱われたものだと思うよ」

ユーノは、悲惨な待遇を一言で纏めた千冬があまりにも悲惨に思え、その顔を直視することが出来なかった。

幼い頃からずっと虐待されていて、それに慣れているのだ。だから、他の人から見ると思い出したくもないようなことだって、ごく普通に話せてしまう。

ユーノも両親がおらず、スクライア族によって育てられてきた身なのだが、区別も差別もされずに他の子供と同列に扱われていた。才能を鑑みてのことなのだろうが、魔法学院にまで通うことだって出来たのだ。

「私も私で、なんとというか、頑丈だろう、身体的に。だから、色々されてもあつという間に治つてしまつて歯止めが掛からなくてな。『これ以上は流石に不味い』というタガが外れてしまうのさ」

千冬は、幼い頃から身体が強かった。それもただ強い、と言う言葉では表せない程だ。普通の子供ならとても耐えられないような仕打ちに合つても、数日後には元通りに治つてしまう。骨折しても、添え木すら必要なしにいつの間にか骨がくつついている。高熱は3日も経たずに収まり、不潔な環境でも身体を崩すことがない。

それは、篠ノ之束の幼少期に良く似ているとも言えよう。他の子供からかけ離れた能力と異常性。束は頭脳がそうだったが、千冬のそれは肉体だった。

千冬を弄ぶ両親にとつて、それはもつきの幸いだった。なにしろいくら殴つても蹴つても、痛めつけた果てに何もせず放置しても向こうのほうで勝手に元に戻るのだ。鬱憤を晴らす道具としては最適だろう。

独善的な大人二人と寡黙に耐える童女の間にあるのは、もはや親子の関係ではない。使うものと使われるもの。幼い頃の千冬は物言わぬ道具でしかなかった。

「千冬は——それで、大丈夫だったの？ 身体は大丈夫でも、心は」
「物心ついた時からそうだったんだ。だから、あんまり不思議にも思わなかった。自分はそういうものなんだ、と諦めて、納得していたよ」
誰にも頼れず甘えられない幼少期。想像するとユーノの気持ちは更に暗くなつた。

千冬の語り口は、他愛のない思ひ出を何気なく話すような口ぶりだった。千冬にとつては正しくそうなのだ。それ以外の道を知らず、他の価値観を知らなかったのだから。

「だがな」

逆説の接続詞。それを聞いた途端、ユーノは目を見張つた。今まで白けているようにも聞こえていた千冬の言葉に、はつきりとした重みが申し掛かり始めた、と感じたからだ。

「弟が生まれた。冷え込んだ二人の間から、どうして生まれたんだろ

うな。とにかく、生まれたんだ。弟が。産婦人科には私も連れて行かれてな。まだ産毛も生えていないそいつを見て——弱い、と感じた」よく考えずとも当たり前のことである。赤ん坊は弱いに決まっている。

だが、家庭という環境の中に、初めて自分より立場の弱いものが生まれた。その事実が千冬の心にある感情を宿した。

守らなければならない。この無垢で、か弱い自分の弟を。姉として。

親は頼りにならない、というより寧ろ親から守ってやらねばならない。生まれた子供を見て、表面上は喜びながらも明らかに冷たく嗜虐的な目を向けた両親に対し、千冬は初めて憤りを覚え彼らを悪虐非道の存在だと判断した。

それまでは、痛みや苦しみに対する個人的な怒りこそあれど、それが当たり前で仕方の無いことだと思つて幼い胸の中で必死に封じ込めていたのだ。だが、そう出来るのはあくまで自分一人のこと。身体が強くて治りも早い自分だから、親の暴力を受け止めきれているからだ。

しかし弟は——織斑一夏は余りに弱い。

だから千冬は決断した。

「それで、両親が一夏を家に連れ帰つたその日、初めて親に反抗した。反抗期、というには少し早いかもしれない……本当に、呆気無いものだったよ。手を振るえば簡単に押さえ込める。殴り返そうとしても余りに遅い。その時は神に抗うくらいの覚悟で挑んだのだが、反逆はあっさり成功して、二人は逃げた」

「それは——」

捨てたというより、子供のほうで親を捨てたんじゃないか。

そう言おうとした寸前でユーノは口を閉じた。話を聞く限り捨てられて当然の親だったろうし、千冬がそう言うのだから、やはり織斑姉弟は『親に捨てられた』のだ。子供に悪事を振るい、その反抗に耐え切れずに逃避した二人の男女に。

「それからと言うもの、私は一夏の世話にかかりきりになった。8歳

の少女と赤ん坊のふたりきりはとても苦勞した。だけど楽しい日々だった。何もかも自分でやらなければならぬが、その代わり自由で、もう傷付けられることはないのだから」

しかし、解放された二人は、社会から見ると余りにも異常な二人である。

それを正常という粹に戻すための使者は当然やってきた。

「役所や児童相談所から毎日のように人が来た。二人だけだと辛いだろう。私たちが皆で楽しく生活できる場所に案内してあげよう」と

「それで、どうしたの」

「決まっている。全員追い返した。私たちはこれでいいと思っていたからな」

蒸発した親が残っていた金はそこそこあったし、家もある。

今思うと大きな間違えだったが、私たちは二人きりでいいのだと、そう信じて止まなかった。

「第一、情けないことだが、私は大人が怖くなっていた」

「虐待されたから？」

「……あの程度でトラウマになると認めたくはないがな。へそ曲がりになってしまったのは確かだ」

トラウマになるほど痛めつけられたことより、寧ろトラウマを持っていたことを悔しがる千冬。常人とはかなりズレている反応は、やっぱり教授の親友なのかもしれない。

ユーノは自分自身、変な所で納得していた。

「熱心に説得されようとも、半分強制的に連れだされようとも、私はこの腕で全て排除した。いくら大人とはいえ、優男や女を組み伏せるのは軽いものだ。もしかしたら、今でもあの家で誰もを拒否した二人暮らしを続けていたのかもしれない」

「でも今の千冬は、なのはの家で暮らしてる。ということは」

「そう。最後に来たのが私の師範。高町士郎だった」

それこそ数時代前まで家系図を遡らない程の薄い間柄だが、高町家と織斑家にはたしかに遠縁がある。それが偶々近くに住んでいるということ、風の噂で事態を聞いた士郎が立ち上がった。

無論、士郎にそうする理由は何もない。三人の子供、特に末娘のなのはまだまだまだ育ち盛りだというのにその中に見知らぬ二人を入れてどうなるかは分からない。

もう少しドライなことを言えば、士郎の怪我也治り、店も回転してきて経済的には順調な高町家だが、二人の子供を養い、進学などもさせる程の余裕が有るかどうかは微妙なところだ。

しかし、そんなことは抜きにして、高町士郎は飛び出した。目の前に困っている子がいて、自分がそれを助けられるならば放ってはおけない。迷うのも考えるのも二の次で、まずは飛び出せ。

人に言えない影を持つ不破の血を継いでいる士郎。だがその性根は、どうしようもない程のお人好しだった。妻の桃子も、大学生になる恭也もそれを二十分に分かっていたし、寧ろ士郎に同調する程の氣立ての良さを持っていた。

という訳で、二人きりの空間を守ろうとする千冬と、士郎は相対した。

「師範はとにかく押しが強くてな。私が何度断ろうとも止まらなかつた。ただ、無理に私を連れだそうという訳じゃないんだ。朝から晩まで暇さえあれば家に来て、翠屋のケーキや桃子さんの作った夕食をごちそうしてくれたり、一夏をあやしてくれたり、壊れたテレビや届かない新聞の代わりに、ニュースやサッカーの話なんかをするだけだな」

「なんだか、なのはにそっくりだね」

「ああ……」

ひよんなことから巻き込まれても文句ひとつ言わず、むしろ結構強引にジュエルシードを集めに協力してくれて、敵として戦うフェイトも放っておけず、戦う理由を知りたがり、そして今はその彼女や自分たちを守るため、悪の親玉たるプレシアの居城へ一人乗り込んでいく。

そんななのはの父親だから、と思うと、ユーノはちらとしか見えない高町士郎という人の人格を容易に想像できた。あの親にして、この娘ありである。

「優しい人だろう？　だが、その頃の私はどうしようもなく捻くれていてな……」

「士郎さんを、受け入れられなかった？」

「ああ。今まで見たどの大人とも違って、私たちを否定するわけでもなく、強制するわけでもなく、只優しくしてくれる。それが、逆に怖くなつたんだ。だからある日、今までのように叩きのめして出て行つてもらおうと手を出したんだが……甘かったよ」

言葉尻と同時に苦笑する千冬はあの戦い、いや、戦いにすらならなかつた只の子供の癩癩を仔細に思い出す。

全力の攻撃。殺さないよう、両親相手にもも出さなかつた全力のパンチとキックを、士郎は意図もあつさりといなしてしまった。しかし自分からは一切手を出さず、舐められていると見て更に力を入れる千冬の攻撃もひたすらかわし続ける。

その立ち振舞もさることながら、何より浮かべていた顔が千冬の記憶に染み付いて消えない。

穏やかに笑っていたのだ。

やんちゃ坊主がじゃれついてくるのにやれやれ、なんて呟きながら付き合つてやるように。

「その時に初めて、ああ、この人には敵わないなど感じた。親にも大人にも対抗して、たつた二人でいびつだけれど生活出来て、私は内心調子に乗っていたんだ。だけど、師範がそれを突き崩してくれた」

千冬は初めて、尊敬すべき大人に出会つた。親であるという理由だけで苦痛を押し付ける両親や、仕事とはいえあくまで他人として付き合うことしかない役所の大人たち。彼らと違い、士郎は千冬の全てを受け止めることが出来て、尚且つ間違いを正してくれる。

そんな大人を尊敬できずに、一体誰を信じる事が出来るだろう。

「いつの間にか、私は師範に抱きついて泣きじやくつていた。今まで我慢していた怒り、憎しみ、悲しみ、憤り。師範は全て聞いてくれた。聞いて、それから、立派だね、頑張ったねと言ってくれたんだ……！」

千冬は再び手を握り締め、血がにじむ程に力を入れる。

それは、虐められていた幼少期について、只々事実を無感情に話し

ていた時とは全く違う。千冬が語るのは最早、単なる昔の記憶ではなく、心に熱く刻みついた『思い出』になっていた。

「その日の夜に、私は高町家の門を潜った。桃子さんも恭也兄も美由希姉も、みんな歓迎してくれたよ。そして……なのはにも、出会ったんだ」

——えと、こんにちは。私、高町なのは。千冬ちゃんの話は、おとーさんから聞いてて……凄くなって思った！ 弟、えと、一夏くと二人で暮らしちゃうなんて！

——そんなに凄くない。ただ意地を張ってただけだ。

——そっか。でも、凄いよ。おとーさんが来るまでずっと、えと、意地を張ってた、んでしょ？ なのはには出来ないな、そんなこと。千冬ちゃん、なのはよりずっと大人かも。

「あの時のなのはの目の色を、私は生涯忘れない。私のやったことの是非を問わずに、只私が何をしたかを見て、認めてくれたんだ。なのはは」

千冬にとってそれは救いだった。何も分からず、大人を拒否しひねくれて、無駄なことをしてしまったのではないかと思っていた彼女の心のしこりを、ほんのり温かく溶かしてくれた。

そして、士郎にもこう言われた。

——なのはと君とは同い年だけど、出来れば、君にはなのはの姉代わりになってほしい。美由希とはすこし年が離れているし、それに……

実は結構入り組んでいる高町家の家庭事情には敢えて触れず、士郎は続けた。

——恥ずかしい話だけど、私と桃子、恭也と美由希ばかりが二人組になって、なのはの存在が、微妙に浮いてしまうこともあつてね。だから、なのはが寂しくならないように、出来るだけ、一緒になって欲しいんだ。

千冬にとつて、身を呈しても守らなければならないものが、もう一つ増えた瞬間だった。

「なるほど。だから千冬はなのはと一緒に戦いたかったり、教授のイタズラから守ろうとしたりしたんだね」

「そういうことさ。最も今はこの有り様だ。たった一人で戦うのはを、後ろから見守ってやることしか出来ない、弱者に成り果ててしまった……」

思い出話を終え、一旦忘却した無力感がまた強くぶり返し、地団駄を踏む千冬であつたが。

ふと、この場に近寄る誰かの気配を感じ、背負っていた木刀を構え直した。

「どうしたの千冬!?!」

驚いたユーノも、フレットになつてしまった身体を動かし、千冬の肩へと乗る。いざ戦闘ともなれば、からっけつの魔力でもなんとかサポートしてみようという考えだ。

「来るぞ……」

「あのロボットが!?!」

「違う!・ そうなら駆動音で分かる!・ こいつは気配だ。もつと深刻な……!」

「やだなあ、そうカッカしないでもいいのに」

場の空気に合わない間延びした声に、千冬もユーノも目を見はつた。

どうしてここに、彼女がいるんだ。デバイス整備に没頭していてアースラに居残り、きつと身動きが取れないはずなのに。

「束……」

「はいはい、束さんですよー。偽物でもコピーでもクローンでもない、正真正銘の束さんだよ!」

篠ノ之束がそこにいた。

いつものドレスといつものウサミミ。ただ目の下に一際濃い隈

と分厚いノートパソコンを引っさげ、今まで影に隠れていた謎めくウサギはあっさり表舞台に姿を表した。

木剣を下げた千冬だが、代わりに顔を近づけ、きつい雰囲気だ詰める。アースラが来てからというもの、妙な行動ばかりしていた束の突然の登場だ。なまじ敵が現れるよりも気が立つのは当然だった。

「どうして、どうやってここに来た！ 何のために！」

「まあまあそんなことより。私、感動しちゃったよ」

「なんだとっ」

「それはもちろん、ちーちゃんの語るも涙、聞くも涙の物語にだよ！」
んぐ、と妙な呻きを出して固まる千冬。

唯でさえ恥ずかしい自分の昔話を、一番聞かれたくない奴に聞かれました。

「両親に虐められ、弟とふたりきりで暮らしたい自分の気持ちも理解されない……あああ、なんて可哀相」

「あっ……う、あ……」

「天才なのを誰にも理解されなかった私の苦しみと、はてさてどつちが重く、悲しいのやらああ……よよよ」

「こ、こいつはっ……白々しい泣き真似なんかするな！ 面白がってるくせに！」

理解されなくてもどうでもいい人種なのに、わざと茶化すような事を言って煽る束の胸を、千冬は頬を赤らめ、半ば涙目になってぽかぽかと叩いた。

全力でぶっ叩いているはずなのに、束の身体は小ゆるぎもしない。

「だからお前にだけは話したくなかったんだ！ それを……！」

「最初っから私が伏せていたと気付かず、カコバナをしたちーちゃんが悪いのだよ？」

「うるさい！ お前という奴はいつもいつも他人をコケにして！」

その言い争いが余りにも下らなく聞こえたので、ユーノは千冬の肩の上で、がくりと力を抜いた。だがここに篠ノ之束が来るということとは、どういうことなのだろうという疑問に対して、答えを求めなくてはならない。

この少女が乗り出して来るということは、大抵そこが台風のご真ん中であるということだから。

「その、教授?」

「ん、どしたのユーノくん?」

「教授はどうしてここに? どうやってとは聞かないけど、何をやるうと……」

言葉が続く前に束が取り出したのは、腕に巻き付ける二つのガントレットだった。

「これを渡しに来たんだ! ちーちゃん専用調整してるんだよ!」

「なに? これはデバイス……なのか!」

初めて見た二人が、揃ってそう勘違いしたのも無理は無い。少し大きめだが、何やら機械的なアクセサリというのはデバイスの待機形態そっくりだったからだ。

しかし束は首を横に振り、これがデバイスなら魔力の無い千冬に渡すはずがないと否定した。

「なら、これは一体……」

「ああ、名前はまだ決めてないんだ! でも、今まで私が作った発明品の中でも、文字通りの最高傑作だから! ほら、試してみよう!」

「試す?……うわっ!」

言われるがままに手にとった千冬。すると、ガントレットは手から離れ、勝手に千冬の前腕部へと巻き付いた。

慌てて外そうとしても、ロックされていて出来ない。呪いでも掛かっているのかと憤慨した千冬だが、腕輪は彼女のいうことを聞かず、更に眩く光り出していく。

「おい束、どういうことだこれは!」

「大丈夫大丈夫、後20秒もすればセッティング完了だから! ああ、ユーノくんは巻き込まれない内に離れといた方がいいよ?」

束は手持ちのパソコンに何やら物凄い勢いでプログラムを打ち込みながら告げる。とにかく教授が言っているのだから、危険には間違いないと、ユーノは慌てて飛び降りた。

「初期化、最適化、一気に完了……パーソナルデータ『織斑千冬』記録

完了っつと」

「な、な………に!?!」

千冬の頭に、一瞬電撃のような感覚が走り——これが何か、今から自分に起こることが何か分かった。さっきまで外そうとしていたガントレットは、今は不思議と自分の手に馴染んでいる。

これは何のためにあるのか——そうだ。これは。

私の翼だ。

「な、な、教授、これって!?!」

千冬の両手首から、全身に薄い光の膜が広がっていく。そして、光の粒子が解放されるように溢れ再集結し、人型の、しかし巨大な脚部と大きな翼を持った白い装甲と、一振りの大剣が現れた。

その異様な姿に、ユーノが叫ぶように問うも、束は目の前に映る光景とPCからの制御に夢中だ。

「二次移行、完了………つと。そんじゃまあ、ちーちゃん! ぶあーっつと行ってみよー!」

束の言葉には、目的語が欠けている。しかし、千冬にはそれがはつきりとわかった。

今から私は飛んで行く。無かった翼を与えられたなら、行くべき場所はまだひとつ。

なのはの所へ。

今の千冬には分かっていた。あの禍々しい城塞の中で、なのはは苦しみに、追い詰められている。

これは予感でも山勘でもない。白い鎧に包まれた千冬には、はるか遠くで起こっている戦闘が、はつきりと知覚できるのだ。

「束………」

だが、ほんの少しだけ気になることもあり、一瞬後ろを振り返る。目に写った顔は、勝ち気に笑っていた。

行け、ということだろう。今は何も考えず、なのはのために戦えということだ。

ああ、全く癩に障る。これでは、何から何までお前の計算通りじゃないか。

だけど。

「ありがとうな」

これで、私はなのはを守る。まだなのはの「姉」でいられる。なのはの痛みや苦しみを、共に背負って、一緒に飛んでいける。

その感謝を一言に纏め、千冬は地を蹴り、未だ暗雲漂う空へと飛び出していった。

「……行っちゃった。教授。あれが、教授が夜通し作ってた物なんだね？」

「お察しの通り！ いやー、大分切羽詰ってて、今日もギリギリまで調整しててね？ 結局間に合わない所が幾つかあったから、今もこうしてノーパソで随時システムを組み立ててるんだけど」

「なるほど……今まで僕達の前に出てこなかったのは、それが理由だったんだ……で、あれってさ、一体何？ なんだか、白い鎧を着た、騎士みたいだったけど」

「白騎士、かあ……いいねそれ、頂き！ でも、あれはまだ未完成の不完全、コアも初期段階で、まだまだ生まれたての赤ちゃんみたいなのだから」

「だから？」

「ちよっともじって、シロシキ、とでもしておくかな？」

軽歌劇の終演（Ⅰ）

「バスターツ！」

短縮された詠唱が響き、一秒後の砲撃音。再び、幾重にも連なる兵隊が、纏めて吹き飛び鉄くずへと変わる。相手は只の無機物だから、手加減はいらない。魔力ダメージの砲撃ではなく、物理破壊設定の砲撃の光を容赦なく降り注がせる事が出来る。

しかし、なのはの前に現れる敵は、一向にして減らず、寧ろ台風の目に集う雲霞の如くに数を増やしている。敵の要塞じみた拠点に入ってからというもの、目の前には敵、敵、敵また敵。5体吹き飛ばせば10体、それを吹き飛ばせばまた20体という有り様だった。

「でも、まだっ！」

そんな人海作戦に対して、なのははたった一人。消耗は少しずつ積み重なっていく。そうと分かっていたいながら、しかし彼女は尚杖を離さず、流し込む魔力を絶やさない。今更止まった所で、何の意味も無いからだ。何より彼女、ここへ突っ込んでから後退とか撤退とか、そういうものを考えないようにしている。

「……………!!」

冷たい感覚が背中に走ったので、魔力を一瞬足から地面へ打ち放ち、ジャンプするように宙へ浮く。間髪入れず、刃を掲げた兵隊が跳んだ自分の真下をくぐり抜けた。真後ろからの奇襲を間一髪回避だ。同じことを繰り返されたくないよう、魔力弾を生成して撃ち込み撃破する。だが、それまでなのはがいた地面はあつという間に別の兵隊で埋められ、これではのの前後左右、そして上下にも敵ばかりとなった。

味方はおらず敵ばかり、自分の体力も魔力も残り少ない。

そういう時、どうすればいいのか。答えは簡単だ。

「残存魔力、38%……バリアジャケット損傷、デバイス小破……分かってるよ、それでも！」

それでも、前に進もう。道を、切り拓こう。

無謀かつ無策だが、それでも進まなければ始まらないのだ。

辿り着くまで。この事件の全てを裏から操り、今表舞台に立って幕を閉じようとしているプレシア・テスタロッサが導き出した答えを聞かなければ。

直接、自分の目と耳、頭、心で聞いて。そうしないと、こんな結末、どうやったって納得出来ない。

なのはは、再び魔力のチャージを始めた。その心臓近くにある魔法の核、リンカーコアが血液を送り出すポンプのように脈動し、発現器たるレイジングハートへと送られる。そうする度に魔力の通り道になる左腕がじいんと熱くなるのだが、その感触をなのはは気に入っていた。

自分の中に滾る大事なもの、力のあるものを外に出す事ができる。誰かのために使えるという事を、その熱さが表している。

だから、疲れていても、なのはの心、それから掛け声さえも、まだ熱い。

「行こう、レイジングハート！」

その掛け声に、なのはの愛杖はキラリと光りながら答えた。

知能を持ち、絶望的な状況を正確に把握しているはずの彼女ももはや、この行為が戦術的、戦略的にいかなる価値があるかという問いをメモリの中から削除していた。

自分の主が行きたいと言っているのだ。プレシア・テスタロッサの眼前へ。ならばそれを支え、実現する事こそが杖の役割ではないか。

そんな主従の目の前に、無機質なツインアイを光らせた傀儡兵が迫る。その数、ざっと50数体。

大広間の廊下は既に足の踏み場も無くなって、高い天井も蝙蝠のような翼の蠢きに塗れてもはや見えない。

AAAランクの魔導師にとって、一体一体はまるで木偶の坊だが、それでもこの数は脅威になる。正に、悪鬼群れなす、といった情景だ。だが、この50体が一齐に狙うたった9歳の女の子には、彼らに対する恐怖も怯えも皆無だった。

彼女がたった今考えているのは、この分厚くて攻撃的な壁に、どうやって穴を開け広げ抜け出すかだけだ。

それは、行動も目的も表情も違うけれど、少し前に同じ廊下で縛られ同じく凶悪な傀儡兵に囲まれ襲われかけた、同じく9歳の女の子の立ち姿に、それはよく似通っていた。

「レイジングハート？ 砲撃魔法って、こう、バーって動かして薙ぎ払うこと出来るかな」

少し思案した後、なのはは問う。だが発した言葉は極めて直感的かつ前例も根拠も乏しいことだ。それもそのはずだ。ちよつとばかり考え込んだ所で、目の前から後ろ、真上や真下の大軍勢を駆逐する方法なんて浮かぶ訳がない。ここまで来たら、頼れるのは自分の身体と魔力、それから直感だけになる。

マスターの感覚的な問に、デバイスは機械的な論理でもって消極的な肯定を返した。砲撃中の魔導師の位置を、反動や衝撃を無視して無理やり転換させれば、砲撃魔法の掃射も可能だ、と。

「うん、じゃあそれ、やってみよっか」

まるで日々の訓練の中、余裕があるから別のプログラムも挟んでみるような軽い口調。だが、即座にスファイアは展開される。杖の穂先、それからなのはの左右に1つずつ。

狙いをつける必要はないから、杖に魔力が溜まっている今、引金を引くのに遠慮はない。その余裕もない。

彼女が桃色の閃光を発したのは、前から後ろから、上から下から、展開を終えた傀儡兵が飛びかかる、正に直前であった。

「ディバイン・バスター！ フルパワー！」

まるで不格好な溶接のように『全力』と後ろにくつついているこのバリエーション魔法が、今のなのはの全力全開だ。鋭利な爪を少女の身体へ食い込ませようとした兵共は、全方位に放たれる魔力の余波であっけなく吹き飛ばされた。

だが、なのはの魔法はそれだけでは終わらない。身体の左右に展開したスファイアから、魔力を放出する。砲撃でもなく射撃でもない短く小刻みな出力と放射は、まるで人工衛星が姿勢を変えるためのエンジンとスラスターだ。それによって、砲撃の軸が少しずつ周り、魔力の軌跡で前方の敵が薙ぎ払われていく。

しかし、本来砲撃魔法というのはその身を固定して放つものであり、その常識を無理矢理捻じ曲げ、旋回の軸になろうとするのはの身体には、砲撃の反動や余波がまるで乱気流の如くに殴りかかってくる。

「ぐつ、うー！……うあああああつ！」

魔力ダメージ設定の魔法もそうだが、物理破壊設定の魔法は更に強い反動を伴う。それを捻じ曲げるからには、幼いなのはの身体を苛め抜かねばならない。杖も、強引に方向転換されて軋みを上げる。主従は揃って、魔法力学の摂理に喧嘩を売っていた。

だが、痛み能耐え切れず発した悲鳴は、むしろ凄まじい気合のように聞こえる。身を振られ、全身の縊り殺される程の反動に苛まれながら、少女のたおやかな心には、一分のヒビも入らない。

果たして、その暴拳の効果は——極めて大きかった。

傀儡兵の壁に隙間が開き、一文字上にどンドン切開されていく。物言わぬそれらが互いに押し合いへし合いするくらい密集していたこともあり、1つが爆発すれば連鎖爆発で2つ、3つと後続き。

結果として、なのはの前に立ち塞がる敵の大半は、溶け落ちた破片か吹き飛ばされた鉄くずへ姿を変えていた。

「やつ、た……」

掃射砲撃が終わり、魔力の奔流も底を尽いて止まった後。荒い息を吐き、流石に疲労困憊の極みであるのはだが、まだ休む訳にはいかない。

上下に展開していた傀儡兵の集団は、すぐさま開いた突破口を塞ぎに来るだろう。その前に、なんとしても突き進んで最深部まで辿り着かなければ、もう二度とチャンスはやって来ない。

もう、まともに動かない身体へ鞭を打ち、尽きかけた魔力の核からむしり取るような乱暴さで魔力を供出し、消えかけたフライヤーフィンへ与える。

蝶のようにふらふらと覚束ない飛び方で進んでいくのはだが、全体の半分以上を失った傀儡兵の陣形は乱れ、再編成は遅々として進まない。結果的に、呆気無く大広間を突破することが出来た。

そこからは、道なりに奥へ奥へと進んでいくだけである。奇妙なことに、増援も追手も、待ち伏せさえも現れない。大広間にあった大軍勢と、外の海上で襲いかかった個体で、敵の手持ちは尽きてしまったようだ。

もう少し。後少しで行ける。この事件の全てを握る人の所へ。

行ってどうするのか。疲れ果てた翼と、折れかけた杖でもって何が出来るものか。それらを関係ないと切り捨てながら、なのはは遂に、時の庭園の最深部まで辿り着いた。

「……よく、ここまで来たわね」

玉座のような椅子に座り、左腕の肘をついて、手首を折り曲げ手の甲の上に頬を載せたまま、気だるげな表情で客人を迎えたプレシア。だが、口から出た言葉は、彼女なりの大きな賞賛だった。

ジュエルシード封印の疲労もつかの間、本隊であるアースラとの連絡は途絶え、硬い結界の中で傀儡兵に襲われ続ける。そんな中、無謀にも敵本拠地への特攻を決意し、行く手を阻む大量の傀儡兵を撃ち抜いて、満身創痍になりながらも遂に首魁である自分の元へとたどり着いた少女。

プレシアはなのはを、同じ魔導の道へと進んだ者として、確かに賞賛していた——バインドで四肢を雁字搦めに捉え、自分の目の前へと引きずり出しながら。

「でも、もうお終いよ。その魔力じゃあ、ね」

プレシアが空いている右腕の人差し指をくい、と動かせば、バインドの縛りがきつくなり、傷みきったなのはの身体へ更なる苦痛を与える。それは、なのはにとって薄れゆく意識を更に追い詰める鈍痛になるが、うめき声を上げながらも、薄い群青色の目は、プレシアの顔から離れず、強張った表情のまま、じっと見つめてくる。

その不屈が、プレシアを更に苛立たせた。

「教えなさい。何故ここまで来たの？　ここまで来た所で、私を倒せるはずがないというのに」

「聞きたいのは、こっち、です」

研がれた鉄の鋏のように冷たく鋭くサデイスティックなプレシアの問いに、なのはは真つ向から問い返した。

「どうして、フェイトちゃんを撃ったんですか」

「何かと思えば。説明したでしょう？　フェイトは紛い物、私の本当の娘はアリシアだと」

「でも、それでも。フェイトちゃんを『作った』のはあなたです」

きつぱりと、そう言い放つ。

「自分のお腹の中で生まれなくても。ジュエルシードを集めるためだけに作っていても。フェイトちゃんを作ったのはあなたで、フェイトちゃんはあなたを愛していました」

いよいよ、プレシアの怒りは沸点を超えた。

中指が動く、なのはの首にも鎖のようなバインドがかかり、喋るな、と言わんばかりに气道を締める。殺さず、僅かに息が通るようにはしているが、その苦痛と息苦しきは、9歳の女の子が耐え切れるものではない。しかし、こひゆう、こひゆう、と必死に酸素を確保しながら、なのははまだ、言葉を紡ごうとしていた。

「あな、た、は……フェ、ト、やん、に……」

「黙りなさい。フェイトは道具よ。娘じゃないわ」

「……っ!!」

どこまでも酷薄な言葉に、きつ、となのははプレシアを睨む。

プレシアの中指にある、細い糸を引っ掛けるような手応えが消えた。見ると、首のバインドが解除されている。

この短時間でバインドを解き放つ。恐らく、少女が左腕に握って離さないデバイスが、精一杯の献身でもって術式を構築したのだろう。でなければ、過負担で機能停止などするはずがない。

「レイジング、ハート……」

なのはは一瞬だけ、物言わなくなった愛杖を見る。細いながらも繋

がっていた魔力の線が、霞むように消えて、なくなった。ユーノが残した魔力も全て使い果たし、もう、なのはは一人である。

だが。いや、だから問いかけねばならない。

一人で玉座に座り、人の形をした妄執しか見ていない、プレシア・テスタロッサに。

「二人でいたくないなら。誰かと一緒にいたいなら、こんなことじゃダメなんです」

それは、高町なのはという人間が、二年前に出会った友人との触れ合い、そして彼女から伝え聞いた思い出話から、学んだこと。

彼女は一人だった。それは、常人余人が彼女の思考についていけなかったからでも、独特な性格と感性を避けたからでもない。それらはあくまで副因であり、主因にはなり得ない。彼女は――篠ノ之東は、かつては誰も、何もかも愛していなかった。自分の父母も、クラスメートも先生も。彼女は自分の周りにあるもの全てから目を背けていた。そんな子が、誰かと一緒にいられる訳がない。誰も愛していないのだから、誰かに愛されることはないし、誰を愛することも出来ない。そんな、東よりずっと鈍いなのはにだって分かる、シンプルで純粹な理屈だ。

だから、なのはは彼女に近づいた。その時まで何の関わりもなかった東へ、関わりを持つとうと頑張った。今よりも幼いなのははあの時、何も考えないで、本能的に彼女の前に立っていたのだが、今考えてみれば、自分の心の中で無形のロジックが働いていたのだとも解釈出来るのだ。

そうして、なのはは東の友達になった。そして東も、なのはを友達と思ひ、愛するようになる。するとどうだろう。彼女の周りに、少しずつ、僅かにだけれど、人が増えてきた。アリサ。それから千冬にユーノ。しかも、最後のユーノについては、余曲折あったが自分から近づいて『友達』になったのだ。

最も、本人たちからすれば主人と従者のようなものだと言って否定するだろう。しかしなのはにとって、一緒に研究して、戦う二人の姿は紛うことなき友人同士。

そんな二人を見るたびに、なのはは心底安心し、だからこそ、ユーノの身柄を未だ篠ノ之家に預けているのである。

誰かと友達になるには、自分から、誰かに近づく姿勢を持たなければならぬ。

なのはが今まで9年生生きてきて学び得た事の中でも、最も尊いと思っているこの事実。これを、自分よりずっと長く生きてきた魔女へと伝えたくて、なのははボロボロになり、辿り着いたのだ。

「娘さんが居なくても、あなたの側にいてくれる人は、手伝ってくれる人は、見守ってくれる人は……あなたを好きでいて、愛してくれる人は、たくさん、たくさんいたはずですよ」

なのはは知らなかった。だが、分かっていた。

プレシア・テスタロッサは、一人でここまで来たようで、決してそうではない。

彼女自身はひとりきりを恐れて、最も大切だった人を蘇らせ、愛しよう、愛されようとされているが。それを叶える道則の中で、誰かがきつと彼女を助けてくれたはずだ。

彼女を愛する誰かが、命がけて彼女の道を作り出してきた。

そうでなければ、死にかけてような顔色をした女性一人だけでは、ここまで辿り着けなかったはずだから。

疲れ果てていた自分が、ユーノの魔力とレイジングハートの力で、漸く、この場所へ来れたように。

「そんな人たちに、あなたは何をしましたか。そんな人たちを、あなたは愛していましたか」

プレシアは何も言い返せない。理屈でもって反論できない。

彼女はフェイトを、そして、その前には己の使い魔も使い捨てていた。損得関係なく、ただ真心によって力を尽くしてくれた彼女らを、冷淡に、使えなくなったら何の惜しみも抱かず切って捨てていた。

「そうしていないのに、娘さんを一人蘇らせて、愛することが出来るって、私には思えません」

「……………」

「娘さんに、愛されることも出来ないって、思ってます。だって、あな

たは多分、その時からずつと変わっているから。母親だったあなたと、今のあなたは違うから……」

「黙りなさい！」

いつの間にか、プレシアは玉座から立ち上がっていた。目の前で戯言をつらつらと並べる小娘に対し、激情し、ストレージタイプの杖を痛いほどに握り締めながら一喝した。

「私は今でも、アリシアの母よ！ そうでなければ何だというの！」

「それは、あなたの思い込みです。きつと、アリシアちゃんは、今のあなたを見たら悲しみます」

「何も知らない子供がぺちやくちやと……！」

「気づいてください。こんなことをしても、誰も喜びません。あなたを愛してくれた人たちも、フェイトちゃんも、アリシアちゃんだって、きつと！」

「……誰も？」

しかし、なのはの言葉を聞いた途端に、プレシアの怒りはすつと収まった。

勿論、納得したわけではない。

言葉のぶつけあいには飽きたような顔の口からは、覚めたのを通り越して、底冷えした笑いが響く。

なのはも、予想外の反応に言葉を詰まらせた。この人は、何がおかしいのだろうか。

「誰も、喜ばない……？ 本当にそうかしらね」

「え……？」

「協力者がいるのよ。私の理想に共感してくれる」

プレシアの顔に、再び酷薄な微笑が戻った。しかも今度はまるで、舞台上が上がって小賢しく動く操り人形を前に、嘲笑するような印象すら見える。

び座りこむ彼女の視界に、もはやなのはは映っていないようだ。彼女の手足から伸びる糸、それを束ねる何者かを意識して話す。

「彼女は管理局の艦船をハッキングして動きを止め。この世界の地理を教えてくれた。ジュエルシードの状況についても詳しく、海に6つ

残っていたのを調べたのも彼女だった」

「……それって」

「あら、もう分かったの？ 流石、一番の大親友だと言われただけはあるわね」

くす、くすくす。

感心するのではなく、あくまで上から押さえつけるような笑い。

所詮、強情なだけで何も分からない小娘には理解出来ない物事なのだ、という侮蔑を込め、プレシアは言い放った。

「そう、篠ノ之束。私の企てに、あなたの大切なオトモダチが協力してくれているのよ」

軽歌劇の終演（Ⅱ）

それは、まだ時の庭園が、あてもなく次元空間内を漂っていた頃。プレシア・テスタロッサが事あるに備え、丹念に構築してきた防御機構をいともたやすく突破し、瞬く間に本丸へと乗り込んできた篠ノ之束は。

「貴方が何をしたいのか知りたいな。ジュエルシードを手に入れて、それから一体何をするつもりなのか。ただ願いを叶えるなんて、つまらない使い方はしないでしょ？ 大丈夫、守秘義務は守るよ。ユーノ君にも、管理局にも言わないから……ね、お話、聞かせて？」

科学者として、プレシアの功績を認め、親近感すら抱いたようだった。

なんとも素っ頓狂な話だが、プレシアにはそれが至極当然のことであるように感じられた。

篠ノ之束が『天才』だったからだ。ただ自称しているだけではない。フェイトの記憶を読み、そこから時の庭園の座標を掴んで転移する。そんな、双六のコマを指で弾いてあがりのマスまで飛ばすようなイカサマを、ついこの前まで魔法の無い世界に住んでいた、たった9歳の女の子がしでかしたのだ。

この、状況を無視して裏返すような暴挙を行える存在を、天才と呼ばずして、なんと呼ぶか。

「いいわ、話してあげる」

フェイトからの報告や自身の調査によって、自分たちに敵対している人物については概ね把握している。プレシアは束が天才で、高町なのはという同い年の少女を溺愛しているということも知っていた。

だから、プレシアはかつて誰にも打ち明けられなかった計画と、そこに行き着くまでの経緯も、思う存分に語る事ができた。

若い頃から天才だ、ミッド機械工学の若き俊英だと褒めそやされていたプレシアだが、本人の心はその明るさからは程遠かった。

彼女の周りの人間は、肩書だけを見るか、肩書を先入観にする。そ

して、彼女に対して一線を引く。それはプレシアにとって、何より不快なことだった。

だから、若くして結婚なんてこともしてみた。相手の男は同僚の、彼女ほどではないにしろ優秀な科学者で、客観的に見れば過不足無く自分を愛してくれた。それでも、彼女の心の中で何かが満たされない。

ある時プレシアは、夫に問いを投げかけた。自分がもし科学者でなく、何の取り柄もない女の子として生まれてきたら、果たして貴方に出会えたかしら、と。

彼は答えた。それはありえない。

どこまでも科学者然とした答えだった。確かに理屈で考えればその通りだ。科学にしか興味のない彼は、同じく科学の道を進んだ自分としか結ばれ得ない。

だが、その答えで彼女は冷めた。伴侶に選んだ者の愛ですら、プレシア・テストアロッサではなく、科学者プレシアに依って立つ概念であつたのだから。

そんな時に、アリシアが生まれた。

自分のお腹の中から生まれ出た命は、自分が天才であろうと、凡人であろうと愚鈍であろうと、そんな事はお構いなしに自分を求める。お腹が空いたら食べ物を与え無くてはならないし、着替えも他人任せ。好奇心が強く、目を離すとすぐに危ない所へ近づいてしまう。そんな手のかかる娘だけが、研究者でもなければ魔導師でもない、プレシア・テストアロッサという個人を求め、愛してくれた。

だから、アリシアが生まれてからの五年間は、プレシアにとって忙しくも満たされていた時間だった。

朝起きて、二人分の食事を手ずから作る。理工学の知識はすぐに覚えるプレシアだが、料理のレシピ一つ習得するのに一週間も掛かったのはいい苦労話だ。

食べればすぐ仕事場に行く。場合によっては朝から、テーブルにラップがけの食事だけを残して行かねばならないのはとても心苦しいことだった。

長い仕事だが、時折合間合間に家へ電話をかける事も出来る。不定期だがある程度固まっているその時間を、アリシアは何となくだが覚えていよう、遊びやお昼寝で電話に気づかないことは全く無く、いつもリニスと一緒に笑いかけてくれた。

仕事を終えて帰るとすぐに夕食を手がけお風呂へ入れさせ、いつまでも遊び続けたがるのを引き止めて寝かせなければならぬ。ようやく解放されるのは夜も更けてきた頃で、明日の仕事も考えれば自分の時間など殆ど残らない。

そんな風に、本来二人で足並みを合わせる所を一人で行うのだから、プレシアにはかなりの負担がかかっていた。

しかし、朝起きた時、出かける時、電話中、帰宅、そしてお休みのキスで。

アリシアが見せてくれた心からの笑顔と何にも染まらない心からの言葉は、苦勞を補うどころか、プレシアにとって初めての生きがいだった。排煙だらけの街の空に、一条の風が吹いたら見える、雲の切れ間の陽光だった。

それが。

「壊れてしまったの」

そんな日常が壊れた時、プレシアもまた壊れた。心の中にある何かを、自分とその他の常人を繋ぐ僅かな一線を失ってしまった。

「貴方がまだ、壊していない。失っていないものを、私は手の内から零してしまった」

それは、愛する人。

自分たちのような天才は、誰を尊敬することもしないし、卑屈に媚びへつらうこともしなければ、虐げることもしない。そうするだけの価値を、他人に持つことが出来ない。けれど、愛してくれる人を、愛することは出来る。自分を慕ってくれる人、異常な才能を受け止めて、もしくは無視して見てくれる人の目を、見つめ返すことは出来るのだ。

プレシアが愛していたのは、アリシア・テストロッサ。

そして篠ノ之束が愛しているのは、高町なのは。

「ねえ、似ていると思わない、私達？」

「……………」

プレシアの問いに、束は何も口にせず。

只、唇の端を吊り上げ、しかとプレシアを見つめるのみ。

だが、プレシアは理解した。

「……今更、語るまでもないということね」

そうでなければ、束にとってプレシアは路端の小石にしかならない。只蹴散らし、踏み倒して、蹂躪するだけの存在。直接会ってその人格や意思、真意を問い質すような手間はかけられまい。

「こうして会って話すという行為自体が証明になる」

束から、今度はこくん、と肯定の意思。

プレシアと、束は似ている。科学者としての才覚や、周囲に対して余り関わりを持たない世捨て人のような性格。そして、心の底から大切にしたい存在がいるということまで。

そう感じたから、プレシアは大つぴらに自分の奥に秘めた熱情と執念の源を話せたのだ。

「あはは……やっぱり面白いねえ、貴女」

プレシアが自らの事情について話すと、今度は束もなのはについての思い出を話した。

彼女が、つまらない世界の中での一筋の光になってくれたということ。常に予測を飛び越えてくれるのはは、篠ノ之束にとってただひとつの生きがいだということ。

生きがいである。その一言にプレシアは痛く感銘した。

「そうね、そういうもの——見るに値し、聞くに値する拠り所がないと、こんなに浅ましく馬鹿馬鹿しい世の中、生きてはいけなものね」
「そう、そうなんだよ貴女。なのちゃんがないとこの世界、とつてもとつてもつままない」

予測から一步もはみ出さない定理、法則、意思、感情。そんな世界で生きていくことは楽だが、同時に耐え難い退屈さをも生み出す。身の回りで起きる現象も行動も、皆つまらない。若いころのプレシアと幼いころの束は、世界に全く同じ感想を抱いていた。

二人にとって、同じ考えを持つ人間に出会うことは、全くの初めてだった。だからこそ通じ合う。だってそれは、ある意味ずっと一人ぼっちで生きてきた二人にとって、初めての同志だから。

普通、自分と同じ事を考えている人間などそこら辺にごまんというものだ。自分だけの考え、アイデアという特権意識はその殆どが幻想に過ぎない空手形。何もかもが同じなドツペルゲンガーだって、数億も集めてその中から探せば三人か、もしかするとそれ以上に現れるかもしれない。

だが、天才という表現の閾値を超える人間は、滅多なことでは現れない。それも束のような、世界の殆どを読み切れるレベルの天才なんて、それこそ別次元にでも目を向けられない限り現れるはずがなかった。しかし現に今、プレシア・テスタロツサはここにいる。束の心理と行動指針を、自らの経験から読み取り得た、『もう一人の天才』がここにいる。

彼女は、篠ノ之束にとって初めての『同志』になろうと手を伸ばした。

「貴女は、私のようにはなりたくないでしょう？」

「そうだねえ。貴女のようになのちやんと、それからちーちゃんまで失ったら、私は——」

どうなるんだろうね、という言葉は、空気を震わせること無く口の中だけで反響した。

なのはを失った世界で、二年前までのように只々惰性でもって生きるか。それともまた新しい生きがいを見つげるのか。もしくは世界に飽き、破滅的な行動へとひた走ることか。

思考は無限の可能性へと伝播し、想像するが、それらはどれも暗い寂しい暗闇へと収束する。だから、束はそれを言語という形で具現化したくはなかった。

それを察したプレシアは、だんまりを通す束に皆まで言うなとばかり手を差し伸べた。その表情には、恐らくは数年ほど浮かべていなかっただろう、慈愛に満ちた笑みすら表して。

「分かっているわ。だから、貴女を私の計画に誘っているの。つまり

ない世界の悪意やしがらみで彼女を失う前に、何からも解き放たれた世界へ行きたくないかしら？」

「何からも？ 別の次元世界ということかな？ もしそうなら御免被るね。どんな世界にもしがらみはあるし、因縁なんてのは、世界を飛び越えてもついてくるものだよ」

「ただの世界ではないわ。そこは——かつて滅びた文明の跡地。世界と世界の狭間に存在し、余人の介入を阻む墓標」

「その言葉、なんだか格好が付いてて大げさだねー」

そう茶化しながらも、束の瞳はプレシアの顔に真つ直ぐ吸い付いて離れず、ウサミミは真つ直ぐ、プレシアの言葉に向けられていた。内部のスピーカーで逃さず録音しているのだ。

「言うほど、誇張でも何でもないのでよ？ 忘れられし都。その名は、アルハザード。そこには時を操り……死者さえも、蘇らせる秘術が存在する」

アルハザード。かつて栄華を誇り、科学技術の極点であったそれは、今や次元断層の奥深くに沈んで、伝説やおとぎ話の中でしか語られない。常人がその名を聞けば、所詮誰その妄想であると切つて捨てる、眉唾な存在。だが、プレシアはその存在を大真面目に語っていた。「そこへ行けば、アリスシアを蘇らせる事ができる。けれど門戸は深く閉ざされていて、だから私にはジュエルシードが必要なのよ」

「恋する乙女が彗星に向かってするように請い願う——なんて、非効率的な手段は使わないよね？」

「ええ。私が欲しいのは願望機ではないわ。その中に籠っている莫大なエネルギーを全て開放することによって、次元断層を引き起こし、その隙間からアルハザードへの道を切り拓く。私は行くわ、禁断の地へ。アルハザードへ……どうかしら、この計画。貴女のお眼鏡に適って？」

「うん、気に入ったよ。特に、何だかんだ言つて最後は結局力押しして所がね」

法やら倫理やらをねじ曲げている計画、その最終工程の以外な素直さに唾う束だが、その瞳は真剣そのもの。プレシアが長い後悔と煩悶

の中で見つけた光明に、束もまた目を惹かれているように見える。だから、プレシアは最後のひと押しを掛けた。

「もし貴女が、貴女の友人を失いたくないのなら。つまらない世界の檻から解き放たれたいのなら。私の同志になりなさい、束」

世俗から解き放たれ、失われた文明の遺物に満ちているアルハザードは、束やプレシアのような天才にとっては正しく理想郷である。俗人に関わることなく、未知への探求のみを考えていればいいのだから。

また、世俗の些事から解放されるということは、束にとっても大きな意味を持つ。例えば、束は篠ノ之家の娘であるがために、未だ年幼く親の庇護下から離れることが出来ない。そのせいで、束の研究は時に大きく停滞する。今開発しているものにしても、ユーノという使い勝手のいい助手が居なければ、パーツ不足でどうしても仕上がらなかっただろう。

その他に、なのはも千冬もそれぞれ「しがらみ」を持っている。それさえなければ、束はなのはと千冬と、ずっと一緒にいられる。それを邪魔する家族や学校、含めて社会なんて、天才には重りにしかならない不要物。

なら、捨ててしまえばいい。そういう意味でも、何も無く、誰にも干渉されないアルハザードは束にとって理想的な環境だ。

「ふ、あははは」

束は嗤う。ひたすら嘲笑う。プレシアの計画と行為を。脳内での計算では、この計画の成否は極めて低いと出ている。プレシアがアルハザードを観測できているかどうかは知らないが、次元世界の人類にとっても次元断層は未知の領域である。少しでも舵取りを間違えれば虚数の海へと真つ逆さまに落ちていくしかない。

大体、目指す理由だつて幼稚そのものだ。死んだ人間を生き返らせる？ 自分とアリシアが、誰にも邪魔されない世界へ？ それは、ただの逃避ではないか。死亡という事実を技術というペンキで塗りたくって覆い隠すのは、死者への冒瀆に他ならない。二人きりで別世界へ赴くなんてのはそれ以下。単なる逃げだ。

「あははははは」

そして、笑う。そんな下らない逃避に、同調している自分へ。なのはと千冬と、二人さえいれば後は誰も要らない、なんて考えている自分へ。

しかし、その幼稚さは笑いものにはなるが。可能であつて夢想でないなら、否定する理由は何処にもないのではないか。偉大な発見や発明はいつも、『空を飛びたい』というような単純で幼稚な欲望より生まれ出るものなのだから。

「アルハザード!? 失われし都!? なにそれ、すつごくバカバカしくて、すつごく面白そうじゃん! 私も行きたいな、こんな世界から抜けだして……なのちゃんと、ちーちゃんと一緒に!」

内から湧き出る原初の欲求に打ち震えるような束の答え。プレシアはそれに満足し、細く色白な手を差し伸べた。

「共に行きましょう。こんなはずじゃなかった世界に、別れを告げて」束は、その手を握る。

そうして、ここに二人の科学者は同士となり、来るべき時空管理局と、己の間をも騙し、ジュエルシード全てを暴走させて次元断層に道を拓くための計画を練り上げ始めた。

まずは、ジュエルシード全てをプレシアの手へと齎す『状況』を作り出さねばならない。束の手によって、残りのジュエルシードの場所は海中だと既に把握されていた。これは、束の地下ラボに存在する「掴もうぜジュエルレーダー」の親機によるものだ。

なのはやユーノに渡していたのは子機であり、高精度なレーダーを持つ親機は、事件開始から少し経った時点でジュエルシードの位置を殆ど完璧に掴んでいた。束は敢えて、子機に伝える情報を制限していたのだ。彼女お得意の自作自演の種は、この頃から既に撒かれていたのである。

この情報を起点にして、まずはフェイトに命令を伝え、残りのジュエルシード全てを回収させる。一人の魔導師の分を超えた無謀な行為を見て、管理局側はまず様子見に徹するだろう。

しかし、なのはたち地球の子供達は違う。フェイトを只の敵として

考えず、分かり合いたいと思うのは必ず単独行動を取って現場に向かうだろうし、千冬とユーノもそれに続くはずだ。

そうして、海鳴の海上になるのは、千冬、ユーノ、そしてフェイトが、ジュエルシード全てと共に集まるといふ『状況』が生まれる。

これこそ、プレシアにとつては絶好の機会。管理局に討ち入られば時の庭園の防御網は突破されるが、封印に魔力を費やした子供が数人だけなら問題は無い。

だから、時の庭園そのものを転移させて、プレシアの技量で硬い封時結界を展開させる。これで子どもたちは逃げ場を無くし、ジュエルシードは皆プレシアの元へと集まる寸法だ。唯一の不安要素は『状況』から締め出された管理局による結界の解除だが、そこは束が仕込む。

まずは協力者として管理局の信頼を得ながら、艦内のメインコンピュータへ手製のプログラムを忍び込ませる。それは、プレシアの次元跳躍攻撃による動力停止と機能不全の最中に発動し、瞬く間にシステムを掌握。こうして、管理局は内部にいる魔導師部隊ごと無力化させられる。

こうなればもはや誰にも遠慮はいらない。なのはと千冬を庭園内に確保して、そのままジュエルシードを暴走させ、次元断層の狭間へと跳躍を始めるだけだ。その余波で、地球を含む世界の2つや3つは消滅するだろうが、全てから解放される2人にとってそれは、何らの考慮にも値しない。

完璧な計画だ。

束の、人の心理すら容易に読み取れる異才。そしてプレシアの長年に渡る執念が撚り合わされて綴られた計画は、現在、その9割5分が既に成功している。

そして、高町なのはに見せつけられた、プレシアと束の会見映像。危険を顧みず自分から庭園に飛び込んできた愚かな少女へ、この真実を見せつける事こそ、計画の最終段階であった。

軽歌劇の終演（Ⅲ）

なのはは目を見開いて、プレシアとの合間の空間に投映された映像を見つめていた。

張り詰めた空気を漂わせながらも、笑顔の束と、無愛想ながら僅かに表情筋を動かし、目の前の残酷な表情に比べれば楽しげにすら見えるプレシア。

そんな、今までの常識を覆す映像を、なのはは何も言わず見つめていた。なにか言う体力が残っているはずもないが、唇を動かす仕草すら見せず、ただじっと、見つめていた。

「……………どう？　面白かったでしょう？」

更になのはを追い詰めるため、プレシアは言い放つ。それもそのはず。今でこそこうして自らの側に引き込んではいるものの、そもそも目の前の小娘がデバイスと魔導師を拾わなければ、事はもつと単純に運べていたはずなのだ。フェイトとアルフによって、海鳴中のジュエルシードを一週間足らずで集める予定が完全に狂ってしまった。お陰で管理局にも気づかれる。但し、なのはの存在が居なければ、プレシアが束と出会うこともなかったのだが。

ともかく今のプレシアの心中、そこでのなのはの立ち位置は愛憎という分野で分けければ間違いなく憎悪に分類されている。そして溜まった鬱憤を晴らすべく、プレシアは露悪的な仕草とともに、なのはが信じていた束の隠された真実を暴いて見せたのだ。

「全ては仕組まれていたの。束はこの日から、今に至るまでの貴方達の行動全てを読み切っていたわ。人形相手に絆されて飛び出してくるのも、囚われて自棄を起こして突撃してくるのも……………そして辿り着くのが貴女だけだということも、予見していたわね」

プレシアは、ひたすら苛虐趣味じみた表情を浮かべる。まるで、大勝負にイカサマを仕掛けたディーラーが自信満々で揃ったカードをオープンするような心境だ。

現場の実情を無視した上層部の、無茶で無謀な命令によって引き起こされた中規模次元震、そしてアリシアの死。その罪を纏めて被せら

れ、左遷や異動でトカゲの尻尾切りの如く切り捨てられるという屈辱的な処罰。

その後、社会の表から姿を消し、アリシアを取り戻すためにクロール作成技術を研究する『プロジェクトF』に継ったものの、文字通り身を削りながら進めた研究の末に出来たのは、アリシアではなく似ているだけの紛い物。

数十年、悲壮で甲斐のない日々を命を費やし、今や果てる寸前の蟬蜕であるプレシアの内心に渦巻いている怒り、憎しみ、悲しみ、後悔――。雪解けの後の泥濘の如く内側に溜まっていた負の感情が、傷つきながら突っ込んできた真っ直ぐで純白な少女の心を汚そうと、痩せ細った身体からぬるりと滲み出ていく。

「貴女の努力も、お仲間の献身も、今居る世界の命運さえ……たった一つのペテンによって崩れる脆いもの。残念だったわね。もしここで奇跡が起こって、貴女が私を倒せるようになったとしても……その時貴女は、貴女の一番大切なオトモダチと戦わねばならない」

目の前の少女に、そんなことが出来るわけない。プレシアはそう信じていたし、なのも無言で肯定した。

ああ、楽しい。天才として、無知蒙昧を嘲り笑う事が、ここまで楽しいことだとは知らなかった。もう少し早く気づけていれば、このつまらない世界に生きるのも少しは楽しくなつたろうに。去る直前で気付いてしまったのは本当に残念だ。

「束は本当に苦労したと思うわ？ 何も分からない貴女たちや、間拔けな管理局をつまらない演技で騙すのだから。きつと、貴女が単純だから上手くいったのでしょね」

スクリーンには今、互いに手を握り、計画の成功を誓い合うプレシアと束が映っている。なのは顔は俯き、どのような表情をしているかは分からないが、きつと、今まで浮かべたことの無い虚脱と絶望に満ちた表情なのだろう。プレシアは想像し、喜悅した。

「それにしても、貴女は本当に友達思いのいい子ね……」

かつ、かつ、とヒールの音が響く。四肢を縛られ、空中に吊り下げられているのはへ、プレシアは徐々に歩み寄っていた。何をするわ

けでもない。ただ、なのはの顔が見たいのだ。

大切な友達の裏切りを伝えられて、それでもさつきまでの挑戦的で生意気な態度が持続しうるはずがない。たかだか9歳のくせに、只のお節介で首を突っ込み、幾年も積重なった自分の執念を否定した、世間知らずの小娘。その本性を、プレシアは見たがっていた。

プレシアが持つ、錫杖を思わせるデバイスから、年若い少女の甘ったるい声が発せられる。

『なのちゃんは飛べるよ。その翼で、どこまでだって。その手で打ち抜けるよ、涙も、痛みも、運命も。だから、飛ぼうよ』……そんな、何処から飛び込んできたのか分からない録音で、わざわざ窮地に飛び込んでくるのだから！』

アースラのなかで、未だ踏ん切りが付かなかったなのはの耳朶に飛び込んできた、優しく、温かい声援。それは東本人が発した通信ではなく、時の庭園から送られた、只の録音音声だったのだ。

「ふ、ふふふ、あはははははは！ そう落ち込まなくても、貴女は何も悪くはないのよ？ なぜなら、貴女の決断も選択も、全てがペテンなのだから！」

自分の意志や使命感で事件に飛び込んだのはにとって、プレシアの言葉は何よりも残虐だ。

戦いを好まないおとなしい少女だったのはだが、この一ヶ月の間、必死に戦い続けていた。暴走体が相手なら、千冬に任せて後ろで封印だけをしていれば良かったが、フェイトが相手ではそうはいかない。空を飛ぶ魔導師の相手は、同じく空を飛べるなのはにしか出来ない。

戦う時に怪我をすると痛くて、魔法の練習も辛いけど、自分に戦える力があるなら戦わなければいけないと思うし、無言で対話を避けるフェイトに自分の心を届かせるためにも、戦い続けたいと思っていた。

それから、親に嘘を付いてまでアースラに協力し、家から離れて寝泊まりをする。そういう、子供にとっては重大な決断を、自分からするのは初めての事だ。なのは自身、自分がここまで大胆なことをする

とは思っていなかった。

そしてだからこそ、この魔法と戦いに明け暮れる日々は、自分にとって本当に重要なものになるのだと信じて疑わなかった。

だけど、それは全て。

「全ては最初から、仕組まれていたこと！ この状況に、貴女の意味は介在しない！ 全ては私と、東の計画通りだった！」

無言のなのは尻目に、プレシアは狂い笑う。会社や研究機関に利用され続けだった自分の人生、使われつくし、ボロボロになった自身の心と身体、そのささやかな意趣返しのように。

力尽き果てたなのは嗤い、その情けなく惨めな結末を嘲笑う。

「ふふふふふ、ふははは、あははははははっ!!」

二人きりの空間に、只々声だけが反響する。その感情の熱狂に併せてか、プレシアの手元にある12個のジュエルシードがざわめくように点滅し、玉座の間に広がって円陣を作る。しかし、その円はまだ3分の1程度欠けている。埋められるべきは、残り8つのジュエルシード。

ユーノがなのはから預かり、今頃は必死に守り続けているはずのそれらが、転移の儀式にはどうしても必要だった。しかし、そんなことはもはや些事に過ぎない。魔力の全てを使い果たした少年と、只腕っ節の立つだけの少女など、傀儡兵だけで簡単に制圧できるのだから。「じきに、残りも揃う。そうすれば、私は旅立てるわ。永遠を保証する彼の地、アルハザードへ。そして、この世界は……滅ぶ」

揃うのを待ちきれず活性化したジュエルシードは、プレシアの言葉を実証するかのように輝き唸り、空気を震わせる。辺りには魔力がたちまち充満し、その濃度は、大魔力を扱うことに長けているプレシアにすら、息が詰まるような錯覚を感じさせるほどだ。

度数の高いアルコールの匂いが、嗅いだ者へまるで酔ったような感覚を与えるように、プレシアの気分はますます高揚していた。

「旅立つ前に、最高のショーを見せてもらってありがとう。今頃、ここ
の最深部で束もほくそ笑んでいるはずよ……ふ、ふふふ」

プレシアは未だ笑い続ける。今まで彼女に根付いていた、暗鬱な心

情を丸ごと裏返すように。

だが、それもここまでのだ。これからすぐに、ジュエルシード21個全てを制御する術式を構築していかねばならない。生意気な女の子一人を虐める暇なんて、何処にも存在しないのだ。

落ち着いて、冷徹さを取り戻すように切り替えねばならなかった。

だが最後の最後、その前に。

ずっと俯き続け、遂に何も言わず、顔を上げなかったなのは、表情。

それくらい見る暇はあるし、見たからといってバチも当たらないだろう。

プレシアは手を伸ばし、俯いた顔を上げて見てやろうと試みた。

「もう、お終いよ。誰にも止めることは出来ない……例え貴女が神でも、悪魔でも。この私を止めることは出来ないのよ」

壮大な計画に挟まれた、幕間狂言の締めくくり。

プレシアの手が、なのはの頬に掛かり、そして指で顎を持ち、顔を上げた。

目が、見開かれた。

誰の目でもない、プレシア自身の目が。

一秒にも満たない間、聴覚に静寂が訪れた。魔力の乱流が身体を撫でる、そのざわめきすら聞こえない。五感の殆どを静止させているのは、極限まで膨れ上がった、驚愕という感情。

「何故、なの」

思わず漏らしたわななく声が、骨と空気を伝導して自らの脳髓を揺らす。この状況、この現状で、決して発されるはずのない問いかけだった。

「どうして」

見つめる顔を持つ手に、力が入る。

指が肌に食い込み、顔つきこそ歪むが、表情はけして揺らがない。

「どうして、どうして、どうしてっ！ そんな顔をしていられるの！」

言葉が唾とともに吐き捨てられ、細い手に持たれている顔へと振りかかる。それでも、変わらない。

プレシアが久しく感じていなかった、未知への驚きと恐怖。その源になっっている少女の表情は。

「……………」

穏やかだった。

シヨックを受けて憔悴はせず、余りの出来事に怒りもせず。だが、何もかもを諦めきっているのではなく、打開しようと必死になっているのでもない。

ただありのままに。怒りも哀しみも内包しない澄んだ瞳が、プレシアを見つめ返していた。

「束ちゃんは」

どうして、というプレシアの叫びに応え、なのは初めて返答する。

妄執と狂気を孕んだプレシアの目をしっかりと見つめ、混じりけなしの言葉を、ゆっくりと紡ぐ。

「近所のために、ジュエルシードを集めてくれる。私たちを手伝ってくれる」

その根拠は目まぐるしい一ヶ月を挟むと、もう大昔のこのように思える会話。

束が、強引に引き取ったユーノに関して千冬に疑われた際、なのはに頼った。その時なのは、束の邪な意図を無視して、しかも彼女の行動を善意によって解釈した。

束も、街の平和を守る為にジュエルシードを回収しているのだと。いつか、アリサやずかを助けた時のように、困ったことを放っておけないから、協力してくれるのだと。

「私がそうでしょ、って言った時、束ちゃん、何も言わなかった。その通りとは言わなかったけど、違うとも言わなかった。だから、私は信じてる。束ちゃんが、皆のためにジュエルシードを集めているんだって」

篠ノ之束の、善意。人間らしい、優しく善き心。それをなのはは信じていた。

傍から見ればまるで見当違いの感情論でしかない。

只の女の子ならともかく、篠ノ之束である。天才として、世界全てを平等に見下している女の子の心中に、優しさというものの芽生える隙間が、果たして存在するだろうか？

否。絶対に否だと、プレシアは断定した。

「何を言うの!?! それは嘘よ? 貴女は……まやかされているということが、分からないの!?!」

だから、なのはのまるで見当外れに見える答えは、当然プレシアを苛立たせた。

友達や街、そして周りの人を守る。確かにその場の流れや勢いで、束の行動方針がそう決めつけられてしまったこともあるだろう。

だがしかし、そんなものは所詮一時の言い訳。『天才』篠ノ之束の本性は、どこまで行っても孤高。そして、他者とは決して交わらない。

例えば対象が、彼女を唯一つまらない世界へ繋ぎ止める点であったとしても。嘘をつき、騙し、利用するということはごく当たり前で――。

「違うよ」

プレシアの否定に対し、なのはは弱々しい身体から声を搾り出すように反論する。

「束ちゃんは、私を騙してなんかいない。だって、束ちゃんは私の『友達』だから!」

友達。たったそれだけの理由で、なのはは束を信じて疑わない。

例えば裏切りを決定づけるような映像を見せられても、残酷な計画を教えられても。

そんな程度で、なのはは折れない。

束がそんなことをするはずがないと、きっぱり宣言できる。

「束ちゃんは、そんな身勝手なこととは絶対にしない! 束ちゃんはいつもはしゃいで、とつても人見知りで……怖いことだって平気でするし、いつも大騒ぎの真ん中にいるけど!」

そう、束は天才で、傍若無人だ。一番の友達の性格くらい、鈍感なののはも分かっている。

だから、なのはが今聞いたことが、やっぱり束の本心であるかもし

れない。この世界を滅ぼして、自分と共に遙か遠くまで行ってしまうことが束の本当の望みだったという可能性もゼロではない。

だけだ。

「でも、皆の気持ちを考えないで、皆に何も言わないで……こんなことは、絶対にしない！」

縛られ続けた身体は痛みに溢れ、体力は既に限界を通り越し。気を張らないと直ぐにも気絶してしまいそうだが、なのはは叫ぶ。

「だって、束ちゃんが好きなのは、私だけでも、千冬ちゃんだけでもないから……私たち2人がいればいい、なんて考えてない！」

「そんなはずはないわ！」

その必死な声に、プレシアもまるで気炎を吐くような勢いと形相で異を唱える。

「あの娘はこの世界に、貴女たち以外の価値を見出していない！ 色褪せたつまらない世界も、ただ縛り付けるだけの他人も、あの娘は全て憎み、だから私と共に……」

「違うつ！ 束ちゃんは今もう、つまんない、だなんて思っていない！」
もしもそうなら、なのはと知り合ってから二年間、学校へ行ったりはしないのだ。

興味のない人間が沢山いるはずの小学校へ、手を繋いで通って。とつくに分かりきっている授業を、なのはにちよつかいをかけながらも一応受ける。栄養摂取には非効率的だと言いながら、母親の作った弁当を分け合いっこして。体育ではさすが、千冬と超人的な戦いを繰り広げ、図工では木片からICカードを作り。放課後は決まってなのはをラボへ引っ張り込み、新しい発明品を見せて自慢する。

365を2つで掛けて、730日ずつと繰り返す、学校や家庭に縛られて固定化された日常。

なのはにとっては日々新鮮で実りある日々だが、その殆ど全てを予測してしまえる束にとっては、味気ない灰色さしか感じられない二年間のはずだ。

「だって、束ちゃんは笑ってたから！」

でも、その日常を過ごす間、束は時に笑い、時に怒り、時に悲しん

だ。

それこそが、なのはにとつて裏切りを否定する一番の証拠になる。「えへへって笑うことも、声を低くして怒ることも、泣きべそかいて悲しむことも……本当につまんないなら出来ないんだ！」

なのはがそう言い切る理由は、束と初めて会って話した時の、無表情だった。

あの時、なのはの瞳に見えたのは、空いてるのか開いていないのか分からない口元や、何処を見つめることもない目。顔の筋肉は動かず、お面のように固まって、ただ舌だけが微かに動く、まるで死んでいるかのような表情。

初めての時は訳も分からず話しかけたからよく分かっていなかったが、回想するとなのはですら思わず寒気立ってしまうくらいに、冷たくて恐ろしい。

喜怒哀楽を過剰に表す、束のいつもの表情。その印象は余りにも強いが、なのはの脳裏には未だ、絶対零度で無色透明なあの顔つきが焼き付いていて離れない。

でも、今の束は、そうではないのだ。

「今の束ちゃんは、私に色んな顔を見せてくれるんだ」

だからそれは、束の見ている世界が、つまらないもので無いことの確かな証明になる。

「嬉しい時は一緒に笑って、悲しい時は一緒に泣いて！ そんな束ちゃんを、私は知ってる！ だから私は……どんなことがあっても、誰も信じなくなたって、絶対に絶対に絶対につ！！ 束ちゃんを信じる！！」

なのはは決然とした表情で、プレシアを見返す。

もう魔力はこれっぽっちも残ってないけど。傷だらけの身体は縛り付けられ、何の抵抗も出来ないけど。

それでも信じることは出来るし、それは誰にも止められない。

——だって、友達なんだから。

「ふざけなこら」

なのはの主張に対し、プレシアは沸々とした怒りを湧き上げるまま

に振りかざす。彼女の握る杖の底部から紫色の雷が迸り、地面や柱を伝ってバインドへ、そしてなのはの全身へと至り、唯でさえボロボロな小さい身体を尚も傷つける。

「くう、あ、ああああっ……!!」

我慢している故にか細い、しかし閉所に良く響く少女の悲鳴。

「あの娘は『天才』よ。私と同じ『天才』。だからこそ世の中に疎んじられ、自身も世の中に飽きる……そんなあの娘が執着するのは、愛する者だけ。貴女ともう一人、織斑千冬だけなのよ!」

「く、ああ……そうじゃ、ない! 束ちゃんの周りには、他にも沢山、色んな人がいる!」

人生で二回目の窒息を感じながら、なのはは思う。

この広い空の下には幾千、幾万の人達が居て。いろんな人が願いや想いを抱いて暮らしている。

二年前の束は、そのことを知っていたけど、分かっていたいなかった。けれど、今は違う。

「そんなものが、何になるというの。所詮は俗人、つまらないことしか言わないし、誰も『天才』を理解しない!」

「だけど、皆束ちゃんの近くにいる! 私だって、束ちゃんのことまだ全部は分からないけど……でも、想いを話すこと、伝えることはできるから!」

その想いは、時に触れ合って、ぶつかり合って。だけどその中の幾つかは、繋がっていける、伝えあっていける。

そんな出会いや触れ合いを、束は確かに受け取って、もしくは強引にぶつけられて。そして、ちゃんと覚えて、記憶する。心に想いを結び付けていける。

だから、絶対、大丈夫。

「皆、束ちゃんのこと、口には出さないけど大切に思ってた、束ちゃんも口には出さないけど、皆と離れようとはしない。でも、プレシアさん、あなたはどうかなの?」

「……私?」

「あなたは、アリシア以外の誰も大切に思ってた。だから皆、あなた

が世の中から離れるのを止めなかった。ううん、止められなかった」
当然のことだ。自分とアリシア以外、誰も信じていないということ
は、誰にも信じられないことと同義なのだから。

そんな人間に、近くにおいて欲しいと思える訳がないのだ。離れるま
ま、誰も引き止めず。暗闇で一人研究に没頭し、終いには身体を壊し
て死を自らに近づけても、誰も止めないし、助けない。

いや、助けようと尽くしてくれる人はいるが、彼女の方からそれを
断ち切り、破滅へとひた走ってしまう。

彼女の目には、思い出という妄執の中のアリシア以外、何も見えて
いないのだ。

「でも、束ちゃんとは違う。束ちゃんはちゃんと周りに目を向けて、お話
を聞こうとしている。束ちゃんらしく、とつてもハチャメチャで、お騒
がせだけど……周りの優しさから逃げて、たった一人しか見ていな
い、あなたとは……違うっ!!」

その言葉を聞いた瞬間、プレシアの心の中で何かが切れた。

「何も知らない癖に！ 黙りなさい、小娘！」

なのはの言葉を聞きたびに、折れるほど強く握っていた錫杖。それ
が姿を変え、現れたのは鞭。手首にしなりを効かせ、大きく振りかぶ
る。目の前で戯言をほざく少女が共犯者にとつての大切な『友達』で
あることなんて、とうに思考から吹き飛んでしまっていた。

黙らせなければ。そうしなければ、プレシアの今までの苦悩はまる
で馬鹿馬鹿しい物になってしまう。誰にも理解されず、たった一人で
歩んできた道。たった一人の愛する娘を取り戻すための道。茨の道
のように思えた旅路のそのすぐ側に、自分を心から愛してくれる使い
魔や、優しい女の子がいたなんて。

遅すぎる気付き。

いや、気付いてはいけない。考えてはいけない。命すら投げ出した
計画が、実は全くの無駄だったなんて、認めたくない。

だから、これ以上何も口を効けないようにしてやる。

そう考えて、プレシアは何時も出来損ないにやっているのと同じよ
うに、目の前の少女を――

「……………?!」

——鞭打つ前に、辛うじて周囲の異変に気づいた。

ジュエルシードの魔力以外のナニカが、この庭園で蠢いている。

玉座の間において、プレシアはジュエルシードだけではなく、庭園の動力炉の魔力を借りて断層移動の大魔法を発現させようとしていた。だから、庭園の心臓はそのままプレシアのリンカーコアと同一存在になり、よってプレシアの五感には、庭園の状況がつぶさに感じられるのだ。

その五感が今、最大強度で警告を発していた。

「管理局……? いえ、クラックを破るのも結界を砕くのも早過ぎる……………!」

とにかく、後一步の所で邪魔をされる訳にはいかない。鞭を杖に戻し、庭園内で待機していた傀儡兵へ、目標駆逐の命令を下す。

物言わぬ機兵は、まるで体内のバイキンを食らう白血球のような忠実さで、命令通り通路を駆け巡り、対象を視認し、攻撃に移り——ものの見事に駆逐され、僅か数秒で反応を消した。

「やられた!! 馬鹿な、時間稼ぎ程度にはなるはず!」

エネルギーの発生源は、移動の最中に立ち塞がる傀儡兵を文字通り一蹴しつつ、一直線に庭園の中央最深部、即ち玉座の間へ向かっている。これに対し鉄機兵の壁を作り、時間を稼いだ所でバインドを設置、なのはと同様縛り上げた所へ止めを指す予定だったが、接敵した側からまるで溶けるように排除されていく。

中空に投影されたコンソール。その一つを前線後方に配置した傀儡兵のカメラと同期させ、プレシアはノイズ混じりの映像越しにエネルギー源の正体を見た。

「なっ……………?!」

人型の全身を純白の甲冑が纏い、二枚の浮き羽にスカート状のスタァ、そして一本の大剣を上段に構えている。まるで騎士を思わせる機動兵器が、そこに映っていた。

美しい。プレシアの感性が彼女の無意識に働きかけ、眩かせた。余剰エネルギーとして噴出されている青い燐光の眩さに騙されたから

ではない。一人の科学者として、モニタの中に舞う白い姿に紛れも無い機能美を感じたからだ。

命令を受けた傀儡兵が、騎士の前に立ちふさがった。庭園に配備されている中で、一番大型の砲撃タイプ。なのはを捕らえる時ですら守備に回っていた虎の子である。

対峙した互いの大きさには、巨人と蟻を想起させるほどの圧倒的な差が存在する。しかし、熱源を感知して表示するレーダーの光点は、守る方より、迫る方が遥かに大きかった。

傀儡兵が、両肩のキャノン砲をチャージする。それと同時に、周りの小型も一斉に突貫し、数で目の前の白い人型を排除しようとした。その時、人型の持つ剣が、中央から真つ二つに割れた。同時にプラズマで構築された刀身も縮まる。一本の大剣が二本の小太刀へと姿を変えた。

「あれは……!」

そして、小太刀を構えた人型。その独特な構えを、プレシアは確かに記録していた。

そう、あの剣技は、かつてフェイトが戦ったもの。帰還した彼女のデバイスを整備した時鮮明に残されていた戦闘記録を見て、感嘆したものだった。なにせあれは、地上に限りフェイトの戦闘技能さえ凌ぐものだったのだから。

その構えをした人型が、今、空を飛んでいる。それに気付いてやっとな、プレシアは人型の頭部へ目の焦点を合わせた。しかし、全身装甲の一部であるフルフェイスタイプのバイザーによつて、顔は見えない。

ただ、長い黒髪のポニーテールだけが、ちらりと見えた。

砲撃のチャージが完了し、地面にしかと踏ん張った傀儡兵が、肩の砲台から魔力砲を発射する。

ごう、と空間を薙ぎながら迫る二本の光線が、構えたままの人型に直撃し——その、すぐ手前で遮られ、雲散霧消した。

バリアか。プレシアは推察したもの、一方でありえない、と狼狽していた。放ったのが傀儡兵とは言え、あれは立派な魔力砲である。

しかし、今人型の周りに展開されたのはあくまで通常のエネルギーフィールド。それで魔力を防げるはずがない。

だが、現に砲撃は完全防御された。

続いて、小型の傀儡兵が一斉に突撃する。全天からの攻撃は、どうあがいても捌ききれぬものではないはずだ。

しかし、人型は迷いなく、先の先を取った。プレシアの視界であるカメラには、人型が一瞬姿を消した後、迫り来る傀儡兵全てが無残に切り刻まれているという情報しか映らなかったが、その過程で、人型は自らに振りかかる攻撃全てに先んじていた。

まるで、全周囲に目が付いているかのような挙動と、反応速度。

「なん、だと、いうの」

ああ分らない。分らない、分らない。

大体どうして、孤立無援の結界内にこんな機動兵器が現れたのか。

そして、あの圧倒的な戦闘力と、莫大なエネルギーを制御できる技術は何処から来たのか。

プレシアは何もかもが理解できず、その心から、とある一つの強い感情が迸った。

——未知への恐怖、という、『人として当たり前の』感情が。

そして、密室全体を横殴るような衝撃と、破碎音。充満していた高濃度の魔力が、出口を得て外界へ流れ出した。

さつきまでプレシアが見ていた映像は、いつの間にかブラックアウトしている。だから彼女は恐れ戦慄しながらも、コンソールから目の前の現実にも目を向けるしか無かった。

「……千冬ちゃん！ 千冬ちゃん、千冬ちゃん!!」

「すまん、なのは。遅くなった」

交わされる会話。いつの間にかバインドはプラズマソードに切り刻まれたようだ。解放されたなのはを横に抱き抱える人型は、なのはよりも少し背が高いだけの少女の輪郭をしていた。

「……さて……私の友人が、随分と世話になったようだな」

傷つききった少女を床に下し、再び双剣を構えた人型から、ゆらりと立ち上る気。プレシアの執念も、謀りも関係ない、ただただ、純粋な怒りに満ちた気迫に、あくまで戦闘者ではなく研究者であるプレシアの理性はあっけなく崩壊した。

「小娘共が、邪魔をするなああああ!!!」

フォトンランサー。サンダースマッシュャー。サンダーレイジ。

周囲にはジュエルシールドがあり、下手に魔力が直撃すればあつという間に暴走してしまう危険性など考慮に入れず。展開できる魔法から、闇雲にがむしやらに術式を構築、目の前の人型へと叩きこんだ。「千冬ちゃんっ!」

後ろに庇われたのはが叫んだ後に鳴り響く、轟音。狂乱していても大魔導師と呼ばれたただけあつて、攻撃の全てが一点の狂いもなく、人型に直撃していた。

が、しかし。

「それで終わりか?」

白い鎧騎士は、小ゆるぎもしない。庭園の動力炉、その出力の全てを使った最大規模の波状攻撃。その全てを、超高密度のエネルギーフィールドが弾く。

「な……ありえない、何故、何故、こんなことが……ぐ、があっ」

絶対の計画が、たった一個の異分子で容易く捻じ曲げられた。

そんな目の前の現実を認められず、プレシアは頭を振りながらかすれた声で喚いたものの、その直後、魔法行使の反動で喀血。床と服と口を、濁った血で汚した。

「……成る程、病を患っているのか。そんな輩に剣を振るうのは心苦しいが……それ以上に、私はお前を倒さねばならない。覚悟して貰うぞ」

凜々しく澄んだ声が、宣言する。

それは、後ろで座り込んでいる友を守るため。

今も、たった一人で残りの宝石を守るため逃げ続けている仲間のため。

そして、自分にこの力を授けてくれた、訳の分からない、でも確か

に自分の友達であるウサミミ少女のため。

「織斑千冬。『白式』^{シロツキ}。……いざ、参る！」

舞い散る雪と桜を束ね（Ⅰ）

時の庭園、最深部。度重なる戦闘により明かりが消えた暗闇を、狂ったように光り輝くジュエルシールドがより眩く照らす。

乱反射する青い煌きの中、すつくと立つのは白き鎧を着込んだ織斑千冬。同じく白い服を傷と汚れでくすませた少女を背後にかばい、雪の欠片のように白い二刀を構える姿は、正しく騎士、もしくはもののふの勇姿を想起させる。

対するは、黒紫色の導士服に身を包んだプレシア・テスタロッサ。こちらは顔の血の気が完全に失われ、元々病床の身であることも含め、生气というものが薄れきっている。肌に触ったら、零度の冷たささえ感じられるかもしれない。

更に、その顔は喜悦に満ちていた先程までとは打って変わって、目の前の敵への狼狽と恐怖に覆われていた。だからだろうか、年に似合わぬ程の妖艶な美貌は鳴りを潜め、多少極めて言ってしまう追いつめられた哀れな老女、とも形容できてしまう。

「やっ」

千冬が一步踏み出せば、プラズマの刃が空気に触れてちらつく。

「貴様のような奴が、全ての黒幕だったのか……」

この時千冬の怒りは、心の中で吹き溜まりのマグマの如く煮えたぎっている。そうだったのは、なのはを傷つけたから、というだけではない。フェイトという一人の少女を捨てたということに対しても、千冬は激怒していた。

親が子を虐待し、親としてある義務を放棄する。それは織斑千冬という人間に刻み込まれた原体験である。だから千冬は、今海岸の縁で倒れ伏せている少女を、もしかするとなのはよりも深く哀れみ、その絶望に共感していた。

だから、プレシアだけはこの手で倒す。逃しはしないし、それでいて殺しもしない。自分の父母はとっくのとうに消え失せたが、プレシアはまだ、ここにいて、生きているのだから。

「だがもう終わりだ。観念して、法の裁きを受けるのだな」

フエイトの前に連れ出し、ごめんなさいと言わせてやる。クローンだか本当の娘だか知らないが、それが例え暖かな胎内であろうと、冷たい試験管の中であろうと、フエイトという少女を生み出したのはプレシア以外の誰でもないのだから。自分の作ったものには、自分で責任を取らねばならないのは当たり前前だ。あの束だって、それくらいはやっているじゃないか。

そんな思いを胸に秘め、千冬は更に一歩進み出る。持った刀はいつの間にか逆刃、峰打ちの形になっていた。

「逃げ場はないぞ、プレシア・テスタロッサ!!」

言うべきことはただそれのみ。後はそのひ弱な身体を取り押さえ、罪を裁く場所へと引つ立てる。千冬の思考回路にあるのは、その一直線だけだ。

剣の強さは心の強さ。友の作った鎧を纏い、その心すら迷わない千冬に、プレシアの勝ち目は万に一つも存在しなかった。

「……………」

対するプレシア。血走った目で千冬と、彼女が纏う鎧を睨む。エネルギーの放出による放電現象で蒼く光るその姿には、ある種の神々しさすら感じられるが、プレシアが睨む理由は他にあった。

目の前のワードスーツを形成しているのは、プレシアの全く知らない技術や論理である。生命工学によるプロジェクトFに参画していた彼女ではあるが、本来の専門は機械工学である。そんな彼女にとって未知の技術といえば、それこそロストロギアか――

——『篠ノ之束』でなければありえない。

「……………あり得ない」

プレシアが呟く言葉は事実でなく、願望。しかし、目の前にある大敵が、構える刀と無形の事実によってそれを無残に叩き潰す。

裏切った？ この残酷な世界でたった一人、自分と同じくつまらない世界を呪ってくれる『天才』が？

「あり得ない、あり得ない、あり得ない……………」

そんなことがあるはずがない。確かに束は天才で、世界に飽き飽きしていた。それは間違いなく、掛け値なしの本音であるはずだ。だっ

り込んだままのなのは手に抱える。『白式』に搭載されているハイパーセンサーが、周辺の重力異常を感知して頭部ディスプレイに写したのは、その数秒後だった。

床に張り付いていたプレシアの手から、紫色の魔力が僅かに拡散し。12個のジュエルシールド全てに伝わり。

玉座の間は、一瞬にしてエネルギーの暴風に包まれ、破裂した。

「く、うつ……!!」

なのはを抱えたままの千冬が、爆発の余波へ真っ先に巻き込まれる。小さい少女の身体二人、吹き飛ばされるどころか消し飛ばされてもおかしくない威力のそれを、無形のバリア・フィールドがいとも容易く防いだ。

絶対防御。『白式』の根幹の一つとも言えるこのシールドは、莫大なエネルギー消費と引き換えに、なのはと千冬を守る最強の盾だ。

しかし、流星に部屋一つ吹き飛ばす程のエネルギーの直撃である。傷ひとつ負わなかったものの、多少煽られ、真下に広がる空間に向かって飛ばされてしまった。

「なのは、大丈夫か!？」

「うん、大丈夫……でも、ここって一体」

そう戸惑いながらも。卓越した空間把握能力を持つなのははこの空間がどのような場所かを感覚で把握していく。

上も下も、二人の飛んでいる場所から遥かに高く遠く広がっている。円柱状に広がる大空洞、と言っても遜色ない。おそらくは、庭園の中枢を脊髄のように貫く空間なのだろう。その最上部にあった玉座の間が消滅し、二人はその反動で投げ出されたのだ。

「こんな風になっていたとはな……っ、それより、プレシアは!？」

巨大な要塞じみた庭園の中枢は、装飾こそ質素だがひたすら大きく大きい構造が織りなす荘厳さを千冬に感じさせる。だが、それにかまける暇などほんの僅かも存在しない。

千冬はハイパーセンサーを最大現に活用し、周囲の熱源、音波、エネルギー波からプレシアの居場所を探知する。あの爆発は苦し紛れで、それに巻き込まれ消滅してしまったかもしれないが、このまま

は終わらない、ということとは、センサーなど使わなくても分かることだ。

案の定、フローターに乗って浮いている、弱い生命反応はすぐに見つかった。

「く、ふふふふふ……」

その手の中にある、12個のジュエルシードの反応とともに。

「プレシア・テスタロッサ！ 今更何をするつもりだ！」

「簡単なことよ」

プレシアの口調は、気味が悪いほどに平坦だった。嘲り、怒り、そして底無しの絶望。短い時間でその極端から極端に揺れ動いた彼女の心は今、一体何処に振り切れているのだろうか。

青い宝石を抱える両手に、魔力が迸る。しかしその紫はそれ以前より色濃く、濁ったような黒さも混じっていた。

「そんなんっ！」

「くっ、いかん！ 止めるプレシア！」

不安定なエネルギーの塊のような宝石へ、強引に魔力を流し込めばどうなるか。誰にだって答えは明白だ。プレシアの手の中の光が増すに連れ、元から巨大なエネルギーはますます膨張を続け、『白式』から千冬の耳へ直接響く警報は鳴り止まない。

「私はもう、アルハザードへは辿り着けない。アリシアに、また会うことも出来ないわ……なら、せめてこの怒りと苦しみを、貴方達にぶつけてあげる」

プレシアの血走った目が、再び『白式』を睨む。その口は小声で何やら呪詛のような言葉を繰り返していて、その度にジュエルシードは揃って明滅を繰り返し、その頻度と明度は天井知らずに膨らみ続けていた。

なのも千冬も、この心臓の鼓動のような点滅には見覚えがあった。生命の願いを叶える宝石であるジュエルシードが、願いに応じて発動する時の光だ。だが、何度も暴走体と戦ってきた二人でさえ、これ程大きく眩しい光を、見たことはなかった。

それだけ強いのだ。プレシア・テスタロッサの願望が。彼女の怒り

や怨念、その全てがジュエルシードへ魔力とともに注がれているのだから。人一人が持ちうる些細な願い事よりもパワーを持っているのは当たり前である。

「プレシアさんっ！ そんなことをしてもなんにもなりません！ それより、生きてここから……」

「もう、遅いわ。どの道私は死ぬ。牢獄の中で何も出来ずに死に、アリシアは永遠に蘇らない。なら、ここで何としても、貴方達を消し去る……！」

「どうしてー！」

なのはが続けようとしたのは、どうしてそんな無駄なことを、ではない。

どうして、アリシアのために願わないの、であった。

しかし、目の前の強い恨みと怒りと哀しみを投げ出してまでそれを願うには、プレシアの人格は少ばかりありふれているものだったのかもしれない。

「死になさい……！」

その言葉を最後に残して、プレシアのフローターフィールドは消え、足場を失った痩せ細った身体は、回廊の奥深くへと落ちて、やがて見えなくなった。

「プレシアさんっ！」

「駄目だ、巻き込まれるー！」

その体へ、なのはは手を差し伸べようとするも。千冬の腕の中では当然届かず、逆に上昇する千冬の腕で強く抱えられ、豆粒のように小さくなっている彼女を、見送るだけしか出来なかった。

千冬はそのまま高く舞い上がり続け、センサーの警告が鳴り止むくらい離れた場所で止まり、丸い壁に添えつけられた通路へ着陸した。これで一先ずは安全だが、じきにそうでなくなるだろう。

目の前に広がる、巨大な光を何とかかしない限りは。

「なに、あれ……凄いや大きくて、怖い……」

「あのジュエルシードが揃いも揃って12個だ。あれくらいにはなるさ……」

なのほも千冬も、今まで見たことのない光景を目の当たりにし、肌がぴりぴりと痺れるようなプレッシャーすら感じていた。

二人が離れる以前の場所で、今も広がり続ける光の塊。それは12個のジュエルシード全てが魔力を流され、更には単一の願いに反応し、遂には互いに共鳴し合ったことで生まれた極大の時限爆弾だった。これが一気溢れ出したのなら、庭園とそれを包む結界どころか、その先に広がるこの世界全てが消し飛ぶ、と『白式』のシステムが分析している。

「まずは、アレをどうにかしなとな」

「どうにか……出来るの、千冬ちゃん？」

なのはに問われ、千冬は纏っている『白式』の機能に思考を巡らす——その前に、『白式』の方から答えを提出してきた。

成る程便利なものだ、これは人を駄目にするだろうな、などと皮肉るように毒づきながらも、このやりとりを遠隔で行ってくれているだろう相手に、心の中では感謝して。目の前で起こっている破壊力の飽和と、これから起こりうる開放への対処方法を手に入れ、拳を強く握りしめた。

「こういうのがあるらしい——ブレードで触れた対象のエネルギー全てを消滅させる能力。名前は零落白夜、だそうだ。あいつにしては良いネーミングだな」

「そう、なんだ……」

「あそこに溜まっているエネルギーさえ消し去れば、流星のジュエルシードも長いこと暴走状態を続けられない。後は纏めて回収して終わり、だそうだ」

ふふ、と軽く笑いながら、なのはから振り返り、正面の光を真っ直ぐ見つめて。千冬はいつも暴走体を相手取る時のように瞳をギラつかせ、心を戦闘体勢に移した。

何の事はない。対象が大きいとはいえ、いつもの荒事、暴走体の封印とほぼ同じだ。

例え、ジュエルシードのエネルギーと同時に、『白式』のシールドエネルギーが対消滅するとしても。もし『白式』の駆動炉が限界を迎え

れば、その時は諸共に消え去るのだとしても――

だがその背中に、食い下がる声が聞こえた。

「千冬ちゃん、私も行くよ」

千冬の内心での決意を感じ取ったのか、この正念場に千冬だけを行かせることが許せなかったのか。それとも、ただ単に何も考えず、力を貸そうとしているだけなのか。

ボロボロのはずのなのはが、同じくボロボロな杖を掲げて千冬の隣に並び立った。

「よせ、今のお前には魔力が」

「それなんだけどね。なんだろう、私の中に魔力がなくても、この周りにはジュエルシードの拡散した魔力とか、戦闘で使いきれなかった魔力が残ってるでしょ？ そう考えると、なんだか分からないけど、それを一点に集められるような気がしてきて……だから、あと一発だけ、いけるよ」

その言葉に、千冬は驚くどころか呆れ返ってしまった。

なのはの使う魔法はパソコンのプログラムのようなもので、予め構築してセットしておかないと使えないというのは千冬も知っている。

では、魔力を集めて運用するというなのは「あと一発」は、一体いつ構築されたのか？

フェイトとの合体魔法からこちら、ずっと戦い続けて魔力不足に苦しめられたのが、魔法をひらめく理由というのは分かる。だが、戦い傷つき、縛られて罵られもしたなのはが、その間にマルチタスクで術式を作った、なんてとても考えられない。

しかし、現になのはは立っている。精魂尽き果てたはずの身体で杖を構えて、脚部装甲の分背が高くなった千冬を見上げて見つめ、最後まで一緒に戦いたいと訴えている。

「――分かった。二段構えだ。まず私が突っ込む。前面のエネルギーが全て消滅した所で、封印砲を撃て」

「それじゃあ、千冬ちゃんが」

「問題ないさ。砲撃が届く前に離脱すればいい。阿吽の呼吸というやつさ。なに、私達なら」

「……うんっ！ 出来るよね、うん、うんっ！」

千冬は微笑み、なのはは破顔した。

今はもう、ふたりとも、ひとりじゃない。

ひとりじゃないなら、なんだって出来る。

——うん、なのちゃんはひとりじゃないよ。ひとりになんて、させないよ

なのはの心に聞こえたその声は、録音どころか只の空耳である。

けど、なのははそれこそ束の声だと確信し、しかも、今度はちゃんと言い返した。

——束ちゃんだって、ひとりじゃないんだからね——

「やるぞなのはー！」

「うんっ！」

絶え間なく脈動と拡張を続ける光の玉に、立ち塞がる少女が二人。

まずは、前面に立ち、双剣を一つの大剣に纏めた千冬と『白式』が、まっすぐに光の渦中へと突っ込む。当然、白い光は白い剣士を飲み込み、無に還す——その直前。

『白式』に実装された切り札が発動し、千冬を飲み込んだとした白い光を消し去った。

「さあ、往こう、『白式』！」

動力炉をフル稼働させ、捻出したエネルギーの全てを刀剣型近接武器「雪片」へ注ぎ込む。

白い刀身から伸びた青いエネルギーの刃が、ジュエルシードの魔力エネルギーと接触し、エネルギー同士の対消滅が始まった。

「ぐう、ううう……流石に、キツイな」

エネルギー同士の衝突とはいえ、剣の持ち手に掛る負担は相当以上のものだ。人並み外れた膂力を持つ千冬だが、押しこむことなどとても出来ず、ともすれば弾き返されてしまいそうになるのを二枚の羽根のブースターで押しこむのが精一杯だ。

しかし。

——自分の後ろには、なのはが居る。剣を押し返され、一敗地に塗れた、あの時と同じだ。

——だったら、今度は押し通る！

「はあああああああああつ!!」

その気迫に、『白式』^{タバネ}も答えた。

全エネルギーを推力と零落白夜に回す。『白式』に備えられたハイパーセンサーも、コアを補助する制御プログラムも今は不要。そのくらいなら、支えることなんていくらでも出来るのだ。

零落白夜以外の全ての制御が解かれ、ともすれば空中分解しかねない『白式』を支えたのは、以前より外から介入し、唯でさえ不完全なコアの代わりをしていた制御プログラムだった。

そして、妄執の生んだ白い闇の中に、一筋の穴が開く。

「行くよ、レイジングハート!」

システムダウンから復帰した魔杖の杖先に、展開された輪状のスフィア。なのははその中へ、自分の周囲にある魔力を集め、渦巻かせ、一つのベクトルを与える。

なのはの思惑通り、この場に散らばった残留魔力は常時に比べれば凄まじい量だった。少なくとも、目の前で繰り広げられているエネルギー同士のぶつかり合いをぐぐり抜け、その先にある災厄の源を撃ち抜けるくらい膨大だ。

「千冬ちゃん!」

「なのは!」

「せーのっ!」

目を交わさず、3つのエネルギーがぶつかり合う轟音の中放たれた声は互いに聞こえず。

けれど、なのはとレイジングハートが魔力を開放したその瞬間。千冬と『白式』は真っ直ぐ、回廊の天井へ向かって離脱した。

「いっけええええええええ!!」

桜色の閃光が、ジュエルシードを全て包み込み、そして、光が広がっていく。

それは、千冬が離脱してから封印されるまでに放たれたエネルギー

の総量であり、世界を消すには至らずとも、庭園を半壊させるには十分すぎる程の威力を持っていた。

今度こそ全てを放ちきり、一歩も歩けないのはへ、光が迫っていない。

それは、なのはに向かって何度も、執拗に伸ばされた死神の鎌。

だが、なのははそれをしつかり見つめながらも、右手を真上に伸ばし、ちょうど天から差し伸べられた『白式』の手へ重ね合わせ、離さないようにしつかりと握った。

終わる命の手向けに贈る (II)

まぶたが緩み、無間に思えた暗闇に、うつすらと光が灯る。そして少女の網膜に映るのは、白く眩く輝く月と、満天の星空だった。

痺れるように虚ろな記憶の中から、ついさつきまで見ていた風景の絵柄を探し当てよう。確か、雲が掛かっていたはずだ。灰色でどこどこ黒く、分厚い雷雲。空を飛ぶ自分を何度も煽り吹き飛ばした強風。ところが今は、それら全部がさっぱり消えて、穏やかに凪いでいる星空が、全天に広がっている。

フェイト・テスタロッサは今、傷ついたBJと身体を夜風に晒しながら、海浜公園に並ぶベンチの上で、すぐ横のアルフとともに倒れ伏せていた。

「……あ、起きちゃった？」

そんな星空を正面から見ている自分は、仰向けに倒れているのだなとフェイトは知覚出来た。そして、星空を遮るように顔を向けている、ちよつと毛並みが荒れているフェレットに見覚えもあった。

「君……は……」

「でも良かった。君だけでも、意識が戻ったんだね？」

フェレットは、当たり前のように人語を喋る。フェイトの記憶が正しければ、彼女と彼は互いに争う関係のはずだ。当然、身を起こして離れようとした。だが、起き上がる瞬間、全身に鈍痛が走り、意思を無視して勝手に倒れこんでしまう。

「ああ、無理しないで！ こんな姿だから、大した治療魔法も使えなくて……ごめん」

姿。そういえばこの子は、フェレットから人間に変身出来たんだっけ。

その程度のこともちいち意識しなければ思い出せないほど、フェイトは消耗していた。

当たり前だ。危険な目にあって、他人を傷つけてまで尽くしてきたフェイトの母親。プレシアが、フェイトをクローンと呼んで、捨てたのだ。

そう、捨てられた。自分は、プレシアの本当の娘ではなかった。

「……………」

怖気づく声が漏れ、肩に、腕に、背中に寒気が走る。春も終わる頃、夜風はそんなに厳しくないはずなのに、フェイトの心はあつという間に凍えていく。バリアジャケットはびりびりに破れているけど、そうして感じる寒さより、ずっと冷たい風がフェイトを撫でた。

あの時のプレシアの形相と、落ちてきた雷撃。感受性の強い少女の心は、その痛み苦しみより、冷酷さと冷たさをより感じていた。

思えば、プレシアがフェイトを労ったことなど一度もない。難しい魔法を覚えた日も、デバイスに習熟した日も、『お使い』から帰ってきた日もプレシアは研究室に閉じこもっていて、リニスが死んだ後は、姿を見せたかと思うとフェイトを叱責し、鞭で痛めつけた。

フェイトはそれを、当たり前だとは思っていないなかったし、怖いとも、逃げたい、嫌だ、とも感じていた。でも、決して口には出さなかった。だって、母親は娘を愛するものだから。小さい時の思い出が、そうフェイトを導いていた。

けれど、それは偽り。クローンにアリシア・テスタロッサの人格をなぞらせるための縛りだと明かされたのだ。

「……………」

だから、フェイトの瞳は焦点を失い虚ろになっていた。

「あ……………」

自分の目の輝きなど本人には分からない。しかし、海浜公園の隅っこでずっとフェイトの側にいたユーノには、はつきりと見える。彼女の身についさつきから起こっている激動を脇から見ても居るのだから、その心情もある程度は推察できてしまう。

沈黙。今までにほんの二三言も言葉をかわしていない、敵同士の二人は、暫くの間重い静寂の中に漂い続けた。

「あ、えと、そうだ」

フェレットが、素っ頓狂な程上ずった声を出した。春の夜の風音に乗っかって、上滑りする。

「君が気がついたってこと、アースラの医療班に連絡しないと。もう

すぐ来るって言ってたし」

そう言われて、フェイトは初めて自分の中でなく、外の周辺へと意識を巡らした。すると途端に見えてくるのが、ユーノとフェイト以外の魔導師の姿である。その誰もが同じ服装と似たようなデバイスを装備している。

ということは、四方八方に飛び交っていたのは、全て時空管理局の局員だ。

フェイトは、ここが敵中の只中だということに初めて気づいた。お腹に力を入れて上半身を起き上がらせ、背筋と目を強ばらせたその手には雷撃で損傷したままのバルディツシュを握る。

急に動き出したその様に慌てたユーノは、小さい体を精一杯飛び跳ねさせながら、更に起き上がろうとするフェイトを押し留めた。

「わわ、ちよつと待って！ 別に悪いことをするつもりはないから！」
「……」

「傷ついた君たちを保護するだけなんだ。こんな状況じゃあ、敵も味方も関係ないよ。ね？」

その言葉に、一瞬フェイトは静止する。しかし、敵も味方も関係ないというのは、どういうことだろうか？ もしや、自分が眠っている間に、全てが終わってしまったのでは。

そう思うと、やはり無理にでも動いて、状況を確認するしか無い。フェイトの中にある、魔導師としての合理的な思考がそう決意した。システムダウンし、もはや物言わぬ愛杖をコンクリートの地面に置き、それを支えにして、痺れで言うことを聞かない足腰を、無理矢理立ち上がらせる。

「あ、いけない、見ちゃ駄目だ！」

ユーノは慌てて止めようとしたが、所詮フェレットの身体である。質量的に大きく差のある少女の体を無理矢理抑える事は出来ないし、言葉で納得させるのはもつと無理な相談だ。

だから、フェイトが周囲を見渡すのをどうしても止められなかった。

傷つききった自分の心から目を逸らせたことで、フェイトは落ち着

き、その体調も平常へと戻っていく。痛みは尚も残っているが、少なくとも、薄らぼやけて近くしか見えない視覚はまともになっていくように思えた。

それまで展開されていた強装結界の代わりに、人払いの効果を持つ結界魔法が使われていて、好き勝手に飛び回るのを目撃される心配はない。だから、転送魔法のポートから湧き出るように現れる武装局員はそれぞれに飛び立ち、ある一点を指して海上へと向かっている。フェイトの目も釣られて、その一点へと吸い寄せられ。

「あ……そんな、な……」

再び、壊れたレンズのように弛緩した。

「……だから、本当はこのままずっと寝ていて欲しかったんだよ」

ユーノも苦い顔をしながら、青白く硬直したフェイトの顔と同じ方角へ振り向き、そこにずっとある構造物を改めて見つめた。

時の庭園。次元空間から海鳴の海へと転移し、次元断層を超える大魔法の依代になるはずだった巨大な航行船は、その上半分を削り飛ばされたように失い、廃墟と化していた。

「何が、あつたの」

怯える声で、フェイトは尋ねる。目の前に居るのは敵だが、それでも聞かずにはいられない。

だって、あそこはフェイトの住む世界そのものだったから。かつて、ミッドチルダはアルトセイムの大地に停泊していた大きな庭園。フェイトはあの中で生まれ、育てられ、そして学び、鍛えた。しかし今、そのほとんどが吹き飛ばされ、残った部分も傷ついたまま野晒しにされている。

それだけではない、あの中にいたプレシア——母さんは、どうなったのか。

「……中で何があつたかは、詳しくは分からない。そこにいたなのも千冬も無事に帰ってきたけど、体力を使い果たして今は寝てる。ただはつきり分かっているのは、ジュエルシードが暴走したってこと」

千冬が『白式』とともに飛び立った後、ユーノは残り8個のジュエルシールドを確保したまま倒れているフェイトとアルフの側にいた。すると、突如庭園から光が走り、大爆発が起きたのだ。

その轟音と衝撃波に小さな身体を揉まれながら、ユーノは爆発の中にいるはずのなのはと千冬がどうなったのか、気が気でなかった。

しかし、ユーノの隣には、あの場での出来事を全て知っている少女がいたのである。

——あー、大丈夫だよユーノくん。ちーちゃんもなのちゃんも、最大戦速で離脱したから。

目の前の爆発に眉一つ動かさず、ケロツとした顔でノートパソコンを操作し続けている束がそこにいた。その両手はキーボードから離れずに、まるで熟練のピアニストのように素早く正確に動いている。

それは良かった、と返そうとした時。長い間束に付き添い、否が応でも側で見つめざるを得なかったユーノの目が、束の異常を目ざとく見つけ出した。

束の額から、汗が吹き出ている。顔と頬を伝い、ぼたり、と地面の上は何度も落っこちていく。ユーノが今まで見てきた篠ノ之束という人間は、なのはに無意識で追い詰められた時の冷や汗などならまだしも、疲労や運動による汗など一回も流したことはない。

細胞単位でオーバースペック、と自画自賛されていた束の身体は、その時のユーノが見る限り、疲労困憊の極みにあるようだった。

——え、これ？ えへへ、流星の束さんも『白式』のコアの処理をまるごと脳内でエミュレートは結構疲れたっぽい、かな？

思わず心配そうな目を向けるユーノに対し、束はいつもの調子で笑いかけるが、深すぎる目の隈もあって、いまいち元気には見えない。束自身も自覚しているようで、即座に顔をよそへと向け、パソコンを折りたたんで脇に抱えた。

——ま、もう山場は終わりだし、大丈夫だよ

と、指差した場所では、庭園の残骸の一欠片が海面に突き刺さり、柱が出来上がっていて。その上に、『白式』を解除した千冬と、魔力切れで私服に戻ったなのはが佇んでいた。

ユーノは、とにかく二人が無事でよかった、と胸を撫で下ろす。それを見た束も、また安堵したように笑い、それからこう付け加えた。

——そろそろ結界も破れて、アースラが皆を助けに来てくれると思うから、それまでそこで待ってた方がいいよ。……じゃ、ちよつと行ってくるね

行くって、何処に。

慌てて視線を戻したユーノだが、束の姿は既にかき消えていた。

「……とまあ、こんな感じかな。今はクロノ……ええと、管理局の執務官が事後処理兼生存者、つまりプレシアの捜索を続けてる。でも、見通の通りこの有り様だから……プレシアが、その、君のお母さんが見つかるかどうかは、わからないと思う」

恐らく、ジュエルシードを暴走させたのはプレシア本人だろう。ならば、あんな爆発の只中で無事でいられる訳がない。

そのことをフェイトに伝えるべきか否か、ユーノはかなり迷った。しかし、無理をしてまで庭園まで飛んでいこうとするフェイトを見て、結局自分の口ではごまかすこともはぐらかす事もできないと思いきり、正直に伝える。

「……そう、なんだ」

フェイトは俯いて小声で答える。そしてそれきり、また黙り込んだ。

ユーノにしても、たった数時間で、信じる者も愛する者も自分の家すら失った、この女の子に掛ける言葉など見つかるとは思わなく。

互いに、ひたすら自分の無力さを噛み締めるだけ。そんな静寂が再び訪れる。

二人の周囲では局員がせわしなく動きまわり、彼らの常識では十年に一度も起こらない非常事態に気を張っていた。ただの次元震未遂だけでも相当な大事件だが、相手は管理局を完全に封じ込み、管理外世界を一つまるごと巻き込もうとした。そして何も出来ないまま手をこまねいていたら、たった四人の民間協力者によって全てが終わっていたのだ。本来の責務を果たせなかった後悔も含め、事後処理に力

が入るのも当然だろう。

だが、奇妙な熱気に包まれる周囲と、ユーノとフェイトの二人の周りは完全に隔離し、冷たい。

「……………」

半ばバラバラに分解している庭園から目を離さないフェイト。バルディッシュはまだしっかりと握り、余った左手で、隣に寝ているアルフの頭を撫でる仕草は恐らく無意識だったろう。

そんな悲痛な姿を見続け、更にはこの沈黙を維持するのにとても耐え切れず、ユーノは近くの局員へ、フェイトとアルフを艦内医務室に連れて行ってもらおうとした。

しかし、そのために身体を四つん這いにして、テトテトと走り去ろうとしたその時。

「ねえ」

フェイトが振り向かず語りかける。

「な、なに」

「…………あの娘たちは、無事だったんだよね」

誰のことを指すのか、ユーノは一瞬悩んだが、やがてぽつりと告げた。

「うん、なのはたちは無事だよ。無事に帰ってきてくれた」

「そっか」

この会話の直後ユーノは走り去って、だから聞こえていなかったが。

フェイトは本当に微かに、穏やかな風にも負けて消えるような小ささで、

——よかった

と、呟いていた。

同時刻。半壊した庭園に突入した局員たちは、未だ入り口付近にし

か足を進めていなかった。

半壊し、天井には蓋が吹き飛んだような大穴すら空いている時の庭園だが、それ故に内部は瓦礫が散乱していて、だから、武装局員たちの探索も人数の割にその効率がとてつもなく悪い。

クロノやリンディの指揮、そして彼らの士気や練度は消して低いわけではなかった。低い訳ではないのだが、彼らは探索と同時に、この巨大な遺跡じみた残骸の撤去も同時に行わなければならないのだ。こんな構造物を管理外世界にそのまま残せば、どんな騒動と混乱が起るか分からない。海辺に人払いの結界を貼ってこそいるが、何としても手早く撤去し、ここで起きた一大事件の手がかりを残さずに、立ち去らねばならない。飛ぶ鳥跡を濁さず、といったところか。

だが、そうなると今度は、この場に居る要救助者の存在が彼らを阻む。プレシア・テスタロッサ。状況からしてまず生きてはいないとかがえられる彼女だが、それにしても死体があつきりと見つかったわけではないのだ。この事件の主犯であり、重要参考人でもある彼女が例え生きているにしろ死んでいるにしろ、法的機関としての管理局は捜索を行って、何らかのケリを付けなければならぬ。

以上の理由で、彼らの探索と捜索の二段工程は未だ、ほんの僅かしか進んでいなかった。

「……………」

だから彼女は、この場まで辿り着けた。搾りかすのような魔力と、枯れ葉のように朽ちた身体で、しかし執念が彼女を生かし続け、ここまで辿り着かせた。

時の庭園、その最奥のさらに最奥。最高機密であるそこから見れば、全体の司令塔だった玉座の間すら通過点でしかなく、更に他の部屋など全てが無価値だ。

「……………」

あの爆発の中で、彼女——プレシアは、奇跡的に生き残っていた。

いや、奇跡というより、彼女の執念がそうさせた。魔力が尽きる瞬間、短距離転送を行ってこの場所へ、つまり自らの研究室へと跳んだのだ。お陰でぷつりと意識さえ飛び、目が覚めたのは爆発から数時間

経った今この時になってしまったが。

しかし、そんなプレシアにもう立ち上がる程の気力も体力も存在しなかった。というより、足の感覚が完全に消え失せてしまっている。あるのは、只鈍痛のみ。もしかしたら、何らかの衝撃で折れているか、施設の残骸に押し潰されてしまっているのかもしれない。

だが、そんなことは関係ない。プレシアは両手を使い、這いずるように動き始めた。

一つ動く度に、出血した肺からポンプのように血が汲み出され、口からたらりと流れ出る。その鉄臭く不快な味すら、今は薄れゆく意識を繋ぎ止めるための感覚にしかならない。

「……………あ……………い……………あ……………」

やがて彼女の目線が行き着いたのは、停電している研究室においてもたつた一つ、自家発電で照らされ、機能しているカプセル。透明な液体で満たされたその内部には、金色の長髪を揺らし、眠るように目をつむっている小さい身体が浮かんでいた。

「あ……………あり……………しあ……………」

二十年前とまったく同じ姿の、アリシア・テスタロツサがそこにいた。特殊な培養液に浸かり、その身体には何らの劣化も変化も見られない。プレシアの心の中で今なお生き続ける空蟬。物言わぬその身体に何らの欠損も見られないことを確認し、プレシアは安堵した。

爆発の大きさは、プレシアも把握している。事実この研究室すら、機材がバラバラに飛び散り、書類が散乱して酷い有様になっているのだから。それでも、何重にも防御措置を重ねた、あのカプセルだけは無事だった。

それだけでいい。プレシアにとって、この世界で唯一価値のある物がそこにあるなら、他の何もかもが、自分の命すら失われようとも構わない。

「ごめんなさい……………ありしあ……………わたしは、あなたになにも……………してあげられなかった」

プレシアは今、己の全てを天に預けた賭けに負けた。いや、ジュエルシードを使ってアルハザードへ着けるかというのが賭けならば、そ

もそも全てを費やして、賭けの場にすら立てなかったのかもしれない。

そしてこの庭園も、傀儡兵も、道具のクローンも失って、たった一つ最後に残った自分の命すら、もうじき尽きる。

けれど、せめてその最後の最後、アリシアの側にいたかった。

「でも……そばに……また……ふたりで、いつしよに……」

このまま、時の庭園が放置されるはずがない。管理局が踏み込んで全てを調べ持ち去り、このカプセルも証拠品の遺体として回収されるだろう。

そうなる前に、せめてアリシアの側で眠りにつきたい。ただその一念で、プレシアは切れかけた命を無理矢理繋ぎ、身体に鞭打って這いずり進む。

その後、この地が二人の墓所として暴かれようとも構わない。彼らがどんなに自分たちの死体を引き離し、検死などして弄ぼうとも。

私達がここで二人きり、ここで眠っているという事実は、誰にも侵されることはない。

「いつしよ、に……」

しかし、プレシアが最後に抱いた切ない願いも、今までと同じくやはり誰かに踏みにじられる。

「はぁーい、そこまで」

篠ノ之束が、這いつくばるプレシアと物言わぬアリシア、その狭間に横から飛び込んだ。

プレシアの顔が憤怒の形相に変わり、血走った目が見開かれる。自分を裏切り、潰そうとして、この期に及んでまだ邪魔をしようというのだ。

「なぜ……」

「ん？」

「何故裏切った……この、私を」

それまでの弱々しい声と違って、かすれてこそいるものの恨みが籠った声。その顔に死相が見えているせいで、まるで死神が語っているような冷たさを内包している。

常人なら怖気づいてしまいそうなその罵倒に、しかし束は何も感じていないように澄ました笑いを崩さない。

「裏切った？ 私には最初から、表も裏もないよ。私はなのちゃんの味方なんだから」

「なら何故、私に協力した……私に協力し、あの状況を作り出したのは、どうして……」

「それはね。こうした方が面白いからなんだよ。こうした方が、なのちゃんもちーちゃんも、皆頑張つて、輝いてくれるんだから」

そこには確かに、一つの理屈があつた。

『プレシアに同調し計画を建てた』束からすれば、想定外の力に防御を崩され、残りのジュエルシードの確保もままならないという、極限まで追い詰められた状況。しかし、一度俯瞰して、『なののはの友達であり協力者でもある』束の視点で見れば、の友達と発明品が『悪』のプレシアを追い詰め打ち倒す、華々しい光景にも裏返してしまうのだ。

つまり、束の頭の中には、最初から最後までこの光景しか見えていなかったのだ。

まずプレシアを騙し、次に管理局も騙し、更にはなののはと千冬に隠してまで、最高の状況を構築する。その最後の一ピースにして、状況の真の主役こそがここにある『白式』。篠ノ之束の現時点での最高傑作にして、なののはの夢と千冬の願いを具現化した空飛ぶ翼だ。

それが活躍する晴れ舞台こそ、絶体絶命のなののはを千冬と『白式』が助けるという状況だった。

「……そん、な……」

かくて、プレシアは束に、なののはと千冬、そして『白式』の当て馬として使われたということになる。

無論、法を犯し危険なロストロギアを私欲に使おうとしたプレシア自身の自業自得、という面が無いわけではないが。

ただ娘を救わんとする為に、全てを投げ打って悲壮な決意を固めた彼女にとって、これは何よりも、余りにも残酷な仕打ちであった。

「……それで、いいというの？」

だが、プレシアにはまだ一つ、納得の行かない点があつた。

「貴女は、私と同じ……『天才』だというのに。それが、どうして……」
そう。篠ノ之東が心の中に持つ感覚は、プレシア・テストロッサの持つそれと、殆ど同じはずなのだ。同じく『天才』と呼ばれる程の才を持ち、だからこそ世界の俗に飽き、ただ僅かな、真の自分を理解し、愛してくれる人間にしか興味を抱けない。

そんな東とプレシアである。たとえ利害が一致しなくなるうとも、こんなはずじゃない世界との別れという志を裏切ることにはあり得ない。いや、あり得ないはずだった。

「あは」

しかし、血を吐きながら必死に訴えるプレシアを見た東は、腹を抱えて笑い出した。まるで見ているものが、滑稽に踊り戯けるピエロであるかのように。

「あはははははっ！ 面白い！ 面白いよプレシア・テストロッサ！

まさか『まだ』そんな風に考えてたなんて！ とつくに気付いてたっておかしくないのに……ううん、やっぱし気づいてなくて当たり前なのかな？ あははははは！」

「な……」

何を言うの。そう口を動かそうとしたその瞬間、プレシアは気づいた。

いや、元々、心の底では気づいていたのかもしれない。東の言うとおり、あの頂点からの転落、そして諸共に滅ぼうとして失敗した時に、気付いていたっておかしくはないのだから。ただそれを認めたくなくて、無意識に心の奥底へと仕舞いこんでいたのかも、しれない。

少なくとも、東はそうだと確信していた。

「あ、分かっちゃった？ 顔色変わったよ？ うんうんそうだね、やっぱりシヨックだよねー。今まで信じて疑わなかったものが、ゼーンぶ自分の勘違い、フエイクだって気付いたんだからねえ」

「……あ、あああ……」

「そう、プレシア・テストロッサは」

「いう、な」

それ以上言うな。そうしたら、認めてしまう。そんなはずはない。

あり得ないと信じているのに。文字通り『天才』の束が口にしたら、語られたら。それが全て、露に消えてしまう。

そんなプレシアの静止など、意にも介さぬように束は言った。

「君は『天才』じゃない。只の凡人、何処にでもいる、ごくごく普通の母親に過ぎないんだよ」

「あ……ああ、あ……」

プレシアの心で僅かに残った、一欠片の自尊心を押し折るそれは、単なる言いがかりではない。フェイトの記憶を読み取り、事件の裏にあつた真実を知った時から、束の脳内で演算されてきた紛うことなき真実であつた。

それが証拠に、束は散らかつた研究室から、ある書類を抜き出して、プレシアに見せつける。

「これ、なんだか分かる？ そう、プロジェクトFの研究データ。私はね、最初にここへ来た時から、このデータを抜き取って調べていたんだ」

プロジェクトF。人造生物の開発と記憶移植により、元となつた人物の肉体と記憶を複製するという生命操作技術。プレシアはこれに参加し、アリシアのクローンであるフェイト・テスタロッサを生み出した。

束の居る地球では、これほどまでに高度なクローン技術は存在しない。その点で言えば、これを構築したのは正しく『天才』の所業であると考えていいのだが、束はそれを笑いながら否定する。

「確かに素晴らしい研究だよ。理論に一分の隙もない。でもね……ここに書かれている厳格な事実を、貴女はわざと見逃した。ううん、さつきと同じで、認められなかつたんだよね」

それは、余りにも残酷すぎる定理。しかし、束はこの論文から、その事実を覆さずにプレシアへとぶつけた。

「この理論で、アリシア・テスタロッサは作れない」

「あ……う、ああ……」

狼狽するプレシア。束はそれをおちよくなるような目つきで、プレシアが向かおうとするカプセルを指さす。

「冷静に考えてみれば、あたりまえだよな？　だって、アリシアはまだそこにいるんだもの。一度作ったものを再び作り直した所で、それは前とは別物だってことは、誰にだって分かることじゃん」

プレシアが認められなかった事実。それは、この世界に全く同じ存在などあり得ないという、科学というよりはむしろ哲学に属するごく当たり前の論理だった。

「あの娘も可哀想だよなー。既にあるものと同じになれ、だなんて。大体、本当に娘を取り戻したいのなら、最初から人形遊びに逃げる必要はないよね？　クローンはどう精巧に作ろうとも、やっぱりそこにあるのとは違うんだからさ」

例え肉体と記憶を、寸分の狂いも無いほど精巧に模造したとしても。それはホンモノではなく、あくまで偽物であり、紛い物である。それに、記憶と肉体だけが人間の全てではない。既に持っている何もかもが同じでも、フェイトが生まれてから過ごす周りの環境は、アリシアとは既に違うのだ。もし作ったその時点でアリシアと同質だったとしても、1秒、1分、1時間、1日がすぎることには、それはプレシアの中のアリシアから段々と遠のいていき、『フェイト・テストアロツサ』に変わってしまう。どんなに完成度を高めても、化けの皮の剥がれるのが遅いか早いかだけである。

プレシアほどの才女が、それを分かっている筈はない。だが、プレシアはその事実を無視し、プロジェクトFの研究へ——身体を壊し、寿命を縮めてしまうほどにほどに、打ち込んだ。

なんて、馬鹿馬鹿しい。なんて、愚か。最初から無駄だと気づいているのに、それを無視するだなんて、まるで逃避だ。厳然たる事実や現実から逃げ、ただ己の無力感と罪悪感を中和するためだけに無意味な研究を続ける。

「そんな人間、つまらない。分かっている事実を無視するのは凡愚のことだよ。だから君は、例えその才知がどんなに優れていようと『天才』にはなり得ない」

東は笑顔のまま、吐き捨てた。確かに彼女には才能があったろう。それを物にするだけの努力もしているし、更には才能を途絶えさせな

いだけの執念すら存在した。

しかし、現実には耐え切れず逃避した時点で、束にとってのプレシアは、凡人以下の愚物に成り下がった。

「……あ、うああ……」

「今言ったことも、本当は全部かかってたんでしょ？ プロジェクトFに参加した時点で、自分は過ちを犯したって。でも、認められなかった。君の心の弱さがそれを拒んだんだ。だから、廃棄すればいいのに、クローンにフェイトなんて名前を付けた。プロジェクトの頭文字を使ってる時点でもー未練たらたらじゃん」

本当に過ちだったと気づいたなら、さばつと忘れればいい。それを糧にして、また一からやり直せばいい。だが、病魔に侵されたプレシアにはそれが出来なかった。自分の生命を賭けた研究が全て無駄だったと認めたくない。だから、プレシアはフェイトに記憶転写を重ねがけし、教育係の使い魔まで作って、道具に仕立てあげたのだ。

「そんな悪女みたいな服装をしてるのも、使い魔を使い捨てにしたのも、クローンを苛め抜いたのも全部嘘。他人につく嘘じゃなくて、自分についてる嘘なんだ。自分がそういう存在だと信じこまなければやっていられなかったんだよ。ただの人妻には、過ぎたことだもんね」

作つてからずっと嫌いだった、なんて告げるくらいなら、最初から破棄すれば良かったのに。魔力を過度に供給して余計な命脈を削るくらいなら、使い魔に教育なんて任せなければいいのに。そして彼らの愛を、献身を、中途半端に突き放すものだから、元からプレシアの中にある憎しみと哀しみがさらに増して、理性的な判断の邪魔になつてしまつていないではないか。

そして視野狭窄に陥つたからこそ、記憶転写のあらを見抜けてしまふような本物の『天才』。悪ぶるプレシアより真に邪悪なマッドサイエンティスト、篠ノ之束の介入を許してしまう。

だから、束は更に付け加える。プレシアの奥に隠された嘘と、その心理を解体する。

「そんな風だから、信じちゃうんだよ。私なんかを。君は自分の理解

者が欲しかった。嘘ばかりついて自分を天才、なんでも出来る悪魔のマッドサイエンティストだと称する君は、同じ『天才』を側に置くことで安心したかったんだ。自分もそうだって思い込みたかったんだ」だから、プレシアは騙された。束にいいように使われ、その生命の最後の一欠片まで彼女の計画に捧げてしまった。

「無駄だと分かっただけで研究して、無駄だと分かっただけで人形を仕込んで。ほんと、おかしいね」

もしかすると、アルハザードだって、本当は信じていなかったのかもしれない。伝承にしか語られないのが本当にあるというのは、狂人の考えである。その点プレシアは、どこまで行っても常人の枠から離れられない。

だから、無駄だと分かっただけで、敢えて他人を巻き込んで、自分を騙したかったのかもしれない。自分を狂人だと思いつき、今までの人生が無駄でなかったと信じれば、それはプレシアの崩れかけた精神にとって、一つの救いになるのだから。

「まあ、どちらにしても間違っていると分かっただけでやった所で、それが正しくなることはない。例えば私が居なくなつて、君は永遠にアルハザードには辿り着け……あれ？」

朗々と語り続けていた束だが、ふと異変を感じてプレシアの顔を覗き込む。

その瞳は開いたまま弛緩し、心拍も停止している。しゃがみこんだ束がその頬に触れたら、ひんやりと冷たい。

死んでいる。

プレシア・テスタロッツサの生きる意思是、束の言葉が与える絶望に耐え切れなかったようだ。

「……あーあ」

束は、倒れたまま動かないプレシアを仰向けにひっくり返し、その上体を抱き抱える。

その顔は、まるで遙か昔のアルバムを見つめるように、穏やかで、どこか悲しげだった。

「ほんと、おかしいよ君は。天才なんてさ、なるようなもんじゃないん

だよ、もうなってるから天才なんだよ」

繰り返し、繰り返しそう呟く。

「普通のまま、娘が好きな母親のまま天才になろうとしたから——こんなふうになっちゃったんだよ」

束は脳内で演算する。

プレシアから語られた、アリシアについての情報。アースラのデータバンクにハックして調べ上げた、数十年前の大型魔力駆動炉稼働実験の情報。時の庭園に保管してあった、事故についての裁判の資料。

全てを総合すれば、その時のプレシアと、アリシアの環境が見えてくる。後は天才などではない極普通の健気な母親と、快活で無邪気な女の子の思考をエミュレートすれば、彼ら二人がどんな日常を過ごしてきたか、その会話の一つ一つまで、再現できる。

そんな束の脳内で繰り返される、実験手前の日々、二人の日常。その中で、アリシアはいつも。

——私、誕生日プレゼントには妹が欲しいな。だって、そしたらお留守番も寂しくないし、ママのお手伝いもいっぱい出来るようになるから！

——だから、お願いね、ママ。

「——なんだ、思い出せないだけで、覚えてるんじゃない、大事な約束。娘を蘇らせるなんて身の丈に合わないことよりも、そつちを先にやろうよ」

多分、それは逝ってしまった娘に申し訳ないと考えて、心の中に仕舞いこみ『忘れた』のだろう。

死人は何も考えないのに。束はそう考えると不思議に憤りを感じた。

そして再び、アリシアに目を移す。目の前で自分の母親が死んでも、その死体は動かさずかぶかぶか漂うだけ。

「こんな死体、捨てればよかったのに。土に埋めて、ささやかな葬式やって、また結婚でもして、赤ちゃん産めば……多分、その娘が明るい『f a t e』を連れてきてくれたのに」

がごん、と気味の悪い音が響く。束の拳が、カプセルを殴っていた。

そこからヒビが入り、強化ガラスはいとも容易く砕けて割れた。

溶液が流れ出して束のドレスを汚すが、束は離れない。そのうち、カプセルを満たしていた液体は全て流れ出す。最後に落っこちたアリシアの死体は、地面に落ちて傷つくその直前に束の手で抱えられた。

「こんなのが、あるから……！」

それは、プレシアが自らに呪縛した呪い。行き詰まる度、諦めかける度、死にかける度に、プレシアはこの物言わぬ屍の側で、自らの不甲斐なさを謝り、また決意して研究を続ける。

そして、少しずつ壊れていく。綺麗な死体よりも、ずっと歪に、愚かになっていく。

束は仮想し想定する。ミッドチルダに出かけて、アリシアが死ななかつた、またはアリシアの死を乗り越えたプレシアに出会えたら、それはどれだけ、楽しい時間になったろう？

魔導工学について三日三晩くらはいは語り合えたはずだ。狂気が無くても、プレシアは周囲から『天才』と呼ばれるほどの知性を持つているのだから。それに飽きたら、プレシアは娘を、束は親友を自慢し合って、一歩も引かずに喧嘩になって。ヒートアップした所で、なのは、千冬、そして今よりずっと大きなフェイトに止められる。

そうなら良かったのに。こんな幕引きよりも、利用しあうしかなかった関係よりも、もつとずつとずつと、面白かったのに。

でも、そうなるには遅すぎた。遅すぎたのだ。

そう考えると、束は今自分が手に抱えている『使い捨ての当て馬』を、使い捨てだからといって忘れて放置しておくことなんて、出来そうになかった。

「……」

プレシアの頭部。顔に垂れかかった髪を額まで上げて、つつーと、と点線を引くように人差し指でなぞる。

恐らく、まだ脳死までには行き着いていまい。だったら、この無念のままに死んだ女性の執念に、何かを手向けることが出来るはずだ。

「私はね、どうして君がこうなったか、納得行かないよ。ホント、馬鹿

なひと。馬鹿な——」

未練。

その言葉とともに、束と、その手の中にある2つの死体は、研究室から完全に消え失せた。

数週間後。全てが終わった後の篠ノ之ラボ。雑多な発明品が数多く立ち並ぶその中で、ピカピカの新品があることに気づいたのはが問いかける。

「ねえ束ちゃん、これ、何？」

「おお、よくぞ聞いてくれたねなのちゃん！ これはね……演算器なんだ」

「演算器？」

「うん。ある数式を計算させるのに、特化した計算機みたいなもの」

あることつてなに？ と聞かれて、束は珍しくなのはから目を逸らし、何処か遠く、海鳴でない遠い地を見つめながら答えた。

「死者蘇生の方法だよ」

「え……ししやせー？」

「そう。死んだ人はね、絶対に生き返らないんだけど……もしそうじゃないなら、面白いかもなーって思っただからね、そうなる可能性を、この娘に、勝手に計算させてるの」

「そっか。なんだか長引きそうだね」

「うんうん。答えが出る時は、人類なんてとっくに滅びてるし、この星も無くなってるかもしれないけど……ま、それでもいいんじゃないかな？」

計算機の本体、何故か大理石の墓標みたいに塗装されている円柱、その頂点の半球体を撫でながら、束は語った。

そう、それでもいい。この世界に限りがあるのなら、夢のような理論だって、そのどこかに落っこちているはずだ。

今の君は、母親でも人間でもない。だから、思うがままに狂い、全力で答えを求めればいい。

少なくとも自分が生きている間は、生命維持装置の電源は付けたままにしておくし、地下深くに安置してあるアレも、土に埋めたりはしないから――

戦い済んで日が暮れて（I）

プレシア・テストロッサ事件。

辺境世界で巻き起こった、中規模次元震すら巻き起こしかねなかった重大事件は、主犯であるプレシア・テストロッサの行方不明と、ジュエルシード21個全ての回収、そして時の庭園残骸の回収終了によって終わりを告げた。

とはいえ、管理局としてはかなり不始末さの残る顛末であった。アースラのメインコンピュータがハックされて機能を停止し、事件終了まで身動きが取れずに終わった。しかも侵入元の逆探知にさえ失敗したのだ。アースラは管理局の中でも決して新鋭艦では無いが、それでも制式艦船であり、ミッドチルダ製コンピュータの中でも最高クラスのセキュリティが施されている。

それが、システムダウンの隙を突かれたとはいえあっさり突破されたのだ。事件そのものと並び立つ程の重大事である。執拗に行われた庭園の捜索には、その下手人と手口を探す目的もあった。

しかし、分解しかけていた庭園の何処を探そうとも証拠らしい証拠は現れず。残存していたコンピュータや資料に手がかりを求めようとも、その全てが消去されていた。

このように念のいった処置を瀕死の病人が行えるはずがない。となると誰か協力者が居ることになるが、それは一体。

その答えは呆気無く明かされた。というより答えの方から現れ出した。

事件後に行われた千冬、ユーノ、そしてなのはの証言によって、篠ノ之束の行動が明らかになったのである。

曰く、彼女は最初からアースラにはおらず、庭園を囲む結界内についての間にか侵入していた。

曰く、千冬は彼女の作った『白式』というパスワードスーツにより、事態を収集した。

そして曰く。プレシア・テストロッサに協力し、事件の状況を作り上げたのは全て、篠ノ之束ただ一人のことである。

リンデイにとつてもクロノにとつても、正に寝耳に水だった。すぐさま本人をアースラの一室へ呼び出し、事態の経緯について詳しく尋ねることにしたが。

「ふああ……うん。ぜえんぶ私がやったよ？ プレシアに策を与えたのも、この船にハッキングしたのも『白式』を作ったのも全部私。そう、この天才東さんがやったことなのだ……ぐう」

と眠たげに、しかしはつきり面と向かって告げられたので、二人揃って固まった。ロストログアに関する危険な一大事件、その裏の立役者だと自ら証言しているのだから、無理もない。

ニヤニヤ笑いながら反応を待つ東も含め、部屋の中、暫く無言のままでいて。やっと二人の思考が動き出す。

「じゃあ君は、この事件の殆ど全てを裏から操っていた……というのか!?!」

「んー……うん、そうなります……じゃなかった。そうなるねえ」「なっ!?!」

「そんなに驚くようなことです……かなあ？ 東さんの天才ぶりを間近で見てるんだから、それくらい想像してくれてもいいのに……」

それまでのように敬語を使いかけて、面倒そうに直すそぶり。話しているクロノは東の変貌に目を白黒させるばかりだが、脇から見ているリンデイは、そのわざとらしい間違えを単なる演出、もしくははからかいであると考えていた。

「……からかっているんじゃない？ 本当に」

「私はともかく、なのちゃんちーちゃんの言うこと信じないつもり？」

もしそうなら怒るよっ」

「どうしてそうなるんだ……」

目の前で展開される滅茶苦茶な論説に、クロノは頭が痛くなった。とはいえ今の言葉が正しければ、篠ノ之東は間違いなく第一級の次元犯罪者ということになる。管理局制式艦船へのハッキング。次元犯罪者への意図的な内通と協力。2つとも相当な罪状として問うことが出来る。

クロノは管理局員である。その目の前に犯罪を自白している人間

があるなら、取り敢えずは確保して、更に事情を問い詰めねばならない。

すぐさまバインドを展開して、東の両手を縛る。確保と言ってもそこまでする理由はなかったが、東の言うことが本当なら、そうしないとまず逃げられてしまうという悪寒があった。事実、東がやろうとすれば、バインドが顕現する前にあっさり部屋から抜け出されたことだろう。

「うふふ、比べてみると結構硬いねこれ。流石はプロ、いい仕事してますねえ」

「……何を言っているのか分からないが、取り敢えず君を確保させてもらう」

しかし、東は動かず、その両手はバインドで一纏めに縛り上げられた。しかも逆らわないどころか、手首を解すように動かしつつ感想まで述べている。とことん常識から外れた犯罪者へ型通りの文句を浴びせて捕らえようとしたクロノだが、続けて全身にバインドを巻こうとした直前、リンディによって抑えられた。

「待ちなさい、クロノ。彼女を捕まえても無駄になるわ」

「どういうことですか艦長！」

「あの娘の言うことは確かに正しく聞こえるけど……そうである、という証拠は何処にもないわ」

そう。証言の論理性はともかくとして、それを支えるべき物的証拠が全く存在しないのだ。

時の庭園の残骸から、証拠として価値ある物は見つけれられない。爆発とともに消え失せたのか、それとも目の前の少女が持ち去ったのか。どちらにしても管理局が手に入れる術は既に無い。

東本人ならば、何かしらの物品を持っているかもしれないが、まさか管理外世界、それも別の国家の市民の家を令状なしで強制捜査する訳にも行かないだろう。

「それに、あの娘たちの証言だって……信じていないわけじゃないし、個人的には信用できると思うけれど……常識で考えれば、とうてい信じられることじゃない」

「それは確かに……」

うつらうつら船を漕ぎかけている東に対し、二人の会話は深刻そのものだった。

あの強装結界の内側にいたのは、なのは、東、千冬、ユーノ、プレシアに、気絶したままだったフェイトとアルフだけ。他の誰も、事件の爆心地で何が起こったのかを観測できていないのだ。

そして彼女たちが話す真実は余りに突拍子がなく、常識的な説得力に欠けていた。

特に事態の最終局面で出てきたというパスワードスーツ『白式』の存在など、誰が信じてくれるというのだろう。

「あーっ、二人共そんなこと言っちゃって、東さんの大発明を認めないつもりだね？ 確かに凄い無理したから、コアの全機能が停止しちゃってあと半年は動かせないけど……ホントに作ったんだよ？

目のクマこんなになるくらい、頑張ったんだけどなあ」

空を飛び傀儡兵をなぎ倒し、さらには病んだとはいえオーバーSランクの攻撃を容易く防御する。一体どんな代物だ。いくら東が天才だと言えども、地球の技術力では、いやミッドの技術まで含めたとしても制作できるはずがない。クロノとリンディ、二人の常識で考えればそう判断せざるを得ないし、であるなら次元世界の常識だって同じ結論を出すはずだ。

「それに……あの娘たちも、この娘も、あくまで管理外世界の、私たちから見れば外の住人なのだから」

「艦長……」

東の言葉をまるきり無視し、リンディは苦々しく付け足した。

そう。管理外世界の、しかもまだ9歳である少年少女が言うそんな証言を、確たる物証もなしに信用する者はいない。仮に東を連行して本局まで連れて行っても恐らく誰も信じず、戯言として笑い飛ばすだろうとリンディは見切っていた。

そして今事情をまるごと話した東も、それを読んでいる。読んでいるから好き勝手に言い放っているのだろう、と推測もした。だから、完全武装の時の庭園に単身で乗り込んでいく程の実力者が抵抗もせ

ず、バインドで縛られたままにいる。

つまるところ、今のアースラには束を拘束する何らの理由も成立させられないのだ。

そう説得されて、強張った顔のままバインドを解かなかったクロノもようやく折れ、デバイスを閉まって術式を解除した。

「え？ あれあれ？ 捕まえないの？」

「……話を聞いていなかったのか、君は」

「ああ、聞いている聞いている。でもね、これなら捕まえられた方が楽しかったかなーって」

「なんだって!？」

「いやあ、一度行って見たかったんだよね、ミッドチルダ。一人で行くにはちよつと厳しいからさ、連れてつてもらえるなら越したことはないし、ね、どう？ 無理矢理逮捕しちゃわない？ 何ならちよつとエツチな取り調べもしていいよ☆」

「な、なななな……!! 君はー!」

解放された手をわきわきと動かしつつ、二人をちらちら見つめ、無防備な背中を見せながら顎をくいくいと動かす束。隙あるよ、捕まえよ、と言わんばかりの仕草である。

クロノもそれが単なる煽りだと分かつてはいたが、若い身体と頭は当然カツとなるものだ。

しかし、その後の会話であるとなんでもない事実気付き、その熱さもすつと底冷えしてしまう。

「ふざけるな! 誰がそんなこと!」

「そつかあ。もし行けるなら本気だったんだけどなあ。まあいいや、後で君のコンソールの壁紙をえっちいのに書き換えとこつと。オペレータの彼女にでも見られるがいいさっ」

「おい……って、そんなことが出来るのか!? まさか、君はまだ……」

以前アースラをハッキングしたのは、他ならぬ束である。艦内の全システムをジャックしたそれは、結界が消えると同時に全て解除された。しかしてその残滓は、未だアースラの中に仕込まれているかもしれないのだ。

もちろんクロノも執務官として、事後の対策を欠かしていない。艦のシステムに一度リセットをかけて、エイミイを始めとしたクルー総出でチェックもした。

しかしながら、何重にも仕込まれたファイアーウォールやに引つかからず、種明かしをされない限りその存在すら分からなかったウイルスである。コンピュータのどこかに忍び込んでいる可能性はゼロではない。

拡大解釈してしまえば、この船は未だ東の支配から脱しておらず、リンディ親子含め全クルーの生殺与奪を彼女一人が握ってしまっている、とも言えるのだ。

「さてさてー、どうなんだろうね？ そうだと考えてもいいし、考えなくともいいよ」

「……どう、なんだ」

「お、聞きたい？ 聞きたいよね。でも聞いちやったら……後悔するかもしれないねえ、くふふ」

含みのある言葉から、眠気の残滓がかき消えた。今までとろん、と下がっていた瞼が開いている。改めて俯瞰すれば右手が何かを掴んで弄くるようにゴソゴソと動いている。その中にあるのが一瞬で艦内の全てを掌握できるコントローラだとも言うのか。

それとも、仕草だけで何も無いのかもしれない。いや、手の中には事実、バインドに自由を奪われていたさつきまでと同じく何も存在しないのだろう。しかし、それでもクロノは何も言えず、言い出す事もできない。

執務官としていくつかの修羅場を乗り越えてきたクロノさえ、思考を硬直させてしまう無形の不気味さ。それは、たった9歳の魔力の欠片もない少女から醸し出されていた。

「……」

「さあ、どうするの？ どうするのかな？ さあ、さあさあさあー！」

目を見開きながら詰め寄る束の手の中にあるのは、なんだ。

アースラのコンピュータの中に、まだウイルスがあるのか。

あの結界の中で、本当は何が起こっていたのか。

まさに三重の「箱」。

束が箱を開けない限り、どうなっているのかは誰にも分からず。箱のなかの猫が生きているならまだしも、もし死んでいるとしたら。猫を死なせた青酸ガスは覗き見た者をも巻き添えにする。

開けなければならぬ。でも、どうなるか分からない。開けるのが、怖い。

世の中の底にある、どんなに勇氣ある者すら踏み出すのを躊躇し、いざ乗り込めばたちまちに正気を失ってしまう『闇』。本来幾重もの事件や因果によって作り出されるはずの深淵、その類似系を、束はたった3つの秘匿によって作り出している。

だから、じつと動かなかったリンデイも、この構造を突き崩す難しさを悟って遂に口を開いた。

「……私達は貴女を解放します。何もかもがあやふやな証言によって、管理外世界の住民を証拠もなしに連行するわけにはいきません」

「あ、そう」

「但し」

決然と、リンデイは突きつける。何もかもを弄ぼうとする、身の程知らずの天才へ。

「少なくとも、貴女が私たちにその性格を偽ったのは確かです。それ自体は何の犯罪にもならないけど……私たちの信用を傷つけるものであったということだけは、覚えておいて欲しいわ」

つまり、今は泳がせておくが、将来何かあつたらきっちり追求してやる、という宣言だった。

リンデイはもはや、束を年並の少女とは考えていない。そこに悪意があるのか無いのかはまだ分からないが、その行動自体は立派な次元犯罪者なのだ。

「そっか……あは、ははははは、そうなんだ、あはははは」

束は笑う。疑われて、追求されて、そして半ば脅されて。何が楽しいのか、クロノには理解できない。しかし、犯罪者にそういうタイプがあること自体は、士官学校で学んでいた。

愉快犯。

世間を恐慌に陥れ、その様子を喜ぶことのみを目的とした犯罪者。クロノが最も嫌うタイプだ。

ただ、束はその典型とは一つだけ違う。

普通の愉快犯は自分のやっていることを犯罪だと認識していて、だから巧妙に身を隠す。しかし、篠ノ之束はそれをしない。全てを明かしこそしないものの、自分が犯人であると自ら名乗り出ていく。かと言って、此方から逃げない訳ではない。やれるものならやってみろ、と言葉に出さず挑発してくる。

迷いがなくしたたかで、それでいて誰にも何にも従うことがない。クロノが、そしてリンディ今まで出会った中でも、とりわけ厄介この上ない人間がそこにいた。

「ははは……ふああ。まあた眠くなってきたよ。もう帰っていいんだよね？」

気が済むまで笑い飛ばした後、束はエンジンが切れたようにかくり、と俯いて、再びうつらうつらと目を細めるくらい、朦朧な状態へ戻っていた。自慢のウサミミも垂れ落ちそうで、ともすればそのまま部屋の机に突っ伏してしまうかもしれない。

そんな惚けるような仕草すら、二人からしてみれば擬態のように思えてならなかった。

実のところ、事件の始めから殆ど睡眠を取っていない束は、本気で眠かったのだが。神ならぬ二人には見透かせない事実であろう。

「ええ。構わないわ」

「そう。じゃ、ばいばい。ほんのちよつとっただけ、楽しかったよう……」

行儀悪く椅子から立ち上がり、夢遊病のように覚束ない足取りで去っていく。もうここに用はない、と言わんばかりの投げやりさだ。

楽しかった、とはどういうことか。クロノは思う。その気になれば追求から逃れることも出来ように、あえてこの地まで突っ込んできたのは、その楽しみに期待していたからではないか。

自動ドアが閉まり、完全に二人きりになった所で、実際に口に出して意見を交わすことにした。

「艦長。彼女はやはり、僕達と対話するためだけでここまで来たのでしょうか」

「恐らくは、ね。結果として私たちがもし強行して逮捕しても、それはそれでよし、と思っているのよ——恐らく、何もされないよりはこっちの方が面白いと、本気で考えているわ」

「なんて奴だ」

自分の身の安否すら遊興の種にする。捕らえられたらそれまでと割り切っている。捨て鉢と言ってしまえばそれまでだが、そういう人種は総じて悪運強く、かつ常に逆転の目を狙い撃ちするから厄介だ。「今回の事件もそうだわ。東さんは事件を止めるなのはさんたちと、首謀者であるプレシアへ同時に協力し、一方に力を、一方に策を与えた。そして決戦場で、どちらが勝つかを観察していた……無論、彼女としてはなのはさんたちの勝利に微塵も疑いを持っていなかっただろうけど」

「元から事態がどう傾いた所で、彼女にとっては実のある結末だった。なのはと千冬が倒れた所で、プレシアは契約を守り彼女たちの命は奪わない。だから、彼女は何の憂いもなくプレシアを背中から裏切って刺し——ジュエルシードと、彼女の研究全てを乗っ取れる」

「そういうことね」

クロノは苦虫を噛み潰したような顔で、リンディは目を閉じ閉口して、この状況に相対した自分たちの無力さを痛感した。これほどの一大事を、管理外世界の少女一人にいいように使われてしまったというのは、広大な次元世界の治安を守るため日々努力している管理局員にとっては、やはり恥ぢずべきことなのだ。

「やはり、監視しなければならぬと思います」

「私もそう思うわ。でも、今の私たちに、そこへ割ける程の人員はいないし」

「もしいたとしても、生半可な人物では恐らく何の意味も無いでしょうしね」

嘆息しながら二人が回想するのは、少し前に情報収集の一環として、海鳴の図書館から回収した新聞の1ページだった。『天才少女篠

ノ之束、またもやお手柄』。地方版に小さく載っているその記事には、営利目的での誘拐事件を発見した束が、すれ違った車のナンバーと車種を一瞬で暗記して友人と共に警察へ通報したという、なんとも痛快な顛末が載せられていた。

もちろんリンデイもクロノも、それを額縁通りに受け取ってはいない。「またもや」ということは、これと似たような活躍が何回か新聞に載っているということ、肯定的な意味を持つ。つまり海鳴や世間での篠ノ之束という人間は、親しい人間を除きその本性を完全に隠し通せている。

海鳴の一市民に化けて、情報収集や監視などをしてしても無駄だということだ。

「必要なのは、束の側に近づける人間。それも、比較的年が近ければなお良し……」

「クロノ？ ひよつとして、心当たりがあるの？」

「そういうことではないんですが……まあ、今はこちらも忙しいですし、ひとまず置いておくことにします。例の件、やるんでしよう？」

話を変えてクロノが聞いたのは、ここ数日アースラクルーがかかりきりになっている、ある「測定」についてのことであった。

「ええ。そのために庭園の残骸撤去を急がせたんだもの。予定に変更はないわ。明々後日。二人にはもう知らせてあるから」

『本事件に関わった空戦魔導師2名について、能力確認のための空戦シミュレーション』……どっちみちやらなければいけないでしょうが、自分としては二人の肉体、そして精神的疲労を鑑みて、現時点での測定にはやはり反対したいところですよ」

それを行うということより、否定的な言い方しか出来ない自分に向けるような怒り顔を見せるクロノへ、リンデイは柔らかく微笑みながら続ける。

「あら、可愛い女の子のことが心配？ クロノも紳士になってきたわね、善哉善哉」

「なっ、か、母さんっ！」

「うふふ。大丈夫。私から見ればあの二人、見た目に比べて案外芯の

強い娘よ」

今回の事件、アースラのクルーの全員に、後悔と無力感だけが募る結果になってしまった。次元震は発生せず、ジュエルシード全てを確保することも出来たが。不遇の人生に心を壊した母親を救えず、彼女の『娘』の心にも重い傷だけを残してしまった。

もう全ては終わってしまったが。だからこそ、出来るだけの、可能な限りのことはしたい。

クルーの代表者としてとりわけその思いの強かったリンデイが一番やりたかったことは、フェイト・テスタロッサの心のケアであった。「なのはさんは、フェイトさんに一度でいいから会いたいと仕切りに言っていて。もしそう出来たなら、彼女の真摯な思いが、フェイトさんの心に何らかのいい効果を与えてくれると思うの」

「本来規則で叶えられないはずのその状況を、無理矢理作りだすための模擬戦闘ですか」

「そういうのでなくて一席設けても、フェイトさんとしては何も話せないと思うし——あの娘達は今まで、空を飛び、魔導を競い合うことでコミュニケーションを取ってきたんだもの」

リンデイのその言い分を聞いたクロノは、それは提督と言うより空戦魔導士の意見だな、と内心おかしな気分になる。

本来そういう意見を出すはずの現場担当が慎重論を唱え、止めるはずの提督が積極論を出す。そういうおかしさは、しかしクロノにはしっくりときた。結局女の子の気持ちは、他ならぬ女性が一番理解しているのだろう。門外漢は推して知るべし。

「分かりました。エイミィにフィールドの設定を急がせます。後、現場の安全確保も」

「まだ瓦礫を完全に撤去出来た訳ではないから、その辺りの確認を重点的にね」

こうして、二人の会話は段々と事務的な内容へ移り変わっていく。

束の底知れぬ本性に悪寒を抱く二人だが、そればかりにもかまけていられなかった。飛ぶ鳥跡を濁さずとは良く言うが、束はやれ庭園の残骸だのおかしな証言だの厄介事ばかりを後に残していったのだ。

それをどうにかして片付けるのが、事件と状況にまとめて放置され、置いていかれた管理局員たちが行える、せめてもの職務なのだから――

戦い済んで日が暮れて（Ⅱ）

海鳴市海上。つい一週間前に最終決戦が行われた場所には、ビルを模した形の訓練用のレイヤ―建造物が立ち並んでいた。所々で半分沈んでいたり傾いていたりもするので、たった数時間で構築されたと知らずに見たら、洪水で水没した都市のように見えるだろう。

その中央に、他のビルとは明らかに形の違う一際高い構造物があった。どこまでも四角四面な周りと違い、その天井にはガラス張りのドームが作られており、そこに二人の少女が、それぞれの戦装束を着込んで相対している。

「……」

「……」

二人、言葉は交わさない。それも当然のこと、どちらも得物を握り締めて相手に向けているのだ。抜き打ちと言うより、既に抜いて狙いを定め、後は撃つだけという所か。こういう場合は先に動いたほうが不利になるので張り詰めた空気は淀みなく、しかし凍りついたように止まっていた。

だが、なのははその硬直をあえて破り、問いかける。

「ねえ、フェイトちゃん」

「……」

向かい合うフェイトの持つ斧が展開し、鋭い刃の鎌へと変わる。一手損した。

「あの時は最後まで言えなかったから、もう一度言うね」
「……」

魔法陣が展開し、これで二手損。それどころか、既に一撃食らってしまったってしても何ら不思議ではない間合いと隙を晒してしまっている。しかし、フェアを貫くつもりなのかフェイトはあえて攻撃してこない。だからなのは続ける。戦う前に、せめてもの言葉を。

「私、フェイトちゃんの友達になりたい。伝えたいこと、話したいことがいっぱいあるから」

それがなのはの戦う理由だ。力を競うためでも、打ち倒すためでも

ない。

なのは自身、なんだか昔と全然変わってないなあと呆れてしまう。三年前、生きているのが心底嫌そうだったある女の子にぶつかっていった時の拡大再生産。まっすぐぶつかるその方法が、自分のげんこつから魔法に変わっただけだ。

不器用な自分にはそういう不器用なことしかできない。だからこそ、手は抜けないし、抜くつもりもないし、抜きたくなかった。いっただって、どんな時だって、全力全開でいたいから。

「だから、来て。まずは戦って、決着がいたら、答えを聞かせて」杖を構えただけのなのはの懐へ飛び込むのを、フェイトは最後まで躊躇していたようだったが、この一言に押されて地を蹴り前進する。

否、その行為に前進という表現は適さない。短距離ながら全てのマルチタスクを移動術式の構築に回して眼前の敵へ迫るそれは、正に瞬間。

（取ったー！）

フェイトは確信する。相手の思考はまだ、眼前にあるフェイトの存在すら掴めていないだろう。

そのまま、両手で振りかぶり、防御の整う遙か前に回避不能のゼロ距離攻撃を、相手の杖と身体の急所へと叩き込む。フェイトが持つ早さを最大限活かした一撃離脱戦法だ。相手は所詮砲撃型の魔導師なのだから、反応速度の面でこれに対応出来るはずがない。

しかし、そうはならなかった。

「っー！」

「なっ!？」

魔法刃と金属がぶつかる、耳障りで、だけど澄んだ音。フェイトの目が驚愕に見開かれる。彼女が今手に感じているのは確かな手応えではなく、防がれた後に押し返される抵抗だ。なのはの杖と魔導服を同時に切り裂くはずの一閃は、短く持たれた杖の、先端部分にある黄色い頑強なフレームで受け止められていた。

剣術に、後の先、という言葉がある。

相手が技を放ってきた時にその攻撃を防ぐかあるいは先読みし、切

り返しの技で反撃するという戦法だ。この時なのはが目論んだのは、正しくそれだった。

元からフェイトの早さに、なのはは追いつけない。どんなに鍛錬しようとするか、経験と速度の差は明らかだ。ならば先の先、そして先を取ることは捨てて、後の先で攻めることに集中する。

戦闘前に話しながら、なのはが構えの状態をあえてある程度しか進めなかったのは、フェイトに確実に先を取らせるための布石である。過剰に防備を固めれば警戒して逆に様子を見てくるかもしれない。ならばわざと隙を作り、その隙に潜り込むような一撃を、確実に返す。

「ええいー」

なのははそのまま身体全体を左側へ寄せ、刃の正面から自らを外す。当然体勢はよろけ崩れて、受け手を失ったフェイトの鎌は振り下ろされる。しかしその軌道上からなのはは既に外れ、渾身の一撃は虚しく宙を切った。

「今ー」

ここしかない、と自分の脳髓までに叩き込み確認させるような叫び。その間に右手で行っていた

魔力のチャージが終わる。さっきまで杖を持ち支えていたのは、あくまで利き腕の左腕だけだった。なんと、運動苦手で非力なはずなのは腕力が、速度と重心の乗ったフェイトの一撃を数秒間押さえ込んでいたのだ。

開いた手から放たれるのは、ごく単純なシユートバレット。しかし無防備かつ隙を晒した魔導師に撃ちこむにはそれだけで必要十分。

そして、爆音。

単純とはいえ、なのはも可能な限り魔力を詰めた。直撃の余波で煙をまき散らし、建物の床を抉るくらいの威力がある。そのせいで視界が不明瞭になったので、攻撃を終了したのはプロテクションを展開し、十全の体勢で相手を伺った。

「ありがとう、レイジングハート。でも」

でも、油断は禁物。こうして不意の一撃を取れるまでに肉薄したとしても、鍛錬や経験は向こうのほうが圧倒的に上なのだから――

「上手いね」

「……にやはは」

危惧は的中した。いや、危惧というよりはむしろ当然の予測だと言えるかもしれない。それほどまでに、なのはにとってのフェイト・テスタロッサは大きく、超えるべき壁であった。

耐えている。

発射と弾着。2つの事象の隙間には、あの距離だと一瞬も存在しないであろう。なのに、フェイトはそれだけの時間でデイフェンサーによる防御を行い、ふっ飛ばされながらも体勢を立て直し、今また再びバルディッシュを構えて立っていた。

直接射撃を受け止めた右手の手袋こそ僅かに焦げているものの、ダメージも魔力消費も最小限に留まっている。なのはが費やした魔力と体力、そして集中力からしてみればこの結果は費用対効果が余りに低いといえるだろう。

しかし、なのはの顔は自信に満ちていた。

(これで状況は三手得。差し引き一手、こつちに有利！)

なのはがそう考えたのは、この状況下ではフェイトもクロスレンジでの戦闘を捨てるだろうと判断したからだ。初手の不意打ちを防がれて、しかも今度は万全の防御態勢を整えている所に突っ込むような無茶を、彼女はしない。

その代わりに、近接以外で自らの利点を最大限に活かせる空中機動の射撃戦に移行してくる。そうなれば、射撃が得意なのはにしても望むところだ。素早い動きで近接のみに固執されたら、どうにもならないうちに負けてしまうのが現時点の高町なのはの限界だった。

そうならないためにも、まずはフェイトをこちらから引き離す必要があった。七割の確率で考えられた初手の強襲をかわすにしても、こうして反撃を仕込まなかったら回避を続けて段々と互いの距離を伸ばすしかない。それに費やす時間と魔力と後の先を取る苦勞を比較すれば、後者の方が効率良く有利な状況に持っていけるのだ。

「バルディッシュ、ランサーセット！」

なのはの予測は正しく、フェイトは自らのデバイスに呼びかけて高

速離脱した。それと同時に、詠唱不要の射撃魔法を用意し、目下で防御を固めているのは対して放った。なのはもフライヤーフィンを展開して飛び上がり、距離を離すまいと偏差で撃たれた二発目、そして三発目も初速をつけて強引に振り切る。

かくして地面から離れて、空に舞う二人。互いの魔導を競い尽くす戦いは、たった今その第一幕が上がりきったばかりだ。

「ディバイナー！」

「ランサー！」

二人の周りに次々と光が生じていく。桜と光、それぞれに高まり輝くのは、少女二人が持つまっすぐな心をそれぞれの端末が魔力によって具現化したものにも見える。

「シュート！」

「ファイアー！」

杖が振り下ろされ、射撃は飛翔し相手に向かう。それぞれに並の魔導師なら呆気無く撃ち抜かれてしまうほど高い攻撃力を持ったそれらは、あくまで他人を攻撃する魔力弾であり。

だから、互いにぶつかり合って消えていく。真っ直ぐ向かうフェイトの弾幕をなのはの迎撃誘導弾二発が捉えて叩き、残り二発がフェイトへ向かう。思念制御で確実に死角を狙って襲い来るそれらをフェイトは紙一重でかわしていき、内包した魔力が時間経過で弱まった所を見て、斧で直接叩いて潰した。

交わらない二人の魔法はそれぞれにぶつかり合って、そして空へと溶けるように消えた。しかしその、二人それぞれの想いの結晶と呼ぶべきエネルギーは決して消えてはいない。ただ限りなく薄くなつて、空中に漂っているだけなのだ。

だから。

「なのはは負けん」

レイヤー建造物の内の一つ。戦闘領域からある程度遠くに離れて建っているビルの上で、織斑千冬はそう断言できるのだった。

「そうかねえ」

突然の断言に、隣で座っていたアルフは苦言を呈す。自分のご主人が負けると言われて当然いい気分にはならないらしく、眉をひそめながら言い返していく。

「近接戦なら言わずもがな。でも単なる空戦でも、やっぱりフェイトの方が上さ」

アルフの理論は、何度かの実戦によって証明されていることだ。なのは一人とフェイト一人では明らかにフェイトが勝る。だからなのはは千冬、そしてユーノにも助力を頼み、三対二の状況で今まで戦ってきたのだから。

「だが、なのはも前に戦った時から随分と鍛え直してきた。さっきのやりとりを見ただろう？」

千冬の何処か自慢げな言い回しから、アルフはあることに感づいて恨めしそうに千冬を睨んだ。

「……あのカウンター、アンタが仕込んだのかい」

「その通り」

初撃決めの可能性を読み、あえて防御を薄く見せることでそれを誘い、想定通りに振ってきた所を避け、返す刀で無防備な相手へ強烈な一撃を叩きつける。半ばで失敗したものの、もし決まっていれば防御の薄いフェイトを即座にダウンさせることが出来ただろう。

しかし射撃と砲撃、それから防御だけに集中していた今までのなのはから見れば実にらしくない動きと、リスクーナ作戦だ。あえてフェイトの高速に対抗するくらいなら、防御を固めて強烈初撃がやってきたにしても耐え切るのを目指すのが安牌だろう。

「だが、別に私の入れ知恵という訳じゃない。なのはが自分で決めて、自分で頼ってきた。私がやったのは訓練だけだ」

だから、アルフはあの行動と、それから今の言葉にも驚いた。ある種賭けのような作戦を、目の前にいる骨の髄まで接近戦思考の少女が

考えて薦めたのなら分かる。しかし、まさかあのおとなしくて、へなちよこそんな女の子の方から考えだしたとは。

「意外だねえ」

「意外さ」

近接戦闘の訓練事態は、前から行っていたことではある。しかし今回は、その量が尋常ではなかった。なにせ万全の状態のフェイトが放つ、音よりも早いだろう攻撃をかわして更に射撃魔法を撃つのだ。運動神経未発達なのはがその領域まで行き着くには、文字通り昼夜を問わぬ猛特訓が必要だった。

千冬が行う鍛錬は文字通り「鬼」である。その奥に確かなトレーニング理論と熱い思いが籠っているにしろ、彼女は容赦なく叩き、容赦なく叱り、容赦なく潰す。

そんな鬼の特訓を、なのはは事件が終わって回復してからの丸一週間ずっと受け続けていた。一回も弱音を吐かずにやり通した。それはいかにもなのはらしい一途で愚直な努力だったが、同時になのはらしくないことでもあった。

「なのはも、昔はあれで結構悩みこむタイプだったからな」

千冬が回想するのは、一年前に出会った直後のなのはだ。その頃のはのはは今よりちよつとだけ引つ込み思案で、例えばアリサやすずかから何かを薦められても、遠慮して一歩後ろから見つめるだけになっってしまうような、そんな性格だった。

いつか師範から聞いたことには、昔のなのははそれよりもずっとずつと、おとなしかったらしい。誰かに頼るのが苦手で、親の前でもその忙しさを目の当りにしていたからか、いつも「良い子」として目立たないように、おとなしく振る舞い続けていたという。

それは、かつて弟のために親に反抗した千冬と正反対のようで、どこか似ている。

どちらも、一人。一人ぼっちになるしかなかった。

「だが、魔法を知って、戦うようになった時、なのはは私を頼ってくれた。一緒に戦おうと言ってくれた」

握った手の中に、なにか暖かいものを取り込んだような朗らかさを

胸に千冬は語る。

一年前、そしてそれ以前のなのはなら、目の前に迫り来るジュエルシードという困難を、自分一人で解決しようとしただろう。

一人ぼっちで戦う。その辛さを、千冬は良く知っている。もしそうしたら、いくら心の強いのはだつて、もしかすると耐え切れなかつたんじゃないかとも想定出来てしまう。

だけど、今ここにいる高町なのは、昔のなのはからずっと変わってきている。千冬と共に戦い、頼り、訓練して欲しいとも言つて来てくれた。そしてだからこそ、なのはは今空を飛んでいる。初撃でいきなり叩きのめされることなく、思うままに空を飛んで、戦っているのだ。

なのはは、一人じゃない。

「だからなのはは負けない。一人じゃないから。私も、ユーノも……あいつも……ついでる」

千冬の確信に満ちた言葉に、アルフも負けじと言い返す。

「それはフェイトも同じさ。あたしがいる。リニスっていう、優しい先生だつていたんだ」

「そうか」

その言葉を聞いて、千冬は何故か安心した。向こうで戦っているなのはには届かない言葉だったが、もし届いていたらなのはも同様に安心するだろう。

フェイト・テスタロッサが一人じゃないことに。彼女を思い、守つてくれる人がいることに。

「だったら後は、どちらの思いがより強いかな。知恵と戦術は両方フル回転だろうから、最後は精神力の勝負になる」

「じゃあ当然、あたしの方が上だね」

勝ち誇つて大きな胸をでんと張るアルフ。ムスツとした千冬が負けじと言い張る。

「いや、私たちの方が絶対に上だ」

二人、無言のまま暫く見合う。

「そーいや、チフユ、だっけ。アンタとは、まだ決着がついてなかった

ね……」

「同感だな、使い魔のアルフとやら」

やがて片方が牙を向き、片方がどこに隠していたのか竹刀を持ちだして構えたその時。

「はいはい。ふたりともそこまで。場外乱闘はやめてよね」

二人から離れて立っているユーノが止めに来た。

そのいかにも面倒でどうでも良さそうな声色に毒気を抜かれたのか、二人それぞれ武器を下ろし、落ち着きを取り戻した。

「すまんユーノ。しかしお前……そんなになつて何をやってるんだ？」

刀を収めた千冬だが、今度はユーノの一種異様にも見える様子を気にして問いかけた。

アースラでの回復治療によりすっかり人間形態に戻った彼は、何重にも術式を展開し翠色の眩い魔力に包まれている。折角戻った魔力を使い潰してしまうくらい多重に発動させている魔法は、全部が全部観測用の魔法である。

「何って、ほら、二人の戦いの記録だよ。大事でしょ」

だからユーノは何のこともないように言い返したが、今度はアルフが突っ込んだ。

「アンタさあ。確かに分かるけど、でも……そんなには必要ないだろ！」

怪訝な顔を浮かべて突っ込むのも無理はない。現在ユーノが展開している録画式の記録魔法、その数なんと17個。しかもそのうち幾つかは定点式ではなく、なのはとフェイトの機動を追尾している。通常、一人の魔導師が制御できる個数ではない。いくらマルチタスクと魔法の制御に長けたユーノとはいえ、相当に無茶をしている多重展開だった。

「それが必要なんだ」

「なんだい。記録がほしいなら、管理局にでも頼めばいいじゃないか」

アルフがいうことは正論である。たった二人の為に組まれた予定だが、これはあくまで『能力確認のための模擬戦』なのだから、ア―

スラストアップとしては念入りに記録しないと給料をタダ取りしていることになってしまう。

「それだけじゃダメなんだって。勿論アースラのデータも貰うけど、それだけだと満足出来ないと思うから……」

自分が、ではなく、どこかの誰かを指すするような言い草を聞いて、千冬はある可能性に思い当たった。しかしそれは、とても信じがたいことでもあり、だからユーノに問い質す。

「おい、ユーノ。……確かに束はここには居ない」「うん」

「だがな、あいつの事だ。ここに居ないだけで、いくらでも見る方法はあるだろう」

あの時と同じく、結界内にこっそり忍び込んでいるかもしれない。アースラの中で記録カメラを現在進行形で覗き見しているかもしれない。ひよつとするとラボの中、なのはの勇姿を目にしてとても世間には見せられないような顔で悦楽に浸っているのではないか。

千冬にはそうとしか考えられなかった。あいつが、まさか。こんな晴れ舞台を逃すはずがないじゃないか。

しかし、ユーノははつきりと、加えて言えば魔法の制御を邪魔されて少し煩わしげに答えた。

「いや、教授はこの戦闘、見ていないよ」「なに……!?!」

その時千冬が抱いたのは、とてつもない驚愕と、それから恐怖であった。あの束が、篠ノ之束というなのはフリーク少女がなのはの戦いを見逃すだなんて。天変地異の前触れか、それとも。

もしかすると、なのはのことすら押しつけるほどの何かに取り組んでいるのかもしれない。千冬が一週間前に着装した勝利の鍵、『白式』以上に超常的な何かに――

「ユーノ、今すぐ止めるぞ! このままでは地球が危ない!」

そう思った千冬は顔色を豹変させて束のもとに向かおうとした。が、ユーノは何ら慌てることなく、むしろ何処か呆れたような表情で千冬の興奮を受け流す。

「何をしているユーノ！ あいつが暴走するとどうなるか分かっていないお前じゃ」「違うって」

ユーノとしては説明するのも馬鹿馬鹿しすぎてやりたくないのだが、そうでもしなければ千冬は止まらない。観念して、束が今何をしているのかを一言だけ、口に出した。

「寝てる」

「へ？」

千冬らしくなく女の子らしい、というより子供らしい間の抜けた声。

「だから寝てるんだって。ここ何週間も徹夜続きだったから。三日前管理局に呼び出されて帰ってきてからずっと寝てる」

「ずっと？」

「そう、ずっと」

アルフも黙りこみ、ビルの屋上で無言の時間が流れる。

「…………ふは」

その静寂を破ったのは、腹の底から出ているだろう、ひょうきんな笑い声。

「ぶっ、わははははは!! あは、ははははははっ…………げほっ、ごほっ」

千冬が笑うことは滅多になく、あったとしても精々微笑むくらいである。それが一気に決壊して爆笑し、表情筋が無理に動いたせいかわいすぎで呼吸困難にまでなってしまった。

この一戦は、言わば高町なのはが今まで鍛えた魔導の集大成である。それは当然なのはが一番輝ける時だというのに。

寝坊しているだと？ あの天才が？ なのはに関するのなら誰よりも知っているあの天才が？

「そう、寝てるの…………ふふっ」

内心、ユーノも馬鹿らしく思っていたようだ。千冬の破顔爆笑に釣られ、腹を抑えて笑い出した。それでも監視を絶やしていないというのが、彼の助手根性とでも言うべき律儀さを如実に表しているが。

「た、タバネって、あんたらの仲間で、ウサミミを付けた、あいつだろ……？」

一方アルフは束の名を聞いて、身もすくみ上がるような思いだった。アースラで精密検査を受けた結果、寄生虫型の監視メカを体内に仕掛けられていたことは既に周知の事実である。気付かれないうちにそんなことをされたのだから、アルフにとって束という得体のしれないマッドサイエンティストは、ただ恐怖でしかなかった。

「ああ、あいつだよ、あいつだ……ぶつ、くくくく」

「そうそう、人呼んで天才科学者、なのは大好きの教授が……あつ、は」その怖気づきようも、今の二人にとっては爆笑の炎に薪をくべるだけではない。思えば二人して、束一人に散々弄ばれ、一挙一頭足に冷や冷やさせられてきた。その憂さ晴らしというのも、あるのかもしれない。

「ゆ、ユーノ、お前、知らせたんだらうな？ ふふつ、そうじゃなかったら酷い目に合うぞ？」

「そりやもちろんっ……でも寝てる……いくら起こそうとしても無駄だったんだ……ぶふつ」

「本当か……？ ふ、ははははは」

「それがホントなんだって！ 部屋にあった、なのはボイスの目覚まし時計でもさっぱり！」

実際、ユーノは人事を尽くしたと言える。

地下で机に突っ伏し、死んだように眠る束をまずはラボ備え付けのベッドまで持って行き、あらん限りの大音量を出して起こそうとした。それでピクリとも動かないのだから、今度はなのはの声真似からなのはの声を録音した目覚まし時計、果ては対決前のなのはに頼んで、携帯電話を通じた肉声まで提供してやったのだ、

それでも起きないのだから、いよいよ諦めざるを得ない。ユーノとしてもなのはとフェイトの戦闘は見たいし、後はせめて、ベッドの上走り書きのノートを残し、二十分に録画するくらいしかできなかつた。それ以上を求めるのはむしろ酷である。

「この事、なのはは何て？」

「眠いんだから仕方ないよ。いっぱい頑張ってくれたから寝かせとい
てあげよう、だって。ホント優しいよねー、なのはは……」

「全くだ、それに比べてあいつは……くふっ、当代一の薄情ものだな
!!」

あははははは、と胸がすくまで笑い続ける二人。呆然とするアル
フ。

三人をモニタしているアースラブリッジからも、そこかしこで失笑
が起こる。その度合は様々あれど、皆、束の好き勝手な所業には何か
良からぬ気持ちを抱いていたのだろう。

そして、他所の椿事はつゆ知らず、砲撃を撃ち合い乱舞して、いよ
いよ熱いなのはとフェイト。

——ぐう、ぐう……ダメだよなのちゃん、私たち女の子どーし……
あ、べつにいつかあ、どうにかならないことはないし……じゃあなの
ちゃん、一緒に……えへ、えへへへへ——

遙か遠くで起こったそんな喧騒などつゆ知らず。束は眠る。

天才である彼女のこと、なのはとフェイトが決着をつけるこくら
い、とうの昔に予測できていたはずなのだが。

天才だって所詮は人間。明日への睡眠は必要なのだった。

平和の朝日がまた昇る（Ⅲ）

ふと足元を見れば、桜の花びらが土に塗れながら散っていた。そろそろ春も終わりだ。

ここの空気は暖かく、だから桜も結構遅くまで残っていたりするのだが、それもついこの前の雨で殆ど流れ落ちたようだった。

流れる夜風からも、寒さを感じない。何もかもその暖かきで包み込んで、流していつてくれる。

多分、その風の流れ道に立っている自分が、春先から今までで経験したとてつもない大事件だって、いつかは流れ行き、大事な、だけど珍しくはない、記憶の一つになるんだろう。

「なのは」

でも、流れないものだって、きつとある。

呼ばれる声に振り向き名残惜しげに歩きながら、なのははそう感じていた。

「お待ちせ、千冬ちゃん」

「うむ」

呼びかけた千冬の顔には、若干の申し訳なさが含まれている。本当なら、呼ぶこともなくずっと向こう側へいてくれても構わなかった。でも、これはそういう時間じゃない。別れの時だ。

「リボン、交換したんだな」

「うん。思い出を作らないとって。だけど、こんなのしか思いつかなくって」

なのはが差し出して見せたのは、黒いリボン。フェイト・テストアロツサがいつも付けていたものだ。千冬が向こう側へ目を向けると、さつきまでなのはと話をしていたフェイトも、なのはが付けていたピンク色のリボンを手に握っている。

「こんなのじゃなくて、もっとちゃんとしたもの、持ってくればよかった」

そう言つて、なのはは自分に呆れたように笑う。だけど、千冬にはそうとも思えず、ゆっくりと頭を振つて、優しく訂正してやった。

「そんなことはない。ほら、向こうを見てみる」

言われてなのはが振り向くと、フェイトが両手を祈るように重ねて、胸に押し当てているのがはっきり見えた。多分その手の中には、もらったばかりのリボンが握り締められているだろう。

相手側にこれだけ感謝されているのだから、こんなもの、と卑下する必要はないということだ。

「……嬉しい」

その姿に心を動かされ、なのはも手の中のリボンをぎゅつと握りしめた。白い制服姿が小刻みに震える。今日フェイトと会ってから、何度も沸き上がってくる熱い気持ちを抑えきれないようで、また、目を潤ませてしまっていた。

「どうしたなのは。今日のお前は、少し涙もろいな」

千冬は苦笑するようにそう指摘するが、本当は、無理もないと納得していた。

ジュエルシードという、譲れないものを賭けて何度も戦い。時には一人でどうにもならない脅威に対して協力し。気持ちを伝えようとしても何度も邪魔されて。結局自分の気持ちを伝えられたのは、全ての決着がついた後だった。

フェイトの全身全霊の一撃を受け取り。見事に耐え切った後、逆転の秘策である集束砲撃魔法『スターライトブレイカー』でフェイトを撃ち抜いたなのはは、勝った。勝った後、ボロボロになりながらも自分の気持ちを言葉に乗せて必死に伝えた。

友達になりたい。悲しい顔じゃなくて、笑顔が見たい。笑っていて、欲しい。そのひたむきさに心を打たれたのか、それとも物理的に撃たれたからか。互いに倒れたビルの上、フェイトは顔を上げて——なのはのことを抱きしめ、涙ぐみながら、初めて笑ったのだった。

げに美しきは友情なり。その有り様は千冬の心にもじいんと響き、思い出せば今でも、胸を熱くしてしまうくらいだった。

「うん……なんでだろう、ね。また、会えるのに、ね」

やっと心を通い合わせた嬉しさに、心から笑いながら。しかし、すぐに離れ離れにならなければならぬ悲しさに、瞳の中で涙が溢れ

る。どちらとも心からの気持ちで、だから相反していても、両立する。「ああ。またすぐに会える。半年なんてあつという間だ。だから、笑おう」

「うん……」

なのはは俯きながら浮かべた涙を指で拭い、顔を上げる。折角のお別れだ。涙は笑顔のスパイスになるけど、今はとにかく、笑っていたい。笑顔を見せることが、別れるフェイトへの一番の贈り物なのだから。

見ると、向こうではもう魔法陣が光っていた。元々、フェイトはあの事件——首謀者の名前を取ってPT事件と呼ばれている——の重要参考人だ。本来ならこうしてお別れを言う間もなく、駆け足でこの世界から出立し、護送されていかなければならない。

それが、こうして今、なのはという一個人との別れのためだけに逗留しているのだ。千冬にも、勿論なのはにも、それがかなりの無理と強引さによるものだと分かった。そして、そういう機会を作り出してくれたクロノに、そしてリンデイに、それぞれ感謝していた。

「お待たせ、なのは、千冬」

彼らを見送るのは、そんな2人だけではない。さっきまでクロノと話し続けていたユーノは、向こう側で去るのではなく、こちら側に留まってくれるのだった。

「ユーノ……本当に地球に残るのか？ ジュエルシードはどうするんだ」

「アースラが管理してくれるし大丈夫。それに、ウチの部族は遺跡から遺跡へ流浪するのが当たり前、な感じだし。僕がどこにいても、死んでないならそれでよし、って感じでアバウトだから」

「そ、そうなのか……」

さらっと明かされたドライな事実。少し引き気味の千冬に代わって、なのはが話しかける。

「でも、ほんとにいいの？ 続けて魔法を覚えてくれるなんて」

「いいさ。大体なのはって、監督者がいないとなんか無茶ばかりしちゃうだから」

「に、にやはは……」

「クロノともよく話し合つて、訓練メニューを建てたからちゃんと守るように。くれぐれも、庭園の時みたいなおバーワークはもう、二度と、しないでね」

ユーノの厳格な言葉になのはは、返す言葉ありません、とばかりにしゅんと落ち込んだ。

そんな2人を見て、ユーノは明るく微笑む。ひよんなことから迷い込んだこの世界には、暖かくて優しい人が大勢いて、だから住み良く、暮らしやすい。流浪の身にもそれなりの楽しさはあったし、遺跡を掘り返して古代の遺物を見つけるのはスリルとロマンチックに溢れている。

でも、両親の顔を覚えていない男の子が、もし故郷というものを自分で決められるとしたら。

海鳴がそうだと凄く、いい。なんて思ってしまふのだ。

「さ、そろそろ転移するだろうから」

なのはと千冬、それぞれに気を散らしていた所を、呼びかけられてはっと目を向こう側へ移す。見れば魔法陣の光はもう眩しくなっていて。目に映るフェイト、アルフ、それからクロノの像も、なんだかぼんやりと空に滲んで消えていくように見えた。

フェイトが小さく手を振るのが見える。それに応じて、なのはは腕全体で大きく、千冬は肘から先を使って程々に、手を振り返した。

その微笑ましい光景を見た後、ユーノは千冬のはるか右にいるもう一人へ目を向けて。

「――教授も、ほら」

さつきからずつと体育座りでうずくまり、暗いオーラを辺りへ垂れ流している女の子へ、気遣うように声をかけた。

「やだ」

しかし、これだ。

徹底的にへそを曲げている。なのはも千冬も、家を出た後すぐは一生懸命に励まそうとしたが、この場に連れてくるだけで精一杯だった。

「放っておけ。まだあのことがショックなんだろう」

辛気臭いその姿を視線から外す千冬の言葉は酷薄だったが、大事な日に寝坊するのはそいつが悪い、と考えればそれも当然である。大体、あの戦いからはもう何日も経っているのに、まだ割りきっていないのか。いつものポジティブシンキングはどうした、と呆れ帰る気持ちだった。

「うううう……それだけじゃないもん」

「じゃあ、一体なんなのさ」

ユーノがめげずに問いかけるが、千冬としては、よくもあのバカにああまで付き合っているらしいな、と思う。どうせ一過性のことなのだから、放っておけばいいのに。

それに、束の返答なんて、この状況から見れば千冬にも推測できる。算数よりも簡単だ。

「なのちゃんが、なのちゃんのりボンがあんなのに取られてるのが許せない……」

「あ、そう……」

幼い嫉妬心駄々漏れの返答を聞いて、ユーノも頭が痛くなってきた。

「あそう、じゃないやい！ そりやあなのちゃんをああいっ娘、ほつとけないって分かってたけどさ……なんで涙ぐんでたのさ……なんで向こうも向こうでヅカっぽく抱きしめてたのさあ」

と、恨みつらみの戯言を紡いでいるものの、実際なのはとフェイトが友達になった事自体、束の采配によるところが大きい。特に最終決戦の時、フェイトに真実を告げて完全に心を折ってやろう、と提案したのは、他ならぬ束本人なのだから。

束としてはなのはと『白式』の活躍の場に余計な要素が入ってこないようにするための措置だったが、そうした後、傷ついたフェイトの心が何処に救いを求めるか、なんてことは——予想の範疇外、という訳でもなかった。

なのはは、きつとフェイトを助けようとする。友達になろうとする。

長い間なのはと付き合ってきた束からすれば逆に予想するまでもない規定事項。しかし、現実として目の前で見せられると、それはそれで、沸き立つ感情を抑えきれないというのが、束の、大人顔負けの天才にしては青臭い精神の限界だった。割り切れないのだ。

「全く、どこまでもへそ曲がりな奴め」

「あははは……」

その矛盾に千冬は呆れ、ユーノは、ただただ笑う。

けれど、もし束がそうでなかったら。親愛の情も何もかも、全てを科学と、自分の娯楽の前に捧げるような性格であったなら。

きつと、今よりずっと酷い結末が待っていただろう。

二人とも、そう考えて、だから、今の束を認めている。側にいても恐怖は感じない。

「なのは。お前から何か言ってるやれ」

「ふえ、えっ!？」

いつまでも塞ぎこむ束を見て、しょうがない、という表情をした千冬は、振り返ってなのはの肩を叩いた。

周りに意識を巡らさずただ目の前のフェイトにだけ集中していたのはは、驚きながら振り返った。そして、まるで捨てられたペットのように、うるうるした目でなのはを見つめる視線に気づくと、困ったように笑って。

「えーと……ふふ、そうだ！ たーばーねーちゃんっ」

「にや、な、なのちゃん!？」

千冬仕込みの素早い動きで、すつ、と束の背後に回りこみ、その背中を強引に押し始めた。

「な、ななな、なのちゃん!? 何、するのかな?」

「えへへ」

戸惑う束だが、折角なのはの手が自分の背中にくっついていっているのを、無碍に振り払うことなんて出来るわけがない。そのままどんどん押されて、行き着くのは今にも転移してしまいそうな魔法陣のすぐ側だ。

意味ありげに微笑むのはが、フェイトに目で合図を送る。

その意図を概ね察したフェイトは顔を和らげ二人へ近づくが、束の脅威を知っているクロノ、そしてアルフは顔を強張らせていた。特にアルフなど、フェイトに危害を加えたらということ、半分臨戦態勢である。

「えと……タバネ、だっけ」

フェイトの紅玉色の瞳が、束をしつかと見つめる。束はぷい、とそっぽを向いた。

何を言われるのだろうか。

優しいプレシアを唆した張本人だと解釈も出来るのだから、悪い印象を抱いて当然のはずなのに、フェイトの顔は何故だか優しい。それこそ、なのはと同じくらいに。

どうせお情けなんだろう。なのはの友達だからって、無理をして、そんな顔を見せるんだろう。

そう思ったから、束はこれ以上ないほど憎たらしい笑みを浮かべて言った。

「……ふんだ。この期に及んで何を言っても、もう遅いよ?」

未だ誰にも明かしていないが、束はプレシアにやらかした所業は、それこそフェイトに殺されたって文句を言えないほどのものだ。それも含めて、束はフェイトに憎まれるならまだしも親しみなど感じられてはいるはずがない、と思っていた。

しかし、フェイトはその予想をあっさり覆す。

「え、そっか、遅いんだ……」

「いやああ、フェイトちゃん違う違う! 大丈夫だから、言っておいて!」

束の言葉を真に受けて意気消沈するフェイト。しかし、慌てて止めたなのはに背中を押され、どきどきする心を抑え意を決して言葉を放った。

「……タバネ。私はまだ、あなたに向かってどういう顔をしたらいのか、分からない」

「当然だね。私は君の友達、君の母親を騙して、利用して、ボロ雑巾のように使い捨てたんだから」

目を合わせずに厳然たる事実を述べる束。フェイトは気圧されたが、しかし続ける。

「……で、でもっ」

「でも、なに？」

「あなたにも、ごめんなさい。あなたの友達を、なのはを、それからチフユも、沢山傷つけてしまったこと……一度謝りたかったんだ」

「……え？」

なんだそれは。そんなの『予想外』じゃないか。

束は一瞬、自分の耳を信じられなくなった。

「チフユには、ちよっと前会った時に謝れたんだけど……でも、あなたには会えなかったから。今、謝りたくって」

「どうして？ 理解できないよ。私は君にとって憎むべき、謝りたくない存在なんだよ？」

「そうかもしれないけど……でも、それとこれとは別の話だから」
「……」

束は神妙な顔をして、口ごもる。恨みを水に流して、そんなことが言えるなんて。別に仕方なく協力するわけでも、利害が一致した訳でもないのに。

この娘は、優しすぎる。こんなに優しい娘なんて、束が会った中ではただ一人しか――

「それ、だけ……」

言い終わると、フェイトは俯いて束から視線を外した。流石にそれ以上言うこともなく、なにか言えるほどに、割り切っている訳でもないようだ。

しかしこの対面を実現させたなのは、むしろそれだけで十分というふうなうんうんと頷いた。

まずは、これで一步前進だ。

流石のなのはも、今の束とフェイトがわだかまりを解いて仲良くなってくれるとは思っていない。しかし、何の関係も産まないのでは余りに寂しすぎる。

だから、せめてこうして少しでも言葉を交してくれたら、それが何

かのきっかけになるかもしれないと考え、二人を近づけさせたのだ。その、効果の程は。

「……うう~~~~~!」

何故か悔しそうな表情を浮かべる東、それだけだった。

しかしなのはは、それでもこの触れ合いを無価値だと思いはしなかった。

「じゃあ、フェイトちゃん。元気でね!」

「うん、なのはも元気で」

その後、魔法陣を境にして、二人手を握ったり、暫く笑い合ったりした後。

いつの間にか近寄っていた千冬とユーノも含めて四人、いい加減に転移しなければならず、引き伸ばされて少し怒っていたクロノとアルフ、フェイトの三人は。

それぞれに手を振り合って、別れた。

「……ううう……」

しかし束だけは、転移魔法の発動でフェイトが消えたその後も、なにやら納得の行かないような表情をしてむすー、と突っ立ってばかりいた。

「どうしたんだ、束」

「……うがああああつ!」

千冬が尋ねても、束は堰を切ったように苛立ちの叫びを上げるだけだった。

言葉に出してなど、とても言えるものか。

本来恨み言を言われるはずの少女に、ごめんなさいと言われた。そのことで、自分の立てた想定が僅かだけれど、確かに覆されていたなんて。

たかがクローン、なんて慢心極まりない侮り方はしていない。フェイト・テスタロッサの辿ってきた数奇な運命、母親への思い。全てインプットして、自分の脳内で何回も行動予測をしてきた。それが今まで正しかったからこそ、あの状況だって創り出せたのだというのに。

最後の最後で、見事に予測を外してしまった。

普通なら面白い、と束をこれ以上ないほどに興奮するはずの『予想外』。しかし束にとつてそれは今、何故か、とても悔しく、苛立たしく思えるのだ。

なんだか、負けた気がしたから。高町なのは友達として。

友達でいた年季は束の方が上なのに、束の友情が下であると、断言されたみたいで。

「……ふっ。哀れだな、束。結局なのは奪い返せず、か」

「なにをう、ちーちゃんのくせにつ！」

だから、千冬の安っぽい挑発にも乗ってしまい、野生のうさぎのように飛び上がって襲いかかる、なんて滑稽なことをしてしまうのあった。

「お、やるか？」

「だ、だめだよ千冬ちゃんっ！」

「教授も、抑えて抑えて！」

等と言いながら千冬はすぐに木刀を取り出し、今ではすっかり堂に入っている我道御神流の構えで立ち向かう。

骨肉互いに削ぎ取られる、歯列な争いが始まろうとしたが、千冬をなのはが、束をユーノが抑えてどうにか未然に防がれた。

「じ、じゃあね、なのは、千冬！僕と教授は、篠ノ之の家に帰るから！さ、教授、行こう」

目をぎらりと光らせて千冬を睨みながら、ふしゆるるる、なんて凶暴な肉食獣のような声を出している束。ユーノはその右手を引っ掴んで、無理矢理連れて行く。

ユーノも随分、束の取り扱い方を覚えてきたな。なんて感心していた千冬だが、ふと気になった事があり、なのはに尋ねた。

「なのは、ユーノのことなんだが」

「え、なに？ 千冬ちゃん」

まるで凶暴な野生動物と、それを苦労して確保した猟師のような二人に臆面もなく手を振っていたのはだが、

「ユーノのやつ、お前の所に居候するんじゃないのか……？」

と言われると、とても意外そうな顔をしてこう答えた。

「え？ 束ちゃんと一緒にいるんじゃないの？」

「なっ！ だ、だがなあ、四六時中束と一緒にだぞ!? そんなことこの世の誰が承知するものか」

「そうかなあ……ユーノくんの方から言い出したんだけど」

「なにいつ!?!」

さっきの束と同じくらい、千冬も自分の耳を信用できなくなっていた。

自分から？ 自分から、束の庇護下に入っていくというのか？ 明らかに正気の沙汰ではない。確かにユーノはここ一ヶ月半、束の助手にされても何とか生き残っていたが。だからこそ、もうこれ以上は勘弁ならないと思っていて当然だし、本人だってそう言っていたはずだ。

だのに、どうして。千冬の疑問は、しかしすぐに氷解した。

(そういえば、クロノが言っていたな。『篠ノ之束に何かおかしいことがあれば、逐一報告してくれ』と)

その忠告と、転移前、ユーノとクロノにより長い話し合いが行われていたことを合算すれば自然と答えは明らかになる。

要するに、ユーノは束の監視を頼まれたのだ。確かに、年が近くしかも勝手に助手という扱いをされているユーノは、束の意思や行動を監視する上で最も理想的なポジションにあるといえる。しかもミッドチルダ出身であるから、その報告の信頼性も俄然高くなるだろう。

アースラもうまい手を考えつくものだと関心した千冬だが、同時に、もう暫くあの天災の近くで無茶ぶりだの抑え役だのをやらなければならぬユーノに対して、不憫だなと瞑目し、手を合わせた。

「あいつも可哀想なことだ……」

「違うと思うな」

千冬の口から漏れでた、ごく当たり前の同情。しかし、なのははそれに異論を呈す。

「なんだかさ、ユーノくんも束ちゃんも、二人でいるととっても楽しそうなもの」

「そうか……そう、見えるのか」

「うん。ちょっと、羨ましいくらいだよ」

いつの間にか、束はターゲットを変え、ユーノへ噛み付いて鬱憤を晴らそうとする。ユーノは慌てて防ぐものの魔法は使えず、馬乗りの状態で繰り出される常人離れした攻撃を必死に交わす。終いには耐え切れずフェレットになって逃げ出し、逃すものかと追いつがる束と追いかけてつこを始める始末だ。

こんな光景が、なのはには楽しいじゃれあいに見えるらしい。全く肝が太いのか、間が抜けているのか。だが実際、ユーノもこちらへ助けを求めているということ、きつと、そうなんだろう。

尚も続く賑やかな追いかけてつこを見続けければ、千冬はすっかり安心して、帰り道のある方角へと振り向いた。

「行こう、なのは」

そう呼ばれてからも、なのははただじつと、束とユーノを見つめていたが。

「……うん！」

やがて、振り向き、千冬と手をつなぎながら、家路を急ぐことにした。

月のワルツ

その日の夜。あれから家に戻ったのはと千冬は、アリサやすずか、それから他の同級生たちとも遊んだりせず、久しぶりにのんびりとした休日を過ごした。一夏の世話をしながら、自分たちも足腰が立たないように見えるほど、ごろごろだらけるのんびりさだ。いつも庭で盆栽を弄ることしかしない恭也でさえ、

「まるで年寄りみたいだな」

と言ってしまう程だった。

そうなるくらい、二人とも疲れていたし、休みたがってもいた。何しろこの一ヶ月半、魔法にジュエルシードにライバルに、果ては襲い掛かる大敵相手に飛び回り斬りかかり撃ちまくりの毎日であったから無理もない。

その内翠屋から両親と美由希が帰ってくれば、お待ちかねの夕食である。二人ともお腹いっぱい食べたなら、締めにはアイスをパクリと平らげ。それからはまた、ひたすらぐうたらなのんびりである。

「なんだなんだ、今日の二人は？」

今まで何かと活発に動いたり、しきりにヒソヒソ話し合っていた二人の豹変を見て、土郎はからかうように問いかけた。

「まるでナマケモノみたいにごろごろして。女の子がそんなんじや太るぞー?」

「大丈夫ー」

「もう運動は一年分しましたから……今日だけは休みます……」

フライパンの上のバターのように溶けてしまいうくらいだらけきっているのははまだいい。女の子にも時にはだらけたい時があるだろう。

だが、朝起きて剣を振ってご飯を食べてお茶を飲んで剣を振って昼食食べてお茶を飲んで剣を振って晩御飯食べてお茶を飲んでまた剣を振る、そんな毎日を繰り返していた鍛錬の鬼の千冬が、よりによって休むなどは。

「……そうか」

二人のだらしない様をよく見つめた士郎は、あつさり笑つてこう言った。

「なんだか分からないけど、二人ともよく頑張つたみたいだな！ 偉いぞ！」

両手を広げて、二人の頭をうりうりと撫でる。

二人が以前、春の始めの辺りから、何かをし始めていたのには内心気付いていた。何をやっているのかは知らないが、毎日休まず早朝に出かけたり、夜もこつそり外出したり。篠ノ之さんの方では、あの大きな道場まで貸し切つたというではないか。

正直何をしているのか、気にならないでもなかった。とは言え、士郎のような大人が子供のやることに口を出すのは野暮というものだろう。

無論、危険なことではないかという疑いはあつたし、もしそうなら、それとなく止めようとしたのだが。

真剣な瞳で毎晩千冬と「作戦会議」なんかを繰り返している二人を見れば。

剣道場を篠ノ之家の父親、柳韻と一緒にこつそり覗いたその中で、滅多打ちにされながらもふらふらのまま立ち上がるなのはと、苦しそうな顔をしながら、それでもなのはの言うとおりに手加減せずに相手する千冬を見れば。

それを止めることは、士郎にはどうしても出来なかった。

「にやはは、ありがとう、おとーさん」

「……その、ありがとうございます、師範」

もしかすると、士郎の判断は子供を守る父親としては失格なのかもしれない。危険から引き離し、自分の手の中で庇護してやるのが親の責務なのだろうし、現代社会において親がやるべき第一のことなのだろう。

しかし現に、なのはも千冬も五体満足、ちよつとの傷とくたくたの疲れだけで帰ってきてくれて。そして、なのはは嬉しそうに笑い、千冬も恥ずかしがりながらちゃんと笑ってくれている。陰りのない二つの笑みから分かるのは、二人が自分の行いに、達成感や満足感を抱

いていることだ。

それはこの、まだまだ育ち盛りな子供にとっては得難い財産になるだろう。

二人や、その周りの様々な子供たちが互いに持つ、硬い友情と同じように。

「じゃあ、俺は一夏くんをベッドに寝かしつけてこようか」

「……あ、待つてください。私も行きます」

士郎が、リビングのソファに座ってうとうととしている赤ん坊を抱きかかえると、千冬もそれに釣られてぴよこんと起き上がり、士郎の足元へぴとつと寄りかかりながら一緒に行動しようとした。疲れていても、姉として弟とは離れたくないんだろう。

しようがないから、と士郎は千冬の身体を持ち、一夏と二人とも、小脇に抱きかかえてやる。そしてそのままのしのと、二人の寝室がある二階へと歩いて行った。

リビングに残されたのは、なのはと、洗い物をしている桃子のみである。美由希はお風呂に入り、恭也は自室で明日の準備でもしているのだろう。

「……ね、おかーさん？」

その言葉に、桃子がふと、取り掛かっていた洗い物の群れから目を上げると。先ほどまでごろりと行儀悪く寝転んでいたなのはが、いつの間にか立ち上がって、閉じかけた瞼を開いていた。

「どうしたの、なのは？」

さつきまでの無気力さとは打って変わって、なのははしきりに窓の外を見つめている。

くすぶるような焦りにも似た表情は、まるで何かとてつもない忘れ物をしてしまったことに気付いたかのようにも見える。

その手にはいつの間にか、ピンク色の携帯まで握られており。リボンを気にして、服の襟を直したりしているのだから、完全によそ行きで格好であった。

「ちよっと、お出かけしていいかな？」

「いいけど……どうしたの？」

「ううん。ちよつと夜風に当たりたいだけ。海浜公園まで行ったら、すぐ帰ってくるから」

どう見ても、何か引つかかってしまう言い回しであったが、しかし桃子は顔色一つ変えず、瞬き程の間も無しに、

「分かったわ。でももう夜遅いから、なるべく早く帰ってきていらっしやい」

と了承した。

「うん、ありがとうおかーさん！　じゃ、行ってくるね！」

だつ、と駆け足で出て行くのはへ、桃子は小さく手を振り、ただ見送る。

こうなるずっと前から、なのは何かの忘れ物に気がついていて。でも千冬がいたからそれも言い出せず、太郎と一緒にいなくなつたからようやく足を踏み出せたのだろう。

なのはらしいわね、と桃子は心の中で苦笑する。きつと、千冬を心配させなくなつたのだろうが、それならこんな夜に、一人の娘を送り出す桃子を、心配させるのはいいのだろうか？

多分、なのははそれほどまでに、千冬のことを想っているのだ。

それに、今からなのはが拾いに行くだろう「忘れ物」も、それと同じくらい大事なものであるはずだ。それこそ、母親の不信の目をかわすことなんて、忘れてしまうほどに。

(ほんとにしようがないわね、うちの子たちは)

桃子はそう思いながらも、太郎と同じく、娘や息子たちが持つそういう心を、迷うことなく肯定し、認めていた。

夕方から増えてきた雲は、すっかり夜空を覆い、耽ってきた夜の帳に、少女が一人、佇んでいる。何をするでもなくベンチに座って、その場にある何にも誰にも目を向けず、ただ漠然と、何にも照らされな

いで真つ暗な海を見ていた。

座り込んでじつとしている彼女の身体の中で、活発に動いているのは頭脳だけだった。座ったまま動かないままで、そこだけは常人の数十倍の早さで思考を巡らし、あるプログラムを組み立てている。膨大なスケールと緻密なディテールを兼ね備えなければいけないそれを、少女の頭脳は瞬く間に形にしていた。

プログラムが出来上がれば、今度はそれを演算して、その中にあるアルゴリズムを解いていく。それを決められた通りの早さで実行することは、人間の脳ではとても成し遂げられないはずだ。地球や、もしかしたらミッドチルダのコンピュータでさえ難しいかもしれない。しかし少女の脳内は淀みなく動き、作り上げられた二つのプログラムを完璧に演算していた。

そして、彼女の目が映す海の上が、段々と変わっていく。

最初はちか、ちか、と朧げに、しかし段々はつきりと『見えてくる』それは、魔法の光。桜色と金色。二つの光が空を舞い、ぶつかったり離れたりを繰り返している。

脳内でエミュレートされたものが、視覚情報として認識され、目で見ている情報に上書きされて映しだされたのだ。所謂幻覚というもの、通常は脳の機能の誤作動でしかない。しかし少女は、それを意図的に行って、しかも無意識で脈絡なく映すのではなく、完全に制御していた。

(……)

だから少女には見えるし、聞こえる。

潮騒の音を霞ませて遥かに余りあるほどの、魔力の衝突音と、破裂音。

戦い合う二人の魔導師、が杖を鏝迫り合うように杖を打つ音だった。

少女の助手は、それは素晴らしい仕事をしてくれた。十七層に及ぶ観測魔法が転送した映像から、少女はその現場で起こった出来事を演算するのに、十分すぎるほどのデータを読み取ることが出来たのだ。

全て、少女には理解できる。その日の気温、空気の流れ。今、白い

魔導師が放った桜色の光が僅かながら風に流された。弾道が左にずれるので、誘導を利用してして少しずつ修正している。そんなことまで、分かってしまう。

(……それで?)

やがて、魔導師二人の対決は、それぞれの全力の撃ち合いへと移行する。30分にも満たない戦闘時間の中で、互いに魔力を出し尽くし、緩やかな体力切れを迎える前に一発で勝負を決めようとしているのだ。

先ず動いたのは、黒衣を纏った魔導師。相手が大魔法のチャージを始めれば、魔法そのものの抜き打ちで対抗するように詠唱を始め——たかのように見せかけて、バインドにより相手を固定。何もさせないまま、確実に相手へ直撃させるための引っかけだ。

そこから展開されたのは、何の変哲もない、連射型の射撃魔法。但しその数、合計38個。複雑な術式にも高度なテクニクにも依らない、只数と威力で押しまくる、正しく必殺の魔法だった。

黒い魔導師の号令の元、金色の弾丸は一斉に放たれる。しかも秒間七発、合計斉射時間きっかり四秒で、計1064発の飽和攻撃だ。

結果は予想通り、全弾直撃。これでまず間違いない撃墜できるし、仮に出来なかったとしても防衛するだけで魔力を全て削る事ができる。それこそ、後は少し小突くだけでダウンするくらいに。

しかし、魔導師の目に油断はない。斉射後のダメ押しとして、残った魔力をかき集め一際大きな魔槍を作り、未だ晴れない爆煙の向こうへと放った。

そしてこれも、直撃。拡散する雷光が周囲の構造物を抉り、爆発が周囲に広がった。

しかし。

その全てを受けきって、白い魔導師は尚も、空を飛んでいた。

(……だから?)

そして白い魔導師は、返すように砲撃の態勢へと移る。黒い魔導師もさせるものかと、空になりかけの魔力をフル回転させて回避しようとするが。

設置型で、しかも構築から遅延して発生するように調整されたバインドが、その四肢を掴んだ。

後の先を取る。対決の最初で、白い魔導師が行った戦術。それは最初から最後まで、魔導師の知恵と戦術を貫く一つの軸であったのだ。

まずは一発。自身の残りの魔力を全て、景気良くデバイスに注いだ白い魔導師は、直射型の砲撃魔法を放った。バインドで縛っているのだから、もちろん直撃する。

しかし、この程度なら耐え切ってしまうかもしれない。勝利への執念は、こちらも向こうもそれぞれ強く負けてはいないから。だから、最後の最後、ダメ押しのだめ押し、相手を打ち倒す大本命を放たねばならない。

白い魔導師は砲撃を終了した後、それを撃てる程の空間を求めて天へ昇った。

(……だから、どうしたっていうの?)

その危惧の通り、黒い魔導師はギリギリ生き残っていた。身体は傷つき、魔力も切れかけているが、すんでの所で落ちずに、空を漂っていた。これで勝負は決まったことになる。互いに魔力切れなら、戦闘経験において辛うじて上回っている黒い魔導師の方が勝つのである。

しかし、頭上を押さえつけられるような悪寒を感じて、黒い魔導師が頭上を見上げると。

そこには、極大の魔法陣と、あり得ないほど大きな星があった。

(……そんなものが、なんだというの)

集束魔法。

戦闘中に散らばった魔力の僅かな残滓を集め、自らの魔力を消費することなく大威力を放つという、ある種裏技のような魔法。

白い魔導師が編み出した、知恵と戦術、最後の切り札が、それだった。

(くだらない)

それはあくまで砲撃魔法とはいえ、規模からしてかなりの範囲を焼き尽くす。黒い魔導師には、もはや回避するほどの魔力も残っていない。

(くだらない、くだらない)

せめてもの抵抗だろうか、五層に及ぶ防御魔法を張るが、そんなものは紙くず同然だ。

(くだらない、くだらない、くだらない)

今、全てに決着を着けるため。白い魔導師は杖を振り下ろし、そこから、黒い魔導師を完全に蒸発させてしまう光が――

(くだらないっ!!)

そこで、彼女の――束の計算した状況再現はぷつりと途切れ、その視界に踊っていた白も黒も桜も金も、消え失せた。

「……」

彼女の心の中にあるのは、自己嫌悪である。

何だ今の妄想は。本当のなのはとフェイトの戦闘は、こんな味気ないものではなかったはずだ。もつと二人とも激しく、熱く、輝いていたはずなのだ。

束のエミュレートは確かに完璧である。それをもし何かを通じて外部に出力できたなら、あの戦闘を生で見た誰もが首を縦に振るだろう。完璧に再現されていると。その一挙一動に至るまで、寸分狂いなく現実のままであるとも称されるはずだ。

だが、そこには熱さが無い。たかが9歳の少女二人の心の動きくらい、簡単に推察できる。しかし束が推察した時点で、そこから熱さが逃げていき、冷たい厳然な事実へと代わってしまう。再現できるのは事実だけで、二人の心の中にある熱さは、どうしても創りだすことが出来ないのだ。

だから、なのはの本当の心を折り曲げて、こんな改変をしてしまう。もしあの収束砲撃が魔力ダメージのみでなかったら、物理破壊設定であつたら。

それで、あのフェイトとか言う女の子が、この世から居なくなっていたら――なのはの目は、あのお別れの時だって、束の方へ向いていた。

なんて、なんて馬鹿げた空想を、本気にして、しまう。

「……………」

なんとという無様だ。

真正正銘の天才、篠ノ之束が、嫉妬なんていう幼稚な心を御しきれないでいる。そうして、起こった現実をわざと捻じ曲げるなんて真似をしてしまうとは。

これでは、アレと同じじゃないか。吐き気がするほどの嫌悪感が湧く。

千冬が聞いたら笑うだろう。笑いに笑いに大笑いして、それから束の頭を木刀でばかり、と思いい切り叩くはずだ。なのには只のげんこつなのに、不公平極まりない。

それから、そういうことを実際にやってのけて、それでなのは申し訳が立つか？　なんて言い出すに違いない。それは正しい。間違いない。世の中のルールを無視している束に向かって、そういうことを言えるのは千冬しかない。

だが束だつて、そんなことは分かっているのだ。

ユーノに言ったらどうなるか。彼はとても優しいから、出来る限りの手段を使って束を慰めてくれるだろう。鬱屈した思いを溜め込んで、暴走しないように。

そんなユーノの気遣いは、束にとって邪魔ではない。単なるデータ整理だけではなく、そういうフォローも出来るから、彼を未だ助手において、自分の食事を半分分けてやって、寝床まで提供しているのだ。

でも、それだけじゃ足りない。和らぎはするだろうけど、結局は対処療法に過ぎない。

「ばかみたい……………」

浮かんだこれらの考えを、束は一瞬で切つて捨てた。彼らは確かに、自分を思ってくれるだろう。しかし、それらと束とは、決定的なまでにずれているところがあった。

そして他でもない、そういう好意を受け止められなく思う自分に、「つまんない、なあ」

という、評価を断定した。

無性に、なのはの声を聞きたくなった。

あの、何も考えていないようで、結構考えていて、それでもいざという時考えではなく本能的に放たれる声。少女らしく甘ったるくても、それと同時に、聞いている者の心を背中から叩いて押ししてくれるように凜として響く、あの素晴らしい声を。

——束ちゃん、どうしたの？

なんて、とぼけた調子で聞いて欲しかった。私の悩みなんか分からないけど、苦しい顔をしていることは見つけてくれて、そうして歩み寄って欲しかった。

そうすれば、束は苦しみから解放される。

あの時と同じで、高町なのはは篠ノ之束の全てを受け入れて。

理解しようとしてくれるはずだから。そういう限りのない受容こそが、この世でただひとつ束に与えられた道標だ。

(でも、来るわけがない。こんな所まで、今来るわけがない)

なんとも暖かくて女の子らしい夢想だが、科学者としての束はそれをあつさり否定する。こんな夜に、もしもなのはが外に出たとして。それがここまで辿り着く可能性は、概算してみれば限りなく、0に近い。

かつてユーノの助けに応じたような、魔力による導きだって無いのだから。

——やだなあ、束ちゃん。束ちゃんが寂しい思いをしてるなら、私はそこへ行くよ。いつだって、どんなときだって——

あああ。

何だこの思考は。

ふざけるな篠ノ之束よ。全てを冒瀆する天才よ。

いつもの自信と元氣、他人をからかう傍若無人はどうしたというのだ。

これではまるで、ただのごくごく普通の小学3年生ではないか。

今すぐこの妄想を終わりにするんだ。そしてラボに急ごう。じつくり新研究に打ち込めば、あんな下らない感情なんて直ぐに忘れてしまわずだ。『白式』を直しそして完成させるなど、やりたいことはま

だ沢山あるじやないか。

なんて悶々としていた東が、聞こえる幻聴をシャットアウトしようとベンチからがたり、と立ち上がった、その目の前に。

「束ちゃん！」

本物の、高町なのはが、そこにいた。

「なのちゃん……!?!」

東は驚いて振り返る。しかしその顔に、咎めるような表情は浮かんでいない。もしかしたら実は、心の中ではなのが来てくれると確信していたのかもしれない。しかし、余りに非理論的だったので、その可能性を極めて低く見ていたか、全くの的外れだと考えていた。

それでも、なののははここにいる。夢でも幻でもなく、確かにいる。

「にやはは、やっぱりここにいた」

「やっぱりっ」

急に出て行く自分のことを心配した、ユーノにでも話されたのだろうか。

そんなロジカルな想像は、リリカルな答えによって、真っ向から打ち碎かれる。

「えとね。もしかしたら、束ちゃんここにいるかなって思ってた。そうしたら、なんだか勝手に足が動き出したの」

もしかしたらってなんだ。なんだかってなんだ。

分からない。海鳴市は広いし、東の行動範囲は更に広い。愚かな考えに囚われた頭を冷やすためなら、例えば北極まで行って比喻でなく全身を冷やし尽くすことだって出来るのに。どうしてピンポイントでこの公園に辿り着いたのか。

それが、二人を結ぶ運命なんだよ。なんて乙女的な解釈が出来れば、どれだけ楽か。束の矜持は、この事象について、納得のできる結論を出さねば収まらない。しかし同時に、それはどうあがいても無理なことだとも諦めてしまう。

だってこれは、なののはの側でいつもいつも起こる、小さな奇跡の一つにしか過ぎないのだから。

「ふうん……なののちゃんでしょ」

「なに？」

「ホント、意味が分かんないよ」

本心からの言葉は、侮蔑としては聞こえず、むしろ賞賛だった。だからなのは、嫌な顔一つせずに受け取る。

「そっか……東ちゃんにそう言われると、なんだか嬉しくなるね」

「なんでかな？ 馬鹿にされてるって思わないの？」

「そうかもしれないけど……でも、東ちゃんってとても頭いいから、もし馬鹿にされてても、それはちよつとは怒っちゃうけど、間違いだなんて言えないよ」

なのはの言葉は嬉しいが、東にその言葉に頷けはしなかった。

東はさつきから、どうにも青臭いことばかりしている。嫉妬に身を委ねてはそれを悔やむ、なんてのは常人がやることだ。

それではいけない。もう少し、割り切ってしまったねば。

天才というのは、そういう下らないことから離れていなければならない。ただ純粹に自らの興味あるもの、愛する者の為にひたすら情熱を注ぐ、そういう存在でなければならぬ。

そう、所詮他人の意思なんて、あっさり吹き飛ばしてしまえばそれでいいのだ。

あの時、分厚い結界の中で全ての干渉を排除し、なのはと千冬、二人だけの劇場を創りだした時のように。

そう有りたくて、東は自分で自分を『天才』だなんて嘯いているのだから。

「……」

「あれ？ 東ちゃん、どうしたの？」

でも、千冬のしかめっ面を思い出す度に、何の興味も関係もない、ただ利用しあうだけのユーノが、自分を心配してくれるという事実を認識する度に。

そして、目の前にいるなのはが、何の気なしに、首を傾げて微笑む姿を見る度に。

今の『篠ノ之東』に、そういうことは出来ないという結論が、弾き出されてしまうのだ。

「……なのちゃん、私ね」

ああ、なんて青臭い。初心で、生煮えで、未成熟な私。

これではとても、あの老女を馬鹿にすることなんて出来ないじゃないか。

「私……わたし、し……」

歯を食いしばって口を閉じた束は、しかしその胸に渦巻く感情を喉奥で練上げる。どうせ青臭いなら言ってしまう。フェイトのことを邪魔だと思うと。なのはがフェイトに取られやしないかと思ったら、不安で胸が一杯になってしまうことを。

しかし、その最後の最後、吐き出す寸前で留めてしまう。

「……」

それは、恥じ入らずに感情を撒き散らすより、よっぽど天才らしくないことだった。

そういう生の、率直な想いや欲求を、発明や発見という形で世の中に突きつけ、世界を変えていくのだから、天才なのだから。

それでも、どうしても口が開かない。

言ってしまったって、大事な友達をまた一人増やせた少女を、傷つけたく、ないから。

そう思うこと自体が、既に天才らしくなくて。でも、束の心はそう思っていて、自分の心には、嘘をつくことをしたくなくて。

何も言えずに、黙ったままだった。

「束ちゃん、私ね」

だから、最初に言葉を投げかけるのは、あの時と同じく、なのはだった。

「束ちゃんが、ユーノくんと仲良くしてるのを見て……ちよつと、ちよつとだけ、羨ましいな……って、思っちゃっ、た……」

なのはは深く顔を俯かせ、今言った言葉がいかにも重罪の自白であるかのように恥じ入り、消え行くような細かい言葉を紡ぎだす。それは束にとって、今までのどんな『予想外』よりもはるかに色濃く、そして驚愕に満ちた『予想外』だった。

「な、なのちゃん……どうして?」

ユーノとなんか仲良くない、とは言わなかった。ただ、どのような思考で持って、そういう結論に辿り着いたかどうかを聞き質す。

だって、言うはずのない言葉なのだから。いくらなのはが『予想外』の塊でも、これだけは。

いや、『予想外』だからこそ、そんなことを言うのはあり得ない。

「私ね、最初はユーノくんが東ちゃん側の側にいてくれて、とても嬉しかったんだ」

そう。

なのはが東に一番望んでいることは、今も昔も同じはずだ。

東の今生きている世界が、つまらないものではないことを理解させる。そして、世界をつまらないものにしないうように、頑張る。

東がこの世界を一先ず「楽しい」と認識しているのは、なのはという友達を得たから。つまなのはの立場としては、東の友達を増やす事こそが、東の世界を楽しいものにさせる一番の方法なのだ。

だから、なのはは頑張っていた。

東とアリサ、さすがが、予想される限り最悪の出会い方をした時。

千冬と東が出会った後、その性根の違いから何度も何度も仲違いしかけた時。

なのははいつも両者の間に割って入り、ひび割れた関係を修復するため力を尽くした。

そしてユーノが東に攫われた時も。なのはは止めず、それどころか、本来自分のペットになるはずのユーノを何の戸惑いもなく東に預けた。

その結果として東はユーノを『助手』として扱い、事件の間だけでなく、今も側においている。

こうして今、東の周りにはなのはだけではなく沢山の人が居る。

かつて一人ぼっちだった女の子は、もう一人ぼっちではなくなった。

東にとっては後ろ髪を引っ張られてむずむずするようなその事實は、しかしなのはからしてみれば、ジュエルシードを集めきったこと

より嬉しい結果であるはずだ。

「でもね」

だのになのはは胸を押さえ、その奥から中々出て行かない気持ちを、絞りだすように語りだす。

「全部終わって、こうして見ると……私と束ちゃん、なんだか遠くなっちゃったなって、思うの」

遠い。言われてみれば、束にも思い当たる。

この事件の間、それまで密着仕切っていた二人の距離は、大分遠のいている。なのははジュエルシードを集めるために街中を飛び回り。束はミッドチルダ式魔法のメカニズムを解析して応用し、『白式』を完成させるためラボに籠もりきりだった。だから、直接顔を向けて会った回数を数えてしまえば、片手の指で足りてしまう。

でも、束はその間片時も、なのはのことを忘れてはいない。

そういう気持ちを込めて、束はあえておちやらけた冗談を返す風に返答した。

「そ、そんなことないよお！ 私が考えてるのはなのちやんとちーちゃんのことだけだって。あんなフェレットのことなんて、なんにも」

「そうかな？ 本当に、そう？」

だが、澄んで潤んだ瞳にまつすぐ見据えられると、束もうつ、と言葉に詰まる。

それがそのまま、答えになった。

「本当にそうなら、ユーノくんを『助手』だなんて言わないはずだよ。束ちゃんが助手を作るなんて、今回が初めてだったし」

そう、初めてなのだ。篠ノ之束が、自分のラボにまで定住を許した人間は、ユーノ・スクライアというただの異世界人の少年が初めてなのだ。

なのはも何回かお泊りはしたけど。いつも束と一緒にいるなんてことはなかった。

「それがね、なんだかとても……とても……」

「悔しい」

なのはが後一步の所で言葉に詰まり、手を握り締めて一生懸命に何か言おうと頑張っている。そういう所を見た東は逆に、自分の言葉のつかえを外して、今まで言おうとしても言えなかった言葉をするりと口に出した。

「そう！ 悔しいんだ……おかしいよね」

ぽたり、ぽたりと、なのはの瞳から涙が溢れて、革靴に落ちる。

「アリサちゃんとすずかちゃん、それに千冬ちゃんが東ちゃんと知り合っても、こんなこと思っていなかったのに」

そして東も、いつの間にか涙を零していた。

「東ちゃんに一杯友達が出来るのは、とても嬉しいはずなのに」

——なのちゃんが友達を作るのは、なのちゃんらしくて、とても面白いはずなのに。

「どうしてかな。東ちゃんが段々、離れていっちゃんやうような気がして」

——どうしてだろう。なのちゃんが段々、離れていっちゃんやうような気がして。

「とてもとても、寂しいの」

——とてもとても、つまらないの。

「……あは」

ああ、なあんだ。

東はようやく気づいた。

私たち、同じなんだ。

一人は天才で、一人は魔法少女だけど。

でも同時に、まだ子供で、ごくごく普通の小学3年生で。

だから私たち、友達になれた。

——でも、もし、そうでなかったら——？

「……なのちゃんっ！」

「にやっ!？」

東は湧き上がる衝動を解放し、思い切りなのはにぶつかって、その

身体をぎゅつと抱きしめた。

「あ……」

「なのちゃんっ、なのちゃんなのちゃんなのちゃんっ」

そして、なまえをよぶ。何度も、何度も。

高町なのはという名前を覚えている、その喜びを一回ごとに噛み締めるように。

だから、なのはも応じて、なまえをよんだ。

「束ちゃん、束ちゃん、束ちゃん束ちゃんっ……」

抱きしめ返す手は、強くて熱い。だから、束も更に強く抱きしめ返す。

「私、なのちゃんと友達になれて良かった……本当に、良かった」

「うん、わたし、私もっ！ 良かった！」

私も、貴女も、今ここにいられるのは、貴女が、私が、ここにいるから。

そうでなくても、ここにいたかもしれないけれど。でもそれは、今の私たちとは絶対違う。

良くも悪くも、今の二人がいるのは、二人のせいなんだ。

だから、心配なんてしなくていい。

なのはの周りにどれだけ友達が増えようとも。束の世界がどれだけ色鮮やかになろうとも。

束はやっぱり、なのはの大切な友達で。なのははやっぱり、世界で一番綺麗だから。

「ねえ、束ちゃん」

「なあに」

密着した状態から、ちよつと離れて、なのはは提案する。

「踊ろうよ」

伸ばされた手。

それは突拍子もない、理屈に合わない、不合理で噛み合わない行為。だけど束は、差し出された手の平に、自分の手を重ねた。

「うん」

そうして、二人は向かい合い、足を運んで踊り始める。

なのははダンスなんて知らないし、束は知っているけど、やったこととは一度もない。

だから、ただ片手を取って、互いの身体を近づけさせるだけの、稚拙な真似事にしかならなかった。時々足なんか踏んづけじやつたりして、小声でごめん、と言つてから、またくるくる回り出し。今度はコマのように早く回りすぎて、なのはだけ目を回してしまう。

ああ、下らない。でも、なんだかとっても。

「楽しいね」

「うん」

一休みした束がそう言うと、なのはは頷いて、それから目を閉じて何やら呟き始めた。

すると、束の足元からふわり、と浮き上がるような感覚が生まれる。ひんやりした空気が縦方向に肌を撫でた。

持ち上がっている、と即座に気付いて足元を見れば、そこにはピンク色の魔法陣があつて、二人、いつの間にもやらその円形の上に立っていた。

「なのちゃん、これって」

魔法の秘匿とかそういう関係で、いけないんじゃないのか。

目でそう問い質すも、なのははいたずらっぽく、にやははと笑うだけだった。

「さあ、じっくり掴まってる」

魔法陣はそのままぎゅうん、と真上に向かって上がっていく。慣れ親しんだ地面はどんどん遠のいて、その代わりに黒い雲が頭上へどんどん迫り来る。

「ちよつと揺れるかも。気をつけて」

その言葉通り、浮かぶ二人が雲にぶつかつた時、ぐらぐら、と足場の魔法陣が揺れた。しかし、二人を丸ごと多い、内部の乱気流で吹き飛ばすはずの雲は一向に襲つてこない。どうやら、魔法陣の上には無色のバリアーが半球状に展開されているようだ。

「もうちよつと、もうちよつと……！」

ふと、束がなのはの首元を見れば、そこにいつも輝いている赤色の

宝石が姿を消していた。どうやらこの術式、正真正銘なのは一人の負担で保持しているらしい。デバイス無しでの展開は、なのはにもそこそこの負担が生じるはずなのだが。

それだけ、二人きりになりたかったのかもしれない。

「……いくよ束ちゃん、上を見て！　さん、にー、いちー！」

なのはがカウントダウンを終えると、束の視界は真っ黒からあつという間に弾けて開けた。ちょうど雲を抜けたらしい。満天の星空が、束の視界を包むように瞬いている。

そして東側を見れば、見事に丸く欠片ない月が、青白く妖しい光を放っていた。

「すごい……！」

海鳴の地表を覆う雲の上。そこにあるのは月と星の光だけで、二人以外に何も、誰も存在しない。それが、束の心を何より熱く灯らせた。星はなんて綺麗なんだろう。月はなんて美しいんだろう。

それは、二人の、そしてこの世界に生きる少年少女たちの前途に広がる、果てしない未来のようだった。

正に、未来は天井知らず。インフイニット・ストラトス

「さあ、踊りを続けましょう？　月のウサギのお姫さま」

この単純で、それでも純粹で真新しい原風景を見たからか。

なのはは珍しく芝居がかって跪き、手を伸ばして束を誘い出す。

それが余りにおかしくて、束はぷつと吹き出しながらも、同じくらい大根芝居な優雅さを以って、その手を取った。

「はい、魔法少女の王子さま」

あはは、にやはは。

似合わない言い回しに、互いに呆れて笑いながら、また踊りが始まる。

くるくる、くるくる、らん、ららら。

遥かに高い空の上、でも、落ちたらどうしようなんて、考えない。だって、友達だから。

愛しているから。

愛して、信じているのだから。

「楽しいね、東ちゃん。東ちゃんは、楽しい？」

「うん、とつても」

「そっか、良かった」

二人のワルツはいつまでも続く。

誰も見てはいない。ここに改めて契られた、熱くて硬い友情を、証明する者は誰も居ない。

しかしただ満月だけが、小さな二人を見つめている。

東は全てを得心した。

今日は満月で、それが、こんなに蒼いのだ。

巡り合えないはずの二人の友達が出会ったとしても、おかしくはないし。

孤独であるはずの少女が、出会わないはずの少女と出会ったりしたって何もおかしくない。

だって、あの日の夜も、この夜も。空には蒼い満月が昇っていたから。

こんなに月が蒼いのが、不思議なことが起こった。

小さな奇跡にこじつける理由なんて、それだけで、十分だろう。

仲良きことは？（おまけ）

あの事件から一ヶ月くらい経って、小学生はそろそろ夏休みシーズン、という日。篠ノ之家の軒先にあるバラック建ての小屋の中に集まっているのは、例のごとくいつもの五人組だった。

「うりっ、うりっうりっ」

「ぐぬぬ……い！」

雑多なガラクタにも似た、しかし中身は全て時代の先端に行く愉快的な発明品に囲まれつつ、何故かそのど真ん中に鎮座している42型の大きなブラウン管テレビの前で悪戦苦闘している少女が一人。それから、鼻息混じりにのんびり手を動かす少女がもう一人。

それぞれテレビから伸びている、6ボタンスティック式のコントローラーを目まぐるしいほどに動かしているのだが、外野として画面内をどう見ても、さらに直接見える二人を見ても状況はウサミミのついた少女に有利なようだった。

「あああ、ちよ、そこでなんでどうしてっ」

金髪の少女、アリサ・バニングスの顔面が青白くなったのは、ただの凡ミスという訳ではないだろう。彼女自身そんなヘマをせず、むしろ完璧に近い動きをしているはずなのだ。しかし、すぐ横で戦っている少女の入力動作がそれを凌駕し、アリサの操作キャラを叩きのめしていく。

「ほいほいほい、壁だねーどうするのー後6.73秒後に差し込むよー？」

まるで、今週のおかずを告げるような気軽さで語るアリサの対戦相手。しかしそれは、確固たる計算と予測の元に述べられた『必然』である。少なくともアリサという少女の力量では、彼女——篠ノ之束の行動予測から一步も逃れられない。

「ぐぬっ……い！」

泰然自若と構える余裕ツラは、まるで孫悟空を手の平の上で散々弄ぶ釈迦如来のような、壮大さと残酷さを内包している。例えアリサが勝利を放棄し、自棄鉢でスティックとボタンを暴れさせ、せめて一撃

すら叩き込めていない状況から一矢報いてやろうと考えるにしても。「はい刺さってーかーらーのー壁コン行ったねー？ これでダウンだよ？」

その結果できた隙へ見事に差し込まれ、その時間が宣言した通りきっかり宣言の6.73秒後なのだ。自分とはものが違う、と認めるしか無い。とうか認めなければ敗北に納得出来ないのが、アリサの幼い悔しさだった。

「そのままあーループしてーループしてー超必打ってはい、しゅうりよー」

一旦刺されれば、何も抵抗できずに残り体力バーを全て削られ、そこで試合終了。時間にして一分足らず。束の操作キャラには傷の一つもついていない、完全勝利だった。

「うう……また負けたあ」

「最後いっつも焼け鉢になるよね君は。読みやすいつたらありやしないよ」

「も、もつかい！ もつかいやるわよ束！」

「えええー？ まあこのゲームならいいけどさ。いい加減諦めたら？」

今まで全戦全敗だよ？ 逆転の目も無いのに戦って意味があるのかい？」

こうして負け続けるのは今に始まったことではない。束が手慰みにこのゲームを開発してから、対戦ゲーム得意を自負しているアリサは毎回のように束へ挑み、何度も何度も負け続けている。

束の価値観からしてみると、どれだけアリサが腕を上げようが熟練しようが、開発者にして天才な自分に敵うはずもない。というのにめげずに戦おうとしているのは、学習能力のない間抜けだと思えてならないのだが、その上更に

「うっさい！ 戦い続けることに意義があるのよ！ 特に、アンタみたいな理不尽にはね！」

と譲らず、もう一回コントローラーを構え出すのだから間抜けも間抜け、底なしの大間抜けだ。

「はあ……ま、いいか。次もパーフェクトしてあげよう」

「いつまで減らず口を叩けるかしらね！」

だがまあ、そういう間抜けだけど、集中しすぎて疲れて倒れこむのは後三試合後のことだろうし、それまでなら付き合っただけでもいい。今の篠ノ之束は、アリサ・バニングスという小金持ちの一人娘にそれっぽっちの評価しか与えず、だがそれっぽっちだけ、評価していた。

「にやはは、アリサちゃんも束ちゃんも、楽しそうだね！」

そんな日常風景へ、慣れ親しんでいるようふうんうんと頷きながら、篠ノ之家の母親から配られた饅頭に舌鼓を打つのが高町なのは。

「……そうなのかな？」

アリサの必死な姿と血走っている目に少しだけ怯えながら、その死に物狂いの勢いを完全にあしらい切る束にも尊敬と畏怖を抱いているのが月村すずか。

「私としては、アリサのやつに特訓の一つもしてやりたいが……ゲームは苦手だ」

反応速度抜群の自分ならもう少し善戦できると確信しながらも、いざやると力を込め過ぎて超合金製のコントローラをも破損させてしまうので、アリサに一縷の望みをかけているのが織斑千冬。

以上の五人が、海鳴市の中でもちよつとは名の知れている少女たち。一人が暴走し、一人がそれを追い掛け回しもう一人がそれを応援するので、二人がとぼちちりで振り回される。そんなことを繰り返しながら、町中で小さい事件を何度も起こしたり解決していたりする、いつもの五人だ。

だが、最近はそのにもう一人、少年が加わったりもしている。

「教授、みんな！ 母屋の方からお茶持ってきたよ」

数分後、瞬く間に3回決着を付けられて、疲労と虚無感でバタリと倒れたアリサの元へさすがダウンしたボクサーを助けるセコンドのように駆け寄ったのと同時に。ラボのドアを開いて現れたのが件の少年、ユーノ・スクライアであった。

「あ、ユーノくん！ アリサちゃんが、ほら、大変なのっ」

「ん？ って、ああ……また教授に挑んだのかい？ ほら、倒れてない

で、立って歩いて、向こうで休もう」

アリサがやったのはただのゲームでなく、篠ノ之束特製の対戦格闘ゲームである。その操作とシステムの煩雑さを考えれば、五、六試合やった時点で小学生の集中力など摩耗しきってしまって当たり前だ。涼しい顔で、手加減なしのCPU戦もこなす束の方がおかしいと言える。

「つかれたあ……」

「はい、お疲れ様。結局今回も駄目だったのかい？」

「悔しいけどね……。大体何よあのゲーム。確かにゲームとしては凄いい完成度高いけどさ」

何度かの完全敗北に心を削られて、脱力しきったアリサが見るのはブラウン管の画面だ。様々なコンボを繰り出して時折はあ、はあ、と悶えながら、CPUをいじめ抜く束。しかし、彼女の操作キャラクターも、ボコボコにされているキャラクターも同じ顔で、同じ姿だ。

ただの同キャラ戦という訳ではない。他に選べる数十にも及ぶキャラクターも、姿こそある程度違うが全部同じ顔で、同じ体躯、同じ声。

そう、それは。

「友達使って友達と戦うゲームって、何よお……!」

プレイヤーキャラクター、全員、高町なのは。

魔法少女のなのはや、変身ヒーローのなのは。さらには格闘家、剣術家、槍兵、ニンジャ、カウボーイなのはが存在する。ただの喫茶店員のなのはもいるし、水着系なのははなんと驚きの8種類、清楚なワンピースから危ないビキニ、旧スク水まで。そのドットの作り込みは出色の一言。

そんな、高町なのはづくしのゲームだった。作り込みは凄いが、ここまで徹底しているともはや気味の悪さすら感じられてしまう。

「あはは、教授らしいけどね、あは、は……」

深く深く溜息をついたアリサに、ユーノは同じくらい深く同情していた。第一ユーノ自身、ロケテストと称するテストプレイで何時間も付き合わされている。その苛酷さは、次の日なのはと会った時、その

声と姿に一種の拒否反応まで覚えてしまったほどだ。もちろん、本物のなのはの天使のような優しきで、一時間もせずに治ってしまったが。

「……確かにな。おいなのは、お前は何も思わんのか」

「へ？」

「そうだよなのはちゃん！勝手に作られちゃったんでしょ？ 迷惑じゃないの？」

千冬もすぐかも見ていて同じことを思っていたのか、ここぞとばかりに傍観しているのはを焚きつけようとしたが。

「んー……別にいいと思うけどな」

この反応である。二人は揃って首をかくん、と俯かせた。なのはの良識も常識も普通の少女と何ら変わらず、それどころか一般の平均よりしつかりしている。しかし束に対しては、いつもいつも激甘なのであった。

「それに……こんなゲーム作っちゃうくらい、私のことを大切に思ってくれてるんだったら……それはとっても嬉しいな、って！」

しかも、この言葉が表すように、最近その傾向がより一層勢いを増していた。

例えば束は朝、なのはの胸元に飛び込んで必ずセクハラじみたボディタッチを行うのだが。前までは笑いながら止めず、しかしそろそろと束の手から距離を離していたのに、今はそうしない。

ただ触られるままに、そのまま服を脱がされ、押し倒されてもそれはそれで嬉しいかな、というほどの受け入れぶりだ。

このままでは、いくら自分たちが引き留めようと、いつか公序良俗に大きく反した行動を取るかもしれない。一度、なんとか釘を刺さなければ。この場にいる中で、なのはと束以外の全員がそう思っていた。

「はああ……やれやれ、ごちそうさまね」

「うむ、もうお腹一杯だ」

「私も」

「僕も……」

とはいえ、自分たちに何が出来るわけでもない、見切りもつけている。束となのはのことなのだ。誰にも心を開かなかった天才と、初めて友達になった少女との間にある絆はどれほどのものか、分かっているはずもない。

だから、ユーノもアリサもすすずかも、そして千冬も、なのはのノロケにも似た言葉を止めることはすっかり諦めていた。

「にゃ？ 皆、お菓子まだ残ってるよ？」

「ちがわいつ、あんたらにぐちそうさまなのっ」

「……??」

他意もなしに聞き返してくるなのは。何の邪気もないその顔が可愛らしくて、しかし今更言われたくない勘違いである。

だからアリサは、なのはの顔からぶいつ、とそっぽを向けたのだが。

その表情にはそれとは他に、仲良さに対するムカツキだって、入っているのかもしれない。

なのたばねちふゆA' S 第一幕（本編）
篠ノ之束のとある一日

「ふぁ……う……」

午前八時、ラボの一室、ではなく篠ノ之家母屋の二階、九歳の女の子らしい広さとらしくない簡素さが同居する部屋のベッドで寝こけていた。

束が睡眠にこの部屋を使い始めたのは至極最近のことである。それまではラボの椅子に座ったまま寝るか、そもそも日が昇っても沈んでも目を閉じないのが普通だった。

ちなみに、ベッドへ入ったのは夜10時だから、総計すると10時間睡眠だ。

育ち盛りで食べ盛り、ついだに寝盛りの女子小学生としてはそこまですぐ飛び抜けてもいない数値だが、9歳にして世界随一の科学者であり、更に異世界の魔導をも研究している人間には相応しくないだろう。

飽くなき探究心と研究欲を満たそうとする束にとって、一度きりの人生が保有する時間はダイヤよりも貴重だ。それを削ってまで、ぐっすりと寝る理由は――

そこまで考えた所で、束を起こしにやってきたユーノ・スクライアはこらえ切れずに、ぷふつ、と笑い声を漏らしてしまった。

ぴこん。

「ユーノくうーん……う？」

ウサミミがわずかに動いたと知覚した瞬間、後ろを向いて脱兎の如く逃げ出す。だとしても、その直後、瞬間移動じみた早さで寝間着姿がドアを塞いでいるのだからどうしようもない。

「き、教授……はは、おはよう……」

「……」

「あ。はは、はははー……」

じつりと冷たい寝ぼけ眼が青ざめた顔を数秒間睨みつけた後。

「今日一日フレットモード固定ね。破ったら解剖」

「そんなあー」

非道な裁定が下された。

ユーノが内心、失礼なことを考えていたのはその通りだが、それにしては残酷な措置である。東の友人の内一人は反発するだろうし、更にも二人は傲慢さに引いてしまうだろう。

しかしながら、宣告されたユーノが何も反発せず、大人しく変身し小さなフレットに変わってそそくさと逃げ出したのだから、二人の間には他人の介する隙間のない程堅い主従関係が構築されているのだった。

ユーノを見送った後、いつもの青いドレス姿に着替えた東は階段を降りる。茶の間を見ると、ちゃぶ台の上には既に朝食が仕上がっていて、東の両親と、それからまだ一歳くらいの赤ん坊である妹もそこにいた。

「おっはよー!」

「あら東、おはよう」

「む……おはよう」

元気よく声を上げながら駆け込んできた娘に対し、型通りに明るい挨拶を返したのは母親の篠ノ之沙耶であり、少々の躊躇いを混ぜながら、新聞から顔を上げつつ返したのが父親の篠ノ之柳韻である。妹の箒は子供用の椅子に座りながら、とつくのとうに朝食へ手を付けていた。

東もさつと床に腰を降ろし、ちゃぶ台の一角に用意された自分の分の朝食——白米に鰯の開き、出汁巻き玉子や味噌汁と、それから茹でたほうれん草——に手を付けた。

こうして東の分の朝食が食卓に並ぶのも、一ヶ月ほど前から始まったことだ。それ以前はやはり朝からラボにこもりきりで、その入口にラップで包まれ置かれた食事が完全に放置される事だって何回もあった。

「こら東、食前にはちゃんといただきますと言わんか」

「ふええー? 時間がもつふあいないよう」

「それが行儀というものだ。今からでもいいからやれ」

「むう……いふあふあふいまひゆ」

「その前に飲み込め！」

だから、こうした父娘のやりとりだって、互いにとって中々に新鮮な耳触りだ。

それまでは致命的な問題を起こさない限り、東は父親のことを無視していたし、柳韻も娘のことにとやかくは口を出さなかった、というより出せなかった。

余りにも飛び抜けすぎていた彼女の行動と言動は、真面目一辺倒で一生を過ごしていた柳韻にとって、異星人の狂奔にも似たまるきり理解不能な現象だったのだ。

それを変えたのは、ある日東が拾ってきた、一匹のフェレットだ。そもそも、普段は何をするにも他人に話を通さず行う彼女が、珍しくペットを飼う許可を求めてきたことから異常事態だったのだが。許可を得て、束の部屋に正式なケージが作られてからというもの、彼女はずいぶんとまともになった。

とは言え奇妙奇天烈な発明を繰り返すのも、それを使って町内を良い意味でも悪い意味でも沸き立たせるのだから今までと同じだった。が。

少なくとも、両親に朝挨拶するようになった。こうして食卓を囲み、説教を流し聞きながらも聞いてくれるくらいには、互いに歩み寄れた。

本来の親娘の関係からすればゼロからコンマひとつ増えた程度の進歩だが、それでも進歩は進歩である。柳韻としてはそう考えたかった。

「じゃ、ちそうさまっ」

しかしながら、ここまで東が「まとも」に近づいたことは、高町家の末娘が友達になった時以来だ——とここまで考えた時、東は既に朝食を食べ尽くしてさっさと椅子から離れてしまっていた。

恐らくまた、バラック建ての『ラボ』とやらに閉じこもるつもりだろう。

何年も前、ある日忽然と一夜城の如き素早さで組み立て上げられたそれは、今や篠ノ之神社の風景の一分子として柳韻の目にもすつかり馴染んでしまっている。

最初はすぐに建て壊せと怒髪天を突く勢いだった彼も、バラックで作られている癖にブルドーザーですら崩せない強靱さを見たら流石に心が折れたし、何よりもう、慣れてしまっていた。

「……束」

「ん、なに？ どうしたのかなお父さん？」

だから、ぼそりと未練がましく呟いた言葉に、束が兎耳のカチューシャを動かして反応するとは思わなかった。

「む、その、だな」

「早くして？ 私にはお父さんよりもやることがいっぱいあるんだから」

「……あー……」

たつぷり悩むこと数秒間。目を細め、息を吐いた束がぶいっとそっぽを向く直前、柳韻はようやく娘に対して一言を発することが出来た。

「友達は、大事にしるよ」

「うんっ！ というかね、束さんほど友達大事な女の子はいないよ？」

「じゃあ、またね！」

明るく笑いながら肯定するその様子には、子供らしい単純な理屈だけがある。いつもの小難しさと理解不能な倫理とかけ離れたその笑顔を見て、ほんの少しだけ安心する柳韻であった。

アリサ・バニングスは、友人である月村すずか、そして高町なのはと織斑千冬の三人を連れて、海鳴市中心部に位置する大型のスーパーマーケットに出かけていた。

全国各地にチェーン展開しており、日本人なら殆どがその名前を知っているだろうその店舗の中には、ゲームセンターや本屋におもちゃ売り場、衣服専門店、フードコート、おまけに映画館まであり、小学生の欲求を満たすには大凡十分と言えるだろう。

それは、普通の子供よりも若干羽振りのいいアリサやすすかにも同じことだ。

普通の子供よりもかなり強い力を持っているのはや千冬にしても、また同じことだった。

しかし、普通の子供からかけ離れた頭脳と精神性を持ち合わせている束にしてみれば。

「ふあああ……」

デザートとして買ったパフェを食べながら器用にあくびをするくらい、退屈なものであっても仕方のないこと、なのかもしれない。

「あんだねえ……自分からついてくるって言ったのに、なんでそんなにダラけてるの?」

「だって、なんにも目新しいの無いんだもん」

ここにくるのは結構久しぶりだと言うのに、どうしてそんなことが言えるのか。ぶーたれる束の思いを理解できないのはいつもの事だが、それ故にアリサは少しばかり苛立つ。

「そんなんだったら来なきやいいじゃないの!」

「えええ、だってえ……」

尚且つ駄々をこねるような声を出して、バナナサンデーをのんきに頬張っていたなのはへべつとり抱きつくのだから、ますます癪に障ってしまうのだ。

「だーっもう、そろそろ夏だったのに! んな暑苦しい真似すんじゃないわよ!」

「うふふ、アリちゃんてば妬いてる? 妬いてるんだね? 別になのちゃんじゃなくても、隣のすずちゃんぎゅーってすればいいのに!」
妬いてなんか無いわよ。後、すずかにんなことしたら忍さんに笑われるわっ。

そう、勢い良くまくし立てた後でアリサはふと気づいた。

アリちゃん。そしてすずちゃん。聞いたことのないあだ名だ。

そう言えば今まで、束は自分と、それからすずかの名前を呼んだことがあっただろうか？

「……あれ？　アリちゃんにすずちゃんに、あとちーちゃんも。どうして揃って仏頂な変顔晒してるのかな？」

奇妙な思いを抱いたのはアリサだけではないらしく、同じくあだ名を付けられたすずかと、それから千冬も束の顔をじっと見つめていた。

「どういう風の吹き回しだ？」

「いやあ風も何も、ただアリちゃんにはすずちゃんがいますよーって」「そういうことではない！」

千冬が白いプラスチックのテーブルを両手で叩きつつがなり立てるのに合わせて、アリサも高慢ちきな天才に訴える。

「そうよ！　あんた今まで私のあだ名なんて付けてなかったじゃない！　　どういうことなの!？」

「……え？　あ、そっか！」

意外なことを言われたように口を閉じた束は、一瞬考えこむような表情をした後、口をOの字にして手を叩くという、大げさな驚き方をした。

だが、アリサも千冬もその程度では今更誤魔化されない。訝しげな目をして、更に睨み続ける。

気づかぬ内にあだ名を付けるなんて迂闊なことを、恐るべき天才がやるわけがない。きつと、その言葉の裏に何らかの、十中八九悪い方向の意図が含まれているはずなのだ。

半ば疑心暗鬼に突っ込んでいる勘ぐりだが、今まで何度も束に振り回されてきた二人の真面目な友人たちには、そうして当たり前だという方程式が根付いてしまっていた。

「まあまあアリサちゃん、それに千冬ちゃんも止めようよ」

そこへ割り込んで二人を抑えたのは、未だ束ねの両腕で体を思い切り抱きしめられたままののほだった。

束のことを疑わしげな目で見つめる二人、そして両者の間でおどお

どしながら視線を動かしていたはずかも、皆一様になのはへと視線を向ける。

「どうしてよ、なのは。あいつ……えと、束があたしたちをあんなあだ名で呼ぶって、大変なことじゃないの？」

「それはそうかもだけど……うーん、でも、そんなに驚いたりすることかな？」

「というと、どういうことだ？」

「だって私達、友達だよ？」

友達。その言葉を聞いた束はなのはを抱く手をますます締めながら、コクリと頷く。

「友達をあだ名で呼ぶのって、そんなに悪いことかな？」

「う……うーん、えーと……」

「どうかな、千冬ちゃん？」

「ぐう、しかしだな、あの束がお前と、それから私以外を……」

なのはに正論をぶつけられれば、それだけでアリサは論を失い口籠り。尚も反駁しようとした千冬も、曇り一つ無い瞳と柔らかな微笑みを向けられたらどうしようもなく、その口調は段々と弱くなっている。

「でも、それっていいことだと思うんだ。だって、束ちゃんの方から皆と仲良くしてるってことだし。ね、束ちゃん？」

「うんうん！ そうだよそのとおりだよ。だからもーっと……ああ、なのちゃんは可愛いなあっ、暖かいなあ優しいなあっ」

「にやははは、そんなにぐりぐりくつつかないでよお」

そして、相も変わらず過剰なスキンシップを取り合う二人を見れば、はあ、と溜息をついて顔を見合わせ、これ以上の抵抗を諦めたくもなかった。

「……ねえ千冬」

「何だ？」

「あいつ……ううん、束ってさ。本当に、私達と仲良くなろうとしてるのかな？」

「さてな。あいつなりの親しみ方と考えられなくもないが……だが

まあ、これだけは言える。少し前までの束と今の束とは、やはり何か
が、確実に違うはずだ」

「少し前？ それってどういうことよ？ なんかあったの？」

千冬の言う「少し前」がいったいどんな時間を意味しているのか。
アリサとしては当然気になる所であったが、千冬は何故か口を閉ざ
し、ただただ首を横に振るだけだった。

そしてそれが、何かを隠そうとする不可思議な態度と言うのは分る
ので、当然何を隠しているのか考えてもみたのだが。彼女の視点から
見れば、ここ最近の束に起こったことなんて、たった一つしか思い浮
かばない。

「……それってさ」

「……なんだ？ 早く言え」

しかし果たしてこんな想像を口にしていいのかどうかとアリサは
迷い、一方千冬も隠している秘密がバレていやしないかと言うように
少しだけ気を張り詰めている。

互いに意図せずして生まれた緊張感の中、相も変わらずなのはに
べつたりな束以外も無言になって息を呑んだ後、アリサは意を決して
口を開いた。

「もしかして、束、アンタ……ユーノと、その……なんかあったんじや
ないでしょうね！」

「なっ」

「えっ」

「ええー……」

思わぬ方向性から来た弾効に千冬は仰け反り、すぐかは驚き。そし
て束は、じとりとした目と何とも言えない表情でアリサを睨みつけ
た。

「だ、だってだって！ ここ最近でアンタに起こったことなんてそれ
くらいしか無いじゃない！ それになによ！ 今まで一匹狼、もとい
一匹兎だったアンタが！ いきなり助手とか！ どう考えたって
……」

周囲の比較的冷たい目線に晒されながらも途切れず一気にまくし

たてた理由は、それが小学生中学年の心理からは少し遠く憧れの“色恋沙汰”であるからなのだが。

アリサ自身、流石にこの突飛な発想を完全には信じられず、なのにこうして主張しているということから生じる小つ恥ずかしさがあるのかもしれない。

「言われてみれば、確かにそうだけど……ねえ」

「ああ、そうだなすずか。あれが色恋に現を抜かすことなど無いだろう……現に今ああしているのだから」

残りの二人がやんわりと否定するのも、至極当然のことだろう。なにせ目の前で、三年来の友達同士がべったりと密着しあっている様子を見せられているのだから。

「へえ、束ちゃん、ユーノくんの事好きなの？」

「やだなあなのちゃん！ ユーノ君はあくまで助手なんだじえい！

私が愛してるのはー、そーれーはー」

「ええいやめろ束！ 見ているだけで暑苦しい！」

「そんなあ。そうだ！ ちーちゃんもほら、ぎゅーっ」

「だっ、バカやめろこら、私を巻き込むなっ！」

良く言えばいつも通り、悪く言えば飽きもせずにして過度なスキンシップを図ろうとする束を見て、アリサは深くため息を付いて、さつきまでの考えを完全に破り捨てた。

「ったく、いつまでもやってなさいよ」

「でも、アリサちゃん」

今まで隅でアリサたちをひっそり見つめていたすずかが、じやれあう三人に微笑みながらアリサの愚痴に言葉を返した。

「こうして仲良くしてるのはちゃんと千冬ちゃん、あと、束ちゃんを見ると、なんだかホツとしてこない？」

「……ほっと、かあ」

「だってなんだか、それが当たり前というか、収まるべき所、っていうか……そうしていると、凄く安心できるんだよね」

言われてみればそうだった。最もアリサのそれは、あいつら同士で勝手にワイワイ騒いでいれば、周りに、特に自分にとばっちりが来る

ことも少ないという利己的なものだったが。

それだって、三人に仲良くして欲しいという気持ちには変わらないだろう。

「……ま、そうかもね」

すずかの言葉にそう呟いたアリサは、暫くここに座って、こいつらが賑やかに、暑苦しくはしやく様を見ていても悪くはないだろうと考え直し、傍らにある紙コップからジュースを飲み干した。

それから夕方。すっかり日も傾いて遊びもそろそろお開きとなり、アリサとすずかは車で、なのはと千冬は市のバスでそれぞれ帰っていった。

残されたのは束のみ。市の中心部から、緑生い茂る郊外にある篠ノ之神社までは結構な距離があったが、束の身体能力からしてその程度の距離を歩くなんでどうということはない。

家につくのは若干遅れるだろうが、それくらいが丁度、篠ノ之家の夕食の時間である。

意気揚々と歩き始めながら、束はふと、今日一日について思いを馳せていた。

普段ならラボで研究に打ち込めるところを無駄にってしまったが、それでもやはり満足できる一日だったと言えるよう。

朝はユーノを弄ることが出来たし、昼は思う存分なのはと千冬に近づいてべったり出来た。ありきたりなウインドウショッピングは面白くなかったけれど、二人と一緒に遊べる口実としては十分だった。

たまにはラボから外に出て、遊ぶというのもいいものだ。もうすぐ世間は夏休みに突入し、一応は小学生の束にも長いお休みが与えられる。

そうしたら、色々な発明のためにラボに籠りきりだった今までとは

違い、もつともつと外に出てもいい。そう、なのはや千冬、それからアリサにすずか、あとユーノと一緒に――

そこまで思考を進めた時、東はあることに気がついた。アリサ。すずか。ユーノ。

それらの名前は、今まで東の中できちんと「記憶」されてはいた。だが、何も一緒に遊ぶとか何処かへ行くとか、そんなことの対象になるほど重要な存在ではなかったはずだ。

東が彼らの名前を覚えているのは、なのはと、千冬の関係者だから。もしくは東にとって、役に立つ人間だから。

それがどうして、一緒に遊びに行くとか、一緒に楽しみたいとか――そういう感情が、浮かんでくるんだろう。

「んん……」

歩道の真ん中で立ち止まり、暫く頭を捻った末に出て来た結論はこうだった。

「なんだかこう、丸くなったのかなあ、私」

別に、昔日の自分がそこまで尖っていたと彼女は思っていない。確かに他人を寄せ付けず一人で居るのが好きだったけど、それはつまりない人間と関わり合いたくないからで、天才としてはごく当たり前の行動なのだから、尖っているとは言わないだろう。

でも、それが多分、常人から比較して「尖っている」のかもしれないと認めれば。その鋭角は、なのはや千冬との出会い、そして少し前に起きた事件のお陰で、随分と削られてしまったのかもしれない。た。

プレシア・テストアロッサ事件。

なのはが魔法とライバル兼大切な友達に出会い。

東が魔法と有能な助手兼ペットに出会い。

千冬が魔法と戦う意味と、そして白き科学の鎧に出会ったあの事件。

三人が三人共に、得るものの大きい出来事だった。

特に東は、以前から考察していた素敵な鎧、最近名づけたその名を

『インフィニット・ストラトス I S』と呼ぶパワードスーツを形にすることが出来たのだ。

量子化からの再実体化について、デバイスが魔力を固定して物質化する理論を応用するなど、習い頭に叩き込んだばかりの魔導工学を惜しみなく使って作られたそれは、正に篠ノ之束の最高傑作。稀代の天才が今持つ知識と技術を全てつぎ込んだ金字塔とも言える。

しかし、2ヶ月弱の間に、束が得たものはそれだけでは無い。

束はこの事件に関わる中で、実に沢山の人間と出会い、関わっていった。例えば、今でも助手として傍らにいるユーノ・スクライア。例えば、大人しい娘という皮を被って付き合ったりリンディ・ハラオウンとクロノ・ハラオウン、エイミイ・リミエツタにアースラのクルーたち。

そして——プレシア・テスタロッサ。

本来は優しい母親である自らを壊し、そして自らを天才と偽ってまで、たった一人の娘のために全てを賭けた母親。

彼女との出会い、そして対話の経験は、篠ノ之束の記憶に今も尚深く刻み込まれていた。

「……………」

こんなはずじゃない現実。避けようのない、どうしようもない悲しみ。

そんな物があることは、とうの昔に知っていたけど。それを体現したような人間に出会い、彼女の怒りと憎しみを一身に受けるのは、今までにないことだった。

しかし何も、プレシアだけが特別ではない。彼女みたいに深い悲しみを背負う人間は、この世界にも、次元世界にも、星の数ほど存在する。

そう考えれば、たかが一人の悲劇に構うなんてことは下らない。束がやりたいこと、形にしたいことはまだまだ沢山あって、その脇に転がる悲喜こもごもなんて、気にしていられないのだから。

「…………でも、ねえ」

今までは無意識に肯定していたその考えへ、これもまた無意識にストップをかけた束の目に、ふと、ある光景が映し出された。

車椅子の少女が、足元に落ちた携帯電話に向かい、一生懸命に手を

伸ばしている。

多分、誤って落としたのだろう。少女の短い手足は大きめの車いすの真下まで届かず、虚しく空を切っている。無理をして体を折り曲げているその表情は、いかにも苦しそうに見える。

あいにく人通りの少ない道で、周りには誰も——いや、束しかない。

束はそれを、立ち止まって見ていた。真つ直ぐ駆け寄って少女を助ける訳でも、無視してさっさと進む訳でもなく、ただじつと、透明な壁に阻まれているかのように、見ていた。

そしてふと、可愛く素敵なあるアイデアを思いつき。

ポケットから何やら布切れを取り出した後、長い髪の真ん中を掻き分けて。

その根本を持ち、布できゅつと束ねて。

即席の長いツイントールにした後、少女の目の前に悠々、堂々と進み出た。

「はい、これ」

自分のことばかりに夢中だった少女は、携帯電話を取ってくれた女の子がそれ以前からずっとこちらを見つめていたことに気づけなかったようで、彼女の行動に心から感謝した。

「ありがとうな。中々届かへんで苦労しとった所なんや、本当、ありがとうな」

「いいってことよ！…この束さんなら、人助けをしたって何もおかしいところは無いからね！」

少女に述べるといふより、むしろ自分に確認して安心するような束の言葉。それを聞いて若干引っかかりを感じながらも、少女は頭を下げ、そのまま車椅子を動かして立ち去ろうとした、が。

「おおっと、ちよいとまっておくんなせお嬢さん！」

ぱしり、と車椅子の取っ手が掴まれ、電動の車輪が止まる。

「えと、どうかしたん？」

「君、どうして車椅子に乗ってるのかな？」

かなり失礼な問いに、しかし少女は嫌な顔一つせず答えてくれた。

「私な、昔から足が悪くて、それで車椅子に」

「へえ、いつから？」

「んうー、いつからやったかなあ、物心ついた時はもう、足動かんかった」

「そうなんだあ」

続く会話。その中で、束の心は何故か昂ぶり、期待に沸き立っていた。

この少女には、何かがある。自分の欲望を満たし、楽しませる何か
が確かにある。

その確信は、何の根拠もなしに掴んだものだったが、しかし束はそれを信じた。そういう理屈に合わないことが、多分、今の髪型にぴつたり合うから。

「ねえ、君……んふふ、ええと、ええとね……」

これから自分が発する言葉と行動を想起し、心の内側から湧き出る喜びと愉しさを抑えきれずに一頻りほくそ笑んだ後、束は少女の眼前で、まるで聖句を述べるようにこう言った。

「君の名前、教えてくれるかな？」

はやて・いん・ばーちやるらんど

八神はやての自己評価は、8歳の女の子が自らに抱くものとしては不相应に低いものだった。

足が動かず車椅子を使わねばならないので、学校にもろくに行けず、通信教育で済ませてしまっている。一人暮らしのお陰で料理などは良く出来るようになったが、通いのヘルパーがいなければまともに着替えも出来ない。

とはいえ、それらは身体に障害を抱えている人間としてはある意味当然で仕方のないことだろう。

はやてが考える自分の悪い所とは、空想を好む夢見がちな性格だ。読書を好み毎日のように図書館へ通っているのも、元はといえばその性格のせいだった。

童話や小説、旅行記などを読むと胸が踊るのだ。

生まれた時から海鳴という、暮らし良い、しかし狭い空間から出て行けないはやてにとって、自分の知らない場所や面白い物語は数少ない娯楽であった。

だが、空想した所で、自分の身には何にも起きない。

所詮は夢なのだとはやての中にある歳に似合わず聡い一面が気づいていた。いや、気づくべきでないのに、気づいてしまっていた。

本を読み、広い世界を夢見たからといって、不自由な体と子供の身分で出来ることなどたかが知れている。それどころか、両足の麻痺がこのまま全身に広がってしまえば、この狭い場所でいつまで生きられるのかも分かったものではない。

そんな自分が夢を見た所で無駄なことだ。そう考えているからこそ、はやてはついついお伽話を手に取り、幻想の世界に逃げ場を求めてしまう自分を疎んでいた。

だが。

今はやては、どうやらその幻想に——夢と空想が支配する世界へ迷い込んでしまったようだった。

『どうかな、はーちゃん？ 今自分がどうなってるか。何をしてるか

はつきり分かるかい?』

「あ……その、えと……」

『周囲の情報をきちんと解釈出来てるかい? なにせこのバージョンは東さんもまだ自分自身でしか実験してないから、はーちゃんの頭でこの情報が処理しきれるかイマイチはつきりしないんだよねー』

解釈は出来ている。

だが、それを理解し事実として飲み込めるかどうかはまた別の話だ。

なにせ、はやては今。

海鳴市の上空100mに浮かんで、ネオン輝く夜景を真上から見下ろしているのだから。

「あ……わかる。私、空飛んで、風が強くて、町の光が綺麗で……でもなんでなん?」

ともあれ聞かれたのだから答えねばならず、どうにかたどどしく自分の現状をまとめた直後に、オウム返しの如き早さで返答が帰ってきた。

『なんでって何が? その通り君は空を飛んでいる。車椅子にもなんにも座らずただぶかぶかーつとね。それ以外の何かを感じているのかな?』

「いやだから、なんでこうなつとるんかってことなんやけど」

彼女は東に誘われるまま、市街地から離れた所にある古い神社まで連れて行かれた。

そしてその横にあるボロボロのあばら屋——東本人は世界最高の技術ラボと胸を張って呼んでいる——の入り口をくぐり、埃だらけの中に入っていたはずだ。

入り口前に掛けられていた金属片には確か、『舞姫』と刻まれていたか。

科学者に似合わぬネーミングの元が分かっってしまうはやては、自信たっぷりに部屋の中のガラクタを探しまわる彼女のセンスを大いに疑った。

とはいえ、強引に連れて行かれて今更大人しく去ることも出来ず。

言われるがままに何やらケーブルと電子部品が大量にくっついてい
るヘッドギアを嵌められて、その次の瞬間。

彼女は空を飛んでいた。

『そんなことはどうでもいいし関係ナツシング！ 今はただこの状況
を全身と全集中で楽しむがいいさ！』

と、東は言うが、ここまで落ち着いて考えれば、最初は混乱してい
たはやても何が起こったかを大体咀嚼し飲み込むことが出来る。

要するに彼女は、東の発明品であるヘッドギアによって仮想空間に
ダイブさせられているのだ。

「……ほー、なるほど、なあ」

そう納得してみれば一気に心が楽になる。まずは手で空中をかき、
それから体を捻ったりもして。最後に膝へ力をいれれば、か細い二本
の足が呆気無く動き始めた。

お、とはやては感心する。普段は緩い痺れだけしか感じない両足で
空を切り、その反動によって体の向きや姿勢を大きく変えるのは実に
楽しい。

宙に浮く自分の体にどんな力学が働いているのか、いや、どんな計
算式が適用されているのかは分からないが。0と1とで構成された
仮想世界の中ではやては自分の思うがままに体を動かし、空の上を飛
び回ることが出来た。

『どうかな、楽しい？ はーちゃん楽しい？』

「うん、楽しいなあ。は、ははっ」

面白がって手足共にバタバタと動かせば、あらゆる方向へ転がり落ち
るように高度が下がってしまう。そうして丁度高層ビルの屋上と同
じくらいの高さまで下がった時改めて下を見れば、なんと路上には車
が行きかい、夜も賑やかな街に大勢の人たちが歩き蠢いているのが見
えるのだ。

彼らは一体何なのだろう。コンピュータゲームのNPCみたいな
ものか。興味を掻き立てられて更に下ってみたが、そこには何の不自
然さも無かった。

人々はそれぞれに話し、笑い、触れ合っている。現実の世界と何ら

変わらないように見える街が、そこにあつた。

「はあー……」

はやては目を見張り、その緻密さと自然さに感嘆する。所詮はプログラムであると強く思つて覚えねば、あたかも現実の世界で空を飛んでいるようにすら思えてしまう。

別に科学者でも物知りでもない彼女だが、今自分が体験しているものが世間的な常識をとくに凌駕していることぐらいは理解できた。では、それをいとも簡単に用意してのける彼女は？

自らの名を篠ノ之束と名乗つた、青いドレスの子は、一体何者なのか。

『それだけじゃないよ。ほらっ』

その疑問を考える間もなく、突然、周囲の空間が揺らめいたと思うと次の瞬間にはまた、はやての体は夜の夜空へと投げ出されていた。

ただし今度は海鳴の上空ではなく、更に明るく眩い摩天楼の真つ只中だ。

「はああ……」

『はあい、こちらニューヨークはマンハッタンのどまんなか！ まつぶしいねー明るいねー、お目目痛めないようにね？』

ギラギラと輝く蛍光とネオンの光が、はやての腕に思わす目を塞がせた。それからおずおずとガードを解いて見てみれば、100万ドルの夜景とも例えられる華やかさがあつという間に心を虜にする。

これもまるで本物だ。真下の道を通り行く人々の数は海鳴のそれを遙かに凌ぐが、やはりその一人一人が本物らしく見える。

『さあ、まだまだ行くよー』

それからはもう千変万化の勢いで、様々な光景が映し出されては消えていく。

香港、マカオ、上海と移り、中欧の牧歌的な村々から霧の都ロンドン、エツフェル塔の天辺から眺めるパリ。吹雪吹き荒れるアルプス山脈から唐突に、海の底で沈む巨大な船を見せられる。更には銃火の飛び交う真つ只中で、まるで花火のような爆発光を見ながら暫く無言で佇んだりもした。

もう一度海鳴の上空へ戻り、ビルの屋上で座り込んだ時にはたった30分で世界を二周三周したような感じだった。余りめまぐるしかったので、頭がクラクラしてしまう。

「……っはあ、すごかった、なあ」

はやての表情は興奮による火照りと、長い間の望みが叶った喜びに満ち溢れていた。

外国どころか、海鳴以外の街にもろくに行けないまま大きくなって、いつかあつさり死んでしまおうと思っていたはやてにとつて、今見たどの街も、どんな風景も美しく、また鮮やかに見えたのである。

『ふふふ、どうだったかな？ 綺麗だったでしょ？』

「うん……でも、どうしてこんなこと、してくれるん？ 私のこと、可哀想とか思ったから？」

『違う違う！ この束さんが他人に同情も憐憫もする訳ないよ。でもね？』

「でも？」

『今はツインテールだからね。だから、人助けをするんだよ』

意味の分からない理屈だが、それがこの、理不尽な服装で理不尽な物を出してくる女の子には良く似合っていた。

『さて、はーちゃん。次は何を見たいのかな？』

本人の方でもそう思っているのか、さつきよりも更に上ずった跳ねるような声ではやてに聞いてくる。恐らくその顔は、始めて出会った時のように楽しそうで、まるで夢の中で生きているような笑顔なのだろう。

でも。

そうしてくれる束に悪いな、と思いながら、はやてはひっそりと目を瞑る。

『北極？ 南極？ お望みならばーちゃんが好きなお話の世界でもいいよ？ 童話でも神話でも何でもこいこい、束さんと、この、いい夢

見えますか Extend ver7.08』にお任せすれば』

「ええよ」

『ふえっ?』

「もう、ええよ。十分楽しめたから」

どことも知れない虚空から響く声は、せき止められたダムのように沈黙した。はやての心苦しきは増していくが、余り好意を受け入れすぎたくはない。

だって、多分このままずっとここにいと、戻れなくなりそうだから。

ウサミミの女の子が提供する幻想の中で一生を過ごしたくなってしまうのは、間違いなくはやての本心だった。だが、それではいけない。

それは、ただの夢だ。

「良うできとるけど、これはただの夢やから」

『ふうん。でもでも、東さんの仮想空間は現実そのものだよ? 東さんの天才的頭脳をちよつくら劣化コピーして、それで世界中の人間をエミュレートしてる世界なんだから。そんな世界で、君は幾らでも夢を叶えて、幾らでも幸せになれる。なのに、どうしてかな?』
言われてみると、自分の考えがますます不思議に思えてくる。

現実と遜色ないなら、それでいいじゃないか。
痛みと痺れと苦しみばかりが支配する現実に、一体何の価値がある。

誰とも仲良くなれず一人ぼっちで生きていく世界に、一体何の意味がある。

でも、それでも。

心の中の何かが固く拒むから、はやては迷い無く決断した。
「それでも、やっぱし夢やないの。だってこの中で私が空を飛べて、色んな所に行けても。東ちゃんの側には、車椅子に座ってる私が居る。それは否定できへんやろ?」

『……うん、そうだね』

帰ってきた言葉に、自分の理論を否定された憤りは無く。ただ何か、面白いものを見つけた時に出るような、高揚だけがあった。

「せやから、もうええの。私は私や。もしこの足がどうにもならんで

も、でも……やっぱり、それがホントの私やから」

「ふ……あは……そっかあ……あははは、あはははははー」

気づくと、はやての体を包んでいた浮遊感はすっかり消え失せて。足には痺れが戻り、背中には車椅子の背もたれがくっついていて、頭にヘッドギアがすっぽり被さっていた。

そして目の前には、背筋を仰げ反らせ、大きく口を開けて大笑いをしている束がいる。笑う度に揺れる長い髪はいつの間にか、結びが解かれ、ツイントールからロングヘアーに変わっていた。

「いやあ、予想以上の答えだったよはーちゃん！ やっぱり私の勘は間違ってたね！」

どうやらはやては、この娘に偉く評価されているようだった。ただし、かなりの上から目線で。

そしてそれが、壊れたラジオのように笑い続けるウサミ少女の本性であるらしい。

「へえ、それ、褒めてくれたん？」

「そうだよ？ 束さんが他人を褒めるなんて滅多に無いんだから、有難がつて嘆き喜び、私の前で跪くといいよ」

「いや、私足動かへんし、出来ひんけど」

だがそれは、はやてにとつて決して心地の悪いものではなかった。むしろ、病人だからと過剰に気づかわれるより余程心地が良い。

「まあ、それはとにかくとして！ ……はーちゃん？ もし私が今ここで、天才の束さんは君の足を治せる！ と言ったら、どうするかな？」

「……ふうん」

束の突拍子もない一言を、はやてはあっさり信用できた。何せ、あんなに現実そっくりの世界を作り出せるほど頭のいい女の子なのだから。

「どうやって治すん？ 何か必要な物があつたりするんかな？」

「お、鋭いねえ！ そう、束さんに何かを頼むのなら、それなりの代価が必要なのだ！ 例えば、そう……君が持っているそれ。鎖でぎつちり閉じられた、おつきい本とか」

束が指指したそれは、はやてが常に肌身離さず持っていた古い本。鎖で閉じられ開くことも出来ないが、物心つく前から傍にあつて。抱けば、孤独と不安が安らぐ不思議な本だった。

幼いはやてにとつて、唯一つの宝物と言える本。

それを差し出せと言われれば、流石に少し心が揺らいで、両手に持って力を入れたが。

「大丈夫だよ？　ただちよつと魔力の繋がりを緩めて、その隙に研究解析——何も知らないはーちゃんに分かりやすく言うなら、その鎖を解いて、読めるようにするだけだから」

「……ほんとに？　壊したりせえへん？」

「やだなあ！　こんなに貴重で珍重で素晴らしい本を壊したりはしないよ！　ただちよつとだけ、預けてくれればいいから……ね？」

現実で苦しんでいる麻痺が治り、自分の足が元通りになる。さっきのような夢じゃなくて、今度は自分の足で、何処にでも行けるようになる。

その甘美な誘いを断ち切ることは、どうしたつて出来なかった。

「……じゃあ、はい、これ」

「いえすっ」

ずしりと重く堅苦しい装丁の本を、両手で持って束に差し出す。それをぱしつ、と軽々受け取った束の瞳は、もはやはやてから外れて、本の表紙にある金色の十字架へと注がれていた。固く閉じられている本を開こうとしているのか、様々な部分を弄ったりしながら、自分を評価した時より更に楽しそうな顔で笑っている。

その身軽さと道化のようで大げさな喜びように半ば呆れながら、はやては今日がどんな日であるかを思い出して自分のやっていることまでおかしく思い、くすりと微笑んだ。

「ぐふふ待つてろ、今束さんの手練手管でとろとろに蕩けさせてあげるよおお……ん、どしたの？　なんだか嫌に楽しそうだけど」

「楽しそうなのはそつちやないの。私はただ……」

「ただ？」

「実はなあ、今日が私の誕生日なんよ」

「へえ、そうなんだ。で、それがどうしたの？」

おめでどうの一つも言わないそっけなさを見せる束に、はやては語った。

「私の誕生日なのに、なんで私がプレゼントしとるんやろうなあつて。それだけ」

その日の夜。

そんなに言うなら、と束が『大親友』づてに用意してくれた、翠屋という店のバースデーケーキを持ち帰ったはやては。

9つのろうそくを自分一人で吹き消し、ケーキの四分の一を食べてから冷蔵庫に保管し、ベッドに入った。

そして、次の日。

いつもよりも少しだけ楽しかった誕生日を心の中で反芻しながら、今日もはやては、一人きりの一日を始めるのだった。

人それぞれの暗中模索（I）

時空管理局本局は、次元の海の狭間に浮かぶ超大型のコロニー、つまり人工の構造物である。ミッドチルダを回る月以上に大きいそれは、かつてミッドチルダが所有していた防衛用の軍事基地を中核として徐々に拡張し、何百年もの歳月を掛けて今の巨大施設になったという。

次元航行艦の修繕と補給から新造や艀装もやつてのける大ドックや、次元世界最大のアナログデータベースである無限書庫も、幾重にも及ぶ拡張の最中に付け加えられた物だ。

そんな経緯を持つ本局の通路は入り組み、区画割りも雑多で秩序がない。

つまり、とことん迷いやすい。

生まれて初めて本局に来た辺境世界のお上りさんが、迷いに迷って途方に暮れているなんてのは良くあることだ。それどころか、普段陸で勤務している局員の間では、知り合いの本局勤めを捕まえられなければ迷子確定だ、なんて半分本気の冗談も飛び交っているという。

そう、それ程にこの巨大施設は迷いやすい。

だから、今自分が何処にいるか分からなくても、それは別に咎められるべきことではない。仕方がないと笑ってすましていい——はず、ないだろ。

と、クロノ・ハラオウンは自らの中の言い訳を切って捨てた。

彼は幼い頃、父親に連れられて何度も本局に出入りした。幼くなくなった時から、局員としてこの巨大コロニーを自分の家と思って過ごしてきた。

そんなクロノが今、何処とも知れぬ、見たことのない区画へ迷い込み、もう30分も歩き回っているのだ。なんたる無様だ、と齒軋りしたくなるのも当然だった。

周りに知られたら、エイミイに笑われるどころか、アースラクルー全員の話の種として丸三日は注目されてしまうだろう。無論、艦長である母親のリンデイにも。そんな事態を防ぐためには、そろそろここ

から抜け出して、早いとこ自分の執務室に戻らなくてはならない。
その為には、まずはどうやってこの場所に入ってしまったかを考える必要がある。

前日、フェイトの裁判の準備と、PT事件を含むアースラ航海記録の総まとめとで2時間しか眠っていなかったのがそもその始まりだ。

寝ぼけた頭で着替えを済ませ、最低限身だしなみを整えただけで自室を出たのもいけなかった。自分が並の人間よりは無理が効くと思っているクロノだが、それでも朝食を取らずには、寝惚けた意識を保てるはずがないことは分かる。

そしてそのまま、いつもの通勤路だと油断してエレベーターの階数を押し間違え、そのまま正しい行き方で間違った道を通った結果、未知の通路へ来てしまった。

さて、これからどうやって見知った通路へ戻ろうか。

来た道を遡るのが手っ取り早いのが、寝起きの記憶ほど信用ならない物はないし、更に迷って袋小路に至る可能性が大きい。

とはいえ、こんな場所ではんやりじつとしていたって状況は何も変わらない。クルーに笑われるのはさておくとして、二時間後の会議に遅れてしまう事だけはどうしても避けなければ。

ここは、とりあえず辿れる範囲で周りを確認しておくべきだろう。そう考えたクロノが、自動ドアをくぐって隣の通路に出ようとした時。意外な人物がその眼前に立ちはだかっていた。

「あ……」

「おお、君は」

色褪せた白髭を豊かに蓄えている、柔らかい威厳に満ち溢れている老人を、クロノは良く見知っていた。向こうもクロノに気づいたらしく、穏やかな笑みを浮かべて目線を合わせた。

「久しぶりだなクロノ。こんな所で会うとは思わなかった」

「こちらこそ、お久しぶりです。グレアム提督」

ギル・グレアム。時空管理局提督として長く活躍し、今では半ば現場を退いて顧問官という役職に身を落ち着けているこの老人は、クロ

ノの執務官研修を担当した、言わば恩師であった。

だからクロノは深く腰を折り曲げ最敬礼をする。グレアムはそれを笑って押し留めた。

「止してくれ。顧問官なんて名誉職でろくに働かず椅子に座っているだけの給料泥棒だよ、私は」

「いえ、ですが提督」

「提督か、その呼び方も固いな。昔みたいに『グレアムおじさん』と呼んでもいいんだぞ？」

「え……あー……」

からかい半分で言われた言葉に悩み考えこむクロノを見れば、グレアムは口を開いて哄笑した。

「はっはっは。やれやれ、そういう真面目な所は親……といっても、母親譲りだな。さあ、こんな所で会ったのも何かの縁だ。ちよつとあつちで座って、話でもしようじゃないか」

そうして、少年の執務官と老年の提督、まるで祖父と孫のように歳のかげ離れた二人は、通路の脇にある鉄板のような質素なベンチに座って語り始めた。

最初はグレアムが一方的に問いかけていたのだが、次第にクロノも口を開き始め、会話のキャッチボールが盛り上がる。艦隊指揮官を歴任した老人は、クロノからしてみれば雲の上の存在なのだが。実際に会って近くで話すとやはり、幼い頃に武勇伝を聞かせてもらった伯父さんとしての印象が勝るようだった。

「それにしても、前の航海は波瀾万丈だったみたいじゃないか。聞いたよ、ジュエルシードとプレシア・テスタロッサの事件のことを」「お聞き及びでしたか……僕らとしては何も出来ず、情けない思いをしました」

「いや、気に病むことはない。まさか管理局の艦艇にコンピュータウイルスを忍び込ませるとは、そしてそれに成功するとは、誰も思いつかなかったことだ」

グレアムが腕を組んで言うことは、事件の報告を聞いた管理局員全てが共有する感想だった。

アースラ含む次元航行船のコンピュータは、現代の次元世界が共有する技術の粋を集めて作られたものだ。システムは勿論幾重にも防護されており、ウイルスが忍び込む隙など一分もない。

それどころか、コンピュータウイルスそのものが、魔導工学全盛の管理世界では既に古臭く時代遅れで、カビの生えたような手法なのだ。どんなに高度で巧妙なウイルスも、管理局のPCどころか、民間で使われているファイアーウォールにだって通用しないはずだった。

それが、容易く突破された。しかもそのせいで、下手をすれば幾つもの次元世界が崩壊しかねない状況が生まれてしまったのだ。

「技術部長の慌てようと言ったらなかったよ。一先ず急場しのぎでセキュリティソフトを改良するそうだが、さて、全艦艇に行き渡るのは何時になるやら」

元艦隊指揮官らしい悩みに溜息をついたグレアムだが、その直後にこうも口にした。

「とはいえ、同じような手を他のテロリストや、犯罪組織が取ってくるとも思えんが」

「どうしてですか？」

「彼らにコンピュータウイルスの技術や知識があるはずがないからさ。あんな方法を取れるのは、未だ科学技術が隆盛している世界に生きる——規格外の『天才』ぐらいだろう」

『天才』が誰を表しているのか、分からないクロノではなかったが、それがまさかこの老人の口から出て来るとは思わず、一瞬、返答が遅れた。

「ご存知だったんですか……篠ノ之束を」

「ああ、良く知っているとまではいかないが、何回か名前を聞いたことはあるよ。イギリスでね」

「なるほど」

最後に付け加えられた単語で、クロノは大体の事情を察することが出来た。

「時空管理局歴戦の勇士」と称されるギル・グレアムの出身世界は、ミッドチルダでないどころか、管理世界ですらない。彼は高町なのは

と同じ第九十七管理外世界、地球のイギリスで生まれ育った地球人だった。

幼い頃に負傷した管理局員を保護したことがきっかけで魔法に出会った彼は、その後管理局に入局し、優れた魔法の才能で提督にまで上り詰めたのだ。

そして、彼はもう一つ地球でも、イギリスの名士としての立場を持っていた。

「もつとも、一般社会ではただ単に『天才少女』としてローカルレベルで持て囃されているだけさ。しかしある分野……例えば電子科学、ロボット工学、そして宇宙開発の世界では、その名前はそれなりに有名なんだよ」

「彼女としては、意図的に自分の才能を隠しているようですが。それでも限界があると」

「そうだね。わかり易い例としてはつい一ヶ月ほど前……世界中の研究所へ同時に部品の発注があった。その一つ一つが現代技術の最先端で、それもたった一つの名義から」

一ヶ月前。その時系列は、PT事件の最中にぴたりと符合する。事件に関わる束が、世界中から技術をかき集めて作らねばならなかったものといえ、ただ一つ。

クロノは若干驚きながら、グレアムに問い正した。

「では、提督は……事件終盤に篠ノ之束が投入したという『白式』^{シロシキ}の存在を信じていらっしやるんですか？」

「ああ、そうだ。更に言うと、あの場に居合わせた高町なのはと織斑千冬の証言、そして君の前で篠ノ之束が発言した内容も、すべて本当のことだと思っている」

「それは……」

実際彼女らの証言を聞き、その人となりやグレーム以上に知っているクロノだが、その証言の真偽に対しては、未だ完全な確信を得ていなかった。

傀儡兵の大群をほぼ全て撃破しつつあった一機で突破し、Sランク級の魔導攻撃をあっさりと防ぎきり。更には暴走したジュエルシー

ドのエネルギーを単一仕様能力で数十秒の間完全に相殺し、封印砲撃魔法の通じる隙を与えるパワードスーツ。

もし存在するとなれば、どう甘く見積もってもA級ロストロギア並の代物だ。

その理由は、白式が持つパワーだけではない。ミッドの技術力を基準にしても、「超古代の遺失技術ロストテクノロジーによって作られた」とでも考えなければ理屈に合わないのだ。

つまるところ、白式のスペックが三人の証言通りだとしたら。現代を生きる篠ノ之束は、ロストロギアレベルの発明品を作り出せる、ということになってしまう。

ありえない、と否定したくなるのも当然だった。

「うむ。確かに信じ難いことだろうな。私も報告を聞いた時には耳目を疑ったよ。だがな」

グレアムもそんなクロノの思いを理解しているらしく、彼の言い分は最もだと言うように首を縦に振った。

だが、同時に目線を合わせ、教訓を述べるかのような真摯さでこう語る。

「どんな世界にも、天才、というべき人物は確かに居る。とはいえ、一般社会でやれ天才だ、英雄だと持て囃されている人間の殆どはそうでない。近似値を持つ秀才とでも言うべきだ」

「では、どんな人間を天才と呼ぶのでしょうか」

「そうだな。まず、幾千幾万幾億の人たちの中でも、ほんの一握りしか存在しない。彼らは一つの物事のみを考え、行い……歴史を動かす。それが良いにしろ悪いにしろ、彼らの行動によって時代は動き、世界は変わり続けてきた」

その言い方は、クロノの個人的な信義に引っかかる物だった。彼は少々批判的な目でグレアムを見つめ、話を遮った。

「世界は常に天才の手によって作られてきただけだ……と、そう仰るんですか？」

「……いや、違う。君が思っている通り、世界を形作るのはあくまで無事の民衆だ。天才のみが思うままに、好きなようにしている訳ではな

い」

「では、どういうんですか」

「そうだな……彼らは言わば『火付け石』なんだ。彼らが生み出したものの、作り出した文化、編み出した思想。そういったものが世界に広まり、歴史を形作る」

「火付け石……」

「そうだな、わかり易い例を出すとするなら。管理局を作り出した『最初の三人』。旧暦の混沌と破壊に満ちた世界から、管理局システムを考案し、その構築に尽力した彼らなどは……天才、と呼ぶべきではないかな」

グレアムの語る言葉には、彼自身が肌身で経験してきた重みがあるようだった。

「篠ノ之束が、次元世界の中で同じくらい巨大な存在になり得ると？」

「流石にそこまでは保証しきれない。だが、彼女はまだ9歳の若さだ。私が死んで、君が私ぐらいの歳になる時、どうなっているかは中々興味深いと思わないかね？」

「……」

「もしかするともう既に、白式が『火付け石』になり得るものかもしれないな」

「危険ですね、それは」

グレアムは面白そうに笑ったが、クロノの顔は強張った。

Sランク魔導師に対抗できるだけのパワースーツ。もし、それが量産されれば。性能は落ちるだろうが、それだけでAランク以上の魔導師と、対等に戦えるのだと仮定すればどうなる。

ISを着たテロリストたちは、管理局にとって大きな脅威にもなってしまうだろうと、クロノは想像した。

そういう、自らの専門分野でしか想像できないのが、クロノの若さだった。

「まあ、そう悪い方にだけ考えるな。火付け石によって付けられた炎がどう広がるかなど、その時の風次第だ。今考えた所でどうしようもあるまい」

「……そう、ですね」

「今はただ、注意深く見つめることだけが肝心だ。何時火が起きても対応できるようにな」

クロノの返答に満足したかのような微笑みを浮かべたグレアムは、金属ベンチから立ち上がりつつクロノの出発を促した。

「さあ、こんな所で迷子になっている暇はないだろう？　ここから真っ直ぐ行って突き当りを左。それから右に二回曲がれば、艦船ドックまで直通のエレベーターがあるぞ」

「あ……」

迷子だと、一言も口に出していないのに気づかれた。恥じ入りながら、やはり自分はこの老人にまだ勝てないと思うと少しだけ悔しく、クロノは顔を俯けた。

「あいつも……クライドもいつか、同じ所で迷っていたよ。やはり親子なのかな」

「だとしたら、余り遺伝したい特徴ではありませんよ」
「だろうな」

クロノは腰を上げて立ち、グレアムから教えられた方向へ真っ直ぐ歩き去った。

これくらいの間時間なら、まだエイミイには何も気づかれないはずだ。後はいつもの通り何食わぬ顔で挨拶を交わせばいい。グレアムの使い魔であるリーゼ姉妹には後で散々弄くられるだろうが、それはまあ、仕方がないだろう。

——ところで。ここは一体、どんな区画だったのか？

一瞬そう考えたクロノだが、本局はとにかく広大だ。

だから、今はもう使われていない、沢山の廃棄区画のうちの一つなのだろうと考え、その問いを頭のポケットから放り出して捨てた。

数分後。クロノとは逆方向に歩いて行ったグレアムは、何重にもロックのかかった分厚い扉を開き。とある場所で極秘の活動をしている自らの使い魔、リーゼロットとリーゼアリアに通信魔法を繋いでいた。

『あー、父様つてば遅い！　アリアと一緒にずっと待つてたんだよ!?!』
「すまないなロットテ。ここに来る途中、偶然クロノに会って少し話をしていた」

猫の使い魔であることを示す耳を揺らしながら、愉快的調子で話すのが妹のリーゼロットテ。その隣で度し難い、という顔をしながら通信魔法を維持し続けているのがリーゼアリアである。

彼らは長年グレアムに付き従い、苦楽を共にしている、使い魔以上の存在だ。だからグレアムは彼女らを娘のように扱い、姉妹もまた、グレアムを父親のように慕っていた。

『クロスケに？　また珍しいこともあるもんだ！　で、どうだった？　カノジョの一つも出来てたり？』

『あのクソ真面目に限ってそれはないでしょ？　ほら、馬鹿話してないでとっとと本題入るわよ』

『はいはい、エヘン、それじゃ父様——報告します』

ロットテの目の色が変わった。その瞬間、二人の間に流れる空気も、仲の良い父娘から忠実な部下と上司のそれに変わる。

これから話されるのは、それだけ重要な事柄なのだ。

グレアムは左手で髭を触りながら、同じくらいに真剣な目をしてロットテの言葉を待った。

『ロストロギア “闇の書” は未だ変わらず、篠ノ之束のラボに存在します』

人それぞれの暗中模索（Ⅱ）

『闇の書』とは。少なくとも数百年前から存在し、持ち主と世界に破滅を呼ぶとされる禁断の魔導書である。

その言い伝えは決してお伽話などではない。管理局が成立し新暦となった現在、闇の書の活動と暴走によっていくつかの次元世界が滅ぼされており、結果としてロストロギア、それも特別に危険とされる『第一級』に指定されていた。

そして、そうまで危険視されながらも、管理局は未だに闇の書を封印できていなかった。

理由としては勿論、魔導書自体の強い力もあるが、無限再生機能と転生機能の存在がある。

いくら破壊されても幾らでも再生し、復活する。そして主が死のうと他の世界にワープし、新たな主を探し求める。

この二つの厄介極まりない機能のせいで、封印するどころか存在する場所を特定することすらままならないというのが、闇の書対策の現状——で、あるはずなのだが。

ギル・グレアムはそれを掴んでいた。

彼は11年前に引き起こされた何回目かの『闇の書事件』によって、自らの部下であり、弟子であり、または息子とも言うべき若い男を死なせてしまった。彼の名はクライド・ハラオウン。クロノ・ハラオウンの父親であり、リンデイ・ハラオウンの配偶者である。

クライドの葬式が行われた時。リンデイの悲しみに溢れた表情と、その手をつかむように引っ張るクロノの決然として強張った表情は、既に老境へ至っていた勇士の心に深く刻み込まれた。

そして、グレアムは独自に闇の書の転生先を探し始めた。幾多もの悲劇を引き起こし、今なお彷徨い続けている呪われた本を、永久に封印するために。

気が遠くなるほど綿密かつ膨大な調査と少しの幸運によって、その所在は呆気無く明らかになった。

幸運とは、主として選ばれた少女が、グレアムの出身世界である地

球に存在したことだ。

その少女——八神はやては、両親を幼いころに亡くしている。そこでグレアムは彼女の財産管理や生活の保護を遠くイギリスから引受け、「グレアムおじさん」として彼女の面倒を見ると同時に、リーゼ姉妹をその監視に当てた。

そして闇の書が覚醒し、その真の力を発揮して世界を滅ぼす直前に、強力な凍結魔法で永久に封印する。それが、グレアムの建てた計画だった。

しかし。自体は老人の予想をあつさりとお回り、予定外の方向に進んでいく。

「そうか……やはり、八神はやての元には戻っていないか」

篠ノ之束という少女が、八神はやてと接触し、闇の書に興味を抱いたのが、全ての始まりだった。闇の書の異常性に気づいたのは、天才ゆえの鋭い嗅覚からだろうか。とにかく彼女は闇の書を八神はやてから譲り受け、今もなおラボの中に安置しているのだ。

グレアムとしては当然、歓迎すべきでない状況である。

『ええ。まだ未覚醒とはいえ、何らかの原因で引き離された時、主の元に戻るくらいの機能は備わっているはずなのですが』

「それを見逃す彼女ではないだろう。恐らく何らかの手段で、闇の書と八神はやての結びつきを解いた、もしくは緩めたに違いない」

『嘘っ！ そんなことが出来るんだったら、私達はとつくに！』

『闇の書を隔離し、封印できているはずですが、それを……』

闇の書とその主の魔力の繋がりを切れさえすれば、今行われてるまだるっこしい計画など要らない。人命を危険に晒すこと無く、凶悪なロストロギアを抑えられる。

リーゼ姉妹が、自分たちが何十年かかっても出来なかったことを管理外世界の少女があつさり成し遂げたという推測に反論するのも当然だった。

「だが、そうとしか考えられん」

『……』

しかし、努めて冷静に事実を受け入れようとするグレアムの一言

は、二人を押し黙らせた。

彼も束の成し遂げたことには驚いていたが、今はただ、変化した状況に対応する善後策を練らなければならない。

「とにかく今は、闇の書の現状を確認することが重要だが……どうだ」
グレアムの問に、二人は力無く首を振る。それだけで彼は理解した。

「駄目か。ラボへの潜入は」

『うん、てんでダメダメ。見た目はボロ屋敷なのに、並の基地より警戒が激しくて』

『監視システムが思った以上に嚴重なんです。オプティックハイドを使ったんですが、それでもセンサーに引っかかってしまいました』
『とつさに猫になってなかったらエネルギー弾で蜂の巣にされてたよ！』

身体の上にスクリーンを展開し、不可視かつステルス状態にする幻術魔法が通用しない。つまり、二匹の今の装備では、内部への潜入はほぼ不可能だということだ。

とはいえおおっぴらに潜入用の装備を調達する訳にはいかない。計画はあくまで隠匿されるべきであり、いくらグレアムが管理局の高官とはいえ、何の理由もなしに装備を要求するほどの権限は持っていない。

『申し訳ありません、父上』

「いや。お前たち二人で駄目なら、仮に特殊部隊を送り込んでも可能だったろう」

グレアムの言った慰めは、決して過小評価ではない。リーゼもロツテも、若き日のグレアムとともに様々な修羅場をくぐり抜けた豊富な経験の持ち主だ。時にはそれを買われて、未熟な武装局員の教練を任されることもあるのだから、一魔導師の使い魔としては破格の実力であろう。

つまり、それを全く寄せ付けない篠ノ之ラボの防衛機構は、真に驚かれるべきなのだ。

「ふむ……」

顎鬚に手を当てながら、グレアムは黙考する。

『白式』の存在や、幻術魔法を受け付けない防衛機構を持つ研究ラボ。それをたった一人で、9歳という若さで築き上げた篠ノ之束という女の子は、間違いなく『天才』だ。生半可な紛い物ではなく、真に天才と言える。

そんな彼女が闇の書の存在に気づき、その解析を始めたとして。自分と、そして二匹の使い魔が果たしてそれを止められるだろうか。

無理だ、というのが、現状での結論だった。

下手に彼女と敵対すれば、その友人である魔導師の高町なのは、『白式』の装着者であるという織斑千冬は勿論のこと。束の助手であり、管理局からの監視者であるユーノ・スクライアも敵対するだろう。なにせ、こちらはあくまで管理局としてではなく、独自の目的で行動するのだから。

そうなった時、リーゼ姉妹の二人きりでは止められまい。自分が混ざるにしても、たった一人の老骨はろくな戦力にならないだろう。

密かに奪還することは不可能。かと言って、武力で強引に奪い取るのは至難を極める。

ならば、取る道は一つだけだ。

「アリア、ロツテ。よく聞いてくれ」

『はい』

『父様……っ?』

髭を揉む手を膝に起き、少し前のめりになってモニタへ顔を近づけるグレアム。その仕草から彼の意図を察した二人は息を飲み、顔を強ばらせた。

「この状況、二人はどう考える?」

『どうって……正直、かなり不味いんじゃない?』

『闇の書が私達の目の届く場所に無い、そしてあのような危険人物にいいようにされているという時点で……早急に、対処すべきだと思います』

「なるほど、確かにそうだ」

それぞれ言葉は違うが、現状を危惧し、改善せねばならないと言っ

ている。だが、グレアムにはまた違った意見があった。

「しかし私はこうも思う。この状況は所謂、一種の奇貨ではないかと『奇貨?』」

「彼女は——篠ノ之束は、私達誰もが実現し得なかったことを次々とやってのけている。もしかすると——私達がかつて無謀だと切り捨てたことにも、成功し得るのかもしれない」

グレアムの慎重かつ言葉を選んだ言い方は、ともすると迂遠にも聞こえかねない。気の短いロッテはそれに耐え切れなかったのか、声を荒らげた。

『まだるっこしい言い方しないでよ、父上!』

『よしなさいロッテ!』

苛立っている妹を抑えるアリアの気を張り詰めているのか、声も表情も若干ナーバスになっている。主の面倒な言い方だけではなく、切羽詰まった状況がそうさせているのだろう。

だが、グレアムはそこで——“逆に”考えた。

「では、端的に言おう。私はこれからいくつか準備をした後、篠ノ之束と『交渉』をする。彼女に闇の書を解析させ、最終的には完全に解体して貰うために」

どうにも、長年使い魔と主をやっていると精神のリンクも錆びつくらしい。

グレアムがそう感慨を抱いてしまうくらい、姉妹の表情は驚愕と戸惑いに凍りついていた。

『なつ、と、父様! 何をバカな』

「冗談ではないよ。私は本気だ」

それでも、グレアムの頑なで、頑固な態度を見せつけられればそれを理解したのか、一旦は押し黙り。しかしやはり納得が行かずに、それぞれの論調で反駁し始めた。

『相手は数百年物のロストログアだよ! 下手に触らせなんかしたら、どんな惨事が起こるか分からない! それを、いくら頭がいいからって、管理外世界のガキに預けるなんて正気じゃないよ……!』

『それに、万一彼女が闇の書の構造を解き明かせたとして。それを好

き勝手利用しないなんて保証は何処にもありません！ ……もしかすると、プレシア・テスタロッサがいいように利用された風に、私達まで利用しようとするかもしれない」

二人の意見はそれぞれに筋が通っている。闇の書の闇はそれこそ数百年に渡り様々な悪意で強化されており、生半可ではない。

また、篠ノ之束の善意にも期待はできないだろう。二人の少女と一人の少年が報告し、束が自供した事件の経緯が全て正しければ、束はプレシア・テスタロッサという大魔導師をまんまと出し抜き利用して、最後は暴走させ、ジュエルシードの光の中に消し去ったのだから。

「その通りだろう。闇の書は危険で、彼女は信頼出来ない。だが」
グレアムは首を横に振り、尚も持論を曲げずこう告げた。

「もしかすると……誰も犠牲にせず、この事件と悲劇の連鎖を終わらせられるかもしれないんだ」

『……！』

二匹は、はっと息を飲む。

グレアムの言う『犠牲』とはただ一人。今代の闇の書の主選ばれた、八神はやてという少女のことだ。彼の建てた計画では、その最終段階で、どうしても彼女と共に闇の書を封印するしか無い。彼女を、スケープゴート犠牲の羊にするしか無い。

それは最小限の犠牲というべきものだろう。彼女には身寄りがないし、親しい隣人も存在しない。悲しむ人間は殆ど居らず。彼女以外の誰もが、危険のない平和な日常を送ることが出来る。

だが、それでも犠牲はあくまで、犠牲ではない。一人の少女の人生を台無しにし、氷の中に閉じ込めねば、更なる悲劇を終わらせることは出来ないのだ。

しかし。

篠ノ之束という天才は、闇の書とはやての結びつきを無視できた。闇の書と共に彼女が犠牲になる可能性は、極めて少なくなった。

その事実が、グレアムに一つの光明と希望を見出させたのだ。

『父様……』

「無謀だろう。ひよっとしたら、気が狂っているのかもしれない。だ

がそれでも、私は賭けてみたいんだ。人知れず多くの奇跡を生み出してきた、篠ノ之束という小さな女の子……いや、一人の天才に」

そう言われると、アリアもロツテも、何も言い返せなかった。

一人の少女を犠牲にすることに、一番思い悩み、苦しみ、決断した後も出来るだけの幸福を贈ってあげようと、少女の家を整え、多額の仕送りをして不自由を出来るだけ無くしてあげているのが誰か、知っていたからだ。

『……そこまで仰るのなら、私からはもう何も言いません。どうぞ、父上のお好きな様に』

「すまん。年寄りの我儘を、聞いてくれるか」

『何いってんの。年寄りみんな我儘なもんだよ。だからあたしたち若い乙女がが苦勞するんだ』

『……どうでもいいどロツテ、あんた自分が若いつて本気で』

『うっさい！ 老猫だけど心は乙女だ！』

「……ありがとう」

アリアの諦めたような笑顔と、ロツテの呆れたような嫌味は、グレアムの強い意志を受け入れた証拠だった。彼は思わず、顔を綻ばせる。

昔からそうだった。この二匹の、個性が強くて跳ねっ返りだが、だ誰よりも忠実な二匹の使い魔は、グレアムが言う無茶を何度もやり通してきたくれたのだ。

『では、そろそろ通信を終わりにしましょう。余り長くここを使っていては、誰かに感付かれるかもしれません』

「ああ、そうだな。もうこんな時間だ。私も、椅子を磨くだけの仕事に戻らねばな」

グレアムが今いる場所は、既に老朽化し、廃棄された区画の一つだった。だが、彼と彼の使い魔にとっては、とても思い出深い場所である。

30年前、ここは執務官室として使われていた。寝ぼけていたクロノは、まだ残っていた執務官室への案内を見間違えて、ここに辿り着いてしまったのだ。

「では二人共、よろしく頼むぞ」

『りょーかい!』

『とりあえず、彼女との接触方法を模索しておきます』

通信が切られ、埃を被った部屋に暗闇と静けさが戻る。

グレアムは椅子から立ち上がり、自分のいるべき場所へと歩き出した。

人それぞれの暗中模索（Ⅲ）

『XL⁴⁰, XL⁴¹, XL⁴²……』

早朝の公園に、無機質な電子音と空き缶を殴る乾いた音が聞こえる。音だけを聞いた者は何をしているのかで見当が付かないだろう。だが、見たら見たで、ますます不可思議な光景が広がっていた。目をつむって立ち尽くしている茶髪でツインテールの少女の前で、ピンク色の光球が左右に往復しながら空き缶を叩いて宙に飛ばし続けている。

それが魔法によるもので、誘導弾の制御と持続の練習であるという知識が無ければ、見るものは目を白黒して立ち止まってしまっただろう。

『LXXIII³, LXXIV⁴, LXXV⁵……』

とは言え、それだけが奇妙という訳ではなかった。むしろその奇妙を押し隠してしまうほどに奇妙で、しかも張り詰めた戦場のような雰囲気を持つ光景が、すぐ側にある。

一人は、白色のジャージに身を包み、小さな身体に似合わぬ無骨な木刀を大上段に振りかざす少女、織斑千冬。

そしてもう一人は、突き出した右手で何やら印を構えつつ、緊張した面持ちで剣を持った少女の眼前に立つ、金髪の少年、ユーノ・スクライア。

二人の間に流れる空気は、正に一触即発。触れたら弾ける地雷のように危険で、間にいたら忽ち挟まれ引き裂かれてしまいそうだ。

『XCIV⁴, XCV⁵……』

木のベンチの上でカウントを続けていた、紅い宝石の音声と表示が100に近づく。その度に緊迫はは高まり、次第に公園の空気そのものが熱を発しているようにも見えてくる。

『XCVIII⁸, XCIX⁹……』

「ラスト、ひやくっー！」

そんなことにはまるで構いなく、つむった瞼に力を入れながら、必死で誘導弾を操作する少女——なのはが、目を開き、胸の中に溜め

込んでいた息を吐き出しながら、最後の一回を全力で叩き込んだ、その刹那。

「だああああああっ!!」

「はああああああっ!!」

静けさを切り裂く叫びとともに、ユーノは魔法陣を展開、構えた右手に全魔力を集めて高密度の結界と化し。千冬は足をバネのように使い、飛び上がった。

そして。

「チエストオオオオ!!」

雄叫びと同時に振るわれる木刀。上空から、重力と渾身の贅力によって放たれる一刀両断は、しかし緑の結界にぶつかり阻まれるが。火花が散り、心地悪い接触音がぎりぎり響く中、本来高度な魔力砲すら防ぎきる結界は少しずつ、だが確実に歪み始めていた。

しかしユーノが手の印を変え、更に魔力を流し込めば瞬時に直される。

既に展開した術式を書き換えて修復しながら、ぶつかっている尋常でない圧力に必死で抵抗しているのだ。

もう地に足を付け、後は両腕の力で木刀を振り下ろす千冬。それに押されて両足をじりじりと後ろに下がらせながら、必死で立ち続け、防ぎ続けるユーノ。

いつまでも続くように見える程拮抗した二人だが、それでもこれは互いの技をぶつける勝負なのだから、一つの決着が否応なく訪れる。

「……うわっ!!」

襲いかかる圧力に耐え切れなかったユーノが吹き飛ばされ、後方で危なげに着地する。

しかしその結界は——激しく歪みながら、尚も健在だった。

その光景を見た千冬は木刀を降ろし、自らの非力さを悔み半分、今日も貫けなかった少年の硬さに感心半分でこう呟いた。

「はあ、今日も私の負けか」

「いやどいがつ!!」

数少ない自信の一つであった結界魔法を散々に打ちのめされ、挙句

無様に宙を舞ってしまったユーノにとって、その言葉は謙遜を通り越して、もはや皮肉に等しい物だった。

「私はお前の結界を壊すのが目標だ。それを果たせなかったのだから、お前の勝ちで、私の負けに決まっている」

「だ、だつてさ。もしあの後戦闘を続けていたらだよ？　僕は結界を維持できてなかっただろうし、体勢も崩れてたし……」

「関係あるか。一太刀で守りを破るための特訓なんだぞ」
「ええ……」

素面でそう言い切る千冬に、ユーノは頭を抱えなくなる。

そもそも結界魔法を物理的な衝撃のみで打ち砕くこと自体が至難の業であるのだが、その他にも、今のユーノが展開していた結界は、防御用のそれではなく——周囲の空間と結界内を断絶する『封時結界』と、ほぼ同等のものだった。

つまり千冬は、並の魔導師ではチームを組まないと突破できないものを、たった一撃の物理衝撃で歪ませて見せたのだ。しかもユーノの見立てでは、後二三撃同じものを食らってしまえば、割れるとは行かないまでも穴が開いていただろう。

つまり何が言いたいかというと、そんな人外じみた一撃を、結界越しとは言え生身で食らうこっちの身にもなってみろ、という愚痴だった。

「あ、二人共おつかれー」

「なのは！　お疲れ様」

「お疲れ、なのは」

そんな間になのはが割り込み、にこやかに話しかけてきた。釣られて二人共なのはの方に意識を向け、さっきのちよつとした言い合いなど投げ捨ててしまう辺りが、彼らの関係を象徴していると言えるかもしれない。

「どうだったんだ、魔力操作の訓練は」

「んー、最後辺り、集中出来なくて危なかったかな。そっちは？」

「まだまだ、と言った所だ。お互い研鑽が必要だな」

順調に砲撃魔導師として完成しているのはとにかくと

して、千冬はもう剣士どころか人間の限界を越えようとしているんじゃないか、というのが、この会話を聞くユーノの正直な思いであったが。

「そうかなあ。千冬ちゃんに近づかれたら、私なんてこてんぱんにきれちゃいそうなんだけど」

「そうでもないさ。そもそも近づけるかどうか分からん。それに、フェイトのような近接戦重視の魔導師には、近づいても切り払われるし……」

次に語られた一言のお陰で、千冬の真意をはつきりと理解できた。

「仮に、プレシアのような強力な魔導師が現れたとして……お前の隣には、立てない」

そうだった。この前の事件の最後に千冬が纏った真白の装甲——『白式』は、コアの損傷と駆動系の摩耗により、現在は修理とオーバーホールの真つ最中なのだ。

だからもし、この海鳴にジュエルシードのようなロストログアや、敵性の魔導師が現れた場合。いくら強いとはいえただの人であり、空も飛べない千冬は、足手まといになる可能性がある。

それを防ぐために、結界を割る、だなんて対魔法に特化した訓練をしていたのか。

「にやはは、ジュエルシードがもう一回落ちてくるなんてあり得ないし、いざってなったら管理局の人たち、クロノくんにリンデイさんもいるんだよ？ あんまり頑張りすぎなくても……」

なのははそんなネガティブな思考を否定して、元気づけるように笑うが、千冬は首を横に振って、

「いいや。前にも言ったろう。お前を守るのが私の役目だ。それを果たそうとしているだけさ」

などと真正面からなのはに向き合い、堂々と告げた。

その誇らしげな表情、仁王立つ佇まい。どれも下手な男より男らしい。もしかすると、部族の中で女の子みたいだと散々言われた経験のある自分よりよっぽど男っぽいんじゃないか。

「千冬ちゃん……」

なのはにとつては余程感動的な宣言だったのか、胸に重ねた両手を当てて、目をキラキラさせながら感極まっている。

そんな光景を傍目で見ながら、ユーノは思う。なのはと千冬は、本当に仲が良くお似合いだ。互いに互いを守ろうとして、自らを高め合っている。そういう関係は、友情の形としては最も純粋で尊ぶべきものだと言えるかもしれない。

なのはと束の奇妙で、しかし何より固い友情や、千冬と束の、喧嘩ばかりで、しかし互いを認め合っている友情も等しく大切だが。

しかしやはり、彼女らの関係を表側から見れば、この守り守られあう友情こそが一番目立って、輝いて見える。

だからユーノは、その輝きに何かを添えてあげたくなった。

「……ねえ、千冬」

「なんだ？」

なのはとしつかり手を握りながら、丘の上の公園から出ようとする千冬にユーノは言った。

『白式』なんだけどさ……僕が直してあげようか」

「な!？」

「ええっ!？」

直後、仲良い二人は共に振り返り、ユーノの方をまじまじと見つめてくる。別に思いつきで言ったわけではないのに、こうまで驚かれるのは不本意なのだが、取りあえずはもう少し詳しく話さねばならない。

「いやさ、教授が最近、また新しいおも……興味の対象を、見つけたってことは知ってるよね？」

「うん、束ちゃんはいつも楽しそうだけど、ここ最近はもっと楽しそうだったし」

「相変わらず悪巧みに忙しいようだが、その辺りはどうなんだ監視役」
「うーん、別に何か、騒ぎを起こそうってつもりはないみたいだけだよ」

じつと睨んだ千冬をさらっと交わしながら、ユーノは続ける。

「だから、『白式』は今殆どノータッチ。だから、僕が直してみようか

なっ」

瞬間、その場の時間が止まったように二人は立ち止まった。

一日に二度、なのはと千冬の驚き顔を見れたのは案外貴重な経験かも知れなかった。

「な、そ、それは大丈夫なのか!? あれはあいつの——あいつが、『最高傑作』などとほざいた、そんなシロモノなんだぞ!」

「……束ちゃんのものに、勝手に触ったら怒られるんじゃないかな?」

篠ノ之束の発明品に無許可で触り、挙句勝手にそれを弄る。

なのはにすら危惧される程危険な行為だったが、しかしユーノはまるで怖がらず、むしろ気楽な顔でこう反論した。

「大丈夫。教授は今、一つのことにかかりきりだから。そうなるとき、ほら」

「あつ、それなら大丈夫かも」

「なに? そうなのか? うーむ……」

素早く気づく気づくなのはに対し、千冬は未だ見当が付かない疑問顔。

だから、ユーノは最後まで言ってあげることにした。

「教授ってさ、一回もう作っちゃったものには、あんまり目を向けないよねってこと」

篠ノ之束は天才であり、今まで様々な発明品を作り出してきた。研究ラボには地上地下問わず幾多ものメカが山積みになされており、その全てに束の心血が注がれている一品物の逸品だ。

しかし、束はそれをラボのそこかしこに、無造作に積み重ねていた。まるで、幼い子供が興味を失ったおもちゃを投げ捨てていくように。

助手仕事のひとつとして、それらを必死に整理し続けていたユーノは、当然気づく。篠ノ之束という女の子は、一回作った発明品に対する執着が驚くほど薄い。

無論、全く興味を失うわけではない。前の事件では昔に作った発明品をユーノが作った目録頼りに引っ張り出しもした。もし目録が無かったら面倒だしもう一度最初から作ってたという辺りが恐るべき天才の片鱗だろうが、とにかく彼女も、昔や過去に頼ったり、見直し

たりはしている。

けれど、束が何かにひたすら、興味を向けているその隣で。過去の発明品を勝手に使ったり、弄ったりしたとして。果たしてそれに目を向けるだけの労力を費やすだろうか。

「……なるほどな」

と、先ほどの一言でそこまで考えが巡ったのか、千冬も漸く納得して頷いた。

「まあさすがに、壊しちやったりしたら怒られるだろうけど……簡単な修理くらいならと思つて」

「でも、大丈夫なの？ 束ちゃんは確か、再度起動するのに半年はかかるって言つてたけど」

「そこは……その、出来るだけ頑張るから。何時になるかわからないけど、必ず直して、千冬に届けるよ」

正直、自分が全身全霊を尽くして取り組んだ所で、あの『白式』のメカニズムを完全には解き明かせないだろうと、ユーノは考えていた。自分は束のような天才ではないとも分かっている。だが、部分的に修復することは不可能ではない。

それで再び起動するか、仮に起動した所であの時のような力を発揮できるかと聞かれれば、とても首を縦には触れないけれど。

「なんとというかき、千冬となのは一緒に飛んでるのが似合つてて、出来るだけ、そうであつて欲しいから」

ユーノの本心はこれに尽きた。その為なら、割と忙しい助手の日々から時間を割くことぐらいは出来る。

それくらいに、ユーノは二人のことが好きだった。

「ありがとう、ユーノ……お前いい奴だな、本当に」

「今更だよ千冬ちゃん！ ユーノくんは凄く優しいんだから」

「そうだな……そうでないと、アイツの助手なんて務まらない！」

千冬の言葉に呆れてくすつと笑つたユーノは、直後、ピッタリくついていた二人が離れ、自分の左右に回りこんだことに気づけなかった。

だから、二人がそれぞれ自分の手に手を回してくることに、いたく

驚いた。

「な、ちよ、ええっ!？」

「これから頑張るユーノくんにご褒美っ♪」

「ほら、このまま家まで送ってくれ、男の子。両手に花だぞ、嬉しいだろう?。」

いや、それは確かに嬉しい。男としては。

だがこのまま家まで送るとなれば。高町家の方々に見られてしまう。その時の気恥ずかしさとほんの少しの警戒を、想定できないユーノではない——が、そんなのはまだ序の口だ。

この状況を。なのはと千冬にチャホヤされている状況を、万が一束に見られたらどうなるか。

(……一日フェレットじゃ、済まないだろうなあ)

心の中で溜息を吐きながら、それでも両手にしがみつく女の子二人に抗えず、ユーノは顔に苦笑いを浮かべて、二人を引張り歩き始めた。

「ふふん、ふんふん……」

窓のなく狭い部屋に、調子の良い鼻歌が響く。

「ふーふーる、るーる、ふーるーるるー」

その浮ついた調子から、歌う少女の上機嫌ぶりが分かる。

「ふーふーる、るーる、ふー」

彼女が座るのは、銀色で巨大な、機械じかけの安楽椅子。眼前にあるキーボードを叩けば、椅子に直結した細い機械のアームが自在に動き、彼女の望むものを持つてくる。

「ふーふーふーるー、るーる、るーるるー♪」

アームの一つが、モニタをぶら下げて持ってきた。

映っているのは二匹の猫。だが、幾つもの分析とスキャンを画像のレイヤーのように重ねあわせて、可愛らしい猫に貼り付けられた結論は、Unidentified object だった。

最も、束には既に、しかも簡単に予測できていたことだ。篠ノ之神社に寄り付く猫はそこそこいるが、動物的な本能故か、束のラボには文字通り猫の子一匹寄り付かないのだ。

「ふーふーふ、ふーふーふー♪」

さてどうするかと少し考えたが、取りあえずはレーザーで威嚇するだけにしておいた。

彼女らがなんであれ、なのはを、そして千冬を脅かす程の存在ではないし。標的が自分なら、尚更安全だ。

そう、この本が、自分の想像通りのシロモノだったとしたら――

今、何十ものアームで囲まれ、固い鎖を解かれて、そのページ目がめくられる書物の奥に、自分の期待しているものがあるのなら――

「……あはっ、あははははは」

その時こそ、篠ノ之束は。

自分の夢見る自分テンサイに、本当の意味で、なれるのかもしれないのだから――

歯車は動き出す (I)

青く眩い光が消え失せ、目の前には草原と、何件か並び立つ小さな別荘群が見える。束の人生の中で二度目の転送魔法は、彼女を日本の海鳴から、イギリスのとある丘陵へと導いた。

束が日本以外の国へ出かけたのは、これが始めてではない。

ユーノという便利な助手と出会う前までは、だいぶ昔に作って今でも愛用している人参型ロケットで世界中を飛び回り、発明に必要な部品をかき集めていたものだ。

「さあ、付いたわよ。向こうの一番大きな家に、父上はいらっしゃるか
ら」

猫耳を付けた使い魔の堅い方、リーゼアリアが束の右方に立ち、別荘の内の一つを指さした。

その険しい目は常に束へと向けられている。妙な動きを一つでもすれば、即座に引つ捕らえるつもりなのだろう。

束はその必死さを心中で嘲笑った。そうしないと気が済まなくらいの不愉快さがあった。

そも自分がこんな辺鄙で、科学技術の一片もなさそうな地にわざわざ降り立ったのは、使い魔の主であるギル・グレアムとやらの要求に応じたからではないか。頭を下げられ来てやっているというのに、こうも厳しく監視されるのは気に入らない。

だから、束はあえて別荘から背を向け、明後日の方向に歩き出してみた。

「ち、ちよつと！ 話を聞いてなかったの!？」

声を上げながら開いた右手を束に向けるアリア。その手の平に通う光は間違いなく魔力素であり、それを使って編むのが拘束魔法で、その中でも起動の早いリングバインドである。

その程度のことにはあっさり理解できるし、そうされた所で何の問題もない。バインドは力づくで打ち破れるし、その後アリアを無力化することも簡単だ。

だのに必死になって取り押さえようとする無様さと、警戒しすぎて

天邪鬼を見抜けぬ程に視野狭窄した有り様。

何とも滑稽で愚かしい、心をくすぐる笑いの種だった。

「あつごめんね、間違えちゃった☆」

「つ……ふざけないでっー」

「いやー、まあまあ落ち着いてネコちゃん、短気は損気、お肌が悪いよ。」
しれっと何も無いような口ぶりの裏で大いに笑いつつ、さてこの使い魔の主を同じようにからかうことは出来るだろうかと考えをめぐらしながら、束は別荘のドアを開き中へと進んだ。

「やあ、初めまして。時空管理局顧問官、ギル・グレアムだ」

広間で、いかにも高級そうなソファに座りながら待っていたのは、銀髪の髭が印象的な、いかにも好々爺然としている老人だった。

だが、束の目は彼の本質を冷静に察知し、見抜いてみせる。

その佇まいから、張り付かせているもう一匹の使い魔の位置まで、どこを見ても一分の隙も見つけられない。

もし交渉が破談となるか、束の方でぶち壊しにして逃走しようとしたら。何処へ逃げようとしても、必ず姉妹の使い魔や、屋敷の内外にひっそり張り巡らされている防衛システムの迎撃を受けてしまうだろう。

所詮使い魔は使い魔、主の実力を測る指標にはならないということか。

束はこの堂々として尚且つ狡猾な老人をしっかと見据え、彼の対面にあるソファへと座った。

「どうも、私が皆のアイドル、篠ノ之束さんだよっ！ いえいつ♪」

とりあえず腰に左手を当て、平にした右手をびしっと振って、巫山戯た格好を取ってみる。いつもなのはや千冬の前で見せる衝動的なポーズではなく、相手の意図を読み取り計算するための、試金石のよきな演出だ。

だが、グレアムは何も動じなかった。まるで年寄りだが、足元で無邪気にはしゃぎ回る子供を見守るように、心配と暖かさを込めた目線まで送ってみせる。

更にその上、

「ああ、知っている。特に機械工学の分野においては最近凄いものを作ったそうじゃないか」

などと返してくるので、束としては何も言わず両手を直し大人しくソファに座ることしか出来なかった。

「で、この私に一体何の用事なのかな？ 何か作って欲しいものもあるの？」

「君のような科学者に制作の依頼が出来るとは光栄だ。だがあいにく、今回頼みたいのは『解体』でね」

あいにくその言葉に興味を示す可愛げなど持ち合わせていなかった。束の目はグレアムを睨み、先を急かす。互いに承知をしている事柄だというのに、無駄な前置きや長つたらしい閑話で長引かせることは好みではない。

すると、分かっていると云わんばかりの目線が再び束に向かう。

「すまないな。老人は周りくどい話が好きなんだ。君のような若者には我慢ならんだろうが、許してくれ」

その言葉に、束は心の中で臍を噛んだ。

「分かっているなら、早くしてよ」

「そうしよう……では。私、ギル・グレアムは君に、ロストロギア『闇の書』の完全解体をお願いしたい」

瞬間、周囲の空気が張り詰める。だがそれは束とグレアムが起こしたことではなく、言葉を聞いた後のインパクトを警戒した二匹の使い魔による極限の警戒だった。

プレシアほどの大魔導師を手玉に取った少女相手に、今は余裕を保っている自分の主でさえいつ害されるか分からないという心配はごく当たり前の物。しかし、二匹の予想に反し、緊張の中心に位置する二人の雰囲気は、少なくとも表から見れば台風の目のように穏やかだ。

「ふうん……やっぱり『寄越せ』じゃないんだねえ、いやはや」

寸分狂わず予想通りの要求は、管理局の技術力の限界を表すものだった。

同じロストロギアにしても、ジュエルシードのように単純なエネルギー

ギーの結晶体なら封印も出来るだろうが、数百年もの間旅を続けてきた闇の書の複雑さはそれとはまるで格が違う。

特に、無限再生機構と転生機構が厄介極まりない。どれだけ破壊しようとする、完全に消滅させようとすればその前に転生していなくなる。とすれば、純粋な力による破壊はほぼ不可能。

束も既にこの二つのメカニズムに気づいており、だからこそ書の分析には細心の注意を払っていた。そのために書とはやてとの魔力による繋がりをある程度緩め、リンカーコアの成長を感知し覚醒する点火栓のようなギミックを無効化したのだ。

「ああ。無限再生と転生機能の合わせ技には、我々もほとんど無力だね。情けないことこの上ないが、それを少しだが覆した君に、賭けてみようと思うんだ」

そう語ったグレアムの、自らの無力を真摯に認める態度と見ず知らずの他人、しかも3分の1以上年下の女の子を信頼する姿勢は一見紳士的に見える。

だが。いやだからこそ、束はいつもの笑みを顔から消し、目を開いて彼に問いかけた。

「ねえ、どうしてそんなに私を信用するの？」
「どうして、とは？」

「君は確かに私を知っている。私が今までやってきたこと、作ったものも結構知ってるみたいだね。でもそれならむしろ、私のことを警戒すべきじゃないのかな？」

管理局員ならば当然、PT事件の顛末は知っているべきであり。ただの小娘である束の科学力を確信しているのならば、彼女が事件の終わりにしでかした所業も知っているべきだ。

勿論束は、その裏切りと自分勝手に無法な振る舞いに一片の後悔も持ち合わせていない。しかし、他人から信頼されないどころか、本当は法により罰されて当たり前であることくらいは分かっていた。

しかしグレアムは、何を言っているのかわからない、というどぼけた様子で束を見つめ、

「君を警戒する理由がどこにある？ 君には、闇の書を使って満たす

支配欲も権勢欲も無い。ただ、好奇心という純粋な欲で行動しているのではないかね？」

などと言い返してみせた。

「へえ。好奇心だけなら扱いやすいって、そう思うんだ」

「違うとも、ただ信頼が出来るだけさ」

あくまでも東を悪人と見ないグレアムの姿勢。それがなんだか自分の上にのしかかる鉄板のように思えて、ひっくり返したくなる。だから、本来まどろっこしく避けたくなるはずの言葉遊びを、自分から続けていってしまう。

「じゃあ、なんで私が好奇心だけって分かるのかな？」

「経験上、君のように熱心で直向な科学者は、殆どがそうだった。言わば、年寄りの知恵さ」

年寄り。そう、グレアムは東よりもずっと年をとっている。つまり、東よりも遥かに長く、人生を重ねている。いくら才能があろうと、天才であっても、その事実を覆すことは出来ない。

「……気に入らないなあ、そういうの」

だから、東は苛立っているのだ。

たかが数十年、数百ヶ月、数万分、数十万秒程度先に生まれただけのこと得上に立たれ、下に見られる。それは彼女にとってこれ以上無く屈辱的であり、この世界の中で唯一理不尽に思える事柄だった。

「では、違うのかね？」

「……違わないけどさ」

だが、結局東は頷いて、彼の意見に退かざるを得なかった。

古臭い知識と、カビの生えた脳髓によるつまらない推測からも逃れられない。

結局それが、今この時代を生きている、篠ノ之東の限界なのだった。

「さて。では今度はこちらが質問する番だ、いいかな？」

「……いや、好きにして」

半ば分かっていたにしろ、はっきり突きつけられた事実の不貞腐れているのを他所にして、グレアムは話を進めていく。東も東でまだ話

さねばならないことがあったので、本当なら帰りたくなる所を抑えて、いけ好かない老人との会議を続けることにした。

「君は今、闇の書を自分の研究所に置いておこうだ。はつきり言って、どのくらいまで理解できたのかね、あの魔導書を」

「うーん、それがほとんどノートタッチなんだよねえ。まだ始めたばかりで、三日がかりで漸く表紙を開けたくらいなんだから」

束の言葉は本当だ。闇の書を解析することは、ある意味核爆弾を解体するように難しく、同時に慎重さを必要とする。何かの弾みで書に異常を気づかれれば、すぐに転生されてしまうのだから当たり前だ。

書のロックを僅かに開いたらすぐに現状を確認し、何も異常が無ければまた少しづつ開いていく。そんな遅々たる作業をこれからも続けていけば、全体の解析が終わるのは気が遠くなるほどに未来の話となるだろう。

「そうか……君ほどの才能を持ってしても、か」

「でもねえ。この書が大体どんなもので、どういう構造になっているのかは分かっている。だから」

一旦言葉を切った束は、自分がこんな所まで来てつまらない思いをする唯一つの理由を口に出した。

「そっちの設備……管理局、それも本局や第一世界^{ミッドチルダ}辺りの設備が使えれば、効率よく進められるんだけど？」

グレアムの表情に、始めて剣呑さが走った。

自分をミッドチルダや本局に案内すればそこで闇の書をバラしてやるという要求。条件に似合わぬその軽さは、本来なら受け入れられるべきものだろう。

しかし。篠ノ之束は過去、万全のセキュリティに守られた次元航行艦のメインコンピュータを乗っ取ったこともある。そんな彼女を本局や、その他の重要施設に触れさせることの危険性。警戒しきりのリーゼ姉妹は勿論、グレアムの穏やかな態度にすらヒビが入っても仕方のないことだろう。

「ふむ。なるほど、確かにそうだな」

「もし、こっちの技術だけでどうにかしろって言うなら、大分時間がか

かつちやうし……それに、ひよつとするとこの安定しきつた状況に――何か『変化』が起きてもおかしくないしね」

ここで言う『変化』の意味をグレアムは正確に読み取ったようで、ますます目の色を濃くし、押し黙った。

「なるほど、そうか」

「そうだよ？　これでも結構綱渡り、狂い許さぬ匠の技、なんだからね♪」

その戸惑いを誘発した束に、年寄りへの僅かな復讐という幼い浅はかさが混じっていることは、否定したくても出来ない事実だった。

数十秒、広間が無言に冷え込んだ後。

意を決したグレアムは束の瞳に目線を合わせ、首を縦に振った。

「いいだろう、君の要求を飲もう」

「父様っ！」

ただし、思わず声を上げる二人の使い魔を抑えながら、こうも付け加えた。

「そうだ、どうせなら君のお友達も一緒に、ミッドへ案内してあげようじゃないか」

その数分後。

握手を交わした束とグレアムは、別荘からそれぞれ転送魔法で去っていく。

篠ノ之ラボのカレンダーには、夏の予定が加わった。

歯車は動き出す (II)

日本の小学生は、7月も半ばを超えると一気に沸き立ち盛り上がる。

その理由は言わずもがな、夏休みだ。

丸40日ほどの長期休暇の間は、朝早起きして学校にいかなくてもいいし、お弁当の中身に一喜一憂することもなく、急な抜き打ちテストに怯える必要もない。

その代わりとして観察日記や分厚いテキストと言った大量の宿題があるのだが、沢山の楽しみの中には多少の苦難など消え去ってしまう。文字通りに消え去らせてしまい、後々苦勞するのもまた、夏休みの醍醐味といえるかもしれない。

海鳴市に住まう小学生たちも例に違わず、終業式が終わると皆学校から駆け出し、親しい友達とこれからの予定や計画を立てて盛り上がっていた。

無論、彼女たちも例外ではない。

「……束、これはどういうことだ」

いつもより早帰り出来るのならその分道場で剣でも振るかと家路についた所を、文字通り後ろ髪を引かれて空き教室に引き戻された千冬の手には、薄い冊子があった。ホチキス止めで安っぽく、印刷もモノクロで、表紙はそこらの厚紙、実に手作り感満載である。

その場に居る全員が、同じ冊子を持たされていた。その一人であるなのは、興味津々に読みふけり、もう一人であるユーノは苦笑いしながらの斜め読み。そして最後の一人の千冬はハナから読む気など起こさず、配布者に噛み付いていた。

「これ？ しおりだよ？ ほら、小学生の旅行には決まってしおりが必要じゃないかな？」

「そんなことを聞いているんじゃない！」

とんちんかんな答えを返す束に冊子の上端を潰してしまうほどにぎゅつと握って力説する理由は、その表紙に穏やかでないタイトルが記されていたからだ。

『ミッドチルダへ行きたいか！ 二週間で行く次元世界首都観光の旅 くタバネ天才伝説』とはどういうことだ！』

本当なら、このふざけたネーミングを口に出したくもなかったのだが、それ以上に嫌悪し危機を感じるべき語句がそこには含まれていた。

ミッドチルダ。

なのはが使う魔導の総本山にして、次元世界の首都だという世界に、このウサミミは一体どうして、旅行へ行こうと決めたのか。それだけではない。アースラは既に任務から戻り、長距離転移魔法などこの場の誰も使えないのに、どうやって遙か遠くの別次元まで辿り着くというのだ？

これらの問いをむりくり纏めて放った一叫びを、東は全て読み取ったようで、深く頷き笑みの胡散臭さを更に増した。

「いやー、前にも言ってたと思うけど、一度行ってみたくてね。流石に無理だと諦めてたら、思わぬ所からオフアアが来ちゃってさ★」

オフアアってなんだ。と突っ込みたいのは山々だったが、余り些細なことばかり気にしていても仕方がない。千冬は黙って、東の論説そのままにした。教卓に立ち引率の先生の真似事をしながら東は続ける。

「ではでは、お手元のしおりの6ページを御覧くださいい♪」

三人とも言われるがままにしおりをめくれば、そこに印刷されていたのは老人の顔だった。恐らくは写真からの印刷だろうが、どういう撮り方をしているのか影が濃く、まるで肖像画のようだ。A4用紙を半分折って作られたページの大半を占領しているその顔に、誰も見覚えがなかった。

だが、顔の真下に名前が書いてある。

「ギル・グレアム……？ 何者だ？」

「そうだねえ、スポンサー、とでも言うべきかな？ ほら、世の中色々先立つものがあるでしょ」

千冬は虚を突かれた顔で話を聞いていた。そういえば、東は様々な機械をラボに置いているが、あれらを作る資金と資源は、一体何処か

ら来たというのか。今までその脅威に対抗するために手足どころか頭も全て動かしてきていたので、考えたこともなかった。

だから、千冬は束の言説を意外なほどすんなり受け入れた。

他の二者もそれぞれの理由から、グレアムという老人の唐突な登場に納得したようだった。ユーノとしては、昔日に転送魔法を酷使し、様々な場所へ出かけた経験がある。なのはとしては——もはや、一々語らずとも良いだろう。高町なのはと、篠ノ之束なのだから。

「で、それがどうしてミッドチルダ行きに関係する?」

「よくぞ聞いてくれました!」

ひとまずの納得により多少緩みつつある千冬の剣幕。それに乗じる形で、束の声はますます上ずり、纏う雰囲気は高揚していく。

「実はこのおじさん、魔導師だったんだよ! ジュエルシードがばら撒かれるずっと前に魔法と出会って、それから管理世界とこつちを行ったり来たりしてたんだって!」

その言葉に三者とも一瞬驚いたが、ユーノが発した次の一言で鎮静する。

「なるほど……つまり、なのはみたいな境遇の人ってこと?」

「そう言えるね、流石は我が助手、物分かりがいいねい」

高町なのはは優れた魔法の素質を持っていたが、本来それに目覚めること無く日常を過ごしていたはずだ。それが魔法に出会ったのは、ジュエルシードを追って力尽きたユーノのSOSを聞き取り助けたのがきっかけである。

同じことが、過去、海鳴とは別の場所で起こっていた可能性は決してゼロではない。それにいくら地球が辺境の管理外世界とはいえ、管理局の巡航コースには含まれている。何らかの事故か戦闘によって遭難した局員の助けを呼ぶ声が、優れた素質を持ちながらそれに気づかない誰かへ聞こえていてもおかしくはないだろう。

「で、そのおじさんがね。管理局で私と『白式』の事を聞いて、夏休みの間こつちで勉強しないか、どうせなら友達も一緒に、だって!」

それを聞いて一際目を輝かせたのは、やはりなのはだった。行儀よく座っていた椅子から立ちあがり束に近づいて、両手を握りながら喜

び回る。

「良かったね、束ちゃん！ それにしても、魔法に関わってた人と知り合ってたなんて、すつごく素敵な偶然だね」

「うんうん、やっぱりあれかなあ、善いコトをしたら良いコトが起こるのかな！」

「ちよつと待て」

夏だというのに暑苦しいくらい近づき合う二人はいつものことだったが、ポロリと出て来た「善いコト」に何か妙な引っかけりを感じたので、割って入って千冬は尋ねた。

「お前が善いこと？ どうせまた誰かを発明に巻き込んだり、妙ちきりんな言い草でからかったりしたんだらうが」

「あーっ、酷いなあちーちゃん！ 確かに私はカルマ的にエビルくな感じだけど、ちゃんと善いコトはしたんだからね！」

腰に手の平を当て、ぶんすか口調で非難するのは束だけではない。なのにも無言ながらそれに同調し、ほっぺを膨らませて千冬を睨んでいた。

「そんなに信じられないなら言っておけようか！ 私は一ヶ月と少し前！ 車椅子の女の子が携帯落として難儀していたのを、手を取って助けてあげたんだから！」

「嘘だ、絶対嘘だ！ 第一お前がそんなことをするタマか!？」

間髪立てずにがなり立てる千冬の論理も、概ね正しいと言えた。

篠ノ之束という人間は、自分の得にならない善行はしない。彼女の中にある道徳や倫理の歪みもあるが、その利己的で効率を尊ぶ生き方がそうさせている。であるから、千冬は決して、偏見によって束の善行を認めない訳ではなかったのだが。

「あー、それなら無問題^{モーションタイ}。確かに考えてもみれば、ぜんっぜん束さんらしくなくて、反吐が出そうなことなんだけどね？」

千冬の唱えた自分の生き方へ同調するように首肯した束だが。

直後に自らの長い髪の毛の根本を握り、ぐいっと上へ押し上げて。

「ほら、こうすれば大丈夫♪」

とのたまいながら、ツインテールを作っけて見せた。

「……なんだ、それは……なのはの真似事か？」

「えへへー、ツインテールだよなのちゃん、どう？ 似合う？」

「うん、凄く似合うよ！」

千冬の突っ込みはあっさり無視されたが、付き合いの長さもあつてか、突然髪型を変えた意図は明白だった。自分の大好きで大切な親友の物真似として人助けをする。本来そういうことなんてしないけど、友達の真似だから別に問題はないということか。

なるほど、これなら納得——いくものか。

「なんだ、そのひねくれた考え方は……」

千冬は盛大にため息をつき、そこらの乙女思考より遥かにぶっ飛んでいるお花畑な思考法に頭痛を覚えた。頭を抱えなくなつたのはユーノも同じだったようで、後ろの方の机に頭を突っ伏し、金髪だけが見えていた。

「いやーこの髪型を閃いて正解だったよ！ お陰で最近とっても楽しいことばかりだしね！」

「そう、正しい行いは必ず自分に帰ってくる。これ、おとーさんの言つてたことだけど、やっぱりそうなんだよ！」

情けは人のためならず。これ程なのはに似合う言葉はなく、これ程束に似合わない言葉も無い。だが今は、二人共がその言葉に同調している。

奇妙すぎて目眩がするのは、決して千冬とユーノだけではないだろう。もし二人を多少なりとも知る人間がこの場にいたら、間違いなく目を疑うはずだ。

「んふふー、ホントなら思い切り首を横に振りたくなる理論だけど、ツインテールだしなのちゃんだし、なんだかそう思えちゃいそうだなあ

★

「だよね〜！」

「ね〜♪」

手をつなぎ今にも踊りだしそうな二人は取り敢えず放っておこう。そう考えて理解を諦めた千冬は、同じく何かを拒むような目をしているユーノに語りかけた。

「……ユーノ」

「正直、どうなんだろうね。いつもの悪ふざけなのか。それとも」

束の変化の成否を多少訝しがらくらいには信用しているユーノに対し、千冬のそれは最初からマイナス、しかも底値を割っているので答えは単純だ。

「馬鹿な。あいつが『まとも』になるなんてあり得ん、認めん、断じて許せん！」

千冬は熱弁するが、その言葉の乱暴さからか、ユーノには少々白い目で見られてしまう。確かに前半はとにかくとして、後ろの語句には千冬の、鍛えた剣の振り下ろし先を失ってしまう焦りと不満があるのかもしれない。

「……で、どうするの？ 僕はどうせ強制連行なんだけど、君たち二人は親の許可も取らなきゃいけないし」

「その点に関しては問題あるまい。ほら」

ユーノの懸念を放り投げるように、千冬は今も束とべったりなのはを指さす。一体何処で調べてきたのか、しおりにびつしり書き連ねられているミッドチルダ市街のレジャー施設やら、巨大なショッピンモールやらを見て、何処へ行こうかなんて和気あいあいと話合っている。こうして俯瞰してみれば、休みの予定で盛り上がる極普通の小学生二人に見えてしまうくらい、きやぴきやぴとはしゃいでいた。

というか、そういう所には興味ないんじゃないのか、悪魔的才能を持って余す天才よ。

「あれが、どうして？」

「なのはがあそこまで乗り気なんだ。師範が許可しない理由などなからうて」

「あー……」

なのはの父親、高町士郎は、常々なのはには甘い父親だった。なのはが末娘であり、余り我儘を言わないというのもあるが、珍しく要求をしてきた時何も言わずに一言で了承するくらいには甘い。それが例え、聞いたことのない土地への旅行でも。

千冬には容易に想像できた。止めるどころか笑顔で「行つてらっ

「しやい」と送り出す高町家一同の姿が。きつと、千冬が付いているから安心だとか、束がなのは危険な目に合わすはずもないと信頼しきっているだろう。

甘い。その見通しは甘すぎる。だからこそ。

「無論、私は止めても行くぞ。他所様の世界であいつに好き勝手させるのは、海鳴どころでない、地球全体の恥だ」

そう決意して右手をぎつと握りしめる千冬を見つめる翠色の視線は、なぜだか妙に暖かかった。

「……それに、なのは束に独り占めされたくもないしね」

「っ!? な、何を言っている!」

「だってそうでしょ? ミッドは遠いから、二人に何があっても、手が出せないし止められない。それは困るよね? 色々と」

「な、なっ……!」

ユーノが言うこつ恥ずかしくて女々しい理屈など、千冬の思考の埒外にも存在しなかつたはずなのだが。千冬の顔はなぜか火照って、眼光鋭く憎つたらしい笑みを浮かべるユーノを懲らしめたくなくなってしまうのだ。

「貴様あ……っ!」

「つてわあ、ごめん、からかいすぎた!」

千冬はいつの間にか木刀を持ち、大上段に掲げて振るいかけていた。本来学校で大っぴらに持ち出す事ができず、少し離れたロッカーに立てかけてあったはずのそれをどうして即座に手元へ持つてこれたのか、ユーノは勿論当の千冬すら定かではなく。だがそんなことはお構いなしに、生意気な金髪頭に狙いを定めた。

「待つて待つて、木刀は止めて! こんな所で結界出したくないよ僕!」

「うるさいっ、問答無用だ!」

にじり寄る千冬に壁まで追い詰められながら、丁々発止のやりとりを繰り返しているユーノ。それを束は、まるでイチャつきのおつまみにするような愉悦に満ちた目線で見つめていた。

「おー、二人共仲いいねえ。どうせならあのまま二人つきりにしてあ

げよっか？　それで私はなのちゃんとおー、ぐふ、ぐふふふ」

「あはははは……流石にそれはダメだよ束ちゃん」

おじやま虫な二人が勝手に潰し合っている隙にお持ち帰りしようとするツインテールを押しつけながら。もう一人のツインテールは、まんざらでもないどころか、皆の居る楽しさを思いつきり噛み締めていた。

歯車は動き出す (Ⅲ)

「……で？」

「いや、その……」

「で？」

「あー……」

終業式から一週間と少し経ち。

しおりで束が指定した集合場所は、毎度おなじみの海鳴海浜公園だ。真夏の朝は9時頃、それぞれに手荷物と着替えを持って、涼しげなワンピース姿の千冬となのはは30分前、こちらもシャツと半ズボンのユーノは5分前に到着したが、束は何故かまだ来ていない。

いつものことだため息をつく三人の前に、転送魔法陣が現れる。そこから現れ出たのは、以外にも三人の良く見知っている顔だった。つまり、14歳にして時空管理局執務官を務めている少年、クロノ・ハラオウンである。

「……で？」

「あは、あはは……勘弁しよう……」

そして彼は、転送して現れたその矢先からユーノの顔をずっと睨んでいた。責めるような目線と、今にも杖を振るいたそうな佇まいから分かるのは、彼がユーノを詰っている、それも尋常でなく怒り心頭の心境であるということだった。

その理由は明白であった。ユーノはかつて、クロノから直々に監視という仕事を仰せつかり、束の危険性を誰よりも分かっていたのでそれを承知もした。しかし束の秘密裏な行動を許してしまい、その結果ミッドにまで辿り着かれてしまったのは、何もかもユーノの不手際と、監視の不徹底でしかなかった。

「……まあ、いい」

だが、クロノもそこまで強くは言えないようで、恨みつらみの思いを込めて睨んだだけで終わらせ、目線を逸らす。ユーノは思わずホッと肩を撫で下ろした。

元々正式な任務ではなく、個人的な依頼だ。そしてもう一つ、彼が

ここに来るまでの経緯もそれを助長していた。

「でも、お迎えが来るって書いてたけど、まさかクロノくんだったなんて」

「……ギル・グレアム提督は、僕の知り合いさ」

そう。クロノは知己であり自らの師であるグレアムに直接呼び出され、束たち四人の案内を頼まれたのだ。立場として雲の上の存在であり、個人的に尊敬すらしている老人の頼みを無下にするわけにもいかず。こうして、制服代わりのバリアジャケットを着込み、半ば公務のような心持ちで地球まで転移してきたのだ。

「提督……って、リンディさんと同じ？」

「いや、グレアム提督のそれは敬称みたいなものだ。本職は顧問官。それ以前に艦隊司令官を歴任していて、執務官長を務めたこともある」

次々にクロノの口から出される役職名に、なのはも千冬もいまいちピンとこなかったが、ミッドチルダ含む次元世界の常識を知っているユーノは飛び上がって仰天した。艦隊司令、執務官長、どれも管理局のポストの中では頂点に近い立ち位置なのだ。

「ええっ!? すっごい偉い人じゃないか!」

「そうだ。……それがどうして、篠ノ之束と知り合いなんだ……」

「さあ……」

言葉の端にポロリと零れたのは、使い走りの悲哀に満ち溢れている本音だった。だからユーノも心から同調し、目を瞑って顔を俯かせる。

そも、偶然にしては出来過ぎではないか。篠ノ之束の科学力は現代の水準を遥かに凌いでおり、その本当の価値を知っている者の中なら、投資しようとする人間だって数多いだろう。その中の一人が偶然魔法世界の住人かつ高位の人間であるなど、どう考えてもご都合主義に過ぎていた。

と、そんな中、旅行の計画を建てた当の本人が、予定より5分も遅れてやってきた。

「やあやあ! いやーごめんねえ、遅れちゃってさあ〜」

炎天下でもいつも通りな水色ドレスとウサミミセット。背中には身体より大きなリュックサックを軽々背負っている。中に何がつまっているのか、それを使って何を企もうとしているのか、なのは以外は誰も考えたくなかった。

「もう、束ちゃん遅い。遅刻はいけないよ?」

「ごみんなのちゃん、色々細々とした準備と、それから移転の作業があつて」

ふらりと訪れた天才へ誰もがゴクリと息を飲み、千冬などはのっけから臨戦態勢に入っている中、なのはだけが普通に束の遅刻を叱り、束も素直にそれを受け入れて頭を下げた。いつものことながら、ユーノの目には異常な光景に映る。

なのはだつて束のすぐ側にいるのだから、その才能と性格が産み出す危険性というのは二十分に分かつているはずだ。それがどうして、彼女はこんなにもあつさり束に近づき、あるがままに触れ合えるのだろうか?

高町なのはと篠ノ之束であるからだ、なんて思考停止じみた結論に辿り着くのは簡単だ。

しかし、一年付き合つた千冬がこうで、助手として側にいる自分ですら少しだけ身構えていて。無言で警戒しているクロノのような反応が、一般のそれだと解釈するなら、なのはの触れ合い方は余りにも無警戒だ。まるで、自分から地雷原に突っ込んでダンスを踊っているような。

「ところで束ちゃん? まだ、ツイントール続けてるの?」

「うん、暫くはそのままにいる予定かな。まあ一ヶ月もしない内に解くかもしれないけど」

そういう間柄に踏み込める人間が居ることは、本来喜ばしいことである。

余人からすれば隣に入り込む隙間も見当たらない孤高の天才が求めるただ一人の友人。それが居らず、いつまでもただ一人であったとしたら、彼女は今よりずっと歪んで、ユーノを助手にすることなんて無かつただろう。

だが、そう確信する傍ら、ユーノはこうも思うのだ。

篠ノ之束に恐ろしさや畏怖の欠片も感じない、高町なのはの精神は。ひよつとすると、ある一点において著しく麻痺しているか、それとも何か欠けているのではないか？

「そつか……嬉しいなあ」

「お揃いだから？」

「ううん、違うの」

束の、自分よりずっと長いツインテールを見てなのはは愛おしげに微笑み、その理由を聞いた束へこう答えた。

「そうしてる束ちゃんが、とつても楽しそうだから」

その言葉を聞いた束は、半瞬の間静止して、その後、

「なのちやああんっ！ ラブっ！」

と言いながら重いバッグを背負っていることなど忘れてなのはを押し倒そうとした。それを留める為、千冬はまた何処からともなく木刀を取り出し介入してくる。

いつも通りのやりとり、いつも通りのイチャつき、そしていつも通りの大騒ぎ。三ヶ月経つても何も変わっていないと思ったのだろう、頭を抱えるクロノの横で、ユーノは何故か、じれったさにも似た感覚を覚えていた。

なのはと束と千冬、三人が三人に懐く友情は、紛うこと無く本物だ。だが、本物だからこそ、何よりも輝いているからこそ。

硬くて、熱すぎて、眩すぎる。

と、思えてしまうのだ。

転送魔法で辿り着いた狭い公用転送ポートから歩き出て、なのはたちの眼前に映ったのは、高層ビルの立ち並ぶ、広大な近未来的都市光景だった。海鳴の中心街とは比較にならない規模の大通りに、沢山の人が満ち溢れている。

余りに大きいので千冬など、ここが首都のクラナガンかなんて勘違いもしたが。クロノ曰く、ここは新技術の実験や研究用として管理局に作られた都市区画でしかないという。

となると、首都はこれ以上に繁栄しているのか。お上りさんであるなのはや千冬だけでなく、ユーノも同じく驚いていた。

ミッドに来たことが無いわけではないが、遺跡を求めて方方を旅するスクライア族が既に開拓され尽くした世界で行う用事も余りなく、ほんの僅かしか滞在できなかつたのだ。

「すつごおい……ね、凄いな、束ちゃん！」
「ん……」

その壮大さには、流石の束も息を呑み、他の三人のようにはしゃいだり褒めたりはしないものの、目を凝らさざるを得ないようだった。「さあ、あまり見とれてばかりいないで欲しい。提督の所まで案内しなきゃいけないんだ」

始めてミッドチルダを訪れた管理外世界の住民特有の反応など、既に見慣れているのだろう。億劫ながらしようがないと言うばかりの諦観顔で、クロノは行く先々の風景に見とれて度々立ち止まる四人をどうにか引張り上げ、グレアムが借り受けたホテルのロビーまで到着させた。

そこで突然、束が「野暮用がある」と消え去り。クロノも頼まれ事はもう終えて、任務に戻りたいのが半分。グレアムにくつついているだろう二匹の使い魔に会いたくないのが半分で、急ぎ本局へと戻った。

後に残るのは三人の少年少女と、一人の老人のみ。

「初めまして。時空管理局顧問官、ギル・グレアムだ」

「はじめまして。高町なのはです」

「織斑千冬と言います。この度は、私たちの級友がご迷惑をお掛けしたようです」

「ユーノ・スクライアです」

グレアムは、束の友人である二人の少女と、助手である一人の少年に挨拶したかったようだ。三人の顔に視線を移し、何やら満足そうに

頷いた。

「君たちが……なるほど、東君の友人だけはあるな。皆、良い顔つきだ」

「ありがとうございます。ですが、私は東の友人などではありません。私は……」

グレアムの賞賛に謙遜しながら、しかしあくまで東との関係を否定する千冬。対してなのはは一体何が嬉しいのか、ぱあっと花咲くような笑顔で答えていた。

「ありがとうございますっ！ ええと、グレアム提督」

「うむ？ どうしたのかね？」

「その、東ちゃんのことなんですけど。提督は東ちゃんのこと、どんな娘だって、思っっていらっしゃるんですか？」

その間に、グレアムは顎に親指と人差し指を当て、髭を摘んで若干考え込んだ後、こう答えた。

「そうだね……君と同じように見える」

「私と、同じ？」

「そうだ。私も、君が数ヶ月前のあの事件でどのような行動したのかは知っている。本当は度を越した無謀と、諫めるのが老人の役割なのだが……」

グレアムが語っているのは、PT事件の最終局面、閉じられた結界内でののが取った行動だった。孤立無援の状況で魔力を極限まで消耗したなのはは、それでも自分の心に従い、庭園内に乗り込んだ。それは誰がどう見ても無茶であり、捨て身の無謀である。ひよつとすると、いや、間違いなく迎撃に阻まれ、下手をすれば命まで失った。

事実、事件の報告を聞いたクロノとリンデイに、無茶はするな、と長いお説教を受けたりもしたのだが。グレアムが抱いた感想は、それとは少し違うものであるらしかった。

「羨ましいな、と思ったよ。友になりたい誰かのために。そして、既に友である誰かを、心の底から信じきる気持ちを土台にして。あんな行動を取るような勇氣は、もう無いんだ。この、老いさらばえた、枯れ

木のような男にはね」

そう紡がれた言葉から、グレアムがあの際の自分の心持ちを全て分かっているのだと感じ、なのはは破顔して頷いた。

「それって……」

「ああ。彼女も君を……いや、君たち三人を思い、その為なら、身を投げ出すことだって辞さないだろう。そんな、純粋な女の子だ」

それは、老人の威厳に溢れた一言だったが、長い間他人のことを欠片とも厭わぬ束の姿を見ていた千冬にとっては、やはり信じ切れないものだったようで、

「……申し訳ないのですが、私はその言葉、領けません。あの束が、私を」

と頑なに否定した。

「そうだろうな。確かにそうだ。彼女は残酷で、ともすれば他人の気持ち解さない所が、確かにある」

グレアムにもその理屈は分かっているようで、千冬の身になるような言葉で以って、彼女の疑いを肯定した。

だがしかし、その後すぐにこうも述べてみせた。

「だが、君はどうなんだ？ もし、束君が危機に陥ったとして、君はどうする？」

「……それ、は……そんなことがあり得るわけ」

「世の中に絶対、という言葉はない。年寄りのつまらない人生訓だが、これが実際その通りなんだ。さあ、どうするかね？」

千冬が言うべき答えは唯一つ。宿命のライバルが追い詰められているのだから、取るべき道は一つしか無い、はずなのだが。

何故か、言いあぐねていた。その一言を出せば、何かとてもつまらない決着がついてしまうような、そんな躊躇い方をしていった。

そして、たっぷり数分間悩んだ、その果てに。

「……助け、ます」

「そうか。君は束君を敵視しているようだが、それでも君は束君を助ける。となれば、それと逆のことが起こっても、何ら不思議ではあるまい？」

「し、しかし。それは、なのはの友人だからです。私はなのはを守ると誓った身。その友人であるからこそ、あいつを……助けるんです。それ以外に、何の理由もあり得ません！」

そう、理屈を並べ立てた千冬は、束との助けあい支えあう友人関係をあくまで否定したが。

「そうか。そうだろうな」

「うん、千冬ちゃんはそうだよねー」

頑なな彼女を見つめる二対の温かい目は、とうてい、それを素直に受け取ったとは思えない色をしていた。

「……っ……」

「あはは……」

そこにいるのがなのはとユーノだけなら、違う、と大声で叫んで否定しただろう。だが、年上の偉い老人がいる手前そうも出来ず、ただ顔を俯け頬を赤くする千冬を見て、ユーノは引きつった笑いを浮かべた。

「父様」

ロビーの高級なソファに座っている四人へ、呼びかける声。管理局の制服を纏った、清楚な雰囲気、しかし猫耳がくっついていてる女性が、グレアムに語りかけた。

「そろそろ」

「ああ、もうそろそろお昼だな。さあ、子供たちには少し退屈な話だったろう。この娘は私の使い魔で、今日一日君たちを案内する。とりあえずはこのホテルのレストランで、お腹を一杯にしてくれたまえ。このオムライスが絶品だ」

その言葉に促され、三人は立ち上がり。揃ってぺこりと礼をした後、リーゼアリアに連れられて、ロビーからレストランに移動していった。

グレアムはその後、暫くロビーに座ったままできて。十分ほど後、同じくロビーへ現れた使い魔の片割れと――背負っていた大きな荷物を降ろした、束を出迎えた。

「移転作業は、どうかね」

「順調だったよ。書本体にも、海鳴に居る監視対象にも変化なし」

真剣に問うグレアムへ、リーゼロッテは事務的な平坦さを以って答えた。

彼女ら二人は、グレアムと少年少女が話している間、闇の書を束のラボから管理局の研究施設まで移転する作業にとりかかっていたのだ。輸送するのは危険なロストログアであり、解体中であるため一時的な凍結も出来ない。そんな危険な作業だったが、束は鼻息混じりに、短い交流の裏側で、それを成し遂げてしまっていた。

「当たり前じゃん。この私が、引越なんてつまらない作業でミスをするわけがないよ。それより」

束がちら、と見つめたのは、少し前までなのはたちが座っていたソファだ。そこで行われた会話の細部までも想像し、予測し。

「大分生意気なこと、言ってくれたみたいじゃない？」

と、笑いながらも憎らしげに吐き捨てた。

「そうかな？ 私に君のような予測は出来ないが、それでも随分正鵠を射ていると思ったんだが」

「……」

「仮に君が、なのは君と千冬君、それからユーノ君の危地を目の当たりにした時。それを放っておけるかね？ 見て見ぬふりが、出来るかね？」

その間に、束はやはり、答えられず。

予想通りのその沈黙に、グレアムは安堵した。

旅の最中に出会うもの（I）

ミッドチルダへ初めてやってきたなのは千冬、そして束の三人が過ぐす物味遊山の旅は、常に新しい発見と興奮に満ち溢れていた。

地球にあるものの殆どに心を動かさない天才ですら、時折目を見張ったり興味深げに手をわきわきと動かし「極秘調査」をしようとするのだから、流石に次元世界の首都、そして魔導の総本山は伊達でないと言わばべきか。

だが、この旅のハイライトはそれだけではなかった。

偶然か必然か。本来なら果たし得なかった、喜ぶべき、そして少々早すぎる再開が、少女たちを待っていたのだ。

「え……」

それに、いち早く気づいたのはなのはであった。

千冬と一緒にホテルを出てからというものの、何やら妙な胸騒ぎに押されるがまま、早歩きで市街地から離れていく最中。すぐ側について歩きながら、どうかしたのかと問う千冬に何も答えず、ただ胸のざわめきが示すまま歩いて行ったその先には。

黒地でスカートの端に白いストライプが入ったゴシックドレスを身に纏う、金髪の少女が居たのだった。

「うそ」

「なん、だと」

それを見つけたなのは自身が一番驚いていたのだが、千冬も同じくらいに驚き、それを隠さずに目を見開いた。

見れば、向こうも向こうで驚愕しているらしい。少女の隣に居た、同じく黒いドレスを着ていて、赤毛の隙間に犬耳が見える女性は息を呑んでいるような表情で此方を見つめ。少女は、両手にしっかど持っていたはずの、色とりどりの長い花筒が目立つ花束を落としかけていた。

「フェイトちゃん……」

「なのは……」

茶髪のツインテールと、金髪のツインテール。両者同時に名前を呼

び合う。胸から絞り出すように切ない声が重なりあうのは、両者ともに、垣間見た姿を勘違いでないとしていたからだ。

いや、どうして見間違えようか。短い、けどとても濃密な戦いと協力による触れ合いの中、ようやくと分かりあえて、けれどすぐに離れ離れになってしまった。そんな大切な女の子の顔を忘れる訳がないのだ。

互いに、腕を広げて真ん前へ駆け出す。放り投げられたなのはバッグを千冬が、フェイトの花束をアルフがさつと掴んでやったのは、側にいると誓った両者の律儀さか。

「なのは、本当に、なのはなんだね！」

「フェイトちゃんこそ！ こんなにすぐ会えるなんて！」

ぎゅっと抱き合う少女二人。その瞳には大粒の涙が浮かび上がっていた。

分かれて一ヶ月と少ししか経っていないとは思えぬ程熱く、そして胸躍らせている二人はやがて離れて向かい合い、互いの近況を話し始めた。

「どうしてミッドチルダに？」

「えへへ、私達夏休みだから旅行に……そう！ 束ちゃんがここまで案内してくれたの！」

「なにいつ！ そりゃホントかい!？」

その言葉に仰け反ったのはアルフである。なのはの単純すぎて言葉足らずな説明もあるが、あの恐るべき天才が既に魔導をマスターし、ついにミッドまでその魔の手を伸ばしてしまっていると受け取り、戦々恐々の心持ちに至ってしまったのだ。

その後、別にそこまで大げさな事をしている訳ではなく、ただの旅行であると納得させるにはさせた。しかしそれでも顔の強張りを隠せないアルフに、なのはは少し不満気な様子でこう聞いた。

「もう、アルフさんも千冬ちゃんみたいな顔して、そんなに束ちゃんのことを怖いのか？」

「怖いとかさ……アイツがべったりなあんにや分かんないかもしれないけど、あたしは腹ん中に機械入れられて、何日もそのまま

だったんだよ!？」

P T事件の最中、フェイト達の動向を把握するため、東がアルフの体内に仕込んだ超小型のワームメカ。アースラの医務室による身体検査で初めて見つかったその異形が体内に入っていたという恐怖は、未だに彼女の中で尾を引きずっているらしかった。

それだけではない。なのはと千冬が結界内の状況を証言した内容も、彼女は聞き知っていた。

フェイトの「製造者」であるプレシア・テストロツサが、利用され果て、最後には捨て鉢の自爆をさせられたと言うのではないか。主の主とも言える彼女にアルフは終生頭が上がりなかつたというのに。

極大魔法を軽々操る恐ろしい魔女を屈服させる、悪魔的な才覚と性格の持ち主。それが、アルフから見た篠ノ之束像だった。

「……うーん、確かにそれは、怖いって分かるけど……」

「そうだろ！ なー！」

東の脅威を熱弁するアルフ。側でうんうんと頷き肯定する千冬の援護射撃に乗せて、なのはの心変わりを引き出そうとするが。

「でも、私と同じことをされたとしても、なんだか、そんなに怖くは感じないんだ……」

「な、だ、だつてさー！」

「私、前から東ちゃんの実験に色々付き合ってたから」

東と知り合ってから三年間、なのははしばしば束のラボに呼び出されて、新しい発明を見せてあげる、という名目でそれを体験したり、時には被験者に似た役割を負わされる事もあった。

「一番新しいのは、『いい夢見えますか?』って機械だったかな。確か、千冬ちゃんが未来予知の機械とか言ってたよね? それの少し前に、視界を沢山広げるお薬でしょ? その前は手をパネルに合わせて念じるだけで操作できるコンピュータで、その前は……」

「も、もういい! 分かったからー！」

なのはは嬉々として自分の被験者履歴を語り出すが、そんなもの誰も聞きたくはない。アルフは急いで喋る口を遮り、返す刀で今のなのはの保護者役たる千冬を見た。アルフの予想通り、どうしようもない

という顔で首を振り顔をすくめていた。

「……ねえ、お節介だけど、大丈夫なのかい？ あんたんとこの」
「むう」

小声で交わされた会話には、優しく一生懸命なところそっくりで無茶ばかりする所もそっくりな二人の補翼たる、ぶっきらぼうだが真面目な女性たちの苦勞がにじみ出ているようだった。

「ところで……どうして、フェイトちゃんはここにいるの？」

一段落した所で、尋ねたのはなのである。この地は確かにミッドチルダであり、魔導世界の住人である二人が来てもおかしいことは無い。

しかし今、二人は自らの処遇を決める裁判の真っ最中ではないか。その最中、特に裁判とは関係ないはずの技術開発区画に、何の用事があるのだろうか。

「ん……えと、それは」

言葉に詰まったフェイトの代わりに、アルフが答えた。

「ああ、それか。あたしらは……言いくいんだけどさ。墓参りに来たんだよ」

「墓？ こんな場所に墓があるのか？ 一体誰の」

そこまで口走った時、千冬は事情に気付いたようで、急いで口を閉じ。何やらバツの悪い表情をした。それを咎めやしない、と言うようにアルフは申し訳無きような顔をする。そう、ある意味彼女らに気の毒なことをしているのだ。ただの楽しい旅行だというのに、水を指すような真似を。

「……母さんとアリシア、それからリニスのお墓なんだ」

「えっ……!？」

俯き、目を逸らしながら発された言葉に言葉を失うなのは。そう、フェイトたち二人が着ている、黒い衣装は喪服であり。抱えているサルビアの花束は、三つの墓に供えられる物だったのだ。

「そうか……ここは、昔から研究施設が多い。そうだったな」

「そう。母さんもここで魔力炉の実験をして、それで……」

千冬の知識は、三日ほど前に訪れたこの土地の博物館によるもの

だった。管理局の協力の下新技術の研究開発で栄えた学術都市の歴史は、100年以上昔、管理局の前進であるミッドチルダ政府が、魔導技術と次元移動技術の研究をこの地で始めたことによる。

ならば、プレシア・テストロッサとその研究チームが昔、この地で大型魔力駆動炉の実験をしていても。その結果、不幸な事件が起き、一人の少女と一匹の猫の命が失われたという過去があっても、おかしくはないのだ。

「……そうなんだ。ね、千冬ちゃん」

話を最後まで聞いたなのは、何か決意を固めたような顔で、千冬に向き合い。彼女のしようがないな、という顔と頷きを見た途端、フェイトへこう訴えた。

「フェイトちゃん？ 私達も、お墓参りしていいかな？」

「え……」

突然の提案に戸惑うフェイトへ、なのははこう続ける。

「だって、私たちも事件の時は、プレシアさんと戦って……それで、あなつちやつた訳で……だから、お参りしたいんだ」

プレシア・テストロッサという女性の真実と、数十年前の悲劇を既になのはは知っていた。だから、例え自らの敵だったとしても、無念と悲しみを抱えたままあの世に行ってしまった女性の魂を鎮めたかったのだ。

千冬も、黙って首を縦に振る。絶体絶命の危地に陥らせられ、真つ向から向かい合ったはずの相手へ敬意を持っているのは、地球人二人に共通する価値観のようだった。

「……うん。分かった。いいよねアルフ？」

思慮深いフェイトはその気持を汲み取ったようで、コクリと頷いて賛意を示しつつ、傍らの使い魔に相談する。

「あー、まあ、そういうことなら……ついてきてもいいよ」

最も、墓の中にいるプレシアは血涙流して悔しがらるだろうがね。

という本音を隠して、アルフは主の命に従い、二人を墓地まで案内することにした。

墓地はかなりの広さであった。入り口に辿り着いた四人の前には、白い大理石の墓石がずらりと並び、延々と続いている。どうやらここにはプレシアとアリシアだけでなく、今までこの地や他の世界で続けられた技術研究、開発、そして実験によって生まれた犠牲者たちの全員が祀られているようだった。

前もってリンディからもらった地図を頼りに、フェイトが先導し三人が続く。だが、何分か歩き回っても墓石だらけの風景は変わらず、遠ざかる入り口以外を見ればまるで歩いた気がしない。

なのも千冬も、その墓の多さに目を疑っていた。

「こんなに、あるんだ……」

「100年以上も歴史があるとはいえ、これは……なんと、言うべきか」

二人にとって科学や発明、実験といえば篠ノ之束が行うそれだった。彼女はいつも突拍子もない言葉ばかり繰り返し、そのせいで二人共々な迷惑や騒動に巻き込まれてしまうのだが。

それでも、束は死人だけは出さなかった。そして、何の理由も無しに赤の他人を巻き込んで、怪我させたり死なせたりするということが無い。発明品の餌食になってトラウマを背負ったりした者もいたが、それはアリサとすずかを攫おうとした悪人である。さんざん利用して使い捨てたプレシアだって元は犯罪者であり、なのはたちに危害を加えようとした張本人なのだ。

そんな束を、いつも間近で見えてきた二人だから。

「科学」という物の残酷さと非情さを正面から叩きつけられたのは、これが始めてだった。

「……ついたよ。多分、この辺りにある」

案内の紙を両手に持ち、見つめながら進む道のりで、段々と雰囲気は暗くしていったフェイトが振り向き、到着を伝える。

四人が辺りを探すと、真新しい3つの墓はあっという間に見つかった。

だがそこには、とても意外で、そして奇妙な物が供えられてあったのだ。

「な……どうして!?!」

初めに驚いたのはアルフで、フェイトも言葉を失い。

そうなる理由を察した千冬と、後はなのはも息を止めた。

三人の、恐らくは事件の関係者意外、殆ど知る者もない死者の墓に。

白い鈴なりの花を纏めた花束が、供えられていたのである。

「一体誰が? まさか、リンディ提督とクロノか?」

「違うと思う。提督はまだ忙しいし、クロノも行っていないって言うてた」

「じゃあ、一体誰なんだい? あたしら以外にプレシアを知ってる奴なんて、もう殆ど居ないんだよ?」

アリシアが犠牲となり、プレシアの悲劇の始まりとなった暴走事故は、もはや何十年も昔のことである。その関係者がもし生きていたとして、彼女らのことはとつくに忘れ去っているだろう。そもそもPT事件が起こりプレシアが死んだことすら知らなくて当然だ。

だのに、どうして。

「……もしかして!」

そこまで皆が考えた時、ただ一人、なのはだけが確信めいた言葉を発した。

それほどこまで、なのはは自分の親友を信じることが出来た。

「まさか、あいつが!?!」

「嘘だろ!?!」

「でも……あの娘以外、他にはいない」

千冬も、アルフも信じられずに強く異を唱えたが、フェイトだけは躊躇いながらも、なのはの確信を否定はしなかった。

「きつと、そうだよ……!」

そしてなのはは、陰りのない笑顔でその花を見つめ。

絶対にそうだと信じきり、振り返って。

遠く、はるか遠くで、何かをしているだろう東の姿を、望遠するよ
うに見ていた。

ミッドチルダ、クラナガンから北西に進んだ都市の外れにある墓
地、その一角。

並んだ3つの墓石の前に、『親子愛』を表すサルビアの花束と、そし
てもう一つ。

白く連なつたその花の名はアセビ。

その花言葉は、『犠牲』だった。

心の底からねがうこと（Ⅱ）

なのはたちが、再会した友達と一緒に向かった墓場で、誰のものか分からない花束に戸惑っていた丁度その時。

ユーノは空中をふわふわ浮きつつ、両手に抱え、周囲に浮遊させている何十冊もの本をせっせと運んでいた。彼の飛ぶ空間は円柱状の回廊のようで広く無重力で、壁はその全てが本棚となっている。長く放置されている書物特有のカビ臭さをどこまでも漂わせているこの空間は、生まれながらにして本の虫であるユーノにとっては落ち着けて、いつまでもここに居たいと思わせる場所だった。

次元世界一の蔵書数を誇り、また次元世界一広大で難解な迷宮とも言われるこの地は、無限書庫と呼ばれていた。管理局本局の中に存在し、膨大な量の蔵書を誇る部署。そこにはデータ化されていない様々な世界の蔵書だけでなく、先史時代の書物やそれ以前の古文書なども多量に保管されている。

知識と情報には何より目ざとい束がそれに目をつけて、グレアム提督と何か交渉でもしたのか入る許可を貰い、助手であるユーノの首根っこを引っ張って突入した、というのが今に至る経緯だ。

途中、更に何冊かの本を魔法で探知し回収しつつ、ぐんぐん上へと登っていく。驚くべきなのは、この書庫が未だ書庫らしい静けさを保っていることだ。ユーノの居る場所より少し上層で浮かんでいる束は、いつもなら本を読む時ですら賑やかで騒がしい。それがこうも静かにしているということは、もしかすると彼女も、自分と同じくらいにここで安らぎを感じているのかも。

そう考えれば、なんだか謎めいた彼女の側面は、案外自分と同じなのかもしれない。手前勝手な共感を抱きつつ、ユーノは真上に見える彼女と同じ高度まで上り、緑色のカバーの分厚い本に没頭している所へ話しかけた。

「教授、把握できる範囲だと、これで全部だよ」

自分の回りに浮かばせていた本を、そのまま彼女の周辺へと押し付ける。既に本が散乱していたそこへ更に本が加わり、ともすれば彼女

の青色ドレスが見えなくなってしまう。

「はあい、ユーノくんお疲れー……もうそれでいいよう」

そう言うと一緒に丁度一冊読み終わったらしく、束の右手からぽいつと放り捨てられ宙を舞う本をユーノは掴んだ。興味心からタイトルを覗いてみると『魔導工学の勃興——「魔導」の黎明期における研究者たち』とあった。更に見てみれば、ユーノと束の間に散乱している本は、その全てが科学者、研究者に関する書籍だ。

それも、ただ研究内容について書き記したものでだけではない。彼らの人格、エピソードについて列記した本や、工学技術になんら関わらない個人的な自伝まである。

彼女でも先人に学ぶことがあるのか、とユーノは意外に思った。

自らを天才と称し、自分以上の才能を認めず、と言うより存在しないと確信している束は、先人の訓や功績を余り評価していない。彼らの発見した公式や方程式は学びながら、その人となりや姿勢には何の尊敬も示さないのが束の自信と自尊だった。

何時だったか。

ユーノが強制的に魔導の知識を教えさせられる途中、束はこんなことを言っていた。

『過去にそこまで興味はないね。そりゃあ推測する材料、つまり知識として有用だけど。どれだけ頑張ったって過去は変わらないんだし、だったらまだ未確定の未来をどうするか考えたほうが面白いもん』

それが、ユーノの感じる篠ノ之束らしさだった。いつだって他人の一步先を行き、今と未来を見つめている。

だのに今、彼女は次元世界の、魔導工学だけではなく自然、経済、政治など、ありとあらゆる科学者の歴史を追っていた。

一体、どうしてだろうか。ユーノは考え、すぐにある可能性に至った。しかし、かなり安易で根拠の無いに思えて、出て来た側から否定した。

確かに束は、なのはと会って大きく変わった。

しかし、彼女の科学的見地までを変えたわけではあるまい。

そう。束が他人に対する考え方を改め、所謂普通の女の子に近い

たとしても、彼女の才能と思考は変わらないはずだ。

では何故、彼女は今、自分の足元に連なる過去を見下ろし、仔細綿密に調べているのだろうか。

「……ねえ、教授」

ユーノは直接、尋ねてみることにした。恐る恐るながらすぐにそのような結論に到れるのは、助手として務め上げてきたことで培った距離感と、束に対する理解なのかもしれない。

篠ノ之束は確かに傲慢で身勝手に我儘だが、偏屈、という訳ではないのだ。きちんと質問をすれば答えてくれるし、何か要求をすればそれが叶えられるかどうかは別として一先ずちゃんと聞いて考えてくれる。

助手であるユーノにのみ向けられる態度なのかもしれないが、少なくとも彼の前ではそうなのだから、何かを聞くことに躊躇する必要はないのだ。それでも若干の恐怖を感じてしまうのは、ユーノの身体に染み付いた束の恐ろしさと彼の肝っ玉の限界を意味しているのだが。

「んー？」

再び取って目を通す本から、顔を離しはしなかったが、ユーノの期待通りに束は応じてくれた。その声色の、興味なさげな軽さはいつものことである。

「どうして次元世界の科学者なんて調べてるの？」

ユーノの問は静かな回廊に響いたが、束は本をめくって読む手を止めなかった。そのスピードは、視覚を使わず高速な読書魔法のそれにほぼ匹敵している。速読どころの話ではなかった。

数秒経つても、束は答えを返さない。だがこれもよくあることだ。何かに集中している時、彼女の聴覚は一部がシャットアウトしてしまっているようで、何度か、詳しく細かく話さないと耳に届かず、無視される。

「教授はそういうの、あんまりしないというか……その、重視しないというか。昔の人がどんな人でも気にしない、って感じだったのに」

ぴこん、と動いたのは、束のカチューシャにくっついていて機械の両耳だ。どんな仕組みになっているのか知らないが、この耳は本人の

思考に直結しているらし。つまり、ユーノの質問がちゃんと聞こえて、束の耳に入っているということだ。

しかし、束の口は開かない。じつと答えを待ち続けるユーノも語らず、訪れる静寂。

暫く続くとじれったくなつて、ユーノはすう、と無重力の空間を移動し、束の側へと近づいた。直接耳元で声を出してやろうと考えたのだ。

そうして、束の斜め後ろに移動する。すると、大判の本に隠されていた顔が見えてきて。

ユーノは、あつ、と息を呑んだ。

物憂げな顔が、見えたのだ。

そう、喜ぶでも怒るでも無く、哀しむでも楽しむでもなく。ただ物憂げに、本の文字へと目を走らせている。

そんな、顔だった。

「教授……」

初めて見る表情だった。明らかに彼女らしく無く、しかし間違いない彼女が浮かべている表情。いったい何がそうさせたのか、それとも何もなしにただ感じたのか。ユーノには何も分からず、言葉を失うことしか出来なかった。

そのままきっかり十秒後、束が本を最後までめくり終わり、取り落とす。そして、斜め後ろ45度で絶句していたユーノに向かって振り返り、震える翠色の目を見つめた。

「ユーノくん」

真つ暗な洞窟の奥から響くように冷たい声が、ユーノの背筋を凍らせた。いつもの粗熱ばかりでハイテンションな声ではない。周りの不理解と愚かさに怒った時の、無機質で平坦な声でもない。ただ、喉よりも腹よりもずっと奥底から聞こえてくるような、そんな声だった。

「な、なに？」

答えるユーノの声は自然に震え、強張る。何を聞かれるのかと言うより、どんな意図があつて自分に声をかけたのかが分からず、怖かつ

た。

「年を取るって、難しいよね」

「……へ？」

意外な発言に、素っ頓狂な声が出てしまった。

年を取るのが難しい？ 起きて寝て、それを繰り返しさえすればそれでいいのに。今まで教授がやってきた何よりも簡単じゃないか。

そう言い返そうとするが、束は助手に無駄口を挟ませず、低い口調を変えずに語り続けた。

「だって、そうでしょ？ 知識はこうして本を読めばすぐ分かる。研究も実験も、やればそれで済むんだから簡単。でも、私の誕生日はもう過ぎて、次は1年待たないと来ないんだ」

そうか、1年。

その言葉に束が込めた気だるさ、面倒さ、そして辛い忍耐を、ユーノは理解した。たった9年で数多くの発明を作り、ロストログアをめぐる事件にもまきこまれた。そんな束は普通の人間と比べれば流れ星が落ちるくらい早く、光り輝いて生きている。

だが、それでも束は9歳だった。

まだ10歳ではなく、11歳でもない。

それだけは、いくら束が素晴らしい発明をしても新しい発見をしても変えられない、そして耐え難い事実なのだ。

「時間移動をしても、身体だけを成長させても、私の人生の年月は変わらない。私という意識が大きくなって……」

長い地下通路を歩いている途中で見たくもない広告に当たってしまったような、戸惑いと苛立ちを発散させつつ束は続ける。

「……大人……になるまでは後、10年も待たなきゃいけない」

10年後。今を生きて、更に自分の雇い主の教授へついていくことで精一杯なユーノは想像すらできなかった。だがしかし、未来を容易く想定できる束という人間にとって、それは手が届くくらい近く見える虚像と、どこまでも遠くにある実体だった。

苛立つてもどうにもならない、どんなに力を尽くしても変えようがない現実。

だから、東は憂鬱になるのだ。

「人間の寿命の限界は120くらい。私は他の人より遺伝子レベルで高性能だから、150年は保つかな。ねえユーノくん。そんなに時間が経って年寄りになった私と、今の私、どっちが凄いのと思う？」

「それは、勿論……」

言いかけた所で、ユーノは気付き、慌てて返答を止めた。東の顔色が更に暗く、いつもそこにある熱を殆ど失っていたのだ。多分、二通りの答えを予測し、自分がどちらを選ぶかが分かかってしまつてそうなつたのだろう。

だが、例え「年をとつた方の教授さ」ではなく、「今の教授の方が凄いきさ」と言つても、東は同じか、更に酷い顔でユーノを睨んでいたはずだ。彼女と触れ合う間に気づいた一番言つてはいけないことは、つまり嘘なのだから。

「そう。私はまだ自分テンサイじゃない。未熟で未練で不完全。そこから抜け出すために何をしようと、何を得ようと。私には唯一つ、『年月』だけが足りないんだ」

早くおとなになりたいな。

東の言っていることはそんな、子供の稚気地味でシンプルな願いのかもしれない。

だが、ユーノは気づく。足りないと言つて東が抱く、とてつもなく大きな悔しさと憤りに。

そして、不安にもなる。

自分がこんな独白を聞いているということは、東が、心中にある大きな負の感情をいつものひょうきんさで隠しきれず、他人にぼろりと漏らすくらいに持て余しているということだ。

危険な兆候だと言える。精神のバランスを欠いた、と言うのは確かに大げさだが、このまま鬱憤が溜まり続けてしまえばいずれそうなるとも限らない。

そして仮にそうなつた時、彼女が持つ技術と才能がどの方向に向けられるのかなんて、考えたくもなかった。

「でも、大丈夫だよ。そんな、無理に大人にならなかつたって」

だからユーノは鎮静しようとする。束の先走りすぎる意志の猛りを鎮めて、なんとかこの場を抑えようとする。それは真から束の事を思った行動だが、しかしあくまで。

「問題を先送りするのは嫌だな、ユーノくん」

と一蹴されるほど、場当たりでその場しのぎな意見だった。

それを自覚しているからこそ、面と言われた彼は一旦、抑えられたかのように口を噤み——しかし尚も諦めきれず、束に向ける目を背けはしなかった。

「でも……教授がもし今、教授の望むような大人になったとして……なのはと、友達になれるかな？　なのはみたいな女の子と、出会えるのかな？」

完璧になりきった天才ならば、自分に異を唱える小さな少女など、そもそも見向きもしないだろうという思考から作られた問いは、束の深層にある少女なのはの存在にまで踏み込んだ、大胆な質問だった。

だがそれは、縫い針が二つの布を貫き糸を通すように、ユーノは束の興味と問答の続きを結びつけたようだ。つまり、ユーノの主張は珍しくも正鵠を射ていたことになる。

「そうだね……うん、確かに」

ユーノは知らないことだったが、束となのはが仲良くなった一件、そのきっかけは、自分の予想を抜け出さないことに束が抱いたつまらないという失望、及びそこから生まれた苛立ちだ。もし、束が自分の感情をコントロール出来るくらいに大人で、全てを脳内で予測し見切りをつけていたとしたら、なのはの言葉に応じることはなく、あんな言い争いも起こらなかつただろう。

そうでなくても、なのはの特異性に目を付けて近寄りはしただろうが。それは決して友達とは言えない。ただの興味の対象、実験用の器具だ。

興味心と、友情は違う。そして後者の方がより尊くて、素敵なものだ。

「そう。だからさ。焦ること無いよ。教授はなのはと友達のまままで、

ゆつくり大人になっていければ、それが一番……なんじゃ、ないかな」
紡ぎだされた結論はやはり、時間稼ぎでしかないけれど。それでも束を止めることは出来た。

「……そう、かな。そうかもね」

臃げな賛同の後、憂鬱で土気色な表情に、ほんのりと熱が戻ったのだ。

ユーノは思わずほっとする。彼はなのはと千冬の友情を眩しく思うのと同じくらい、束となのは、そして千冬と束の友情を守りたいと思っている。彼女ら三人の仲良い姿を、ずっと見ていたいと思っている。

その為には、束が友情の大切さを忘れてはならないと、ユーノは考えている。だから、彼女が自らの激情より友情を先行させてくれたことに感謝の気持ちすら感じていた。

「うん、きつとそうだよ。だから——」

なのはと、後、千冬とも、これからずっと仲良しでいて。

恐らくは助手の領分を飛び越えているけど、口に出さずには居られない、そんな助言は。

「いるかい、篠ノ之束？」

二人のいる更に上層、本局への出入口のある部分からすっ飛んできた、リーゼロッテの登場によって引つ込められた。

「んー、どしたの？」

「父様がお呼びだよ。これからの計画について一言あるそうさ。とつとと来な」

リーゼロッテはお調子者でいたずら好きの使い魔である、というのがユーノの認識だった。出会った初日、イタチの匂いがある、とからかわれ、思う存分弄ばれたことは今でも忘れていない。

とかくそんな性格だから、同じくいたずらと火事と喧嘩と、お祭りのような陽気さを好む束とは、相性が良く気もあうはずなのだが。

何故か、険悪なのだ。

同じく使い魔でかつ双子の、性格として鏡のように正反対な真面目さを持つリーゼアリアとそりが合わないことなら理解できるのだが。

同族嫌悪か、それとも何か因縁があるのか。どっちみち束が何も語らないのであれば、ユーノとしては介入する必要を認めていなかった。

束も人間であるのなら、多少の諍いはあっても当然であろうし。

その辺りの考え方が、誰とでも仲良くさせたいなのはどの違いであった。

「おうけー、とつとつと行きますか」

気に入らなさを全面に押し出しつつ、しかし素直に本の海から抜けだした束がロツテの方へと向かう。後に残された本たちは、時に手で押しのけられ、また足で蹴飛ばされ。無重力の中でそれぞれ好き勝手な方向に散らばってしまった。

ユーノは魔法を使って、自分の方に流れてくる本の角から頭を守らなければならなかった。

「それじゃあ我が助手よ……後片付け、よろしくね♪」

「ほら、とつとつと行くよ」

ロツテに急かされながら、束は上に登って去っていった。

後に残されたユーノは、散らばっている数十冊の本をもとに戻すため、広大な書庫内を律儀に飛び回る。そしてその間、言いそびれた言葉をずっと、頭の中で繰り返し返していた。

それくらい、ユーノは。

それだけでなく、三人の周りに存在する隣人や大人たち全てが。

なのは束と千冬の関係が、壊れないようにと願っていた。

狂気の最中に望むもの（Ⅲ）

「恐ろしいものだな」

時空管理局が所有する実験施設、その中でも特に古代遺産に関する研究を主に行っている一区画の、最深部にある大きな研究室で。二匹の使い魔の片割れを伴い、行われている解析の現状を視察しに来たグレアムは、目の前に広がる光景に只々絶句していた。

古代ベルカの黎明から伝わるとも言われている遺失遺産、闇の書。数百年の昔から破壊と混沌を世界にばら撒き、管理局の時代となった今でも呪われし逸話とともに人々から疎まれ続けている魔導書は今——バラバラに分解されていた。

書の本体から、全666枚のページが残らず抜き取られている。その一枚一枚が壁に貼り付けられており、グレアムから見て左の壁はその全てが、古びた羊皮紙に似たページで覆われていた。

目を閉じて魔力の流れを探れば、施設の魔力炉からページへ魔力が送られていると分かる。恐らく、書から離れば魔力の供給源を失い『死んでしまう』ページを維持するための措置だろう。

ロストログアの一部を恒久稼働させる為のコストは安くなく、施設に供給されるエネルギーの大半を使い潰してしまっている。しかし、紫色に鈍く輝く古代ベルカの文字は、グレアムの視界を余すこと無く圧倒し、そうするだけの価値があると思わせる程に壮大な光景だ。

「ええ、全く大した物です」

グレアムの眼前に立っている白衣の科学者も、同じことを思っているようだった。

彼はこの施設の責任者であり、管理局には内密で施設の深部を貸して貰いたいというグレアムの取引に乗った男だ。提案を聞いた彼は、二つ返事で老提督の策謀を是とし、その秘密主義から本来は局員ですら容易く侵入できない実験施設の中核へ、管理外世界の無名の少女を招き入れた。

本人の名誉と満足のために付け加えれば、彼は特に賄賂をもらったわけでもなければ、何らかの弱みを握られた訳でもない。闇の書とい

う第一級研究対象の価値を存分に知っていて、その為なら多少の法的措置は無視しても構わない、と極めて合理的に決断しただけである。

「この黴びた古紙のように見えるページの一つ一つに、並のロストロギアよりずっと複雑で難解な術式が存在しているのです。その量も常識を圧倒しています。守護騎士システム。所有者のユニゾンデバイスにもなる管制システム。それに転生と自己修復……我々が今まで解析したロストロギアなど、これに比べればもはや論外と言うべきですな」

「そこまでのもの、か」

と、熱っぽく語る男にグレアムは水を指した。だが彼自身、こうして解析の結果を生で見せつけられれば、彼の主張の少なくとも七割くらいは誇張でないと思えてくる。

彼らは今、過去を見せつけられているのだ。

はるか昔、ベルカという世界が次元世界中に巻き起こした戦乱と混沌を生き延び、その禍々しい呪いと混沌を体現した存在が、目の前にある。

それは、大破壊と汚染によって途絶え、新暦という暦を使う今の世界から抹消されたはずのもの。平和な世界に、あつてはならない^{ロストロギア}危険物。

歴史の闇がひた隠してきたそれは、今解体され、全てが詳らかに、赤裸々に晒されていた。

だが、グレアムはふと思う。

こんな、ともすれば正気を失い狂ってしまいそうなほど残酷な光景は、もしかすると誰かへの——気になって見物に来る自分のような、そして脇でぴんしゃか騒ぐ白衣の男のような邪魔者の視界を奪って騙す『見世物』なのかもしれない。

そう。

太古のプログラムの最奥にある、真に価値あるものをひた隠しにするような——

「父様、連れてきたよ」

そこまで考えた所で、使い魔のもう一片割れであるリーゼロッテの

声がスピーカーから響いてきた。グレアムは了承の返事を返した後、「では、君はここまでだ。退出したまえ」

と白衣の男に冷然と告げた。

「な……ですが提督。私もこの責任者だ。貴方方がいつも何を話しているのかは知らないが、秘密主義にも限度がある！ 施設の安全の為に立ち会う必要性も！」

男が喚くその言い草は間違いなく建前で、本音としては一秒でも長くこの場において遺失技術の粋を調べていたい。そんな欲望が表情や仕草からにじみ出ている。

「駄目だ。退出したまえ。三度は言わんぞ」

だが、グレアムの高圧的な態度にやがて屈服し、大人しく踵を返して部屋を出て行った。それと入れ替わりに入ってきたのは、リーゼロッテと、そして兎の耳型機械を頭に付けた、青いドレス姿の少女。

この光景を現出させた才女である、束だった。

彼女の小さい背丈を見た直後、男は更に振り返って束へゆつくりと会釈した。

それは、管理局の中でも相当な地位にいる人物のする物ではなく、上位者に対する尊敬と多少の媚びへつらいを含む、従属の印にも見える。

どうやら彼女はこの地でその並外れた才能を隠すことなく発揮しており、そ施設の科学者全体に畏敬の念を持たれているようだった。

「いやあ、毎度のことながら、お人払いにご苦労さまだね」

男の挨拶を半ば無視してグレアムに向かい合った束は、こんなことを言ってきた。

「必要なことだよ」

「それでもないんじゃない？ あんなに知りたがりなんだから、入れてあげてもさ、かわいそうじゃないかな？」

「へえ、余計なものが入ってもいい、というのかしら？」

アリアが皮肉たっぷりに返答する横で、グレアムは意外な思いを抱いた。様々なことに共通しているが、こと研究や技術開発では他人の助けを借りず自分一人で行おうとする傾向のある束の言葉とも思え

ない。

だがしかし、次の一言でその思いは掻き消された。

「どーせあの程度の人間には分かりっこないって。この超技術の断片だってね」

「言い切ったわね」

「わけわかんないものがいっぱいあるから、ただ凄いと褒めてるだけ。実際は自分が居ないと何も分からず触れもしないから、持て囃しているんだよ」

ならば、いてもいなくても意味が無い。そう切つて捨てる束の価値観に子供っぽい残酷さと天才らしい合理性を垣間見るグレアムだが、だからと言ってドアを再び開き男を迎え入れる必要はないだろう。そも束にとつては至極どうでもいいことなのだろうし、秘密裏に行動するグレアムとしては情報漏洩の危険性を少しでも減らしたいことに変わりないのだ。

「では、本題に入ろう。闇の書の解析と解体について、どこまで進んでいるのかね？ 私たちも専門家ではないから、具体的に、分かりやすく頼むよ」

「はいはい。まあ出資者さんの仰ることだからねー、そこらにいる猫の子でも分かるように噛み砕いてあげちゃうよ」

「ぐうう……」

またぞろ、ロツテとエリアの張り詰めた心を逆なでするような挑発を交えつつ、束は研究室中に広がるアーティファクトや分析機器についての解説を始めた。耳の毛を逆立たせる二匹をグレアムは抑え、束の言葉に聞き入る。

「闇の書は魔力を喰らうことによつて機能を増幅し、666ページ分の魔力が集まった時、初めて全ての機能を動作させる——つてのはもう知ってるよね？」

「ああ、我々もそれを防ぐために今まで行動していたのだからな」

闇の書は、二段階の工程を経て完成するロストログアだ。一段階目は、所有者のリンカーコアが成長もしくは覚醒し、一定以上の魔力量を持つようになった時点で始まる。それが言わば点火剤となつて、書

のシステムの一部——守護騎士システムと最低限の防衛システム——が起動。魔力蒐集の為に動き出す。

そして、666ページを埋める膨大な魔力が集まった時。第二段階に達し、書の全機能が開放されるのだ。伝承として世に伝わる「凄まじい力」である。

優秀な魔導師のリンカーコアですら数ページを埋める程度と換算すれば、その魔力量によって輪転する核のパワーは正に空前絶後。数あるロストロギアの中でも上位に位置づけられる強力さを持ち、もし完全に支配すれば世界の命運を握れるかもしれない。

——とはいえ、余りにも強大な力に人の身体が耐え切れないのか、完成した途端に暴走し、無秩序に破壊をばら撒いてしまうのだが。

「書のページには、それぞれに闇の書の膨大な機能を構築するプログラムが入っているのさ。そのどれか一つが欠けても、書は真の力を発揮し得ない。だからこそ、面倒な蒐集を行わなきゃならないんだよねえ」

「だが……今君はこの施設の魔導炉の出力だけで、その全てを補っているようにも見えるが」

壁一面にベルカ文字が輝く荘厳な光景を前にして、グレアムが最初の抱いた疑問がそれだった。実験施設の魔導炉の出力は、次元航行艦のそれと比しても遜色ない程高い。しかしそれでも、闇の書が求める魔力量には達せないのではないか。

「ああ、そのことね」

問われた束が近場の机から持ち出したのは、大型のPDAだった。それを使えば、この研究室の全システムを統括管理できて、魔導炉からのエネルギー供給も調整できる。その中から抜粋されたエネルギー配分を見せられたグレアムたちは、1ページごとにごく僅かな——それでも、魔力量としてはDランクに相当する——魔力のみが流し込まれていることに気づいた。

「あれには、最低限の魔力だけを流してるんだ。ページとそこにあるプログラムが、自身を維持出来るだけの、全開時とくらべてごく小さな魔力をね？ 大変だったんだよ、主との魔力バイパスを切って

も、ある程度大きな魔力を流せば書の一次覚醒は免れないからね」

束の取った方法とは、一段階目の起動以下の魔力のみ闇の書を活性化させ、守護騎士システムなどを起動させずにその内部を解析する、というものだったのだ。さながら、コンピュータに生じた不具合を診断するため、必要最低限のドライバと機能のみを稼働させる、セーフモードである。

これのおかげで、主でもない束が闇の書のプログラムに介入することが出来るのだ。

そして、今その一つ一つが解きほぐされ、バラバラになって無力化されている。

「ま、中身はスパゲッティコードもいい所だけどねえこれ。間違いない何回か改竄されてるよ。最初っからこんな、言語もごちゃまぜ、コードも何十とあるプログラムを組んだとしたら、そりやもう天才通り越して、狂人の仕業だね」

「なっ……」

「……そうか……」

今まで何回か管理局に確保されて、しかし誰も触れることが出来なかったロストロギア。それが、まるで露天に売られている出自不明の古ぼけたコンピュータの如く論評されている。

リーゼ姉妹は言葉を失い、グレアムは愕然として頭を振った。

誰も見たことのない神秘的な魔導書を解きほぐし、単純な数式と機構の集合体へと変化させる。そんな所業に、グレアムたちミッドチルダ人は一つの歴史を想起せざるを得ないのだ。

それは、ミッドチルダ式魔法の開発史。

かつてベルカの戦乱に翻弄される地方世界の一つでしか無かったミッドチルダは、長きに渡る混乱によって散逸した古代の魔導技術を少しずつ収集し、奇跡としか呼びぶようもなかったそれらを解析し続けていた。

遅々として進まず、成果も期待できないそれを何世代もの間継続し。その果てに自己流の魔導を作り出し、古の御業を現代の技術へ昇華した。それこそが、管理世界のあらゆる場所で使用され、人々の暮

らしを支えているミッドチルダ式魔法である。

地球生まれのグレアムにだって、その偉業の価値と意義は二十分に理解できた。それを使って空を飛び、今の地位まで上り詰めたのだから。

では今、この兎耳のくつついた少女が行っていることはなんだ？

幾多の人間が長い時間を掛けて培ってきた礎石を、たった一人で、しかも二週間足らずで、積み上げてしまっているというのか？

「そうだよ？」

なるほど。

これが、天才というものか。

何食わぬ顔で答えた束を見て、グレアムはそう得心をした。

彼も昔は、その優れた魔力量と空戦の才を祭り上げられ、天才だと持て囃されていたものだが。

本物の天才は、若き日の彼など比較にならない。

常識の境界線の、遙か向こう側に存在するものらしい。

「……なるほど」

気が遠くなりそうな衝撃と戦慄。老いた身と心には中々に応える恐ろしさだ。

しかし、グレアムもここで引くことは出来ない。束が常識外れの天才であるからこそ、その手綱を握り、危うい方向へと脱線させないことが、大人の責務なのだから。

「では、もう少し報告を聞こうか」

「……もう少し？ 何のことかな？ そんなに疲れた顔して、もう十分と思うけど？」

何のことやらさっぱりだ、とすつとぼける束に、グレアムはやんわりと、だが決然として問い詰めた。

「君の才で掴んだものが、まさかこれだけではあるまい？ 闇の書の精細さは理解できたが、その力、破壊の源が何か、私にはまだ分かっていないからね」

その言葉が研究室に響いた一瞬、束ねの顔色は明から暗へと翻った。まるで、片付けの出来ない子供が親からせつつかれた時のよう

に。

「……はいはい、急かさなくてもちやーんと説明してあげますようだ」
あからさまに残念そうな声色からして、やはり隠そうとしていたのか。やはり、側に安全装置たる高町なのはと織斑千冬がいたとしても、この少女に油断してはならないようだ。

東は研究室の奥に進み、16桁のパスコードを迷い無く入力する。そして開いた通路からは、冷凍室のような冷気が噴き出してきた。

「やはり、冷凍魔法による凍結か」

「それしか抑える方法も無いからねえ。永久に凍らせるんじゃないけど、こうでもしないと弄りようが無いくらいに歪んでいるのさ」

セーターを着込まなければ鳥肌が立ってしまう程の冷気など物ともせずに進む東の後を、保温魔法を使いながらついていくグレアム。数十メートルに及ぶ長い通路の果てにあるのは、実験施設の最深部。仮にこの場で次元震レベルの破壊が起こったとしても、その被害を最低限に抑えられるシエルターの中だった。

その中心にあるシリンダーの内部に、それは存在した。

「はい、これがお望みの品……闇の書の闇。自動防衛プログラムがバグで変質して生まれたもので、なんでも『ナハトヴァール』って名前みたいだよ？」

二段階目の覚醒を終え、全ての力を起動出来るようになった闇の書が即座に暴走し、マスターを飲み込んで破壊の限りを尽くすのは、このプログラムが起動し暴走するからだ。

つまりは、闇の書が危険なロストログアに成り果てた、全ての元凶とも言える。

東の果てない才能は、闇の書本体からこの危険なプログラムを切り離すことすら成功させていたのだ。

「これが……」

「あたしらが何年間も、追いつけてきたもの……」

シリンダー内部で氷漬けにされているそれは、濁った紫色をしていて、人間の心臓のような外見をしている。そして凍結されているのもかかわらず、時折ドクン、と動き出すのだ。

その不吉な外見は、主と一緒にいくつもの鉄火場を乗り越えてきたアリアとロツテをも怯えさせていた。

「素晴らしい。ここまで解体できたのならば、後はアルカンシエルでこれを破壊すれば……」

闇の書の闇は掻き消され、はやての命も、貴重なロストログアも保全される。

長きに渡る計画の最終段階が目の前に現れ、先走るグレアムだったが。東は苦笑いしながら首を振り、その安易な解決策を否定した。

「んあー、だめだめ。破壊したって書の一部にバックアップされるみたいでさ。これだけ消しちゃっても、いずれは復活してまた暴走するんだよね〜」

「じゃあどうするっていうのよ！ まさかこのまま永久凍結、なんて言わないわよね？」

余りにも厄介な事実に関口するグレアムに代わって、アリアが質問した。

「違う違う。別にこのプログラムだって、元から歪んでた訳じゃない。ちゃんとバグを直しさえすれば、元の安全なプログラムに戻るんだなあ、これが」

軽々と語る東だが、ことは幾つもの世界を破壊してきた災厄の根源である。

「……だが、本当に出来るのか？」
と、念を押すグレアムだったが。

直後、神をも恐れぬ傲慢と自信に満ち溢れた一言が帰ってきた。

「誰にももの言ってるのかな？ 私は篠ノ之束。この程度の災厄、解き明かして当然なんだよ」

そう。この程度なら、解き明かせて当然なのだ。

冷却室から去っていったグレアムたちの背中が、隔壁によって見えなくなった時。束はそう心のなかで呟きながら、氷漬けの闇を一瞥した。

何が闇だ。

こんなもの、ただの防壁、ファイアーウォールじゃないか。

それがちよつと歪んだだけなのに、闇と称する臆病さ。

馬鹿馬鹿しくてやってられない。

グレアムはこれこそ闇の書の根本であり、排除すべき唯一つの存在と考えているらしいが。実に無知蒙昧かつ愚鈍の極みと言えよう。

「あそこで突っ込まれた時はちよつとびつくりしたんだけどねえ。まあ、所詮はそこまで、唯無意味に年を重ねてきた枯れ木なんだ——」
そこまで口に出した途端、束は溜息を吐いた。それは冷却室の中で一際熱く、その白さには水蒸気に混じって、僅かな怒気も含まれているようだった。

何を枯れ木と言うべきか。彼は老獺だ。現に、誰もが引つかかるだろう『見世物』に惑わされず、彼なりの事の本質を突いてきたではないか。

その素直でない思いが彼女に抱かせるのは、自分への怒り。

ありのままに物事を受け止めず、幼い拘りと自尊心によって歪めてしまう未熟さへの怒りだ。

「……」

しかし。グレアムが闇の書の『真なる闇』を見つけられずに去っていったというのは、これもまた事実である。

束は冷却室の一角にあるコンソールへ、128桁に及ぶパスワードを打ち込んだ。その指遣いはいつもよりも素早く、上物の絹を扱うように丁寧だ。

やがてコードを認証したコンピュータが、鋼鉄のケースを開く。冷気が排出され、唯でさえ氷点下である部屋の温度はますます下がった。

「……あは」

束の顔が喜悦に歪む。

そこにあるのは、闇の書よりも明るく、だがより深い忌まわしさを感じさせる紫色の装丁。そして、今はまだその色を失って漆黒に染まった結晶体。

闇の書の中にあるもう一つの魔導書——『紫天の書』。

特定魔力の無限連環プログラム——『砕け得ぬ闇』または『システムU——D』。
アンブレイカブル・データク

ただの暴走プログラムよりずっと危険で、もし暴走すればミッドチルダの全てを巻き込み破壊してしまう、もう一つの、そして更に巨大な災厄の種。

「……あは、あははは」

だが、束の瞳はそれにすら向けられていなかった。

いくら強大な力も、星を砕ける闇も。

彼女の心を奪った“それ”に比べればたんなるおまけ、付属物に過ぎない。

「あはははは、あはははははは」

八神はやてに接触し、闇の書の封印を解いた時から、束の目に映るものは唯一つ。

紫天の書とシステムU—Dの、更に奥で眠っているそれを幻視し、束は笑っているのだ。

それは。

闇の書——元の名を『夜天の魔導書』と言うロストログニアが作られてから、数千年後の現在まで続くもの。

幾多もの世界を漂い続けた本の、永い永い旅の全行程。

普通の本の文字が教える単なる知識じゃない。

その場で見、聞き、感じた全てのexperience。

それが、あれば。

篠ノ之束はようやく——本当の天才になれる。
なりたいおとなになれて、ゆめをかなえられる。
それも、普通に年を取るだけじゃ得られない、数千年の経験と共に。

「あははははは、あは、あはははははー！」

束は笑い続ける。

もうすぐだ。もうすぐ、何もかもが揃う。

この二週間、ミッドの施設を借り受けられたのは正に僥倖だった。
魔導専門の技術と設備がなくては、書の解析に十ヶ月も費やしてしまっていたことだろう。

そんなの、勿体無いじゃないか。十数年待つことと同じくらい、勿体無い。

早く大人になれば、その分早く夢が叶うのだ。

だが。

宙に浮いてしまうくらいの悦びに紅潮し、狂った笑顔で笑い続ける束の姿を。

凍りづけにされた悪意の塊が、じい、と睨んでいた。

それは綺麗な夢でした（Ⅳ）

ミッドチルダに数あるホテルの中でも、割合高級で高層なホテルの上階にある寝室。いつもの様に早起きをしたなのは、更に早く起きていた千冬と朝ご飯を食べてすぐ外に出た。

その日は何も予定がなく、彼女と共にミッドを観光する友達も、色々親切に案内してくれる使い魔さんも居なかった。旅行で予定がないというのおかしな話だが、現に無いのだから仕方ない。一応の提案者であり音頭取りの束が、何も伝えずにどこかへ行ってしまったのだ。

余りの無責任さに呆れ果てた千冬は、ユーノを道案内に引っ張りだして勝手に出かけている。恐らく、この近くに駐在しているという、武装局員の戦闘訓練でも見学しているのだろう。

そうして残されたのは、なのは一人という訳なのだが。そのなのも思うところがあつて、一人旅に歩き出していた。

ホテルから出て、近くの駅から地下鉄に乗る。交通システムはなのはの世界よりも更に洗練されていて、地下だからといって汚れた蒸し暑い空気に晒されることは無く、新品同様の構内から同じようにぴかぴかな電車に乗って、エンジンやブレーキの騒音すら聞こえない。

深呼吸をすれば自然と感じる力の流れから考えると、どうやら魔力で動いているようだ。ミッドチルダという世界は一見するとなのはたちの地球とそう変わらないが、その根底にある魔法はやはり凄いものだ。

ならば、束が夢中になるのも頷ける。自分から提案した旅行のはずなのに、度々途中で居なくなったり、今日のように何も伝えぬまま消えてしまう理由を、なのははいとも簡単に納得した。

そういう所が、なのはにはある。

「ふふっ」

でもだからこそ、理解も出来る。篠ノ之束という女の子の、心にならなくて近づける。

その嬉しさを鼻歌に乗せ、なのはは電車から降り、地表に出る。辿

り着いたのは、少し前に来たこともある場所だった。

その時と変わり映えしない夏の陽気と照りつける太陽に目を細め、白色に赤いリボンのつば広帽子を被りながら、いつか歩いた道をそのままなぞる。

そして着いたのは、緑色の芝生に白い墓標が並び立つ、静かな平原。少し前に千冬と、フェイトやアルフと一緒に訪れた、実験施設による犠牲者の慰霊施設だった。

プレシアへの墓参りは既に終えたのはにとって、今更来るような所ではない。

しかし、彼女の友達はそのだけでは終わらせないだろう。

そんな不思議な直感があった。

いや、直感だけではないのかもしれない。いつも自分の望むものに我儘で、つまり全力全開な彼女は。たった二つのお墓にだけ花を添えるなんて、半端な真似はしない子だと、分かっているし。

果たして彼女の予想通り、なのはが見渡す限りの墓に、かつてプレシアの墓で見たのと同じ、白いつぼ状の花弁がいくつも連なっている花が供えられていた。

うむうむ。と頷く仕草。

それから墓石の並び立つ間を歩き、広い墓地を一方向に突っ切り進んでいく。

別に道案内があるわけでも、事前に待ち合わせしているわけでもない。

なのはには、何故だか分かっってしまうのだ。

自分が進むべき道が。行くべき所、見つけるべきものがある場所が。

いつもそうだった。

ユーノやレイジングハートに出会い、魔法の力を手に入れた時。

嵐と傀儡兵の攻撃の中、プレシア・テストロッサに相見えようとして、時の庭園に突入していった時。

——そして、一人で寂しい思いをしていた友達の元へ向かった時も。

いつだって、どんな時だって、なのはには分かっていたのだ。だから、今も分かる。

自分が何処に行けばいいか、自分を求めている人が何処にいるのか。

歩いた先に、見えるウサミミ、踊るドレス――

ほら、こんな風に。

「こんにちは、束ちゃん」

ぴよこん、なんてわざとらしい音は、きつと機械のウサミミに仕込まれたスピーカーからの音だろう。音が鳴った少し後にゆつくり振り返ったフリフリドレスの女の子は、その腕に花でいっぱい網籠をぶら下げていた。

「あは、なのちゃん。こんにちは」

静かで少し鬱蒼とした墓地に似合わぬ、からつとした笑顔。

周りの人間は口を揃えて「薄っぺらい」だの「気味が悪い」と評するけれど。なのはからすれば、いつどんな笑顔も本心からのものに見えるのだ。だって、例え薄っぺらくて酷い笑顔だとしても、それが束の本心を表すものだと言えるから。

素知らぬ顔で人を騙すように見えるけど、実は案外素直な子だというのが、束についてのなののはの見解だ。

「意外だね、こんな所まで来るなんて」

「んとね？ 束ちゃんだったらこうしてるだろうなあ、って思ったんだ」

「そっか」

それ以上の言葉は要らない。なのはは束の奥底にあるものを理解していたし、束はなのはがそうすることを許している。

束が籠から白い花を取り出して墓に備えようとした時、なのはもまた、籠に手を入れて一房の花を手にとっていた。

「手伝うよ。どれくらい終わったか分からないけど、この辺り全部一人でお供えするのは、時間かかるでしょ？」

「迷いもせずに束は頷く。」

他の誰かではなく、なのはが供えるのならば、自分が直接手向ける

のと同じことだと思っっているのだろう。

それからは互いに何も喋らず、ただ墓前に花を供えて祈る。

小さい籠からいくら取っても花は減らない。数百平方メートルに及ぶ墓地の全てに献花するのだから当然だが、あの木網の何処に何十房も入っているのだろうか。きつと、新しい発明品なのだ。

暫く黙々と続けた後、なのは何かを確認するように尋ねてみた。

「ねえ、束ちゃん」

「ん？ どしたのなのちゃん？」

「一杯あるよね、ここのお墓。藤見台にあるのより、ずっとおつきいし」

日差し照りつける中、それを反射して眩く光る大理石の群を見れば、まだ花が供えられていない墓もたくさんある。プレシアの墓に供えたあの日から、束は隙を見てここに出向き、花を置き続けていたのだろう。だがそれでも、恐らくは墓地の半分も回ってはいまい。束の手の早さを知っているのはでさえ、そう思ってしまうくらいにこの墓地は広大だ。

そしてそこで祀られている人間の全ては——実験や事故によって失われた命、言わば科学の犠牲者である。

「そうだね。たかだか墓地にこんな土地を使っちゃうなんて、ちよつと非効率的だよね」

束の、ある意味一言に込められた意味が、なのはには手に取るように分かる。

こんなに犠牲は要らない、ということだ。

常々自分の知識と技術を磨き、より良い物を発明し、つまらない世界を楽しめる色で塗りたくろうとする束だが、その過程で誰かを——少なくとも、自分の見知っている誰かを失ったりすることは、決して許しはしない。

だから、なのはがピンチのその時に、白式を千冬に授け、自らサポートしてなのはを救出させた。そして仮にそれが失敗しようと、プレシアとの交渉で制限をかけて、なのはと千冬を失う事だけは避けようとした。

無論それだけなら、友達や知り合い以外の、赤の他人ならばどうでもいいということになる。

しかし束は今、プレシアとアリシアの墓だけでなく、他の墓にも花を手向けている。大昔に、自分とは全く関係のないことで起こった犠牲を、科学を信奉しそれを成す者であるというだけの理由で、鎮魂しているのだ。

そういう、昔の彼女なら非効率だと切り捨てたことまで行うのだから。

多分、束は変わったのだ。

自分と、自分の友達のことしか考えない孤高の天才ではなくて。他の誰かの痛みも悲しみも理解して、汲み取れる女の子に。

「だよね」

だからなのはは、一見残酷に聞こえる言葉へ、笑顔で同意する。

抱いた解釈が単なる早とちりで、本当は言葉通りの事だけを考えているのかもしれない。

けれど。

なのはは、束を信じている。

彼女はとつても頭が良くて、でも一人の人間で、ごくごく普通の女の子なのだ。

「ねえ、なのちゃん」

「なあに、束ちゃん？」

今度は、束の方からなのははに尋ねて来た。丁度籠の中の花が空になり、二人で出口へ歩いている時のことだ。

「なのちゃんはき、大きくなったら、どういう大人になりたいの？」

意外な質問だった。

なのはは立ち止まって少し悩み、そして、自分の首に下げているデバイス、レイジングハートを左手で握りしめながら答えた。

「今と、そんなに変わらないかも……魔法をもっと練習して、一人前の魔導師になって……この力で、誰かを助けることが出来たらなっと思うの」

この手にあるのは魔法の力。千冬も束も、アリサもすずかも持つて

いない、なのはだけが持つ特別なもの。それを才能と呼ぶのなら、出来る限り、誰かの助けになりたい。

アニメの中の魔法少女みたいに、草木を生やしたり傷を治すことは出来ないし。飛行はとにかく、射撃と砲撃は言ってしまうえば誰かを傷つけるためのものだけだ。

なのははそれでも、誰かを——フェイトを助けられた。そして、戦った後、友達になれた。

それなら、と思えるのだ。

この手の力で、自分の正義を貫けると、信じていることが出来るのだ。「そっか、なのちゃんらしいなあ。素敵だなあ」

「えへへ」

思わずはにかむなのは。自分の心に抱く夢を友達に素敵と褒められれば、悪い気はしない。

そして、自分について考えた時、同時に気になったことを確かめたくてこう言い返した。

「ねえ、束ちゃんはどうかなの?」

「私?」

「うん。私だけ教えるのは不公平、でしょ? ね、教えて?」

その間に、束はなのはと違って、何も考えず即答した。

ずっとずっと前、生まれたことから、答えをその胸に抱いているかの如くに。

「私はね。天才に、なりたいんだ」

天才になりたい。

そう呟く束だが、今の彼女を言い表すに一番の言葉こそ、天才という二文字ではないか。

初めて出会った魔法をたった一ヶ月で把握し、分析し、応用し。既存の兵器を凌駕する インフィニット・ストラトス I S を作った彼女は、天才以外の何物でもない。

「へえ……私から見ると、束ちゃんはもう大天才に見えちゃうよ」

なのはもそう考えているのか、謙遜するような言葉でその真意を問う。

すると、束は——ビターチョコのように甘くて苦い、切なげな笑いを見せて、こう答えた。

「そうかな？ 本当に、そう？」

綺麗な髪の色と同じ、若紫色の瞳でじっと見つめられて。なのはは、何も言い返せなかった。

「昔からね、馬鹿だなあ、って思ってたんだ」

唐突に挟まれてきた文節が、更になのはの息を潜めさせ、束の独白を止めさせない。陽は既に真上へ登っていて、墓地の真ん中で佇む二人の少女を照らしている。

やがて、風も止んで、木や草がざわめく音も消え。時間が止まったかのように静かな空間で、束の平坦な声のみが響いていた。

「本に出て来る科学者は、皆間抜けで滑稽だった。一つのことをするだけで、何回も失敗して、時には自分や他人を傷つけて。酷い時には何百人と犠牲にして、ようやく何かを成し遂げる」

人類の歴史が始まり、科学という概念が生まれてから。実験と失敗は常に繰り返され、そしてその度に、何らかの犠牲が生まれて来た。

グライダーを発明し、人が空を飛ぶ第一歩を築いたオットー・リリエンタールは、試験飛行中に墜落して死んだ。ラジウムを発見し放射能研究の道を拓いたキュリー夫人は、実験によって自ら強い放射線を浴び、被曝した。

実験の失敗、データの不足が取り返しの付かない犠牲を招くことも多々あった。アポロ13号。アトミック・ソルジャー。そしてチエルノブイリ。

「くだらないと、愚かだと思うでしょ？ 私はそうだった。こんな大人になるものかって、そう思っただけで、本を閉じた。こんなつまらない、愚かな奴らの物語なんて、二度と読まない」と誓ったんだ」

そう言い切るのは、束の潔癖さがさせることだと、なのはは考えた。彼女は完璧主義者で、何事にも十全に準備をして挑み、決して失敗を許さない。失敗を忌み嫌っているのだ。だからこそ、どう事が転んでも自分の思う通りになるよう計画を立てる。

いつもそう。起きる可能性のある事態全てを想定するのもそのた

めだ。どうなっても結果オーライ、七色のハッピーエンドで終わらせるために。

「でもね」

東の声が、少し震える。認めたくない。でも認めなければいけないことを、幼い心で精一杯噛み締めて、飲み込むように震えている。

「気づいちゃったんだ……同じなんだ、って。今の私は、私が散々馬鹿にして、吐き捨てた——犠牲ばかり生み出す科学者と、同じなんだ、って」

「違うよっ—」

考えるよりも先に、言葉が出て来た。

震える声を聴き続け、暗くなる瞳を見続けるのに、耐え切れなかったのだ。

「東ちゃんは、そんなんじゃない！　だって、私も千冬ちゃんも、ユーノくんだって—」

ただの一度も、犠牲にはしなかったじゃないか。

そう叫ぶ声は、東の一言によつてあつさりと遮られた。

「プレシア・テスタロッサは？」

「……っ—」

「私の楽しいお遊びは、かわいそうな一人のおばあさんを、犠牲にしなかったと言えるのかな？」

なのはの脳内には、東を弁護するための言葉が渦を巻いている。

彼女は本来、フェイトを虐待しジュエルシードを狙う悪人じゃないか。次元犯罪者として裁かれ、冷凍刑に処される身だ。それに、過酷な実験で身体をすり減らし、元より寿命は短かくて——

しかし、その全てが感情による上っ面だけで、意味のない擁護だと分かっていたから。

何も言えず、ただ聞き続けるしか出来なかった。

「そう。私はプレシア・テスタロッサを犠牲にした。例えどんなに愚かでも。私を利用しようとしていた、残酷な犯罪者だとしても。私は一人の老婆を使い捨ての駒にして、切つて捨てて、友達に成敗させて、それで、それで……」

続く言葉は掻き消える。

そう。仮にどんな理由がそこにあると、どんな経緯が絡んでいたとしても。

篠ノ之束が、自らの発明品¹を実験⁵するため、プレシア・テスタロツサを当て馬にしたことは、変えようがない事実であった。

そしてそれは、即ち束が、自ら忌み嫌っていた凡百の科学者たちと、同じようなことを繰り返してしまったということなのだ。

「多分、なのちゃんと魔法とISとが、余りに楽しくて。皆を輝かせるために、出来るだけのことがやりたくて、夢中で忘れちゃってたんだろうね」

束が語るのは、事件の最後の最後で気づいた罪の、告白。誰にも言えない負い目を話せるのは、一番の友達にだけ。

「ほんと、馬鹿だよ。目の前の輝きに眩んで、足元にある大切なもの、捨てちゃいけないものを忘れちゃう。そんな私は天才なんかじゃない。ただの女の子」

なののはの胸は、締め付けられるように痛くなった。

常に自分を正しいと信じ、周りの何もかもを無視してその正しさを貫き通す。そういう生き方をしていた親友が今、自分の過去を後悔し、歯を食いしばって悔しがっている。

それは、なののはが望んでいたこと——他人の素晴らしさを知ること——なのかもしれない。他人の心を知らなければ、自分の非を認めることは出来ないとも言えるのだから。

だが、なののはは。

綺麗で大きなダイヤモンドに石がぶつけられ、傷がついたような。そんな気持ちを、今の束に対して抱きもするのだ。

「なのちゃん？ 本物の天才っていうのはね？ 犠牲なんて、最初から出さないんだ」

束は呟く。まるで、聖書の一節を小声で暗誦するように。天を見上げて、自分の夢見る理想の自分を、小さく、しかしはつきりと宣言する。

「全部。全部を救って犠牲にせずに、それでも尚妥協せずに科学を進

歩させる。この世界の皆が幸せになれるように、どこまでも進み続ける存在なんだ。それくらいじゃないと——天才だなんて言えないんだよ」

「……たばね、ちゃんっ……」

その理想の気高さ、大きさに、なのはは圧倒された。なのはは自身、自分が相当に理想家であり、度々現実離れたお題目を唱える人間だと、人から指摘されて分かっていったが。

東のそれは、なのはのそれとは比較にならないくらい、桁が違っていた。

全てを救う？

妥協はしない？

皆を、幸せにする？

そんなことが出来るはずがない——と否定はしたくないけれど。奇跡が何十個起こったとして、それでも至難の業ではないか。

それこそ、全能の神様にだって、実現できるかどうか分からない。

そんな在り方を——篠ノ之東は是として、追い求めている。

ああ、なんて、大きいんだろう。

なのはと東は同じ年で、背もそんなに変わらないのだが。

なのはの目には、自分より遥かに大きな背をしている、成熟して、胸も大きくて、そして飛び切りの笑顔で笑う、大人の東が見えていた。

「なれるよ」

だから、なのはは口を開く。お腹の奥から湧きだして、喉でつかえそうなくらいの勢いで、東の夢の、壮大さと輝かしさを称える。

「東ちゃんなら、なれるよ。本物の天才に。ぜったい、ぜったいになれるよ……！」

そう。

なのはは東を変えていた。自分とたった一人の親友しか愛さない女の子から、この世界全てを愛する、大きな、とても大きな女の子に。だから、嬉しさと愛しさが身体の中で爆発する。思い切り抱きついて、その胸に縋り付いて、泣きじゃくって、それでも笑顔で。夢は叶うと繰り返し返していた。

「ありがとう、なのちゃん」

抱きしめ返す束の目は暖かく。冷たい自分に温もりをくれる陽だまりを抱きしめるように、なののは頭を撫でながら、自らも、目を潤ませていた。

その時、二人は真に友達同士だった。互いに認め合い、受け入れあい、肯定し合う。そんな二人が一緒なら、どこまでだって飛んでいける。どんなに厳しい現実も、砲撃魔法でに撃ち貫いて、指先でバラバラにして。夢幻のような理想と正義だって。本気で信じて、叶えていける。

そんな、熱くて硬い二人の絆。

かつて海鳴の月の下で誓い合ったそれは、今再び、ミッドの太陽の下で誓約されていた。

だが。

「あれ……っ?」

唐突な、コール音。

千冬辺りからの呼び出しかと、慌てて離れるなのはだが、ポケットの中にあつた携帯は、何にも反応していない。見ると、折りたたみ式の受話器を取っていたのは、束だった。

「もすもすう? ったくもお、一体どうしたの? 私は今ね、なのちゃんと……」

神聖な瞬間を邪魔された束は怒り心頭で、ともすれば携帯を握り潰しそうなほど力を入れながら、怒りに少し足りないくらいの苛つきを込めて応答したが。

「……え? ……え、え……」

一言ごとに口調を緊張させ。信じられないという顔で、かくかく、

と頷いた後。

「分かった、すぐ向かうね。全部そのまま、触らないでいること」

短くそう言つて受話器を切り、たんつ、と地面を蹴つて駆け出した。

なのはの眼前で長いツインテールが揺れ、真後ろへと消えていく。

「束ちゃん……!?!」

驚きながら発した一言が、テールの端に引つかかり、束の動きを止めたようだ。くいつとひっくり返り、いつもの薄っぺらい笑顔を、なのはに見せた。

「ごめんね、急に用事が入っちゃった。じゃあ、またね」

「え……」

ありきたりな、言い訳じみた言葉とともに、ウサミミを揺らしながら束は消えていく。なのははそれを、疑いと戸惑いを元に押し留めることも出来た。

けれど。

なのはは、束を信じている。

だから何も出来ずに、ただ黙つて、彼女を見送ることしか出来なかった。

機械仕掛けの神はいない

闇の書が安置されている研究施設。その上層にある会議室に、グレ
アムと、二匹の使い魔がいた。部屋は無造作に積み上げられた書類に
よって散らかっている。至る所にあるそれらの資料は、闇の書に関す
る研究成果だ。無造作に積み上げられた紙の山とホワイトボードに
貼り付けられた詳細なグラフなどを見れば、つい昨日まで、この場で
篠ノ之束という一人の天才が、ロストログアのに全力を投じていたこ
とは容易く理解できる。

だがしかし、今まで常に発見と解明の熱気が充満していたその部屋
は。三人の異邦者の沈黙によって、苦悩と絶望に凍りついていた。
「状況は?」

乱暴に開けられたドア。引き戸の自動開閉だがしかし、開閉すると
きの不吉なぎやぎい、と歯車が鳴く音を考えれば、機械が反応するよ
りも早く、手でこじ開けられたようにも見える。

ついさつきまで公共墓地にいた束が、可能な限りの早さで施設へと
戻ってきたのだ。地下鉄から出た後も常に走っていたようで、額に大
粒の汗を浮かべ、自慢のドレスをよれよれにしていた。

そんな束へ、グレアムは椅子に座りながら空中投影式のディスプレイを半回転させてみせる。

齧り付くように除いた束は、そこに映っているものを見て——横殴
りで気絶させられ意識を失ったかのように、瞳孔を散大させた。

「……………」

そこに映し出されていたのは、ミッドチルダではなく海鳴の、市立
病院の一室。集中治療室ICUと思われる白い大部屋では、この施設に負けず劣
らぬくらい数多くの機器が稼働し、ベッドに寝ている患者の様態を示
している。

その周りをせわしなく行き来する白衣の医者たちが浮かべる顔、表
す雰囲気。そして、ちらりと見える心拍数のメーターからして、状況
は予断を許さない、極めて危険なものと分かる。

そして。

呼吸器と点滴を打たれ、静かに胸を上下させているのは、束と同じくらいの女の子だった。

「そんな……はー、ちゃん」

息が出来ず、掠れるような声。既に闇の書から切り離し、呪いから開放したはずの、八神はやての姿がそこにあつた。

束の手が震えた。意識がコントロールを失ったのか、指があてども無く、のたくるように動いている。その脳裏には即座に数万通りの状況のシミュレーションが流れていく。いつもよりも急速で、そして膨大な思考上の試行を経た後に、束はこの予想外をもたらした原因に気づき、グレアムへ襲いかかるような勢いで近づいて述べた。

「……『ナハトヴァール』？」

「その通り。ご名答だな」

グレアムの言葉回しは決して皮肉ではない。予想外に直面した時人間が等しく抱えるどうしようもない混乱の中、それでもはつきりと正答を導き出した束への感嘆だった。

闇の書の自動防衛プログラム『ナハトヴァール』は、魔法と他にも超低温下という科学的措置により凍結封印されていたが、それでも尚無限再生の応用により機能を維持し、回復し続けていた。

とはいえそれは元より束の望む所でもあつた。完全に凍結してしまえば改竄することもままならない。あえて破壊せず、凍結による不完全な封印を作り出して解析し、今まで解き明かしてきたプログラムたちと同じようにバグを修正する。

闇の書の闇から暁を見出し、真なる古代ベルカの遺産を我が物とする。それが、束の最終目標であり、闇の書へ触れた時に編み出した、この事件の最も理想的な解決法だった。

だがしかし。

幾千年に渡って、積もり積もった人の業。本来、集めた知識と魔導を後世へと伝えるはずだった魔導書を、その強大な力による破壊と殺戮のために作り変えた者達の悪意が今、それを阻む。

「監視対象——八神はやての身体から、膨大な魔力が吸われているわ。まるで、今まで与えられていなかった餌を貪るようにね」

冷淡に報告するアリアが束に向けるのは、侮蔑と皮肉に満ちた目線だった。元から信用しては居なかったし、やることがいつも独断専行に過ぎしかも秘密主義を貫いていたのだから、疑心を深めていて当然である。無論、双子のロツテも同じような目をしていた。

「八神はやてとの繋がりはもう途切れた……んじや、なかったのかい？」

「……」

「あの娘はもう巻き込まれない！ そう言っただけであたしらに胸を張ったのは、あんただ！ それがいまさら、こんな……!!」

止せ、とグレアムが手で押し留めるが、しかしてロツテは止まらない。

彼女とそしてアリアも、八神はやてという少女を側から監視する過程でその為人を知っている。

だから嘆く。覚悟を一度は決めたにしても、それを取り払うことが出来た後に再び強いられるのは、尚更辛いことだ。

その罵倒と、辛辣な目線に束は答えない。ただディスプレイや書類のデータに目を向けつつ、思考を続けるだけだ。無関心にも見えるその態度が、二匹を更に苛立たせるのは当然だった。

「このっ……なんとか言えっ！」

「ロツテ！」

ロツテが束のドレスの襟を掴み、引っ張り上げる。子供の背丈は案外簡単に持ち上がり、束の両足は宙ぶらりんになった。束の頭は重力に逆らわず顎を引き切った形になり、それにロツテは井戸を覗きこむように顔面を近づけて覗んでいる。

流石に荒事が過ぎるとアリアは止めに入ったが、感情としてはロツテに加担したいのでその手はどうしても緩くなってしまう。

「……わたし、は」

それ以上、束は答えられなかった。

彼女が生きてきた短い人生の中で初めての、致命的な『予想外』だったからだ。高町なのはや時に織斑千冬が限界を超えて織りなす素敵な奇跡ではなく、積もり積もった人の悪意が引き起こす不愉快なアク

シデントであった。

「もういい、ロツテ。これ以上彼女を責めても、どうにもならん」

見かねたグレアムが椅子から立ち上がり静止する。束は宙から降りされたが、よれよれになった襟をそのままにただ、立ち尽くしていた。顎を強く噛み締め、額に皺を浮かべながら。

彼女には何も出来なかったのだ。今まで愚かだと馬鹿にしていた者から非をなじられ、責められて。何も反論できず、同じく蔑んでいた老人に止められるしかなかった。それは耐え難い屈辱だったが、幼稚な感情を火種にし自らの贅力を振るうことはさらに屈辱的だ。理知的な天才である自分を否定してしまうことになるのだから。

それからは、二人と二匹、ひたすらに無言で動かない。動きようがないのだ。

束は自分が闇の書をどう弄くろうと、ナハトヴァールの暴走は止まらないと分かっていた。グレアムとリーゼ姉妹は、そもそも何も手を打てない。

このままただ、はやての衰弱に任せて彼女の命を科学の生贄に捧げるしかないのか。

だが、グレアムは一つだけ、現状を打開する策を胸に秘めていた。

「こうなっては、致し方あるまい」

そう言つて、束に目線を向ける。それだけで束はグレアムの腹案を理解し——露骨なまでに敵意のある目線を向けた。

「……そう、睨まんでくれないか？」

「何を言つてるの。それがどんなに情けないことなのか分かつて言っているのかな？」

今まで、陽気な表側に取り繕われながらも束の心中に漂っていた老人への反感。それが一気に吹き出て、無機質な部屋を薄黒い空気で汚染するかのように溢れていた。

釣られて、二匹の使い魔は臨戦態勢を取る。今までのような警戒だけよりも刺々しく、すぐにでも魔法を放つことが出来るようにも見えた。自らのマスターへ強い害意を向けてくる存在であるなら、例え味方であろうと立ち塞がり、守るのが使い魔の役割である。

「そう。確かに情けない。ロストログアに対する、我々の技術と科学の敗北と言えよう。だがな」

しかしその二匹はやんわりと脇に押しつけられ。グレアムはあくまで束に目を向け語りかける。

彼女の良心に。

彼女の髪の毛を、二つ結びにする心中の一分子に。

「それで、彼女は助かるのだ——アルカンシエルで、ナハトヴァールを破壊しさえすれば」

グレアムが提案し、束が無言の内に理解したのは、かつて彼らの会話の中で出て一度は否定された解決のための単純な方策であった。

闇の書のバグであり、ただの魔導書を破壊的なロストログアにまで歪めた根本であるナハトヴァールを含めた、闇の書の中枢部をアルカンシエルで破壊する。

アルカンシエルは、管理局が保有する武装の中でも屈指の殲滅力を誇る魔導砲だ。空間歪曲と反応消滅により目標を完膚なきまでに殲滅できるそれを使えば、無限の再生力を誇るナハトヴァールといえども一溜まりもないのは明らかだ。

かつて——10年前、グレアムが闇の書をクライドと彼の艦船ごと破壊しようとした時は、転生システムの発動により間一髪で逃してしまったが。対象が防衛システムのみであるなら問題ない。

ナハトヴァールさえ破壊してしまえば、闇の書は元の無害な魔導書に戻り。はやての命を蝕んでいる魔力の過剰蒐集も終わるのだ。

しかし、束は頑として譲らず首を横に振り続ける。

「でも、それは！」

「そうだと。全てが終わるわけではない。君が言った通り、システムそのものを破壊しても、ナハトヴァールは書の中の残骸から再び、再生を始めるだろう」

ナハトヴァールの無限再生能力はバグによって異常なまでに高まっている。例え本体が完全に消滅しようとも、残骸の一欠片が残ってさえいればそこから再生し、復活できるのだ。

そして、残骸は書の至る所に根を張っている。全てを消滅させるに

はそれこそ書を全てアルカンシエルで焼き払わねばならない。それをすれば転生機能を発動させてしまいうだろうし、未だパスの繋がっているはやてへどんな影響が出るかも定かではなかった。

「確かに一時凌ぎだ。それどころか、今を安寧に乗り切ったとして、無理矢理に防衛システムを消滅させることが、将来的に書にどんな影響を及ぼすかはわからない——だろう？」

「……そう。そうだよ」

だから、東は、目の前にある安易かつ効率的な解決策を、どうしても認められなかった。

いつか復活するのなら、それはまだ脅威と呼ぶべきだ。八神はやては確かに一時の平穩を得るだろうが、それはあくまで一時のこと。ナハトヴァールが復活すれば、はやてはまた消えない病に苦しみ、同じことが繰り返されるだけだ。

それに。

闇の書の中枢部をまるごと消滅させるということは、つまり——紫天の書とシステムU—D。そして、東の求めているストレージをも、まるごと消し飛ばすことなのだから。

「……」

ちらと、ウィンドウを見る。明かりの消えたベッドの上で、苦しみ呻くはやての姿。

これでは持って、後三日ほどだろう。

短い。あまりにも短すぎるタイムリミットだった。

実際東は、闇の書の深奥に手を伸ばしかけていたのだ。ナハトヴァールを凍結し、紫天の書を発見し、そしてお目当てのストレージを見つけ——ようやくと、全ての呪いと凍結を解き、全てを解放しようとする所だったのだ。

もう少し。もう少しで全てが終わるはずだった。一週間前に、なのはたちとともにミッドへ旅立って。あと1週間。いや、不眠不休で勧めれば、後5日で全ての作業を終わらせられるはずだったのだ。

それなのに。

5から3を引いて、2日。

48時間。

その時間はあつという間だけど、今の束には深く、長く、遠い溝だ。

「……今夜、決行する」

そして、グレアムは更に最後通告を突きつけた。3日のタイムリミットは、僅か半日に縮まった。

「君が全力を尽くして、奇跡を起こす——という可能性を前提に考える訳にはいかない。八神はやての病状がこの先、どう悪化するかも分からない。だから、その前に行動をする」

「……」

「もし君が反駁したとしても、私たちは実行する」

束の、殺意にも匹敵する鋭い視線に晒されて。しかし大いなる巖のような荘厳さと頑固さを表に出しながら、グレアムは冷淡に語り続ける。

「君が実験施設の最深部、ナハトヴァールのある区画に単身で立て籠もろうと。私達はアルカンシエルを撃つだろう。民間人の避難は、全て数時間で終わる。分かっていると思うが、元からそういう風に作られているのだよ、ここは」

逆らったら殺す。そうとも受け取れるグレアムの言葉は決して脅しでは無かった。

この地区は、魔導実験用に開拓され整備されている。であるから、地下に張り巡らされた地下鉄網、そして大都市並のインフラと避難のマニユアルを使えば。この地に住む住人は——異世界からやってきた数名の子供も含めて、安全かつ早急に避難できるだろう。

ならば後は、無人の都市にアルカンシエルを打ち込んでしまえばそれでいい。グレアムの計画は衆目に晒され、数年を掛けて作られた大都市は塵に還る。しかし、危険なロストロギアの存在を完全に消去し、たつた一人の少女を守れるなら。自らの立場や名誉、命すらも投げ出していい。

そこまでの覚悟が、この老人にはある。枯れ木のような身体が、今は硬い鋼鉄のように見えて、束の前に立ち塞がっていた。

「……………」

さて、どうすればいいか。こういう時、篠ノ之束は何を優先すべきか？

束の心の中、答えはあっさりと弾き出された。

見捨てればいい。

何を？ ……八神はやてと、ギル・グレアムを。

研究施設の最深部に立て籠もるのだ。ただ籠もるだけではグレアムにアルカンシエルを撃たれるが、ならばここら一帯の都市システムをハッキングで掌握し、民間人全てを人質にすればいい。さしものグレアムも、何百人の命と一人の少女の命を天秤に掛けて計ることはしないだろう。

それは、一桁の足し算引き算よりも簡単な、心のかたちをあるがままに表現することだ。

篠ノ之束がこれまで一体、何をやってきたと思うか。とことん極めて自分本位。友さえ遊び道具にする我儘と、他人を何とも思わぬ精神性。ならば、同じ街に住んでいるだけの9才の少女と、復讐に似た執念に取り憑かれた哀れな老人一人犠牲にすることを、躊躇うはずがないではないか。

そうだ。妥協をするな。自らの欲するまま、思うままに掴みとれ。

踏みじれ。操れ。利用しろ。それが今までの私で——私は、それに、後悔など——
違う。

それはある意味で妥協だ。許されざる妥協だ。

なのはと墓場で語り合った時、無限書庫で異世界の科学者の愚かさを目に焼き付けた時。そして、八神はやてと出会って、ツインテールを作った時に、心の中で誓ったではないか。

今回は誰も犠牲にしない。傷つけることも殺すこともせず、呪いを解いてみせる。

それが、それこそが、何より大事な前提条件。

この胸の中にある夢と、希望と。それから少しのあこがれを紡ぐ、このTailsに懸けて。

「……気持ちは、痛いほど分かる。受け入れられない二者択一。そう

なんだろう」

苦悩する束に語りかけてきた老人の姿は、巖を通り越してセメント
漬けのコンクリートのように見えてくる。

分かる？

誰に分かるというのだ。この身を裂くような気持ちだが、たった一人
以外の、誰に。

「だが、決断は避けられない。厳しいことを言うようだが、元よりこの
世界には、どうしようもないことばかりがあるのだよ。これも、その
一つだったという訳だ」

捨てる為の決断？ どうしようもない？

それは凡夫の理屈。つまらない現実。

どうしようもないことをどうにかするのが天才だ。つまらない現
実に色を付けるのが天才だ。

そう。私は天才、篠ノ之束。私は、私には。

「君はまだ若い。自分に不可能は無い、なんだってやれると本気で信
じている。それは得難い純粋さだし、だからこそ事態をここまで改善
できた」

なんだって出来るんだ。

友達が手に入れた不思議な力を理解することも、友達が望む翼を
作って上げることも、友達に仇なす敵を手の平で操ることも。

常人には出来ないことだって、私には出来た。

あの老人は勘違いしている。

この自負は、拘りは、才能があるだけの、子供の幼稚な思いなんか
じゃない。

子供でも大人でも、若くても老いても、天才というのはそういうも
のなんだ。そういうものであるべきなんだ。そういうものでなく
ちやならないんだ。

そうでなかったら。天才以前に散っていった者たちの、夢を、望
みを、願いを、祈りを。誰が叶えるというのだろう。

幼稚で浅はかで、でも純粋で綺麗な願いを、叶えてみせる。それが
天才なんだ。

——でも、それなのに。

「だが、ここまでだ。持ち時間はいっぱい、アンコールは無し。すぐに幕は閉められる。そう——君の踊る舞台は、これでおしまいなんだ」

ウサミミ衣装の道化師は、白髭の座長にそう告げられて。何も、言い返せやしなかった。

けれども、幕は未だ降りず

織斑千冬がそれを伝えられたのは今から二時間前。武装した魔導師の訓練風景を堪能し、いつも無愛想な彼女にしては珍しく唇の端を吊り上げながらホテルに帰ったその時だ。ふらりと現れた束の言うことは唐突だったが、いつものこと。千冬は大きく溜息をついた後、しようがなく、彼女の気まぐれに付き合うことにした。

束に言われてまず訪れたのは、ホテルの直ぐ側にある公園だ。その中心にある円周形の屋根付きベンチの中心点には既に、バーベキュー用のコンロが安置されていた。そろそろ日が沈む空には雲ひとつ無く、束の目論むことをするには絶好の日和と言えるだろう。

しかしこの未知の国、通貨どころか物販の体制も違うであろうミッドチルダで、一体何をどうしてコンロやら、今から持つてくると言い張っていた肉と野菜、それから諸々の食材を調達してきたのやら。暫くベンチに座って考え込んでいた千冬だが、そうするだけ無駄だと思い直し、命令された晩餐の準備を始めた。

コンロの起き具合を確認した後、その中に着火剤を入れる。これがないと木炭に火が移らないのだ。それから黒い木炭を少しだけ入れて、ライターで火をつけた。実に手慣れたものである。

高町家は中々のアウトドア派で、オフの日になると必ずと言っていいほど外に出かけていく。この前は海鳴の温泉街だったが、それ以前に家族総出でキャンプに出かけたこともあって、その時千冬は、士郎と一緒にこういう火付けを体験していた。

剣道の教えと同様、丹念に教わったからこそその手早さだ。千冬は自分の頭脳、そして身体の記憶力に満足したが、もしかすると束はそれを期待して自分をここに寄越したのかもしれないと考えたら背筋に仄かな寒気が走る。

「あいつは、何も知らないはずだ、なのに……」

去年のキャンプで自分がアウトドアの基本を師範に教わったことなんて、見てもいない、聞きもしていない。

しかし、あいつには分かるらしい。あいつの頭の中には、私や師範、

兄上や姉上、そしてなのはの事細かなデータがあり。それを代入して演算すれば、行動や考えの大体の見当がつくという。

確か、行動予測と言ったか。

相手の二手三手先を読むのは、剣を振るう戦いでも重要だし、理屈は分かる。

けれど、それにしてもデタラメ過ぎる。私が相手の10手先まで読めるとすれば、アイツは数千手、それこそ生まれてからこれまでの経緯すら理解ってしまうというのだから。

燃える先からどんどん木炭を入れていき、団扇で扇いだりしながら、千冬は思う。

自分は、魔法相手ならどうにか対等に戦えなくもない。工夫を凝らし知恵を回せば、今ならフェイトにだって生身で食らいつけていけるかもしれない。

けれど、アイツが相手なら？ あの天才を打ち倒すにはどうすればいい？

頭脳の点で負けていることは認めざるをえないとして、身体的にはどうか。自分だって少々自信はあるが、アイツの身体能力は正に人間としてオーバースペックというべきだ。それを比べて互角と言えれば聞こえがいいが、千冬は毎日激しい訓練を繰り返しているのに対し、束はそれらしいことを何もせずに、素の強さだけで千冬と渡り合えてしまう。

悔しい、とは今更思わなかった。生まれつきの才能に文句を言うくらいなら、その分鍛錬を重ねて相手に追いつき追い越すのが千冬のもやり方だ。

しかしそれにしても。天は二物を与えずというが、束は一体、何個の素質を与えられているのだろうか。科学者として天才的な頭脳。それを動かし支える頑強な肉体。何物にも囚われず我を押し通すあの傍若無人な性格も、考えていればある種の才能なのかもしれない。

「……本当に、でたらめだな、あいつは」

篠ノ之束は天才である。自分はそれに、ちよつと頑丈な肉体と鍛錬とで、ようやつとついていけているだけだ。人にはとても言えない、

千冬の本心であった。

だが、そうだとしても。

勝てないわけではない。戦って、それから勝ってみせることは、決して不可能ではないはずだ。

生まれついでに能力に差があるからと、諦めるのは愚かなことだ。ああいう高慢ちきで生意気な奴には、真っ向から向い合って、それから鼻っ柱を思いつきりへし折ってやらなきゃいけない。

自分が全知全能の神であるなんて勘違いはさせるものか。

東は天才で、最強で——それでも、タダの人間だ。それ以外の何でもない。

いつか、アリサが言っていたことを千冬は思い出す。

『戦い続けることに意義がある』

多分、その通りなのだろう。正直に言って、アリサは千冬よりも遥かに弱い。だけど、それでも——たかだか対戦ゲームの勝敗においては、
ではあるが——超人的な東に挑んでいる。

ならば、千冬が屈服する訳にはいくまい。

それが天才ならぬ自分たちのためであり、そして、東の——

「おー、燃えてるねえ」

東がそう言っ指で示したのは、いつの間にか白くなっていた木炭と、その隙間で真っ赤に燃えていた火だった。

「準備、出来たぞ。そっちはどうだ」

「心配ご無用、万全万全っ！　なのちゃんたちも連れてきたよ」

千冬が振り返って見ると、両手にクーラーボックスを持っている東の後ろに、ぴたりとくっついて歩いてきた半袖半ズボンの少女と、少年。

「あ、千冬ちゃん！　お疲れ様！」

「なのはか。準備は済ませておいたから、後は焼くだけだぞ。そこはお前に任せる。前に姉上に教わったろう？」

「うん、ありがとう。後は私とユーノくんでやるから、千冬ちゃんは休んでて」

言うが早いのか、なのはは早速東から食材入りのボックスを受け取っ

て、近くの机に置く。女の子一人の細腕にはは少々重かったので、ユーノがそれを手伝っていた。

それから、テキパキと野菜を並べ、別の机に食器といくつかの調味料を置く。ユーノもスクライア族の少年であり、アウトドアには慣れていたもので、あつという間に準備は進んでいく。

その間、千冬と束はただただ傍観者に徹し、ベンチの端に二人で座って待っていた。

互いに無言である。ライバルと馴れ合う生ぬるさは千冬にはないし、束もあえて話す必要を見出していないのか、黙ったまま。沈黙は重苦しい幕となり、二人の間に降りてかかる。

そうになると、千冬は何だか居心地が悪かった。思い返せば、今までなのはや束と共に過ごしてきた一年間、こうして千冬と束とが二人きりになっていることは殆ど無かったことだ。

二人の間には、常になのはがいた。なのはが居るから、束はなのはにべったりで、千冬もなのはも手を引いて、それで一緒にいられたのだ。

しかし今、二人は本当の二人きり。なのはもユーノもバーベキュウの準備に夢中で、こちらに目を向けてもくれない。

わざと、ではないはずだ。別に二人が共謀して、犬猿の仲な二人を近づけようとしているなんてことは考えられなかった。なのはの中では、そんなことをする必要がないくらい二人は仲良しだし。ユーノもユーノで、お節介をしない性格である。

それでも、なんとなく居づらいというか、無性に歩いて去りたくなる雰囲気にも晒された千冬は、仲睦まじく手を動かしている二人に対して、恨み事の一つも言っただけやりにやる気分だった。

「……あー」

そうして終いには、慣れ合いたくもない、と普段は無駄口をきつぱり叩いて断る束に対し自分から、会話を始めようとした。何も初対面ではあるまいに、戸惑いながら、相手の注目を引くような呻きから初めて。

「なこっ？」

「ああ、うん、その、なんだ……よくこんな急に、準備が出来たな」
「何の？」

「あいや、バーベキューのだが」

束はそんな千冬を面白がっているのか、はたまた本当に分かっているのか。普通彼女なら聞かなくても分かることまで聞き返してくるので、千冬の口調はますます切羽詰まりの慌ただしいものになっていく。

しかし。束もどうしてか、いつもの過剰な反応や、相手を煽るような仕草を見せず。だから、千冬はどうかこうにか、会話を続けることができていた。

「し、しかし、本当に唐突だな！」

「へ？」

「今日の晩御飯はお外に出てバーベキューをしよう、だなんて。一体どんな風の吹き回しだ？」

その間に、束はぼうっと空を見上げて、それからのんびりとした口調で答えた。

「んー、まあ思い出になるしね。それに、ある意味……お祝いかもしれない……かなー」

「お祝い？ 私もなのはも、ユーノの誕生日もまだ先だが……」

怪訝な顔をする千冬は、ふと束の顔を見て、そして驚いた。

彼女は遠くを見つめていた。遠く、自分の姿でもなく、あるいはなのはとユーノの和気藹々とした準備風景でもなく。夕日よりも遠い、空の雲も何もかもを劇場のベニヤ板で作られた背景のように見据えた先にある、何かを。

「束……？」

千冬は思わずそう言って、見慣れぬ表情をした束に問いかけようとした。

「はい、千冬ちゃん！ 焼けたからね、お皿とお箸」

「あ、ああ、ありがとうなのは」

その直前、なのはが割り込んできて、二人に取り皿を渡してきた。使い捨ての紙皿で、箸も割り箸である。千冬はそれを手に取りなが

ら、コンロでじゅうじゅう鳴っている肉や野菜に意識を向け、先ほどの問いを唾とともに一旦飲み込んだ。実際、夜の6時くらいにお腹が空いていない小学生はいないのだ。

「はい、束ちゃんもー」

「んおー、ありがとなのちゃん、それじゃあ早速！」

束なんて、皿と箸を手にとった途端、本物の兎のようにぱつと飛び跳ねて、自分の分を確保しようと飛び込んでいった。

実にいつもの束である。鬱陶しくはた迷惑。同じくいつもの千冬なら、自分の手に持つ箸と皿を投げ捨ててまで、げんこつを食らわせたいくらいに。

だが、千冬は。ついさつきみた遠くを見つめる顔を思い出すと、何故だか腰を上げて、止めに入ることが出来なかった。

嘘のように思えたのだ。ああしてわいわいとはしやぎ回り、他人に迷惑ばかり懸けている束の仕草が、今日は何故か、行楽地の書割りのような、嘘っぱちのごまかしに見えてくる。

いや。ああして子供らしく騒ぐのは、何時だつて周りを騙す見せかけだ。ああやって下らないことに執着し、なのはに過剰なスキンシップを迫り、千冬をからかい、ユーノをこき使うその裏で——きつと、世界をひっくり返すくらい悪事を考えている。それが織斑千冬の中の、篠ノ之束というマッドサイエンティスト観だった。

だから千冬は、何を恐れることも、心配することもないのだが。

しかし。嘘と見せかけ、似たような、いや、類義どころの問題でなくそのままのことなのだが。でもやっぱり、違うように思えてしまう。

たとえ見せかけのことだとしても、束は本当に楽しんでた。アリスやすずかとの他愛のない会話も、ルーチンワークな学校生活だつて、つまらないのならば避けてしまうのが束の性格なのだから。そこになのはが居るから仕方なく付き合う、なんて妥協を束はしない。束は何時だつて、何事も本気で楽しんでいる。最近、千冬にもそうだとわかってきた。

でも、今の束は。

なんだか大切なことを忘れるかのよう。取り返しの付かないことを無理矢理心の中から振り切るために、享樂へ耽っているように見えるのだ――。

「やあちーちゃん、どうかな、美味しい？」

そんなことを考えていたからか。晚餐も中程になり、千冬も皿の中身を何回か補充し、腹の中に入れてくらしいの時に。

千冬と束は再び、ベンチの端で二人きりになっていた。

「ああ、流石になのはの焼いた肉だ。美味しいし、食も進む」

「あれあれえ？ それを仕入れてきたのは一体誰だとお考えかな？ んう〜？」

「ふんっ、どうせグレアム提督辺りに無理を言っただけで用意させたのだろうが。全く、どんなコネがあるかは知らないが」

千冬はその推測は概ね当たっていたようで、束は何も言い返さずにとだくすくと笑い、良く焼けた緑色のピーマンを頬張る。古今東西、天才という人物は大体が偏執的な好みを持っているものだが、少なくとも食べ物に関して束には好き嫌いがなかった。

「はむはむ。んあーおいひい〜♪」

ウサミミのピコピコ動かし鳴らしながら、大げさに喜びを表現する束の声をBGMにして、千冬もひたすら肉と野菜を口の中にかっ込んでいく。

彼女の生来の生真面目さが、料理をそのままに置いておく事を拒んでいた。今自分が一番やりたいことが、バーベキューを楽しむ事以外であるのだとしても。手元にある、なのはの焼いたものを冷ましてしまふのは嫌なのだ。

そのまま暫く、一人は陽気に、一人は陰気にひたすら皿の上の焼き肉を食べ続け。

やがてその全てがなくなり、代わりを取ってこようと束が飛び出そうとしたその瞬間。

千冬は、ぽつりと呟いた。

「らしくないぞ、束」

腰を浮かしかけた束の動きは、停止ボタンを押されたようにぴし

り、と固まり。それから再びベンチに座って、千冬の方へ顔を向けた。その瞳、その表情。ひと目では分からないが、二目に見ると束らしくないことが直ぐに分かる。

目が揺れていた。顔が、震えていた。

それこそ、束のことをずっと見てきたのはか——それに及ばずとも長く側に居て、しかも目の良い千冬でないと分からないくらい、僅かに。

「何のこと？　ちーちゃん？　何の、ことかな？」

「分かん」

思わぬ一言に問いたただす束の言葉を、千冬は短く切って捨てた。束が何を理由として悩み、らしくないことをしているのかなんて分かるはずもないのだ。千冬に分かるのはただ、この暴君地味な天才が、珍しく人間らしい思い悩みを抱えていることくらいだ。

「分かんないって、おかしいなあ。どうして私らしくない、なんて思うの？」

「……………」

「私はいつもの束さんだよ？　急に皆でバーベキューをしようなんて考えて、皆巻き込んで、こうしていっぱい楽しんでる、束さん……………」

「天才の、か？」

そう言われた途端、束は口の中の空気を全て抜かれたように言葉を止めて、押し黙った。

束がそうすると、千冬には既に分かっていた。彼女は、束に一手読み勝ったのだ。

「お前、最近自分を天才だ、と言わなくなっていただろう？　ほんの最近。そう…………プレシア・テストアロッサ事件が終わってから、だな」

そう出来たのが、自分の成長であるとか千冬は考えていなかった。例え成長したにしろ、読み取れる手が二三増えただけのこと。それだけでは、束に及ばない。

今勝てた理由は唯一つ。束の頭脳が、いつもよりも大分鈍っていたからだ。

「それが？　それがどうしたというの？　そんなこと、言わなくたって

て分かるじゃない」

「またまた、お前らしくもない返しをするな。大体、現状を言葉で確認して、下手な論証を積み重ねないと、いつもの自分だと言えないのはおかしいだろう？」

千冬は、自分の隣で何かが沸々と煮えたぎっているのを肌で感じた。それは、束の心だ。らしくないと面から言われることを、束は嫌う。自分らしさを他人から決めつけられるのは、彼女にとって何よりの侮辱なのである。

だがそれは、千冬の予想の範囲内だ。怒り、苛立ち、そして——
「何が分かるの。ちーちゃんに、何が分かるっていうの」

激発する。思い切りこちらを睨み、剥き出しの殺気を当ててくる。

千冬の本能に、最大限の警戒を促すほど、その敵意は純粹で濃く強いものだ。

しかし。千冬は余裕を崩さなかった。それどころか、自衛のためにいつも持ち歩いている木刀を抜いてすらいらない。

まるで、いつものじゃれ合いを逆転したかのようだった。

「分かんよ。お前が何に悩み、何を小難しく考えているのかなんてな」

「じゃあどうして。どうして私を否定するの。理由も知らないのに、どうして」

明確に怒りながらも、束の口調はあくまで静かで、目立つように喚いたりはしていなかった。恐らく、隣でバーベキューを楽しんでいるのはと、それからユーノにも気を遣ったことだろう。

小賢しいと、そう思える。下らないことだ。全くもつて——篠ノ之束らしくない。

「ああ、らしくないんだ」

千冬は、自分の中の考えをその一言で纏めて、束に突きつけた。

「数カ月前のお前が、今のお前をみてもそう言うだろう。その情けない面はなんだ。そのオドオドした目はなんだ。何余計なことを考えているんだ、とな」

「余計なこと……っ？」

「そう、余計なことだ。人を思いやること、迷い、戸惑い。全部お前とは無縁なことだろうが」

その言葉に、束は思い切り首を横に振る。千冬は気づいていなかったが、彼女の今の一言は、篠ノ之束が抱いている夢の否定に他ならなかった。

「なんで？ 私が人のことを考えたら、いけないの？ 人に優しくしたり、助けたり……そんなことをしちゃ、いけないのかな？」

べきつ、と乾いた音を立てて、紙皿がぐしゃぐしゃに握りつぶされた。肉の脂や黄金色のタレが、束の綺麗な手を汚す。

「どうして？ 人助けの何がいけないの？ 悪いことを考えて、他人をどうとも思わずに利用して、殺して、犠牲にする——そんなことよ、ずっとずっと立派で、すばらしいことなんじゃないの？ ねえ、ちーちゃん」

人助け。そんな言葉を、今までの束は使わなかった。

だからと言って、そんな甘っちょろい事を言うようになったから、らしくないなんて、安直なことを言うつもりは千冬には無かった。

「ああ、そうだな。お前が善に目覚めるなんて、考えたこともなかったが——目覚めないよりは、余程いいだろうな。例え気まぐれだとしても、お前の才能が世のため人のために活かされるのは、いいことだ」
「でしよう？ なのにどうして、私らしくない、なんて言えるのかな？

ね、どうして？」

噛み付くような。そして、すがりつくような束の問いに。

千冬は目を閉じて。そして、ともだちなのはや助ユーノには絶対言えない、ライバル千冬だからこそ言える一言で答えてみせた。

「躊躇いだ」

「え……」

急に、背中を叩かれたような、きよとんとした顔で束は千冬を見つめる。

「お前がかつて、何かに躊躇ったことがあるか？ お前がかつて、何かに迷ったことがあるか？ いつもそうだ。お前は何も迷わない。まっすぐに、事態を片付ける最短の道を——正道ではなく邪道だが—

「いつも、いつも歩んでみせた」

千冬は思い返す。PT事件、ジュエルシード争奪戦の最中、束はいつも千冬となのはから離れて行動し、彼女にしか分からない計画と、策謀を巡らせていた。

しかしそれは、事件を最短で、最も少ない犠牲で解決する近道でもあったのだ。

ジュエルシード全てを速攻で集めた所で、地球は救われただろうが、フェイトはプレシアの執念に蝕まれてその身を砕いたろう。

プレシアとフェイトを真っ先に攻略したとしても、束にフェイトは救えない。なのはの献身こそが、唯一フェイトを救う道標になり得る。

だから、束は。なのはとフェイトの心を通わせ、ジュエルシードを集めて無力化しながら、しかもプレシア・テスタロッサを裏から操り、その暴走を止めてみせたのだ。

「それが、お前だ。篠ノ之束だ。だからこそ……私は、お前に挑むのだ」

そう。千冬は、そんな篠ノ之束を、自分の上に置いている。高い高い壁であり、飛び越したい目標であると自らに定めている。

だから挑む。

超えたいと思う。自分よりも高いから、飛び越え、挑み、戦うのだ。

「……そっ、か」

虚を突かれたように呆然として、束は答えた。

きつと彼女の中では、恐らく違う論理が走っていたのだろう。悪である自分を倒し、もしくは止めてみせることだけが、何度もしつこく挑んで食い下がってくるライバルの心理だと、そう思っていたに違いないと、千冬は考えていた。

「でもさ、ちーちゃん」

束は、千冬に応答する。彼女の意見を聞いて、それに反論をする。

それは、彼女が束の予想だにせぬ『予想外』を見せてくれたから、なのかも知れなかった。

「その道が閉じちゃったら。最短で、理想的で、一番効率的なルートが

閉ざされちゃって……どうにもならない時って、あるよね」

「ああ。そうだろうな。何事にも意図せぬトラブルはあるし、それで計画がずれて、取り返しの付かないことになったりもする」

「そういう時さ。どうすればいいのかな」

そう言つて見つめる束の顔が、余りにも弱々しくて。

千冬は耐え切れず吹に、き出してしまった。

「ふ、ふ、ふふふっ……！ お前、とうとう頭の使いすぎでおかしくなったみたいだな」

「な、なにさちーちゃんっ、こっちは、本当に……」

分かんないんだから。

と、そういう言葉が出る前に、千冬はびしっ、と束の胸を指差した。

「ここだ。ここで決めるんだ」

「ここって……心臓？」

「バカ。心だ、こ、こ、ろ。自分の心に正直になって、自分の望みを叶えるために行動する。お前の得意分野じゃないか」

そう言い張つて譲らない千冬に、束はブーたれながら言い返す。

「それができたら、苦労はしないよ……どうしても、選ばなきやいけない。私の望みはいっぱいあるのに、制限時間はもう無くなって。そのどれも、全部を選ぶことは、どうしたって……」

「そうやって、何も選ばないつもりか？」

再び、束は口を閉ざす。今度は先程よりもっと強く、まるで身体を槍で突き刺されたかのような精神の衝撃に見舞われて。

「誰かのためだと諦めて。いけないことだと退けて。悩みと疑問ばかりに目を向けて、何も出来ないまま終わる。それが、お前か？ 篠ノ之束か？」

「……そうじゃ、ない。私じゃない、そんなの、私じゃない」

紙皿を巻き込んで握られていた手が、ふるふると震えだす。

戸惑いや恐れからではなく、胸の中に灯った一つの熱が生み出す工

ネルギーによって、震える。

「だろう？　なら、こんな所で時間を潰している暇があると、思うか？」

「思わない」

「何かまだ、やれることがあるだろうか？」

「ある」

炎のような熱さが、千冬の肌を再びくすぐる。

しかし今度のそれは、不快なものでも、恐るべきものでもない。暖かくて、近づきたくて。

挑みたくなる、心の熱さだ。

こうで、なくては。篠ノ之束はこうでなくては。面白くない、つまらない。

「他人にどうこう言われた所で、諦めるか？」

「諦めない」

「他人から提示された選択肢の中で、何を選ぶか？」

「何も選ばない」

「なら、答えは。お前の弾き出す結論は、一体何処にある？」

「決まってる。答えはいつだって、どんな時だって——私の胸の中にだけ、ある！」

がたり、と立ち上がる音に、遠くで二人が振り返る。

「ごめんね皆。ちよつとやりたいことがあって。私、行かなきゃ」
藪から棒のお別れに、茶髪と金髪、揃って顔を見合わせて。

それから、笑顔でこう告げた。

「いってらっしゃい、束ちゃん」

「いってらっしゃい、教授」

二人、何も問わずに。ただ、束の思いと意志を肯定してくれる。

そして、千冬も。

「……行って来い」

そうだ。何を迷う必要がある。お前には、なのはがいて、ユーノが

いる。お前の選択が、例えどんなものであろうとも、信じてくれる二人がいるじゃないか。

そして、私も。

お前がもし、決断の末に何かを誤ったのなら。

一発、ぶん殴ってやる。

お前に挑んで、打ち勝って。お前の非を、過ちを、思う存分否定して。最後にこのげんこつと木刀でもって、二度としないように修正してやろう。

だから、迷うな。お前はお前の道を行け。

「うん、ありがとう、ちーちゃん、なのちゃん、ユーノくんも！　ありがとうっ！」

三人の温かい手に背中を押され、束は進む。その瞳に、表情に、もう迷いはない。

迷うことなどあるものか。

自分は自分でいいと、その在り方を、夢を。それぞれに肯定されたのだから。

そう、篠ノ之束は迷わない。

だから。

最後に——皆には聞こえさせない為にひっそりと、唇の中で——こ
う、付け加えた。

「……じゃ、さよなら」

夜半。男一人だからと割り当てられた一人きりの部屋で、無限書庫から借りだした本を読みながらも、段々とまどろみつつ瞼を閉じかけたユーノは、目の前の明かりがぼんやりと弱まっていることに気が付いた。

ベッドの側に備え付けてある黄色の読書灯が、弱々しく点滅している。電圧が落ちているのだろうか。となると、停電とは行かないまでも、電力不足になっているらしい。

だが、そんなことが起こるなんて、おかしい。この地区は実験区画であり、管理局のお膝元でもある。辺境世界のモーターならまだしも、そんな地区の中心部にあるホテルで電力不足なんて起きるはずが――。

「ユーノ、起きてるか!?!」

自動ドアが開き、切羽詰まった大声。何事かと目を擦るユーノの視界には、白地に星柄のパジャマを着て、いつもはポニーテールにしている長い髪を纏めずにいる千冬が写る。

息を切らし、頬はほんのり紅い。只事でないその焦り様に、ユーノも釣られて目を覚まし、ベッドから跳ねるように身体を起こした。

「どうしたの?」

「なのはが……なのはが居ないんだ。私が寝る前まで、ちゃんと部屋に居たというのに」

「トイレにでも行ったんじゃないや? それとも、何か飲み物でも買いに……」

「そうだとっても! この状況で離ればなれになるのは不味い!」

状況って、なに。ユーノがそう問いただす前に、千冬は黙って部屋の窓を指差した。近づいてよく目を凝らし、遙か下の地上を見つめたユーノは、いつもは夜遅くとも爛々と輝く外の明かりが、それぞれに付いて消えてを繰り返していることに気づく。

「これは……外も、こうなってるなんて」

「分かったか。これに限らず、今はどうにも周りの様子がおかしい。

ロビーに行つたが、他の客もそれぞれに不安がっていた。ただの停電騒ぎならいいのだが……」

千冬の懸念は、どうやら的中し始めたようだ。弱々しいながらも明かりを保っていた電灯が一斉に消えて、そのすぐ後にまた付いた。ただしそれは、オレンジ色をして一定の間隔で点滅し、光で町の外へと住人を導く誘導灯であった。

ユーノの部屋の、元々消えていた電灯もオレンジ色に光り出している。そして、館内放送から機械的な平坦さが耳につく案内音が聞こえてきた。

『お客様にお伝え致します。只今ミッドチルダ政庁より、当地区に緊急避難勧告、コード416が発令されました。これより係員と自動音声の指示に従い、当地区より速やかに避難してください。繰り返し……』

同時に、館内の誘導灯が一斉に灯った。ユーノがちらりと部屋の外を見れば、隣の部屋から戸惑いながらも外に出る家族連れが見える。

「避難勧告……？」

「らしい、な。どうするユーノ」

「どうするって……とりあえず、案内通りに外へ出ようよ。なんだか不味いことになってるのは本当みたいだし」

寝ぼけていた頭も、立て続けに異変が起きればすっかり覚める。冷静な判断を出したユーノだったが、千冬は隣になのはが居ないことを、どうしても不安に思うようだった。

だが、とにかく避難しなければこちらが危ないし、何よりなのはも、一足先に指示に従ってホテルから抜けだしているのかもしれない。ユーノは焦る千冬を説得して手早く荷物を纏めさせ、自分は特に持ち物といえば束に買ってもらった着替えくらいしか無いので、着の身着のまままでひとまず階段を降りることにした。

一回まで降りると、広いロビーに大勢の宿泊客が詰め込まれていた。所々でシツクなスーツを着た従業員が大声を出しているのを聞くと、どうやらここで一旦集合し、地下にある地下鉄のホームへ順番に避難させ、特別列車で市外へと避難させるらしい。

「ご安心ください！ 列車はすぐに参ります！」

「当ホテルのお客様のご避難は、あと30分で全てが完了する予定です！ 慌てずに、案内を待ってから移動してください！」

誰かが慌てふためきパニックを起こすその遙か以前に案内が行き渡るので、百人超の宿泊客は、少なくとも表面上は驚くほどに落ち着きながらロビーで待機していた。中には肝が座っているのか楽観的なのか、ちよつとしたアトラクションを体験するみたいに興奮気味な客も見受けられる。

千冬とユーノも、ぽつちやりした中年女性の従業員に案内され、子供だからという親切なのか、壁沿いにある椅子と紙コップに入った温かいお茶まで渡された。緊急事態だというのに、皆まるでいつものサービスの延長線中であるかのように落ち着き払っている。

「警報が出ているというのに、魔導世界というのはこういうものなのか、ユーノ？ 地球ならみんな……そうだな、もう少し緊張と不安で殺気立っていたと思うが」

「そうじゃないと思う……多分、ここが実験区画を兼ねている場所だからじゃないかな」

「なるほど。緊急事態も慣れっこ、という訳か」

実際、ユーノはこの地の歴史を少しばかり知っていて、一年に数回このように避難するくらいの事態が起きていると分かっていた。考古学者の部族の端くれとして、それくらいのことには無意識に調べていたのだ。

「うん。大体、こういうのは一時的で、最悪半日もしたら戻ってこれる……だってさ」

「そうか。別に大地震とか、火山が噴火したとかではないと。だが……」

説明されて、そこまでの緊急事態ではないとひとまず分かったような千冬だが、その瞳は尚も右往左往に辺りを見つめ、何かを探すようにおぼつかない。やはり、傍らになのはが居ないと不安になるのだろうか。

そして、千冬ほどではないにしろ、ユーノも同じ気持ちだった。た

だ彼の場合は若干の落ち着きがある。彼を常に隣に置いていた、なのは良く似た声をしている自由奔放な女の子は、常々前触れなしに行方をくらすのがいつもの事だったからだ。

だから、状況を進めていくのは珍しいことにユーノの方だった。

「とにかく、従業員の人に聞いてみようか。出入りが記録されている、なんてことはないだろうけど。誰か覚えてるかもしれない」

「ああ、そうしよう」

そう言った途端に千冬は椅子から立ち上がって、近くにいる従業員を呼び立てる。

それが仕事ではあるのだろうが、痩身で小奇麗な男性は忙しいだろうに嫌な顔一つせず振り向いて二人の話を聞いてくれた。

茶髪で短いツイントールに黒色のリボンを結んだ女の子が居なかつたかと聞き、彼は早速辺りの同僚を呼び出してロビー中を探し回りに行く。結局何処を探しても見つかりはしなかったが、従業員の内の一人が数十分前の出来事を思い出し、バツの悪い様子でユーノと千冬に話した。

「私は少し前までホテルの受け付けに居たのですが……警報の出るすぐ前に、女の子が一人、駆け出していったのを見ました。止めようとも思いましたが、あつという間の事でした、その後すぐに避難勧告が……」

皆まで聞かぬ前に、二人はロビーから飛び出した。規則や秩序に反する行動は、当然よってたかって止められるが、全力疾走する成人なんて余裕で追い抜く千冬の俊足が軽々とかわす。それ程素早くもないユーノも、判断という名の諦めでもってフェレットモードに変化した後、千冬の肩に乗りつつ外へ出た。

豪華な明かりが眩いホテルから一歩抜けだすと、市街地の夜と大勢の人混みが二人を出迎えた。老若男女誰もが避難勧告に従い、明かりと警備員の誘導に従って移動する群れを成している。その只中を、二人は逆方向に駆け抜けた。

なぜ逆なのか。どうして避難所になのはが居ると、そう考えないのか。

理由はただの一つきり。自分たちが今探しているのが、高町なのだからだ。高町なのはがこんな、身勝手に唐突な行動を取る時。その先には必ず嵐があり、渦巻く目の中に彼女は存在する。そう、感覚的に理解していたからこそだった。

ギル・グレアムがその報告を使い魔から聞いたのは本局にある自室の中で、シャワーを浴び、砂糖のほとんど入っていないココアを飲んでから、ベッドに入ろうとした正にその時だった。

聞いたその時だけは一瞬驚いたが、さりとて予測の範囲内ではあった。篠ノ之束は強情な子供であり、自分の決定に異を呈して来るくらいはやるだろう。いくら理屈で納得させようとも、首を振ってしがみつきのが子供というものであり。例え自分たちをはるかに上回る才能を持つ天才であろうとて、その精神的未発達は普通の子と変わりないと、グレアムは考えていた。

だからこそ彼女を唆し、己が目的の為に利用することも出来たのだ。それが障害となるなら、大人が持つ強権と理性で鎮めるしかない。

「よし、アリア。コード416の準備だ。とにかく、周囲の市民を巻き込まないようにしなければ」

そう言つて、既に決定していた対処法の第一手を打とうとしたグレアムだが。アリアの表情は常ならぬほどに動揺し、彼の命令を復唱できないうでいた。

「それが、父上……もう、実行されています」
「なんだと？」

「実験区画の行政システムが、コード416を実行しているんです」

グレアムの目は驚きに見開かれた。ありえないことだ。闇の書に対する実験も含め、グレアムが行っていることは全て機密であり、時

空管理局にも知らされていない。だから、グレアムが事態に介入しない限り、避難勧告が発令されることは無いはずなのだ。

まさか、この事態が露見しているのか。そんな不安に襲われたのは一瞬である。アリアが続ける報告は、それ以上に深刻で、予想を外れたものだった。

「これに関して、ミッドチルダの政庁は何ら関与していませんし、報告も受けていないでしょう。今頃は慌てふためき、状況の確認を急いでいるかと」

「では、何故警報が発令された」

「分かりません。ですが、恐らくは」

そこまでアリアが語った時、自動ドアが開き、ロツテが飛び込んできた。肩で息をするくらいに急ぎ慌てた様子をさもありませんと驚きもせず見つめたアリアは、二三言彼女に問う。

ロツテがそのどれもに首を縦に振ったことを確認すると。深刻そうな表情を更に深めて、グレアムに状況を報告した。

「どうやら、区画の全システムが何者かによって掌握されている様です。それにより、コード416用の避難誘導システムが作動しています」

「馬鹿な……あり得んことだ」

グレアムの第一声はそれだった。大規模なハッキングにより一地区のシステムを奪うという、大規模テロじみた行為を成し遂げるたのは「何者か」とアリアは言った。しかし、状況からしてただの一人しか考えられない。

だが、そんなことが出来るものか。確かに彼女は、管理局の船をまわごと一隻、数時間もの間完全に停止させてみせた。だが、船一隻と街一つ、乗っ取るにしても規模がまるきり異なるではないか。避難用のシステムだけにしても、交通、灯火、通信その他様々な行政設備とリンクしているというのに。確かに地球のそれと比べて自動化されてはいるが、それだけで、ただ一人の少女が全てを掌握出来る理由になるものか。

「第一、市内の管制センターはどうした。有事に際して、メインシステ

ムが乗っ取られたとしても、センター内にあるサブシステムで事態に介入できるだろう。あれを使えば」

「いえ、それが……」

苦々しく、口にするのを一瞬躊躇ったエリアに代わって、ロツテが罵声同様の大声で叫んだ。

「全部、掌握されてるんだ。政庁本部からのアクセスも全て拒絶されてる……あのクソツタレの協力によってね!」

クソツタレ、とロツテが罵っているのは、束では無かった。彼女を罵るのなら、もつと乱暴に、過激に、激しい憎しみを込めて罵るはずだ。

「まさか、彼か」

「そうさ! あいつ、束に唆されたんだ。このままじゃ実験が中断されるのかなんとか吹き込んで……」

束がただ一人、闇の書の実験への参画を許した、実験施設の管理責任者。

彼に与えられた権限は大きい。実験の為に作られた区画なのだから、その責任者であることは、区画の長の一人であるとも言える。だからこそグレアムも真つ先に彼を取り込み、闇の書の解析と無力化を秘密裏に、しかも効率的に行える環境を作り出したのだが。

今、その秘密主義が逆に仇となった。

闇の書という魅力的な研究対象を手の中に収めながら、その真奥については頑なに明かさず、機密と称され触れられずにいる。それが、研究者として一流の能力と、それに似合った人格を持っている男に、どれだけの苛立ちを与えただろうか。

グレアムとしてはその程度のこと承知の上で計画を進めていて、たかが一文官の不満など無視しても構わないと思っていたのだが。

最初から、考えておくべきだったのだ。

自らの研究所に余人の介入を許さぬ篠ノ之束が、その表層だけとはいえ、他所の無関係な人物を立ち入れさせた理由を。

「……駒は、最初から確保していた、ということか」

こうなると、グレアムの老いた脳髓には、この夜までに束が行った

様々な行動が浮かび上がっては消えていく。

一日の大半を実験に費やしながら、束はしばしば街の様々な場所へと出かけていった。大きな花束と共に公共墓地へ出向く途中、地下鉄を一回りしたり、区画内の通信システムにアクセスしたりもしていた。考えてみれば、それがこの、大規模なハッキングの前触れなのは明らかだ。

グレアムはリーゼ姉妹を使って、その動向を常に監視していたのである。にも関わらず、今彼女が行っていることを読み切れず、街一つを思うがままに操らせてしまう不手際を成した。

年の功と経験で彼女を翻弄し、掌の内に留めておいたという錯覚を抱いたまま、その独走を許してしまったのだ。

自分も老いたな、とグレアムは思った。だが、感慨に浸るよりも、まずはやるべきことがある。

「行くぞ、アリア、ロツテ」

その一言だけで、有能な使い魔たちは自分の意図を理解したようだった。

即座に転送魔法陣を構築してくれる。行き先は当然、実験区画のど真ん中、恐らくは篠ノ之束が居るだろう最深部の、すぐ近くであろう。

確かめなければなるまい。自分が読み切れなかったことを。

区画の全てを掌握し、その気になれば全市民の命と引き換えに実験の継続を認めさせる事もできるというのに。

緊急避難用のプログラムを発動させ、彼女の友人三人も含めた全員を避難させようとしている、彼女の真意——その果てを。

夜半。本来なら消えることない蛍光の無機質な光に照らされて、しかし人通りのない静けさに包まれていたはずの街は、大きな一つの流れを支える交通路になっていた。

そこから更に中へ、奥へ進んでいくと研究施設に辿り着く。そこも、突然の避難勧告に従い避難をする科学者たちと、その家族が外の敷地に溢れ、街に吐き出されていく。

だが、その更に中枢。施設の中でも最も高いタワーの地下は、不気味にしいんと静まり返っていた。灯火は非常用電源に切り替わっていて、足元が最低限見えるだけの明るさだ。

その暗がりをも、急ぎ走る、足音は三つ。その内二つは若い女の足で、もう一つは老人の、しかし力強い足音である。

施設の入り口から中心へ、迷いなく歩いて行く三人の足音は、やがてある場所で立ち止まる。そこは、最深部へ続く合金製の扉の前。案の定完全にロックされていたその平らな表面へ、縋り付くように跪き、両腕で激しく叩き続けている男が居た。

例の実験主任、グレアムを裏切り束の計画に手を貸した男の、哀れな結末だった。

「開ける！ 話が違うぞ！ 闇の書の深奥を！ 古代ベルカの神秘を見せてくれるのではなかったのか!? 開け……」

喚きながら更に訴えようとした所で、後ろの気配に気づいて振り返る。血の気の引いたその顔は、まさしく蛇に睨まれた蛙のようだ。欲望を刺激されて裏切った結果、無残に置いていかれ、しかもその裏切りの対象が何故か目の前にいるという状況では無理も無い。

グレアムはこの男に対して怒りを抱いていなかった。むしろ、微かながらに同情すら感じている。篠ノ之束がこの男を誘惑する段取りは、きつと伊達男が娼婦にかどわかされるが如き、巧妙さと卑劣さを含んでいたはずだ。ただし、色香によるものではなく、狂気じみた科学への信奉心をくすぐられてのものだろうが。

彼が管理局員の中でも信を置いている、リンディ提督とその部下た

ちですら、一時まんまと騙されてしまっていたのだ。一人騙して利用することなど、楽なものだったろう。

グレアムは無言で、一歩前に進む。裏切り者への侮蔑と怒りに満ちた使い魔も歩調を共にした。

元執務官長であり、若い頃はエースの名をほしいままにした彼が発するその圧力に、たかが一科学者が逆らえるはずもなく。あっさり道を譲って、それから脱兎のごとくその場から逃げ出した。

「いくじなしね」

「間拔けな裏切り野郎め」

口々に彼を罵倒する使い魔の気持ちは分かるが、この事件に関わっている人間の中で、彼は最も幸運な部類に入るだろう、とグレアムは思う。

何故なら。

これから彼らの眼前に現れるだろう、破壊と混沌の渦巻きを見ないまま、舞台から退場できるのだ。彼が失うのは少しの自尊心と地位と名誉のみで、その身そのものを破滅させられるはしない。拐かされて騙されたとはいえ、それは結局彼の知的欲求の暴走が齎した、自業自得だ。

そう。此処から先、ドアを潜って内部へ突入した後は、正に危険地帯、命に関わる鉄火場なのだ。その目の前で扉を閉ざしたのは、束の残酷さというよりは、むしろ優しさと言うべきだろう。

だがグレアムたちには、今正に破滅が開かれる只中だろう施設の最深部へ、どうしても立ち入らなければならない理由がある。だから、姉妹二匹が同時に発射する砲撃魔法、ブレイズカノンを合金へと直撃させた。

使い魔でありながら管理局武装隊の教導任務すら担える彼女らの砲撃魔法は、並の衝撃ではびくともしない扉に大きい穴を開けることが出来た。最も、今その中で何かをやっている少女にとっては、それくらいのは予測済みだろう。

つまり、合金の重い扉は哀れな科学者のみを断絶するものであって、グレアムに対しての防御ではないのだ。入れるものなら入って来

てもいい、そんな意思表示であった。

何十秒か走り、中間地点にある大きな研究室に辿り着いても、そこには何もなかった。壁一面に貼り付けられていた大量のページの既回収されている。散らばっている書類や乱雑な数式がびっしり並んでいるホワイトボードなどはあったが、そんなものはこれから進みゆく先にあるものを鑑みれば、何もないのと同じだ。

グレアムは立ち止まらず、ただ進み続けた。途中にあるシエルターを、時にはコンソールで開き、時には魔法で打ち壊し。そうして辿り着いた最深部中の最深部に、彼らの目的物と、目標人物は存在した。

おどろおどろしい、と表現すべき泥のようなものを周囲に吐き出しつつ、胎動しているナハトヴァール。そして。

コンソール——と、呼ぶべきだろうか。闇色の泥に塗れたように見える何かへ黙々と指を走らせ、ナハトヴァールへと何らかの信号を送り、それを制御している篠ノ之束だ。

「束くん」

と、一言だけでは彼女のうさみみは動かず。何回か呼びかけを続けることで、彼女はようやくグレアムたちの方へと振り向いた。今までの敵愾心が垣間見える瞳ではない。喜びでも悲しみでもなく、もういない、自分とは関係のない物を見るような、平坦で空寒い、そんな瞳だった。

「一体何をやる気だね、君は。住民を避難させ、関係のない人間を——私やあの男、そして君の友達ですら——遠ざけて、その闇の書に何をを行うつもりなんだ」

「ん、闇の書？ ……ああ、違うよチミたち。これはね、夜天の書って書いてね——」

「んなことどうでもいいってのー！」

ダンスと足を踏み鳴らし、耳と尻尾の毛を逆立てながら怒るのはリーゼロッテだ。グレアムが側にいて視線で留めていなければ、今にも掴みかかるか、魔法で攻撃していただろう。

対する束はコンソールから振り向きながら、冷静そのもの。指を休みなく走らせながら、片手間で彼女の怒気を受け止めている。

「その書を、そんな危険な力を使って、何をするつもりだっ！ 強大な力で、世界の一つか二つくらい、ブツ壊す気なのか——」

「そんな訳ないじゃん。つまんない」

ロツテの真つ当な問いかけは、束にとって最大級の貶し言葉により呆気無く否定される。

彼女にとつてもっと大事なものが、蠢くナハトヴァールの中にあるのだから。

今はそれ以外、どうでもいいのだ。

「ま、わかんないと思うし説明してあげよう。私はね、このナハトヴァールを暴走させて——今ここにあるだけの夜天の書の全てを、消滅させるんだ」

「なっ……!?!」

「特別に説明してあげよう。強すぎる力は破滅を招く。これ、よくある教訓だよねえ。今回はそれ。無限再生機能ってものは諸刃の剣。ちよつとりミッターを外して暴走させれば、オーバーフローしてゼロになる」

途端にナハトヴァールの鼓動は激しくなり、闇色の泥が床に溢れ出し始めた。グレアムたちは一步下がるも、束は何も気にせず、足元を泥に浸し続けながらコンソールを操作し続けている。

泥は恐らく、自動防衛プログラムを構成する物質なのだろう。無形から攻撃的な実体を取ろうと集まって盛り上がり、あるいは周囲の物体を取り込みながら、炉心の周囲で次々と変形していく。機械とも生物とも見分けの付き難い肢や牙は、それまで闇の書が蒐集してきたモンスターの寄せ集めかもしれない。

束もそれに巻き込まれかけたが、泥が足から彼女の身体に這い上がろうとした寸前、タンツ、と軽やかにコンソールへの入力を終えた。すると、束だけは泥に巻き込まれず、現れ出たパーツも動きを止める。「ちよいちよい、とねー」

更に束が指を動かせば、得体のしれないパーツは更に生み出されるものの、それらがグレアムを襲うことはない。そして泥はパーツを覆うように広がり、凝り固まって更に巨大なパーツが生まれる。それら

を何度か繰り返すと、膨れ上がり過ぎたパーツは暴れ狂い——風船のように破裂した。

破裂の勢いで泥がグレアムへと降りかかるが、使い魔の貼ったプロテクションが防いでくれた。構わずに、グレアムは語りかける。

「君の意図は、再生過多による自壊か」

「そのとーり♪」

再生機能とは、魔力を消費することで欠損した部分、本来あるべきパーツを復元するものである。だが、既にそこにあつて、損傷していないパーツに対して再生を行えば、たちまち原型を失つて壊れていくのだ。

「なるほど……これなら周囲の被害を最小限に抑えて、ナハトヴァールのみを破壊することが出来る。書の再生機能は失われるだろうが、本体は無事……つまり、八神はやても助かる」

「そういうこと。まあーなんだかんだいって、ナハトヴァールを一部づつ顕現させる訳だし、最後にはそれをまとめてばしやつと壊ネクロシス死させなきゃあいけない。だから、ここを中心にして5キロ四方、つまりはこの街一つを消滅させなきゃいけないけどね」

二人が会話を交わす間にも、泥の中から次々にパーツが生まれては破裂していく。その度に巻き込まれた機械が吹き飛ばされ、あるいはプレス機にかけられたように潰されていくのを見れば、グレアムにも束の意図が得心できた。

彼女は、彼女なりのやり方で被害を最小限に抑えようとしているのだ。人間を全て避難させ、異世界で苦しむ少女を蝕む諸悪の種を退治する。大都市がまるごと消え去るのは確かに大規模な災害だが、それによって人命は何一つ失われることは無い。

一度束の純真を信じて闇の書を任せながら途中でそれを疑って、強制的に彼女の手を止め幕を閉じようとした自分を、グレアムは深く嫌悪した。これも一つの、老いであろうか。表向きは彼女の中にある良心を信じようとしながら、裏側では決して心を許そうとせずに警戒していたのだ。

「そうか。分かった。全てを君に任せよう。すまなかつた。今度は、

もう割り込もうとはしない」

「ふうん」

韜晦の末に発したグレアムの詫び言は、束に何の感情も与えなかったようだ。

ちらと一瞥した後、再びコンソールへ目を向けて、ナハトヴァールの制御して暴走させることに注力していた。

その無関心も最もなことだ。事態の決定権はもはやグレアムにはないのだから。

彼がこの場で束を取り押さえて再び闇の書を手中に抑えようとしても、少しナハトヴァールが揺り動けばそれまでだ。過去幾度も管理局員を墓場に追いやってきた防衛プログラムの前では、使い魔二匹の全力、そして老いた魔導師の力ではまるで及ばない。

もはや、グレアムは場を与えて台本を書き人を踊らせる座長ではなく、手の届かぬ舞台上で踊るのを見るだけの観客に成り下がってしまった。

だが、それでも言いたいことがあるのか、そうなってしまったことを意識していないのか。グレアムの口は止まることがない。彼は人生の中で珍しく、多弁の人となっていた。

「だが、そうならそうと早く言ってくれば良かったじゃないか。君は私達を頑固な老人と思っているのかもしれない。だが、もしこうだと知っていれば、私達も協力を惜しまなかった」

「……………」

「何もあの科学者を騙して使わなくても、私たちの権限なら警報を出し、市民を避難させることは出来た。ハッキングなどせずとも……」彼の言葉はもはや、束に届くことはない。彼女は無言で指を踊らせるだけだ。だが、グレアムの言葉は凶らずもグレアム自身の鼓膜を揺らし、脳髄に情報として送られ咀嚼される。

そうだ。束が法を犯す行為をしてまで、グレアムたちを遠ざけつつナハトヴァールを動かす必要はない。自分の邪魔をする老人たちに干渉されたくないという意図は考えられるが、今ここにこうして三人が居合わせている時点で、それが別に害悪である訳でもないだろう。

彼女が本当にグレアムたちを不要と思っているなら、ここに来る遙か以前で何か深刻な妨害を受けていたはずだ。

では、どうしてグレアムに話を通さなかったのだろうか。意地、プライド、子供らしい敵愾心、いたずら心。そうした仮定はどれも有力だが、それは普通の9歳児か、普通の9歳児のメンタリテイを持った高い知能の持ち主にしか当てはまらない。

今の束はそれとは違う。つい昨日、ついさっきまでその範疇に居たのかもしれないが、今は全く違う。そうでなければ、一旦自らの方法を完全に否定された後に、第三の方法を編み出して実行する、なんてバイタリテイはまず生まれてこないはずだ。

では、何故。

グレアムが思考を続けている間にも、泥は着々と施設内に広がっていき、異形が次々と誕生し破裂する。そうして撒き散らされた泥は、太陽に晒された如く乾いて消えていくが、ナハトヴァールの中に貯めこまれていた泥はまだ無尽蔵に近いようで、一度泥の乾いた床もすぐに新たな泥で塗りつぶされていく。

グレアムの足元を守るリーゼたちのプロテクションは、今や簡易型の結界へと変化していた。それほど強度でなければ、高濃度の魔力の塊である泥を防ぐことが出来ないのだ。

「父様、そろそろ」

そして、長い間この場に留まり続ければそれすら維持できなくなるのか、リーゼアリアがグレアムへ向けて退出を催促した。確かに、今から町の全てが泥に包まれて無に帰すのだから、今の内に撤退しておくべきだろう。

その考えに同意し、二人とともに飛行魔法でこの場から脱出しようとした直前——彼は気づく。

彼女は。

魔法も使えず、何か防護手段を持っている訳でもない彼女は——
町を灰燼に帰す爆心地の真っ只中で——

どうすると、いうのだ？

「待ってっ！」

しわがれ声を思い切り張り上げ、グレアムは訴える。しかし、束は振り向かず、ウサミミも揺らさず、それどころか産毛の一つも動かさないくらいに静止しながら、ただただコンソールを打ち続けている。その様子で、グレアムの持つ懸念をリーゼ姉妹も承知したらしく、驚愕の表情を浮かべた。

「馬鹿なこととは止めろ。そのまま居続けければ、消滅に巻き込まれて君も――」

今でこそ、ナハトヴァールを制御することによって泥を避けている束だが。残りを全て自壊させるのだとすれば、先ず間違はなくそれに巻き込まれてしまう。いくら並の人間をを遥かに超えている身体を持つていたとしても、その破壊力に抗うことは出来ない。魔力が爆裂する最中、チリひとつ残さず分解されてしまうだろう。

「アリア、ロツテ。彼女を止めろ！」

グレアムは迷うこと無く、二匹に命令する。この辺り、計算ではなく性根から出た言葉だった。

二匹は束に対して怒りと不快感を抱いていたが、主の命令は忠実に従うし、主人と同様に命が目の前で失われるのを見て見ぬふりは出来ない。アリアは結界の維持に残り、ロツテが背後から束を抑えて、連れて行こうとしたが。

束がコンソールに指を這わせてピコン、と音を立てれば、ナハトヴァールの一部が泥の中から湧き出て、ロツテの行く道を遮った。違うルートで接近しようとしても、異形が次々と泥から立ち登り、その恐ろしさを知っているロツテはどうしても近づけない。

そうしている内に、束の周囲から泥の柱が昇り、鳥かごの鉄格子のように彼女と、外にいる人間を分け隔てた。

これでもう、グレアムたちに手出しは出来ない。ロツテが一先ず結界内に戻る中、グレアムはこの、一見理不尽な行動の意図を予測していた。

「何故邪魔をする！ 君は……まさか」

束は止まること無くコンソールを弄くり、それを通じてナハトヴァールの手綱を握っている。

そう、手綱を握っているのだとしたら、一度それを離せば。制御を失ったナハトヴァールは真に「暴走」し、文字通り大災害の始まりだ。被害は都市一つだけに収まらず、最悪の場合ミッドチルダの全てが闇に包まれるであろう。

そうさせないために。この意図的な暴走状態と自壊が終わるまで、誰かが全てを操作しなければならぬのだろうか？

「……君は……君自身が……いや、だがそれなら、私が……」

君の代わりにそこに居て、犠牲の羊と相成ろう。

そうした提案に対して、束は終始無言のまま。つまりは俄然不可能ということだった。考えてみれば当然のこと、ナハトヴァールを研究分析している束でなければ、その制御は出来ないだろう。もし出来るのなら、直接的な言葉と行動で拒否していただろう。論ずるにも値しないのだし、口に出す必要もない訳だ。

「父上……差し出がましい口を挟むようですが」

「分かっている」

「あたしたちは離脱すべきだよ。これ以上この場に留まったら、もしかすると消滅に巻き込まれて——」

「分かっている！　だが……」

姉妹は口々にグレアムを諫め、束を放っておくべきだと言う。しかし、グレアムは頑として譲らず、ただ眼前に広まる混沌の泥と、ドレス姿の少女を二つの目で見つめるだけだ。

誰もを犠牲にしない代わりに、自らを犠牲とする。

尊く美しい精神ではあるし、もしグレアムも篠ノ之束と同じ立場にあるなら、何があるうと同じ結論に至り、実行するはずだ。

だが。

自分より遥かに年下の少女が、自分の命を投げ出す事だけは、どうしても避けたかった。

「束くん、君は……君は……そうして、友達と永遠に離れ離れになってもいいのか」

ぴくり、とウサミミが動いた。

「死ぬんだぞ、君は。もう二度と、高町なのはに、織斑千冬に、会えないんだ」

コンソールを打つ手も、ぴたりと止まった。

ナハトヴァールの心臓が大きく震え、泥の溢れ出す量が一気に増えていく。

「それでも、君は——そうしてまで君は、世界を救おうと」

「ちがうよ」

少女の声が、老人の耳朶に響いた。

少女だ。我儘な子供でも、老獪な大人でもない。いや、そのどちらでもあり、どちらでもない。

迷いなく、夢へ真っ直ぐ向かう、少女の声だ。

「私は、私だからこうしている」

振り向く東の胸元には、ピンク色の何かが両腕でぎゅっと抱かれていた。グレアムたちが見たところ、闇の書よりも分厚く大きな、一冊の本に見える。

「誰のためでもないし、世界のためなんかでもない。私が私でありたいために」

東は、まるでそれが自分の身体の一部であるかのように抱きかかえ、笑っていた。

それは、グレアムが今まで見た嗤いでもなく、嘲笑いでもない。

「闇の中の夜天。封印された真実。暴くのが天才だ。それが、篠ノ之束なんだ」

「……………」

「そう、束さんに、天才の束さんには、何も——」

例えるなら——高町なのはがいつでもどこでも浮かべているような。

「ためらいなんて、ないから」

優しく明るい、満月のような笑顔だった。

ひたすらに、走る。走る。走る。初めて見る場所だというのに、その歩調には迷いなく、表情も決然としている。

街の中心にある、誰もいない研究所の中を、高町なのはは走っていた。ただ、心の何処かに突き動かされるまま、走っていた。

どうして自分がここにいるのか。突然何も言わずに居なくなったことで、千冬とユーノを心配させてしまっているはずで、そういうことはあまりしたくないのに。

それに、走っている途中でそこらじゅうから警報が鳴り響き、市民に避難を促しているのも聞こえていた。市外から退避する程の避難勧告が出ているから、誰にも邪魔されることなく厳重な警備が敷かれているはずの研究所を走れるのだとも理解していた。

友達を心配させるのも、避難勧告に従わないのも、いつもいい子なのはには似合わない、なのにどうして。

そう、心の中で問いかけをしないでもなかった。

が、それ以上に。その冷たい疑問を焼き焦がして溶かすくらいの熱が、心の片隅から発されていた。

走れ。そして辿りつけ。

ここで走らないと。ここで出会えないと。

自分は一生、後悔するハメになるんだと。

何の理屈もない。ただなんとなく、しかし、目で見ると、耳で聞く、肌で感じる何よりもはつきりと、感じていた。

思い出すのは、少し前に墓地へ出かけたことだ。あの時だって、なんとなく出かけようと思って、なんとなく束の事を考えていたら、そこに篠ノ之束がいた。

束の素晴らしい夢を聞かせてもらい、互いの心が響き合うとても楽しい時間だったが。最後の最後、電話を聞いて駆け出した束の笑顔が、なのはには妙に引つかかっていた。

その数時間後に現れて、焼き肉をしようとなのはと千冬、ユーノを急かした束は、まるでいつも通りの天真爛漫、自由奔放な女の子に見

えたが。

なのには、いや、千冬にもユーノにも分かっていただろう。あの時の東は何かに追い詰められていた。

だから千冬は彼女に発破を掛けて、なのにはユーノと共に、思い切って決断した彼女を暖かく送り出した、のだが。

もしかするとそれは、何か致命的な誤りだったかもしれないというのが、今のなののはの本心だ。

東を応援するあまりに。彼女を信じ、何も疑わないあまりに、彼女の大事な一線を踏み越える手助けをしてしまったような、そんな不安が心によぎるのだ。

別にそれは、東がかつてなのはに会おう前のような残酷さを取り戻し、誰かを生け贄にするような乱暴な真似をすることではない。もしそうなら、墓地で語った夢も今日の晩ごはんで千冬と話したことも、何もかもが虚偽であることになってしまう。そういうことを、東はしない。

ならば、踏み越えたことで彼女は一体何を成すのか――。

そう考えると、なのはの足取りは更に早くなって、運動不足の身体が悲鳴を上げ、息が上ずるのも構わず走り続けてしまうのだ。

曲がり角を曲がり、階段を降りて、段々下層階に入っているのが分かる。

こんな薄暗い場所で、東ちゃんは一体何をしていたんだろう。

そう心の中で呟きながら、なのはこのミッドチルダ旅行の真相を段々と理解していく。

東がミッドチルダに来た理由は、友達と思いきり遊ぶためでも、魔導技術や文明を見聞して自分の血肉にするためでもなく、この奥で何かを行うためだったのだ。

そうすると、突然現れて、東と交友があると言っていたギル・グレアムの存在にも納得がいく。彼が依頼をして、東に何かを研究させていたのだろう。

であるなら、自分たちが呼ばれたのは――恐らく、天才であると同時に天災にもなる東のストッパーとして。

それくらいのお客様は、少女三人の中では夢見がちになりがちなのはにだつて出来た。

ならば。今の自分の役割は、束を止めることにあるのではないかという結論に辿り着く。

何をしようとしているのかは分からないが、とにかく止めなければ。

大丈夫、束ちゃんが何処にいるのかは分かっている。きっとこの奥、もつともつと地下に下つていった所だ。そうに違いないと、なのは確信していた。

それを裏付けるかのように、走る先には黒ずんで蠢く泥が見えてきた。靴が汚れるくらい、と思つて構わずに突き進もうとするのはだったが、直前でレイジングハートの警告が脳裏へ伝わる。

この泥に似た物質は魔力で構成されていて、周囲にあるものを侵食して拡大する危険なものだ。そう聞いて、なのははますます自分の判断を固く信じるようになった。そんな危険な物が生まれるだなんて、篠ノ之束が関わっていない訳がない。そうして、既に泥へ侵食された中心部にいるだろう彼女がどんな危険に晒されているかという不安もまた、大きくなった。

でも、大丈夫。きつと間に合う。

フライヤーフィンを使って全速で通路内を飛んでいるのだから、走つて来るより更に早いし、それに。

なのははいつも、間に合っていたじゃないか。

束ちゃんが悲しんでいたあの時も。

プレシア・テストアロツサの元へ向かったあの時も。

ユーノくんを助けることが出来た時だつて。

そして、三年前、つまらない世界に失望していた束ちゃんと、なのはが出会った時。

もし少しでも遅れてたら、あんなに素敵な出会いなんて、永遠に生まれなかった。友達と一緒に明るく暮らすのはと、たった一人で科学を追い求める束は、ずうつと、道を交えること無く進んでしまつていただろう。

だけど、なのはは間に合った。万分の一に届かないほど小さく微かな、けれどもとても素敵な奇跡に、ちゃんと辿りつけた。

それは偶然ではないと、なのはは考えている。自分の中にある、何かのおかげだと、最近ようやく分かってきたのだ。

一体、何なのだろう。束ちゃんに聞いたら、答えを教えてくださいませんか。

この後束ちゃんと会って、一緒に地球へ帰ったら、聞いてもいいだろうとなのはは考えた。頭のいい束ちゃんのことだ。きっと解き明かしてくれることだろう。

通路はどんどん狭くなり、泥に触れずに空を飛ぶのも厳しくなってきたが、なのはの溢れる魔力をレイジングハートが防御に使ってくれている。

さあ、後もう少し。もうすぐ、もうすぐだ。

角を曲がって小道を抜けて、ドアを突き抜け最短ルートでまっしぐら。

さあ、さあ、さあ――

「助けてくれえええええっ！」

ぴたり、と白いバリアジャケットのたなびきが止まる。人間、何かに夢中になると周りの物音が聞こえなくなると言うが。しかし、助けを求める悲痛な叫び声を、なのはの耳が聞き逃すはずがないのだ。

迷いはなかった。

なのはは来た道をまっしぐらに戻り、声の鳴り響いた方向へと突き進んでいく。

困っている人がいて、自分にそれを助けられるだけの力があるのなら。

助けに行くのは当たり前のこと。

そう、何よりも、魂に刻まれているくらい、ごく当たり前のことだった。

――だから、それが何を引き起こすのかなんて、考えることもな

かった。

「ど、泥が来るう！ 誰かあ！ ひい！ うあ、あああ！」

悲鳴が聞こえてくるのは奥まった場所にある小部屋だ。恐らく、有事の際の避難所兼脱出口として作られたのであろう。頑丈なシェルターが泥の侵入を防ぎ続けていたが、度重なる侵食に限界を迎えていて、地上へ脱出するための機構すら、泥に侵され動かないようだった。砲撃形態のレイジングハートを構え、短縮詠唱の簡易砲撃で纏わりついた泥ごとシェルターをぶち抜いて。セーフルームの中に降り立ったあと、プロテクションで一先ずの壁を作ったのはが見たのは、憔悴しきって床に座り込んでいる、白衣を着たいかにも科学者風な男である。

「大丈夫ですか!？」

「あ、ありがとう……君は？」

「高町なのはです！」

男はこの研究所らしき施設の職員であろうか。そう考えたなのは、ここでようやく、束のことを思考した。

この人なら、もしかすると束ちゃんが何をしていたのか、知っているかもしれない。

「君みたいな女の子がどうして？ 救出に来た管理局員か？ つ、とにかく、早くここから」

「すみません、それよりも……束ちゃんって女の子、知りませんか？」

なのはが聞きただした途端、男は何かグロテスクな怪物でも見たかのように震え出した。ひい、という小さな悲鳴を漏らし、カタカタと震える肩を、なのはは手で掴んで落ち着かせる。

「知ってるんですか？」

「し……知ってるも何も、あいつは私を……私を騙して、それで」
「騙して？」

「いや……あの闇が、闇の書の脅威の本質だとしたら、私は……ひいひいっ！」

パリン、と音が鳴って、泥の圧力に耐え切れなかったプロテクションが割れる。仕方なく、なのはは男を抱きかかえて部屋から通路へ飛

び立った。もはや泥と言うよりは濁流と化した闇色が、部屋を容赦なく汚し、その後からグロテスクな肢体を次々に生やしている。

「あれは……再生しているのか……？　だったら不味い！　おい、君！　早くここから逃げろ！」

泥と肉の蠢く床に落ちたくないとなのはにしがみつきながら、男はそう繰り返す。なのはも、この状況がいささか不味いものだど気づいていたが、しかし、諦めきれず、再び心が感じた方角へと向かっている。

「やめるんだ！　ここがこんな状況では、あの場所はもう……」
「嫌ですっ！」

胸から絞り出すような大声。

そう、嫌だ、そんなの嫌だ。もうすぐそこなのに。束ちゃんにほんのすぐそこまで近づいているのが分かっていて、それで引き返せなんて。

もしも、なのは一人なら。それか、どこか安全な場所が近くにあるのなら、そこに男を降ろして、なのはは躊躇うこと無く束のいる場所へ突っ込んでいっただろう。

だがしかし。

両手と背中に感じる重さが、彼女の意志を鈍らせる。

「いいか、彼女は、篠ノ之束はもう」

「そんなことありませんっ！　束ちゃんはまだいるんです、私には分かるんです！」

「だとしても危険過ぎる！　早くここから離れないと、この分ではここら一帯が吹き飛ばぞ！」

喚く男を突き放し、泥の中に放置しておくことは、なのはには出来ない。もし出来るのなら、それはもはや高町なのではない。

だが、束のいる場所には何としても行かなければ、もし今、辿りつけなかったら――

「でも、でもっ！」

根拠の無い悲劇を想像して、重荷を抱えて行く先に泥の濁流を迎えながらも、再び進もうとするのはだった。

その眼前に、泥へ追い立てられるように飛ぶ三人の魔導師が立ち塞がった。

「君は……高町なのは、か」

ギル・グレアムと、リーゼアリア、リーゼロッテである。

この状況で中心部から来たということは、彼らはきつと、東の居た場所にいたのだ。そう考えたなのは、訴える対象を男からグレアムへと変えた。

「グレアムさん！ 東ちゃんは、東ちゃんは……！」

「……………」

「この人をお願いします！ 私、東ちゃんを助けに行かないと！」

張り詰めた声、ひたむきな瞳。友達を純真に救おうとする女の子の瞳を見たグレアムは、幾許かの逡巡の果てに——目をつむり、ゆっくりと首を横に振った。

「どうして！ 東ちゃんはあそこで、たった一人で……なのに！」

中枢部で起こったことを何も知らないのはが懸命に訴えるので、何も言えないグレアム。その代わりに、使い魔たちが説得にかか
る。

「駄目！ あなたまで犠牲にする訳にはいかない！」

「それに、あいつは……東は、何もかもを覚悟してる、あれは行っちゃって、止められやしないよ」

「そんなこと、ない!!」

こちらも少なからず心を痛めているようで暗い顔をしながら、二匹はそれでも頑なになのはを止めにかかる。しかしなのはも常になく強情で、彼女たちが道を塞がなければ、今にも飛んでいくつもりだった。

「東ちゃんが楽しんでいる世界は、私と皆のいる世界で……なのに、東ちゃんだけが……そんなの、東ちゃんは絶対に、絶対にしないんです！」

「なのはくん……それが、理由ではない。彼女はただ、君たち——いや、君たち以外にも、沢山の人たちを守る為に決断して、あの場にいる……私たちには止められないよ。多分、千冬くん、ユーノくんでも、

そして、君でも」

「そんなこと……！」

篠ノ之束が、なのはたち以外の誰かを守る。それは、誰かをどうでもいいと嘲笑う天才ではなく、誰かの気持ちや痛みを思いやって、優しくなれる女の子の行動だ。

今の束は、世界を面白いと感じているところか、そこに生きる自分と同じ人間たちにも、興味と関心、そして親愛を取り戻した。束と出会った時になのはが誓った目標は、達成されたのだ。

——でも。

その結果が、これなのか。

「嫌だ……そんなの嫌だよ、絶対に……！」

高町なのはという、清らかで優しい、神聖さすら感じられるほど善良な女の子の胸に。恨みや憎しみという感情が、初めて芽生えるというのなら。この瞬間こそがその時だ。

それは、誰に向けられる感情でもない。

ただ、一人の女の子と友だちになってしまった自分を責める、無形の刃だ。

「……だが、もうどうにもならん。ここで行った所で、君が犠牲になるだけだ。それは、彼女の望みではない……」

「あなたに、束ちゃんの何が分かるの!?! 何も分かってないのに、勝手なこと言わないでよ!」

放たれた罵声は、なのはらしくない怒気と乱暴さと攻撃性に満ちていた。もし男を抱えていなかったら、レイジングハートを振りかざして、射撃魔法のチャージを始めていただろう。

だが、いくら感情を込めたとしても、その程度の訴えで、既に腹を決めたグレアムの心は動かせない。主の意志に応じたリーゼアリアが転送用の魔法陣を展開し、この場にいる全員を転送させる用意を始めていた。

「そうだろう。だがこれだけは分かる。これ以上犠牲を増やすことだけは、なんとしても避けねばならない。だから、さあ、来るんだ」

「だめっ! そんなの、ぜったいぜったい、ぜったい!!」

避難しろという指示を頑として跳ね除けたなのは、既に取り乱しきっていた。優秀な魔導師であることが、この場合更に災いしていたかもしれない。泥の量が更に大きくなり、街全体を包み込もうとしていることが分かってしまうのだ。だから、より焦り、強行手段を取ろうとする。

そうして、ついに理性を激情が上回り。

抱えている男を取り落として泥の中に浸し、自分一人の飛ぶ速さで無理にでも束の元へ向かおうとした、その時。

「なのは！」

「え……千冬ちゃん!? ユーノくんも!?!」

なのはの肩を叩いたのは、追いついたユーノと千冬だった。なのはの直感がうずき、ホテルを飛び出したのと、二人がなのはを追いかけ始めたのには一時間ほどの差があったが、ようやく追いつき、ユーノの飛行魔法を使って泥の中を進んできたのだ。

「グレアム氏と何を言い争っているかは知らんが……ここは危険だ。私たちと一緒に逃げよう！」

「あ……で、でも……」

グレアムやその使い魔の説得ならば、幾らでも首を横に振れるのはだが。何も知らないとはいえ、大親友のユーノと千冬が相手であるなら話は変わってくる。勝手に二人の元を離れて、こんな危険な場所まで来させてしまったという、負い目もあった。

思わず躊躇い、即答を控えるなのは。その一瞬が、彼女の命運を分けた。

「アリア、転送を」

「分かりました、父上」

この機を逃せば、頭に血が上っている女の子はもう二度と止められない。そう判断したグレアムが、既に展開させている転送魔法の発動を命じたのだ。

忽ち、その場にいるなのは、グレアム、リーゼ姉妹、そしてユーノと千冬、合計六人を青白い魔力が包む。

「な……だ、だめっ! やめてえ! 束ちゃんが、束ちゃんがあ!!」

「……すまない」

老人の小さな懺悔の一言と同時に、魔力は渦となって、六人を安全な場所へと導く。こうなるともう外へは出られない。無理に出たら、魔力によって身体がどんな風になるか分かったものではないのだ。

しかし、なのはは。

男を泥に落とさないようしつかり抱き抱えつつも、碎ける程に齒を食いしぼり、そして親に見捨てられた赤ん坊のように泣き叫んだ。

「束ちやああああんっ!!」

「……なのちゃん」

漆黒。そして静寂が辺りを包む中、独りごちる。

仕込みは功を奏した。なのはがこちらに向かっているのは知っていた。何かしら妨害をしなければ、この場に辿り着いてしまっていただろう。だから、あの科学者を使った。本当は自分一人ですらでもなる計画だったが、彼を巻き込み、なのはの目の届く所で危地に追い込めば、それを見逃せるのではない。

暗黒に染められた空間で、何が聞こえた訳でもない。何を感じるはずもない。

束はただ、知っていた。

たった今、転送魔法に巻き込まれたなのはが、自分との永遠のお別れを認められずに叫んだという事実だって。

そう、束は全てを識っている。頭の中で考えて予測して、知ることが出来る。

それは、何も自分の少し向こうにいる六人のことや、グレアムがこの出来事の責任を全て被って管理局を懲戒されること、自分の行方不明とともにミッドチルダのことや魔法のことが高町家や篠ノ之家に伝えられることだけでない。その程度なら、今までの束にだって安易に予測できる。

「……………」

古代ベルカから悠久の時を経た、記憶媒体の中身は本物だった。

束の頭脳には、今や数千年前から現在までの、永く連なる歴史の事象が詰め込まれている。

そしてそれを基にして、今までの、そしてこれからの、あらゆる事象を演算し、予測できる。

——文字通り、何もかもを。これから自分が、どうなるのかも。自分を失ったのはや、千冬や、ユーノが悲しみに暮れるのも。

「……………」

だが、それでも束に後悔はない。

何故なら、彼女はついになれたのだから。

自分の理想とする自分に。

闇の書という恐るべき怪物から、なのはも、千冬も、ユーノも。グレアムも、リーゼ姉妹も、そして、八神はやて。あとは、あの科学者の男さえも。

誰も傷つけること無く、悲劇を終わらせてみせて。

そうして、自分は望むものを傲慢に手に入れる——。

今までのような貪欲さで自分の欲しいものを追い求め、尚且つ誰も犠牲にしない。

そんな自分に、なれたのだから。

まあ、その結果自分は、ナハトヴァールの暴走消滅に巻き込まれて、分子の一欠片も残さず消滅してしまうのだが。

それくらいなら、まあ、しょうがないか。

無意識にツイントールの端を片手で弄りながら、そう諦めてしまうくらい、束は上機嫌だった。

「……………」

さて。もう決まってしまったことを考えるより、もつと大事なことがある。

この空間が完全に消滅してしまうまで後数分。それまでに、ざっと数万年分の未来と過去くらいなら、完全に予測仕切つて理解できるだろう。

折角手に入れた無限の知識だ、限界まで使つてしまわなければ勿体無いではないか。

早速、束は思考し始めた。

ISを作る時と同じくらいに自分の脳髓を限界まで酷使用する。パソコンで言うとCPU使用率100%、知恵熱だつて出てしまいそうなくらいに働かせる。

知りたいことは、星の数以上に沢山有るのだ。

例えば、ミッドチルダやベルカの魔法が、何処から来て、どんな風に発展してきたのか。

プレシアが妄執で追い求めた、アルハザードという伝説は果たして本当に存在するのだろうか。

——そして、時空管理局という複雑怪奇な組織の成り立ちも——
「あは」

そして、束は気づいた。気づいてしまった。

全ての真実に。

「そっかそっか、そういうことだったんだ」

プレシア・テストロッサが関わったプロジェクトFが、違法とされている生命操作技術でありながら、何故法の網に触れず、プレシア・テストロッサという大魔導師を招けたのか。

闇の書に関するギル・グレアムの独断専行と、この場所での実験が何故見逃されていたのか。

PT事件で、衝撃的な自作自演を演じ、それを自白もした篠ノ之束が、どうして何の罪も問われず疑われずにここまで放置されてきたのか。

その全てが、細い糸を束ねてくくるように繋がっていく。

「なるほどなあ、みーんな手の上、今までもこれからも、全部思いのまま

まとはね」

東は笑う。ツインテールを乱して笑う。

何と馬鹿馬鹿しい。これでは全てがペテンではないか。

これから、なのはがどれだけ頑張っても、千冬がどれだけ剣を振るおうと。

このままでは、どうあがこうが結果は一つ。

百年以上前に決められた筋書き通りに、全ての事が運んでしまう。

次元は閉ざされ、管理局は滅び――

そして、世界は一つになり、平和になる。

「なんて――つまんない」

それを成す者。

東の理想を否定し、自分をここへと閉じ込めた者とは。

それは即ち、倒すべき敵。最終目標。

それは今、全ての次元世界の上に立って、我が物顔で采配を振るう者。

それは――

ナハトヴアールの再生機能の暴走が限界を迎え、決壊が始まった。

無人の街――既に泥に浸かり、異形の塊と化した一区画は、一斉に破裂し無に帰り。

闇の書を構成する666ページと、篠ノ之東も――全てが、地平から消滅した。

閉じられかけた幕の中

その日。篠ノ之柳韻はいつもの様に、早朝の5時に起床し、境内の掃除を始めた。この海鳴の地で生まれて育ち、神主を継いでからもう二十年以上にもなる。だから、一連の行動はもう身体に染み付いており、剣道流派の師範であるのも相まって、その動きには一分の乱れも存在しなかった。

だが。彼の筭の行く先が、木造バラックの小さい小屋の前まで行き着いた時。常日頃は無視して進む彼の足がぴたり、と止まった。

篠ノ之束の研究ラボ。長年丁寧に扱われ、手入れもされてきた篠ノ之神社の清潔さと神聖さにそぐわぬ、ボロボロでしかも赤錆が所々に浮かんでいる汚らしい外観を、柳韻はまじまじと見つめる。そして、瞼を閉じ、回想する。このラボは、果たしてここまで寂れていて、骸骨のように空虚だったかと。

今時キャンプで張るテントだってもう少し小奇麗だというのに。この、時代を数十年逆行したかのようなおんぼろ小屋は、今までそれに似つかわしくないほど騒がしく、活気を外界に滲み出していた。それがどうだ。今度こそブルドーザーで轢き潰せるのではないかと思えてしまうくらいに頼りなく見えるから不思議なものである。

納得するのは簡単だ。このラボの主が居なくなつたから。柳韻の娘であり、反抗的な家出の代わりに、神社の中へ出丸を作ってしまった、篠ノ之束が居なくなつたからだ。

だが、柳韻にはやはり、それを自覚するのは難しかった。頭ではもう戻ってこないと分かっている、心の中では、いつの日かひよっこり帰ってきて、またこのラボで騒々しく厄介な発明を始めるのではないかと考えてしまう。

第一、娘の死を自覚しろ、というのが土台無理な話だ。何故なら束は、柳韻の目の届く場所から遙か離れた所——次元を超えた別世界、ミッドチルダで欠片も残さず消滅したというのだから。

「束……」

思わず言葉が漏れる。筭を振るう手は既に止まってしまっていた。

ここ数十日、束の行方不明と認定死亡の宣告を同時に告げられずかつと、柳韻の朝の掃除は甚だ非効率なものになっていた。

「……お前が、あんなことに首を突っ込んでいたとはな」

最初に話を聞かされた時は、自分を包む世界が何かしら狂ったのではないかと喩え抜きに考えた。地球の外に異世界があり、そこでは魔法で成立している文明が存在しているなんて、常識的観念を古臭い頭に満たしている柳韻にとってはとても信じられなかったし。

何より、あの束が事故で死ぬなんてことは、あり得ないと思えていた。

しかしながら、ミッドからやって来たという自分よりも年上の老紳士は、頭を畳に擦り付けるくらいに下げながら丁寧に、そして何度も語ってくれた。だから、柳韻とその妻、そして同時に呼ばれた高町家の面々も一緒に、自分の娘たちが現在置かれている状況、そして、これまで経験してきた魔法との出会いと戦いの日々を理解できた。

「魔法。ジュエルシード。そして闇の書」

なるほど。確かに束であるならば、目を輝かせて全身全霊で飛び込みそうな題材だ。それに、運動音痴の高町家の末娘が、篠ノ之の剣道場を借りて竹刀を振るい、織斑千冬との特訓をしていた理由も腑に落ちる。

自分たち大人は、三人の少女が夢中になっている何かを、あえて無視してきた。だがその奥には、彼らの想像だにできなかった壮大で、そして危険な物が隠されていて。

その魔手に、ついに引つかかかってしまったということなのだ。危険な火遊びに熱中する子供の内一人が、自分の身体を火の中に包み込んでしまったような。

「何故だ……何故……」

柳韻の心に浮かび上がるのは、問いかけだ。

何故、どうして。

どうして——私たち大人を、親を頼ってくれなかったのか。

確かに魔法の力を持たないものに、ジュエルシードは封印できない。高度な知識と天才的な頭脳を持つものには、闇の書も魔法も解

析できない。危険なロストロギアに対し、この世界の大人はまるで役立たずだという理屈は、柳韻にも良く理解できた。

だが、それでも。

せめて秘密にせず、私達に話だけでも、してくれば良かったじゃないか。

いや——娘とろくに話もせず、ただ常人より頭が良いから、不気味なほどに鋭いからといって、遠ざけてしまった、私たちこそが——

「おはようございます、柳韻さん」

もはやどうにもならぬ悔しさに齒軋りしていた柳韻に、石段を少し下った所から話しかける、穏やかな声があった。

驚いて目を開くと、そこに居るのは、昔ながらの中年親父である柳韻より少し若く見える、ジャージを着た黒髪の男だった。穏やかな顔つきから、一見するダイエツトがてらに朝の運動を始めたごく普通のサラリーマンのようにも見える。しかし柳韻の目には、ジャージの下にある筋骨隆々、かつ靱やかに鍛え上げられた剣道家としての肉体が見えていた。

「土郎さん……」

そう、彼の名は高町土郎。束の親友だった高町なのはの父親にして、柳韻と同じく剣を嗜み、とある流派の師範でもある。

娘同士が親友になった関わりで知り合った二人は、その共通点も相まってかすっかかり意気投合しており、月に一度はどちらかの家で将棋を指したり剣を交える、そんな仲だった。

「どうしてここにまで？」

「いや、今日は少し気分を変えようと思ったたら、いつの間にやらここまで来てしまいました」

彼がランニングをしていることは何ら不思議ではなかったが、それで篠ノ之神社に来るのはどうしてかと柳韻が問えば、土郎はこう切り返す。そして、あれよあれよとすぐ側まで近づいてきたので、柳韻も仕方なく箒を置いて、彼とともに石段へ座って休むことにした。

これで朝の掃除は更に長引き、朝食は少し冷えたものを食べる羽目になってしまいうだろうが。

それよりも、互いに話したいことがあった。

「——そちらは、どうですか」

「……………」

柳韻にそう問いかけられた士郎は、数瞬戸惑い、やがてポツリと呟いた。

「余り芳しくはありません。新学期が始まったというのに、まだベツドの上です」

「まだ」という言葉で、士郎が話しているのは束の親友だった二人の少女の内の片方、高町なのはのことだと柳韻は理解した。

爆心地たる研究区画から脱出した直後、なのはは気絶し倒れた。時空管理局による診断で、命に別状はなく全くの健康体であることは分かったのだが、何故か気絶した状態のまま、瞼をピクリとも動かさず、目を覚まそうとしない。精神的に多大なショックを受けたことによる昏睡であるだろう、というのが局の医師が出した結論だった。

「私たちも仕事の折を見て話しかけたり、友達もお見舞いに来てくれているのですが、なんとも」

「そうですか……………」

この話を聞く度に、柳韻の胸には痛ましさと、責任を果たせなかった後悔がのしかかって来る。親として、束のことをもう少し見てやれたら。魔法などという危険なものに手を出させず、いや、友人を巻き込まないようにしてやる事が出来たなら、こんな悲劇は起こらなかつたはずだ。

だが、そうして自らを罰しようとする柳韻の心を見透かすが如く、士郎は首を横に振りながらこう語った。

「そんなに暗い顔をしないでください、柳韻さん」

「ですが」

「これはあなただけの責任じゃありませんよ。私も——なのはが何かをやっているのを知って、それを放置していた。子供のことだと樂觀して、何も知ろうとしなかった。そんな私も、あなたの娘さん、束ちゃんの事に責任を持つべきでしょう」

違います、と反論しようとした柳韻を、士郎はやんわりと目で抑え

る。

そう、今更誰が悪い、誰のせいだと語るのは水掛け論でしか無い。突き詰めれば、束とそれだけでなくなのはと千冬をミッドチルダへ誘ったギル・グレアムという老人が全ての元凶であるようにも見えろが。そもそも彼が束へ接触したのは、束が闇の書を手に入れてしまったからなのだ。

つまり、誰が悪い訳でもない。全員が全員の思うまま、信じるままに行動し——そうして起こってしまった悲劇なのだから。あえて悪者を決めつけるならば、それは降ってきたり転移したりしたロストロギアになるが、それは別に故意ではなく、ある種の災害みたいなものだ。

「質の悪い伝染病か、大きな地震に巻き込まれたようなものだ。私は、そう思っています」

そう言って、士郎は責任を自分に押し付ける柳韻を無理矢理納得された。それを聞いた柳韻の本心はこうだ。

彼ほどの男でさえ、この不幸をただの天災だと思わなければ、心の平衡を失ってしまうのか。

もしそう考えて諦めなければ、士郎も自分と同じように、自らの決断をせめて負い目を作ってしまうだろう。それが、似たもの同士の共感であった。

「そうですか……」

「ええ、それで、今度は私が聞きたいのですが」

次は士郎から話しかけて、聞いてくる。少し強引な話題転換だった。

「ユーノくんはどうしているんです？ 私はあれから、あの子には会っていないもので」

“あれ”とは、貸し切りとなった翠屋で、グレアムとリーゼ姉妹、そしてユーノが魔法世界とロストロギアについて高町家と篠ノ之家に説明した時のことだ。

まるで死刑の直前、罪を神父に洗いざらい吐き出す囚人のような二人と二匹の表情を、柳韻は今でも良く覚えている。グレアムと使い魔

は、束を闇の書と本格的に関わらせ、悲劇の舞台を作ったことに。そしてユーノは、なのはと束を魔法と出会わせたこと、そして束の助手として何も出来なかったことを後悔し、ともすれば私刑を受けてもいい、それくらい覚悟を固めていたのだろう。

ただ、彼らにとつては幸運な事に、高町家の面々は全員理性的で、懐が深かった。柳韻自身はそこまでではなく、彼らの首根っこを引き千切ってやりたいという激情を胸の中に抱えたりもしたのだが。自分の友である士郎が大人しく聞いているのと、結局は娘の教育に失敗した自分の責任だ、という想いが、どうにか押さえつけた。

「もうここにはいませんよ」

だが、今までどおり束の助手兼ペットとして、フェレット一匹を篠ノ之家に置いてやる理由は何処にもなかった。それにユーノもこれ以上の滞在を望んでいなかったようで、一人の親父と一人の少年は、何一つ言葉をかわすこと無く自然に別れていった。

「確か、管理局の本局にいるかと。その時、束の発明品を一つ持って行きました。私としては、あのガラクタがどういうものかはようわからんので、放っておきましたが」

束の発明品、つまり束の遺品か形見と言うべきものなのだが、柳韻はそれに対して何らの執着も持ち合わせていなかった。昔気質の彼にしてみれば、文明の利器の最先端の更に極北たる発明品の数々は、何がどうなっているのかでわからぬものばかりであり。

何より、束自身が既に発明し終わったものに対して何も興味を示さないのを思い出せば、柳韻も持つて行くなら持つて行けばいい、という心境になるのだ。

「……そうですか。いや、それを聞けば、家の千冬は安心するでしょうな」

「ほうっ」

去っていくことの何処が安心なのだろうと柳韻は訝しんだが、士郎が安堵したのはそこではなく、発明品の一つを持つて行った、というところだった。

「言ってたんです。ユーノに『白式』を直して貰わなければなつて」

『白式』……東の作った、パワードスーツ……でしたか」

「はい。詳しくは分からないんですが、それがないと駄目だ、東を止められない、とも」

柳韻は驚き、その表情のまま、思わず士郎の方を見つめた。士郎の顔は相変わらず、柔らかいながらも重苦しい。

「まさか、東がまだ」

「いえ。千冬だけが言っていることですよ。何でも、あの程度で死ぬようなタマじやない。きつと何処かで生きていて、良からぬことを企んでいると。それを止めるためにもつと強くならねばと言って、剣を振るい続け、益々自分を鍛えていました」

一瞬だけ、何かを期待した自分に恥じ入る気持ちを柳韻は隠せなかった。

現実を認められない子供の、単なる屁理屈、現実逃避ではないか。それに同調してしまうなんて、なんとも馬鹿らしい。

「そう落ち込まないでください。私だって最初は、もしかすると、と思っただですよ。それに——今でも、ひよつとすると、くらいには考えてるんです」

そう語る士郎の表情は、重苦しいながらも柔らかかったが。柳韻はどうしてもそこまで上を向けず、忌々しげに頭を振りかぶって否定した。

「しかし……生存の可能性はまずあり得ないと聞かされたでしょう」

「それでも。千冬がああして頑張っているのに、何の理屈も根拠もないとは、とても思えなくて」

「——三ヶ月前と、同じようにですか」

柳韻の脳裏に浮かぶのは、三ヶ月前の全国的な連休の時、温泉旅館の一室で将棋を指すがてらに語り合った事だ。その時、柳韻は束から、千冬となのはのために、道場や稽古の道具を使わせて欲しいと要求されていた。それについて、千冬たちの親権者である士郎とどうするか話し合いをしたのだが、その時士郎は、

——子供が、ああまで張り切っているんです。背中を押してあげるのが、大人の役割だと思いませんか？——

と語り、ついでに柳韻から初の王手をもぎ取って（土郎と柳韻の将棋の腕には、かなり絶望的な差があったというのに）、頑固な彼を説得したのだ。

柳韻としても、少し前まではその時の決断に後悔をしていなかった。夕方、道場から聞こえる竹刀の音と、少女たちの張り切り、頑張る声は耳に心地よかったし。道場を貸す期間が終わってから、東が漸くこちらに心を開きかけてくれたのだから。

しかし。

その果てが、今自分が直面している悪夢だと言うなら――

何の根拠もないが、千冬 of 努力と確信の果てに、何か悲劇的な物が待っているのではないか。

「いえ、違います」

柳韻が心の中で抱いた、そんな不安を否定するように、土郎は首を横へ振った。

「今度は無条件に子供を信じることはしません。私たちが教えて、見守ってあげるんです。悲しい思い出を繰り返さないように、強い心と、強い力を育てるんです」

「……教える……?」

意外そうな顔で柳韻が繰り返すと、土郎は得たり、というような表情で柳韻の目をしつかと見つめ、初めて熱い言葉を彼にぶつけた。

「そう。千冬ちゃんに、私の御神流だけではなく――あなたの篠ノ之流も、教えて頂きたい」

「なっ……!?! しかし、千冬は御神流をまだ完全には」

「いえ、剣道の方ではなく――将来的にはそれも含めて。ですけど――私が言っているのは、篠ノ之流の源流。女が戦うための古武術『篠ノ之流』を、教えて頂きたいのです」

分かる。

今のわたしには、何だつて分かる。

目は閉じられ、身体も何も動かしてないけど。何もかもが分かつちやう。

人間には五感って感覚があるって最初に教わったのは、学校の先生だったつけ、それとも東ちゃんだったつけ。

でも、今私を感じているのは、そのどれでもない。

わたしは、今、ベッドの上にいて、仰向けになっている。触覚を使わずとも、それが分かる。

吸い込む空気は冷房で冷やさされ、少し冷たくカラカラだ。味覚を使わずとも、それが分かる。

わたしの隣に、アリサちゃんが持ってきたメロンがある。嗅覚を使わずとも、それが分かる。

私の心拍数の増幅を見て、白い服のおじさんが驚いてる。視覚を使わずとも、それが分かる。

それから、周りのおばさんに何かを言って動かしている。聴覚を使わずとも、それが分かる。

これって、なんて言うんだらう？

第六感？ ううん、それどころか、第七感、第八感。それよりもずっとずっとずーっと凄くて、もう第百感くらいなんじゃないかって思えちやうくらい、この感覚は鋭く早く、そして広い。

ここがどの建物かわかる。海鳴市立病院。ミッドチルダの病院から、ここまで輸送されたんだ。

それから、病院から出て、私の感覚はずうっと、ずうっと広がっていく。

しかも、広がる中にある一つ一つの物や、人が、手に取るようにわかる。病院の隣の道路を走っている車が、赤い色をして、二人乗りで、若いお姉さんとお兄さんの二人きりだつてことまでわかっちゃやう。

なんでだらう？ どうしてこんなに、わかっちゃやうだらう？

というか、私にこんな不思議な感覚があったとして、なんで今まで気づいていなかったのかな？

でもこれは、ちよつと考えればすぐ分かることだ。

私は今、目を閉じて、眠るように身体を休ませている。身体で感じる感覚の殆どはお休みしていて、何も分からない。

だから分かるんだ。心の中にあるこの感覚が、初めて表に出て来たんだ。

そう考えていたら、段々、今まで不思議だったことが分かってきた。いつも不思議だったんだ。

私は今まで、一度も迷子になったことがない。幼稚園の時、家族と一緒に行ったレジャーランドで、巨大迷路なんかをやってもすぐに脱出出来たっけ。

それから、魔法で何かと戦う時。本当なら死角だった所に敵の弾が来たのを、私は何故か理解できて、プロテクションで防御できた。もしこれが無かったら、私はフェイトちゃんと戦う事も出来なかったかもしれない。

それから、それから――

うん、そうだ。

この力が、この感覚が、教えてくれたんだ。

いつも、どんなときも。

だから今だって、同じことじゃないか。

なら――こんな所でぐっすり寝ている暇なんて、ない！

「リリカル、マジカル！」

久しぶりの変身呪文。同時にバリアジャケットを展開して、ベッドから文字通り飛び出した。

目は閉じたままだ。この力を全力全開にしないと、きつと、絶対見つからないから。

それでも、窓ガラスが目の前に近づくのが分かる。

――構うもんか。

プロテクションを張れば、私は傷つかないし、破片で室内の人が傷つくこともない。外に向かつて落ちていくけど、その下には誰も居ないことも分かっていた。

病室から飛び出す。今頃中は大騒ぎだと思うけど。

——そんなの、関係ない。

騒ぐなら勝手に騒げばいい。連れ返すなら連れ返せばいい。その前に、見つけて出逢えればそれでいいんだ。

そのまま飛ぶ。飛んで飛んで飛び続ける。海鳴の空を、可能な限り高くまで飛んでいるんだけど、多分、病院から高度を上げる所は、誰かに見られているだろう。

——でも、それがどうした。

今はただ、探すんだ。

私の大事な、ううん、神聖な、ううん、それでもない。そう。

私の——愛する、束ちちゃんを——！

でも、そこで私は、気づいちゃった。

今まで、心の奥底でいつも感じていた、いつも心の中にあつたほのかな熱さが、今はどこにもありはしない。

それは、私の中の、束ちちゃんへ向いた方位磁石。

近くにいっても遠くても、束ちちゃんを指差す赤い先端。

でも今は、それがぼっかり無くなっているようだった。

雲の上、太陽が眩しく、自分の真上を照らす中で、私は空に立ち尽くした。

まるで迷子になった子供が、見知ったものを探そうとするように、首を振り、辺りを見回す。

でも、私はまだ目を閉じているから、視覚は何も感じない。振って

いるのは、私の心。

けれど、その心の何処にも、束ちゃんはいなかった。

布団の温もりから急激に熱くなつて、直前まで火照つたようだった私の身体が、あつという間に底冷えしていく。夏の終わりの眩しい太陽に照らされているけれど、それが益々自分を凍らせてしまうようだ。

瞼が、ひくりと動く。

だめ。今日を開いたらだめ。

長い間眠つて、折角自分の奥底から引つ張り出せたこの感覚を、また忘れてしまう。

感覚を忘れるどころか、記憶にすら残らないだろう。

だって、私の心はまだ、耐え切れないから。

めをあけて、かなしいげんじつをみることに。

きつと、馬鹿な夢だと解釈して、忘れるはずだ。

だって、自分の眠る病室からいきなり変身して飛び出して、ガラスを割つて、町中の人たちに見られることも構わず空を飛ぶなんて。

それは『高町なのは』のすることじゃないもん。

だから、まだ夢のなかにいよう。

ゆめのなかで、いつまでもたばねちゃんをさがすんだ。

そう、探すんだ。束ちゃんはまだ何処かに居ると、信じてしまえばそれでいい。

うん。そうだね。たばねちゃんがいなくなるわけないもんね——

あ、そっか。

——え、どうしたの？

きつとどつきりなんだ。わたしをおどろかせようとしてるんだ。

そうだね、きつと、そうだよ。だから——

だから——めをあけよう。

待つて——目をあけちや駄目だよ。

ううん、あけるの。

駄目だよ。

あける。

駄目だよ、だって。
あけるの、だって。

東ちゃんは、もういないんだから——
たばねちゃんが、いなくなるはずないんだから——

「あ——」
めをあける。

ひろがるのはおおきなおそら。

あのときとおなじ。たばねちゃんのおうじさまになって、おどった
ときと、おなじ。

でも。ほしはそこにはなくて。

ぎらぎらひかるおひさまと。

なんにもないおそらだけが、そこにある。

たばねちゃんは——もう、いない。

「あ、あ、あああ、あああ、あ——」

おちる、おちる、おちる。

しろいながれぼしが、おちていく。

なみだいろの、ほしくずを、ながしながら。
そうだ。

わたしが、どこまでだってとべるのは。

たばねちゃんが、いたからだったんだ——

落ちていく、小さな身体。

とさりと、青色の網がそれを掬い。

藍色の髪の少年が、疲れ果てた彼女を優しく抱きかかえた。

「♪」

夏の終わり、少し涼しい風も混ざり始めた夜。

病院の裏、コンクリート敷きの駐車場の前で、少女は確かに、自分の両足で立っていた。

動くようになってから半月。リハビリはキツイものだったが、自分も、それから周りの医師たちも驚くくらいの速さで回復していき、今では歩行器なしでも、少しくらいならこうして歩けるようになったのだ。

日々のリハビリを終えた後、自分の家に帰る前に歩行器無しで病院の周りを歩くのが少女の最近の楽しみだった。最初は少し歩いただけで足が悲鳴を上げたが、段々と歩ける距離が増えていく。そろそろ丸一周しても、大丈夫かもしれない。

「ふふ、嬉しいなあ」

そう一人ごとを呟くくらい、少女は幸せの絶頂にあった。

今まで動かなかった足が、たった二つ、動くようになっただけ。それだけで、もうなんだって出来るくらいの全能感がある。

そうだ。足が治ったのなら、もう普通に学校だって行ける。

少女は学校をまだ知らない。そこで友だちを作ったり、勉強したり、運動をすることは知っているけど、それが一体どんなものかは、まだ何も知らない。

けれど、これから分かるのだ。

「ふふ、あはは」

どんな友達ができるだろう。

グレアムおじさんが通信教育を用意してくれていたけど、本当の学校だとどれくらい学力なのだろうか。

かけっこは絶対ビリだろう。けれど、いつかは足が早くなって、3位くらいにはなれるかも。

「楽しみやな、うん……」

少女——八神はやては、そう言つて、もはや日課と言えるだろう儀式を始めるため、空の上を見上げた。

雲ひとつない大空に、浮かび上がる、月。

下弦の、半月。

それに向かつて、祈る。込めるのは、感謝の気持ちだ。

「ありがとな」

確信はなかった。

けれど、あの娘と出会ってから、八神はやての日常はそれよりちよつと楽しくなった。初めて出来た友達と、あれから殆どお話しは出来なかったけど。あの陽気で愉快で、なんだか少し頼れもしそうな笑顔、忘れることはなかった。

途中、何やら気絶して、数日間寝込んだ時もあつたけど——

その終わりに、この自由が生まれたのだから。

きつと全部、ツインテールのあの娘のおかげだ。

「ほんと、ありがとなあ——東ちゃん」

だから、今日もはやては、お月様に祈る。

兎が住むのは、お月様だから。

何処を探してもいないなら、きつとそこにいるんだろう——そう、願つて。

なのたばねちふゆA， S第二幕
ここまでのあらすじ

☆これまでのあらすじ（無印）

ごく普通の小学1年生にして、高町家の末娘であるのははある日、天才的な頭脳と残酷な性格を持つ、同級生の篠ノ之束と出会う。世の中をつまらないと吐き捨てる彼女に、なのはは真っ向から衝突。その頑なさや真摯さが心を揺らしたのか、二人はそれぞれの名前を呼び合い、認め合う。

それから二年。高町家に拾われた織斑千冬も含め、三年生になる頃には大の親友として仲良い間柄になっていた。

そんなある日、なのはが一匹のフェレットを拾ったことから、異世界の魔法と出会い、危険な遺産であるジュエルシードをめぐる騒動に巻き込まれる。

これを外部から見ていた束は、魔法という未知の分野に興味を持ち、なのはの元からフェレット——に変身していた男の子の魔導師、ユーノ・スクライア——を奪取して、本人の意志を無視して助手に任命。彼とともに陰からなのはをサポートしようと決める。

一方なのはも、剣を振るえば無双の腕前の千冬と共同でジュエルシードを集めようとするが、ジュエルシードを狙う黒衣の魔導師、フェイト・テスタロッサとその使い魔アルフが強力な敵として現れた。

そして、彼女たちとの遭遇戦後。なのはがぽつりと零した『千冬ちゃんだって飛べるよ、きつと』という一言を聞いた束は、今まで解析した魔導技術を用い、千冬を空に飛ばす為のワードスーツ開発に熱中し始める。そしてなのはは、冷淡ながらも寂しい目をしているフェイトのことが気にかかり、戦うことで彼女を理解したいと考え、千冬と共に戦いへ進むことを改めて決意する。

なのはや千冬がそれぞれに自分の力を鍛え、束とこき使われるユーノがワードスーツ開発に邁進する中、異世界の巨大組織である時空

管理局の艦船アースラとそのクルー、リンディ・ハラウン提督とクロノ・ハラウン執務官らも事件に介入し、街中に散らばるジュエルシードは次々と封印されていく。

その中で、アースラには不審な態度を見せながら時折謎の行動を取る束に、ユーノは疑念を深めて問いただす。だが、束はなのはとの友情は嘘でないし、裏切りなんてしないと言い切った。

そして、残り6つのジュエルシードを、なのはとフェイトが協力して封印し、いざ二人の対話が始まるかに見えたその瞬間。フェイトの母であるはずのプレシア・テスタロッサがフェイトを攻撃。一人娘であるアリシア・テスタロッサのクローンにして人形、というフェイトの出生の秘密を暴露し、そのまま自らの拠点『時の庭園』を海鳴の海浜に転移させ、分厚い結界でなのはたちを外界から隔離した。

アースラは当然、外部から結界を打破しようとするがしかし、何者かのハッキングによって身動きが取れなくなってしまう。プレシアがこのままジュエルシードを手に入れ発動させれば、その余波で地球は滅びる。孤立無援、絶望的な状況に陥ったなのは、ユーノ、千冬。だがなのはは諦めず、单身時の庭園に乗り込んで事態を打開するという無謀な賭けに出た。

善戦するも結局囚われてしまったなのはは、プレシアの口からこの事態の真実を明かされる。プレシアがここまで事態を上手く運べたのは協力者の手引きであり——その人こそ、なのはの親友である篠ノ之束であった。

プレシアの真の目的である、古代魔導の都『アルハザード』への転移に興味を持った束は、なのはたち、そしてアースラクルーをも影から操り状況を誘導。なのはたちの持つジュエルシードを含めて全てのジュエルシードが集まった後、プレシアと共にアルハザードへ赴こうとしていたのだ。

余りにも残酷、かつ醜悪な真実。だが、なのはは——それを否定した。束が世界をつまらなさと諦めていたのは昔の話。今の束は、この世界を滅ぼすような真似なんてしない。

その言葉を肯定するかのように、なのはは拘束から解き放たれる。

彼女の突入後に突如現れた束の手から、パワードスーツ『白式』を与えられた千冬が傀儡兵の大群をなぎ倒しながらハイスピードでやってきたのである。

完璧だったはずの計画を脆くも壊され半狂乱になったプレシアは、苦し紛れに手持ちのジュエルシードを暴走させる。だが、『白式』の特殊能力『零落白夜』のエネルギー無効化によって暴走エネルギーを相殺しつつ、なのはの封印砲によって封じるコンビネーション攻撃『雪桜』がそれを封じ、地球を救った。

余波により崩壊寸前の庭園内で、尚もあがいてアリシアの元へ辿り着いたプレシアだが、そこに束が現れ、嘲笑いながら暴露する。実はプレシアこそが、この決戦場を作り上げるために束に操られていたこと。全ては『白式』の鮮烈なデビュー戦と、千冬となのはの友情を見たいが為の策だったこと。

全てを聞き終える前に、プレシアの精神は限界を迎え、おりからの持病によって事切れた。その死体の哀れさを見た束は存分に噛い——心の奥から湧き上がる何かを発散するように、アリシアの死体が入ったポッドを殴りつけた。

そうして全てが終わり、管理局が事後処理に苦難している中、なのはとフェイトの模擬戦が行われる。何度も戦いながら付かなかった決着を付けるため、そして、最後に一人悲しんだままのフェイトの心を救わんが為、なのはは飛び、勝ち、晴れてフェイトと友達になれた。そして、アースラは回収できたジュエルシードと、事件の裁判を控えるフェイトらと共にミッドチルダへ帰還。ユーノは引き続き束の助手兼監視役として地球に残った。

めでたしめでたし——しかし、束は一人、夜の公園に佇む。その顔に浮かぶ苛立ちの理由は、なのはの前に現れて、戦い、守られ、友達となったフェイトへの嫉妬。青臭いながらも処理しきれない感情に苦しんでいた彼女の前に——突然、なのはが現れた。

なのはは語る。今まで密着していた二人の距離が、この事件を通じて少し遠のき。束の側にユーノが居付くようになって、なのはにはフェイトという新しい友達が出来た。

とてもとても、嬉しいことだけど——でも、何故だか——少しだけ、悔しい。

それを聞いて、束は得心する。色々あったけど、やっぱり二人は二人共、一番大事で愛する友達なのだ。その熱を確かめるように、二人は手を握り——

夜空の月に照らされて、仲良く踊った。

☆これまでのあらすじ（A's 編序章）

ジュエルシードを巡り、プレシア・テスタロッサが引き起こした、通称PT事件から間もなく。篠ノ之束は、誕生日を目前に控えた車椅子の少女八神はやたと出会い、彼女を助ける為に髪型をツインテールへと変える。そして、彼女に取り憑き害を成している呪いの魔道書、ロストログア『闇の書』を発見し、その構造の複雑さに魅了される。

自らのラボにはやてを招いて交渉しあつけなく闇の書を手に入れた束。だが、彼女の動向をいち早く掴み監視している老人がいた。管理局の高官にして、かつて闇の書が起こした事件で弟子とも言える知人を亡くしている、ギル・グレアムである。彼は即座に自らの使い魔、リーゼリアとリーゼロッテを経由して束とコンタクトを取り、自らの屋敷へと招いてある提案を持ちかけた。

闇の書の完全解体。全面的なバックアップを条件としても、プライドの高い束が領く可能性は低い、はずだったが。束はある条件と引き換えに提案を呑み、引き受けた。

その条件とは、ミッドチルダの研究施設を使わせることだった。前々から次元世界と魔導の本山に興味を抱いていた束は、これを機にそこへ赴きつつ、優れた設備を使って研究を進めようとしていたのだ。

これをグレアムはあつさり承認するが、どうせならという名目で、なのは、千冬、ユーノをも彼女の旅路に巻き込んだ。これは、危機的

状況においてのストッパーとして役立つかもしれない、という処置であつた。

そうして、東は三人に夏休みミッドチルダ旅行を持ちかけた。千冬とユーノはその唐突さ、そしてバックに管理局の大物が付いていることを訝しむ。だが結局、東を信頼しきり真つ先に賛成したなのは釣られ、ミッド行きを承諾することとなつた。

かくして、ミッドチルダのとある場所に作られた、技術実験用の都市区画に四人は転移する。そして、なのはと千冬、ユーノは観光を楽しみ。やはりその裏で、東は闇の書の解析と解体に奔走することとなつた。

そんなある時、なのはと千冬は、偶然にもフェイトとアルフに再開し、この地で命を失つたというアリシアと、共に祀られているプレシア、リニスの墓参りに出かける。しかし、まだ誰も訪れていないはずの墓に、何故か白いアセビの花が捧げられていた。

そして、ある時ふともう一度墓地を訪れたなのはの前に、籠一杯の花を持った束が現れた。『犠牲』の花言葉を持つアセビは、やはり束の手によって捧げられたのだと信じていたなのはは喜ぶ。そして、かつてこの都市で行われた実験や事故により命を失った人たちの墓へ、アセビの花を共に捧げた。

それから、束は語る。大きくなつたら、自分は天才になりたい、と。既に天才として数多くの発明と成果を誇っている束だが、プレシア・テスタロッサの一件から、自分を天才だと考えないようになっていた。

この墓に祀られているような犠牲——プレシア・テスタロッサ——を出すような自分は、天才ではない。本物の天才は、何も犠牲にせず、全てを救つて、尚自分の欲と望みを叶えるものだ。

そう唱える束を、なのはは称え。束は、なのはが元来持つ優しさと勇気を目指し、夢見ている。

二人ワルツを踊つたあの日と変わらぬ友情を、確信し合つた二人だが、そこに悲劇が訪れた。

闇の書を己が手にする過程で、束ははやてと書の結びつきを緩め

た。これにより、書がどれだけ弄くられようとも、主に影響は与えられないはずだったのだが。

はやてが昏倒し、命の危機に晒されている。書の改竄に抵抗しようとする自動防衛プログラム『ナハトヴァール』が魔力を求め、強引に主との繋がりを回復。その身から過剰なまでの魔力を吸い取っていたのだ。

これを放置すれば、はやての命は間違いなく失われてしまう。少しでも犠牲を減らそうとするグレアムは、闇の書を魔導砲『アルカンシエル』によって消滅させようとする。

が、束はそれに強硬なまでの反対の意志を示した。その理由は彼女の目的である闇の書の解体は中途に終わること。そして、消滅した書もいずれまたどこかで復活し、呪いと破壊をばら撒く——ということ、誰にも告げない理由がもう一つ。

闇の書の中枢にある、記録データ。数千年の歴史を余すこと無く記録したそれを、束の頭脳にインプットすれば——彼女が得意とする未来予測は極限まで拡大し、現在過去未来の全てを予測することが出来るようになるのだ。それはつまり、束のなりたい存在になれる唯一の方法であり、なんととしても妥協の出来ない物だった。

だが、グレアムは束の主張を頑なに否定し、拒否すれば束ごとアルカンシエルを使うとまで言い切った。彼の方法を否定できず、代案を呈示することも出来ない束は、彼女らしくない現実逃避としてなのはたちを誘い、旅行の一環としてのバーベキューを行った。

そこで、千冬に事情を知られずも自らの悩みを見透かされ、激励を受けた束はある決心を固め——実験都市のシステム全てを掌握し、闇の書と共に都市中央の施設に立て籠もった。

都市のコンピュータにプログラムされていた避難計画が発動し、町中の人間が避難していく中、グレアムとその使い魔達、何故か胸騒ぎを覚えて飛び出したなのは、そしてそれを追うユーノと千冬が束の居る場所を目指す。

真つ先に辿り着いたグレアムが目当たりしたのは、束の制御により意図的な暴走を引き起こされたナハトヴァールだった。無限再

生機能を暴走させ、自己崩壊を引き起こそうとしているのだ。そうすれば、闇の書は実験都市ごと完全に消滅し、はやての命が失われることもない。

しかし、崩壊を完全に制御し、最低限の被害に抑える為には束が最後まで残って操り続けなければならない。つまり、このままだと束は消滅に巻き込まれ、チリひとつ残さず消え失せてしまうのだ。

何もかもを救う代わりに、自らが犠牲の羊と相成る——それが、束の決意だった。

それを知ってか知らずか、胸騒ぎに取り憑かれたように束の元へ駆け抜けるのはだったが——束が町を乗っ取る時に共謀した研究員の男を迷わず救助する、その僅かな瞬間が命運を分けた。

束の説得を諦め戻ったグレアムたち、そして後から合流した千冬、ユーノが、尚も進むもとするのを止め。転送魔法で実験都市から脱出した、その時。

ナハトヴァールの暴走が極限に達し、全てを消滅させる光と化した。

それから、一ヶ月後。束を失ったショックで意識を失っていたのはは、目覚めると同時に、自分の中にある不思議な感覚に気づく。千冬は束の父である篠ノ之柳韻から篠ノ之流を学び始め、ユーノは未だ起動しない『白式』を直し続けていた。

誰もが悲しみに暮れ、それを紛らわすように何かを追い求める中。

両足が動くようになったはやては、いつか出会ったウサミミの女の子に、心の中で感謝した。

予告みたくないなもの

篠ノ之束がこの世界から消滅して、三ヶ月が過ぎた。

季節は秋から冬に変わりゆく、ちようど境目。心に塗りがくられた悲しみは色濃く暗いけれど、時間が経つごとに乾いていく。

高町なのは一先ずは心の平穏を取り戻し、千冬、アリサ、すずからと、仲良く学校へ通えるくらいに回復していた。

——しかし。

平穏を食い破る、狂騒と暴力という二匹の怪物は。

地球から遙か離れた、次元空間の狭間において既に生まれていた。

「我ら、夜天に集いし雲」

「我ら、紫天に集いし星」

常闇の空間に、響く、6つの声。

「ヴォルケンリッター」

「マテリアル」

彼らが跪くは、たった一人の少女。

「我らが主よ。我らが王よ。なんなりとご命令を」

そして、少女は唇を釣り上げ、なんとも滑稽な笑みを浮かべてこう呟いた。

「じゃ、行こっか。災厄を振り払い、悲劇を終わらせるために。みんなを、幸せにするために」

——世界を破壊する、究極の災厄とは？

「警備隊に限らず、動ける人間は誰でもいい！ 僕に付いてきてくれ！」

「本局が、たった七人にここまでやられるなんて——アルフ!?」
「フェイト、クロノ！ 来るよ、あいつらだ！」

——次元世界最大規模の勢力を誇る時空管理局本局は、どうして無力化されたのか？

「すまないが、地球に増援は送れない。こちらは事態の収集と復旧で手一杯だ」

「そうか……分かった、クロノ」

「……待って、二人共！」

「ユーノ!?!」

「無茶だ！ アレはまだ実用段階ではないし、お前自身も——」

「大丈夫だよ、クロノ。千冬が頑張るのに、僕一人だけ休んじやられない。地球に行くよ。そして——」

——三ヶ月の間、ユーノが命を削って作り上げた物とは？

「篠ノ之流と御神流は、根本から異なる。技術そのものでなく、考え方が異なるのだ」

「はい」

「士郎さんが極めた御神流は、大切なものを守るための武術だ。発祥こそ殺人剣だが、それを伝承している者の心構えこそ、術の芯と言える。分かるか？」

「なんとなくは。私も、なのはを守るために、剣を振るっていますから」

「そうか……千冬よ。これから篠ノ之流を学ぶには、お主の考え方を変えねばならぬようだ」

「え……?」

「剣とは、武術とは、守る為の物にあらず。結局は誰かを傷つけ、何かを奪う為の物だとな」

——篠ノ之柳韻が千冬に教える、篠ノ之流古武術の真髄とは如何に？

「提督。対策委員会は どうでしたか？」

「……もう大変な騒ぎだったわ。管理世界の政府たちは間違いなく、現在の管理局の組織に疑念を抱いているわね」

「当然でしょう。彼らの世界が何時、未曾有の敵に襲われるか分からないのですから」

「このままだと、上層部のクビで収まる話にはならなさそう。下手をすると局の構造そのものにメスが入るかも知れないわ」

「……それも、致し方ないことかと」

「そう。でもね。そうならない為に、上がとうとう非常の手段を採ったわよ……第一級戦闘態勢の発令と……第四艦隊の攻撃」

「なっ!? あの艦隊を出すというんですか!? それじゃ、局の理念が！」

「もう、理念も何も関係ないのよ。管理局という組織を守るためにはね」

——管理局の切り札であり、その理念を根本から否定する『第四艦隊』とは一体？

そして——

「久しぶり、背、すごい大きくなったね」

「……」

「大丈夫。私、信じてるから」

「……」

「だから、ね？ 私と、お話しして？ どうしてこんなことをしたの？」

「……」

「私、頭悪いけど。頑張って理解するから。だから、お願い」

何故、高町なのはの不屈の心は——

「が、あ、あつ……」

「あはは、来てくれて本当にありがとう、なのちゃん。これがないと、駄目だったんだよ。いやあ、良かった良かった」

「ど……どう、し、て、あ、ああつ!!」

「大丈夫。痛いのは最初だけだよ？　すぐに、楽になるからね。なにもしないで、いいからね」

——高町なのはの、左手ではなく——

「我、使命を受けし者なり……盟約の元、その力を解き放て」

「教授、やめるんだ！　そんなこと……あ、ああ……」

「草は地に、月は宙に。そして、不屈の心はこの胸に！」

「たばねえつ……きさまああああツ!!」

「この手に、魔法をツ……!!　レイジングハート、セットアップ!!」

『A l l l i g h t 』

——大人になった篠ノ之束の、右手に握られているのか？

なのたばねちふゆA's 第二幕 『BRAVE HEARTS』

——銀の絆は砕けて折れて。けれど確かに火は灯る——

本局解体事件（Ⅰ）

「リンディ・ハラオウン提督」

「はい」

遙か上から響く仰々しい声を耳にして、リンディはすつくと立ち上がり、壇上へと歩み始めた。飛行魔法を使えばすぐにも辿り着ける距離だが、この場での魔法の使用は基本的に禁止されているので、長い階段を登らねばならない。

階段の幅は高く、何時作られたか想像もつかないくらいに古い。ヒールが木製の階段を踏む度に、かつ、かつ、ときしむ音が聞こえてくる。

次元空間に浮かぶ巨大なコロニーである管理局本局の中央センター、その最奥にあるこの議事堂は、科学と魔法のハイブリッドで作られているとは思えないほどに古めかしく、前時代的な外観をしていた。公式発表によれば、これは本局の元となっているミッドチルダが所有していたコロニーの司令室を改造した物であるそうだ。しかし、まことしやかに囁かれる噂によれば、古代に作られたロストロギア艦船の構造を流用しているからだ、ともいう。

どちらにしろ、なんとも古すぎて嫌になるというのがリンディの感想だ。何回かこの議事堂に呼び出されてこの階段を登る度に、そう感じてしまう。

この統合幕僚会議を始めとして、管理局の意思決定に大きく関わる会議が殆ど全て行われているこの場所こそ、管理局の脳髓と呼べる。ならば、それがこんなに古ぼけていて不便なものであることこそ、管理局の旧態依然とした——それでも設立からまだ100年少ししか経っていないのだが——運用システムを代表しているに違いない。これを改善しない限り、管理局という組織の最終目標である、全ロストロギア回収、次元世界の平和維持を成し得るとはとても——

と、とりとめのない事をマルチタスクで考えすぎる余り、愚痴っぽくなってしまふ思考をリンディは脳内で反省して自嘲した。どうしてこうも、管理局の組織を考えてしまうと批判的になってしまうのだ

ろうか。

それは、今は亡き夫であるクライド・ハラオウンの影響かもしれないなかつた。リンデイがまだ主婦業に精を出していた時。クライドは現場から帰ってくる度に、今の管理局はどうこう、俺たちの世代が変えていかねば云々、などと、酒も入っていないのに長々と愚痴を垂らしていたものだ。

(なんて、余計なことを考えている場合じゃないわね)

蛇のように伸びる思考とは別に、淀みなく歩む足が壇上に到着したのを見計らうと、リンデイはぴしやりとさつきまでの考えを脳内からシャツト・アウトした。この辺りの思考の切り替えは、マルチタスクを深く学んでいる人間にしてみれば造作も無いことだ。

「この会議には本来、次元航行部隊司令、地上本部長、古代遺物管理部長、執務官長など、各部署のトップのみが出席を許されています。しかし今回は、議題について特別な知識を持っているという事情を鑑みて、リンデイ・ハラオウン提督には特別に出席権を与え、発言を許すものとします。皆さん、宜しいですね」

統合幕僚会議議長である老齢の女性、ミゼット・クローベルの凜とした声がリンデイの後ろから議場に響き渡る。時空管理局黎明期の功労者である伝説の三人の一人であり、今年から統幕議長として局員最高位の地位についたこの老女は、若き日のリンデイが憧れ目指した才女である。

かつては強大な魔導師として一時代を築いた女傑の一声に、歴戦の勇士でもある高官達は揃って姿勢を正し、その視線をリンデイへと注ぐ。強烈なプレッシャーに晒され流石に緊張しながら、リンデイは乾いた唇を開いた。

「ありがとうございます。私は時空管理局次元航行部隊提督、リンデイ・ハラオウン准将です。今回はL級巡航艦8番艦『アースラ』の艦長として……半年前、アースラが被害を被った大規模なハッキングについての証言と……三ヶ月前に行方不明となった第97管理外世界の住人『篠ノ之束』についての証言を行います」

この発言と同時に、議場後方の大モニタ、そして各議席に設置され

ている投影型の立体ディスプレイには、アースラの3Dモデルが表示される。

「半年前。第97管理外世界からの次元震反応をキャッチした我々アースラクルーは現場に急行。現地にて戦闘を行っていたユーノ・スクライア及び二名の現地住民に接触しました。その際、ユーノ・スクライアの転移魔法行使を許可したことが……我々と篠ノ之東の出会いでした」

モニタには、束の顔写真がでかかと写し出される。アースラがなのはたちと共同してジュエルシードを集めていた時——束がまだ猫を被っていた時——に、データベースへの登録のために撮影されたものだ。

幼い顔つきに似合う、満面の笑顔。それは一見すれば毒気も何もない、機械仕掛けの兎耳を付けている以外はごく普通の女の子にしか見えない。しかしこの場にいる全員が、この少女こそ、あるいは時空管理局にとって大きな脅威に成ったかも知れない人間なのだと認識していた。

「事件が最終局面に移るまで、彼女は驚くほど協力的でした。自分の研究成果である『ジュエルリーダー』の設計図を我々に公表する他、アースラの庶務……例えば、クルーへのお茶運びや、軽い清掃……といったことを、積極的に手伝っていました。ですが、それは「君たちを欺くための演技だった。そうだな」

そう指摘する地上本部長の声色は厳しい。次元航行部隊を含む本局とは何かと対立している地上本部の立場からして、本局側の大きなミスを指摘し弾劾するのは、至極当然のことであった。

アースラの3Dモデルが半透明になり、艦内の構造が透けて見えるようになれば、その中の数カ所に赤い点が表示される。これは、アースラ各所にあるコンソールの一部であり、その中でも篠ノ之東によるアクセスが認識されている物を表している。

「はい。この間に、篠ノ之東は何度かアースラ内部のコンピュータにアクセスしていました。その用途と目的はそれぞれ報告されており、無害なものと認識していましたが……彼女はその間に、アースラのメ

インコンピュータへウイルスを忍ばせていたと見て、間違いないでしょう」

「間違いない、というのは、確定ではないのか？ 明らかな痕跡は残っていないのか？」

「はい。事後、技術部の方々と記録を解析しましたが、コンピュータへアクセスした記録こそ見つかったものの、ウイルスを転送した記録は何処にもありませんでした」

「ほう？ 何ヶ月も調査して結局分かりませんでした、と？」

「あー。地上本部長、その事です」

リンデイの言葉を補足し弁護するように、本局技術部長が割って入った。唯でさえ高い会議の平均年齢を余計に高くするほどの老人であり、皺だらけの顔には年寄りらしい温厚さと同時に年季の入った老獪さをも漂わせている。

「恐らくウイルスに、自分の侵入した記録を破壊するプログラムが仕込まれていたのでしょう。現に、我々が地上本部あなただがたの技術部と共同して調査したあのウイルス……実験都市を掌握し、避難計画を実行に移した三ヶ月前のウイルスについても、侵入先の特定は結局、ままなりませんでしたなあ」

「む……そうでしたな、本局技術部長」

航行部隊の失点をあげつらうことは、同時に自分たちを無能だと言うことになる、という論法に晒されて、地上本部長は苦々しくも矛を収めた。

この言い争いこそが、現在時空管理局に存在する二つの派閥、地上おかと本局うみの対立を象徴していると言えよう。本局に予算や人員を持って行かれている地上はしばしば本局のミスを叩き、本局はそれをのりくらしりと交わし、時にはある程度認めながらも、管理局内部の主導権は頑として譲らず、巨大なリソースを確保する。

統幕会議という場でも、いや、だからこそ露骨に透けて見える対立構図に、リンデイは心の中で辟易した。議場に座る何人かの高官も同じ気持らしく、特に無限書庫の統合同書長などは露骨に「やれやれ、またか」というような表情で目を細めていた。

「……続けて宜しいでしょうか」

リンデイの冷静な一言に、技術部長は朗らかに頷き、地上本部長は苦々しくも首を縦に振った。

「では。事件の局面が進み、海上に出現した6個のジュエルシードを、高町なのは、フェイト・テスタロッサ兩名が封印。これを合わせ、21個全てのジュエルシードが封印されたその直後……プレシア・テスタロッサが本拠地である『時の庭園』ごと、現場の海上に転移。強度の封時結界を展開して周囲からの介入を防ぎました。これに対し、我々は直ちに結界を突破し、現地協力者を救助するため急行しようとなりましたが……」

3Dモデルの赤い点から、シミが広がるように赤色が広がっていき、数秒も経たずにアースラの全てを染めた。これは、アースラの機能が瞬く間にハックされ、クルーの制御から外れたことを視覚的に表すものである。

「プレシア・テスタロッサが放った電撃属性の次元跳躍攻撃^{O.D.J.A}の直撃により、艦内の電力がダウン。メインコンピュータが一時的な機能不全に陥りました。これに対し我々は、所定のマニュアル通りに復旧作業を実行。43秒間でシステムは機能を復帰しました……しかし、この間に、ウイルスは艦内全てのコンピュータへと広がっていたのです」
篠ノ之束がアースラの要所要所に仕込んでいたウイルスは、メインコンピュータが機能を停止しているその隙に防壁を掻い潜り、一気にその勢力を拡大。復旧の終わったメインコンピュータをも

侵食し、アースラの機能を大幅に制限した。

航行システムはほぼ停止し探知機能も動かず、隔壁が閉鎖されてクルーの物理的な身動きをも制限され、艦内警備システムにおいては暴走して無差別攻撃を行う始末であり、リンデイたちクルーにとっては正に悪夢とも言える状況だった。

「我々は、全システムのシャットダウンなど、現状で可能な限りの対処を行いました。資料をご覧頂ければ、お分かりになると思います。しかし、そのどれもシステムの奪還には至らず……我々は何も見えず、聞こえない状況のまま、結界内で展開されたと見られる、最終局面に

対応できませんでした」

ここで、結界内の出来事——高町なのはの特攻や、篠ノ之東が開発したとされる『白式』の活躍——について明言しないのは、その一連の、ドラステイツクかつ局面が、管理局内部で未だ現実の出来事と認められていないからだ。

とはいえ、根拠が管理外世界の住人や一魔導師の発言のみで、現場には確たる証拠が何もないのだから、これはむしろ当然である。

既存の、それも地球どころか全次元世界の兵器技術の常識を覆し得る『IS』の存在を信じているのは、リンデイやクロノ、そして篠ノ之東と交流のあるごく一部の局員だけであった。

「この絶望的な事態が変転したのは、約1時間半後のことでした。突如艦内のシステム全てが復帰し、閉じられた隔壁も開きました。我々は武装局員隊を直ちに現場へ急行させると同時に、艦内のウイルスを探知、消去しようとしたが……」

「ウイルスはその全てが発見できず。後に本局でコンピュータの履歴・記録を徹底的に洗い直した所、プログラムが自滅をしていた、のじやったな」

「はい」

リンデイの言葉尻に技術部長が乗っかり、付け加えたように。ウイルスそのものの正体は未だはつきりとは分かっていない。コンピュータウイルスである、ということは事例と痕跡から分かるのだが、それがどのようなプログラムで、どのように動作する物なのか検討もつかない。ただ、証拠隠滅のための自己消滅機能が備えられているのだ、というのは明白だった。

「ふん、なんとも厄介なウイルスですな。二回も侵入されて尻尾一つ見えないとは」

「ですが地上本部長。PT事件の事例は次元跳躍攻撃によるシステムダウン、三ヶ月前の『闇の書消滅事件』に関しては内部に協力者が居たからこそそのウイルス感染です」

かちやり、と老眼鏡を動かしながら指摘したのは、いかにもやり手の官僚、といった風貌の中年男性だ。リンデイの友人であるレティ・

ロウランが所属する、本局管理部の部長である。

「ほう。管理部長の意見を詳しく述べて頂きたい」

「つまり、ウイルスを侵入させるには何らかの外的要因が必須ということですよ。我々のファイアウォールは、直接の侵入ならば防げています。それを無力化する事象を取り除けば」

「ウイルスの侵入を許すことはない、とこういうことじゃな」

「仰るとおりです」

「なるほど……」

議場が暫くざわついた後、議員のそれぞれがそれぞれの受け取り方で、この論法に納得したようだった。要は不慮の攻撃と裏切り者に気をつければいいのだ。コンピュータウイルスという骨董品地味な手法に既存のファイアウォールやプロテクト以外の対処法を見つめるには、それこそ無限書庫を洗い浚いひっくり返さねばならないが、それなら簡単だ。

「我々次元航行部隊は既に、対高出力次元跳躍攻撃を想定した戦術を実行しています」

「技術部では新型のファイアウォールを開発しとります。最も有り体に言ってしまうえば、既存のマイナーチェンジですが」

「私たち査察部も、各部署の監視を強化し、三ヶ月前のような内通者、不審行動者が出ないように網を張り巡らせています……地上本部長、何なら貴方方の綱紀粛正にも協力いたしますが？」

「いえ、必要ありません。地上の統制と防備は万全ですからな」

本局の最大戦力である次元航行部隊と、技術開発を務める本局技術部。局内部の監察を担当する査察部、そして地上部隊のトップである地上本部の長がそれぞれに対策を講じていることが確認され。その後いくつかの、数十分に渡る質疑応答が成された。

そして、

「では、この議題……『コンピュータウイルスに対する脆弱性への対策』については一旦切り上げましょう。続いて、『篠ノ之束』についての議論に移ります。リンディ提督」

「はっ」

議長の呼びかけに応答しながらも、リンディは改めて、この幕僚会議の歪さを意識した。

そもそも、この二つの議題は何だ。

篠ノ之束謹製のコンピュータウイルスに対する脆弱性への対策など、この半年で十分議論された内容ではないか。三ヶ月前のあの事件が起きたのは、それを活かすだけの時間がなかったことに尽きる。一部艦艇が漸く新ファイアオールと新戦術を導入したばかりの時に、地方の、比較的優先度の低い実験都市が襲われたのだから。

そして、もう一つの話題——『篠ノ之束について』とはどういうことだ。

彼女は確かに行方不明扱いで、その死体も死亡も確認されていないが。三ヶ月前、実験都市と共に跡形もなく、消失したのではないのか。会議への出席と証言が求められてから、リンディが常に胸中に抱いていた違和感であり、直前まで上司と問答してきた疑問だった。だが、彼女の直接の上司——次元航行部隊第七艦隊司令は、ひたすら議論を避けて「とにかく話してこい」としか言わなかった。

命令とあらば、組織人の一員であるリンディは従わざるを得ない。だがその心中には、抑えかねかける程の疑念が渦を巻いていた。

「篠ノ之束。第97管理外世界の現地惑星では、日本という国の国民であり、未だ義務教育を受けている小学生です。しかし、現地惑星の科学界では密かにその名を知られており、『天才』とも言われています——」

「リンディ提督。我々はそんなデータで簡単に見られるような情報を求めている訳ではない」

口火を切ったリンディにぴしゃりと言い放ったのは執務官長だった。続いて、古代遺物管理部長、地上本部長など、犯罪者の捜査に関わる部署から次々に指摘が飛ぶ。

「我々が求めているのは、篠ノ之束という人間の為人^{ひととなり}についてだ」

「……ひととなり……ですか?」

「そうだ。どのような性格で、どういった物を好んでいるのか。それを分析しなければ……捜査も進まん」

「捜査……!? 今、捜査と仰いましたか!？」

死人相手に出て来るはずのない単語に、リンデイは今度こそ感情を抑えられなかった。

「捜査とはどういうことですか？ 篠ノ之束は、まだ生きています！
そう考えて宜しいのでしょうか!？」

「まあ落ち着き給え、提督」

束の危険性をこの場にいる誰より知っているリンデイは思わず声を荒げてしまったが、彼女の間接的な上司である次元航行部隊長がそれを抑え、一枚の画像を各自のディスプレイに写しだした。

それは、次元空間を俯瞰的に写した観測写真であった。

「この画像は、第87定点観測隊が、第97管理外世界付近で観測したものだ。今は縮尺が大きいので何も分からないが、こうしてズームしていくと……」

次元航行部隊長の言葉に合わせて、自動的に画像が拡大されていく。千倍に拡大してもシャギー一つ無い高画質から見えてくるのは——いかにも古代の騎士風の鎧を着た、とある人影だった。次元空間を飛ぶそれは、よく見れば、ピンク色の髪をした、若々しい女性に見える。えてくる。

「これは……!？」

「どうやら提督には見覚えがあるようだな。まあ、無理も無い。何せあの騎士どもの片割れだ」

その人相は、リンデイの記憶の片隅に、しかし深く熱く焼け付いている。忘れやしない。だって、この騎士はあのロストログアの——クライドが犠牲になった、あの——
「そう。闇の書の防衛プログラムの一つ、『ヴォルケンリッター』。過去に起こった闇の書事件の記録を参照して、外觀がピタリと一致したよ」

言葉の主がちらりと古代遺物管理部長に目を向ければ、彼もこくりと頷いてその事実を証明した。統幕会議が緊急に招集され、ただの一提督であるリンデイがそこに呼ばれた発端は、この一枚の画像だったのだ。

「これが、第97管理外世界の近くの空間で確認されたということは……ここまで言えば分かるだろう、提督？」

「はい……篠ノ之束は……いえ、少なくとも『闇の書』は、あの対消滅から生き残った」

「そういうことだ」

この時、リンデイの中に生まれた感情は少々複雑である。

どのような手段を使ったのかは知らないが、ロストロギアの暴走消滅からも生き残ってみせたかもしれない束への畏怖。そして、そんな束がこれから、管理局に対してどのような動きを取ってくるのかという疑念。

そして更に、もう一つ——あの、可哀想な女の子が、これで漸く救われるかもしれない、という安堵もあるのかも知れなかった。

「全く、完全消滅が聞いて呆れる！」

「まあまあ地上本部長。まさか、あの対消滅から生き残るとは誰に予測が出来るかのう？」

「とにかく。闇の書を不完全ながら解析し得たという頭脳と、闇の書の強大な力が合わされば。どうなるか見当もつかん」

「そも、稼動状態にあるロストロギア、それも過去に幾度も被害を起こしてきた闇の書が、野放しにされているかもしれないという事態。これが政府やマスコミに知れたらどうなる」

「我々はともかく、本局の方々は金に糸目をつけませんからなあ。予算の確保はさぞ難しいことになりそうですね！」

「……あー。そこで、我々統幕会議はその対策を話し合う為に、管理局内部で篠ノ之束という人物を最も良く知っている貴方を呼び出したのです」

ここまで話されれば、リンデイにも大体の事情は推察できた。

つまり、とつくに消えたと思っていたはずの脅威闇の書が再び現れるかも知れず。しかも今度はただ暴走するだけでなく、優秀な頭脳束を得てしまうのだ。さらに言えば、常識では逃れ得ないはずの対消滅を生き延びて。

管理局の最高意思決定機関である最高評議会が、押っ取り刀でこの

統幕会議を招集する気にもなるはずだ、とリンディは納得した。

「ちなみにこの議事については極秘事項として、篠ノ之束の生死に関する公式発表があるまでは他言無用とします。いいですね？」

「了解しました」

こういうデリケートな話題にはお決まりの情報隠匿の指示を受け入れたのち、リンディは再び証言を始めた。

「ではまず、篠ノ之束という人物について……PT事件が終わった後、私が尋問した印象としては、目的のためには手段を選ばない人間であるのではないかと」

「ふむ……」

「ですが同時になのはさん……第97管理外世界の現地住民であり、PT事件では現地協力者として我々に協力した魔導師の、高町なのは……との交友を重んじ、常に彼女の身を案じた行動を取っています」

半年前のPT事件では、単身敵に囚われた彼女を自分の作った『白式』と千冬に救わせた他、三ヶ月前の闇の書消滅事件でも、避難システムを発動させて崩壊する都市から避難させようとしている。後者はなのは自身がそれに反して東へ接近、後少して消滅に巻き込まれる所だったが、そこにギル・グレアムが合流したことで安全圏に脱出したことは確かだ。

傍目から見れば偶然にしか思えない出来事だが、束の天才ぶりの片鱗を目の当たりにしたリンディからすれば、それもまた計算の内ではないかと疑ってしまう。

「ほう。交渉が通じない輩、そして完全な狂人ではないと」

「それどころか、我々が記録で確認できる自由奔放かつ愉快犯じみた態度の裏では、極めて論理的な思考を走らせていると思われます」

「む……」

「そして彼女の行動の特徴として、事態を裏側から動かし、敵味方という区別に関わらず全てを自分の思うがままに操り、不測の事態により状況がどう転がろうと自らの利を確保する」

そう、篠ノ之束は計算高い。PT事件において彼女自身の証言を信用するならば、もし最終局面でプレシアが勝ちジュエルシードを手

したとしても、なのはと千冬の命は奪わないという約束を言付けていた。これが守られれば、後はプレシアの儀式が完了する寸前に背中を刺せば済む話だ。

かなりの網渡りなれど、まるで未来を逆算するように適切で効果的な行動を取っている、それだけではない。仮に事態が自分の予期せぬ方向へ向かったとして、それをフォローする手段を見つけ出し実行する。

三ヶ月前の事件にしても、被害の責任を問われたグレアムの証言によれば、彼女の策は闇の書の主の様体急変という、予想外の事態によって崩れかけていた。しかも最悪の場合はグレアムの独断により、アルカンシエルをミッドチルダ本土へ使う程の状況に陥っていたという。それを曲がりなりにも——自らの消滅と無人大都市一つと引き換えに——挽回したのだ。

未だ公式には不確定であるPT事件の行状を除いても、この一件だけで『天才』と呼ばれるに値する存在であるだろう。

「更には言えば、彼女は……自分のやっていることが、法に反する邪道であることを自覚しては居ますが、本心ではそうと思っていないようなのです」

「罪の自覚が無いということか？」

「いえ。それが犯罪であると認識してはいますが、ただそれだけなのです。彼女は自らの行動を正しい物だと信じて、欠片も疑ってはいない。そういう態度を取っていました」

それが、リンディ・ハラオウン含め大多数が見ている、篠ノ之束の像だった。

「となると……会話や交渉こそ可能だが、説得は難しそうだな。もし彼女と闇の書が、次元世界や我々管理局に仇なす存在となった時は」「断固とした態度で当たるべし」

「うむ。テロリストに妥協など許させん」

この後も、口々に強硬論が呟かれ、篠ノ之束に対する時空管理局の行動方針が固まっていく。つまるところ、テロリスト予備軍だ。

確かに稼動状態の闇の書があり、それを操る人間は倫理性に些か欠

けている所があるのだから、危険分子と見られても可笑しくはないだろう。

だが、しかし……。

リンデイは再び、今度はもつと強い違和感に襲われていた。

「古代遺物管理部としては至急、麾下の機動三課を近隣の管理外世界へ派遣します」

「我々航行部隊も、近辺のパトロール部隊に搜索任務を命じましょう」
「脅威対策室としても、何らかの行動を起こした方が宜しいですか」
「まだ正式に確認されたという訳ではないし、特務の編成は先走り過ぎだ。ただ、メンバーの選定は進めておくべきでないかね」

彼ら——管理局上層部が篠ノ之束の捜査に抱く、穿ってみれば狂奔と言ふべき熱の入れようは一体何なのだろう。

『篠ノ之束』という単語が、彼ら、そして管理局という組織全体に知れ渡ったのはつい三ヶ月前のことだ。しかも、その時特に注目されていたのは、重鎮でありながらロストログアの秘匿、独自解析、そして大事故を起こしたギル・グレアムであつて、束ではない。

グレアムは全てを証言したが、その突飛さが仇になり、上層部からは半年前のように余り信用されていなかった——のではないか。篠ノ之束はただ巻き込まれただけの被害者、という説さえ実しやかに囁かれていたことを、リンデイはよく覚えていた。

それがどうだ。この調子では、束こそが脅威であり、飛びきりの次元犯罪者であるようではないか。確かに彼女は危険であるものの、その犯罪を立証されてすら居ないというのに。

まるで——何者かが彼らを操り、その視線を一点に集めているような——

リンデイはふと議長の方へ振り向き、見上げる。

議場の下層で盛り上がっている不気味な熱気とは相反して、彼女の周りは寂しく、冷たい。それは、今のリンデイが心で感じ、共有出来る温度であつた。

「皆さん、静粛に」

その議長から声が飛び、活発に、我先にと対策を話し合っていた議

員たちは一先ず静まった。

「では、篠ノ之束については、要注意人物ということ、各部署において捜索を行いましょ。発見し、接触し得た場合は任意同行を要請。それが容れられなかった場合は……」

と、その時。

突然、議場がぐらりと、身震いするかのよう大きく揺れた。

幸い、次元乱流に直接煽られた時よりは激しくなかった。リンデイの両足が縛れることは無かった。しかし、議場で立席していた幾つかの議員の中には、思わず近くの柱に手を触れる者や、よろけて格好の悪い立ち姿を見せる者までいた。

「な、何だ!?!」

「何の異常だ!?!」

慌てふためく議場の中で、焦った議員の内の何人かが、自らのデバイスを展開していた。

リンデイは呆気にとられる。無論、緊急時にデバイスを手に取ることは魔導師ならば身体に染み付いていて然るべき動作であり、それを無様と思いはしないが。

魔法の使用が禁じられている^{議場}ここでは、デバイスの機能も自動的に凍結されているのではなかったのか?

唐突な変転に焼き付きながらも、リンデイの頭脳は必死に状況を把握しようとしていたが。続いて、機械的かつ昔じみた人工音声が届き慣れぬ単語を送ってきた。

『警告 警告 只今 D-6 ブロックのページが実行されました』

ページ? リンデイの思考はこの一単語でパンクしたように停止した。

D-6ブロックということは、D-6区画か。では、ページとは何だ?

議場に居る誰もがそんな疑問を抱く中、いち早く事の深刻さに気づいたのは、議長を始めとする老練の人たちであった。

「なんたること! 議長、こりゃあ間違いありませんぞ!」

「その通りですね」

「なっ、ど、どういうことですか、技術部長！」

地上本部長を皮切りに何人かが老人を問い詰めると、温厚さを緊張に、老獪さを焦りに取り替えた彼はまくし立てるようにこう述べた。

「この管理局はブロック構造で作られておる。ここや無限書庫を含む中心部から、局の規模が膨らむのに対応するため、外部ブロックを何個も何個も建設し、拡張した」

「それが……排除purgeされると？」

流石に権威ある肩書を多く名乗るだけあつて、高官たちの察しも素早く、同時に顔面が青ざめるのも素早かった。

「元々は緊急用の、本局内に侵入者が現れた際起動すべきシステムじゃ……それが、こんな……一体どうしたのか……」

「議長！」

そう言つて、真つ先に出口の近くまで飛んでいったのは、査察部長である。彼はデバイスをドアに構え、今にも飛行したまま突き抜けようとしている。

「私は部署に戻らせて頂く！一刻も早く状況を把握し、対処せねばなりません！」

その要求に対し、議長が二秒もかからず返答しようとしたその時、
「またも機械音声が、外部の状況を無機質に述べた。」

『只今 B—3ブロックのページが実行されました』
「なっ……！」

B—3区画といえば、武装局員の詰め所である。それが本局から取り外されたということは、本局の主戦力である武装局員の大半、少なくとも見積もつても半数が無力化されたということになる。

しかも、B—3は比較的若い番号であり——中央部に近い。そんな要所が今、パージされている。

——つまり。

本局の外郭にあるB—3以下のブロックは、もはや軒並み切り外されてしまっている——

「馬鹿な……ここは本局だぞ?! 管理局の総本山、不可侵の城塞が

……こんなことで……!?!」

誰かが発したその叫びが、一同の総意であった。
一体誰が。

その問いに対し、リンデイの脳内に鳴り響く既視感は、既に答えを出していた。

コンピュータハッキングによる、電子システムの制御。

重要人物を一箇所に集めて閉じ込め、現場から隔離する。

そうして生じた混乱の内に、全てを終わらせる。

こんな手口を、ここまで鮮やかにやって退けるのは、今まで確認されたどんな次元犯罪者でもない、ただ一人。

それは――

『隣接ブロックのパージが開始されました。これより隔壁を閉鎖します』

次元世界を守る法の方舟。かつてどんなテロリストにも侵入されず、艦隊規模の侵攻に小動もしなかった、不落の要塞。

この場にいる局員の大半にとって精神的支柱である本局は、今。

その頭脳を閉所に閉じ込められ、その肉体を次元空間に四散させられていた。

本局解体事件（Ⅱ）

赤い警告灯が通路を照らし、その只中を数人の魔導師が走り行く。彼らとはにかく自らの任務を果たそうとしながらも、この異常事態が一体何かという問いを頭に宿らせずにはいられなかった。

突然他の地区との連絡と交通が途絶え、人工重力が弱まっている。それがどういった事故、はたまた計略によって引き起こされたものかはとんと分らない。耳によく響く警告音と、何らかのナレーションがあつた直後にこうなつた。本局の中でも内側の区画には窓もなく、外の状況を視認することすら出来ない。

だが、唯一はつきりしている事実がある。この地区に、不貞な侵入者が存在していることだ。

「こつちだー！」

「ついでこいー！」

その場で一番階級の高い局員を当座の指揮官として、警備班やたまま居合わせた武装局員らが数人単位でまとまり、素早く現場へと駆けつける。緊急かつこれまでにない事態に混乱してはいるものの、彼らの士気は概ね高く、走る足取りやデバイスを握り周囲を警戒する様子も、よく訓練されているのが目に見えるくらい精悍だ。

これは、時空管理局が少なくとも現場レベルでは有能かつ勤勉であり、それによつて各管理世界の一定の信頼を得ていることを証明している。

「ん……おい、貴様！」

そんな彼らの内の一人が、不審な人間の女性を見つけ、杖を向けた。ピンク色の長髪を後ろでポニーテールにして纏めている彼女は、彼らと同じく管理局の制服を着ていた。しかし、サイレン鳴り響く戦闘態勢下にあつても、バリアジャケットの一つも纏わず制服姿のまま付近をうろついていたのだ。

「直ちに官姓名を名乗れ！ さもなくば攻撃する！」

警告に対し、女が取つたのは素早い逃走であつた。

「待てー！」

「いたぞ、侵入者だ！ 絶対に逃がすな！」

飛行魔法を使えば簡単に追い込めるが、ここは狭い通路の中である。合わせて十人前後の局員がそれぞれに走りながら、たった一人の女侵入者を追い詰めようとした。

彼女の足は速かったが、局員たちにとっては勝手知ったる区画の中である。瞬く間に追い詰められ、狭い通路の中で前は局員の群れ、後ろは行き止まりと進退極まる状況下に落とされた。

局員たちは密集し、様々な形の杖をさながら槍衾のように構えながら、一步一步侵入者を袋小路に押し込んでいく。だがこのとき彼らは、たった1つだけ、重要なことを見落としていた。

閉じた袋の底に、何が入っていたかということ。

「さあ、大人しく投降しろ！」

「白昼堂々とその本局へ侵入したんだ！ 只ではすまさんぞ！」
「……………」

威圧的な言葉を使い、敵の士気を削ごうとする局員たちに対し、たった一人の女は無言のまま、泰然とした表情で向かい合う。

その両手に、デバイスは無い。

流石に諦めたのかと、何人かが捕縛しようとして近づきかけたその瞬間。女は小刀に似た形のペンダントを胸元から取り出し、右手に握った。

それと同時に発散した魔力と、編み出され始めた術式に気づいた局員の一人が、周囲の仲間大声で警告する。

「気をつける、デバイスだ！」

そう言っ杖を握る手に力を入れ、自らも射撃魔法の術式を準備しながらも、彼はある疑問を胸中に抱き、一瞬、咀嚼した。

——見たことのない術式だ。少なくともミッドチルダの物じゃない。となると、アレは——

その瞬間。

女に直接手を触れ、捕縛しようとしていた前衛の二人が、ぼたりと倒れた。

「なっ!?!」

彼らはそれぞれに驚く。

まだバリアジャケットすら展開していないというのに、攻撃が来るとは。

二人は斬撃系の魔法で倒れたように見えるが、いつの間にも術を展開していたのか。

——そして、女の足元に輝いている、桃色の、三角形に似た魔法陣は一体何なのか？

「……久方ぶりの居合だが、まあ、こんなものか」

斬撃と同時に実体化した長剣状のデバイスらしき物を右手に持ち、付いていない血糊を振るい落とすように動かしながら、女は淡々と述べる。

「とはいえ、こうあっさり無力化出来るのでは、些か気分を損なってしまうな。奴みたいにするならば……そうだ、『滾らない』」

そこにあるのは、絶対的な強者の自信であり。

練達者が若人達に言つてのける、嘲りと罵りであった。

「古代の大国すら凌ぎ、数十の世界を統べる勢力の総本山……にしては、齒ごたえが無さ過ぎる」

そして、それは——

「言つたなあッ！」

「よくも仲間をツ!!」

自らの職務、そして所属する『法と治安の護り手』に誇りを持っている局員を、激高させるに十分過ぎる煽り文句だった。

忽ち通路を埋め尽くす射撃魔法。色とりどりの射線。

それら全てが女の眼前に迫り来る中、彼女はその熱と敵意に身を削られるような感覚を感じながら——それを心地良いとすら思い、唇の端を吊り上げた。

『Panzergeist』

仁王立ちで射撃に身を晒す女の全身を、眩い魔力光が包む。そこに全てが直撃し、小爆発による白煙が辺りに充満した。

狭い通路の中であり煙は中々晴れず、局員たちの視界を阻む。しか

し、未だ杖を掲げ続けている誰も、女は昏倒しているか、そうでなければ大ダメージを受けて傷つきよろめいているだろうと予想していた。

それは、概ね正しい予想だった。

本局にたった一人で潜入するのだから、女が高ランク魔導師であることは間違いない。だがしかし、これだけの射撃魔法を、これほどの近さで、余すこと無く正面から受け止めることは、いくら防御を固めていてもそう簡単にはいかない。

だが、しかし。

女の実力と、内包している魔力は。

「馬鹿な!？」

「あれだけの攻撃で、無傷……!？」

「概ね」を覆すに十分過ぎる物だった。

「……やはりこの程度か。ならば、一人一人相手をして意味もない。一網打尽にする」

開かれた女の左手に、白く長細い何かが具現化する。恐らく、右手に持つ剣の鞘であろう。

それを、逆手に持たれた剣の柄頭に合わせれば、具現化した剣と鞘は再び魔力の塊に変化し、そして一つの弓となった。

「ぼ、防御だ! 防御魔法を展開しろ! 急げえっ!」

只ならぬ魔力の発生と集中に気づいた指揮官は、慌てて命令する。プロテクションやディフェンサーといった二種の防御魔法に加え、簡易の結界までもが瞬時に展開された。

閉所でありそれぞれが密集しているこの状況下で、複数の魔導師が展開する防御は相乗し、合算した以上に硬い壁になる。

これならば、持ちこたえられる。そのはずだった。

しかし――

「……翔けよ! 隼ッ!!」

弓を番えた女の右手に、一本の矢が現れる。限界まで引き絞られた魔力の弦が、炎を纏った^{高濃度魔力の結晶}矢を弾き出す。

狭い通路の中、回避する隙間はない。十人単位を纏めて一撃で倒す

ため、女の戦術眼が選んだ必殺の一撃だった。

『Sturmfallen』

直撃。そして爆発。先ほどよりも大きい爆風と、黒煙が通路の中を吹き荒び。女はその只中で、悠然と立ち尽くしていた。

そして、一分後。通路は炎に包まれ、その隙間隙間には気絶した局員と、数少ないながらも意識の残っている局員が倒れていた。

「……ほう、まだ意識のある者が居るか」

少々驚いたような女の声に帰ってくるのは、どれも皆、呻き声と苦痛の悶絶であった。

炎の矢は局員たちの防御をあつかりと貫通し、密集していた彼らは残らずその爆炎に飲み込まれたのだ。ただし、彼らの誰一人として、命を失っている者は居ない。

女にしてみれば『峰打ち』。だが、全身を激痛に襲われながら尚も立ち上がるようとしている局員の薄い意識の中でそれは、『魔力ダメージによる非殺傷攻撃』だった。

「な……ぜ……」

なぜ物理設定で攻撃し、自分たちを纏めて殺さなかったのか。

なんとか膝をつきながらも復帰した局員の問いかけに、女は始めて反応し、彼を見下すように目を合わせて答えた。

「我が名を知れ。我らの名を知れ。そして伝えろ、貴様らの主人に」
弓から再び剣と鞘に別れたデバイスを、腰に下げて腕を組みながら、女は名乗る。

自らの名と、自らが属する勢力書物の名を。

「我が名は烈火の将、シグナム。夜天の書に集いしヴォルケンリッターの将。さあ、逃げねば今度はその生命、この道を包む炎のように……燃えて、消えるぞ」

その言葉を聞いた局員たちは、自分たちの無力さとこの侵入者の強さ、そして辺りに倒れる負傷者の数を鑑みて、そして。

「て、撤退！ 直ちにこの場を離脱する！」

「傷の浅い者は負傷者の救出に当たれ！ 急げ！」

自らも傷つきながら、指揮官の怒号により局員たちはまだ目覚めぬ

仲間を抱え、退き始めた。

そして女——シグナムは、それに対し何も手を出すこと無く悠然と見つめた後、踵を返して局員たちとは別方向、袋小路の更に奥へと歩む出した。

鉄火場と化した通路から進んだ一番奥には鋼鉄のドアがあり、彼女の行く手を塞いでいる。隔壁閉鎖とともに、重要箇所を敵の手に落とさないようロックされていたものだ。

だが、彼女がこんこん、と民家の扉をノックするように叩けば、あつという間に開いてしまう。

その中にあるのは、この区画の情報ターミナル。区画の全コンピュータを制御し、解体されていなければ本局中央のデータベースにもアクセスできる場所だ。

そう。シグナムは最初から、このターミナルを占拠、そして防衛するために行動していたのである。囷となって集められるだけの敵兵を集め、一気に撃破し、生かして帰す。そうすれば敵もこちらの戦力を極めて高く、ともすれば過剰に評価して、次の攻撃には慎重になつて掛かるはずだ。

もしかするとこの区画が保有する戦力では対抗不能と判断し、手を出さないで放置するという判断を下すかもしれない。

いや、それは流石に樂觀か——
「いえ、そうでもないでしょう」

とりとめもなく現状を考えていたシグナムの、無言での戦況予測をまるで読んでいたかのように返答する、幼い声。

既にターミナルへ侵入し、その場に居た局員をノックアウトして占拠していた彼女は、この作戦におけるシグナムのパートナーであった。

「こちらから敵の臨時指揮所を探知出来ました。どうやらこれ以上の占拠を許さず、防衛に回る、という方針を固めたようです」

「随分と弱気だな。もう一、二回襲撃があらうと、こちらとしては望む所なのだが」

その知的で冷淡な声色は、本来シグナムが戦線を共にするはずであ

る、夜天の騎士の誰にも当てはまらない。同じ子供である鉄槌の騎士ならばもう少し熱のある声をしているだろうし、湖の騎士は大人であり、盾の守護獣はそもそも女でなく雄だ。

「ええ。同感です。これでは張り合いが無すぎます」

「主の策により、本局全体が致命的なまでに弱体化しているとはいえ、これでは、な」

苦笑するシグナムに釣られて、コンソールの椅子に座る少女も微笑む。だがその瞳は闇さを秘めていて、それは明らかに「滾って」いなかった。

「とはいえ、私としては同時に楽でもあります。自分の主命データ収集に専念できるのですから」

「なるだけ早く済ましてくれ。こちらは退屈でならんからな——」
シユテル」

『星』という意味を持つ単語で呼ばれた少女は、シグナムの言葉に応じ、早速コンソールに向かい合った。大人用に作られた椅子に、幼い彼女の身体はともすればすっぽり収まっているようにも見えてしまう。

「お任せ下さい、烈火の将。紫天の書が『理』のマテリアル。
シユテル星・ザ光・デス殲トラクター滅……肩書通りの働きをお見せしましょう」

「頼むぞ」

情報処理では門外漢であり、出来るのは剣を振るうことばかりのシグナムは、頼れる相棒の背後に立ち、局員たちの気がいつ変わってもいいように、警戒を始めた。

「電、刃、衝！ どっかーん！」

水色の魔力が爆裂し、三人の局員がまるで風に煽られた枯れ葉のよ

うに吹き飛ばされた。地面に叩きつけられた彼らはどうにか立ち上がろうとするも、身体に走る水色の電撃が身体を麻痺させ身体の自由を奪っているので、手足を動かすことが出来ない。

シグナムが戦っていた狭い通路と違い、こちらは大部屋のど真ん中。今まで何度か局員による突入を受けているものの、そのどれもが、今のように吹き飛ばされ、吐き出されるように通路へ転がされていた。

「くっそう、ふざけやがって……！」

「大丈夫か！」

歯軋りして悔しがる彼らに、仲間の局員が急いで走り寄り、担ぎ上げて後ろへ下がる。すると、先ほどの魔力を放った少女が進み出て、得意げな態度と満面の笑みでこう言った。

「へへーん、どうだ！ お前らなんか、ボクには絶対に敵わないぞ！」

そう、なぜならボクは！ 最強！ だから！」

まるでごっこ遊びのように杖を振り回しながら、青と黒のバリアジャケットに身を包んだ、水色の髪の少女は勝ち誇る。

実際、ここまで彼女は負け知らずだった。最初に出会った不幸な局員数人を鎌で切り刻み、その後も幾度と無く襲ってきた局員達を、強大な魔力で返り討ちにしてきたのだ。

少女の技量はシグナムほど練達しては居らず、その魔法は四方八方に飛び散りながら爆風を撒き散らす有様だったが、それがかえって、この大きな空間では有利に働いていた。突入して少女をすり抜け強引に突破しようにも、彼女が常時撃ち放っている強力な弾幕を掻い潜らなくてはならないからだ。

「隊長！……このままじゃ奴に敵いません！ 一旦後退して、再編成を……！」

部屋の手前の通路に陣取る局員達の中で、隊長と呼ばれた男は暫く思索し、結論を出した。

「仕方あるまい……総員直ちに後退！ 負傷者の回復と戦力の増強に当たるぞ！」

「後退、後退！」

ほうほうの体で下がっていく彼らに対し、少女は部屋と通路の境界線ギリギリまで近づき、挑発を始めた。

「やーいやーい！ 悔しかったらここまでおいでー！」

幼い言葉だが、それ故に単純な怒りを煽る物だった。ともすれば、思わぬ逆撃を誘発したかもしれない。特に、少女が調子に乗って通路の只中に躍り出れば、それは局員たちにとって集中砲火のチャンスとなっただろう。だが、少女はあくまで通路に踏み込むことはなかった。

どこからどこまでが安全圏で、何処まで行けば閉所での集中砲火を食らうのか分かっていての行為なのか、それとも偶然か。

とにかく、敗者への挑発という敵の怒りを最大限に買う行為をしながら、彼女は何一つ攻撃を受けずに局員の撤退を煽り抜く事が出来た。

「……ちえー、なんだ、かかってこないのか」

しかし、それは少女にとってむしろ不本意であるようだった。ぶん、ぶんと杖を乱暴に振り、唇を窄めていかにも不機嫌な表情を作っている。子供の癩癩そのものであった。

「つまんないのー」

ぶーぶー、と喚いている少女を見かねたのか、大部屋の奥にあるスペースで作業をしていた、金髪の女性が姿を表し、注意した。

「レヴィちゃん。そんなこと言わないの」

「えー、だってえ」

「だって何も、私を守るのが命令でしょう？ なら私から離れないで、それから余計な敵を作らないの」

レヴィ、と呼ばれた少女は即座に振り向き文句を垂れるが、一方の女性は慣れた調子でこれを捌く。もう何度か同じ事を言われているようで、呆れた顔をしていた。

「そんなこと言ったってさー。このレヴィ・ザ・スラツシャー雷刃の襲撃者の強さ、ボクらの敵に見せつけてやる絶好のチャンスなのにさ」

「はいはい、もう相手も十分分かったと思うわよ。レヴィちゃんが強くて、かつこ良くて、それとちよつと子供っぽいって所はね」

レヴィの文句へ皮肉交じりに付き合っている彼女こそ、ヴォルケンリッターの一員であり、湖の騎士の二つ名を持つシャマルだ。そして、「強くてかっこいい」という単語に反応し、

「ふふん、まあねー♪」

といかにも単純な反応を見せている水色の少女こそ、紫天の書の『力』のマテリアル、レヴィ・ザ・スラツシャーであった。シグナムが戦闘、シユテルが解析を担当しているチームとは対照的に、こちらはレヴィが戦闘、シャマルが解析兼レヴィのストッパーをやっている。

『力』のマテリアルとして9歳女子の外見相応、いや、それより少しばかり下かもしれない精神年齢であるレヴィには、年長者の後見が必要であることから成された人事であろう。そう、シャマルは理解していた。

が、それにしたって、どうにも気苦労の掛かることだ、とも思う。

レヴィと同じくらいの背丈をしている鉄槌ヴィータちゃんの騎士だって、ここまではしゃいだりはしない。頭に乗ったりは、するかもしれないが。

それを宥めずかして、時には叱って抑えながら、この区画にある機密データを入手してこいというのだから、これは立派な過剰労働ではあるまいか。

と、心の中で愚痴をこぼしながらも、自らのデバイス『クラールヴィント』をフル稼働させて情報を入手、解析し続けているシャマルだった。

「……お、シャマルーん」

短い暇に耐えかねて、自分の魔力をそこら中に撒き散らかし、その光をピカピカさせて遊んでいたレヴィに通信が入った。いつの間によら妙なアダ名を付けられながら、シャマルはその通信が発信者の気遣いだと気づいた。

デバイスを全力で動かしている時に、通信を処理していたらレスポンスが下がってしまう。だから、敵が来なくて暇を持て余しているレヴィを中継にする。とこんな気遣いができるからには、発信者は多分シユテルだろうとシャマルは予想しており、現にその通りだった。

「シユテるんなんだけどね、ハズレだったみたい。合流に向けて移動

するってー」

「あら、そうだったの」

ハズレ、と言うのはつまり、ダミーのデータを掴まされたということだ。事前に予想されていたことだ。彼らの主が弾き出した予測によれば、目的のデータが隠されているだろう場所は全部で三つ。その内二つがダミーで一つが本物であり、定期的にシヤツフルされているから本物の場所は探してみないと分からないだろうと、告げられていた。

予測し告げた主本人は、本局に潜入していないどころか、その場所も良く知っていない。だということに、ここまで正確な情報が出されるとは。

主の言うことに絶対の信用を置いているシグナムとシユテル、そもそも疑うことを知らないレヴィと違って、シヤマルはほんの僅かながら疑念を持っていた。しかし、彼女の予測通りの場所で、予測通りダミーが出て来たのである。改めて、自らの主の実力と威厳を思い知らされる。

そう。紫天と夜天、同時に統べて運用するだけでも相当の大仕事だろうに。たった七人で人手が足りないからと、自らもう一つの候補地に打って出ているとは――。

「……あら、こつちも?」

その時、クラールヴィントがコンソールから、区画にあるメモリーバンクのデータ検索を終了し、シヤマルに結果を報告する。

結果はゼロ。ダミーのダミーである取り留めのない雑多なデータ以外、何もなかった。

「うえー、こつちもハズレなの?」

「みたいね」

それを聞いて露骨にげんなりとした表情をするレヴィとは違い、シヤマルはある程度落ち着いてこの現状を受け止めていた。

シグナムたちが居る場所も、自分たちが居るこの区画も、どれも“解体”の際にバラけた、外部ブロックに位置している。だが、主ともう二人、鉄槌の騎士と盾の守護獣が潜入したのは本局の中心部。集

まった高官たちを閉じ込めているのと同じ区画だ。

外縁と中枢。どちらに重要なデータが秘められているかを考えれば、二組ともダメーだとしても驚くことはなかった。

「じゃ、急いでここから撤収よ。早く艦船ドックに転移で移動しなきゃ」

「ふあーい……あーあ、もう少し暴れたかったなあ」

「この先、上手く行けばいくらでも暴れられるんだから、文句言わないで」

レヴィをまるで首根っこを引っ張るような強引さで連れ、シヤマルは急ぎその場から離脱する。早くしないと追撃の部隊が来る。無論自分とレヴィが二人で戦闘すれば迎撃も可能だが、下手に時間を費やせば、合流に間に合わずそのまま置いて行かれるかもしれない。

そのくらいのことはする主だ、とシヤマルは見切っていた。

「ね、王様大丈夫かな。多分、王様の方が本物でしょ？」

「王様？……ああ、貴方^{マテリアル}達は主のこと、王って呼ぶのよね」

「うん。あれは王様だもの。ボクとシユテるんの大好きな」

大好き、と言うからにはよほど慕われているのだろう。子供っぽい所で波長が合ったのか。いや、シユテルも好いているらしいから、それ以外の理由だろう。

それにしても。あの主は、王というより教授と言うべきではなからうか。

と、埒のないことを思いつつ、シヤマルは転送魔法の準備に入った。

本局解体事件（Ⅲ）

クロノ・ハラオウンは、本局中央部の制圧に慌ただしく展開する局員達の先陣を切っていた。10分ほど前、異様な振動と警告音を聞いた彼は即座に行動を開始。辺りの局員を半ば強引にかき集め、周囲の安全確保と敵の捜索に移ったのである。

「警備隊に関わらず、動ける人間は誰でもいい！ 僕に付いてきてくれ！」

弱冠14歳にして、執務官位を持っていたことがこの場合大きな助けになった。結果的にクロノは現場指揮官という立ち位置になり、自分より遥かに年上の局員を先導し、指示を出して動かすことができたのだ。

そして更に、クロノにとって不幸中の幸いだったのは、PT事件の裁判で重要参考人として本局に出向いていたフェイトとアルフが彼の直ぐ側にいたことだった。

「フェイト、そっちは！」

「クリア。クロノの方は？」

「こちら大丈夫だ。この階層は制圧出来たな」

裁判を有利に進めるため、囑託魔導師の教習も受けていたフェイトだが、まだその認定が正式に行われた訳ではない。だから、本来フェイトがこの場でバルディッシュを持ち、局員の一人として扱われることには少々問題があった。

しかし、緊急時であるから、他人が四の五の言う理由も無ければその隙も無かった。というより、クロノが意図的にそうさせたといっても過言ではない。

「集合！」

クロノの集合命令は音波、そして魔力による念話として味方に伝わる。集まってきた彼らから、上下三階層ずつに敵影が無い事を知らされたクロノは、少々頭を捻った後、この地に侵入してきた敵の目的をこう推察した。

「管理局の外部区画を分解し、この中央部のみを孤立させた敵の意図

は恐らく、今日行われていた統幕会議の出席者だ」

それを聞くと、辺りに立っている局員たちは動揺した。

統幕会議には、本局や地上本部の重要人物が集まっているのだ。それを狙われたのだから、つまりここにいる局員の上司上官が危ういということになる。予想外の奇襲に晒されながら士気旺盛な局員とて、慌てるのも無理は無い。

「落ち着いてくれ。まだ出席者に危険が及んでいるとは限らない」

そう言つて逸る仲間を抑えるクロノの心中も、穏やかならぬものだった。何故なら、あの暗い議事堂の中には今、彼の上司であり母親でもあるリンディ・ハラオウンがいるのだから。

通常、統幕会議は一提督の出席が許されるような会議ではないのだが、今回に限りリンディは証人のような役割を果すため出席していた。クロノがこの中央区画に出向いたのもその付添と、それからフェイトの裁判の資料集めが目的だったのだが。

それが、こんな事態になろうとは。仮に侵入者が議事堂を占拠していたら。もしかすると自分の母親が人質に取られ、交渉の道具として使われるかもしれない。

いや、それどころか、もう――。

クロノは頭を振って悲観的になる思考を拭い捨てた。今は考える時ではなく、行動の時だ。

「二手に別れよう。何人かはここに待機して、更なる侵入者への警戒と、他区画との連絡を回復させるんだ。残りは僕に続いて、最下層の議事堂へ近づく。いいか？」

この言葉に頷き、賛意を表した魔導師たちは次の瞬間、一斉に行動を開始した。通信魔法を駆使し離れた地区と連絡をつなげようとする者。サーチャーを展開してこれ以上の侵入と被害を阻止せんとする者。そして執務官を先頭に議事堂へ突入する一同の中には、当然ながらフェイトとアルフの姿もあった。

「しかしそれにしても、大変なことになったねえ」

「うん。大丈夫かな、リンディ提督。それに……」

「本局がこの有様じゃ、あたしたちはこれから一体、どうなっちゃうの

かね」

走りながら口々に呟いたそれが、二人の本心であった。この世に生まれ落ちてからまだ五年も過ぎておらず、時の庭園という閉所で育った二人はどちらかと言えば世間知らずの範疇に入るが、それでも時空管理局の規模と精強さは良く知っていた。二人にとつて大きな脅威であったアースラムも、全体からすればほんの一部隊でしかない。

その本部がこう簡単に襲撃され、指揮系統を四分五裂されて混乱している。その重大さと深刻さは、フェイトの幼い心にも敏感に感じ取れた。

P T事件の被害者と言える二人へ、普段はきさくに接してくれる優しいお兄さんたちが、今は眼を血走らせてただひたすらに走り、その先にいるかもしれない侵入者への敵意と怒りをむき出しにしている。それが、肌で感じられるのだ。

クロノ、フェイト、アルフ。そして他の局員を合わせれば、20人ほどになる小隊規模の集団は、階段を駆け下り、通路を走り続け、段々と下層へ下がっていく。

その度に通路は狭くなり、よく清掃のされているだろう金属の外壁にも、次第に時代を感じさせる古臭さを見て取る事が出来た。

こんな時でも正常に稼働している空調の温度は少し低めで、走るごとと精神的緊張、そしてリンカーコアの活性化により体温が上がっているクロノたちには肌寒く感じられる。

そして最下層。議事堂のあるフロアへ下がっていく時、彼らは数分の一秒だけ躊躇した。

ここから先は普通の局員が入る事を許されない場所であり、提督クラスでさえ許可が無ければ立ち入れない。それが防犯上の理由であり、今その防犯が破られている以上その援護に向かわなければならぬのだが。管理局開闢の昔から存在する重要区画の侵入に、ほんの少しだけ立ち止まってしまふのが彼らの習性であった。

それでも、クロノが何も迷わず足を踏み入れたら、すぐに全員が突入した。

そう、この中央部には、敵のテロリストが占拠すべき場所がいくつ

もある。そのほとんど全てに敵の影すら見当たらないのだから、後はただ一つ、この先にある議事堂のみが目的であることに間違いないのだ。

「突入っ！」

「探せ探せ！」

「警戒しろ！」

そう叫びながら動き続ける彼らの内の一人が突出して、奥へ奥へと進んでいく。その果敢さ故にいつの間にか仲間と離れ孤立してしまっているのは、襲撃後すぐさまかき集めた混成部隊の弱みというべきで、彼の責では無いだろう。

「どこだ……どこにいる、テロリストめ……！」

荒い息を吐きながら、周囲を見渡し警戒する彼に、油断が有った訳ではない。

だが、直後に彼の右頭部を襲った一撃は、彼が感知し振り向くよりも遥かに早かった。

「があっ……!?!」

デバイスと自動防御のシールドがぶつかると一瞬の、鈍い音。

そして、生身が吹き飛ばされ壁に叩きつけられる、更に鈍い音。

「どうしたあ！」

「敵だ！ 向こうにいる！ 一人やられた！」

その音が周りの局員に気づかれ、彼らの叫びが更に人を呼び。不幸な局員を叩きのめした侵入者は、あっという間に三方から囲まれ、追い詰められた。

すぐさま攻撃に移れるようデバイスを掲げる局員たちが初めて眼にした敵は、少々想定外の身なりをしていた。たった二人。それも一人は彼らの側についてきていた少女よりも更に幼く見える。そして更にもう一人——いや、もう一匹というべきか——は筋骨隆々の大男であるも、頭部に生えている獣耳からして、明らかに使い魔かそれに準ずる存在であるように見えた。

これが、侵入者なのか？

本局を解体し、そして今統幕会議を人質にとらんとする悪党なのか

？

そう疑問を抱かずにはいらなかったが、それでも彼らが局員ではない謎の魔導師、つまり敵であることには間違いない。

それに、幼い少女の右手には先ほどの攻撃で使われたであろう銀色の鉄槌が握られているのだ。警戒状態の局員に何のリアクションも起こさず殴り倒したのだから、数の上で勝っていても、油断ならぬ相手と言えるだろう。

「デバイスを捨てて、速やかに投降しろ！」

そう言い放って威嚇するが、少女と使い魔は一步も引かず。少女の方はにやりと笑いながら、鉄槌を構えて戦闘態勢に入っている。

しかしどちらも決定的な口火は切らず。ただ睨み合いを続けている。その間にも、局員たちは続々と集結していく。

最後に、フェイトとアルフ、そしてクロノが合流したその時。

クロノの目が大きく見開かれた。

「あれは……!?!」

「どうしたの、クロノ?」

その少女と使い魔の顔と、足元に展開されている三角形の魔法陣に、見覚えがあった。

直接会った訳でもなければ、戦ったこともない。だが、確かに覚えている。

忘れるはずがあるうか。士官学校に入り、管理局の機密を少しは覗ける立場になってから、最初に探し出した顔だ。

11年前の闇の書事件。いや、それ以前から幾度も目撃され、局のデータベースにはその名前すらしっかりと刻まれている。

闇の書の防衛端末。

魔力蒐集の走狗にして、過去何人もの人命を奪い取ってきた 騎士

。そしてクロノの父、クライド・ハラオウンを地面の下に追いやった元凶の、一部。

彼らの名は――。

「ヴォルケン、リッター……ッ!!」

「よく知ってるな」

怒りを通り越し、殺気すら籠っている眩きに、鉄槌を持つ少女が応える。

「あたしの名は、鉄槌の騎士、ヴィータ……それでこっちは」

「鋼の守護獣、ザフィーラ。我ら守護騎士。夜天の主に付き従い、主の望みを果す騎士」

「そう、あたしらが……ヴォルケンリッターだ！」

やはり。クロノはそう考えると、自らの愛杖であるS2Uを構えながら、局員たちの前に進み出た。この二人がヴォルケンリッターだとしたら、その強さはAAAランクの魔導師に匹敵する。

ここに集まった局員は数こそ敵を圧倒しているが、その大半はBランク以下であり、まともに当たれば手も足も出ず敗れてしまうだろう。量で質を補うとしても、この狭い通路ではその優位を生かし切れない。

それに、彼らの使うのはミッドチルダの魔法ではなく、古代ベルカ式だ。その対策をこなせる魔導師が、執務官であるクロノ以外にいるとは思えない。

ならば、この状況での最善手は一つ。クロノや、そしてフェイトのようなAAAランクの魔導師が正面切って敵と当たり、その隙に残りの局員を突入させることだ。

「フェイト、アルフ。君たちは守護獣を頼む。他は下がれ！」

クロノの命令に従い、二人の子供と一匹の使い魔以外の局員は、一人の負傷者を含め全員が後退する。別の突入口を探し、議事堂の出席者を救出するためだ。

「そう簡単に逃がすかよー！」

『Schwalbe fliegen』

ヴィータは勿論追撃しようとして、数個の鉄球を魔力で精製し、鉄槌で打ち出して後退の妨害を図ったが。

「させるかー！」

アルフがとつさに展開したラウンドシールドがそれを阻む。

爆裂した鉄球の爆煙が、狭い通路に充満する。

それが掻き消えるまでの短い間に、クロノたち以外の局員は全て後退を終えていた。

「ちっ……どうする、ザファイラ?」

「ここは今、我らに立ちはだかる敵にこそ当たるべきだろう。奴ら、強いぞ」

ヴィータに意見を求められたザファイラは、そう言っただけを構え、クロノとフェイト、そしてアルフに相對する。

三対二。

人数分の不利は変わらず、しかも相手の質がこちらと同じくらいであれば、ヴォルケンリッター側は下手に動けない。

對する管理局側も、古代ベルカ式の使い手が相手なら迂闊な初手は打てず、敵のアクションを待つて動こうとしている。

こうして互いに杖と鉄槌を握りながら、再びの睨み合いが始まる。その最中、クロノはヴィータに対してこう問いかけた。

「少し、聞かせて欲しいことがあるんだが」

「はん! 戦闘の最中に何言っただよ」

安易な挑発には乗らない、とばかりにヴィータは鼻で笑ったが、それを無視してクロノは更に問い詰める。

彼の心の中で、目の前の相手が父親の敵である、という怒りはとうとう冷めていた。そんな思考が無いわけではないが、今はそれより一つ、気にかかることがあった。

「君たち、そして君たちの母体である闇の書は、三ヶ月前に消滅したはずだ。それがどうしてここにいて、一体何が目的だ」

「闇の書、かよ……やな呼び方だよな、ザファイラ?」

「うむ」

返ってきたのは質問に対する答えではなく、自分たちの呼び名に対する訂正であった。

「いいか、あたしらは夜天の書の守護騎士だ。いつかは闇の書と呼んできた事もあったけど、そいつは本当の名前じゃねー」

「なんだと……!?!」

「お前たちの生まれる遙か昔。夜天の書は悪意あるものに脅かされ、

それ故に闇の書として呪いを撒き散らしていた。それを、今代の主は直して下さった」

「あたしらは今、その主のために働いてるんだ。主の指示を受け、その望みを叶える為に鉄槌を振るえる。これ以上に嬉しいことはねー。だから二度と、あたしらを闇の書の騎士って呼ぶな」

クロノは驚く。ヴォルケンリッターとは、ただ魔力を集めるだけの道具ではないのか。

それに、闇の書が元々は夜天の書という名前であり、改竄されて呪いの魔道書になったとは。

確かに闇の書は、管理局が設立される遥か以前から『呪いの魔道書』として語り継がれ、恐れられてきた。それを考えれば、昔に改竄されたとしてもおかしくはない。

しかし——今代の主が、それを直した？

今まで何度か管理局に確保されながらも、其の内部構造については完全にアンタッチャブルであった闇の書を、修復したというのか？

——そんなことが、出来るのは。いや、そんなことを成し遂げかけた、ただ一人の人間といえば——。

「まさ、か……」

「う、嘘だろ？ だってあいつは……」

「でも、闇の……えと、夜天の書がここにあるってことは、多分」

クロノを含めた三人は、臨戦態勢を崩さぬまま、視線と言葉を交わし戦慄していた。

相対する騎士一人と一匹が怪訝な顔をするくらいに、彼らは恐れる。

彼ら全員、〃彼女〃については悪い思い出ばかりだった。

一人は催眠ライトで眠らされた後、深層に至る記憶を覗かれ。

もう一人は自分の乗艦を思うがままにされた挙句、散々に脅され。

もう一匹は腹の中に機械の虫を入れさせられて、ずっと監視されていたのだ。

だから、その可能性を、考えないでいたかった。

闇の書だけが無限再生機能で復活したものと思ひ込み、〃彼女〃が

蘇るなんてあり得ないと、思考の幅を狭めていたのだ。

しかし、それを前提に考えてみたら、全てがつながる。それどころか、この状況——ハッキングによる本局の解体と、それによる無力化——に、デジヤブを感じてしまう。

「……もう一つだけ聞きたい。君たちの、主の名を」

あの事故が起こった時、心の中で密かに胸を撫で下ろしもしたクロノだが。

だからこそ、聞かねばならない。

“彼女”が生きているのか。生きていたとして、この騎士たちを何の目的で動かしているのか。

その返答によっては。

——時空管理局は、これまでのどんな事件よりも異様な脅威に晒されることになるから——。

「それは」

「それは、私から答えてあげちゃおう」

唐突に通路へ響く、甘ったるい声。

「主!?! お出でになるのですか!?!」

「ザフィくん、そんなに驚かないの。もうとっくに用事は終わったんだから」

それは、フェイトの友達になってくれた、あの女の子とそっくりで。

だけどフェイトとアルフ、そしてクロノが記憶していたそれよりも少しだけ低く、冷たさを感じる声だった。

「でも、ここはあたしたちに任せてよ。出て来たらあぶねーって」

「ねえ、ヴィーちゃん? 君は私が、君たちよりずっと弱っちいだなんて思ってるのかな? そんなことないよね?」

「っ……そ、そんなんじゃないけど、さ……」

遊びの最中のようにいい加減でふざけた口ぶりだが、その端々に酷薄さと怜悧さが見え隠れしている。何者も恐れる勇敢さを持っている

るだろうヴォルケンリッターの二人でさえ、頭を押さえつけられるような威圧感に慄いているようだった。

「だったらいいじゃん。君たちばかりに任せてるのも何だし、主の私も働かないとね♪」

「……畏まりました。ヴィータ」

「ああ」

主の要求に折れた二人は、それぞれ左右に移動し、跪く。その後ろには大きなドアがあり——二人が跪いた直後、ゆっくりと開き始めた。

杖と拳を握り直し、何が来ても対応できるように神経を研ぎ澄ますクロノたち。

しかし、そこから出て来たのは、ある意味彼らの予想通りの存在であり。

またある意味で、想像を大きく上回るものだった。

「それに、ここにあの子たちがいるのって、実は結構、好都合なんだよね」

クロノとフェイトよりずっと高く、下手をすればアルフをも上回るかもしれない、女性としては高い背丈。

「計算の前提を整えるためには、辻褄を合わせなきゃいけないし」

空のように真っ青なブルーのワンピースにエプロンと大きなリボン。それから機械のウサミミは

、見慣れていたものと同じだが。

スラッと伸び、均整が取れたしなやかな体。豊満な胸の膨らみ。

そのどれもが、クロノやフェイトの記憶には存在しない。

だがしかし。

服装、淀んだツリ目、そして、人を小馬鹿にするような態度は、紛れも無く——

「篠ノ之束……!!」

「んむ、そのとおり。私こそが天才にして、夜天の書の主、篠ノ之束さなんだよお♪」

——おとなになった、篠ノ之束だった。

本局解体事件（Ⅳ）

静まり返る通路。戦慄する三人と、跪く二人の中心に立ち、虚ろに笑う女性こそが、紛れも無いこの場の支配者であった。

「……どうしてここにいる。それに、その格好は」

「ん、これ？ 別にいつも通りだと思うんだけど。ドレスにウサミミ、んー我ながらかわひい♪」

クロノの問をいい加減にはぐらかすその答え。ふざけた軽い口調は彼の神経を巧みにつねってささくれ立たせるが、それが東の思う壺であることを彼は知っていた。

いや、仮に何の考えもなしに、ただ素でそう答えているのだとしても。この危険な存在を相手に、一瞬たりとも気を抜いてはいけないのだ。

「君は闇の書の消滅と共に消えたはずだ。死体も何も見つからなかった。それがどうして」

「うん、確かにそうだ。だけどね」

今度は疑問を肯定しながら、東はくすくす笑い出す。それが何か問題なのか、というように。

「この本。この素敵なご本があれば、一回この世消えた所でどうってことはないんだよ？」

「……無限再生機能。そして転生機能か」

「あつたりい。さつすがクロちん、察しがいいのは楽でいいよ♪」

東が右手に持つ分厚い書物。それはヴォルケンリッターの母体であり、かつて呪われた魔導書として恐れ語り継がれていた、夜天の書だ。その機能の一部を、かつての闇の書事件の報告書でクロノは既に知っていた。

どんな攻撃を受けてもあつという間に再生してしまう無限再生機能。そして、アルカンシエルによる破壊からも逃げ延びてしまう転生機能を使えば、あの爆発からも生き延びることが出来るかもしれないと、そう考えられるはず。

しかしそれは、東がああ短い瞬間、時間にして数分にも満たない消

滅までのリミットで、暴走する夜天の書から主と認められなければいけないことだ。そんなことが、ましてやリンカーコアを持たない者が、闇の書を御し得るはずはないと、真っ先に否定された。

だのに今。

東の両隣には、二体のヴォルケンリッターが付き従っている。

世界一危険な頭脳を持つ天才が、世界でも有数の危険性を持つロス・トロギアと結びついた、その揺るぎない証拠であった。

「……今すぐ投降しろ。君は犯罪者だ」

「うんうん」

「本局に対する襲撃。これだけで大罪人だ。それに、もしここから出たとして、君は今と同じようなことを……犯罪を繰り返す。例えばそれが、どんな考えに基づいていたとしても」

「ごもつとも」

「だから、投降してくれ。これ以上の罪を犯さない内に。僕ら三人きりではなく、次元航行船の一個艦隊が、君を追うような事態になる前に」その警告を聞いても、東は何の反応も返さない。ただ闇の書を手にしたまま、立ち尽くすだけだ。今更警告など無意味というのだろうか。

だがそれでも、クロノは諦めずに語り続けた。次元世界の大海に危険な犯罪者を送り出したくなかったし、それに。

三ヶ月前、クロノの腕の中で弱々しく、息絶えたように眠り続けていた女の子。

彼女の悲しい顔を、見たくはなかったから――。

「……ふうん」

だがその思いを、東は黙殺するようだった。

かつり、かつりと一歩ずつ前に進み、クロノたちとの距離を詰める。もはやクロスレンジと言っても過言でない距離まで近づいたので、クロノは杖を構えざるを得なかった。フェイトもバルディッシュを両手に持ち斧の形態で構え。アルフも両手を握り締め、毛を逆立たせた獣のような唸り声を挙げている。

対する東はデバイスも何も持つておらず、唯一持っていた夜天の書

も——ぽいと、後方へ投げ捨てた。ヴィータがそれを慌ててキャッチしながら、主の後ろ姿に語りかける。

「お、おいー!」

「だーいじょうぶ。ヴィーちゃんにそれ、預けるよ。今やることには必要ないというか、むしろ邪魔だし」

「でも……」

「まあ見ててよ。私が君たちの主に相応しいってとこ、ちよつとだけ見せてあげよう」

一般的に、魔導師と魔力を持たない常人には、実力において大きな開きがある。特にAAAランクまで至った魔導師には、弾丸はおろか小型のミサイルすら通じない。ましてや生身では、まず適わないと見ていいだろう。

だが、束は丸腰で、しかも何の構えを取ること無くクロノたち三人に近寄る。その動きに敵意も害意も、一欠片とて見当たらない。

しかしその表情に満ち満ちているのは、絶対的な自信だった。

『来るぞ。こちらは一旦受け止めてから反撃する。相手の手の内を見たい』

『了解。近接戦だね?』

『ああ、僕が設置系のバインドで動きを止めた隙を狙ってくれ。アルフもいいな?』

『もちろんさ』

対する魔導師側は、念話において戦術を決定し、それぞれに態勢を整えた。これも、魔導師側が非魔導師側に有する無数のアドバンテージの一つである。

AAAランクが二人に、Aランク相当の使い魔が一匹。それも内一人は、近接戦闘こそを専門にするアタッカーだ。勝ちこそすれど、たった一人の非魔導師に、負けるはずがない布陣だった。

しかし。

篠ノ之束の頭の中にある計算機は、一度消滅して尚も、狂ってはいなかったのである——。

「……………ッ!」

先に動いたのは、束だった。金属の床を蹴って猛然と走り出す。狙いは指揮官であり、三人の中で一番の実力を持つクロノである。頭さえ潰せば、三対一の劣勢を大きく覆せるだろう。

だがしかし、それは同時にクロノの思う壺でもあった。近接戦闘を主とするフェイトや、防御の硬いアルフは後回しにしてまずは頭数を減らす。それも指揮官、そしてどんな状況にもスタンドアロンで対応できる自分をまずは排除にかかるだろう。クロノにだって、それくらいは読めた。

だから、彼は自分の眼前180度に、設置型のトラップ・バインドを仕掛けていた。

夜天の書の機能を使えば、無論探知は可能だろう。しかし今、束はそれを放り投げた。魔法が使えないのだから、魔法による罠を見抜くことは出来ない。

向こうがわざわざ手札を減らしてくれたのだから、最大限それに乗じることが勝利への最短路であるという、クロノの戦術眼は適切だった。

「……おろっ？」

馬鹿正直なほど直線的に進んだ束の手首に、足首に、青い輪っかが括りつけられる。

綺麗に決まった。後は無防備な腹部に打撃魔法で衝撃を叩きつけ、気絶させるだけだ。

そうなるだろうとこの場の誰もが信じていた。二人の騎士すら、倒れた主を救出するために再び構えを整えていたのだ。

しかし。

「えい」

パキリ。

プラスチックが割れるような音と共に、あっけなくバインドが引きちぎられる。クロノの思考から冷静さが溶け落ち、驚愕に代わって支配された。

馬鹿な。確かに仕込みはごく短時間であり、術式もそんなに複雑ではない。だがそれ故に硬いバインドであるはずなのに。力で無理矢

理解除するにしても、少なくとも数秒間は稼げる。

そうだ。何らかの方法で解除されることは予測していた。だがそれが、こんなにも早く、あつけないものだとは。

——攻撃が来る。

クロノは瞬時に杖を持ち替え術式を貼り直し、防御の態勢を整えた。

ここまで接近されたからには、束が使ってくるのは徒手空拳であるはず。バインドを破るあの力を生身で受ければ只では済まない。

ならばシールドで衝撃を受け止め、その隙にフェイトへ指示して後ろを叩かせる。ただの打撃ならば、それがいくら強いものであろうと防ぎは出来る。

束が上半身を捻り、腕を大きく後ろへ振りかぶった。大きな一撃、狙いは頭か、それとも腹か。どちらでもいい。この一撃を耐えきれれば、後の反撃で無力化出来る。

後はいつ、打撃が来るか。最適のタイミングで防御を展開するため、クロノは束の右手を注視した。アドレナリンが走り、一秒が五秒にも十秒にも錯覚できてしまうくらいに集中が高まる。

そして、クロノは見た。

限界まで捻られた腰が動き、速度と重みを兼ね備えた一撃が放たれる正にその時、束の右手が開かれたのを。

「…………ぐっ!?!」

掌底であった。

即座に展開されたシールドへ、束の掌が直撃する。実体化したシールドの厚さは僅か数ミリ。その構えと打ち込みが例えにわか仕込みであったにしろ、腕力が伝える衝撃は、クロノのシールドから右手、そして全身へ伝わるのに十分な威力を持っていた。

「クロノ!?!」

身体内部に大きなダメージを受けたクロノは跪く。

それを見たアルフかフェイトか、どちらかが悲痛な声で叫んだ。

どちらか。それをはつきり判別できないほど、クロノの意識は揺さぶられ、朧げになっていた。周囲の景色がぼやりとにじみ、感覚の薄

れ具合といえ、今自分が息をしているのかどうかすら定かではないくらいだ。

これほど強い一撃を受けて、意識というものをまだ持ち合わせていること自体が、もしかすると奇跡的なものかもしれない。

そんな有様を見つめる束の顔も、よく見えないが。多分笑っているのだろうと、クロノは当て推量した。

——ああ。思い直してみれば、この一撃は何から何まで彼女らしくない一撃だった。

罠くらい予測していて然るべきなのに、無視して踏み込み。防御などどうにかして掻い潜ればいいのに、正面から押し通していた。

そういう一撃を喰らわせる、いかにも彼女らしい理由はただ一つ。手間をかけるのが面倒なのだ。

罠を回避し、防御を無視する。魔法に対する知恵を以っての対抗。それは今の束にとっては、全て省いて問題ない、すなわち面倒で無駄なことなのだ。

そう認識したクロノにはもはや、束が今までの束とは違うように見えていた。はつきり像を結んでいる『生意気で頭でっかちな犯罪者予備軍』から、今の視界のようにぼやけて見切れない、『極めて危険な次元犯罪者』に変わったのだ。

——フェイト、アルフ、逃げろ。

そう口にしたかった。

自分が敵わぬ相手に、自分が読み切れない、理解しきれない敵に、フェイトが勝てるはずがない。それはもう、予想ではなく確信だった。

だが、声が出ないのだ。意識を繋ぎ止めるので精一杯だった。ひよつとすると、無意識でも編めるくらいのバリアジャケットまで解除してしまっているかもしれない。

だから、フェイトがアルフとともに、激情して斬りかかるのを止めることが出来なかった。

「クロノおっ！」

「こいつ、よくもっ！」

彼女たちにとって、半年間近くに来てくれて、裁判やその他何かと助けてくれたクロノは、もはや身内と言っている。そして、二人の情の厚さを考えれば、そんな身内をノックアウトした束を前に激して襲いかかるのも当然だった。

フェイトはバルディッシュを鎌に変えた斬撃魔法。アルフは握った拳に魔力を込めての打撃魔法で攻撃する。しかも、フェイトは通路の上を天井に接触しないギリギリまで跳躍し、上からの攻撃だ。前と上の三次元攻撃。例え束が一方を防御したとして、もう一方で仕留める。

コンビネーション攻撃としてはありがちな、しかしだからこそ有効な一手。

「ふん♪」

突進してきたアルフの拳は鮮やかなほど綺麗に躲される。そして伸ばした二の腕と脇腹を掴まれあっさりとは投げられ、宙を舞った。受け身も取れず、そのまま地面に叩きつけられるアルフのダメージは中々のものになるだろう。

だがその瞬間、フェイトから見れば防御はがら空きだ。

「たあああっー！」

振り上げた魔力の刃で背中から切り裂く。非殺傷の魔力ダメージだが、フェイトの魔力変換資質による電気ショックは、成人女性の全身を容易に痺れさせられるだろう。

攻撃を終えたフェイトはステップして後退し、油断なくバルディッシュを構え直す。倒れ伏せたアルフとクロノをそのままにしておくのは少し気の毒だが、この程度で篠ノ之束が倒れるとも思えない。事実、自分の体に流れている魔力の電流に呻き一つ挙げず、その光をイルミネーションか何かを見るように面白がっている。

——だから、もう少し戦わなきゃ。

全く応えていないとはいえ、ファーストヒット初撃を直撃させられたのだから、大丈夫。勝機は十分にある。

こちらの窮地はとつくに通信魔法で知らせてあるから、戦い続けている間に局員たちが戻ってきて加勢してくれることも考えられる。

だから、きつと大丈夫。そうだよね、バルデイ——。

「……バル、ディツシュ？」

その時であった。フェイトが常から肌身離さず持っている愛杖であり、そして同時に何よりも頼れる相棒であるバルディツシュから、魔力の鼓動が消え失せたのは。

杖の先端にある、丸いガラス球のような部分。杖の意識を表すように点滅し、時には眼のように光っていたその部分を、フェイトは見た。自分の魔力光と同じ明るい金色が、電池が切れたようにぷつぷつ消えていた。

「どう、したの」

魔力を流す。何度も、何度も。

黒いグローブは汗ばむが、低い機械音声はフェイトの耳に一度だつて響いてこない。

そんな、なぜ、どうして。

確かに攻撃はした。でも、背中からだ。カウンターを取って何かをする隙なんて何処にも——。

「答えてバルディツシュ、答えてっ！」

束が振り向く。

必死に呼びかけるフェイトの様子を見て、その口端は不気味に吊り上がっていた。

「ありがとね。久しぶりのバラ分し解にしては、中々いいものを触れたよ」

「な……え……」

「折角触るなら、いい機械じゃないといけないよね。作り手の魂というか、意志が籠ってるというか。大量生産なんかとは違うオーダーメイド。実に良かったよ」

フェイトの思考は散逸して、精神は小規模なパニック状態にあった。

一方、束は言葉尻も表情も喜色満面。久しぶりにいい仕事をした、とばかりに指の骨を鳴らしている。

「どう、やって」

「あ、驚いた？ 束さんくらいになるとね、ちよちよいつと触るだけで大丈夫なんだ。こう、私に向けられてる刃先を、つつーっ、とね」

束がフェイトの前に差し出したのは、右腕の人差し指である。そこには一筋の傷とにじみ出ている血が見えた。

彼女がバルディッシュに手を触れたのは、フェイトが着地してから後ろへ退くまでのごく僅かな瞬間。物理設定で無い攻撃の痛みと痺れを露ほども感じなかった彼女は、フェイトの知覚よりも遥かに素早くバルディッシュに触れた。

それだけである。指先で少しだけ斧の刃をなぞって、それからまた無防備な背中を見せる、それだけで、複雑なインテリジェントデバイスであるバルディッシュを無力化してのけたのだ。

「そんな、バルディッシュ！ 動いて、動いてよおっ！」
「……」

フェイトは振るえる手で杖を握り、必死に問いかけ続ける。目の前に敵がいることもすっかり失念しているようだ。

無理もなかった。バルディッシュはフェイトにとって、ただの武器でも機械でもない。自分の魔法の先生であり、プレシアの使い魔であつたりニスが遺してくれたものであり、自分の半身と言える存在。無口だけれど、フェイトが語りかけたらいつも答えてくれたし、主の期待を一度たりとて裏切ったことのない、閃光の戦斧。その機能停止に、心を乱されないはずがなかった。

だが、束は更に、追い打ちをかけるが如く、手を上に伸ばし——パチリ、と指を鳴らす。

それは、現実を受け入れられないフェイトが、感情のままバルディッシュの柄を強く握った、ちょうどその時だった。

「え——」

崩れていく。

黒い外装が、そしてその中にある機械が。

さつきまで握っていた柄も、何もかも。

バラバラに、崩れていく。

見る者が見れば芸術と称される、緻密でいて無骨な工芸品。その部

品の一つ一つが、地面に落ちて小うるさい音を立てていた。

「あは、完璧☆」

束がそう自画自賛するように、その崩壊はともすれば芸術的な光景にも見えるだろう。

だがしかし、フェイトの心が見るそれは、自分の大切なもの、継るもの、否、それ以上に自分自身が、粉々に砕けて行くようなものだった。

「う、あ——うあああああつ!!」

喉を焼き付かせながら放つような絶叫。

それは気絶していたアルフト、それから未だに朦朧としていたクロノの意識を目覚めさせる。

目の前で起こる悲惨な光景に、アルフは愕然とする——前に激怒し、痛む体を強引に動かし立ち上がる。

「こん、にやろっ……よくもっ……!」

「んもう、邪魔しないでよっ」

が、再びあつさり躲され、今度は腹部に強烈なブローを叩きこまれた。

内蔵を潰してしまうくらいの衝撃に、今度は忽ち崩折れる。

「がっ……!」

「こういう格闘はあんまし好きじゃないんだから。バラしで気持ちよく終わろうと思ったのに、これじゃ台無しだよ」

援護のため、クロノは必死に立ち上がろうとしたが、体はどうしても動かない。掌底の衝撃は、それほどに強烈なものだった。

フェイトはまだ、茫然自失のままである。

「じゃ、辻褄合わせも終わったし、行こうか皆の衆!」

「……」

そんな三人を尻目に、束は控えていた二人の騎士へ合図する。彼らはそれぞれに、この新たな主の武力と実力、そして抗いようのないチカラを肌で感じたのか、無言のまま、上層への道へ歩き出した。

そんな後ろ姿を見つめて満足気に頷きながら、最後に束が姿を消す。

フエイトの救援要請を受けて局員たちが駆けつけたのは、数十秒後のことだった。

時空管理局本局に数ある建造物の中で最も巨大なものは、外縁に位置する艦船ドックだ。次元空間を行き交いする航行船の三割がこのドックで製造され、整備され、運用される。そして最後には解体されていく場所でもあった。

いつもは明かりが消えること無く、整備員の怒号と機械の駆動音に支配されている巨大港。だが今は、その全域が暗黒と静寂に静まり返っていた。

解体された本局の中でも、大きなブロックであったドックは、その動力の殆どを外部からの供給に頼っていた。他の区画は万が一のために独自の電力源を持っているが、このドックだけは送電式にしなければ、巨大な艦船を格納出来るだけのスペースを捻出できなかったのだ。

事件発生直前まで働いていた職員たちは、緊急事態から身を守るため、艦船の収容スペースから遠いセーフハウスに避難していた。彼らの殆どは非戦闘員であった。

そうして、すっかり静まり返ったドックは、ともすれば船の墓場のようにも見えてしまう。そこに魔法陣の光が三つ灯り、転送されてきたのは全部で七人。

一つ目からは、烈火の将と『理』のマテリアル。

二つ目からは、湖の騎士と『力』のマテリアル。

そして最後の一つから、鉄槌の騎士、鋼の守護獣が現れ、一箇所に集まった。

「我ら、夜天に集いし雲」

「我ら、紫天に集いし星」

常闇の空間に、響く、6つの声。

「ヴォルケンリッター」

「マテリアル」

彼らが跪くは、たった一人の少女。

「我らが主よ。なんなりとご命令を」

「——うむ。ご苦勞♪ それじゃあ今回の大詰め、いっちゃおっか！」
機械仕掛けのウサミミを、ご機嫌そうに動かした束は、意気揚々と歩き出す。三人と一匹、そして二体の騎士たちはがその後ろに付き従う。

まるで勝手知ったる、という風にタラップを昇りキャットウォークを歩き続け、辿り着いたのはある船の出入り口。

電力が止まっているし、船の灯も落ちている。当然開きつこない鋼鉄のハッチを、束はちよん、と突く。すると、ハッチの電子ロックが開き、そこから見える艦内通路も、奥から段々と照明を点灯させていく。

「すつげえ……これも、さっきのと同じ技なのか!？」

その、魔法使いのような所業に感嘆するヴィータに対し、束はちつちつ、と指を振って笑い、優しく訂正する。

「ううん、流石にこの規模の機械をバラすとなると、たつぷり20秒は掛けなきゃね。でも、この船には前から“仕込み”をしてあったから」

果たして束の言うとおり、航行線のあらゆる部分が、本来異質な侵入者である束たちを歓迎するかのように動き出す。

進めばドアは自動で開き、探さずとも案内灯が彼らを誘導してくれる。

エレベーターで数階層昇り、それから更に少し歩いて辿り着いた場所は、艦内にある部屋の中でもひとときわ広く大きい場所。

そう、艦橋だった。

その一番上に鎮座する、大きな椅子——艦長席に座って、コンソールを立ち上げながら、束はひたすらに独言する。

「ほうほう、色々やってみたんだね、向こうも。電子機器の総取っ替

え？ OSのバージョンアップ？ セキュリティソフトの改善？
でも、そんなことで……」

やがて艦の全てを制御するメインコンピュータに接続した束は、彼女が半年前の「仕込み」を行った時、自らが目論んだ通りの結果が眼前に出てきたことに狂喜した。

『Checking completed.
Welcome to Arthra, Admiral』

「この束さんを有象無象が出し抜ける訳、ないんだよねえ♪」

束が半年前、アースラのメインコンピュータに感染させたウイルスは、確かに取り払われた。メインコンピュータの交換、その他あらゆる電子機器の破壊と交換というとてもなく強引な方法で。だが、束にとってウイルスはあくまで、その場のイベントのために使い捨てるギミックだ。

本命は、もう一つ。空調用の細いダクトの中に忍び込ませた超小型のロボットと、その中に入っている、更に高度なコンピュータウイルス。

それはまず、ドックに入ったアースラの、交換済みのメインコンピュータにウイルスを打ち込み、そして遥かに遠くまで移動し、艦船ドック内のコンソールと、そこから繋がるあらゆるコンピュータにもウイルスを感染させた。

そう。この襲撃を成功させるための下準備は、半年前に終わっていた。

というより、何かに使えると思つて仕掛けておいたブービートラップを、面白おかしく再利用した、それだけのことであつた。

「……流石です。我が主よ」

とはいえそれは、何も知らないヴォルケンリッターとマテリアルにとつて、魔法ですら成し得ない奇跡のように見えている。その感嘆を代表するかのように、シグナムが頭を垂れた。

第一ここは、次元世界の法を守る総本山。これから法に反し、破壊をばら撒く彼らにとっては敵の本拠地でもある。だのにこの主は、それをバラバラに解体した後機密のデータを回収し、拳句に敵の船を強

奪してのけた。

ヴォルケンリッターにはこれまで数々の主と戦ってきた、時には利用されてきた記憶がある。今回の主はその中でも、最も異質で、最も驚異的な主と言っているだろう。

「何言ってるのかな？　こんなの序の口。計算が正しければ、私たちはこれからもっと大きな敵と戦っていかなきゃいけない。これはそのための拠点なんだ」

「……承知しております」

「だから、君たちにも頑張ってもらわないとね。いくら東さんが全知全能の天才だとしても、骨が折れる些事は山程あるんだし」

そう嘯きながら、東は投影型のキーボードを細やかに、撫でるように打鍵し、艦のエンジンを点火させた。

身震いのように振るえる艦と艦橋。開始された前進は、すぐさま固定用のチェーンに阻まれるが、巡航1級航行艦船の大出力がそれを断ち切るのには、一分もかからなかった。

「ですが、今の我等に敵は無し……そうでしょう？」

「うん、そうそう♪ シュテるんの言うとおり！」

主の右下に陣取りながら、自信に満ちたシュテルの問いを、東は迷いなく肯定した。

その両手には、二つの魔導書が握られている。

一つは、数多くの魔導書の中に収め、主を守る夜天の書。

一つは、膨大な出力を持つ永遠結晶を制御し、無限の力で敵を討つ、

紫天の書。

東は、二つの魔導書を支配している。

彼女は夜天の書の主であり、紫天の書の――

「それでこそ、我らが王」

「僕らも王様のため、たくさん破壊して、たくさん暴れるからね！」

王、であった。

やがて、アースラの前面を映すモニタには、固く閉じられたドックの出口が見えたが。

束がまた指を動かせば、まるで予定されていたかのように開く。

「さあ、最後の最後、派手にいこう！　せーのっ」

そして、いつの間にもやらの手に握っていた、トリガー型のスイッチを、ぎゅつと引けば。

「どっかーん！」

束たち七人の背後で、乗り手の居ない艦船たちが次々と爆破されていった。

その爆風に押し出されるようにして、アースラはドックから脱出した。

次元空間の大海原に乗り出すその後ろに広がるのは、百を超える区画に解体された本局と、火の海に包まれた艦船ドック。

ロストログアによる数多くの怪異が満ちている次元世界の中でも、千年に一度あるかないかの、壮大な破壊劇だった。

「……あの、主？　これから私たち、どこに行くのでしょうか？」

「そうだねえ、シヤマッチ」

その光景に目を奪われる騎士たちの中から、いち早く復帰したシヤマルがそう問えば、束はこれからの展望について思いを馳せる。

やるべきことは沢山だ。自分たちがこれから敵にするのは、巨大で堅固な大結社。しかも悪いことに、対抗出来なくなるまでのタイムリミットまで存在している。一分一秒も無駄には出来ない。

だが。今ひとつ、準備しておかねばならない物がある。

そのことを思う度に、うつつとりするような夢想を抱いてしまう、そんなある物を――束はまだ持っていない。

だから、行かねばならない。

あの場所へ。

自分の全てが始まった、あの場所へ。

「……とりあえず」

まるで長旅を終えて、故郷へ帰る旅人のように、束はその地の名前を呼んだ。

「第97管理外世界——地球、かな？」

幕間の終わり（Ⅰ）

「ほら、取ってこーいー！」

金髪で勝ち気な少女の手から赤色のディスクが投げられると、成犬になって間もないゴールデンレトリバーが素早く飛び出した。

ふらふらと滞空するディスクを眼で追いながら芝生い茂る庭を駆け抜け、ちようど自分の頭部から斜め上30度辺りに位置した時にジャンプし、口で掴む。少し危なっかしいものの、訓練の成果は現れているようだ。

「ん、よく出来ました」

アリサ・バニングスは戻ってきた犬の頭を撫でながら、褒め言葉を掛けてやった。喜んで尻尾を振る犬の口からディスクを取り外し、側で拍手をしている自分の友達へ差し出す。

「なのは。あんたもやってあげなさいよ。喜ぶわよ?」
「うん！」

楽しみに頷きディスクを取ったなのはが犬の前に進み出ると、それに代わってアリサは少し離れる。そこには、一緒に遊びに来ていたすずかや、千冬の姿もあった。

皆、なのはを見つめている。なのはが犬の前にディスクを見せつけたり、それに注視する視線を左右に動かし面白がったりするのをただ見つめ、どこかほっとしたような表情を浮かべている。

そうしたくなる気持ちだが、アリサには良く理解できる。事実、自分もそれに似た感情を抱いているのだから。

「なのはちゃん、元気になったね」

「ああ」

すずかの一言が、三人の心情を端的に表していた。

あの出来事から三ヶ月。直後にショックで意識を失ったのを皮切りにして、なのはの様子は目を覆いたくなるくらいに酷かった。一ヶ月経たない内は、病室からの外出すらままならなかったのだ。

それが段々と元気になっていって、今では学校にも行き、友人の家で以前のように遊べるまでに回復している。それには、親や兄弟の献

身的なケアもさることながら——この三人の友人たちが、毎日側に付きつきりだったことも大きな助けになっていた。

「最初はほんつと、見てらんなかったもんね……食事は喉を通らない、口は効かない、話しかけても反応しないで、ほんとに……」

そう言いながらアリサは、初めてお見舞いに行った時ののを思い起こし、改めて憂鬱な気分になった。

まるで魂が抜けたようだ、というのが第一印象だった。こちらが無理に笑顔を作って話しかけてみても、眉一つ動かさずらしい。点滴のみを受け付けている体はどことなく痩せ細っていて、それが通い続けることに酷くなっていくのだからたまらなかった。

何度気持ちを爆発させかけたか。

——アンタはそんな女の子じゃない、どんな時でも明るく笑って、傷つく素振りなんかちつとも見せないで、それで私たちだって笑顔になれるんだから。だから、笑ってよ——。

そう言いたくなって、それが傷ついた友人に対しての傲慢だと気づいて喉元で引っ込める。それを何回も繰り返しながら、見舞い続けた。

そして漸く、問いかけに反応してくれて。ちよつとずつご飯を食べるようになってきて。

退院してから一緒に学校へ行けた日の、喜びと言ったら無かった。

それからまだ、二週間も経っていないけれど。それでやつとごく普通の日常が戻ってきたように、アリサは思うのだ。

自分の中で、どれだけ『高町なのは』という存在が大きかったのか、実感しながら。

「……」

「そりゃ、完全に忘れてしまふとか、そんなことは出来ないだろうけどさ。でも、やっぱりなのはには、笑っていて欲しいよ」

「そう、だな」

黙って頷く二人も、自分と同じ気持ちなんだとアリサは確信した。

私たち五人の中心には、いつだってなのはが居たのだから。なのはが居るから、自分たちは友達になれた。皆が笑顔になれた。

アリサも、すずかも、千冬も。それから、あの気難しい束だって。
「……ねえ、千冬。例の件、どうなの？」

ふと思いついて、アリサは千冬に尋ねた。露骨に難しい顔をした千冬は念の為か、犬との触れ合いに熱中しているのはへ聞こえないように声を潜めて答える。

「まだ何も応答がない。一応調べることには調べてくれているようだが……向こうも忙しい上に、既に公式では死亡と扱われている人間の捜索だ。無碍に扱われていないだけでも儲けものといった所だろうな」

「そっかあ……」

「ねえ、二人共、やっぱりまだ調べてるの？」

憂鬱そうに問いかけるすずかへ、二人は揃って頷いた。

「当たり前よ。あいつが……束が死んだなんて、私はどうしても信じられないもん」

「アリサちゃん……」

アリサのその言葉を聞いた途端に、すずかの表情は憂鬱を通り越して暗鬱なものになっていた。

彼女の懸念は、アリサには分かっている。篠ノ之束の死という現実を乗り越えられていないのは、なのはではなく。むしろ千冬と、それからアリサの二人ではないのかということだろう。

確かに、そうなのかもしれない。アリサにとって束は——色々あって、表立ってそう宣言するのは躊躇われるけれど——「友達」なのだし、千冬にとってもそうであるだろう。

その友人の死を怪しみ、時空管理局に申し立てて次元世界を捜索してもらったことまでするのは、ひよつとしたらやり過ぎなのかもしれないとも思う。

けれど、どうしても認められ——いや、認めてはいる。いるんだけれど——それでは、なにかがダメな気がする。

「ううん、違うのよ、ね、千冬」

「ああ、違っても」

そこから先はアリサには、雲を掴むように上手く説明できなかつた

ので千冬に代わると、彼女は明確に、はつきりとした懸念を述べてくれた。

「あいつが死ぬ。それは……まあ、人間生きていればいつかは死ぬんだ。あいつの場合、そのタイミング随分と早かったと、それで私は納得できるさ。だが……あいつが、篠ノ之束という人間が、あんな最後で終わってしまうものだろうか？」

あんな最後。つまり、自分の実験に失敗し、後始末の為に一人その場に残って。なのはと千冬とそれからユーノだけでなく、グレアムやその他大勢の人々を避難させてから、たった一人で消えてなくなる。そんな死に方をするのが、篠ノ之束なのか？ という疑問だ。

アリサは首肯した。心の底から同意した。そんな、新聞の一面に美談兼悲劇として飾られるような真似を最後に死んじやうなんて、束らしくない。

いや、何より束自身がそれを許さないはずだ。絶対に。

「でも、そんなこと……自分の死に方、なんて……そう簡単に決められるものじゃないよ、多分。実験が失敗して、それで仕方なく、そうしたんじやないの？」

「それは違うな。奴は他人にもそうだが、なにより自分自身に対して妥協を許さなかった。納得の行かない発明品、つまり失敗作を作ったことはなかったし、自分の計画に対しても完璧主義だった。だから、仕方なく、で自分の結末を選ぶこともあるまい」

それは、何度も束の発明品により巻き起こされる騒動で迷惑を被っては、それに対して真正面から立ち向かっていた千冬だけが抱ける印象だと、アリサは思った。

自分の不安はおぼろげで、ここまで明快な言葉では表現できなかつたのだ。

束と付き合い始めた年月で言えば、アリサの方が先なのに、その認識については少しギャップがある。その原因は、なのはが魔法を使い始めてからの、短い戦いの日々にごそあるのだろう。

それを経験していない点において、アリサと同じくらいにしか束を知らないすずかは、けれども千冬という言葉に対して反論を捻り出す。

それは、少し丸くなり始めていた束を、好意的に見ていたはずからしい意見であった。

「でも、それなら……ああやって、わざわざ避難とか、そういうことをさせて、誰も犠牲にしないで……その、いっちゃったことは、束ちゃんの妥協じゃない気がするんだ。もし束ちゃんが妥協をしてるなら、それこそ誰かに丸投げするか、ヤケになつて皆を丸ごと消しちゃうとか……」

すずかの主張に、千冬は大きく首を縦に振った。

実際、説得力はあった。完璧主義の人間が一度妥協をしてしまったら、どうしようもない。

アリサも束ほどではないが、物事に妥協をしたくない性格だったので良く分かる。決心が一旦折れてしまうと、後はもう投げやりになつてしまうか、暴走してしまうしかないのだ。

だが千冬は、その意見を否定せずとも、また別の見方があるとして、こう語った。

「確かに、あの用意周到な死には、妥協の一片も見えなかった。だからこそ私は、あいつが死んではいないと考えているんだ」

「どういうこと？」

「あいつの死が、あいつの考えた通りの死だったとして。それであいつは何を得たというんだ？ 考えても見ろ。あいつが何かをする時は、必ず何かの得があった。ただの人情で動くような女じゃないからな。PT事件の時も、私となのは、それからプレシアまでダシに使つて魔法の理論と『白式』の稼働データを手に入れた。ジュエルシードに関しては、管理局に全て引き渡したようだが」

ここまで聞いて、アリサは束が、根っからの功利主義者であることに気づいた。学校で先生に何かを頼まれた時も「それで私に何かメリットがあるのかな？」と言い出すくらいだ。見るとすずかも気づいたようで、しきりに細かく頷いている。

「だから、あいつはあの事件で、自分が闇の書ごと消えてしまうと知つていても、それで何かを得られるのなら喜んで消滅してしまおうと、そう考えたに違いないんだ。さもなければ、あんなお粗末な顛末を

黙って受け入れるはずがない」

「ちよつと待ってよ。それでアンタの言うように、束が何かを手に入れたとするわ。だけどそれで自分が消えちゃったら何にもならないじゃない！」

「それには二通りの解釈が考えられるな。一つは、自分はそれで満足しているのだから、例え死んでも文句はないし後悔もないと、そう考えて消えて行ったという解釈。私には分からないし、恐らく二人にも理解できないだろう感覚だが、そこはあいつの考える事だ」

千冬はそう言つて首を傾げたが、アリサにはほんの少しだけ理解できた。「この一生に悔いなし」とか言いながら死んでいく、TVドラマの登場人物みたいなものだ。同じように考えることこそ無理な話だが、心のメカニズムとして一応の了解は出来る。

だが、次に千冬が言い出したもう一つの考え方が、アリサにとつてはより納得できて、しかも恐ろしい理論だった。

「もう一つ考えられるのは、あいつが得られるものが余りにも規格外の代物だったこと。なにせ自分の消滅と引き換えに手に入れるものだ。生半可な宝では納得するまい。それこそ……例え消滅した所で、また蘇ることが出来るような……そういうもの、だったりするんじゃないか」

「……!!」

聞いている二人が、思わず顔を見合わせ息を呑む。

一度死んで、蘇る？ そんなことが出来るはずはない。

けれど——相手は篠ノ之束なのだ。

二人の目の前で何度も奇妙奇天烈な現象を見せる、化物地味な天才のことだ。一度死んでまた生き返るなんてゾンビのような、あるいは神様のような真似が出来ないと——決めつけることなんて、出来やしなかった。

「もし、あいつが蘇ったとして、果たしてこれからどんなことをしでかすのか……それは、私には検討もつかん。またいつもの様に私たちと馬鹿騒ぎをするのか、それとももつと大きなことをしでかすのか。だから私は疑う。あいつの生を信じるのではなく、あいつの死を疑うん

だ。それがほんの僅かな可能性だったとしても。誰が信じまいと、私だけは……な」

どうして、と問うことはしなかった。アリサはもう、分かっていたから。

千冬は東が死んだその日も、剣の稽古を欠かさなかったそうだ。それどころか、ここ最近は段々と鍛え方を激しくしていき、ひたすらに特訓を続けているとも聞いている。

それは即ち——東と戦う為の、前準備。

東が万に一つの可能性で蘇り、更に万が一、悪人と化して世界を脅かす悪人となった時。立ち上がり、敢然と挑戦し戦う為の。

それは、普通に考えれば「ありえない」ことだ。だが千冬は何度指摘されようが否定されようが、訓練を止めることはしないだろう。

いつか、アリサがゲームで東に完敗された時、めげずにコントローラーを握って再挑戦した時のように。

千冬はただ、篠ノ之束てんさいに挑むのだ。億に一つの可能性が現実となった時、その威圧と、圧倒的な力に屈しないために。

それが何故か、と聞かれれば——答えるまでもないだろう。

今尚自分の飼い犬と戯れているのはへ、何よりも温かい視線を向けている千冬を見て、アリサにはそれがとても尊い物に見えた。

「とはいえだ。あいつの姿が見えないからにはどうしようもない。取り敢えずは鍛えながら、のんびり待たなきゃな……それにしても」

「なんか、不安なことでもあるの？」

「いやな。実は最近まで管理局とは……クロノ執務官とは密に連絡を取りあっていったんだ。フェイトの裁判のこともあるしな。それが最近、ぷつりと途切れていてな。向こうもかなり忙しいんだろうが、もしかすると何かあったのか……ん？」

そこまで言った所で、一体何に気づいたのか、千冬は立ち上がって何処かへと走り出した。それが余りにも急だったので、思わず置いてけぼりにされてしまったアリサとすずかだが、すぐに慌てて追いかけて行く。

バニングス邸の庭に残っているのは、一人犬と遊び続けるのはだ

けになってしまった。

千冬が足を止めたのは、アリサの部屋だった。邸宅に入っただ度四人が集めたそこには、彼女たちが日々通学に使っているバッグがそのまま置いてある。

二十秒ほど遅れて辿り着いたアリサとすずかの前で、千冬は自分のバッグから、折りたたみ式の携帯電話を取り出し、その液晶に映されている画面を見せつける。

ミュート設定のまま、僅かな振動音のみを響かせている携帯の着信画面には、「時空管理局」という五文字があった。

幕間の終わり（Ⅱ）

『——以上が、ちょうど二日前に起こった事件の全容だ』

通話の音声を最大まで引き上げて、正座をしながら聞き入っていた千冬たち三人に告げられたのは、彼らの予想を遥かに超える大事件の顛末だった。

本局が解体される？ フェイト・テスタロッサのデバイス、バルディッシュが無力化された？ そして、次元航行船アースラが奪われた？

それはアリサとすずかからすれば、自分たちの常識を遥かに超えて展開される、まるで出来の悪いSF漫画のような嘘臭い報告だ。

しかし、彼らよりは次元世界というものへの常識に堪能である千冬からすれば、天と地がひっくり返ったような大騒ぎであることはある程度推測出来た。

「……どういふこと？」

「分かりやすく言うのだな。こちらの世界だと警察と軍隊と、それから裁判所を兼ねた超巨大な組織の本部が束に襲われた。それで、今は完全に無力化され、その大部分が身動きの取れない状態になっている……と、そういう解釈でいいのか執務官？」

『……大まかに言えばな』

千冬の噛み砕いた解釈が現職執務官のお墨付きを貰えば、二人にもようやく事態の重大さが伝わったようだ。顔を見合わせて、絶句したまま不安を互いに伝播している。

『それと、一つ見て欲しい画像があるんだ。そちらの機第三世代携帯電話器で上手く受信できるかどうか分からないが、取り敢えず送ってみる』

すると、一旦通話が切れて。その代わりにメールの着信が来た。千冬が操作してそれを開くと、中に入っていたのは一枚の画像ファイルである。

両隣の二人も興味津々で猫の額ほどの画面を覗きこむ中、ロードが終わって現れたのは。

赤いドレスと帽子を着た幼い少女と、筋骨隆々、しかし犬耳が生え

ている褐色肌の成人男性に挟まれた——大人の篠ノ之束、であった。

「……え、何よ、これ……」

「これ……束ちゃん？」

アリサもすずかも呆気にとられる。束はつい三ヶ月前まで、自分たちと全く同じ年で、同じ背丈で、同じ学年だったはずなのに。どうして——大人になってしまっているのだろうか。

戸惑う二人の頭の中には、数々の突拍子のない考えが現れては消えていくようだった。魔法で大きくなったのか？ それとも、普通の女性が生が頭のウサミミで束に操られて、影武者にでもさせられているのか——。

「……間違いない、束だ」

「えっ!？」

しかし、彼女に誰よりも敵対心を抱いていた千冬の判断は素早く単純であった。

「私には分かる。写真越しでもな。この女は篠ノ之束だ、間違いない」
「で、でもさ。いくらなんでも変わりすぎじゃないの!? 容姿とかそんなん以前に!」

「そうかな? あんな目を……残酷さと愉悦に満ち溢れた目をしている人間が、束以外に居るとは思えん。それにこれは昔、なのはから聞いた話なんだが……」

それから千冬は、三年前の、なのはと束が出会った当時のエピソードを話し始めた。

当時小学一年生であった束は、当然のように制服規定など無視して登校していた。何回注意されても懲りずに、終いには制服から例のドレス姿に変形する服を作って来る始末で、教師たちも、これはもうお手上げ、と放置していた。

しかしその時、束が着ていたのはあの、一人『不思議の国のアリス』状態の服装だけでは無かった。時には一人『ヘンゼルとグレーテル』になっていたし、一人『ブレーメンの音楽隊』の時も会った。どちらにしる意味不明な格好であったことは言うまでもないが、とにかくその時の束の服装には、三人の知る束よりも多様性があったのだ。

それがいつの間にか一人『不思議の国のアリス』に統一された原因。それはただ一つ。なのはが「その服、一番かわいいね」と言ったからだ。だから束の服装は、アリスと白ウサギの同居したミスマツチ極まりないものに固定されてしまっていた。

「……だからな。あいつはあの服装をとても気に入っていたし、それを他の人間が真似することを許さない。なのはがかわいいと言ってくれた服は、自分だけのものにしたいたいという理屈だ」

「だとしたら、青いドレスにウサミミを着ているあの女の人は、束以外にあり得ないってこと？」

「そうだ」

アリスの言葉に千冬は強く頷いた。

それと同時にもう一度着信が掛かって来たので、三人は再びクロノとの通話に移る。

『画像は見てくれたか？』

「ああ、驚きだったよ。それで？ あいつは今、何処にいるんだ？ 何処を指している？」

矢継ぎ早に話を進めていく千冬。

彼女がクロノから引き出そうとしている事実——束の所在と目的地については、予め検討は付いていた。このタイミングで自分に電話をしてきたことと、束がアースラを強奪したこと。それらを鑑みてみれば、簡単に弾き出される結論である。

『……』

「どうした、早く言ってくれ」

だから、クロノが言い淀む、その心情も痛いほど理解できたが。

千冬は確信が欲しかった。

クロノという信頼できる人間に、きっぱりと断言して欲しかったのだ。

『目的地は……地球、だ』

「なっ、そんな!？」

「嘘……」

クロノの重い言葉が、スピーカーを通してそれぞれの耳目に響き渡

ると、二人は揃って血の引いた青い顔になった。

異世界の、しかも地球より遥かに進んだ科学技術や魔法という異能が常識的になってきている世界の最大勢力。その本陣を崩した犯罪者が、この地球にやってくるというのだ。

何が目的なのだろう。どんなに恐ろしいことを考えているのだろうか。

色々な考えが彼女たちの脳内をよぎるが、その根底にあるものは二つ。

未知への恐怖と、そして邪悪への警戒心。

二人にとっての篠ノ之束という存在の捉え方は、この僅かな間に大きく——その外見が子供から大人になったことより、遥かに大きく——変質していた。

いや、そもそも別人のように見えたとして、仕方がないのだ。

色々迷惑だけど、時折痛快な発明をして、世を騒がせる同年代の友人が、大規模なテロをやつてのけ、異世界を震撼させているという犯罪者と同一人物なのだと言われても。

「やはり、か」

『分かっていたのか、千冬？』

「いやな。お前たちの本局とやらを無力化するだけでは終わらんだろうというとき。あいつはお前たちを襲撃することでアースラという足を得た。そして、目障りなお前たちも身動きがとれない。となると何処へ出向くのか……何を目的に動くのか。その中でも私たちにとって、一番都合の悪い可能性を考えた。それだけだ」

千冬が言うように、今の地球に束が来て——恐らくは地球上で束に取って最も価値ある物である、なのはを目的として狙う——というのは非常に危険な、というより絶望的な状況だった。

まず、千冬は身体能力こそ常人離れしているものの、それだけで幾多の局員を手玉に取ったというヴォルケンリッター、そして未確認ながら強い実力を持っているという『マテリアル』の合わせて六人を相手取ることなど出来ない。

クロノ・フェイト・アルフの三人組を僅か十秒で戦闘不能にした束

本人を直接狙おうとしても、これは明らかに分の悪い賭けだ。
さらには。

『……まさか、なのははまだ、良くなっていないのか?』

「ああ、残念ながら。レイジングハートもお手上げだそうだ」

クロノが静かに、振るえる声で問いかけ、千冬が沈痛な顔で応答したように。

現時点で束のターゲット足りえる海鳴市の人間の中でも、最大戦力である高町なのはは——現在、リンカーコアを発現させることが出来ない。つまり、魔法を使えないのだ。

診断した管理局の医療スタッフが出した結論は、『精神的ショックによる一時的なリンカーコアの休眠』であった。理論上の証明はされていないのだが、リンカーコアの出力は保有者の感情によって上下するという通説がある。

なのはの場合、束の死という余りにも大きな衝撃を受けた結果、多少の出力低下では収まらずに機能そのものが停止してしまった、というのが彼らの見解だ。

「まあ、例え魔法を使えたとしても、なのはは束とは絶対に戦わないだろう。きつと『何か理由がある』と言って、話し合いを求めるはずだ。しかし……」

『今の篠ノ之束に、対話を求めるのは極めて危険だ』

「ああ、そうだ」

それは、クロノと千冬が共通して持つ見解だった。

もしかすると、とは考えなくもない。束の一番の友人であり、束が一番信頼し、心の奥底までも打ち明けられる間柄であるなのはならば、束の蛮行を止めることが出来るかもしれないという見方は、希望的観測だが確かに存在する。あの二人の友情は、側から見つめる他人にだって、それほどまでに固く見えるものだった。

だが。もしそれが成らなかった場合、なのはは危険に晒されると見ている。例え束がそうせずとも、彼女の側にいる騎士たちは、彼女を脅かす者に対して容赦をしないだろう。

しかも今、なのはは魔法を使えない。ならば尚更、そんな危険には

晒せない。

「だからなのは束に接触させはしないとして。魔法が使えるのなら、転移か何かで別の世界に逃がすのが最善だろうが……」

『……それが、無理なのか』

三人はスピーカー越しに、クロノの深い溜息を聞いた。恐らくアテにしていたのだろう。

「えーと、そっちから迎えを寄越して、それで逃げるとか……出来ないわけ？」

『出来たらとつくにやっている！……やっているんだ』

恐る恐るアリサが尋ねるが、クロノはぶっきらぼうな返答でそれを否定した。だが、迫り来る危機に何も出来ない無力感からか、口調は尻すぼみで弱々しくなっていく。

「管理外世界の一市民の避難に手を回すほど余力が無い、と、そういうことだな？」

『……そうだ。すまないが、地球に増援は送れない。こちらは事態の收拾と復旧で手一杯なんだ。遠方を巡航しているパトロール部隊もかき集めて、全力で取り掛かっているんだが……動けるようになるのは一週間ぐらい後だろう……っ』

無念さに満ちているクロノの表情は多分、苦虫を数匹纏めて噛み潰したような険しい物であるだろうと、千冬は想像した。

執務官である彼のことだ。受話器の前に助けが必要な人がいて、それを助けられないことに忸怩たる思いを抱いているのは当然なのだから。

「束が^{地球}ここに到着するまではっ」

『アースラの最大巡航速度で計算すると……本局からは四日間の行程になるな』

「そっか……って、明日じゃない！ どうして今まで知らせてくれなかったの!？」

余りの時間的猶予の無さに、アリサは絶叫する。彼女としては、自分や自分の家のコネを最大限に使って、なのはを海外にでも逃がしてあげるつもりだった。

だが、一日だけしか余裕がないならそうもいかない。

——最も、次元を駆ける船を持つ相手に、外国への逃亡がどれくらい有効なのかは疑問だが。

「ちよつとアリサちゃん！ 声、声！」

「あつ……」

すずかに指摘されて、アリサは慌てて口を閉じた。暫くの間耳を澄ませるが、階段を駆け上がる音は聞こえてこない。どうやらなのはには気づかれていないようだ。

二人、ほつと息を吐く。電話越しに千冬と、管理局の執務官が話し合っていることが本当なら、今の会話や束のことをなのはに知られる訳にはいかないと分かっていたからだ。

『……君たちにも、謝りたい。本当は真つ先に知らせたかったんだが、その暇も無くてな……』

「そう申し訳なきような声を出すな。あいつのしでかした事の後始末だ。それくらいは仕方のないことさ」

ますます痛ましくなる電話からの声へ、気にするなど言いたくて、冗談めいたことを語る千冬。

しかしその表情には笑いの一分子も存在しない。たった一日。そう、一日しかないのだ。その間に自分と、アリサとすずかと、それからその親達を含めても、一体何が出来るだろう。

何も出来ない。なのはを出来るだけ遠い場所へ隠した所で、束はすぐに見つけるだろう。どれだけ守った所で、騎士六人と、束一人に太刀打ちも出来ず排除されてしまう。

自分たちに出来ることは何もない。そう思うと、例えば冗談を言っている時でも、笑うことなんて出来やしないのだ。

『こちらからは以上だ。リンディ提督も上層部に掛けあってくれているが……余り期待しないでいて欲しい』

「そうか……分かった、クロノ」

とにかく、一刻も早く事態を関係者に伝え、対策を講じなければならぬ。

千冬が通話を終了し、なのはに気づかれない内に電話で自分の家族

や篠ノ之家に連絡を取ろうとした、その瞬間。

『……待って、二人共!』

割り込んで来たのは、クロノとは全く違う声。それは、まるで全力疾走の直後のように疲れ果てていて、そして張り詰めていた。

千冬としか交友のないクロノのそれと違い、この声には全員、聞き覚えがあった。

そう、確か、春から夏に季節が変わりゆく頃。束が「私の助手」としてアリサとすずかに紹介した、金髪で優しげな目をした少年――。

「ユーノ!」

「ユーノくん……!?!」

三ヶ月前の事件の後、篠ノ之家を辞してミッドチルダに戻ったユーノ・スクライアの声だった。

『ユーノ!?! お前、急に割り込んで……』

『アリサとすずかもいるんだ。なのはは……居ないみたいだね。ちやうどいい』

一瞬、クロノの驚く声が入り混じり、ザザツという雑音の後にユーノが続ける。どうやら、クロノが千冬の電話に繋げた通信回路を利用してしているようだった。

これが管理局の通信機器や通信魔法ならば、二人の顔が映像として現れるはずだ。しかし、千冬の媒体では、無理矢理割って入ったようにも聞える。

『出来たよ、千冬』

その一言で、千冬は全てを諒解した。

今まで固く一文字に結ばれていた口が、溶けるように開き、そこから出るのは喜びの声だった。

「そうか、ユーノ……やってくれたか!」

『うん。とても完成しているとはいえないけど、一応動かせるようにはなったんだ』

「それだけで十分だ! ここに持っていけるか!?!」

『今から一緒に行くつもりさ。僕は管理局員じゃないから、本局の修復に駆り出される理由もない。転送ポートの確保が問題だけ……』

リンディ提督が話をつけてくれるみたいだ』

一気に盛り上がる二人が何を話しているのか、アリサにもさすがにも皆目検討がつかないようだった。あり得てはいけないことだが、もしこの会話をなのは聞いていれば、ユーノの努力と奮闘を理解してくれるだろう。

『ち、ちよつと待て！ 無茶だ！ アレはまだ実用段階ではないし、お前自身も——』

慌てて割り込んでくるクロノも、二人の話を理解しているようだったが、その声は何故か慌てふためいて、ユーノを必死に止めようとしていた。

だが、ユーノはそんな引き止めなど気にもせず、こう言っただけのける。『問題ないよ。大体、なのはのピンチなんだから、僕だけでも行かないきゃ』

『……だが！』

『ワーカーホリックが何言ってるの。全然説得力無いよ？』

『っ、お前な……！』

煙に巻くような言葉で半ばからかいながら、クロノの静止を無視するその口調に、千冬はどこと無く既視感を感じていた。

——はて、教授と助手、果たして似るもののだろうか。

『まあ、大丈夫だよ、クロノ。千冬が頑張るのに、僕一人だけ休んじやいられない』

『……』

『僕は地球に行くよ。クロノと、それからフェイトたちの代わりとしてね。そして——』

とにかく、千冬のただ一人の男の友人は。

あの時の束と同じように——千冬が長い間待ち望んでいた、最強の切り札を用意してくれた。

『千冬。君の「剣」を、白式しろしきを届けるよ』

幕間の終わり（Ⅲ）

海鳴市は自然豊かで、風光明媚な土地だ。平野部は地方都市の一つとして数えていくらしいのビル街と住宅街で埋め尽くされているが、少し坂を登れば鬱蒼と茂る森林が広がっている。

そんな森の奥深く。近くに道路も遊歩道もない、小冒険に出ている子供さえ居なければ、人目につくこともないような場所に、白色のぼんやりとした光が灯る。柔らかい土の上に広がるそれは、三角形に広がっていき、そして五つの人型を映し出す。

数秒の間影法師のように漂ったそれらは、やがてはつきりとした輪郭を纏い、それぞれ特徴的な像に凝着した。妙齢に少し届かない女性が二人、少女と言うには幼すぎる子供が一人、精悍な大男が一匹。

そして彼ら四人の中心には、森の只中によく似合うメルヘン地味な青いドレスを着て、機械仕掛けのウサミミを頭にくっつけている——篠ノ之束。

夜天の主従は、本局から地球への移動を管理局の予想よりも一日早い三日間で実現させていた。

そのからくりは簡単だ。本局からアースラを奪った束は、管理局の探知範囲外まで逃げおおせた後、ヴォルケンリッターのみを連れてアースラを離脱。艦内保全是残りの二人、マテリアルのシユテルとレヴィに任せて、彼らが向かったのはとある地方世界にある、管理局が保有している転送魔法の中継局だった。

一般的に、個人が行う転送魔法で移動できる距離は限られている。次元世界を複数またぐ転送を行えば、魔力の消費も術者の負担も莫大なものになるからだ。そこで、座標計算や魔力消費を抑えるための設備を供えた転送ポートが開発され、各世界の次元港に併設された。それなりのスキルと魔力持っていて、なおかつ大人数でない旅人は、ポートを乗り継げば次元航行よりも遥かに早く目的地へ到着できるのだ。

これを使えば、本局から海鳴まで三日どころか、無理をすれば数時間ですり着ける。本局の統制がある程度復旧し、束たちへ何らかの対

処が為されるまでの時間は決して短くなく、だから東はあえて、手に入れたばかりのアースラを乗り捨て、場末の次元港を急襲した。

東お得意のハッキングによるシステム乗っ取りと、ヴォルケンリッターによる速やかな占拠と武装解除によって、数十人しかいない港を秘密裏に占拠することは容易極まることだった。早速ポートを使い、地球にかなり近い次元世界へ転移して、後はシャマルによる転送魔法により海鳴の森へと降り立つ。

こうして東は、懐かしの海鳴の地への帰還を果たしたのだった。

「んうー、いいねえ。忘れがたき故郷、もう何百年も来てなかったような気がするよ」

仮にも敵地である、と考えて、デバイスを油断なく構えて主の四方に散らばるヴォルケンリッターに比べ、東はピクニックに来ているような浮かれ様だった。だが、騎士たちがそれに釘を差したり、懸念を露わにすることはない。

それが彼らの主なりの平常であり、ともすれば外向きの欺瞞とも言える態度であると解釈していたからだ。この、一見何も考えていないような脳天気さと底抜けの陽気さを振りまく主が隠し持つ実力を、四人全員が理解していた。

だから、彼らは主の身に何の心配もしていない。彼らが気を張り詰めているのは、敵を察知し奇襲を防ぐための周辺警戒をしているから。それだけだ。

それだけで——あるはずだ。

『……どうした、ヴィータ』

『あんだよシグナム。気は緩めちやいねーって』

だがシグナムは、主の右方を守る同胞の顔に警戒以外の何かを見て取った。

『そうではない……お前、何かあったのか？』

『何かってなんだよ。あんまりはつきりしねーこと、言わねえでくれよな』

『すまない。だがお前が……少し、思いつめた顔をしていたように見えてな』

念話で話しかけると、ヴィータから発される魔力の念波に少しノイズが走る。それから少し経って、迷い迷いの返答が返ってきた。

『なんだかさ……こう、引つかかるんだよ。デジャヴ、っていうの?』
『既視感か? 我らがここに来るのは今日が初めてのはずだが』

束に仕える以前、ヴォルケンリッターは数々の世界を巡って戦い魔力を蒐集し、時には破壊と殺戮を行ってきた。その日々の記憶は、彼らの脳裏に刻み込まれている。

何も今まで訪れた全ての世界を覚えていた訳ではない。だがそれでも、地球ほど魔法文明の欠片もない世界で活動したことはないと言できる。彼らは主を護り魔力を蒐集するための存在であり、その為には魔法がある世界に居なければならぬからだ。

だから、こんな世界に既視感を感じることはない——ヴィータも心の中ではそう考えているようだが、それでも戸惑いを捨てきれないようだった。

『いやさ……凄く近いんだよ。近い。何に近いかって——と、えーと、その……ああーっ!』

『ちよつと、どうしたのヴィータちゃん?』

『ああ、ごめんなシャマル。でも、イラつくんだ……思い出せそうで、思い出せなくて』

感情を揺り動かしながらの念波は、時に意図せぬ方向へと飛び跳ねる。それを偶然拾ったシャマルが驚けば、罰の悪い感じの音が響く。

ザフィーラは無言のままだが、内心きつと心配しているだろう。そういう男だ。

シグナムも内心、気にかかると言えば気にかかる。一見子供らしく——例えばマテリアルのレヴィのように——深い悩みとは無縁に見えるヴィータだが、その実中々に悩みを胸の中に貯めこむ性格をしている。それが見た目に似合わぬ思慮深さと繋がるのだから、背中を預ける同胞としてはただ幼いことより歓迎すべきであるのだが。

だからと言って、務めを果す最中に余計な思考を走らせ、不覚を取って欲しくはない。その懸念を念波に乗せようとしたシグナムより先に、口を開いた者が居た。

「んふふ、それは面白そうだね」

周りの一同、度肝を抜かれて振り向く。四人とともに歩いていた束が、聞こえるはずのない念話をさも聞いていたかのような笑い声を出したからだ。

「あ、主……聞いていらつしやったのですか!？」

「ううん、違うよ？ 私は「まだ」魔法もなにも使えないからね。でもさ、なんだか皆が渋い顔をしているのを見て、何話してるのかなあつて……ちよつと頭を使えば、ヴィーちゃんの不思議なデジャヴなんじゃないかって分かってさ」

本人の言葉から分かる通り、束から見える情報は四人の表情と雰囲気だけである。しかも四人とも騎士であるのだから、主にわざわざ不穏な内面を見せようとはしない。

だのに束は理解した。ヴィータの心が感じたたちよつとした違和感までも。

それは、彼らの深奥までもを読み取れてしまうということ。

「あ、どうしてだつて思ってるね？ 簡単なことだよ。君たちに関するデータは全部私の頭の中に R e m e m b e r されてるんだから、そこからこの時この場所でどんな反応をするかを予測して……そこから君たちの思考法と性格をエミュって、一番可能性の高いものを取捨選択すればそれで万事 O K ! 　まるわかりなんだよねえ」

なおも続く束の独白を聞きながら、四体の騎士の臓腑を抉ったのは畏敬の念でなく、もしかしたら底知れぬ恐怖なのかもしれない。

「……流石です、主」

時空管理局本局への急襲が成功した真の理由を、騎士たちは理解した。主は全てを読んでいたので。本局にいる全ての人員が、どういう事態にどう動くかと計算し、最も効果的な——それこそ奇跡的と言うべき——タイミングで、解体を仕掛ける。その後の混乱も全て想定し、6つの手駒を適切な場所に配置して、目的の情報を僅かな時間で確保する。

あの巨大な城塞に、人間は何万人居ただろうか。更に彼らの使い魔やインテリジェントデバイス、そして本局外の動きも含めれば、演算

の項数は途方も無く莫大なものになるだろう。

だが、主はきつと、全てを計算してのけたのだ。今こうして、口にも出さない四人の騎士の念話の内容を当ててのけたのと同じように。そうでなければ古代ベルカの一国をも上回る戦力を保有している要塞に侵入して、無傷で帰還できるどころか行き掛けの駄賃で船を一隻奪うなど、到底あり得ないことだ。

「ふふん、もつと褒めていいよ、東さんの深慮遠謀、君たちの尺度じゃ計り知れない頭脳を褒め称えるがいいさ」

ベルカには、『道化の演台は掌の上』という諺がある。主人に仕える道化は、いくら踊り狂い自らを主張しようとも、主人の機嫌一つでその運命を決められる。まるで掌の上にあるように、更に踊るよう揺らされ急かされるか、それともあつけなく握り潰されるしかない、という意味だ。

自分たちが道化であるとシグナムは思わない。しかし、遙か上に居る者の目線から自分たちがどう見えるかを考えると、そこはかたない寒気を覚えるのもまた事実だった。

「……失礼ですが、お聞き致します」

「を、なにかな？ 今の私は久しぶりの帰郷で機嫌がいいから、色々答えてあげちゃうよ？」

無言で主の言葉を聞き続ける中、不意に口を開いたのはザフィーラだ。これもまた、ヴィータの戸惑いと同じくらいに唐突なことだとシグナムは驚く。

彼もまた、先ほど証明された主の底知れぬ實力に、心を揺るがされたようだ。

「主はこの先、何が起るとお考えでしょうか。つまり、この地球で主が目している事柄を果すとして、何が」

「障害になるか。もしかして敵がいるなら、一体誰か、つてことだね？」

「……」賢察、恐れいります」

言葉尻を取って先んじた束に、ザフィーラは頭を垂れる。

ますます気を良くした様子でくすくす笑った束は、一人の少女の名

前を、ここで初めて騎士たちに告げた。

「……今回、もしも敵と言えるくらいに厄介なのがあるなら——」

東は笑う。ただただ笑う。

きつと自分の目の前に現れて、剣を向けてくれる女の子の名を、久方ぶりに想起して。

「それは、ちーちゃん、になるかな」

ユーノ・スクライアが転移したのは、バニングス邸から少し遠くに離れた自然公園の一角だった。指定された転移座標に行ったのは千冬だけである。アリスとすずかには、万が一なのはが戦いに巻き込まれないよう、バニングス邸にじつと留めておくのと、もしもの場合、なのはを遠くへ逃がすという役割があった。

翠色の光が送ってきたのは、少年だけでなくもう一つ、黒く大きな直方体であった。はつきりと像を結んでいくのを見れば、まるで巨大な鋼鉄の棺桶に見えてくる。

それより後に転移し終わった少年の目を、千冬は見る。少年も、千冬の目を見る。それだけで、数月ぶりの再会の余韻は消え去った。

「じゃあ千冬。早速だけど着てもらおうよ。僕の直した『白式』を」

「早速？ まだ一日間があるんじゃないのか？」

「それなんだけど、ここに来る途中で聞いたんだ。管理局が保有している小規模の次元港が、数十分の間占拠されていたって。犯人は港に居た全員を拘束して、他の港には偽装データで隠し通して……あつという間に転送ポートで去っていったんだよ」

「なるほど……」

千冬は聞いただけで、その下手人が誰か、そして今この海鳴に侵入している者が誰かを理解した。そして、自分の知る限り最大級の悪人

が、またもや管理局の裏をかき、自らの思い通りに事を進めたのだとも認識した。

だが、ここまでだ。これ以上好きにはさせない。そのために、千冬は己の身体をひたすらに鍛え続け。ユーノは束の残した『IS』を修復し続けていたのだから。

「じゃあ、開けるよ」

ユーノがそう語ると同時に、黒い箱が開かれる。二人の子供より遙かに高く大きなその箱の中から、彼らの切り札が姿を表した。

鎧立てに飾られた鎧のように、全身のパーツが固定されている。何時か千冬が両手につけた白い腕輪のような待機形態ではなく、ワードスーツとして展開されたままの『白式』だ。

「これ、が……」

「そう。僕と、それから管理局の技術部の人たちも手伝ってくれた。名づけて『白式式型』ってところかな」

その外観は、元の『白式』とは大きく異なっていた。全身真白の装甲が、所々灰色に変わっている。それはまるで破けた布を継ぎ接ぎして、強引に纏めているような印象を与える。

箱の中の長細いロボットアームが鎧を動かし、その胸元が取り外される。そこには丸一人、幼い少女が入るだけのスペースがあった。迷わず、千冬はそこに入り込んだ。それもゆつくりと背中から乗り込むのではなく、ソファに後ろから飛び込むような身の投げ出し方で。

「もう、ちよつとは僕の話聞いてよ」

「すぐそこまで来ているんだろう？ 長話をしている余裕は無いはずだ」

彼らの顔は強張り、無形の緊張感が漂っている。だが、二人共奇妙に落ち着いていた。

来るべき時が来たのだ。三ヶ月前、いや、それ以上前から、千冬はこうなることを予想していたし、ユーノだって心の片隅でそれを考えていた。

そして、もしそうになったら自分たちが真っ先に止めなければならな

いとも、考えていた。

黒い箱に入った千冬へ、白式がセットされる。腕に、足に、開いた鎧が機械の腕であてがわれ、そしてがちりと閉じられていく。右手、左手、右足、左足。それぞれの感覚が生身から金属のものへと移り変わっていく度に、千冬が感じるのは強い違和感だった。

「どうかな？」

「……重いな。前に着た時は、生身で居る時と何も変わりはないが……これは、重い」

やはり、半年前のあの『白式』とは違うのだ。あれはあつという間に千冬を包み込んで、まるで自身の本当の身体のように馴染み、だからこそ縦横無尽に暴れ回れた。

それがどうだろう、この白と灰の入り乱れた装甲は、やはり装甲以外の何物でなく感じられる。一体感が感じられず、鎧と自分との結びつきにも互いに溶け合うようなものでなく、縫い糸で無理やり貼り付けられているような強引さすら覚えるのだ。

それが、ユーノ・スクライアの限界だった。東という天才の側にいて、多少はその技術に触れた彼であっても、天才が誇る最高傑作を完全に修復し運用することは不可能だった。

「ごめん、千冬」

「いいや」

謝るユーノに、千冬は気にするなと軽く言い返す。

元から、完全な復元など期待してはいない。ユーノの実力を侮辱するつもりはないが、それ程までにあの『白式』が完璧すぎて、芸術品と見まごうほどに完成度が高かった。

一歩歩み、鋼鉄の箱から抜け出す、それだけでかなりの力を使った。フルマラソンを軽々こなせる体力の持ち主が、である。元の躯体にあったパワーアジャスト機能は、その大半が無効化されていると見ていいだろう。これではパワードスーツではなく、ただの重い鎧ではない。

力のいることだ、とこれからの骨折りを予想し内心でため息を付いたが、それでも、これくらいなら千冬自身の力で乗りこなせる。

千冬がこの、不完全なISに期待しているのはただ二つ。それが行えるのであれば、どんなに不便でも、どんなに馴染まずとも問題は無い。

「……やるぞ『白式』」

千冬の静かな声に反応するように、背中にある両翼へと動力が伝達される。それまで折りたたみ閉じられていた大きな白い——しかし、これも所々に灰色の混じった——翼が広がり、そして千冬は、海鳴の大地から浮かび上がった。

そのまま、短く移動する。その速さと反応速度はあの時程ではないが、それでも千冬を満足させるには十分の機動性だった。

空が飛べる。

そして千冬は、予め右手に持たされていた剣を強く握り、あることを心の中で強く願った。

——私の手には剣あり。悪を断ち切り、大切なものを守る。私の剣は、そのためだけに——

そうして、千冬の握っている巨大な剣『雪片』に、青白いエネルギーの刃が纏われ、伸びていく。それを確認した千冬は、凡そ久しぶりにいつもの、戦いに臨む時に見られる、攻撃的な笑みを浮かべた。

「流石だよユーノ。ありがとう。本当にありがとう」

「千冬が戦うためには、どうしても必要なものだし、優先して整備したよ。最もそのせいで、今の白式は空が飛べて、零落白夜を使える『だけ』の重くて硬い鎧だけだ」

「十分だ……後は、私の力で切り開く」

庭園の敵を全て把握できた、高性能なレーダーは無い。

問題ない。目で見据えて、周囲の空気を読めば、それで敵を認識できる。

重すぎる鎧を身に着けながら、巨大な剣を振えるか。

それがどうした。私の筋力ならば、鎧を強引に引きずり、引っ張りながらも、剣を構えて振るう事が出来る。

なら、大丈夫だ。今求めているのは、私の翼ではなく、剣と力なのだから。

「敵は？」

そう聞いた千冬の側で、目を閉じて集中しながら探索魔法を使っていたユーノが答えた。

「……今、ここから程近い森の中に居るみたい。束だけじゃなくて、後四人いる。全員魔導師で、見たことのない術式を使ってるよ」

「例のヴォルケンリッターとかいう奴らか。問題ないな。その程度ならこいつでやれる。ユーノ、あいつらの行き先は？ ラボか、それともなのはか？」

「真つ直ぐアリサの家に向かつてる。つてことは……なのはだね」

篠ノ之束がこの町に来る時、考えられる目標は凡そ二つ。

一つは、過去の自分の研究成果と発明品が放置されているラボの最深部。もう一つは——彼女が大好きな、高町なのはの身柄であった。

「なら、奴に一歩も近づけさせせるものか。行くぞユーノ、フォローを頼む」

「分かつてるー！」

片や、闇の書の力を手にした天才と守護騎士が四人。片や、魔導師が一人と、不完全なパワードスーツが一体。

だが、彼女たちには勝算が——束をなのはに近づけさせないという自信が、確かにあった。

薄氷を踏むどころか、一本の細い糸の上でダンスを踊るが如き難しさだが、それでも彼らはただ挑む。恐らくは自分たちを、遥かに超えた高みに居座っているだろう天才に。

離れ離れになっていた三人の少年少女は、こうして今、敵味方に別れて戦うのだった。

「……………あ……………」

——だが、まだ一人。
劇の幕を開くには、後一人、足りない。

「たばね、ちゃん……？」

そして——(Ⅳ)

「ふんふんふーん、ふふーんふーん♪」

まだ紅葉の残る森の中、陽気な鼻歌を歌いながら、束は歩き続ける。いつも着ている青いドレスも相まって、童話に出て来る可憐な少女が、ピクニックに出掛けているようにも見えた。

ただ、その四方には——各々のデバイスを持ち、あるいは拳を握りしめ、警戒を厳にしている騎士がいた。

彼らの歴戦の経験が、戦いの近いことを何とはなしに彼らへ悟らせていたのだ。

その備えるべき敵は、魔導師でもなければ兵器を使う軍人でもない。ただ、彼らの主が自らの最高傑作と讃えているワードスーツを着た、幼い女だという。

どんな相手なのか、見当もつかない。彼らからすれば齡十にも満たない子供の相手など容易いことだが、主は——今スキップを踏みながら、鉄火場に赴くとは思えないほど余裕を見せている束が——彼らに強く忠告していた。

「ちーちゃんは強いよ？ まあ君たち四人なら負けることはないんだけど、余り油断しない方が良くと思うな。痛い目見るよ」

あの主が、そうまで言って注意を促す相手だ。年齢など関係なく厄介な相手なのだろう。

だからこそその、警戒である。

しかし——。

「ん、計算終わり」

目標が存在するという邸宅までの道半ばで、束は突然立ち止まった。そして、辺りを見回し確信に口元を吊り上げた後、尚も全方位に警戒をしているヴォルケンリッター達へこう告げた。

「上空からの自由落下。3. 64秒後。来るよヴィーちゃん」

「え、あ……ッ!?!」

背中から声をかけられて思わず背筋を痺れさせ、ドギマギするのが許されたのはほんの僅かな間だった。

聞こえてくる落下音。ぎよつとして上を見上げれば、白い刀を振り被った鎧がヴィータ目掛けてまっすぐ落ちてくるのが見えた。

「はあああああっ!!」

金属と金属が勢い良くぶつかる甲高い音。落下の衝撃で土煙が舞い散りよく見えないが、奇襲に対する鉄槌の防御は、間一髪で間に合ったようだった。

白い鎧が煙から飛び出し地面へ降り立つ。纏わりつく土を払うように鉄槌が振られて、幼い体躯の騎士も健在な姿を表した。ダメージは無いようだが、防御には魔力を消費したようだ。

シグナムはレヴァンティンを構え、敵の姿を見据えた。白と黒の入り乱れた、継ぎ接ぎでパッチワークのような鎧。だがその手にある大剣は、差し込む陽光を浴びて真っ白な輝きを見せている。

そしてなにより、その構え。どこから見ても素人ではない。ベルカの剣の流派には無い構えだが、微かに聞こえる息遣いからは隙の一つも見いだせなかった。

「防がれたか。折角の奇襲だったのだが」

「……あははは、上空から来るなんて。ユーノくんにつ張り上げてもらったの?」

「似たようなものさ。転送させてもらった。自力で高高度に登れないのでな」

そのまま、鎧の少女——織斑千冬と、束が話し出す。まるで、つい数時間前に別れて約束通りに再開した親友同士のように。

束の雰囲気は、歩いていた時と変わっていない。対して千冬はまるで鋭い剣のような、研ぎ澄まされた殺意を束に向けている。

だが二人共、それがまるで日常の一ページでしか無いように落ち着き払っていた。

「ふふん、そこまで劣化させてるんだね。頑張った方だとは思うけどさあ、なんだかちよつとムカつてきちやうな。この私の最高傑作、真っ白な白式が、くすんで汚れて泥だらけだ」

「黙れ。例え地を這い泥に塗れようとも、私とユーノがお前を倒す。なのはの元へは行かせない」

主と敵の間に立ち塞がった騎士達の耳に、聞こえてくるのは刃を成り散らすような言葉の応酬。見つめ合う四つの瞳にはブレ一つない。知っていたのだ。二人、何時かはこうなるのだと。

我道を突き進む天才と、同じく己の力で押し通る達人。それを束ねて結びつけるモノが、ここにはない。ならば、闘う他に道はないではないか。

「主！ ここは我らが！」

だが、二人静かに相撃つその前に、四人の騎士が立ち塞がった。千冬はその壁に邪魔だと言う視線を向けて剣を構え直したが、束は何も語らず、彼らの後ろでじつと止まっているだけだ。

それを了解のサインと受け取ったシグナムは、まず自分が一步前に出て、千冬と白式の眼前まで近づいた。まずシグナムが最初に当たり、他の三人はその出方を待つ。戦力によっては囲んで叩くという戦術だ。

ここでシグナムが打って出たのは、戦力的にヴォルケンリッターの中で最強であるからだけでなく、彼女自身が名うての剣士であり、同じく鍛えられているだろう千冬の剣を確かめたいという個人的な欲求もあった。

「剣士か……」

「ヴォルケンリッターが烈火の将、シグナム。貴様が何物であろうと、主には指一本触れさせん」

そう言いながら、シグナムは一步一步、千冬の間合いに近づく。動いてもぶれないその剣先をじつと見据えていた千冬の口端が、笑みに歪む。

シグナムにはそれが、主が事あるごとに見せるニヒルで酷薄な笑いによく似ているように感じられた。

「面白い。同じ得物を交えた相手といえば、それこそ師範と恭也兄くらいしか居なかった。それを思えば、剣の打ち合いはこれが初めて……だが、さっさと終わらせるぞ」

「抜かしたな。ベルカの騎士の剣、そう簡単に退くものではないぞ」「分かっているとも。だが……時間が無いのでなっ！」

先手を取ろうと踏み出したのは千冬の方だった。踏み込みというよりもはや突撃と言うべき速度で、両者の間合いは瞬く間にゼロへと縮まる。

シグナムはレヴァンティンを横に構え、上段からの唐竹割りを受け止める。

その腕に、尋常ではない痺れが響いた。なんと重く、激しい一撃か。少女の贅力ではとても成し得ない威力だ。だが、強く握られた闘剣、質実剛健なアームドデバイスは、鈍らならば折れてしまうほどのその一撃に耐え切れた。

ならば今度は、シグナムが反撃する手番だ。右腕を薙ぐように動かし、右、左斜め、そして上から下へと瞬く間に切り落とし——その全てを、あっけなく弾かれた。

「……………」

ベルカの剣士、それも数百年戦い続けた本物の戦士が放つ剣閃だ。どれも軽くはない。だが千冬の白剣は、そのどれもを童のチャンバラ遊びであるかのように弾き返した。シグナム自身も、まるで鉄板に剣を打ち込んでいるような感覚に襲われていた。しっかと剣を握りながらも、右手がじいんと痺れて、感覚が薄れてくるのだ。

先程の一撃と言い、この少女、並の力ではない。ヴィータが魔力を使つて、身体に似合わぬ凶悪な鉄槌を敵に叩きこむように。恐らくは身に纏ったパワードスーツが生み出すものだろうと、シグナムは頭の中で結論づけた。

このままでは、例えばどんなに力を籠めたとしても、少女の受けを弾く事は出来ないだろう。

ではどうすればいい。

簡単だ。ベルカの剣士は力押しだけではない。技を以って、力を揺らがし刃を走らせればいい。

「どうした。ベルカの剣というのはそんなものか？ 拍子抜けだぞ。そう簡単に退かないというのはただの脅しか？」

「……………これからだ。さあ、往くぞっ！」

言葉とともに刀を振るい、始まったのは神速の攻めだった。

シグナムの剣は、例えるならば瞬迅烈火。迷いなく相手の隙を突く的確さとその切れ味もさることながら、一度攻め始めた後は、相手の反撃を許さず切り伏せてしまう程の素早さがある。

次々と放たれる剣撃には、斬りだけでなく突き、薙ぎも混じり、手を読ませない巧妙さがある。だから、千冬はただ雪片を握り、攻めを防ぐことしか出来なかった。

このまま攻め続ければ、確実に勝てる。

永遠に攻撃を捌けるはずもない。必ず何処かに隙を見せる、そこを狙って、渾身の一撃を叩きこめば。堅牢に見える装甲を貫き、千冬に致命的なダメージを与えることも出来るはずだ。

それがシグナムの戦術で、二人の戦闘を眺める騎士たちの共通認識でもあった。

「おっしやあシグナム！ そのままやつちやえ！」

傍から見ていたヴィータがそう発破をかけてしまうくらい、シグナムの優勢は明らかだった。常に冷静かつ慎重な判断を下すシヤマルも、だからこそシグナムの勝利を確信したのかクラールヴィントを起動し、何やら捕縛の術式を編んでいた。この主ならば、自らの最高傑作をなるだけ傷つけずに確保しろと命令するのではないかという推察だ。

彼らの予想通り、甲高い金属音が森を揺らすのは、僅か数分の間だけだった。

何十回目かのシグナムの一撃、左斜め下から居合のように放たれた一薙ぎが、ついに千冬の防御を弾き飛ばしたのだ。

胴をがら空きにされた千冬は堪らず後ろに退こうとしたが、それを許すシグナムではない。これまでも何度か不利と見て後退しようとした所に、鋭い攻撃を続けて間合い稼ぎをさせずに追い詰めていたのだ。それを、今度は胴という急所に浴びせればいい。

そしてシグナムは、この一合でケリを点けようとした。

「——レヴァンティンツ！」

『Jawohl!』

レヴァンティンの刀身に、紫色の魔力の雷が走る。彼女が最も得意

としている攻撃魔法。剣に魔力を乗せて、バリアすら切り裂く強力な斬撃を放つのだ。

雷に炎が混じるのは、シグナムとレヴァンティンが持つ、魔力の炎熱変換による効果だ。これが装甲を溶かしそこから開いた傷口を炙り焼くのも、一撃必殺の大きな理由である。

弱体化している白式のバリアごと、その装甲を切り裂くだろう一撃の名は。

「紫電、一閃——」

何にも阻まれることのない刃が、無防備な胴体に深々と切り込まれる——

「——ッ!？」

その直前、シグナムの脳髓に稲妻が走る。プログラムである彼女の積み重ねた戦闘経験とそのフィードバックが、歴戦の勇士が感じる不思議な悪寒じみて、最大級の警告を彼女に伝えたのだ。

『Panzergeist』

無言のまま、魔力の波動によって主の意志を受け取ったレヴァンティンは、防御魔法を展開する。それも彼女の全身ではなく、自らの鞘という限られた空間に、出来る限りの魔力を費やし密度の高い防護を敷いた。

勢いのついた攻撃から、捻れるように一転して防御するために、シグナムはその鞘を左手に持つ。そして掲げた正面には、真上に弾かれたままの雪片が、再び振り下ろされようとしていた。

その刀身を包み込む、青色の光。それこそ、彼女の悪寒の正体だった。

青く光る白い刀と、紫の魔力を待とう白い鞘はぶつかり合い。

そして——鞘だけが、粉々に砕かれ霧消した。

「これは……!？」

「ちっ、避けられたか。勘の良い奴だ」

今度はシグナムが後ろに下がる番だった。右足で地面を蹴り、数メートル後退して他の騎士たちが待機している場所まで下がる。

シグナムに向けられた三人の視線は、驚愕に支配されていた。

「シグナム！ 今のつて……!?!」

「分らん。ただのバリアブレイクではないようだが……魔力が破られた感覚は無かった。ただ溶けていくような、そんな感覚だった……」

これがただの、魔力防御をたたつ斬る相打ち覚悟の一撃ならば、防御をすることはなかった。例えシグナムが倒れようとも、騎士は残り三人も居て、シグナム自身もいずれば夜天の書の力で復活できるのだから。彼らは不死の、魔力で構築されるプログラム体なのだから。

だが今の攻撃には。その前提を全て打ち破るような、恐ろしさすら感じられたのだ。

「ふ、ふふ、あはははは」

そんな騎士たちを見て、そして青白い光を見て、束はまた笑い出す。プログラムにあるはずのない、動物的な本能で恐怖を覚えているような自らの配下がおかしいから、そして——他の全てを投げ捨てても、その一点のみは完璧に再現してのけた助手の献身を評価しながらの笑いだった。

「やっぱり勝算はそれかあ……『零落白夜』。我ながら厄介な物を作っちゃったよ」

「感謝しているぞ。これのおかげで、お前のしもべを気にせずとも良くなつたんだからな」

それは、篠ノ之束が白式に搭載した単一仕様能力ワンオフ・アピリテイにして、千冬が初起動ですぐに覚醒させた特殊能力。

攻撃対象のエネルギー全てを消滅させる攻撃能力は、本来ならば相手のエネルギー兵器による攻撃の無力化と、敵のシールドエネルギーに直接ダメージを与えるためのものだった。

そう、エネルギー。ビームやレーザーだけでなく——魔力ですら、白式は消滅出来るのだ。

それは対魔導師戦において、絶対的とも言っていないアドバンテージになる。ほぼ全ての攻撃が無力化されるどころか、防ぐデバイスもバリアジャケットも熱いナイフをバターに押し付けるように溶かされ、生身に直接ダメージを受けてしまうのだから。

だが、更に——魔力によって身体を構成しているヴォルケンリツターにとつては、悪魔的とも言える程、有効な能力だ。

なにせ、防御も何も意味を成さず、僅かに切られただけで、修復不可能なダメージを受けてしまうのだ。血肉諸共、存在そのものが切り裂かれてこの世から消されてしまう。

彼らがどんなに勇敢で、傷つくことを恐れない戦士だとしても。感情も思考も、意志ですらプログラムされている物であろうが、その事実に、背筋の凍るような根源的恐怖を、味合わずには居られなかった。

「——シグナムッ！」

「ああ、分かっている！」

四人は一斉に自分の武器を構え、戦闘態勢に入り四方へ飛んだ。今度是一对一という悠長な真似はしない。四人で一斉に囲み、突っ込んで、圧倒するのだ。

まず最初に突っ込んだのはヴィータだ。魔力で生成した巨大な鉄球を、グラーフアイゼンで打ち出す。だがそれは、青い刃に触れた途端に硬さを失い、空気に溶けて消え去った。しかしその背後には、ザフィーラの鉄拳が振り翳されていた。

鋼の守護獣の鉄拳は、そのまま背部のアーマーを叩いて砕くかと思われたが。拳が鎧に触れる寸前、コマのように素早く半回転した千冬の刃がそれを阻んだ。

そのまま当てれば拳が丸ごと消滅する、その寸前でどうにか避けたザフィーラの後ろから、今度はシャマルの拘束魔法が飛んで来る。それは千冬の四肢のみの的確に狙っていた。零落白夜の展開されている刃にさえ当たらなければ、魔法は通じるといふ戦術である。

果たして狙い通りに、緑色の縄が白式の手足を雁字搦めに縛り付けた。その最中、ザフィーラに代わって突っ込んだのはシグナムである。レヴァンティンに内蔵されているマガジンから、魔力の籠ったカートリッジをロードした後、通常形態の剣から連結刃のシユランゲフォルムに変化させ、無防備になった白式のアーマーを削るように攻撃し始めた。

「烈風、一閃！」

「くうっ……」

「今よ、ヴィータちゃんも！」

「おうよっ！」

成す術無く装甲を傷つけられていく千冬の前で、ヴィータもグラーフアイゼンのカートリッジをロードする。そして、鉄槌の口の片方を鋭利なスパイクに、もう片方を魔力を噴射するバーニアに変化させ、思い切り振りかぶって呐喊した。攻撃的なラケーテンフォルムによって必殺の威力で放つ打撃魔法である。

『R a k e t e n h a m m e r』

「ブチ抜けえッ!!」

その鉄槌は、白式の胸部装甲に深々とめり込み。千冬の身体はそのままヴィータが細腕を振り回すのに合わせて、シヤマルの拘束魔法を引きちぎりながら森の奥へと吹き飛んだ。

少女を包む巨大な鋼鉄の塊は、その途中に木を何本かなぎ倒しながら、落ち葉に覆われた土の中へその凶体を深々と埋め込ませた。

「よしっ！ これで！」

「いや、待てヴィータ！ まだだ、まだ奴は……」

「そう。ちーちゃんはまだ——」

シグナムの叫びと、そして遠くで戦いを見物していた束の独白に合わせるように、白式はむくりと立ち上がる。胸部装甲に深々と抉り傷を付けられ、白黒のボディを土に塗れさせながらも、剣を構える体勢と呼吸には乱れ一つない。

「そうだ。まだ、私はまだ——戦える！」

「あは、流石はちーちゃん。タフネスは折り紙つきだね♪」

千冬の耳には、白式のシステムが鳴らす警告音が轟々と鳴り響いていた。胴体部破損。右腕のパワーアジャストは30%も低下していて、千冬の腕力でもなければ鋼鉄の重さに耐え切れずピクリとも動かせないだろう。

それは、戦闘による損傷だけではない。未だ不完全な修復しか成されていない白式を、力業で動かしている反動でもあった。

でも、それがどうした。

この手はまだ、重いけど動く。足もまだくつついている。そして、青く輝く切り札は、まだ、機能を停止していない。

「でも、そろそろ限界だよ？ タイマンならともかく四対一じゃあ、一、二体を道連れにした所でおしまいだし、運良く倒せた所で、この私は倒せない」

「貴様に何が分かる」

「分かるよ、全部。白式は私が作った。自分が作ったものを倒せないで、天才は名乗れないよ」

「そうかな。こいつはもう、私とユーノのものだ！ 貴様を止める。この刃で——押し通る！」

瞬間、白式の翼に増設されたアフターバーナーが火を吹いた。そのチリチリした炎を、束は胡乱げな目で見つめる。実際、清潔さすら感じられるスマートな兵器であるISに、化学燃料の匂いは不釣り合いであった。

だが、そうでもしなければ、今の白式は空を飛ぶどころか、束の元へ弾丸のように突っ込むことすら出来ないのだ。

折れた羽。継ぎ接ぎだらけの身体。だが白式は自らの主の意志に答えるが如く、装甲を震わせ——雪片に宿る青い刃を長く、大きくした。千冬の腕には今までよりもずっと重い籠手の感触が伝わる。束へと飛びかかるため以外の出力を、全て零落白夜に回しているのだ。

ヴォルケンリッターは一斉に主の前へ立ち塞がるが——それを、束は手で払いのけた。

「ああ、ダメダメ。ああまで出力を収束されたら、ちよつとでもかすると君たちにとっては致命傷になる。ああ、ほんとにちーちゃんは今もう、追いつめられるとヤケになるんだから」

「主……!?!」

「というわけで、君たち。この場合は脇に離れておいて。手駒はまだ、減らしたくないからね。なあに大丈夫。予想通りなら、直に——」

「御託はそこまでだ！ 覚悟しろ、束ええっ！」

列昂響き、千冬が跳ぶ。疑問を抱きながらも命令に従い左右に引き退いたヴォルケンリッターを通り越し、瞬く間に束へと迫る。

束は微動だにせず、何も構えず。ただ薄っぺらい笑いを浮かべながら、零落白夜の一刀にその身を捧げる。

かに見えた、直前――。

「だめえええっ!」

森の木々を揺らす、悲痛な叫び。

束を両断するかに見えた剣は、その肌に触れる寸前で止まった。それを握る両手は、カタカタと震えている。迷い一つなく殺意に澄んでいた瞳は、この世にあり得ぬ物を見たかのように大きく見開かれ、濁りに満ちた。

一方の束は、それでも微動だにしない。そうであつたと分かつているような――『予想内』であつたかのように、静かな表情だつた。

「やめるんだ……それ以上近づいたら!」

「だめっ、だめだよ、絶対に! ユーノくん、どいて!」

束の目線の先、木々の隙間からは翠色の光と――桜色の、弱々しい光が見えている。

それは何回かぶつかり合つて、そして何度かの衝突の後、翠色を弾き飛ばして、桜色がこちらにやって来た。

カタン、と音がする。千冬の右手が力を失い、雪片を取り落とした音だ。

「……そんな、どうして……それに、お前は……」

「分かるんだよ、私には。だって、だから私は飛べるんだ」

誰に向けられたのでもない千冬の呟きに、答えるは優しくも頑なな声。

桜色が地面に降り立った。そこから現れたのは、白黒になった白式よりも白く、美しい純白のバリアジャケット。

だが、嗚呼。なんと悲しい姿だろう。いつもはその足取りを艶やかに彩る桜色も、何と痛々しい光に変わってしまったのだろう。

当たり前だ。彼女は今日まで、魔法を使えない、つまりは飛べなかったのだから。

だが、それも今日で終わり。だって、帰ってきたのだから。彼女の片翼が。

「そう。だから私は飛べるんだ。そうなんだよ、東ちゃん……！」
「……なのちゃん」

高町なのはが最も愛し、憧れ、慕い、信じる。

篠ノ之束が、帰ってきたのだから——！

悲劇の始まり（V）

「久しぶりだね、束ちゃん」

「そうだね、本当に久しぶりね」

地に降り立ったなのは、束を見上げる。前までも少しだけ、束の方が背が高かったけど、その目線は今、ずっとずっと上にあつた。なのは幼い子供の身体で、束は大人の身体なのだから。

でも、なのはそれを不思議とは思えなかつた。同い年のはずなのに、自分は小さくて束は大きい。それが当たり前のように思われた。

だって、今ここにこうして居ると言うことは。

篠ノ之束という、素敵で綺麗な夢を見る女の子は。

「久しぶり、背、すごい大きくなつたね」

「あはは、まあね☆」

「……うん。束ちゃんは、なりたい自分に、なれたんだね」

きつと、その夢を叶えられたのだ。

「な……のは……」

「ねえ、そうだよね？」

なのはが語りかけているのは束である。すぐ横で、呆然としながら二人を見つめている千冬には目もくれていなかった。

千冬の中から何かが抜けだした。束を失った衝撃から立ち直ろうとしていたなのは。魔法を心に閉じ込めながら、それでも段々と笑顔をを取り戻していく、その姿を守りたいと願っていたのに。

なのはの中の時間は、三ヶ月前から一分一秒たりとも進んでいなかった。彼女の中で、束は死んでいなかったのだ。

——自分たちと、同じように。

「そうだよ、なのちゃん。私は今、天才の束さんになれたんだ」

「そっか。おめでとう」

「ありがとう、なのちゃん」

二人の間に、誰も何も、入り込めていなかった。再び出会えた彼女たちの周りは全てが外野である。気にかける必要もない。だから、

たった今まで激しい戦闘が続いていたとは思えないほど、森は静まり返ってしまっていた。

千冬もヴィータもシグナムも、シャマルとザファイラ、そしてなのはを止めれずに降り立ったユーノまで、誰もが無言で、二人の仲睦まじい様子を見つめていた。

「ね、東ちゃん？ 私の居るこの町に、また来てくれたってことは……また、一緒にいられるんだね！一緒に学校行ったり、遊んだり！東ちゃんが居なかった間、色々考えてたんだ。一緒に行きたい所とか、やりたいこととか、いっぱい！」

「へえ、嬉しいなあ。ずっと待っていてくれたんだ。私、なのちゃんに何も……何も、言わなかったのに」

「当たり前だよ。東ちゃんは私の友達だもん」

親友に全てを明かさず、たった一人でナハトヴァールの対消滅に消えていったことを後ろめたく感じているのか、東の表情は一瞬暗くなる。だがなのはは、何の躊躇いも怒りの一つも抱かずに、それを許した。

正に高町なのははそのものと言える行動だろう。なのはにとつて、東は友達なのだ。ならばどんなことがあると、その性根を、善き心を、無条件に信じきるのがなのはだった。

「……待て、なのはは」
「だけど。」

ここにいる篠ノ之束は、かつてなのはの側に居た、篠ノ之束とはもはや違う。

「束は……今の束に、近づくな。無事ではすまない。逃げるんだ……！」

それを知っているからこそ、千冬は横殴りされて崩れかけた心をどうにか持ち直し、自分が隣りにいることすら気にしていないのへ、懸命に呼びかけた。

「……千冬ちゃん？ え、え？」

全ての感覚を束に向けていたなのはも、その声で漸く気付き、振り向く。途端に驚いて、二三步後ずさった。

自分の友達が損傷した白式を纏いながら、とびきりに焦燥した顔でこちらを見ていたからだ。

「逃げるなのは。今の束は危険だ」

「そんな……束ちゃんは帰ってきたんだよ？　この海鳴に。束ちゃんが面白いて、楽しいって思った世界に……それが危険だなんて、絶対におかしいよ」

「そうではない。あいつは……！」

「千冬の言うとおりだよ、なのは！」

なのはの視界にもう一人、必死に止めようとするユーノが加わった。

逆に言えば、それ以外の何もかもをなのはは意識していなかった。集まった魔の波動に揺れる木々のざわめきも、啞然としながら唐突な乱入者に剣を向けている騎士たちの姿も。

普段、千冬よりも束よりもずっと広く遠くを見ているような、聡く賢いなのはの瞳は、それくらいにまで凝り固まり、縮まっていた。

「ユーノくんまで、どうして!?　ユーノくんは束ちゃんの助手さんじゃないの!?　そうでありたいんじゃないの!?」

「そうだったさ！　でも、でも……あんなことをする教授は止めなきゃいけない！」

すぐにでも束と触れ合おうとするなのはの前に、ユーノは立ち塞がって壁となる。別に二人が近づいた所で何が変わるわけでもないのだが、ユーノの心は警鐘を鳴らしていた。

二人を近づけてはいけない。警戒心を解いている今のなのはに、あの束は危険過ぎる。それに束にとつても、今のなのはが何か、劇的な変化をもたらしてしまうかもしれない。

それは単なる理屈じゃなく。特に後者は何の脈絡もない直感だった。

「あんなこと、つて？　私、何も知らないよ？　何も分からないよ、ユーノくん……千冬ちゃん」

だからこそ、なのはだけを状況から爪弾きにして、自分と千冬の二人だけで状況に決着を付けてみせるという提案にも同意したのだ。

それがなのはにとつてどれだけの悲しみであるか。更には、ライブル、助手、教授と表向きの名前こそ違えど、互いに深い友人同士であった自分たち四人の友情への裏切りであること。

その全てを頭に入れて悩んでも——今ここにあるような状況が、より悲しい結末を手繰ってしまおうと信じたから。

だのに今——二人は出会ってしまった。

「……束は罪を犯した」

「えっ？」

そして、千冬は暴く。聞かせたくない真実を曝け出し、超えてはいけない一線を踏み越える。

その表情には、計り知れない韜晦と——それ以外の、苦々しい一分子が混じっていた。

「罪を犯したんだ。飛びきりのな。あいつはこの世に蘇った後、ここに来る前に……時空管理局の本局を襲って、大きな被害を出した。だからユーノとこの白式が地球ここに来てるんだ」

「……そんな、まさか……っ」

最後にユーノと白式の事を付け加えたのは、ともすれば冗談と切り捨てられることを考えての説得力の付随であろう。

その通り、なのはは一瞬笑い飛ばそうとした。束の一挙一動に対して深刻になり過ぎる千冬の、いつもの心配症なんだと。だが周りの状況は、なのはの勘違いを許してはくれなかった。

事ここに至って、なのはの目にも漸く周囲の光景が入り込んできた。傷ついた白式と千冬。肩で息をしながら必死に自分と束の間に立つユーノ。そしてその二人を今にも切り刻まんとデバイスを向け、命令を待っている——四人の魔導師。

すると、それまでほんの直ぐ側に居ると感じられた束が、なんだか少し、遠くになってきた。

なのはは今、劇の舞台の真ん中に立っていて。その周りに千冬とユーノがいて、森の中で、騎士のような四人に囲まれていて。

束ちゃんはそれを、遙か遠く、誰の手も届かない客席で、ただ見ているだけのような——。

「束ちゃん。本当なの」

「……」

「本当なのっ!? 嘘だよ、そんなの嘘だよ、ね!」

だから呼びかける。ここに降りてきて欲しい、自分たちと同じ所に居て欲しいと。

だが、その切なる願いはあつかりと裏切られる。

「本当だよ。私はやった。やったんだよ、なのちゃん! いやあ、結構スリルがあつて面白かつたなあ♪ 我ながら万全の計画は立てたつもりなんだけど、それでもさ。やっぱし次元世界の総本山に突っ込んでくのは凄く厄介で……いい肩慣らしになったよ、うん」

なのははまずここで、絶望した。管理局本局への強襲、それがどういう意味を持つかは、なのはにも良く分かる。

束は犯罪者になったのだ。誰かを傷つき、虐げて——もしかしたら殺したのかもしれない——そうして尚、笑ってしまう。そんな人間になつてしまったのだ。

けれど、なののはの心にはまだ、希望が残っていた。と言うより、この程度のことでは止められない程に、強く信じる心を持っていた。

「……そっか、そうなんだ」

「そうだなのは! 認めたくないのは分かる。だが今のあいつは、束は危険なんだ!」

「ちよつと待って、千冬ちゃん」

ここぞとばかりに二人の間へ割って入ろうとする千冬を留める。

そして、束へ笑顔を向けて、こう問いかけた。

「ねえ、束ちゃん? どうしてそんなことをしたの? きつと何か理由があるんだよね? どうしてもそうしなきゃいけないから、したんでしょ?」

「それはそうだよ、なのちゃん? 物事を行うには必ず理由がある。例えば自暴自棄みたいな、何の理由も無いように見えることだって、心が追い詰められたからそうするんだし。その奥にはやっぱり理由がある。理由も無い行動なんてあり得ないよ」

「そういうことじゃなくて……! 束ちゃんは、誰を助けようとし

てるの!？」

助ける。その一言に、東の眉が僅かに動く。なのはには、そう見えた。

『助ける』だと!? なのは、一体何を言ってる」

「だって、そうに決まってるから! 東ちゃんはこうして大きくなって、大人になって! なら、誰かを傷つけるだけのことなんて、絶対にしない!」

忘れちゃいない。東が消えたあの日のお昼。墓石立ち並ぶ静かな草原で、東が誓ったこと。

『本物の天才っていうのはね? 犠牲なんて、最初から出さないんだ』

この世界にある全てを救い、それでも尚自分に妥協をしない。

そんな天才^{オトナ}になりたい、そんなとても大きな夢を、ただ一人、なのはだけに明かしてくれたのだ。それがたったの三ヶ月で、変わるなんてあり得ない。

「だから、ね? 東ちゃん! 私と、お話して? どうしてこんなことをしたの? 私、頭悪いけど。頑張って理解するから。だから、お願い」

そう、必ず何か理由がある。誰かを救うための——ひよつとしたら、世界全てを救っちゃうような計画の、ほんの一ピースなのかもしれない。

なのははそう信じていた。

まだ、信じきれていた。

「何を言っている! 管理局を襲って混乱させる、その何処に誰かを救うことがある!」

「分からないよ。分からないけど……でも、そうに違いないんだ。千冬ちゃんも、ユーノくんも。東ちゃんのこと、信じられないの?」

「信じてたまるか!」

反射的にそう言い返した千冬と比べ、ユーノは若干思い悩んだ後、苦しげに、しかし決然として、なのはの言葉を否定した。

「……僕も、千冬と同じ意見だ。今の教授を信じようとしても無理だよ」

「そんな、どうしてっ！」

「何も言わずに姿を消して、いきなり帰ってきたと思ったら、あんな大それたことをして……ううん、それだけならまだ信じられたかもしれない。教授が優しく強くて、誰かを救おうとしているって、信じたのは僕も同じさ。でも……」

他人を信じる気持ちを、比べることは出来ないが。ユーノは、もしかしたらなのは以上に束の事を信じていたのかもしれない。

だが、そんなユーノでさえ、束と対決する決心を固めなければならぬ事実があつた。だからユーノはなのはから束に振り向き、弾劾する。

「教授、貴方はどうして、バルディツシュを『分解』したんですか!？」
「……え」

何も答えぬ束の代わりに、激しく動揺したのはなのはであつた。

バルディツシュを『分解』した？

フェイトちゃんの杖を？

なら束ちゃんは、フェイトちゃんと戦つて、そして——ずっとフェイトちゃんの側に居た、大切な杖をバラバラにしたの？

「そのせいでフェイトは……とても傷ついてる。ちよつと前まで、僕やクロノと一緒にいて笑っていたフェイトが、今は昔半年前に戻つたみたい
に無口で……他人を拒絶してしまつてる！」

あの事件の後、フェイトがどれだけ元気になって、普通の女の子として日常を過ごしていたのかは、なのはにもよく分かつていた。彼女の現況を知らせる動画ディスクが、なのはの元へ一ヶ月ごとに送られていたのだ。

それは、束を失つて心を病んでいたなのはへの大きな励ましにもなっていた。様々な悲しみと喪失を経てそれでも笑顔でエールを送ってくれるフェイトの笑顔のおかげで、なのはは再び日常に回歸出来たと言つていいだろう。

「……そん、な……」

だから。ユーノの弾劾と、それに対して表情一つ動かさない束の冷たさは、なのはの心を益々追い詰めていく。

「……う、うそ……うそ、だよね……」

微かな言葉に、束は肯定もしないし否定もしない。その無言こそ、雄弁な肯定だった。

「どうして……なんで、なんで」

口走りながら考えても、答えは出ない。

例え、裏では誰かを救うための行動であったとしても。そのために誰かの心を、完膚なきまでに叩き壊すような真似をするという方程式は、なのはの思考回路の中には存在しなかった。

「なのは……さあ、僕らと一緒に逃げるんだ。束はもう、なのはの知ってる束じゃない」

「ユーノの言う通りだ。ここは私が止めるから、出来るだけ遠くに逃げてくれ」

なのはの心は、大きくぐらつき揺れ動く。それを察してか、千冬とユーノは一斉に、なのはへ逃げろと促した。

勿論、なのはは心のなかでそれを拒む。逃げるもんか。長い間追い求めていた、探し求めていた存在が、目の前に確かに居るのだから。だがしかし——そうして立ち止まり、退くことを渋りながらも、その足を前に一歩、踏み締めて進むことも、出来なかった。

「……そっか。ねえ、なのはちゃん」

不意に、束が進み出る。ずんずんと、柔らかい森の土にブーツで足跡をつけながら。

「待て、束っ……」

「ヴィーちゃん、シグにゃん」

千冬とユーノがその行く道を、身体でもって阻もうとするが。

主の一声によって割り込んだ騎士たちがその前に立ち塞がったので、悠々と通り抜けられた。

「あ……え……」

「なのちゃん♪」

束は呼ぶ。なのはの名前を、すぐ側で。

それはなのはにとって、幾星霜も感じられるほどに長い間、待ち望んだことだ。

待ち望んでいた、はずなのに。

「なのちゃん、私はね。なのちゃんと一緒に、来て欲しいんだ」

東の右手が伸ばされる。いつか手を取って一緒に踊った時よりも、ずっと大きくて、でもずっと綺麗に見える、人形のような手が、なのはのすぐ前までやって来た。

「二人一緒なら、何だって出来るって思わない？」

「えっ……？」

「そう、なんだって出来る。私は天才で、なのちゃんは……で。そんな二人が一緒になれば、世界全部を変えられるんだ。閉ざされようとしている、この世界も」

東の言うことは、なのはには一言だって分らない。でもそれは、いつものことだ。

本当に分からないのは、東の本心だった。

いや、それだって、分からない時もある。半年前、プレシアに囚えられたなのはが東との共謀の事実を明かされた時だって、東の意図なんて、これっぽっちもわからなかった。

でも——なのははいつだって、どんな時だって東を信じた。それが、なのはの友情だった。

そう、なのはと東。容姿も性格も全く違う女の子は、常に互いを信じている。

それが二人の間に眩しく煌めく、銀の絆——

その、はずなのに。

「そう、この世界は、ううん、次元の海にたゆたう世界、その全ては閉ざされようとしている。それは多くを犠牲にする、とても悲しいことで……とてもつまらないことなんだよ」

なぜだろう。

東ちゃんの言葉が、薄っぺらく聞こえる。

「それを為そうとしているモノ……なのちゃんの頑張りも、ちーちゃんの頑張りも、みんなみんな、全てを無駄にしようとしているモノ。私はそれを倒すんだ」

東ちゃんがいつも浮かべている中でも、飛びきりの笑顔。本当に楽

しくて、嬉しい時にしか浮かべない、月のように柔らかくて優しい笑み。

それがなんだか、薄っぺらくて酷い笑いに見えてくる。

「今じやなきや駄目なんだよ。今ここで倒さなきや、それは益々大きくなって……止められなくなっちゃう。だから夜天の書も紫天の書も、まだこの手から離さないで、ヴォルケンリッターとマテリアルズに仕えてもらってる」

ああ、どうして、どうして。

「でもね……やっぱり、なのちゃんだって一緒がいいみたい。だって、私がこの世界に夢を見れるのは、なのちゃんがいるからだもの」

あんなに綺麗で、かつこ良くて。まっすぐに一直線に夢へ向かって突き進む。

そんな風に変わってくれた東ちゃんが――

どうして、変わってしまったの？

「さあ、一緒に行こう？ 大丈夫だよ。二人一緒なら、何処までだって行ける。ずっとずっと、飛んでいられる。そうでしょ？」

手を伸ばしながら、進み来る。なのはその無意識で手を重ねようとしていた、その直前。

「……あ……いやっ……」

腕ごと手を引っ込めて、一歩引き退いた。

「……なのちゃん？」

「あ……わたし、わた、し……」

首を横に振るなののは、その表情に現れているのは、恐怖。

未知なる物、理解できない物へ人間が感じる、根源的な恐怖心だった。

「……ああ、そっか。そうなんだ」

そんななののは見ても、束は柔らかな笑みを崩さない。大切な大切な友人から、怯えて拒絶されることすら、予想の範疇に入れていたように。

「ちよつと、残念だな。でも……いいよ。なのちゃんがそれを望むなら、私は——」

東の左手には、いつの間にか、一冊の本が握られている。

紫色の装丁をした分厚いそれは、夜天の書を鏡写しにしたように見える。

それは東の眼前にふわりと浮かび上がり——ある一頁を、彼女の眼前に開いた。

「紫天の魔導書——管理権限を執行。我、『方舟』の名において命ず——『蒐奪魔法』発動」

瞬間、心臓を鷲掴みにされて潰されるようなプレッシャーを感じて、千冬が叫んだ。

「なのは、逃げろっ!!」

「え——」

だが、音波が空気を伝い、なのはの耳朶に届く遙か以前に。

「——つかまえた」

強制的に現出されたなのはのリンカーコアを、東の右手が深々と掴んでいた。

「たば……ね……ちゃん……っ! が、あ、あっ!!」

「あはは、来てくれて本当にありがとう、なのちゃん。これがないと、駄目だったんだよ。いやあ、良かった良かった」

それは、夜天の騎士たちが夜天の書の頁を集めるために、魔導師のリンカーコアから魔力を奪う『蒐集魔法』によく似ている。

だがなのはの身体には、脳髓に、五体を引き裂かれるのと同じ痛覚が走る。これほどの苦痛は、目標を傷つけずに魔力のみを奪う蒐集魔法にはあり得ないことだった。

「ど……どう、し、て、あ、ああっ!!」

「大丈夫。痛いのは最初だけだよ? すぐに、楽になるからね。なにもしないで、いいからね」

東の声も表情も、変わらず甘く、優しい。だがその手は、弱々しく

光るリンカーコアを強く握り締め。細い指にだけ伝う紫色の魔力が、桜色の光となのはの繋がりを溶きほぐし——切り離す。

「ふふ、あはは、あはははは——っ!!」
そして。

束は勢い良く、なのはの身体からリンカーコアを引き抜いた。

「あ……あああ……」

なのはの全身から力が抜けていく。よろめき両膝を付いたその身体から、バリアジャケットがかき消えて。

左手に強く握っていたレイジングハートも、いつの間にか、消えてしまっていた。

「あははははっ！ これだ、これが欲しかったんだ——！」

「束っ！ 一体何をやる気だ!?!」

その、遙か向こう側で。進む道をシグナムに阻まれ、剣を振るおうと防がれて、何も出来ずに立ち尽くすのみの千冬は、そう問いかけたが。

「とつても楽しい、すばらしいことだよ」

束はそれへ振り向かず、ただ一言答えて——握ったままのリンカーコアを、自分の胸に押し当て、そして、唱える。

「——我、使命を受けし者なり」

どくん、と空気が震える。

ピンク色の光がちか、ちか、ちか。

「盟約の元、その力を解き放て」

そうして、光の柱が登る。

「教授、やめるんだ！ そんなこと……あ、あああ……」

ユーノが叫んだが、もう遅い。止められることなど出来やしない。だって、束は妥協しないのだから。

自分の望むもの、手に入れたいものは、どんな手段を使ったって——手に入れるのが、天才だ。

「草は地に、月は宙に。そして——」

「たばねえっ……きさまああああッ!!」

右手に握られた、紅色の丸い小さなペンダント。

それがひとときわ激しく光って、儀式は終わる。

「不屈^{Raising Heart}の心はこの胸に！ この手に魔法を……ッ！ レイジングハート、セツトアップ!!」

『A-l-l i-g-h-t』

そうして、光の柱から現れ出たのは。

制服のようでドレスのような、白い防護服に包まれている、艶やかで成熟した身体。

魔杖としての姿を表し、右手に握られているレイジングハート。

そして——長い髪を、ツインテールに纏めて、その上には——機械仕掛けのウサミミ。

「……リリカル、マジカル……さて、頑張ろっか！ 楽しい楽しい物語の始まりだ！」

そう、篠ノ之束は——魔法少女に、なったのだ。

アフエクシヨン（I）

——新暦65年12月3日

使い古された椅子に座りながら、クロノは付箋の沢山貼られている画面に目を凝らし、コンソールを打ち込んで書類仕事をしていた。隣には副官たるエイミイも一緒だ。

そこはアースラ内部の執務室でもなければ、本局に置かれている執務官用のオフィスでもなかった。彼は本局人事部の一角に詰め込まれ、雲霞の如く積み重なっている膨大なデスクワークの手伝いをしてきたのだ。

彼を含め、アースラの全てのクルーは、所属についてその殆どが宙ぶらりんの状態だった。母船であり勤務地であるアースラを丸ごと盗まれたのがその理由だ。

アースラがこれまで担ってきたのは、辺境世界のパトロールのため長期航行が基本の巡航任務。だから船員たちは任務に必要なあらゆるものをアースラに置き、そこが自分たちの第二の家であると考えていた。だからそれが無くなってしまえば、船乗り一筋の彼らにはどうしようもない。

だがしかし、本局そのものは猫の手も借りたいほどの人手不足だった。何しろ本局解体という未曾有の事態を收拾するための復旧と再結合には、莫大なマンパワーが必要なのだ。長期巡航任務に耐えうる程の人間を遊ばせておく理由はなかった。

リンディの「柔軟な対応」もあって、クロノたちは瞬く間に各部署へ派遣させられた。あるクルーは次元空間の只中でクレーンを動かすし、他のクルーには喫茶室で淡々とコーヒーを作っている者も居るという。

そしてクロノとエイミイは、彼らの個人的知り合いでありリンディの旧友でもあるレテイの勧めによって、彼女が所属している人事部の手伝いに回されていた。

彼ら二人に回された作業の量は多い。数いる執務官の中でも若く

して優秀な部類に位置するクロノと、情報処理のスキルに光る物を持つエイミイだからこそ、というレティの差配、つまりは無茶振りだった。

それでお互い喋る暇もなく、キーを叩き続けている。だから、慌ただしい部屋の中からも、こんな音声クロノの耳に聞こえてきた。

『——以上、クラナガン中央区画第七地区で行われた、市民団体によるデモの映像でした』

ミッドチルダのある大きな放送局が流しているTVニュースである。時間からして昼のニュースだろう。ふと気になって、クロノは耳を傾けた。

この一週間、TVなんて見れなかった。バラバラになった通信システムのせい、本局は陸の孤島ならぬ次元の孤島と化していたのだ。

マルチタスクで作業の能率を落とさないままに、クロノは段々と意識をアナウンサーの声へ移していった。

『続いてのニュースです。A級ロストログア「闇の書」を保有し、本局解体事件を引き起こした凶悪な次元犯罪者についての続報をお伝えします』

アナウンスと共に、聞くものの注意を引き付けるような効果音が鳴る。直ぐ側のモニタにのみ視線を固定しているクロノには分からないが、恐らく闇の書——いや、夜天の書の画像がパンされているはずだ。

『管理局は本日より時、この犯罪者の名前が「タバネ・シノノ」であると公表、その似顔絵も公開されました。外見は10代後半から20代の女性であり、頭には常に耳型のカチューシャを付けているのが大きな特徴です』

なんともふざけた「特徴」だが、キャスターは大真面目に説明している。これもプロ根性の一端であるのだろう。

『タバネ・シノノは現在、全管理世界で広域指名手配されています。テレビをご覧の方々は、顔を見かけたら慌てずに、緊急通報用電話番号へダイアルしてください』

そう言われるが、仮にもし次元世界の平凡な一市民が束の姿形を見

たとして、緊急通報が役に立つことはまず無いことだとクロノは認識している。束がそんな不手際をすることは、そうする必要が有る場合を除いてあり得ないのだから。

それに束は——これは理由のない直感だが——何の罪もない一般市民をターゲットにしてはいない気がするのだ。

夜天の書がその封印された力を開放しており、管理局が半身不随の状態になっている現在、世界を滅ぼすことは限りなく簡単になっている。そんな状況でもし、束が夜天の書を手に入れた今までの所有者のように暴走して破壊の限りを尽くすのならば、今頃とつくに管理世界の二、三個くらいが消し炭になっているはずだ。

だが、束はそれをしていない。管理局が混乱からひとまず立ち直り本拠地を再建しつつあるこの期に及んで、地球での戦闘行動を最後に未だ何のアクションも起こさず行方をくらましている。

クロノにしてみれば、それは不気味にしか思えない様相だった。

『この凶悪犯の今後の動向は、情報が入り次第お伝えしていきます』

その後、三ヶ月前の実験区画簡単な現状やお供のヴォルケンリツターの外見を紹介して、いささか簡潔なぐらい早く束のニュースは幕を閉じた。如何せん公表されている情報も少ない。当然のことだ。それにもう何度も公共の電波に流されているらしく、他の局員たちもさほど興味を示してはいなかった。

だから——この番組が取り扱う内容として、次に持って来たニュースの方が重要な物事であるのだとしても、不思議は無かった。

『——続きまして、第29管理世界の分離問題について行われた、第29管理世界政府の記者会見の様様をお伝えいたします』

見ている者、聞いている者の全員の雰囲気が即座に変わった。雑多な音の中に時折とりとめのない雑談すら聞こえてくるくらい騒がしかったオフィスが、今や息を潜め静まり返っている。

多分、本局から遠く離れたミッドチルダの、どの家庭のリビングもかたずを飲んでいるはずだ。彼らにとっては、市民の前に顔を表さずに潜んでいる犯罪者よりも、その存在によって連日刻々と揺れ動いてしまう世界情勢の方が大事なのである。

『昨日の声明に引き続き、第29管理世界政府のネリス首相は時空管理局の現状に対し「深い懸念を抱いている」と発表しました』

管理局の地上本部は各世界に存在するが、現在はその人員の殆どが本局に回されている。時空管理局という勢力の本丸が崩されているのだから当然のことなのだが、そのせいで各本部の駐屯戦力は大きく減ぜられてしまっていた。本局お膝元であるミッドチルダの地上本部はまだしも、辺境世界には必要最低限の人員しか残されていない箇所さえ存在した。

第29管理世界はその一つ。本局から程近く、かつ犯罪者を抑える上で重要な地点でも無いこの世界からは、数多くの局員が派遣されてしまっていた。残された戦力では、次元世界を渡り歩きロストロギアを保有する犯罪者に相対するには余りにも頼りない。

そうなる——管理局体制からの独立、という選択肢が浮かんでくるのも、道理ではあった。

それでも、この管理世界が、例えば一桁の管理世界であればここまです過激な声明を出すに至らなかつたらう。問題は、この若い世界が『次元世界連合』に加盟し、時空管理局を受け入れてから、たったの20年しか経っていないことだった。

さて、この『次元世界連合』とは何か。

時空管理局によって凶悪な次元犯罪者や危険なロストロギアから庇護され、場合によっては内部の治安維持や自然保護を担われている管理世界政府。彼らが組織している団体が『次元世界連合』であり、時空管理局はその下部組織として位置づけられている。そして、時空管理局の巨大な規模に準じた莫大な予算は、各管理世界の分担によって賄われるのだ。

つまり、管理世界として庇護されることを望む世界は、次元世界連合に加入しその予算を負担することにより、管理局の地上本部と航行艦隊によって守られるという仕組みである。

だが、第29管理世界は今、その体制に疑問を抱いていた。というより、管理局本局の一変事によって、半ばがら空きとなってしまう現状を大いに憂いていると言えるかもしれない。

『次元世界連合からの脱退については明確な発言を控えていたが、「仮に時空管理局が我々の世界を守り切れるだけの戦力を保有していないというならば、これは私達の世界にとっての明白な危機であり、私達はそれに備える必要がある」とコメントしています』

モニタから見ても聞いている局員たちにとってこれは大きな侮辱にも成り得たが、そう考える人間はクロノ含め一人も居ないだろう。事実、そうなのだから。

もし今この時、第29管理世界に篠ノ之束が現れて、何らかの破壊工作を行おうとした場合。即応できる戦力といえは僅かな駐屯部隊と、近場に配備されている巡航艦が数隻程度だ。それだけで、完全稼働しているA級ロストロギアを止められる訳がない。

誰も口には出さないことだが——現時点で管理局は、ミッドチルダを除く管理世界の防衛において、それだけの活動しか出来ない。

本局解体という大惨事は、穏やかでは無いにしろ盤石と言える管理局の土台に、過去どんな犯罪組織も成し得なかった程の痛烈な打撃を与えていたのだ。

『更に、会見に出席した政府治安維持局長のリーム長官は、首相の発言に「非常の時であるならば、非常の手段を以って対するのが道理」と付け加えました』

第29管理世界がこうまでアピールする独立気運の大きな根拠としてはもう一つ、安全保障局の存在があった。管理世界となった時点でその世界に存在する軍隊は解散される。それが次元世界連合に加盟する必須条件だ。その代わりとして管理局が治安維持と防衛を担当するのだが、第29管理世界では少々事情が異なった。

20年前の加盟当時、管理局には辺境世界の防衛にまで手を回す余裕が無かった——とは断言できないものの。管理世界政府による「治安維持局」の設立で自主的に世界内の安全を守ろうという提案に、一も二も無く飛びついたのは事実だ。そしてその治安維持局とやらの内情は、かつて管理世界の軍隊だったものがそのまま天下り、組織機構としての生存を図った物である。

だから——その後のことは考えずに独立し、自主自衛の体制を整え

ようと思えば、実はそこまで難しいことではない。そしてそれが、この一見無謀な独立騒ぎに現実味を添えてしまい大きな問題に発展させているのだった。

『えー、タカスギさん。この記者会見では、第29管理世界が我々管理世界から独立し、非管理世界に戻る。そういう方針が明らかになったように思えるのですが、どうでしょうか』

アナウンサーが問いかけたコメンテーターの名を、クロノは頭の片隅に記憶してあった。確か、5年ほど前に管理局から引退して、今は治安維持に関するアナリストを職業にしている。最終階級は一地上本部の少将だったが、本局でも長年の間勤務していて管理局の内情には詳しい。だから、こうした番組にはよく出て来て、クロノもそれで名前を記憶したのだ。

『そうですね。第29管理世界の政府としては、確かにそういう方針と言いますか、政策を推し進めていると考えられます』

『では、管理世界制度に前例のない、管理世界からの離脱、欠番、といった結末も考えられると見て良いのでしょうか』

『いやあ、そこなんですけどね』

管理世界の欠番。というセンセーショナルな語句を強調して述べたアナウンサーに対し、タカスギという男の老人声は、それをやんわりと抑えるためなのか落ち着いていて柔らかかみがあった。

『まさかあの世界の全国民が現状の変化を望んではいけないでしょうか。政府がどうこうする前に、その信を議会で取らなきゃいけません。あと、流石にことがことですから、議員だけでなく国民自体に信を問う必要だってあるかもしれない』

『解散総選挙、もしくは国民投票ということでしょうか』

『具体的な手段で言うとなりがちです。ただどちらにしても時間は掛かりますし、現実的に独立して自主的な防衛をするだけの、パワーをあの世界が確保するとなるとそれだけで大変なことです。その間に情勢が大きく変わるかもしれないし、そうしたら政府としては対応せざるを得ませんから、結論を出すにはまだ早いでしよう。ただ……』

ここで一息置いてからコメントーターはこの番組がこの騒動について視聴者に一番訴えたい事を結論として述べた。

『もし、先日の本局解体事件から始まった一連の事態が、数ヶ月で収まらないものだとしたら。第29管理世界の主張することにも現実味が増してくるでしょうし、すると市民も賛同して、一気に決まるかも知れません』

『仮にそうなったとして、この騒動が他の管理世界に飛び火する、ということは考えられるのでしょうか』

『そうですね……難しい所なんですけど、第29管理世界は管理世界としての歴史が浅く、独立出来るだけの土台がありません、他の世界にはそれがもう無いということもあります。ですから、仮に第29管理世界が独立を決定したとしても、それに乗ずる流れのようなものは、生まれぬ可能性が高いでしょう』

つまるところ、このまま事件が拡大していけば第29管理世界の独立はあり得るかもしれないが、それが他の管理世界を触発することはない。言うなれば逸った勇み足になる。だから、テレビをご覧のミッドチルダ市民や、その近隣の管理世界の方々はとりあえず安心して下さい、とそういうことである。そう、クロノは受け取った。

『タカスギさん、ありがとうございます。では続きまして——』

番組の話題が転換するのに応じ、少々耳に持つてきすぎていた意識を目の前の書類仕事に戻そうとしたクロノの側に、近寄る人影。

「ご苦労様。調子はどう？」

この日は朝から会議に出席していて、オフィスには影も形も無かったレティがそこにいた。

「出航前後の書類整理よりは楽ですね」

「あら、言ってくれるじゃない。常日頃から忙しいこども、今はほんとうにてんてこ舞いなんだから」

そう言って、周囲にちらと視線を飛ばす。それだけで、先程のニュースで気もそぞろだった局員たちは一斉に背筋を伸ばし、モニタに視線を釘付けした。

はあ、と溜息を付きながらも、レティに怒気は見られない。

「ま、しようがないわよね。どうせあのニュースだったんでしょ」

「ご存知だったんですか？」

「察したのよ。誰だって、自分の故郷が管理世界でなくなるかもしれない、なんて考えるのは怖いでしょう？」

「そういう……もの、ですよね」

実はこの辺り、クロノの感覚は鈍かった。管理局発祥の地であり、当然局密接に結びついている世界である第一管理世界、ミッドチルダで生を受けたのだから当たり前なのだが。

「本当、大変なことになりましたよね。これから私達、どうなるんでしょう」

隣で話を聞いていたエイミイは、普段の陽気さからは程遠い言葉のため息とともに吐き出していた。長い間付き合ってきた相棒の良くない兆候だと診断したくなるクロノだが、不安に浸りたくなる感情もよくよく理解できる。

ことは自分たちの組織の問題なのだ。明日は我が身、ではなからうが。このままの状態で来年再来年を迎えるならば、この不安定な政情は自分たちの進退にも影響を及ぼすだろう。

だが。

「それをどうにかするために、今ここで頑張ってるんだろう、僕らは」
このままでは収まらせない、これがクロノの本心だ。なまじ篠ノ之束という人間を知っているからこそ、その想いは強い。彼女のやったことは確かに、蝶の羽ばたきがハリケーンを起こすような因果を引き起こしているが。

だからこそ止めるのだ。

ハリケーンによって、自分たちが跡形もなく吹き飛ばされる、その前に。

「ええ、クロノの言う通り。でもその為には貴方達——ここでじつとしているだけでは居られないんじゃないかしら？」

クロノの言葉に深く頷いたレティは、その心を擦るために、一枚の書類を差し出した。

それを見たクロノはエイミイと二人、顔を合わせてデスクから立ち

上がり、レテイから許可を取って無尽蔵に続く書類仕事からの脱出を果たした。

彼らを走り出させた、その書類は——意識不明の重体で本局に運び込まれていた織斑千冬が、医師の想定よりも遥かに早く目覚めた、という報告書だった。

アフエクション（Ⅱ）

病室へ飛び込んだクロノへ、予想より遥かに早く意識を取り戻した
とは言え、未だ寝たきりの千冬は今までの経緯を語り。

自分の全てを打ちひしがれたような顔で、最後にこう付け加えた。
「そうだ、クロノ。私もユーノも、負けた。なのはを——守れ、なかつ
たんだ」

——光が走る。桜色の暖かく激しい光は、千冬の目に焼き付いてい
るものと全く同じ、自分の背を押して支えてくれるような光だった
が、その元は。

「……きさ、まああああ……!!」

点火して打ち上げられたばかりの花火玉のように眩しく胸元を照
らす、魔力の源、その主。それは——

「あは、凄い！　すごいよ、すごい魔法！　これがなのちゃんのつ、リ
ンカーコアツ！　魔法！　あは、好きっ！　大好きだよ、なのちゃあ
んっ!!」

魂を抜かれたように倒れ伏し、魔力とともに体温すら奪われたよう
な冷たさが伝わる体躯。千冬の鋭い感覚から、その息遣いすら聞こえ
なくなったのはでなく。

その後ろで狂って笑う、篠ノ之束だ。

だから、織斑千冬という人間のやることは一つだった。

「よくも、よくも、よくものはをおっ!!」

「なっ……こいつ!」

やることは一つなのだ、それ以外はない。

ならば、たとえ身体が悲鳴を上げようとも、白式のフレームが軋み
を上げて限界を伝えようと関係あるものか。

そして、目の前にベルカの騎士、今の傷ついた自分よりも強者である女騎士が立ち塞がり、剣を鏢迫り合わせて前進を防いでいようが――

「……ぐうッ!?」

斬る。

たたっ斬る。

あの愚者を斬り伏せ、微塵も残さぬ。

それだけが、織斑千冬の思考であり、彼女が振るう雪片の、レヴァンティンに阻まれていたはずの剣圧によって吹き飛ばされたシグナムのことなど、埒外にすら存在しない。

「シグナムっ！……この、やらせるか！」

すかさずヴィータがフォローに入るも、それを咎める声が後ろから。

「すたーっぶヴィーちゃん。刃の色を見てご覧」

主の静止にその是非も問わず反射で止まったヴィータは、言われたとおりに刃を見て、背筋を震わせ戦慄した。

あの青いエネルギーは、零落白夜だ。しかもこれまでの、白刃に薄く乗せられ支えられている青ではない。極大の出力を何層にも重ね集中させたそれは、白式が制御できる最大限度の零落白夜。存在を魔力にて編まれている守護騎士にとつては、天敵どころでなくその存在さえも否定される、悪魔のエネルギーだ。

そしてそれは――魔力で戦い自らを守る魔導師にとつても、脅威になり得る。

「エネルギーは使い果たしたはずなのに。なんであんなに強い零落白夜を出せるのかなあ？」

知るか、と吐き捨て刀を振り上げた激昂した千冬の奥底ではしかし、冷徹に、歯車のように動いている戦闘本能があった。

それは今、ずっと想定してきた仮想の敵が、現実の敵となって眼前に居る喜びと、同時にその敵を倒せる最高のチャンスが訪れた、そんな無上の歓喜に震えていた。

今ならば、零落白夜で束を倒せる。なのはからリンカーコアを奪つ

た今、東は魔導師だ。無論その天才的な頭脳は脅威だが、彼女の闘う手段、方法は魔導師のそれだ。

そうでなければ、わざわざリンカーコアを奪う理屈がない。己の科学と身体能力を使えば、東は千冬と互角以上に戦えて、管理局にも喧嘩を売ることが出来るのだ。

そして東は、不必要なことを一切行わない。彼女にとっては、無二の親友が自分の魂と等しく大切にしていた魔法を奪うことさえ、必要なこと”であるはず。

だから、勝てる。この一振りさえ当てられれば。

「覚悟しろ、たばねええええっ！」

斬りかかる千冬の心中には、守るべき者を、そのことに関して同志だとも思っていた存在により傷つけられた怒りとともに。そういう仄暗い悦びが、あるかもしれない。

そして多分、その二律背反が——この戦いの敗因に、なったのかもしれない。

「ふふんっ、それじゃあテストと行こうか！ レイジングハート！」

『Round shield』

東は空いた左手を前に出し、魔法の防壁を広げる。なのはも使っていた防御魔法だ。しかし、零落白夜の前にはどんな魔法も無力である。だからそれは、光刃に触れた途端紙屑のように引き裂かれる——はずだった。

ガキリ、と衝突音。東はそのまま動じず、左手を開き続け。千冬は刃を押し込もうとするも、押そうが引こうが刃の筋が通らない。丸い魔法陣の防壁が刃に噛みつき、その進行を防いでいた。

「なに……っ!？」

「あは、ぎあんねん♪」

極限まで研ぎ澄まされ、叩き斬る東の身体しか見ていなかった瞳孔が、大きく開かれる。

あり得ない。零落白夜は魔力に対して絶大無比な相殺力を発揮するはず。だからこそ、12個ものジュエルシードが発した魔力の波動から、封印砲が通り抜ける隙間を切り開けた。女騎士が持つデバイス

の、固く構築された鞘すら溶け落とした。

だのに。今この場では、たった一枚の薄っぺらい幕すら、突破できていなかった。

「どうした、白式っ！」

疑問と戸惑いのままもの言わぬ鎧に問うても、何の言葉も返らず。ただ千冬が知覚している計器のみが、全てにおいて正常値を示していた。千冬の意志の通りに、全エネルギーを零落白夜に注いでいるということだ。

そんな体たらくを見た東は——若干の失望を含めた無表情で、バリアを押し出し、刃を白式ごと押し戻す。

「くっ……」

「ダメだよーちゃん。そんなんじゃ。声に出すなんて非効率、無駄なことだよ」

「何を巫山戯るッ！」

千冬はまた振りかぶり、東へ飛んで突っ込んでいく。一度弾かれたくらいでその闘志は挫けず、通じるまで何度でも、何度でもかかっていくと決めていた。

その度に、東は防壁で防ぎ、刃を受け止め、また押し返す。繰り返しはまるで、じやれつく子供のチャンバラごっこを、片手で止めて放り出す大人のようなだった。

主の危機に割り込もうとした騎士たちも、その余りに圧倒的で滑稽にも見える戦いぶりを見て、割り込む必要はないと手を止める程だ。

「何故だ……何故通じないッ！」

千冬の手の内には確かな手応えがある。魔力を消して貫いたと、柄を通して刃が教えてくれる。それなのに、東の掌、それを包んでいる黒いグローブにすら、届かないのはどういうことだ。

だが千冬に、その理由を考える余裕はない。東だけでなく周りの騎士たちを含めれば、今の彼女は敵に囲まれ四面楚歌。

考えるよりもまず動かなければ、八つ裂きにされる状況だから当たり前だ。

その代わりに深い思惟を巡らして、東のからくりを暴くのはユーノ

の役目だった。

（零落白夜は完全だ。ヴォルケンリッターとの戦闘でそれは証明されてる。だったら、束の使う魔法が特別なのか？ 零落白夜の仕組みを知ってる束なら。いや、そんなことはない。なのはから奪った——奪ったばかりなのに、零落白夜を無効化するような魔法を使える訳がない！）

今、千冬は束に向かい、それを束はいちいち避けずに受け止めて、跳ね返し。そうした千冬がまた剣を構えるのを、守護騎士が四方から囲んで睨んでいる。

千冬を中心として、束たち五人は丁度円形に展開していて、ユーノの居る場所はそのから離れた外野だった。千冬とも束ともヴォルケンリッターとも、そして倒れたなのはとも離れて、彼は完全に無視されていた。

だからこそ、考えることが出来る。束の不気味な実力の、手品のそのタネを。

（となると、零落白夜は働いている。魔力を打ち消している。なのにラウンドシールドは壊れない。魔力が無くなれば、術式も維持出来ないで崩壊していくはずなのに……ん？ 魔力が無くなれば？ 無くなる——そうか！）

気づいたのは、千冬が八度目の突撃をあつさりあしらわれた時だった。ちようど彼女が跳ね飛ばされて、騎士たちの囲む戦闘領域の端近くまで転がり出て来たので、ユーノは伝えた。

「千冬！ 斬るのは束じゃ駄目だ！ 夜天の書を斬るんだ！」

「何っ!？」

「どうして零落白夜がただのラウンドシールドを貫けないか分かったよ！ 魔力が無尽蔵に供給されているんだ！ 消しても消しても、また次の魔力が注がれて、だから術式を碎けない！」

束が展開しているラウンドシールドが、1000の魔力で構成されているとする。これに普通の攻撃魔法が当たれば、1000が90になり80になって、段々と減っていく。だがその残りの80で持ちこたえている隙に魔力を注ぎ込めば、理論上シールドは何処までも保てる計

算になる。

これが破れるというのは、100を一気に0にするほどの打撃を与えられるか、注ぎこむだけの魔力を絶やしてしまったか、それとも戦術上割に合わないので供給を止めたかの3つに分けられる。

零落白夜は、100を一気に0にする類の攻撃手段であり、それ以上に凶悪な攻撃でもある。魔力が青いエネルギーに触れば、100どころか例え1000でも10000でも、触れた途端0になって消えてしまうのだから堪ったものではない。

しかし。100が0に変わる、その瞬間に。

1を代入出来たなら。

そしてそれを、何千分の一秒単位で続けられるのだとしたら。

シールドは消えない。

前例もある。時の庭園でジュエルシールドの暴走の最中に切り込んだ時、千冬はその手に跳ね返るような反動を受け止めた。それは、ジュエルシールドから溢れ出るエネルギーが、零落白夜によって消されたエネルギーの空白をどんどん埋めていったからだ。

それと同じことを、束はやっていった。しかもあの時より遙かに素早く、魔力が尽きてから術式が崩壊するまでのほんの僅かな隙を埋めている。

そして、それだけの芸当を成し遂げるには、間断なく注ぎこみ続けられる魔力のエンジンが必要で、生体器官として出力にどうしてもむらが出来るリンカーコアでは成し得ない。

ならば、束が持つ魔力の源、そのもう一つ。それこそが手品の種であり——束がなのはのリンカーコアを取った理由だ。

「束はこれをテストと言った！ 僕は今まで、それは新しく自分の体に加えたリンカーコアとデバイスレイジングハートのテストだと思ってたけど……違うんだ！ 束は夜天の書をテストしている！ 魔導師になった自分の命令に従って、正しく動くかどうかを！」

ユーノが本局解体の詳細を聞いて、ずっと疑問に思ってきたことがある。

何故束は、夜天の書を使わなかったのか？ クロノ・フェイト・ア

ルフの三人程度、徒手空拳で倒せるだろうことはユーノにも分かる。それくらいに束は強いと、側に居た彼は知っている。

でも、そこに面白い道具があるならば、試してみずにはいられないというのも束の一側面であるはず。彼女を天才たらしめているのはその才覚だけでなく、無尽蔵の好奇心である。だから、本局を解体するだなんて派手な舞台を前にして、使わないというのはおかしい。

だが、これでは使わないのが当たり前ではないか。だって、使えなかったのだから。

闇の書に魔導師でなくアクセスできる業を持つ束でも、闇の書の掌握は出来なかったのだ。出来ることといえば精々、守護騎士を4騎召喚することくらいしかなかったのだろう。

だから、束はリンカーコアを欲し、そして今——晴れてリンカーコアを手に入れ魔導師として書のシステムに認められ、夜天の書の真のマスターとなったのだ。

「ふふ、くくくふふ……にやはははあつ！ さあつすがユーノくん、わつかりやすい！」

そして、ユーノの考察を試験官の如く黙って聞いていた束が、笑いながら取り出す。

茶色の古びた皮装丁に、金色の十字架。だがしかし、それは本局解体の時とは違って、主の魔力に呼応するかのようなオーラを宿していた。

今ここに、数千年の歴史を紡いだ夜天の書は、真の姿を取り戻し、完全稼働を果たす。

「うん、分かりやすい。実に分かりやすい説明ありがとう！ そう、その通り。魔導師にならなきゃ、この本の主には選ばれないんだよ。これには束さんも困った。騎士だけを使っても本願は果たせないし……でも、これでぜんぶ解決っ♪ みんなみんな、束さんの物になったのさ」

「貴様という奴は、そこまで……そんなどことのために、なのはの身体を傷つけたのか!？」

「そうだよっ。」

東の答えに、ユーノは改めて愕然とした気持ちになった。

教授がなのはに抱いた友情、いや、愛とも呼べる気持ちは嘘だったのか？ そう考えて、彼の心は益々暗くなっていく。

もしそうなら——可哀想じゃないか。

「き、さ、まあ」

「もう、そんなに怒らない♪ なのちゃんのじやなきや駄目なんだし、それに……見ず知らずの誰かさんのリンカーコアを奪っても、つまらないよ。究極的にはそれでも良かったんだけど……やっぱ、ノレないんだよねえ、うん」

東の口調は、怒る千冬と悲しむユーノを徹底的にコケにしているようだった。

二人共、違った方向で東を評価していた者である。千冬はライバルとして、そして自分と同じなのはを慕い守る者として。ユーノはもちろん、**“教授”**として。

しかし東はあっけなくそれらの友誼を否定し、更にはこの世界への肯定、なのはへの熱い想い、そして夢溢れる少女としての姿まで、今まで二人が信じていた全てを否定した。

何がノレない、だ。お前がなのはを選んだ理由はその程度のものなのか。その程度で——なのはの身体と心を抉り抜いたのか。

もう、彼女は自分たちの知る篠ノ之東ではない。

改めて、そう心に深く刻みこむユーノであったから。

「……行こう、千冬」

「ああ、行くぞ」

ユーノは千冬に近寄り、騎士たちが囲む戦闘領域へと立ち入った。

もう、考える時間は終わりだ。目の前の女がいかに醜悪で下衆なヤツかは、良く分かった。ならもう情けはいらない。彼女を倒して、その足元で倒れているのを救わねば。

「お、二人で来ちゃう？ いいよ、そっちの方が面白そうだし……レイジングハート、モードリリース」

『A i l l i g h t』

東の右手に握られていたレイジングハートが、スタンバイモードに

戻り。

その代わりに、夜天の書が現出し、握られた。

「特別サービスで、夜天の書も出してあげちゃおう！ ユーノくんの考察通り、これさえ叩けば、勝てるよ？」

束は夜天の書を取り出して、持った手を突き出しこれみよがしに二人へ見せつける。即ち自らの急所を敵に曝け出し、さあ打ってこい、零落白夜を叩き込んで倒してみろ、という挑発。

それは同時にヴォルケンリッターにとっては母体であるのだから、彼らは当然戦慄し主を止めようとする。が、それを言葉に出す前に、止めちゃ嫌だよ、と念話で返されてしまった。夜天の書の消滅は、彼らにとつて零落白夜の直撃を受けると同じくらいの危機なのだから当然だが、主の奇矯な行動に呆気にとられるのはもはや何度目か分からない。

一方千冬とユーノは、何も迷わず束へ近づいていく。例えこれが罠だとしても構うまいと、覚悟を決めているのだった。そして、罠でも何でも、今この時の束を倒すチャンスはここしかないとも分かっていた。

「行くよ、教授……ううん、篠ノ之、束ツ!!」

最初に飛び出したのは、驚くべきことにユーノの方だった。己の周囲に球形のプロテクションを展開し、ただ愚直に真っ直ぐ、最短距離を突進していく。ゴオ、と風を切る音が聞こえてくる。決して長くない束との距離は、すぐに詰まった。

そんな捨て身の突撃に対して、束は呵呵と笑いながら、レイジングハートを持った右腕を横に薙ぎ払うよう振るう。するとその軌道上に次々と光球が現れ、腕が振り切ったその瞬間に飛び出していく。それぞれが無秩序な軌道を描きながら、ユーノのプロテクションに直撃をした光は、合計8つ。なのはの得意技であり主力であった、デイバインシューターだ。

ぎゅんと曲がって多方向からユーノに直撃する高速誘導弾により、プロテクションの魔力はごりごりと、無慈悲に削られていく。100が70、40となるように。だが、ユーノも全身から魔力を絞り出し

てこれに対抗し、プロテクションの硬度を維持したまま——東に体当たりした。

「にやはははっ！ もおう、無茶するなあユーノくん！」

「君を倒すにはそれしかない！ なら無茶で元々、相打ち上等っ！」

東はそれを左手と、展開しているラウンドシールドで軽く受け止めていた。そして防御魔法同士のぶつかり合いは、ユーノの魔力を更に吸い取り奪っていく。元々魔力量は決して高くない彼であるから、後10秒も均衡を保てるかどうかといった所。だがその十秒間、東の防御、そして片手を自分への対処へおびき寄せていられる。

それがユーノの仕事なのだ。

「……千冬っ!!」

「おおおう!!」

合図に応じて天空から舞い降りる、白黒継ぎ接ぎの鎧武者。その躯体と人体の脚部を限界まで酷使して、大跳躍に成功した千冬が雪片を高々と掲げ——その刃に青き、絶対零度のエネルギー。

東の左手は前へ突き出されており、逆の右手は、夜天の書を天高く掲げていた。まるで聞き分けの無い子供の、手の届かない場所へお菓子退けてやるように。

だがそれは、千冬の落下地点の直下である。後は地球の重力に任せ、重い鋼鉄の白刀を叩きつけるだけだ。不完全な白式の掛ける負担と戦闘のダメージにより、限界を超えて疲労していた千冬の身体でも実に容易い。

「主いっ！」

絶体絶命。少なくとも、主を見守る騎士の瞳からは、そう見えた。

「たあああばねえええっ!!」

ユーノや千冬だって、勝利を確信していた訳ではないにしろ——これで漸く、一発キツイお返しだ、と心中で熱を上げていた。

だから、この場の中で唯二人、冷たい顔をしていたのは。

気絶したまま衰弱し始めているのはと、いかにも詰まらなげな顔をして、勝負の終わった後の空虚感を表現している東だけであった。

「我、『方舟』の名において命ず——永遠結晶、展開」

衝突の瞬間、戦う三人の中心で大爆発が巻き起こった。魔力と魔力が重なり合う、まその時に起こるインパクト。

爆煙と土が騎士たちの視界を包み、自らの主とその敵の去就を一瞬、覆い隠した。どちらが勝ったのか。夜天の書はどうなったのか？ 彼らにとつては気が気でないことだが、流れる空気が煙をかき消すよりも遙か先に、強大な魔力のオーラがそれを吹き飛ばした。

「……あれあれえ？ おつかしいなあ？ 夜天の書、どうしちゃったのかなあ？」

喜悦満面の笑みを浮かべながら、束が見やるのは空に浮く千冬であった。夜天の書に一撃を叩き込んだ後、本来なら重力に従って自然落下し地面の上へ立っている、もしくは倒れているはずの千冬が、浮いている。天に掲げられた束の右手で、軽々と持ち上げられているように。その人機を包むのは、桜色。つまり、束の魔法によって浮かび上がらされているのだ。

そして、零落白夜が直撃したはずの魔導書は——黒茶色の外装から、いつの間にか赤紫色の禍々しい外観に変わっており。刃は書ではなく、その上に浮かぶ結晶へ、深々と入り込んでいた。

「……そんな、な……」

「ふふん、ユーノくん、土壇場で大間違いだねえ♪ 私の力の源は、夜天の書だけじゃあ無いんだよ。どれだけ魔力を貯めこんでいようと、夜天の書自体は巨大なストレージ。別に無限の魔力を供給出来るわけじゃないから、零落白夜の対策には不適當じゃない？」

二人共、すっかり失念していた。なのはからリンカーコアを奪う時、束は一体、何を使った？

あれは夜天の書ではない。元は健全な資料本であるそれよりも、更に強大凶悪で。リンカーコアを摘出し自分のものとする、なんて外道の術式を記録している闇の魔導書。

確かあの時、束は本をこう呼んだ。

「紫天の、書」

「うん、紫天の書。闇から暁へと変わりゆく、紫色の天を織りなすも

の。夜天の書が闇の書だった頃、その最深部に眠っていたシステムだよ。これの使い方は、夜天の書とは違つてて、ここにある魔力の結晶——『永遠結晶エグザミア』を制御するためのものなんだよねえ」

永遠結晶。魔力で出来ているはずのそれは、零落白夜の刃を受けて、尚存在している。それどころか、零落白夜の青を飲み込み、消滅させているではないか。

あり得ないはずのことだった。零落白夜のエネルギーと魔力は、あくまで対消滅の関係にある。だから、止めどとなく魔力をぶつければ、何時かは零落白夜のエネルギーも0になる。

だがそれで、純粋な魔力を以つて零落白夜を征するというのは余りにも非効率的で無茶が過ぎる。100を0にさせる代わりに、零落白夜の方の100から0・000001程度を差し引くそれは、どう考へても割に合わないではないか。

だが、その無茶を成し遂げるだけの出力があるとしたら？　今、雪片に纏われた光を全て消し去り、白式のエネルギーを全て使い果たさせる、それだけの魔力があるとしたら？

零落白夜の100を0に出来る程、莫大な魔力を運用できる連環機構。

それこそが——エグザミアであり、その制御を行う紫天の書。束が持つ、第二の切り札。

「頑張ってるのは分かるけど。ユーノくん、私が勝ち目を、残すでも思った？　こうして私がここに来た時点で、君たちの負けは確定している。どうあがいてもどう頑張っても、私の進む道を阻むことは出来ない。私はいつも、そうしてきたはずなんだけどな？」

ああ、そうだ。束はいつもそうだった。ユーノは思い出し、眼球を怯えに揺らした。

教授はいつも僕の逃げ道を塞いできて。断れないようにしてから、色々ときかせてきた。それと同じで、どんな時も裏からずっと、ずっと画策をし続けて。

いざ表舞台に立った時には、全てが終わっている。例え事態がどう転がろうと、最終的には彼女の望んだ結末を、その場に居る全員が、そ

の思いはどうあれ受け入れるしかない。

それが、篠ノ之束である。そんなこと、とつくに分かっていた、はずなのに。

「私の言ってること、そんなに間違ってるかな？ それなのに、刃向かうなんて……ほんつと、つまらない」

「!!」

それは、束に「つまらなくない」と肯定されたユーノ、そして千冬にとつての、事実上の決別宣言であった。

だから、ユーノは絶望に心を畳み掛けられ。浮遊の戒めを解かれた千冬は地面に無様な落下をしながら、光を失った雪片を尚も構えて立ち向かう。

「黙れ、黙れ黙れっ!! 私は貴様を斬る！ 殺す！ なのはから光を奪った貴様をお！」

その瞳には、もはや理性など存在しない。今のボロボロの自分では、剣を構えることすら致命的なダメージになってしまうのだという静止はとうに吹き飛んでいた。

痛みが何だ。苦しみが何だ。それと引き換えに奴をブチ殺せるのなら、この身体どうなろうとも構わ——

「ッ!!」

「はいはいちーちゃん、そこまで。そんなに怒り狂うなんて、らしくないじゃん。自分の無力感、守れなかった悔しき。怒りと力に替えるのは決して悪いことじゃないけれど、ぶつけられる方はたまったもんじゃないんだよ。怒りは自分の中に溜めてこそ……なんだけどなあ」

レストリクトロック。なのはが習得していた高位捕獲魔法。千冬の五体は完膚なきまでに縛り付けられたが、それを使った事自体が尚更千冬を激昂させる。

それはなのはのものだ。貴様が使うな。

その怒りだけが頭を支配し、獣のような唸り声を上げて力づくでバインドを破ろうとしている。疲弊したその両手両足には、非力なユーノよりも力が入らないことなど忘れて。

「ふむ、まあ怒っちゃうかあ。それじゃあ……しょうがない」

右腕が地に落ちた千冬と同じ高さまで振り下ろされる。雪片の斬撃を何度も受けて、傷一つ付いていない右手が握られ、人差し指が千冬を指差す。

その先端に、集中していく、魔力。

「少し、頭冷やそうか」

轟、と流れていく魔力の奔流。

それはスターライトブレイカーでも、デイバインバスターでもない、ただの砲撃魔法で。

だがしかし、千冬と白式をノックアウトして、奥にある木々と一緒に吹き飛ばすにはそれでも十分過ぎる威力であった。

「千冬っ……い！ バインド!？」

反射的に救助しようとするユーノだが、その動きを、束のバインドが押し止める。

「だめだめ、ユーノくんはなにもしないで、じっとして、よく見てっといつてよ、ね？」

ああ、情を亡くしたこの天才は、こんなにも残酷になれるというのか。

桜色の渦が通り過ぎていった後、木は吹き飛ばされ草は蒸発した、その跡にただひとつ、屹立している人影。

千冬はまだ立っていた。奇跡的だった。白式も装甲を融解させながら、なお主に纏われている。魔力が生み出した熱によるぼやけたもやの中から微かに、朦朧としていて虚ろな瞳が見える。

「殺す……殺してやる……束……きさ、ま、を……」

「にやは、ほんつとタフネスだねえ、君は」

蚊の鳴くような声で呪詛を絞り出し、尚も剣を取ろうとするも、身体は一步も動かずに、立ち尽くすしか無い。

その無様を嘲り笑うような表情で、束は再び指先への魔力収束を始めた。それは一発目よりも更に強く収束されている。ユーノは焦って束へ叫んだ。

「そん、な……やめてくれ、教授っ！」
「シユート」

ユーノの言葉に耳も貸さず、束は光線を発射した。
それが千冬の全身を包み、偽りの白式を吹き飛ばし。
千冬の意識を、闇に返すのだった――

アフエクシヨン (Ⅲ) (最新話)

——ぱちん。

「なるほど、お見事です、王よ」
ぱちん。

「まあこの程度はね。東さんにかかれば朝飯前だよ」

アースラは次元航行船であり、その内部には当然艦長室がある。かつてリンデイ・ハラオウンが使っていたその場所を、東は遠慮無く改造し、自室として使っていた。

リンデイの個人的な趣味と同時に地球世界の習慣に合わせてため、和風趣味にひた走っていた内装の名残はもはやなく。個人の自室としては広い部屋のそこかしこにガラクタのような機械と実験用具が飛び散ったり無造作に重ねられたりしていて、綺麗好きや几帳面が見れば目が眩むほどに散々たる有様となっていた。

しかもこれは、海鳴に今もある篠ノ之東のラボの内部とほぼ同じ、それどころか殆ど狂い無く同じ様相であった。あのラボの中で東が作った発明品や器具をそっくりそのまま作り直し、配置している位置すら部屋のスケールに合わせて若干調整しているもののほぼ違くない。

とはいえ、さもあるかな。篠ノ之東は大人になったのだ。子供の時に何年か掛けて作り上げたものであるが、今の東にとってはその全てを——ただ二つの品を除いて——三日もあれば作り直せる。

——ぱちん。

「これで王は、紫天と夜天、ふたつの天を同時に治める偉業を成し遂げられた。我らが長年の悲願、ついに叶ったのですね」

ぱちん。

「何言ってるの。私達の戦いはまだまだこれからだよ？ 今はただ、準備が終わっただけ。私の夢も願いもこれから、ここからなんだ。君たちには沢山頑張ってもらわないとだね」

そして部屋の中央。辛うじて人が三人ほど座れるくらいのスペースで、東とシユテルは向かい合っていた。

煎餅型の座布団の上で、一方は整った正座をして、もう一方はドレスの中で、ペタンとあぐらをかくような座り方をしている。そうして、お互いの間にある大きな盤の上に指を這わせ、木で出来た駒を交代で動かしていた。

つまるところ、将棋である。リンデイが買い揃えていた古風な将棋盤を引っ張りだした束は、配下六人の中で一番頭脳の回る理のマトリアルを暇潰しに呼び出し、対局をさせていたのだった。

——ばちん。

「勿論、そのつもりです」

ばちん。

「束さん一人は何でも出来るけど、届く手には限りがある。向こうに巨大な組織があるなら、束さんだつて駒を使わないと公平じゃないからね。そう、だから私は君たちを“使う”んだ」

束の腕がシユテルの陣地側に伸び、駒を取って、そこへ自分の駒を進める。これを放置するのは危険であるからシユテルは駒を取り返すが、すると駒交換になつて、束の方が価値の高い駒を取り、得をした。

永きに渡り夜天の書を守ってきたヴォルケンリッターと、エグザミアの力を利用できるマトリアルでさえ、束にとってはその程度の価値しか無いのだ。とシユテルは思う。これから自分たちは、この天才の良いように使われ、彼女がその気になりさえすれば呆気無く捨て駒としても扱われるだろう。たった今、駒交換の為に使われた将棋の駒のように。

だがそれは、シユテルにとって心地の悪いことではなかった。束は自分たちの実力を正当に把握し、それぞれの適所に宛てがい利用している。

本局解体の時の良い例だ。平凡な王ならば、ヴォルケンリッター・マトリアルという既にある組み合わせを崩すことを恐れるだろう。しかし束はそれに甘んじていない。直接攻める必要があつた三ブロックの内、武装局員の多いブロックに武闘派のシグナム・シユテルを。特にプロテクトが硬いであろう区画には支援・諜報のスペシャリ

ストであるシヤマルと、その護衛として目を引いてくれるレヴィを組ませた。そして一番重要な中央区画には防御力のあるヴィータとザフィーラのコンビを自らの護衛として侍らせている。もともと彼女に護衛など必要ないかもしれないが、それでも露払いとしては総合力が高く安定感のある二人は最適だろう。

そういう判断を出来る王に任せ、己が持つ力と可能性を引き出してくれる。『理』のマテリアルにとって、それは喜ばしいことであるかもしれない。

——ぱちん。

「素晴らしい。それでこそ、我らが王に相応しい」
ぱちん。

「にやはは、それほどでもあるけどね」

シユテルの打った一手に対し、東は考える素振りを見せず瞬時に打ち返す。その速さはもう殆ど動物的な反射行動に見える。だが実は、打たれてから打ち返すまでの僅かな時間に小宇宙的とも言える思考が走っていたり——する訳ではない。

事実、東は何も考えていない。考える必要がないから考えない。分かっているから、考えない。

東にとつて、この対局の勝利は対局前に決まっているのだ。

後はどう駒を動かすか、というよりどう腕を動かし手で摘むかできない。摘んだ駒が何か、動かした結果相手がどう動くかなんて、とつくのとうに計算済み。

だから——『理』が全知全能を以って全力で弾き出した結論を、東は容易に上回ってみせる。理詰めで一分の隙もない布陣の穴を巧みに突いて、一手一手、シユテルを詰みへと追い込んでくる。

その証拠に、木の駒が盤を打つ音がズレてきている。最初は互いに一秒もかからず、テンポよくぱちんぱちんと駒を進めていたのだが、次第にシユテルの思考時間だけが二秒、三秒、四秒と伸び始めていた。打つ度に追いつめられていくから、どう返すかを迷うようになるのだ。

自らの知能と思考回路に自信を持っていたシユテルにとって、それ

を真正面から打ち砕かれるような有様は多少なりともショックであつたが。

更に驚くべきは、束の目線と、様子である。彼女は将棋盤も、シユテルの目すらも見えていない。心ここにあらずと言つた感じで、将棋や会話以外の何かに没頭している。

それを知覚した時、シユテルはこの場所に自分が呼ばれた本当の理由を理解した。それは将棋の対局相手でも、言葉を走らせ論を語る相手としてでもない。

ただの、暇潰しだ。

何をするでもない時間、ただ肉体を動かし一箇所に座つて落ち着く為の相手。それだけが、この場へ自分を呼び出した理由。

だがシユテルは、不思議とそれが屈辱であるとは思わなかつた。実力が元から違いすぎるのだ。

だって、丸々30秒もかかつて思いついた逆転の一手をあつさり読まれ、逆に窮地に叩き込まれるのを何度も何度も繰り返されては。これはもう、どうしようもないという諦めだつて浮かぶものだから。

——— ぱちん。

ぱちん。

この差を、恐ろしいと感じる。これが「天才」なのだ。常人が何百年かかつてたどり着く道を一瞬で踏破し、時代を牽引していく。

その尖兵として苛烈に使われ、自らの生命を燃やされるのは、私達にとつて多分幸福なのだろう。少なくとも、無能な王に無為に生命を燃やされるよりは。

そういう納得をしなければ、心の中にある紅い炎も、凍りついてしまふのかもしれない。

「あつ」

不意に、束がこちらへ気づく。今まで夢遊のように動かしていた駒が織りなす盤上を一瞬見て、それからシユテルに向けて問いかけた。「ね、そろそろじゃない？」

一体何がそろそろなのか、と少し考えてから、シユテルは自らの王がこの瞬間まで暇潰しをする一つの理由に思い当たり、返した。

「はい、準備は完了しておりますし、ブリッジからも異常は報告されていませんから、当初の予定通りに流れるかと」

「よおーし、じゃあ見よつか、シユテるん！ いやあー、楽しみで楽しみでさ、居てもたつても居られなくなっちゃうから君を呼んだんだよ。さ、早く早くっ」

「かしこまりました」

シユテルは散らかった部屋の片隅からリモコンを引っ張り出してスイッチを押す。すると空中にホロビジョンが投影される。これは元から艦長室にあつたギミックだが、本来魔力で起動させるはずなのだが、東は昔のラボにあつた古いブラウン管テレビのリモコンをわざわざ再現して、それで動かしていた。曰く、風情がある、らしい。

ビジョンに映し出されているのは、管理局本局から放送されている公共放送だ。管理局からの公式発表や一般的なニュースは、ここから管理局の保有する基地や地上本部を経由して、殆ど全ての管理世界へリアルタイムで伝えられている。

本局解体の騒動で長らく途切れていたのが、漸く放送再開になったそんな時期だから、話題はやはり本局解体事件についてのものだった。アナウンサーが被害状況と復興の進み具合を事細かに報告しつつ、次元航行部隊は復帰しつつある、としきりに強調している。

恐らく第29管理世界の独立騒ぎと、それに乗じて各所で独立や政変を騒ぐお調子者共を撃つするためのバイアスであろう、とシユテルは看破した。彼女たちは、本局の大ドックが火の海に包まれているのをこの目で見たのだ。二週間程度でその半分が修復され、任務に就ける状況にあるとはとても考えられなかった。

「ふふ、あはは……さあん、にいー、いいーち」

そんな報道番組に目を向けながら、東が不気味なカウントダウンを始める。それはブリッジで、シヤマルが額に汗を流しながらスイッチに指を触れ、東から厳守を命ぜられた時間と寸分狂いなしに押すタイミングと、完全に一致していた。

映像が乱れ、砂嵐のような映像と不快なノイズが流れる。その数秒後、モニタに現れたのは——顎を上げきり、口を大きく開けて哄笑し、

抑えきれない喜びに打ち震えている——篠ノ之束の、姿だった。

『はろお〜♪ 次元世界の皆あ、私がタバネ・シノノノだよ☆ 長いし変な名前だろうから、特別に束さんと、そう呼ばせてあげちゃおう♪』

身に纏っているのは紛うことなき、高町なのはの戦装束。

リボンでツインテールにまとめた頭の上に、ちよこんとウサミミを乗つけて。

彼女は語る。演台の上、スポットライトに照らされて、踊りながら言葉を紡ぐ。

『君たちにとって、私はテロリストだ。本局をバラバラにして、次元世界の統治にほんの少しヒビを入れた不敵で傲慢なテロリスト。そして皆が知りたいのは、その目的なんじゃないかな？ あんな大事件を起こしておいて、何の声明も発表していない。大それた事を成すために、命がけで動く理由が分からない。それってとっても怖いよね？ 恐ろしいよね？』

その放送を見ているのは、無論束とシュテルの二人だけではない。

本局の病室で、後悔に胸震わせていた千冬と、クロノも。

ただ一人軽症で戦いを終え、遅れてきたクロノと合流し千冬となのはを本局へと送り届けた後、ただ一人無限書庫に籠っているユーノにも。

——そして、今はまた眠りについていてるのはの病室にだって。

その放送は等しく、聞こえている。

『じゃあ、私はどうして動いたのか、特別大サービスで教えてあげちゃうね♪ それはあ……この世界を、変えるためなんだ』

千冬は包帯に巻かれていてろくに動かさないと腕を、机に強く、叩きつけた。

それを見ているクロノは己の無力さを改めて打ち付けられ、この日この時、篠ノ之束が時空管理局にとって、不倶戴天の敵になったこと

を実感した。

打ち倒さねばならない。これ以上事態が悪くなる前に。それが二人に共通する想いだった。

『それは別に、時空管理局を潰す！なんてことじゃないよ？ 確かに管理局にはあくどい面が無くはないけど、それを潰した所で、待っているのは混乱だけさ。ベルカが終わってから数百年、無法地帯をここまで抑えて治める、そんな組織を潰したくはない。でもね』

明かりすら無い円筒形の書庫内で、ユーノ・スクライアは探し求める。何故、どうして。篠ノ之束はああも変わってしまったのか。

彼女は言った。物事には全てに理由がある。ユーノは彼女の助手であり、彼女の言うことを全て信じているから、その言葉にだって間違いはないとも信じている。

そう、束のあの変わりよう。かつて友だった人間を傷つけ、容赦なく叩き落とすあの無慈悲さにだって、何か、大きな理由があるはずだ。

そしてそれは——彼女が手に入れたロストログア、夜天の書がヒントになっているのかもしれないと、そう考えていた。

『管理局という大きい、果てしなく大きな組織が行きつく先は、一体何なのか。それをよく考えてみると、じつと黙って放置している訳にはいかなくなったのさ。だってこのままじゃあ——世界が一つに、なっちゃうんだもん』

管理局史上最大の危機に召集された、タバネ・シノノノ対策会議の最中にもそれは流された。余りにも挑発的な態度と口調に殆どの人間が怒りを露わにする中——会議の端で、立っているだけでしかないなかつたある老提督は、口の中で嗤い声を密かに響かせた。

——これで、我々の出番が来る。

『ちっぽけな頭で、考えてみてよ。この次元空間に、幾千幾万、幾億の世界があつて。そこにまた、幾千幾万幾億の生命いのちがある。それって凄く、素敵なことだよ？ でもこのままじゃ、その殆どが消えて無くなる。管理局の中で一生懸命に頑張る人たちの、全ての思惑とは裏腹に。組織はただ、制御出来ない化物のように動きのたうち——世界は一つに、平和になつてしまう』

管理世界のすべての住民が、この映像を見て、そして思うだろう。この訳の分からない演説は、一体何なんだ、と。

彼らは束の存在を不気味に思うだろう。そしてますます、束を凶悪な犯罪者として認識し、その排除と消滅を心から願うようになるだろう。

だが、それでいい。それこそがこの放送の狙いの一つだ。

『だから、私がここにいます。そうさせないために。世界がこのまま、多数による混沌であることを保つ為。混沌は争いの種になるし、ふとしたきっかけで破局を迎えるけれど——単一であることが齎す永遠の平和よりは、そっちの方がよっぽどいい。認められないって人は、構わないよ？ 私を倒してみればいい。出来るものならね』

それは、この世界を動かす歯車に、外から繋がり、改竄するための効果的な手段。

人に憎まれ、疎まれ、不適當だとみなされる。それでいいし、それがいい。

『まあ、そういうことで。私はこれからも暴れ続けるし、それが迷惑だって人に対しては、容赦なく戦ってみせるよ。取り敢えずそれが、篠ノ之束の所信表明になるのかな？ それじゃ♥』

軽くウインクして、モニタに写っていた束は消えた。その後には、またノイズと砂嵐が残るのみである。

シユテルは、胸から湧き出す滾りを抑えかねていた。これは宣戦布告だ。これを聞いた時空管理局はすぐさま行動に移るだろう。こうまで巫山戯た愉快犯を倒し得ないというのなら、それは管理局の沽券に関わることだし、何より平和でなく混沌を望む彼女と管理局とは、永遠に相容れることはない。

大戦おおいくさが始まる。次元世界を揺らす戦いを、何億人が連ねる組織と、たった一人と六体とが引き起こすのだ。

今まで闇の書という暗く孤独な場所に閉じ込められていたシユテルにとって、それはとても熱く、胸滾る出来事のように思われた。

ああ、早く戦いたい。我らが王の駒となりて、千軍万馬の敵と戦い、勝利を捧げ——

そこで、気づいた。

自分は駒で、王は指し手だ。そして、管理局の有象無象共もまた駒だろう。

では、王と相對する指し手とは、一体誰なのか？

ふと振り向けば、束は再び将棋盤に向かい合っている。盤上の様子は、もはやほほシユテルの詰みと言っていい状況。何度も追い詰められ、必死に抵抗しようと呆気無く振り払われたのだから当たり前だ。

しかし、束は——睨んでいた。シユテルではなく、盤の向かいに幻視している誰かを。

その目つきに、シユテルは驚愕する。自分と打っている時の、眠たげな瞳とはまるで違うではないか。そう、まるで——対等の相手と、戦っているような。

一体誰と、戦っているのですか。シユテルはそう問いかけようとして、言葉を詰まらせた。一瞬でも邪魔をすれば、その怒りによって『解体』されてもおかしくないくらいに——王は鎮まり、集中していた。

「私は既に行動した。なら次は、君たちの手番だよ。さてさて、どう動くのかな？」

そんな疑問の言葉だけが、ただ一度、聞こえた。

おまけ（IS編）

いつかどこかの一夏さん

「……」

朝、9：00。

俺は眠たげな瞳をゴシゴシ擦りながら、ロープウェイのロングシート、その一番端つこに座り込んでいた。とにかく眠たくなるので、強く擦る。こういうことを何回が続いていると押し込まれた目が痛いのだが、それでも眠ってしまう訳にはいかないのだ。

とはいえ、昨日の夜からかなりの強行軍だった。ギリギリまで出発地点に居残りしてお別れとか色々やった後、纏めた荷物を宅配便にお預かりしてもらって、俺本人は着の身着のまま特急に乗り、夜更けに着いたターミナル駅のホテルへチェックイン。ここで本当はとつと寝なければならぬ所だが、色々後ろ髪引かれる気持ちは抑えきれず、離ればなれになる友人たちと携帯で話し込んでしまい、結局一時就寝で四時起床の三時間睡眠と相成ってしまった。

それから朝食なんて食べる暇もなく、1号なんて景気のいい名前がくつついている特急へ。暫く乗ったら今度は新幹線の始発に乗り、また別の特急に乗って、それがまたお目当ての駅に止まらないものだから今度は鈍行へと都落ち乗車して。最後に人っ子一人居ない駅の近くにある新品ピカピカ、如何にも近未来的なロープウェイへと飛び乗って、今に至る。

ああ、疲れた。

「ふあああ……」

自然に出てしまったあくびは、我ながら大きすぎて、唇の端を切っ
てしまいそうだ。

いかんいかん。うっかりうとうとし始めて、気がついたら『終点ですよー』だなんてやりたくない。ここには何度もお世話になる予定なんだから。

そこで、眠気を誤魔化すために何かをひたすら見ることにした。窓

から一面に広がる海でもなく、誰も居ない車内でもなく、バッグから取り出した一冊の本を手に取ってペラペラめくる。

「凄く眠いのには本なんか見て、活字に眠らされるんじゃないか、って？」

「この俺を侮るなかれ。可愛い女子が一杯の漫画を見て、眠くなる青年男子は存在しないのだ。」

「それにしても……」

漫画に出て来るハイティーンの綺麗な少女たちは、揃って同じデザイン制服を着ている。

セーラーとかブレザーじゃない。清廉さと純真さを表す白と黒とで詠えたワンピースのジャケットに、暖かい血が通うような赤のライン。更にそこへ青いリボンタイを付け加えて、女の子らしさもアピールしている——というのが、漫画で書かれていたデザインの意味だ。そんな服を着ている彼女は、今から俺が向かう人工島について一杯アピールしてくる。

世界最先端の技術が惜しみなく使われている、次世代教育のモデルケース。

島内だけで衣食住、それから娯楽の全てが揃う楽園。

卒業生たちがそれぞれ進む進路は多岐にわたり、どの分野でも第一線で活動している。

そんな、夢のような学校の名前は——

IS学園。

「なんだよなあ」

俺は改めて、信じられない気持ちを吐き出すように溜息をついた。インフィニット・ストラトス、縮めてISは、宇宙空間での活動を想定し、開発されたマルチフォーム・スーツ。開発当初こそ注目されなかったものの、今ではその圧倒的な性能を世界中に知らしめている。

但し、宇宙開発用のスーツではなく、軍事用の飛行パワードスーツとして。

しかし、アラスカ条約によって軍事利用の禁止が決定され、その後

は災害救助からスポーツまで、あらゆる用途に対応した多目的型の作業機械として、世界中で活用されている。

但し、ISには女性しか搭乗できない。そしてその結果、女性の社会的地位は向上しつつある。

と、ここまで脳内で言い終わってから、俺は安堵した。

「うん、言えるな、空で言えるぞ」

ここに来るからには、これくらいのことには覚えて行かなければならない。覚えなければなます切りにされても文句は言えないっぽい知識群、その一端が、今暗唱したISの概要だ。

一ヶ月前、「全部覚えろ」というメッセージとともに電話帳より大きい資料を渡された時は目眩を起こしたものだ。今の俺はそれを、いくらか噛み砕いてはいるが全て理解している。

それもこれも、資料と同時に生きてきた漫画の単行本、全十冊のおかげだった。固っ苦しい活字の群れは中々頭に入ってこないが、可愛い女の子が身振り手振りを加えて必死に解説してくればそれは嫌でも頭に入るといふものだろう。

ただ、登場人物のほぼ全員が幼い少女で、茶髪のツインテールというのはいかがと思う。それで全員見分けがついてしまうというのも、書いた作家の実力だろうけど。

「……一夏」

とそこで、唐突に現れた、何か被さってくるような感覚。それを確かめるために上を見る。

すると、長く美しい黒髪をポニーテールにして引っさげている、自分と同じ年くらいの少女がそこに居た。着ているのは、今まで漫画で飽きるほど見たIS学園の制服。ポニーテールを纏めている白いリボンも特徴的だ。

俺はこの顔を、何度も見たことがある。ある時は赤ちゃん同士、またある時は剣道場で学び合う友達として。そして、ある事情で離れ離れになってもなんやかんや、ネットを使った交流を続けているのだった。

しかしながら、まさかこんな所で会うとは思わなかった。だから、

俺はこの、武の道まっしぐらなファースト幼馴染にして、古くから神社を営む篠ノ之家次女の名前を、驚きを込めて呼んだ。

「箒……!?!」

「ひ、久しぶりだな、一夏。ざっと三ヶ月ぶりか」

挨拶をする箒の顔は、何だかとても嬉しそうだ。

三ヶ月ぶり。最後にテレビ電話した日を勘定に入ればそうなるだろう。

入れなければもう六年は会っていないけど。

「箒がここにいるなんて。驚いたよ!」

「そういえばお前には、受験先を言っただけじゃなかったな……まあ、受験先というよりは……その、違うんだが」

「なんのことだ?」

「い、いや、何でもない! それより一夏、お前の方こそどうしてここに……」

「のは、当たり前だろう? ニュース見ないのか?」

何の気なしにそう反論すると、箒はしゅんとして、此方を気遣うような視線を向け始めた。

「そうだな、当たり前か……何しろお前は……あ、いや、ごめん」

「いや、別に気にすることねえよ。もうなっちまったもんだし、今更言っても仕方ないから」

あえて言葉を濁す箒だけど、そういう遠慮とかは逆に重く感じてしまう。

何の事はない。本来女性だけしか動かせないIS専門の学園に、男である俺が来ていることから考えれば、むしろ当然というべきことだ。

そう、俺は世界で唯一ISを動かせる男性——ということだ。

「……正直、驚いたよ。何時かは現れると思っていただけ、その最初がまさかお前だなんて」

「いや、ある意味当然なのかもしれないぞ? なにせ俺の姉は、IS操縦者の代表にして、世界大会優勝者だし」

「血のことはどうでもいいはずだ! ……だったら、私だってもつと

……」

箒が何かぼそぼそ言ったが、俺にはさっぱり聞こえなかった。けどそれが逆に良かったようで、箒は流れを変えてまた話し続ける。

「そ、そうだ！ お前の地元の方は……皆、大丈夫なのか？」

あえて大丈夫、なんて剣呑な言葉を使ったのは、多分俺が男性操縦者になったことの余波を心配してのことだろう。その日までごくごく普通の中学三年生だった俺が、あつという間に世界で唯一の存在になってしまったのだ。当然政府やら研究機関やら、ISに関連した企業、更には黒服の怖いおじさんたちまでが一斉に近づいてきた。

でも、その程度で参るくらい、俺の周りの人達は軟じゃないのだ。だから、心配している箒の杞憂を吹き飛ばすため、自分のことでもないので胸を張って話してやる。

「冗談言うなよ。皆いつも通りさ。おやつさんとおふくろさんは喫茶店続けてるし、兄ちゃんと姉ちゃんも、それからおねえさんたちも、危ない事にはなつてないみたいだ……なんだかとても忙しくはあるみたいだけどさ」

「そうか……そうだな。彼処にいる人は皆、強いものな。私が心配する方が馬鹿だったか」

「勿論箒の家の神社も無事だぜ。雪子おばさんと、神崎の人たちが綺麗に管理してくれてた。合格祈願に行ったんだから間違いないさ」

「おお、そうなのか……ん、待てよ？ だとすると、その結果としてお前はああなったのか？」

最初は俺の報告にうんうん、と喜びながら頷く箒だったが、段々と顔色を変えていく。

「うっ。よ、よく考えると……そう、かも」

「お前なあ……！」

あ、いけない。箒の顔が喜びから驚き、そして怒りへと変わりつつある。

こいつ、現代に生きる武人みたいな顔していて、その実結構沸点が低いのだ。

「家の神社を散々拝み倒しておいて、よくも『受験場所を間違える』なんて真似が出来たな!？」

「な、なんだよそれ! 大体、受験場所が同じ建物でしかも藍越とI Sだなんて、間違えろって言ってるようなもんだろ!？」

「そんな事は関係ないっ! 折角の縁起物を無駄にした不心得者めっ!」

「わ、悪かった、悪かったっ!」

だから、何処からともなく取り出した竹刀を、俺の頭上に振り下ろすだけは止めてくれ。そう必死に懇願すると、箒は怒り心頭のまま、でもちゃんと、上段に構えた凶器を下ろしてくれた。

「……全く。一夏、お前というやつはどうしてこうも間が抜けているのだ」

「悪うござんした。それより、箒の方はどうなんだよ。引越し先で上手くやれてたのか?」

「ん、まあそれなりにはな。父も相変わらずだ。私が居なくなっただけになるから、子供相手の剣道教室を開こうとも言っていた」

「そっか、あの人らしいな。けど、お前の家でそんなことやって大丈夫なのか?」

喉奥に引つかかるような疑問をいだいて、俺は箒に問い質す。篠ノ之家は、剣道教室、だなんてのんきな事をやっている状況ではないはずなのだ。とある事情で、『重要人物保護プログラム』という名目により、政府に保護、そして監視されているのだから。

「ふふ……それがな? 慣れてみると結構快適だぞ? 重要人物保護プログラムというやつも」

その言葉に、俺は返す言葉を失った。

快適なのか? 政府の機関に逐次監視されて、時には転校も強いられてしまうという境遇が。

「そ、そうなのか? 俺も最近は何だような目にあってたけど、とにかく息苦しかったぞ? たまに外に出れば、遺伝子を提供してくれ! みたいな文句が煩かったし」

「最初は私もそうだったさ。だが、ああいう手合は最初はしつこいが、

段々と諦めを抱くもののような。保護を受けて三年目にもならずすっかり途絶えてしまう。まあ、私も父も、そう特別な人間ではないということさ」

それに、私たちを人質にとっても無駄というか、それで奴らの首が締まるだけだから——と言った後、箒は何やら意味ありげに俺のことを見つめてくる。何だその目は。俺が助ける、とでも言うのか。

「悪いが今の俺に、テロリスト相手に戦う力はないぞ、箒」

「？ お前は何を言っているんだ？ 前例としてお前が居る、ってことだぞ？」

「ああ、それもそうか……懐かしいなあ。あれからもう何年……って、どうして俺が誘拐されたことと、お前を誘拐しても自殺行為だってことが繋がるんだ？」

「なに？ だってそれは……まさかお前、知らないのか？」

「知らないって、何が？」

「お前が誘拐された後、あの人たちがやったことだよ」

あの人たち、と聞いて、俺の心はドキッ、と跳ねた。別に隠し事をしているわけでも、実はこの俺こそが箒の語る『あの人たち』だ、何という訳でもない。

ただ、凄く懐かしく仄かな心が刺激されて、思わずドキッ、としただけだ。

「いや、知らないけど」

「……そうだな。お前は、そういうことを気にする男じゃないものな……はあ」

「なんだよ、悪いかよ？」

「ああ、悪いとも！ お前が誘拐されて助けだされた後、十数社もの世界的大企業が崩壊し、世界の経済バランスが大きく崩れたことを知らないなんてな！」

なんてことだ。あの人たち、そんなことをやってたなんて。もちろん俺も、経済バランスが不安定になっていたことを知らないほど世間知らずではない。大昔の大恐慌並の不況がもう一度訪れると噂になっていた。結局そこまで景気は変わらず、そのまま有耶無耶になっ

たように見えたが。

多分そうだった裏にも、あの人たちがいるんだろう。

「そこまでして、私たちを誘拐しようというやつは居ない、ということさ。今では父も、ただで警備会社を雇ったような気分だと言ってる。大体そんなに厳しければ、私が剣道の全国大会に出られる訳無いだろう？」

「気楽だなあ」

「ふふ、お前ほどじゃないさ」

なんだよお。と言い返してまたお互い喧嘩腰になってきた所で、ロープウェイの速度が下がった。外を見れば、さっきまで遠くにあった島がもうすぐそこまで近づいている。

『ご乗車有り難うございます。終点、IS学園。IS学園でございませす』

「うしっ、行くか」

「ああ、行こう」

未だ私服の俺はデイバッグを、何故かもう制服姿の箒は通学カバンを手に持ち、席から立つ。

「そっぴや箒。なんでこんな時間に来てるんだ？ 入学式は12時丁度だろ？ もうちよつと遅れてても良かったんじゃないのか？」

「っ！ そ、それは……お前が」

「え、俺？」

「お、お……お前に、会えると！ この時間帯に電車に乗れば、お前に会える！ と姉さん、から、言われ、て……」

顔を真赤にして語る箒。分かる。その気持ち、俺にはよく分かるぞ。なにせ俺だって、ついさっきまで心の奥ではそんなことを思っていたのだから。という事で、大声で同意してやる。

「ああ、俺も同じ気持ちだぜ！」

その一言に、箒は大きく目を見開いた後……何故か冷めた顔で俺に問いかけた。

「うん、そうだな……新入生の中で誰一人見知った人が居ないと、寂しいからな……」

「そうだよなー！ 入学そうそうぼっちなんて耐えられねえよ！ 実際、それが一番心配だったんだー！ いやあ、箒が居てくれて本当に助かった！」

「あ、ははははは、そうだな、私も、一夏が居てくれて、嬉しいよ……」
箒が小さく呟いた後、ドアが開く。すぐ後ろで箒が何やら言葉の続きを呟いていたが、俺は意気揚々と外へ出たので、何も聞こえなかった。

「……うん、最初から分かってた……電話越しとはいえ、六年間ずっとアプローチを続けていたからな……六年間ずっとアプローチを続けていて、これなんだ……姉さん、そしてお姉ちゃんごめんなさい。篠ノ之箒15歳、これから始まる三年間の大チャンス、早速挫けそうです……」

いつかどこかの千冬さん

IS学園の入り口についたら、教員、と名乗る人が俺が来るのを待っていた。女だけの学舎の園である。勿論女性で、しかもこれがかなりの美人だ。身長は低いが胸は大きい所謂トランジスタグラマーという体格で、太縁のメガネまでくつついている。

漫画では、IS学園の女性は総じてレベルが高いと書かれていたけど、なるほどこれはレベルが高い、色んな意味で。そう、感心する心持ちだった。もうちよい正直に言えば、結構ドキツと来た。

「織斑一夏君ですね！ 久しぶり」

「ひ、久しぶり……？ 俺、どこかでお会いしましたか？」

「あれ、忘れちゃった……と言うより、急転直下すぎて覚えてないみたいですね。ほら、入学試験で貴方の試験相手だった」

「あーっ！」

その一言でピンとくる。たった2ヶ月前、俺の運命を変えたあの入学試験は、まだ俺の心の中にはつきり残っていた。

「俺が何もしないで、勝手にコケた人！」

「あ、あははは……」

「ばかものっ」

思わず大声出して言ってしまったので、眼鏡先生は赤面しながら苦笑い、側で控えていた箒は俺の脇腹をちよんちよんと小突いてきた。

確かに公衆の面前で本人にとっては恥ずかしい話をするのは俺が悪かったし、あんまり痛くないのはいいんだけど。いちいち竹刀を取り出すのはどうしてだろう。そういう道具だって、箒の脳内では認識されているのだろうか。だとするとちよっと不真面目だと思う。

「す、すいませんー！」

「ああ、いえいえいいんです。私がドジしたのが悪いんですから……」

あ、改めまして、IS学園で教師をやってます、山田真耶と言います」そんな挨拶の後、これから三年間よろしくね、織斑くん。だなんて言われたら、健康な青年男子としては、男としては鼻の下を伸ばすのは当然だろう。とはいえ箒の手前だ。にへらーとだらしな顔を晒

し続けていたら、今度は胴ではなく面を取ってくるかもしれない。

「織斑一夏です！こ、こちらこそ、宜しく願います！」

そこで、でれでれする気持ちを精一杯に抑え、30度きっかり腰を曲げたお辞儀を行った。顔は目を閉じながらも強張っているが、緩んでいるよりはよほどいいはずだ。

そのお辞儀を見た山田先生は、こちらこそ、と同じ位にきちっとしたお辞儀を返してくれた。続いて、箒も同じように挨拶をする。

良かった。これでだらしない所を見せずに済んだ——と、思ったのもつかの間。直後の一言で、俺は山田真耶というおつちよこちよいで真面目な人間と、そして低身長巨乳眼鏡っ娘教師という属性が生み出すシナジューの脅威を再確認することになる。

「はい、皆さん宜しくお願いますね」

山田先生はこう告げて、挨拶は終わり、と思つたら。打ち切りどころが分からなくて、ずっと頭を下げ続けていた俺の顔を覗きこむように顔を近づけ、おつとりと笑い、

「先生、織斑君みたいな礼儀正しい男の子は、好きですよ」

なんて言ってくれやがった。卑怯すぎる。初対面の美人にそんなことを言われて、喜びの気持ちを隠せない男子が居るわけ無いだろう。いや、無いに決まっている。

「じゃあ、一夏くん。私についてきてくださいね」

だから、やつと先生が背中を向けて案内し始めた後、お辞儀を終えた俺の顔は幸せいっぱい、と書いてある程に緩みきってしまった。そんな俺をじいっと見つめる視線。やばい、と思つて弁解を考えつつ視線の方向へと振り向いたが。

「……あれ？」

「ん、どうした？」

「い、いや箒……お前、怒ってないのか？」

俺が不真面目で不謹慎な態度を見せる度に怒りメーターを振り切らせるはずのファースト幼馴染は、ごく平然とした表情で此方を見つめるだけだった。

「怒る？ 私が？ 何に対してだ」

「え、だ、だって……」

おかしい。いつも街を一緒に歩いていて、俺が美味しそうなパフエに目を奪われていたり、話を聞いていなかったり、綺麗な女の人を視線で追っていたら、箒はいつもいつも竹刀を取り出して——いや、待てよ、織斑一夏。

俺が箒と一緒に出かけるなんて、小学校の四年生以来。かれこれ合わせて六年ぶりではないか。政府の保護下に置かれてから、たまのテレビ電話とメール以外で遣り取りはない。だから最後に箒と直接会ったのは、ずっと昔のことになる。

そうか。昔は昔、今は今。

千冬姉にあこがれて真面目一辺倒だった箒も、少しは男のお茶目心に理解を示してくれるようになったのか。そういえば箒は昔友達が少ないかったけど、離れてからはそういうぼっち話を聞いたことがない。それどころか、友達と買い物に行ったり映画を見たりしていると、事も無げに言ってきたりしていた。まるで世の中の真っ白い事しか知らない子供が、酸いも甘いも噛み分けた大人の女に脱皮したような、凄く立派な成長だ。

偉いぞ、箒！　なんて、何様のような口調で褒めたくなくなってしまった。でもそんなこと言ったら今度こそ百叩きの刑を受けそうなので、オブラートに包みつつ、賞賛してやる。

「箒、お前……大人になったよな」

「ああ、色々あったからな、それに」

「それに？」

「……あんな程度で落ちるものなら、お前はとつくに落ちていただろうしな……」
なるほど。

あの程度の誘惑で墮落するくらいなら、他の低俗な娯楽に染まって、不良になっていたという事か。箒らしくない含みのある言葉は何だか大人っぽい言い回しだし、何処か遠くを見つめるアンニュイな表情も様になっている。

本当に凄い。六年間大して変わってない俺なんかより、ずっと大人

になっている。男子三日会わざれば刮目して見よ、とは言うが、本当は、女子の方がより大きく変わるものなんだな。

素直に尊敬しちまうじゃないか。俺、お前をもう幼馴染という身近な存在に思えないかも。

「大人だなあ箒。俺、惚れちまったよ」

「っ!!……ふん、一夏よ、冗談はほどほどにしておけ……ほどほどに、な……頼む……」

俺の本心からの言葉を、あつさりスルーして歩みゆく箒はやっぱり大人のオンナだった。

さて、一年一組の教室で、俺と箒は別れた。ちなみに、箒は普通の新入生だから、式の用意が始まるまで教室で二時間ほど待機するらしい。一人の教室で溜息をつく箒も大人っぽくて、ちよつとだけ本気でドキッとしたのは内緒にしておこう。

それから山田先生が案内してくれたのは、学園の職員室だった。広い空間にたくさん書類の山載せデスクが立ち並び、コピー機がガーガー唸るその様相は、ちよつと近未来的なデザインだけど、やっぱり学校の職員室だ。強いて言えば、忙しく動いている人の全員が女性なのが、どことなく異国情緒地味な疎外感を感じさせる。

慣れなければ。これから三年間、ひよつとするとずうつとこの調子なのだから。なんて心の奥で覚悟を決めていると、山田先生が俺を面接用のテーブルへと案内してくれる。

そこに座っていたのは、黒いスーツに身を包み、箒以上に黒い長髪の女性。浮かべている、仏頂面だけど何故か暖かくも見える無表情は——最後に会った時と、全く変わっていなかった。

「久しぶりだな、一夏」

本日二回目の「久しぶり」。というか、本来これが一回目の「久しぶ

り」であるはずだった。

だから、箒と会った時よりちよつとだけ落ち着いて、俺も言い返すことが出来た。

「ああ、久しぶり、千冬姉」

「おい。私は教師だぞ、織斑先生と……いや、まだ入学式前だったな。今は許そう」

織斑千冬。IS黎明期に燦然と輝くエースパイロットにして、三年に一度行われるISの競技世界大会、モンド・グロツソの初代優勝者であり、ブリュンヒルデという異名を持つ。現在は後進の教育に力を尽くそうと、IS学園だけでなく世界各地でIS操縦の指導を行っている、まさに現代のジャンヌ・ダルクとも呼ぶべき英雄。

とまあここまでが、漫画からの入れ知恵。

六年前まで一緒に暮らしていた俺から見れば、厳しいけどいちいちかっこ良くて、でも家事は大の苦手。人外じみた身体能力を惜しみなく使うけど、その用途は専ら親しい人とのじゃれあいだったり。苦労ばかりかけてしまう俺の頭へいつもげんこつを振り落とすけど、でも俺のことを見放したことは一度もない。

そんな、俺の姉であり、俺の頭上に遥か輝く幾つかの星、その中の一つ。それが、織斑一夏にとつての織斑千冬だった。

「それにしても、本当に先生やつてるんだなあ」

「それ以外の何に見える。お前、ひよつとして信じてなかったのか？」

「い、いや、そんな事はないけど」

「あの教書に書いてあったろう。私が教師だとはつきりな」

「だ、だから信じてないなんてことは無いって」

でも、頭の中でそういうロマン溢れる単語を並べて表現しても、超厳しい態度に変わりはなく。

威圧的に睨む千冬姉と俺の間で、暫くの無言タイム。

そして、荒野に立つガンマンが自慢のリボルバーを僅かな時間で引き抜くように、千冬姉の口が素早く開かれた。いぎ、試合開始。

「PICとはなんだ」

「パッシブ・イナーシャル・キャンセラー。要するに常時発動する重力

制御装置で、ISの基本システム。これを使うことでISは浮遊・加減速などを行うことができる」

「ハイパーセンサーとは」

「ISのコアに入ってる超高性能のセンサー。通常視認できない遠距離や後方に目をつけることが出来る。宇宙開発用に仕込まれてたから、地球で使われてる今はリミッターが掛かってる」

「シールドバリアー」

「不可視の防壁。大抵の攻撃は防ぐけど、攻撃を受ける度にエネルギーを消耗する。試合とか模擬戦だとエネルギー全消費で敗北判定になる」

「絶対防御とどう違う？」

「シールドバリアーで防げず、しかも致死に至る攻撃のみ、絶対防御が発動して操縦者の死亡を防ぐ。要するにセーフティシャツター」

千冬姉が問いを出すたび、俺は一息で答えを述べた。一言足りとも間違えちゃいけないから、当然手に汗握り、額にも冷や汗がじわりと滲み出た。

そして、試合終了。ゴングの鳴り響く音が聞こえてくるようだ。

「……なるほど、ちゃんと予習はしてきたようだな」

「そりやあもう。やらないと殺す、みたいな筆跡でメッセージ出したの千冬姉じゃないか」

「確かに、そうだったな。良くやった、一夏」

千冬姉はふふ、と苦笑する。どうやらしのげたようだ。俺は机の下の手をこっそり握り締め、心の中では激しくガッツポーズを取り。

「……まあ、お前にはあの教書よりこいつの方が効果的だったんだろうが」

直後、千冬姉が手元から取り出してきたタイトル『教えてNNちゃん！ IS編第一巻』のカラー表紙を見て、思いつき机に突っ伏した。

「こ、こっそり入れてたんじゃないのかよ……裏切り者お」

毎度おなじみ千冬姉の無茶ぶりから俺を守るために、有志が秘密裏に投入してくれた切り札だと思っていたのに。大体なんで千冬姉の

単行本にカバーがあつて、俺のそれにはカバーが無いんだよ。そんな恨み節は、千冬姉の苦笑により打ち消された。

「どうせ楽しんで私にいい格好をしようとしたんだろう。人生そんなに甘くはないということだ」

「すみませんでした……」

「ふん、ともあれ覚えてきたのだから、許すには許す。しかし……教科書は漫画じゃないぞ」

覚悟しておけ、という恐怖の念押しに、俺は首をこくこくと振るしか無かつた。

「しかしまあ、あいつはお前と箒には本当にダダ甘なんだから……困ったものだ」

「昔つからそうだよな。俺としては嬉しい事だけど「何か言ったか？」「イエナシデモ」

ギロ、と睨みつける目に、さつき一瞬見せてくれた褒め言葉の暖かさは一欠片も残っていない。

この凶悪なまでの厳格さが千冬姉の特徴であり魅力なんだろうが、さつきの箒を少しは見習ってほしい。と、心の中で呟いたとしても目ざとく聞いて来そうなのが千冬姉の怖さだ。

「……まあ、仮にあいつがやらんでも、お前は必ず甘やかされただろうがな……こんなまだるっこしいことはせず、親切丁寧に、一から十まで根気よく付き添ってやるだろうし……」

だけど、そう言って困ったように目を閉じながら思い返す表情は、何故か楽しそうに見えてしまうのも、それはそれで、千冬姉だった。

「よし。話は以上だ」

言うべきことはそれで終わりだったらしく、千冬姉は俺に机の上のトランクと、通学鞆を押し付けてきた。この中に、世界で一つだけのIS学園男子制服があるという。

「更衣室で着替えて、とつとと一年一組の教室へ行ってやれ」

「え？　じゃあ俺、箒と同じクラスなのか？」

「そうだ。あいつのためにもな、早く着替えてやれよ」

椅子から立ち上がってさつきと業務に戻ろうとしながらも、千冬姉

はそう釘を押ししてくる。妙に箒のことを気遣うが、それは恐らく、千冬姉が一年の担任だからに違いない。誰だつて、自分の受け持つ生徒が入学早々一人ぼっちになつてゐるのを見たくはないんだろう。

これは協力せねば。織斑千冬の姉としてではなく、IS学園、一年一組の生徒として！

「分かつた。大丈夫、安心してくれ……じゃなくて、安心して下さい、織斑先生！ 箒は俺が、絶対に一人ぼっちにはさせませんから！」

「……一夏、お前……」

とか言つてみたら、千冬姉はなんだかすさまじい顔をしてこつちを見つめてきた。

やっぱり、口調を変えるにはタイミングがまずかつただろうか。

「……分かつた。期待しているぞ、織斑」

「はい！ 大船に乗つた気持ちで任せてください！」

ところがそうでもなかつたようで。

それなら一安心とばかりに、俺は職員室を脱出し、一路男性更衣室へと向かつた。

いつかどこかの一年一組

結局、女子更衣室ばかりの中で男子更衣室を探すのに手間取ったりして、箒のいる教室に来たのはちよつと後になってしまった。それでも箒は嬉しそうな顔をして俺と話していたが、やはり一人ぼっちなのは何だかんだ寂しいのだろう。

まあ、五分も経たずに他の将来のクラスメイトが続々とやってきて、物珍しいのか俺のことをもみくちやにするくらい近づいてきたから別れざるを得なかったけど。

「ねえ君、織斑一夏?」

「世界で唯一の男性IS操縦者だよね?」

「うそー、同じクラスなんだ! これからよろしくね!」

以下の言葉を、もう何人から言われたかわからない。入学したての女子高生というのは元気いっぱいが共通点のようで、しきりに握手されたり、笑いかけられたり、まるで動物園のコアラになったかのようなチヤホヤされっぷりだった。

「よろしく。よろしく。よろしく……」

と、機械的じゅんぐりで返答していきながら、ああ、これが普通の反応なんだろうなあ、と今更ながら実感する。なにせ今まで出会った三人を並べれば、幼馴染、教師、教師で姉君、と、どれも特殊なケースだ。特に前と後ろの二人は、俺の特異性なんざ気にするタマじやないし。

「しかも織斑くん、千冬様の弟さんなんだよね!」

「ああ、そうだけど」

なんて無造作に認めた途端、一気に沸き立つ教室内。そういえば、世界最強の女性なんだから、IS学園に入ってくるような女子には大気なんだろうなあ、と思っただのも後の祭り。俺は更なるもみくちや、一人満員電車（しかも女性専用車）状態になって根掘り葉掘り聞かされることとなった。

「千冬様って、やっぱり織斑くんみたいな男子から見ても最強なの!」
「……、まあ、な。IS操縦者どころか、IS無しでもむちやくちや強

「いつてのは確か。うちの中学にも男のファンすげえいたし」

「すげえいた、と言うか、もう殆どが千冬姉の大ファンだった。地元
のヒーローだつてこともあるかもしれないが、ISを開発する以前か
らファンだったという、濃くて熱くてなんだかちよつと気味悪い、言
うなれば千冬オタクな先輩もたくさん居た記憶がある。」

「キャーキャーキャー！ やっぱ凄いわ、ブリュンヒルデの千冬様
！ ねえ、君がISを動かさせたのも、やっぱブリュンヒルデの血な
のかしら!？」

「いや、それはないと思う……見て分かると思うけど、我ながら全く似
てない姉弟だしさ。あと、ブリュンヒルデって千ふ……ごほん、織斑
先生の前で言わない方がいいぜ？ なんか嫌いみたいだし、その呼び
名」

「うっそお！ 流石織斑くん、姉弟しか知らない意外な事実……！」
それまでブリュンヒルデブリュンヒルデと聖句を呟くように言っ
てた女の子は、驚いて口を閉じモゴモゴと恥ずかしがるように動かし
た。

まあ、外側ではそういう素振りを出していないから、勘違いされる
のも当然なんだろうが。たまに海鳴に帰ってくると、俺の酌を取りな
がらいつも、今日はく回ブリュンヒルデと呼ばれた、嫌な気分になる、
とかそういう話をしてくるのだ。

口を開けば出て来るのは、やれ、自分には相応しくない渾名だとか、
最強というなら、あいつの方が相応しいとか。その謙虚さはどこまで
も高みを目指す千冬姉らしいんだけど、千冬姉のいう『あいつ』だつ
て、同じように自分には似合わないとか言つて、最強は千冬姉だ、と
か薦めてきそうなのがおかしくて、笑つたらしこたま頭をぐりぐりさ
れた。酷い姉だ。

「ねえ。織斑くん？ 織斑くんは確かに、千冬様の実の弟なんだよね
？」

「……今の流れで確認、必要か？ ああ、確かに血縁上の親戚だ」

「じ、じゃあ、もし、もしもだよ？ 織斑くんと私が……ふ、フォー
リンラブしたら、私つてば千冬様の義理の妹になれるつて……」

!!

その瞬間、話は何だか妙な方向にすつ飛び始めた。

「そ、その発想は無かった……そうよ、その手があったわ!」

「これなら誰に憚ることなくお姉様と呼べる!」

君たち、元から憚ろうだなんて考えてないだろ。なんてツツ込んで、女の子たちは上の空。

「そして千冬様からはあ……『どうした? 妹よ』なんて呼んで頂ける!!」

「きやあああああつ! お姉様っ!」

「ああ、お姉様のダメな妹になりたい!」

「そして飴と鞭とで躰をして!」

元気で何よりなことだが、弟として暮らすのが結構大変だったのだから、当然妹もそうだと思うのだよ、クラスメイト諸君。仮にそうなったとしても、多分飴と鞭じゃなくて、鞭が9割……だ、なんて冷静に指摘してやる前に、女子一同は俺の目の前で代わりばんこに飛び出てきて、何やらもじもじして顔を赤らめながらこんなことを言い出し始めた。

「織斑くん! ちょっとお話があるんだけどっ」

「ねえねえ、入学式の後、予定……あるかな?」

「あー、誘うつもり!! 抜け駆けはダメ!」

「私、織斑くんのこと、第一印象から決めてました!」

何が第一印象だよ、どう見ても玉の輿狙いじゃねえか!

とはいえ、その玉はこの女性にとってかなりの価値を持っているようだ。瞬く間に俺の席には多くの女性が詰めかけ、俺の視界は白黒赤の制服とそれぞれ個性的な美貌でいっぱいになった。

抜け出そうとして遠くを見ると、何故か教室のドアが開けっぴろげになっていて、そこから続々と増援(?)が押し寄せってくる。多分、他の一年のクラスか。いや、上級生が大半だ。

「ねえ、イチカくん……だっけ? お姉さん、少し貴方に興味あるかも……」

「ISとかで分からないことがあったら、後で教えてあげる……二人

きり、で、ね♪」

「わたしにしますか？わたしにしますか？それともわ・た・し？」

1つ2つしか年の離れていない女性のことをお姉さんとは呼びたくないのだが。とはいえ、入学したての一年生を押しつけ、ずけずけと俺の真ん前というベストポジションでアピールし続けるその熱意には恐れ入るし、先輩と呼ばせていただく。硬い口調で。

しかしこの女性たち、いったいどのタイミング、どの時間で話を広めてきたのだろう。女性のネットワークというのは、ISのコア・ネットワークより謎が多かった。

「……だああ、ちよ、ちよつと待って！ いや待ってくださいお願いします！ うわぶっ」

女の子の波にあつぶあつぶと溺れながら、俺が最後に助けを求めたのは箒だった。あいつは今更俺に聞くようなこともないらしく、窓際の席で一人黄昏れていた。こちらをジトツと生暖かく見つめる瞳がこれまたヒジョーに厳しい。こちらが何をしたわけでもないんだが、やっぱり女にうつつを抜かしている、という風に見えてしまうのだろうか。

とはいえ、今は箒を頼むしか、現状を打開する方法はない。お願いだから、六年の別離で鍛えられたアダルティ・パワー、オトナの魅力でどうにかしてくれ！

てなわけで、俺は私立聖祥大附属小学校在籍時に教わった身振り手振りに寄るサインでどうにか連絡をとりあう。ちなみに、これは俺たちの7期前の先輩が編み出した、対天使・天災・天罰用のブロック・サインで、なぜだか妙に完成度が高い。

『た・す・け・て』

『我に余剰戦力なし。そこで戦死せよ』

あつさり拒否された。箒よ、幼馴染としてその薄情さはどうなんだ。と言うかあいつ、いつの間にか俺の隣に位置して「織斑一夏整理券」なんて配布してやがる！

俺の身体を商売に使うつもり!? 人でなし! なんて思いもした

が、どうやら金をとっているわけじゃないらしい。いや、だからって許したくはないけど。大体、整理券なんて何時作ったんだろうか。天才の妹なら、それくらいのごときは朝飯前なのかもしれないが。

「さあ、皆さん、番号順に並んで並んで。券に書いてあると思います。が、アピールタイムは一人30秒が限度。握手以上のスキンシップは現時点ではNGですからね」

「ち、ちよつとあんた何よ、何様よ！ 私とちふゆさ……織斑くんの間割って入るつもり!？」

ほれみろ、何だか上級生らしい女子に絡まれてるじゃないか。悪いことは言わないから、因縁付けられる前に変なことは――

「私は一夏の幼馴染です。ちなみに、生まれた時から一緒に、転校で離れてからも六年間遠距離で交流を続けてきました。こいつの色恋事情に介入する権利はあると思いますか?」

「ぐ、ぐぬぬ……」

なんだよその理屈は。いや、一応上級生が苦い顔をしながらも引き下がるんだから、筋は通っているんだろう。俺の視界からは見えない何らかの、説得力ある論理が。

「それに皆さん始業式まで騒いでいたら、憧れの千冬様に申し訳が立たないでしょう」

「ぎくつー!」

「ぎくぎくつー!」

「あの人は時間には厳しいですよ……? 最も、これまで千冬さんの教鞭を身に沁みつけた上級生の方々には、とつくにお分かりのことかもしれないが」

という、箒のセメントじみた、しかし一步も引かない言い分に、押し強い上級生陣も観念したようだ。言外にちらちら見え隠れする千冬姉の鬼教師ぶりに戦いたのかもしれないけど。とはいえ、先に取り付いた一年小娘の順番抜かしをすることなく、きちんと箒の整理券を受け取って、教室の外まで続く長い列を作っていた。

何だか千冬姉が乗り移ったようなその偉業に、俺はぱちぱちと拍手を贈る。口では酷いことを言いながら、何だかんだで俺を助けてくれ

る所まで千冬姉にそっくりだ。考えてみれば確かに目の前の女の子たちの熱烈アピールは変わらないが、それでも10人一気に寄せてこられるより、こうして一人一人相手できる状況のほうが気が楽になる。

それに、どんな理由があるにしろ、俺という一人の初対面の人間、しかも男性を何かに誘ってくれるんだ。無碍な返答をしたくもない。

『箒・あ・り・が・と・な』

『例には及ばん。というかその古いサイン方式をとつと直せ馬鹿。読みづらいわ』

そんな感謝の気持を込めてサインを送ったら、どうやら俺だけ大分時代遅れだったようだ。おかしいなあ、発案者の二人に手取り足取り教わったやつなんだけど。いや、だから古いのか。

さて、箒のフォローも相まって、俺は激しい女子のアプローチ、計103人のお誘いをどうにか全部断ることが出来た。最後の人が諦めてすごすご帰った直後に、俺たちのクラスの担任である千冬姉が入ってくるくらいギリギリだが、箒が居なければまずそれ以上の時間がかかり、俺の脳天にげんこつが振り下ろされたことだろう。本当に感謝である。

「よしお前たち。私の名前は知っているな？」

「千冬様っ！ 千冬お姉様！ 織斑千冬様！」

「……毎度毎度、馬鹿者が多い。私的空間ならともかく、ここでは私を織斑先生と呼べ。さもなくば……覚悟しろよ」

その言葉に、尚更沸き立つクラスメイト。千冬姉も分かっていたように、こめかみを抑えて顔を俯かせた。とはいえ、あの俯かせ方は20%が精々だ。覚悟しろよ、なんてのも単なる脅し文句に過ぎない。ブリュンヒルデと呼ばれないだけマシ、と言ったレベルだ。

まあお姉様呼ばれはもう慣れっこだろうし、たかだかお姉様と呼ば

れるくらい、千冬姉にとってはどうということもない部類のストレスなのだろう。

「よし、では入学式を行うため、講堂へと移動する」

そこで、先ほどのアピール騒ぎに参加していなかった、数少ない内の一人が手を上げた。如何にも生真面目そうな佇まいで、濃くて暗い青髪が落ち着きをそのまま表している。

「質問があります」

「鷹月静寐だな？ よろしい、だが手短にしろ」

「はい。このIS学園は、ISに関連する教育を、コマ限界まで行うと聞きました」

「その通りだ」

「そして、それは入学式当日から普通に行われるものとも聞きました
が……？」

その問は予め予測されていたものようで、千冬姉は即座にこう答えた。

「そのことだがな。IS学園は確かにIS操縦者、及び開発者、メカニック、その他様々な分野でISに関わる人員を育成するため、確かに授業のコマ数は他の高校と比べて多めになっている」

「はい」

「しかし、入学式と言うのは、お前たちがこの学園に入学することを許可する、と世間様に認めさせるための式典だ。我がIS学園としては、当然これを外すわけにはいかない。どうしてか分かるか？」

そこで、千冬姉はクラス全体を見渡す。当然、俺や箒、質問した女子生徒を含め誰も分からず答えは出ない。しかし、たった一人、高々と、そして堂々と手を挙げた人物が居た。

「先生、それは私たちが『選ばれし人間』であることの証明、なのでしよう？」

その席を見ると、鮮やかで豊かな金髪が俺の目に焼きついた。僅かにロールがかかっている、それが如何にも貴族っぽいというか、そこまで行かなくても名のある家出身であることは間違いないだろう。しかも、澄んだブルーの瞳。話す言葉こそ学園の公用語である日本語

だが、西洋の空気を纏った、外国人の女子だった。

「セシリア・オルコットか。どういふことか、更に説明できるか？」

「もとよりそのつもりですわ」

セシリア、と呼ばれたその女子の名を、俺は聞いたことがある。というよりあの漫画で読んだ。

イギリスの国家代表候補生、セシリア・オルコット。各国で数人しか選ばれない、ISの操縦者としてエリート中のエリートと呼ばれる存在。多分、この一年生の中では最強に近い実力者なのだろう。漫画の中でも、射撃に特化したISを纏って活躍していた記憶がある。

そんな彼女を実際に見てみると、やっぱりエリートなんだな、という風格に満ち溢れていた。

(……でも、やっぱり茶髪のツインテールじゃないんだな)

なんて、妙な感想も同時に抱いてしまったが。

さて、セシリアは千冬姉の呼びかけに応じて椅子から立ち上がり、朗々と響く声で詩の一節を唄い上げるように語り始めた。

「この学園に入学するためには、数々の大きな関門を突破しなければなりません。学力、知力、体力。どれを取っても15歳の一流以上でなければ入学することは出来ませんわ」

「正確な評論だな」

「IS学園に入学する権利を持つのは、15歳以上19歳以下の女子のみ。これを概算するときと3億人になりますわ。そして、一年生の入学定数は1クラス30人が6クラスで180人。つまり、私たちは3億分の180人として、選り抜かれたエリート、ということになりますわ」

確かに、言われてみればその通りだ、と感心した所で、スピーチをしているセシリアの目線が、はつきりと俺に向かっていることに気づく。

そこに込められた意図に気づかないほど、野暮な俺でもない。

偶然でISを動かしただけの、素人。私たち女性が死に物狂いで行った努力を、足で踏みにする男。少なくともこのエリート女子の中では、今の俺は多分そういう立ち位置なんだろう。

「そして、私たちに自分たちが選ばれたエリートであるという自覚を抱かせ、来賓の方々にもそれを認識して頂くことこそ……IS学園入学式の目的。そうではありません？」

そしてこの言葉の裏には、

——貴方はこの学園に相応しくありませんわ！

という、明確な敵意が籠っているようにも思えた。事実そうなのだろう。確かに俺はつい二ヶ月前までISをニュースでしか知らなかったし、覚えたのも付け焼き刃の知識だけだ。

でも、入っちゃったものは仕方ないし、今更ISを動かせないようになれるわけもない。俺にやれることは、精々、この意識の高い女子のお眼鏡に叶うくらい努力して、良い方向に見返してやることだけだ。

もし努力が足りないのなら、今よりもっともつと頑張ればいい。

そうすれば、いつか遠くへ飛べる。

頑張ればより遠くに自分の気持ちを届けられて、気難しい子とも、きつと友達になれる。

いつだったか、母屋のベランダに並んで、月見饅頭を一緒に食べながら聞いたその言葉を、俺は今でも忘れていない。

「……ああ、その通りだオルコット。お前たちは『選ばれし人間』である。これから始まる入学式に出席することで、お前たちはその事を心に深く刻み込むだろう」

千冬姉がセシリアの言葉を認めると、彼女は満足気な表情で席に座った。世界最強のブリュンヒルデに自分の言い分を認められて、元来の高い自尊心が満たされたんだろう。

他のクラスメイトも、堂々たるものだった彼女に圧倒されて、視線を集中させている。

「最も、それが世界で活躍する英雄への第一歩なのか、それとも一生続く無間地獄への片道切符なのかはまだ分からんがな……」

だから、千冬姉がこめかみを痛いほどに摘んで、思いつきり俯きながらぼそつと呟いたその言葉は、俺以外の耳に届いてはいなかったようだった。

いつかどこかの束さん！（前編）

千冬姉に整列させられて、クラスメイトと共に講堂へ入る。開けっぴろげの扉を潜った瞬間、俺はそこかしこから見つめられた。一年一組で比較的最初の方だというのもあるだろうが、やはり女だらけの入学生の中で一人だけ男であること、そして同時に世界で唯一の男性IS操縦者であることが原因なのだろう。

貴賓席に座る、いかにも高級そうな服を着て小奇麗な様相をしている偉い人達が俺に向ける目線には、興味に満ちたものから、好奇、嫉妬、そして軽蔑など、実に多くの感情が込められている。それを一身に浴びるのは精神的に快くないことだった。

しかし、全くの偶然とはいえISを動かしてしまったのだから、今更そこに文句を言っても始まらない。今俺の目の前で新入生の引率をしている千冬姉に、ISを動かせたと知らせた時、現実を直視しろって電話越しに何回言われたか。

やるしかないのだ。少なくとも、千冬姉に恥をかかせないくらいには頑張つて、ここで三年間を過ぎさなければならぬ。『選ばれた』訳でなく、ただ偶然によってIS学園へ来た俺にとって、この入学式はその決意を再確認するためのもの、なのかもしれない。なかった。

「では、これより第5回、IS学園入学式を執り行います」

俺達が座るのは講堂の前方。しかもお決まりのパイプ椅子で、近未来的な学園にしては時代錯誤な感覚がある。

司会席に立つのは、意外なことに老年の男性だった。

この学園の学園長代理を務めている、轡木十蔵と名乗った老人の顔と眼の色は穏やかで、いかにもな親しみやすさと柔和な人柄を感じさせてくれる。恐らく、一癖も二癖もある学園の教師陣や、生徒たちにも暖かく接し、敬愛されているのだろう。

どうして「一癖も二癖も」と断言できたかは、千冬姉が教師になっていることから大凡察して欲しい。

「まず最初に、私から新入生に対する訓示を行わせて頂きます」

あれっ、国歌斉唱は？

と思つたけど、そういえば、I S学園はどの国家にも属さない、という国際規約があつた。位置的に言えば日本国内なのだが、講堂の舞台には幾つもの国旗がずらりと立てかけられている。そりゃあ、入学式で君が代なんか歌つたらそれこそ国際問題になるのも当然か。

無論他の国の国家も同様だろうし、省略されても仕方がない。

「とはいえ、この後ご来賓の方々の歓迎の言葉などもございますので、私からは、我が学園の学園訓を入学生の皆さんに紹介することによつて、訓示に代えさせて頂きます」

こういう言葉を聞いて、ラツキー、と思わない生徒はいないだろう。学校における校長の話なんて、中身が無い、という訳ではないけど長い割に平坦で、眠気誘引剤として著しく効果があるのが当たり前なのだから。とはいえ、流石に世界的学園の入学式。そういう気持ちを表に出さないどころか、心に抱きもしない生徒が大半であるようだ。これは、俺も表情を固くしなければならぬ。

「この学園の学園訓、それは……」

学園長代理の視線が、俺達を見渡す。それからニコツと笑つて、続きを語つた。

『能く学び、能く遊び、能く眠れ』です」

早速、ん？ という表情を浮かばせかけてしまった。前二つの、よく学びよく遊ぶ、というのは如何にも良くある教訓だ。しかし、そこにどうしてよく眠れ、と付け加えられているんだ？

もしかするとこの学園長、大事な予定に寝坊でもしてしまって、恥をかいたことでもあるのかな。そういう風に考えてしまい、思わずおかしくなつてしまう思考を急いで抑える。油断大敵。

「この校訓は、わが校の学園長が自ら定めたものであり、この学園での皆さんに送つてもらふ生活にも深く関わっています。特に最後の「能く眠れ」ということ、これは学生諸君が絶対に忘れてはならないものです、と学園長は「強く」仰つておりました」

ひたすらに強調する学園長代理。ふとその横を見ると、ズラツと並ぶ教師陣の約半数が苦い顔をしていた。特に千冬姉なんて、早速顔を俯かせている。流石にこめかみを押しはしないようだけど、入学式

でそういう態度はどうなんだ、我が姉よ。俺ですらしつかりきりつとした表情で通っているのに。

なんてのんきに考えていた俺は、たぶんまだ甘かった。いや、そもそも甘いか辛いとかの問題でなく、覚悟が足りていなかった。

無論厳しい訓練とかキツイ勉強とか、そういう三年間に対する覚悟ではなく。

この、国家に依存せずISを多数保有している、半ば独立国家のような学園の設立者が、ロクな人間であるはずがないという覚悟。更に、そんな素晴らしくぶっ飛んでいる夢物語のような話を、現実にしてしまうような人間の人格と性格に対する覚悟が、著しく足りていなかった。

「――以上で、私から皆さんへの訓示は、一応終わりとさせて頂きます」

学園訓一つがテーマの訓示にしてはそこそ長めの話が終わり。司会を代わった山田先生の声に合わせて、起立、礼、着席、と俺達が動いたその後に。

「では、次にご来賓の方々から歓迎の言葉を頂きますが……その前に、余興を一つ」

その瞬間、俺達新生を除く、会場の雰囲気agaraりと変わった。金髪だったり赤髪だったり、肌の色も様々な来賓が、揃って沸き立ち始めたのだ。さつきまで厳肅さを表に出していた人たちが一斉に、まるでサーカスカシヨーのクライマックスを迎える直前のように熱気を帯び、がやがやと騒ぎ立てる。

当然、新生は全員困惑するばかりだ。今まで漂っていた厳かな雰囲気、周囲の方から崩されるとは誰も思っていなかったようで、全員不安そうな表情を浮かばせ、戸惑うように周囲を見る。あのセシリアでさえ、この状況はさすがに予想外だったようで、澄ました顔を惑わせていた。

当然俺も、その一人だったのだが。ちよつと後ろで椅子に座っていた筈を見れば、何やら感づいたのだろうか、なんとも言いがたい絶妙な顔をしていた。誕生会と結婚式と葬式が一度にやってきたような、

喜哀どちらとも表現出来ない、しかしとにかく感情に染まっている顔だ。

学園長代理が動いた。演台の前に立った彼の服装は、整っているスーツから、いつの間にも鮮やかな燕尾服に切り替わっている。如何にもマジシャンが着るような服だが、それに変わっている事自体があつという間で、一つのマジックに見えてくる。

「あ、さて、さて、さてさてさて」

それは違うだろう。と突っ込むのをギリギリで我慢したのは、我ながら素晴らしい自己防衛だったと言えよう。ここは何も言わず、傍観者に徹するのが被害を抑える一番の方法だ。あの人たち、特にその一人から教わった、無言の教えである。

「このシルクハット、ちよいとひねれば、ちよいとひねれば」

唐突に出て来たシルクハット。一体今までどこに隠れていたのだろう。そして学園長代理、円筒状のシルクハット、その空洞を潰すように握り締め、雑巾絞りの要領でひねり続ける。

いや、それは中身に入ってるのを出すんだろう!? 捻り潰してどうするんだよ!

俺を含め、箒以外の新入生全員が内心でそういうツツコミをやっていたが——次の仕掛けを見た瞬間、俺も箒と同じく全てを察して、いや、察せてしまった。

「——兎の耳が飛び出した」

兎。確かにシルクハットの中に隠れているものとしてはこの上なくオーソドックスだろう。

しかし、その耳はちよつとだけ光沢が会って、生き物のものとは思えない。

間接はあからさまに機械の間接で、どう考えても生き物じゃない。しかも、先つぽが変にピンクい。

全てが分かった。箒が妙ちきりんな表情で寸劇を見ているのも、千冬姉が死んだ魚の目をしているのも。そういやあの人、世界から姿を消していたっけ。そしてあの漫画にも、IS学園学園長の名前だけは、何故だか書いていなかったっけ——!

「兎の耳を、引張り出せば……」

すとん、というよりずどん、と逆さのシルクハットが地面に落とされ。そこから老齢の学園長代理が、腰をやってしまわないか心配になるくらいの強さで両耳をぐいっと引っ張る。

ぱぱぱあんと爆竹が炸裂するような音。五色の煙幕が舞台の手前で発され、学園長代理や、シルクハットから飛び出してきた『人』の姿を一瞬隠す。

俺は迷わず頭上を見上げた。箒もそうしている。

あの人は昔っから、誰かを見下ろすのが好きだから。

ビルの屋上で街をゆく人々を傍観し、馬鹿馬鹿しそうに、でも、楽しそうに笑う。

そういう人だから。

「——もすもすひねもすうううう……?!?!」

と、講堂の空高くで絶叫したあの人の服装は、いつものような空のように真っ青ブルーなワンピースに、白いエプロンと大きなリボンにくつつけている、少女アリスのそっくりさん。ただし、赤紫色の髪をした、成年の色気あふれる大人の女性だが。

その豊満な胸の膨らみは、俺が前にあつた時より更に大きくなっていった。成長期はとつくに過ぎていくはずなのだが、一体どうして膨らませているのだろうか。偽乳というわけではあるまいし。

そして彼女は、人参型のジェットパックを付けて空を飛んでいる。態々そんなものを開発しないでも、普通にISを付けてくればいいのに。

「新入生の諸君！ よくぞここまで辿り着いた！ 私は嬉しいっ！

そしてとても、楽しいっ！」

その姿を見た客席の外人たちは、一斉に立ち上がって、拍手しながら YEAHHHHHHHだとか、ahhhhhhだとか、Jaaaaaaaだとか、fckin, rabbit! とか叫びだす。新入生はもうとにかく、唾然呆然。教師陣は学園長代理を除き、お通夜に似たテンションで空飛ぶウサギを見つめていた。

「IS学園に毎年毎年資金を貢いでくれる企業諸君、国家諸君もどう

もご苦労！　こんな極東くんだりの小島までよくぞ訪れた！　褒めてつかわすう〜」

仮にも国防次官だったり社長だったりする人たちにそういう殿様な言い方もどうかと思うが、向こうも向こうでスタンディングオベーションしてたりペコペコ頭を下げてたり、跪いて祈ったりもしてやるので特に問題はないのかもしれない。

「あ、轡木くんも演出ご苦労さま〜。流石は我が助手二号、いい仕事をしてくれたっ」

くるり、と振り返って見れば、ついさつき年甲斐もなく奇術師の変装をしていた学園長代理がスーツ姿に戻って照れくさそうに頭を掻いていた。しかも小声で、いやあ、照れますなあだなんて言ってる。なんとも年甲斐がない。

「それじゃー、早速、新入生の皆にとびきりのプレゼントを……へ？」
ジェットパツクと一緒に背負い込んでいた大きい袋に手を伸ばすあの人。だが、その動きがぴん、と止まる。もしや、と思って目を凝らしたら、肩口に止まっているシナモン色のフェレットが、彼女の頬をつんつん、とつついて止めているのが見えた。豆粒のようだが、それでも俺には見覚えがあるから、はつきり分かる。

——しかし、あの人まだあんなことやってるのか。いい加減辞めても罰は当たらないだろうに。

「……ええ〜？　新入生が固まってるから自己紹介？　もう、しょうがないなあ君は。この私の顔なんてみんな知ってるはず——だからこそ？　あんまり非現実的で、信じられてない？　むう、それはやだ」

物言わぬフェレットと、本当に意思を伝わらせて会話しているようなやりとりを見せて。

やれやれ、とまた此方側に振り向いたあの方は。

六年前まで、俺や千冬姉、箒と、それからあの街の皆だけにいつも見せてくれていた——心からの笑みを浮かべて、両手でピースしながら高らかに宣言した。

「私が、IS学園学園長にして、天才の束さんだよっ！ ぶいぶいっ
♪」

いつかどこかの束さん！（後編）

篠ノ之束。

今やその名を全世界に知られている天才であり、ISの基礎理論をたった一人で考案、実証し、現存する全てのISのコア・ユニットを造った女性。頭脳だけでなく身体能力。更には容姿も絶世と誇つて良い傑物で、その高い技術力による実績は、IS以外にも実に様々な分野に及んでいる。

とはいえ、彼女がマスメディアを通じて世間に姿を表わすのは非常に稀だ。モンド・グロツソ等の大きなイベントには姿を見せることもあるが、その後必ず失踪する。世界各国のどんな情報機関もその所在を追うことは不可能らしく、もちろんそんな裏事情を知らない一般市民から見れば、めちゃくちゃ可愛くてファッションセンス独特でウサミミな謎の美人、という認識だった。

それが今、この場にいる。

IS学園の入学式、実況中継こそされないだろうけど、世界中の政財界から多数のゲストが来訪しているこの場所で、ご覧の通りに素晴らしく酷い空飛ぶサーカスを展開している。ということは多分、この入学式は束さんが世間に顔を出す数少ないイベントの一つなのだろう。格調高いスーツに身を包んだ偉い人たちも、ひよつとするとそれが目当てで来ているのかもしれない。

とはいえ、そんな事情など分からない俺達学生に出来るのは、ただ目の前の天才の素っ頓狂ぶりに驚き、隣の人や友人と、言葉少なに驚きを共有することだけだった。

「え、あ、あれが……？」

「篠ノ之束？」

「確かに、顔は写真で見たのと同じだけど」

「でも、あれが……？」

「あたし、とても信じられないわ！」

「で、でも、なんだか……かつこ、いい……！」

戸惑い、騒ぎ立つ隣人たち。俺は全力で同情する。目の前の天才と

出会うにしても、かなり酷い部類のファースト・コンタクトだろうから。いや、この人と付き合つて、良くも悪くも酷いことにならない方が少ないのだけだ。

「……嘘ですわ。あれが、ISの……そんな、あの高名な、若干14歳で世界を変えた、この世界の全女性の憧れとも言わべき天才博士があらんな……」

と、この世の終わりを数十パターン目の当たりにしたかのような悲痛な声が聞こえてきたので、振り返ってみるとそれはなんとセシリアだった。まあ、考えてみれば無理もない。普通ならまだ子供の領域である14歳という年齢で、しかもたった一つの発明で一気に世界を変えてみせたのだ。更にセシリアは、代表候補生にも選出されるほどISという分野に入り込んでいる。そのISの始祖ともなれば彼女にとっては雲の上の存在だろうし、一回会つて礼の一つでも言いたくなるような、そういう人間だろう。

でも、セシリア・オルコットよ。我がクラスメイトよ、これが天才だ。

女王に行くそのような見事な跪きっぷりで跪いてるイギリスの大企業の社長、その手の甲にジェットパックでふよふよ浮かびながら投げキッスをする。それが束さんという存在だ。

唯認めて、そして受け入れなければならぬ。俺がここに入ったことと同じように、それは変えられない事実なのだから――。

と、なんだか他人を上から見ているような感慨を抱いてしまった。久しぶりに近くで見て、彼女の周りから空気感染する束さんウイルスに罹患したのかもしれない。おお、えんがちよ、えんがちよ。

「……はあ、全く、姉さんはいつもいつもむちゃくちゃなんだから」「ん？ 箒？」

なんて妙ちきりんな思考回路を楽しむ俺に、箒が話しかけてきた。本当なら俺のちよつと後の席に座っているはずだが、いつの間にか俺の隣に当たり前のように陣取つて座つていやがる。まあ、こんな状況では席順も背の順も無いだろうし、別にいいか。

「そーいや、箒も久しぶりの再会なんだっけ」

「いや。私の家にはしよっちゅう押しかけて来てたから、別段懐かしくもない。ユ一ノさんと一緒に鍋を囲ったこともあるぞ」

「そうだったのか。しよっちゅうて言うのとどれくらいだ？ 季節に一度か？ それとも年一？」

「……二週間に一度。お陰で我が家も随分と賑やかだった」

「え、それってさ、大丈夫なのか！？ ほら、監視とか」

「一夏、お前ボケたか？ 姉さんだぞ」

その一言で、ああつと納得できるんだからボケちゃあいない。そう思いたい。そう、他の誰かさんならいざ知らず、束さんである。クラックとかで無力化するのも考えてみれば当然だろう。

箒にそう告げると、当たらずとも遠からず、といった表情だが、その首ははつきり横に振られた。

「ちよつと、違うが……まあいい、話すと長くなる」

「そうだな。無駄話なんて、してる場合じゃないものな」

提案に同意し、話を打ち切る。何しろ、何にも束縛されないフリーハンドの束さんがここにいるのだ。頼みの千冬姉も動けないらしいし、俺達に出来るのは何が起きても驚かず、ただ受け入れて自分の身を守る位のことである。

最も、身を守るほどの心配なんて必要ないのかもしれない。

だってあの人は、ああして笑いかけている人々に対し、本気で酷いことはしないのだから……きつと、多分、恐らく。ひよつとしたら、もしかするかもしれないけど、でも一応信じておく。

「はい、よつてらっしやい見てらっしやい！ 天才束さんの新設計、ここでしか手に入らないレア物だよー」

俺たち新入生がどうにか現実を受け入れて、再起動するまで、束さんは来賓貴賓の前に降り立ち、来場記念とか何とか言つて設計図を配つたりしていた。いい大人のお偉方が恥も外聞もなく蜜蜂のように集まり、つかみ取りの奪い合いが行われたりしている所を見ると、それはこの世界の中でも大分貴重な部類に入るものらしい。

此方にも何枚かがぱらりと落ちてきたのだが、それを見ていかにものほほんとしてるクラスメイトが泡を吹いて卒倒したり、セシリアが

頭をくらくらさせて顔を青くするなど、二次災害はかなりのものだった。ちなみに、俺が見ても何が何だか分からないその設計図の表紙には「第3世代IS対応新型高出力メインエンジン『ヒュドラ』設計図」さらば母なる海鳴市」と書いてある。

「……んむ！　そろそろ諸君ら新入生も、私の偉大さに気づいたみたいかな！　はい拍手！」

と、180人中の約3分の1がダウンもしくは現実逃避しているのにも関わらず、何を満足したのか束さんはまた飛び上がって此方を見下ろし、拍手を要求してきた。

俺と箒は当然すぐに拍手した。ただし、これ以上ないほどに冷峻な、軽蔑の視線を向けて。それに気づいた束さんがいやいやんと身をくねらせているのだから、大して効き目ないどころかむしろ燃料になっっているのかもしれないが。

俺達の乾いた拍手音に反応したのか、周りのクラスメイトたちも釣られるように手を叩く。なんとも締まらない光景だが、束さんとしてはそれでもご満悦らしく、大きい胸を張ってえへんと口で言っていた。

尚、もみ合いへし合いしていた外野の大人たちは、そうしながらも束さんの掛け声に合わせて揃って拍手していた。上手く言えないけど、なんか駄目だ、この人たち。完璧に訓練されきっているじゃないか。

「さて、偉大なる私が手がけた幾多もの発明品の一つ、IS学園に入学してくれた諸君へ！　私からとっておきのプレゼントがあるのだ！」

とっておき。束さんがこの単語を使う時は注意をしなければならぬ。嘘や誇張の全くない、天才の、真正銘のとっておきなのだから。彼女が背中にくつつけている、まるでサンタクロースの持っているような大きい袋の中には一体何が詰まっているのか。

思わず身構えた俺たち。その真上に陣取った束さんは、花咲か爺さんが枯れ木に灰を撒くように、思い切り手を横へ振りかぶって、袋の中身を次々とぶちまけた。

俺たちに舞い降りたのは、きらきらと輝く宝石のような光の結晶だった。何らかの危険物だと思って頭を庇った俺と箒だが、実のところ、そんな事をする必要は全く存在せず、むしろ両手を広げて受け入れるべきだったろう。

何百もの光は、新入生全員に向かって降り注ぎ——その身体の一部、例えば腕だとか、首だとか、胸の辺りだとか、それぞれの身体の一部分へと纏わりつく。俺の場合は右腕、箒は左腕といった風だ。ただ、元から青いネックレスをしているセシリアには降ってこなかったり、他にも幾人か、光が降りて来なかった人もいる。

「これは……！一夏！」

「ああ、これって」

俺も箒も、その光には見覚えがあった。ISが展開、収納される時に舞う、量子の光。まるで太陽に照らされた雪のように光を乱反射させる粒子は、俺の右腕にだんだんと馴染み、定着していった。そして、白いガンレットに変わった。

間違いない、これは。俺たち新入生全員が驚きと、そして確信にぶち当たる。そりゃ、代表候補生であり専用機持ちのセシリアには降ってこないわけだ。なぜなら彼女は、それを『既に持っている』のだから。

「ぱんぱかぱっかつぱーん！　なんと今年も新入生全員に、東さん特製、ISの『コア・ユニット』をプレゼントしちゃいますー！」

そう。東さんが空から配ったのは、ISの核であり、全体の制御や動力炉の調整、そして操縦者と機体との融合にも似たシンクロニティを司る、コア・ユニットだった。

今までより一際大きく歓声を挙げる聴衆たち。それも当然だろう。篠ノ之束は、ISの装備や装甲、動力炉などの『外部換装可能なパーツ』については、現在も次々と革新的なアイデアを世に打ち出している。しかし、ISの中核を成し、量産不可能な『コア・ユニット』については、その製法も正確な個数も不明であり、確認された物以外の

新たなコアが世に出ることも殆ど無かった。

ただし、IS学園の生徒に与えられるものを除いては、だが。

既存の軍事力も抑止力も、全てを無効化してしまう新たな『力』の源。その最新型が、この場でお披露目され、生徒に与えられる。そしてその生徒たちは、各国や各企業が選りすぐって送り出した、将来の世界を名実ともに背負って立つエリートの子供たちなのだ。だから、大人たちは揃って沸き立つ。彼らの作る未来、それを通して自分たちが望む未来に向かう『力』が手に入るのだから。

俺だって、そういう噂を聞いていない訳ではなかった。しかしながら、各々のコア・ユニットなんていう色んな意味で危険極まりないものは、それ相応の訓練と勉強の果てに、エリート揃いの学園生の中でも限られた人間のみが貰えるものだと思っていた。それこそ、代表候補生が手にする専用機みたいな感じで。

しかし、まさか学生の全員に、しかも入学式の真っ只中に与えられるとは。

「凄い……」

「うそっ……私のIS、だなんて……」

皆が皆呆然とした顔で、ネックレスだったり腕輪だったりに変化してくっついたコア・ユニットを見つめる。その奥にあるのは、只々驚きだけなのか、それとも未知の力に対する恐怖か。もしかすると、これをこそ望んでいた、という野心に昂る瞳だつてあるのかもしれない。

「それはみいんな君たち一人一人のものだからね！　ちゃんと自分で名前を付けてね、交換とかしちやいけないよ？」

東さんが更に付け加える。それは、この学校の生徒、500人以上の一人一人が専用機持ちということだ。セシリアの驚き顔を見るのも、今日何度目か分からない。だがその気持は痛いほど良く分かるつもりだ。学園において自分や数少ないトップクラスだけが持つアイデンティティが、脆くも崩れ去ってしまったのだから。

例えば、俺が今ここで性転換して女になるみたいに。

そう考えたら、東さんならひよつとするとやりかねないと思いつ

てしまい。俺の身体の一部があつという間に縮み上がってしまった。「それと。これはコアだけで外装も何もないんだから、今出来るのは絶対防御だけ。しかも、皆出来たてでまだ赤ん坊みたいな物だし、無理したら碌な事にならないから注意してね〜」

成る程。その言葉で、俺は千冬姉が教師をやっている理由について、なんとなく察した。

その経験と指導力を買われたのもあるだろうが、一番の理由はやはり『世界最強』という名の抑止力だろう。ISというワードスーツは、よく訓練された操縦者と完全装備の機体が一機あれば、通常兵器としては世界最強の打撃力を誇るあのアメリカ海軍第7艦隊に匹敵する戦闘能力を持つ。というのが一般の常識だ。

そういう力の源流を持った、しかも青年期に位置する人間のメンタリティがどこかで歪む可能性はいくらでもある。無論、そうならない、そうさせない人物を入学試験や事前の選出、果ては束さんお得意の神がかった行動予測で選んでいくのだろうが。それでも可能性は、ゼロにはならない。悪意ある第三者の介入は、学外の何処にだって存在し得るのだから。

その暴走を未然に防ぎ、仮に防げなかった場合は圧倒的な力で鎮圧する。

多分、それがこの学校における千冬姉の真の役割なのだ。

でなければあんなに脳筋でずぼらな、外見が凛々しく見えるだけの女性が教師になれるわけ——

とか内心で考えていたら、教員席の千冬姉にギロリと睨まれた。これは後で、しつこく追い回されるくらいは覚悟しなければならぬだろう。全く人の心を読むだなんて、束さんじゃあるまいし。

「武装、外部装甲、スラスタ―に兵装なんかはこの学園にあるものを各々好きに組み合わせて量子化保存すること！ 君だけのISを作って、クラスの皆に自慢しちやおう！」

なんだか粗製乱造される組み換え玩具の宣伝みたいだが、これだつて良く考えればかなり凄い。

普通ISのコアユニットには、企業が作成した初期装備^{プリセット}、つまりコ

ア以外の諸々が詰まった装備一式を組み込まなきゃいけない。

例えば、日本純国産で安定した性能と防御力を持つ『打鉄』タイプ。フランスはデュノア社製で、汎用性の高い『ラファール・リヴァイヴ』タイプなど。ちなみに専用機は、それぞれ世界に二つとない固有の初期装備を持つ。

また、そこから更に拡張領域パススロットの容量に限って、後付装備イコライザや換装装備パツケージとして様々な用途に応じた装備も設定できる。しかし最適化を考慮しないISそのものの基本性能は、やはり初期装備に大きく依存してしまうのが現状だ。

「我が校風は生徒の自主性を尊重するからね！　どんなタイプのISを作っても、それは君たちの自由だよ！」

しかし、今束さんが宣言したようにこれからIS学園に入って自分だけのコアと一緒に成長していく俺たちは、その初期装備すら自分の手で自由に選ぶことが出来るのだ。しかも、パーツの一つ一つが、ISの開発者お手製だったりするのだから、なんとも恵まれた環境である。

そうして出来上がったISと、三年間みっちり開発者・操縦者からISについて学んだ卒業生。それらが手元に戻った時、国家に齎される利益と力は、凄まじく大きい物になるだろう。

つまりとところ、IS学園という種とてつもなく特異で歪んでいる空間は、織斑千冬や篠ノ之束といった絶対的な力と、支援・協賛を行う国家にのみ与えられる、絶大な利潤によって維持されているのだ。

「うん、これで大体言い終わったね。後は……」

そんな、IS学園に秘められた真実の一端を、好き勝手に考察していたら。

きいいん、と耳によく響くジェット音が近づいてきた。もちろん、今まで天井を飛び回っていた束さんのものである。そのまましゅたつ、と地面に降り立ち、一番前の列の席で、ただ座り込みながら一連の説明を聞いていた俺と箒に向かい合って。

「いっくんに箒ちゃん、久しぶりいっ！」

両腕でラリアットでもかますかのような猛スピードでぶつかっていき、俺を右腕に、箒を左腕に抱えてぎゅううっ、と思いきり抱きしめた。

周囲は一斉に奇異と好奇の目を向けるが、これに関しては俺も箒も慣れたものだ。昔なんて、二人一緒に会うたびこうされていたのだし。

「束さん、久しぶり」

「姉さん。私はたった二週間ぶりのはずだけど？」

「それでも久しぶりだよお箒ちゃん！　そしていつくんは……いやあ、大きくなったねえ、逞しくなったねえ……」

束さんの眼の色が、俺を見てがらりと変わった。

「しかも世界で初めての男性操縦者だなんて……ねえいつくん？　お姉さん、君の身体にすごい興味があるんだけど」

「断ります」

即答した。即答せねばならない。ここで一瞬でも迷ったら即持ち帰られてしまう。

「やだなあ、そんなつれないこと言わないでよお。一緒に裸のお付き合いでする仲だったじゃない」

「家族風呂ですからね！　千冬姉も箒も一緒にしたからね！」

「またまたあ、恥ずかしがらなくてもいいのにい、ぐふ、ぐふふ」

束さんの澄んだ眼の色が、途端にピンク色の濁りへ変わっていく。

まずい、この束さんはエロオヤジモードだ。可愛い親友を何度も半剥きにして、法律にギリギリ抵触しない極限のチラリズムで、海鳴の健康な青少年たちに数多くの悪影響を及ぼした魔の姿だ。

「いやー、男性用制服もカッコいいよねー。流石天才の私はデザインセンスも抜群……でもお、男の子の一番かっこいい場所は、その内側にあるんだよねえ……ぐへへへえ、脇腹つんつん、くんかくんかはすはす」

自分より年上の、豊満な肢体の美女に近寄られ、制服の中に手を入れられているのは男としてはこれ以上ない楽園タイムなのだろうけど。

相手が相手、しかもまんま下衆な親父の表情を浮かべているのでドン引きしか出来ない。

「や、やめてくださいよ東さん……ほら、箒も見てますってば」
そんな、もう勘弁してくれという青白い表情が、天才の目には悦んでるように見えるらしい。

更に目を爛々と光らせて、舌なめずりをしながら迫って来た。

だが、次の瞬間。東さんの顔は喜悦から、一瞬にして苦悶の表情へと変わりゆくことになった。

「嫌よ嫌よも好きのうち、だね！　じゃあ早速、六年間の成長を確かめるために……『ねえ、いつくん？　お姉ちゃんと、気持ちいいことしよつか』……ごぶっ！」

その言葉を出した瞬間、俺はこのどうしようもないくそつたれウサギの腹に思い切り、全力全開手加減なしのボディブローを叩き込んでやったのだ。

崩れ落ち、腹を抱えるウサミミ。肩口でフェレットが思い切り苦笑いしているのが見える。

「お、お、おおう……効いたよお、いつくん……」

「当たり前だろうっ、束姉たばねえ！　知ってるだろう！？　ならいくらなんでもなあつ、それはっ、それはやっっちゃあいけないだろうが……っ！」

当たり前のことだ。

いくら俺の姉みたいな人でも、この学校の学園長でも……！　やっていいことと、悪いことがある！　当然の話、これは戦争だ！　武力行使も辞さない！

思春期男子の気持ちを弄びやがって！　しかも、いくら声が似てるからって……あの人の……くそっ、ちよつと脳内で考えてドキドキしちゃったじゃないか！　断じて許さん！

「お、おお……うふふ、でもいつくん、腕力も凄く強くなつたんだね！　しかもキレると昔の呼び方に戻ってくれる！　ああ、東さんは嬉ししよう！　いつくううん！」

それで、たつた数秒で復帰してこれなんだから。もう本当に、どうしようもない人だ。

こいつがアホなことをやったら容赦なく拳を振るって鉄拳制裁してやれ、というのは千冬姉の教えだが、先程よりずっと早さを増した突進速度、そして勢いを、今度は抑えきれない自信がない。

相打ち覚悟でカウンターでも決めてやるか、と右拳を握り固めた直後。

「いい加減に」

「しろっ!!」

血走った目を浮かべる束さんの脳天、その左右で同時に横薙ぎされる、二つの竹刀。

千冬姉と、箒だった。

「がふうっ……だ、だが私は諦めない。いっくんの身体を神秘を暴く、その日まで……!」

世界最強と、中学剣道全国大会の優勝者。二人が息を合わせ、全く同時に頭の左右へ叩き込む一撃は、人間の頭蓋骨程度なら、破碎して頭部を潰れたトマトに変わるほどの物に違いないのだが。だが天才の頑健な身体はそうならず、がいん、という気味悪い音だけが響き、目を回して地面に倒れ伏せた。最も、それから数分もすれば復帰するだろうが。

「山田先生! 学園長は体調不良だ。至急医務室に運んで、嚴重に鍵を閉じるように」

「はー」

千冬姉が先手を打ち、天災を隔離しようとする。山田先生も予め承知の上だったようで、拘束具付きの担架を用意して運ぶ手際は実にてきぱきと無駄がない。

恐らく、毎年毎年これに似た大惨事が繰り返されているのだろう。今年は俺のせい、一際酷かったかもしれないが。

「……一夏。お前、何もされなかったな?」

「あ、ええと」

「なにも、されなかった、な?」

「あ、ああ! もちろん! お陰様でな!」

「うむ、ならいい」

俺の安否を尋ねているはずなのに、ものすごく怖い筈の顔。恐らく、不純異性交遊など許さんという心構えなんだろう。

一方千冬姉は、兎狩りを終えた後に、この痴態の一部始終を見て放心状態の新入生一同へ呼びかけ、どうにかその意識を取り戻そうとしていた。

ちなみにその肩には、さつきまで天才の肩に乗っていて、竹刀での一撃で同時に叩き潰されたかに見えたフェレットが、いつの間にか乗り移っていた。

機を見るに敏。そうでないと、あの人の側では生き残れない。

「……あー、お前たち。今のが我が校の学園長、篠ノ之束の本性だ。いか、外見と言葉に騙されて不用意に近づくな。話しかけたり用事がある時は出来るだけ二人一組で話しかける。上級生が居ると尚良い。あいつらは慣れてるからな」

多分、ISについての専門校とかそういうの以前に、世界で唯一つの学園だろう。学園長についての対策講座が開かれるなんてのは。

「それと、あいつが今まで語ったことは……残念だが、全て本当だ。お前たちにはこれから、今配布されたコアユニットとこの学園にあるパーツを組み合わせて、秋までに各々のISを作成してもらう。当然授業ではIS構築に関する理論、そして整備方法について教える」

その言葉を聞いて、殆どの生徒が再起動し、じつと千冬姉を見つめていた。これからの三ヶ月で、自分だけの専用機を作れるのだから、真剣になるのが当たり前だ。

一方、専用機持ちだと思われるごく少数も気合を入れていた。こちららは、ぽつとでの奴らに負ける訳にはいかない、という自負がそうさせているのだろう。

「秋に行われるキャノンボール・ファストの大会には、それぞれ自前のISで参加してもらう。お前たちの『保護者』には、そこである程度の結果を見せねばならんだろう。その為に、授業や実習は厳しく進めるぞ、覚悟しておけよ」

千冬姉がそう締めくくった途端、勤勉なことに山田先生が今度は演台を占拠していた。あくまで束さんのサポートを行う学園長代理は、

複数の教師によりあっさり取り押さえられていた。

「は、はい！ では、織斑先生による新入生への学習計画の解説が終わった所で、入学式は終了とさせていただきます！ 生徒の皆さんは各教室に戻った後、プリントの配布や寮についての説明があるので、担任の到着と指示を。着席しながら待っていてくださいね！」

「来賓の皆さんには、私、織斑千冬から、これからの生徒の生活、学外でのイベントについてご説明致します。今暫くお待ち下さい。よし、生徒諸君は解散とする！ 教室まで急げ！ 駆け足！」

荒れまくった場を一先ず収めるための素早い連携プレイ。これがIS学園の教師たちの日常だとしたら、なんと過酷なことだろうか。千冬姉の言葉に尻を押され、慌てて一年一組の教室に戻りながら、俺はこれからの生活が、波瀾万丈に満ちたものになることを実感し――なぜだかとも、懐かしい気持ちになった。

いつかどこかの用務員室

波乱に満ちた、というか波乱しか無いしその後の波乱をも予感させる入学式が終わって六時間。その間のことを解説すると結構長くなる。まず。山田先生から山のようなプリントと地層のようになぎり分厚い参考書を頂いた。それからクラスごとの集団行動で、学内施設を紹介された。

流石は世界的に有名かつ、全世界の女性憧れのIS学園だ。島一つ使った上に立てられている数多くの施設、その至る所に最先端の技術が仕込まれているし、デザインも未来っぽさに溢れてる。俺が数ヶ月前まで通っていた中学も私立だけあってそこそこ新しいというか金が掛かっていたが、こういう所と比較してしまえば流石に見劣りするだろう。

俺達は山田先生の懇切丁寧な案内のもと、食堂、プール、グラウンドなどの学園ならではの施設とIS整備室、研究室、試合及び実験用のアリーナといったIS専門の施設。そして、月がよく見える天文台だとか、海鳴海浜公園そっくりの海岸通路。更には篠ノ之神社の分社なんていうどうして存在するのかよく分からない施設まで念入りに紹介された。

ここまで回想すると、夢いっぱい希望山盛りの三年間を過ごすに相應しい空間だと言えるが。ただし、そこは篠ノ之束の『発明品』。一筋縄ではいかないところもあるようだ。

地下への階段前で立ち止まった山田先生から、
「他にも、この学園には地下に大規模な区画が存在しますが……許可された学生と教師以外は、絶対に”立入禁止になっています”」

なんて、今までの朗らかな雰囲気から一転した、険しい顔で注意されもした。

そういう押し付けた注意をされれば、当然、調子の良い生徒が余計な茶々を出す。いかにも活動的で運動好きそうな娘が、元気よく手を上げて尋ねた。出席番号1番、相川清香。後で聞いた所によると、イメージ通りの運動少女だそうな。

「しつもんしつもん！もし間違えて入っちゃったら、どうなるんですか？」

「……その時は……」

山田先生は目を閉じ、報告書に書かれた不都合な真実をあえて述べるような平坦さで告げた。

「貴女も機械じかけのウサミミになりますよ」

茶化していた生徒の顔が青ざめ、涙目になった。入学式の惨状を思い出してしまって、入学初日の浮き立つ心がしぼんだらしい。周りの生徒も隣り合って、口々に恐れを呟いている。ただし、俺と箒だけは別だった。目の前に居ない束さんを恐れるなんて、まるで『悪い子でいたら鬼が来る』を怖がる同じじゃないか。束さんは鬼とは違う。ただしそれは、鬼なんかとは比較にならない存在だ。って意味だけど。「あつ……で、でも！入りさえしなければ問題ありませんからね！深淵から見つめ返されないためには、ただ見つめなければいいんです！はい！」

自分の言葉のせいで雰囲気が一気に淀んだことに気づいたのか、山田先生は必死に笑い顔を作って右腕を上げ下げしている。ゴーゴー盛り上がっていきー、という素振りだが、その空元気は悲しいことに、生徒たちの頭上を上滑りしていくようだった。

空気を変えようとした先生の案内で慌ててその場から移動し、最後に紹介されたのは学生寮である。学生寮と言っても、利用するのはIS学園の生徒だけではないらしい。

「ここでは我々教師や、皆さんの生活を支える用務員さん、更に、学園の優れた施設を利用してISの研究開発に取りくむ研究員の方々も大勢暮らしています」

「なるほど、だからこんなに大きいんですね！」

山田先生の解説に、ヘアピンを付けた生徒、鏡ナギがミーハーな反応を返した。とは言えその「大きい」という表現さえ、俺からしてみれば不足に思える。何十も並び立つビルディングの合間に、道路が敷かれ電灯と街路樹が立ち並んでいる様は、寮というよりは住宅街の趣きじゃないか。

「他にも、職員、研究員のご家族が居住する例もあります。学生寮とはいえ、節度と礼節を保った近所づきあいを中心に心がけましょう！」

「はいー！」

皆と合わせて返事を返してから周囲をみれば、ベビーカーを押している若奥さん——ならぬ、旦那さんまでいる。きつと、最近増えたとかいう主夫さんなんだろう。

しかしこれじゃあ本当に、一つの小さな街だ。束さんもエライもん作つたなあ。

「では、これで学園内の案内は終わりましたので、解散となります。事前に配ったプリントに書いてある通り、皆さん所定の棟まで進んだ後、各寮長の指示に従って部屋の荷物の整理、そして夕食を取ってから門限通りに就寝して下さい」

つと、どうやらこれで長い長い案内もようやく終わりらしい。皆持ってきている学生靴の中から、いそいそと量に関するプリントを取り出し始めている。釣られて俺も靴の中を探したが、しかし寮の位置なんて全く分からなかった。プリント自体はあるのだが、本来地図やら寮の番号やらが書かれているはずのところがまっさらなのだ。

俺は急いで声をかけようとしたが、その前に先生が無常にもメの一言を発してしまった。

「それではみなさん、また明日、8時半に教室で会いましょう！ お疲れ様でした！」

ニュースのアナウンサーのようによく響く声を合図に、今まで俺の周りにいたクラスメートたちは一斉に離れていく。各々プリントを見せ合って、同じ寮になった人と意気投合して話しあったりもしている。

いかん、このままでは一人だけ乗り遅れてしまう。箒が一人ぼっちになるのは許したくないが、俺自身が一人ぼっちになるのも嫌だ。

「せ、先生、あのっ」

「はい？ どうかしましたか、織斑くん？」

一仕事終えて肩の荷を降ろしたような山田先生には悪いが、俺はその目の前に白桦のプリントを見せつけて懸命に訴えた。

「あの、俺、どの寮に行けばいいか分かんないんですけどっ」

僅かな文面以外は真っ白なプリントをしげしげと見つめた後、山田先生は答えた。

「そうそう、思い出しました。織斑くん、貴方には特別に、ある場所で生活してもらわないといけないんです」

「あ、ある場所？」

特別に、とくつついているのがなんとも嫌な予感をそそられて、俺は僅かに青ざめながら固まった。そういや俺、世界で唯一、男性でISを動かせるんだっけ。まさか、実験用の施設で端から端まで分析される日常生活、なんて言わないよな。いつぞやの助手一号さんみた

く。

「それは……」
もしそうなら俺、自分の身の安全はとにかく、貞操を守りきれる自信が――！

というのは全くの杞憂だったらしい。これから三年間過ごす場所を告げられた俺は、今だ五体満足、清い身体のまま。台所でエプロンを着て、料理を作っていた。

IS学園には勿論食堂もある。それも男子禁制というわけではないし、今は午後7時半なんて人の集まりそうな時間帯だが、メニューの売り切れさえ考えなければ並ぶことなしにできたての料理が食べられるという。しかし俺はこの部屋の同居人のとある悲しい事情を聞いたので、今夜は気合を入れて、腕を振るうことにした。

ご飯はもう炊きあがっている。付け合わせの大根の煮物とほうれん草のおひたし、それからお酒に合う酢の物もついさっき仕上げた。後はフライパンの中の鯖が焼き上がるのを待つばかりだが。

「よし、いっしょ」

グリルの中を見れば、もう既に皮の焼き目がこんがりしてすっかり食べごろだった。大きめの三切れを急いでお皿に盛り分け、それからご飯をよそって味噌汁をつぎ、新品ピカピカのお盆に載せてテーブルまで持ち運べば。

「おおお……！」

「来たかね！」

目を輝かせて俺と料理を見つめる同居人二人がそこにいた。

「はい、お待ちどう様。春なので旬の鯖を使ってみましたけど、こんなんでいいんですか？」

「大丈夫だよ！ 一夏は中学時代翠屋でバイトばかりしてたんだろ？」

「そりやそうですけど」

「だったら桃子さんのことだし、料理くらいは仕込んでるかなって思ってたんだよ！ うん、頼んで正解だった！」

一方は眼鏡をかけた金髪の優男、ユーノ・スクライアさん。俺よりも若干背が低くて細身だから、思い切り穿って見れば女性に見えなくもないけど、でも立派な男だ。むしろ俺からしてみれば、立派な男どころかも男の中の男とも言える。だってこの人は、あの天才の助手をもう10年以上勤めあげているのだ。それだけでノーベル平和賞を勝ち取ったつていいと、冗談でなくそう思う。

「いやあ、私たちも食堂に行けば、そりやあ暖かい料理は食べられるが……若い女性ばかりの中で食事を食べるのは少し窮屈だね」

もう一方に座るのは、俺と金髪の青年男性を足したくらいではずつと足りないくらい、年を取っている老人、IS学園学園長代理にして用務員の轡木十蔵さんだ。落ち着いた色のスーツから着替えてちゃんちゃんこを羽織るその姿は、いかにも隠居した好々爺、という雰囲気漂わせている。しかしこの人も、只者ではないんだろう。入学式の時の束さんの発言、『助手二号』という衝撃的な言葉を、俺はまだ忘れていない。

彼ら二人こそ、織斑一夏の同居人。そう、あの後山田先生から指示された場所は、学生寮の隅の隅にただ一棟ある、男性用の一軒家だっ

た。

東さんの助手として学園に入ってきているユーノさんと轡木さんは、男二人女子寮には勿論入れず、教師も全員女子なので、こうして余り物のように用意された家屋で滞在しているらしい。最も轡木さんは、日本に妻を残した単身赴任だそうだが。

「……とりあえず、お先に一口どうぞ」

二人の期待と感謝に満ちた目線、その容赦無い直撃に耐え切れなくなった俺が勧めると、二人仲良く箸を取り、きちんと両手を合わせていただきますと宣言して、主菜の鯖の塩焼きを頬張り。

「うまいっ!!」

二人同時に感極まった表情で叫んだ。

どうにも居心地が悪い。それは、料理を作って喜ばれたんだから、嬉しいことは嬉しいけれど。

——何も、涙を流すほどじゃあないと思うんですが。

「あ、あのー、そんなに大したもんじゃないですけど」

そんな考えを婉曲的表現にくるんでぶつけても、帰ってくる答えは的外れの賛辞ばかりだった。

「そんなこと無いよ、一夏！　ね、そうでしょ十蔵さん」

「ええ。謙遜は美德ですが、余り過度に過ぎるとかえって自分を損ねますよ」

年の功に基づく教訓ありがとうございます、学園長代理。とはいえ、涙に箸を震えさせながら言っても何の威厳も説得力もありません！

「それに、私もユーノくんも色々やっているが、料理だけはからきしですね。学生食堂まで行くと生徒たちの目が気になるし、だからと言って自作するわけにもいかない……単身赴任の辛さだね」

「そこに、翠屋仕込みの君がやって来ると聞いたんだから……嬉しいかったよ。本当は女子寮に無理矢理入らせるつもりだったらしいけど、千冬を説得してここに来てもらったんだ！　……箸には悪いことしたかな」

その配慮自体は嬉しいですユーノさん。女子寮の中で一人だけ男

子とか、もう珍獣のような扱いになるのは目に見えていますし。それと
箒のことならご安心下さい。早速隣人と一緒に晩飯食べてるみたい
ですから、一人ぼっちにはなってませんよ。

「どうした、織斑くん。さあ君も食べなさい。料理を作らせておいて
なんだが、今日は君の入学日だ。この食卓の主役のつもりでいたまえ
よ」

「冷めない内にさ。遠慮しないでよ」

と薦められても、学園長代理と図書館司書なんて、入学したての一
学生にてつては雲の上の人が見ているとどうにもやりにくい。二人
とも優しく俺に対してもある種敬意を払ってくれるのだが、それで
尚更気後れしてしまう。

まあ、女ばかりの学校と同じく、この状況もただ受け入れていくし
か無いんだろう。

俺は諦めて、鯖の塩焼きをご飯に乗せて一緒に口へ頬張った。

「……それにしても」

それからちよつと経って、晩餐もたけなわ。

二人より若干遅れて橋を取った俺だけがまだ食べ終わらず、他の二
人はのんびりお茶を飲んだりしているの、俺はこの気を逃さず尋ね
ることにした。

「どうしたね」

「ユ一ノさんについては、事情、知ってるんですけど……学園長代理
が」

「轡木で構わないよ」

「あ、えと、轡木さんがどうして……東さんの助手なんてやってるんで
すか？」

実際、俺の居心地の悪さというか、迷いというか。そんな気持ちも
おおよそ半分がこの疑問に関連するものだ。もう70代になろうと
している老人の何処を、東さんは気に入ったのだろう。ひよつとする
と、優しいお年寄りの表情は欺瞞で、その裏にはなにか怪物のような
本性があるのだろうか。『あの』東さんのお気に入り知ってしまえ
ば、俺以外の誰だって、そう思うに違いない。

「ふむ……全て話すと長くなるから、手短かに話そう」

俺の問を聞いた轡木さんは、顎に手を当てて僅かに考え込んだ。多分、俺という学生に「言っていていいこと」と「言ってはいけない事」を選別しているのだろう。

とはいえ余り考えるようなことでも無かったようで、数秒後、轡木さんの口は開かれた。

『白騎士事件』が起こってから、何ヶ月か後のことだ」

いきなり最重要かつ重大な単語が飛び出た。『白騎士事件』と言えば、世界の誰もが知っている。日本の首都は東京に向けて一斉に発射された2000発を超える弾頭ミサイル、その全てをたつた一機のIS『白騎士』が駆逐したという大事件だ。

ISの力を全世界に見せつけたこの事件を機にして、発表から三ヶ月、全く着目されていなかったISが一気に世界を席卷する存在になったのだから、今の世界を、ひいてはこのIS学園を創りだしたきっかけと言ってもいいだろう。

「私はある地方の港町に住んでいた。昔は都会である“仕事”をやっていたが、そこから引退して、後は妻と二人で、今までの蓄えで建てた家に暮らし、悠々自適の生活を送っていた」

懐かしそうに語る轡木さん。だが、そんな理想的な老後の人生へ、どんな風に束さんが引つかかったのかまるでわからない。

「あの町には何もなかった。唯一の楽しみといえば、釣りくらいでね。その日も朝から、釣り竿を持って岸壁に向かったんだが……そこで、大物の兎を釣り上げてね」

と思ったら、文字通りひっかかっていた。俺にははつきり思い浮かべられる。帽子をかぶり、防水スーツを着た轡木さんが目を丸くして驚く様を。そしてその横で倒れ伏せる、びしょ濡れの束さんの姿も。「どうしたものか……と途方に暮れて、とりあえず家まで運んでいったんだが、えらく衰弱していてね。妻に頼んで風呂に入らせ、暖かいご飯を食べさせたら、教授はとても感謝してくれた。なんでも、あそこで拾われなかったら、いくら天才かつオーバースペックの私でも、3割の確率で死んでいた……らしい」

「最も、そこで誰かに拾われることは、教授の予測の範囲内だったと思いますけど」

口を挟んできたユーノさんの言葉に、俺も同意する。束さんがそんな簡単に死んだりする訳がない。というか、土左衛門になるなんてのはまず間違いなく束さんの死に様じゃあないだろう。まあ、昔は良く千冬姉にふっ飛ばされて、池の水面に頭から突っ込んでたりしていたけど。

「それから1日泊めることになったんだが、あくる朝には姿を消してしまっていてね。まるで狐に摘まれたように思って、また釣りに出かけたんだが……すると昨日まで何もなかった岸壁に、これまた見事な日本家屋が建っていてね」

「あ、そこから先はわかりません。そこに入ってくとぴっちり閉じられた襖があつて、『開けないで下さい☆』とか書いてたんでしよう」

「おお、分かるかい。流石に付き合いが長いだけあるな」

分かるというか、安直すぎる。『鶴の恩返し』なんて。そういう安直なことを馬鹿馬鹿しいほどにやるのが束さんの黄金パターンだ。

「もちろん私としては気になるし、開かざるを得ない。するとそこには、教授の他に——二人の、少女がいた」

ちよつと前、俺の手作りのご飯をしみじみと噛み締めていた時と同じ、いや、それよりもずっと嬉しそうな顔で、轡木さんは思い出を反芻している。

「私には、昔、都会で孫娘のように可愛がっていた子がいてね。隠居してから長いこと離れ離れで、二度と会えない、と諦めていたんだが。教授が、再会させて、くれた……姉妹二人とも元気でいて、もう二度と見られないだろうと思っていた笑顔を、私に向けてくれたんだ……」

俺もユーノさんも口を開かず、轡木さんの懐古を邪魔しない。俺達の想像も付かないほど長い人生を生きてきたこの老人にとって、多分それは、宝石よりも煌めく思い出だから。

「だから、私は教授に言った。恩返しというが、これではとても吊り合わない。私からも何か恩を返させてくれ、と。そうしたら教授は、驚

いたような顔をして——それからいつものように笑って、じゃあ助手になつてよ、と仰つた」

東さんにとつてそれは、『友達』や『家族』と同じ意味を持っているんだらうと、その時俺は確信した。もしそうでなかったら、ユーノさんも轡木さんもこんな所まで教授に付き添わず。

こんなに明るい笑顔で、思い出を振り返るはずもない。

東さんは昔から他人にはとても冷たいし、そうでなくても小馬鹿にしているけど。友達や家族には、とてもとても優しい。素直じゃないから、からかつたり弄つたりするけど、でも、困つた時も東さんなりに、力を貸してくれる。そう、俺に配つたあの漫画のように。

そんな東さんの顔を見てなければ、二人とも、あんなにいい顔で、自分たちの事を『篠ノ之束の助手』と言うことは出来ないだろう。

「それが、私がここにいる理由さ」

そう言つて昆布茶を飲み干す轡木さんは、老いて尚、人生を楽しく、充実して生きているんだ。

何の根拠もないけど、俺はそう思つて止まなかつた。

いつかどこかに、なのはさん。

それから少し経って。轡木さんは夜間の見回りに出る、と言い残して宿舎から出かけた。なんでも、夜更かしをしていたり、夜間外出をしている生徒を返さねばならぬらしい。確か入学式で束さんが轡木さんに『能く眠れ』ということを強調させていたっけ。

なんて事を言ったら、ユーノさんが突然笑い出した。多分、束さんに関する何かを思い出して笑ったんだろうけど、それにしても大笑いしすぎていてなんだか気味が悪い。ただ、轡木さんは慣れた様子で気にすることもなくドアから出て行ってしまった。

「ぶ、ぶぶ……教授う……どうして起きないのさ……もう始まつちやうよ？……ああ、もう置いてくしか無いね、僕だつて見たいし……あああ、仕方ないなあ……ぶ、くくく」

そうして残ったのは、眼鏡を光らせながら笑いの余韻を引きずるユーノさんと俺。正直とつても居心地が悪いが、こうして二人きりになれたのなら、一つだけ聞きたいこともあった。

「あのー……」

なんだか意味の分からないことを呟きつつ肩を震わせているユーノさんに問いかけた方がいいが、やっぱり何処か怖くて、腫れ物に触るような言い方をしてしまった。しかし、俺の言葉を聞いた途端、けろつと振り返り、元の影のない優しい雰囲気に戻ってくれる。

こういう切り替えの早さがユーノさんの素晴らしい所だ。きつと束さんに振り回されながら会得したんだろう。あの人の手を取ってついていくなら、心の柵を何個も作るか、思いつきり広くしなきゃとても持つものじゃない。

「ん、どうしたんだい一夏？」

「一つ聞きたいことがあるんですけど」

「お、いいよ。この学校の司書長、つまり学園一の物知りとして、なんでも答えてあげよう」

何でも来い、という顔のユーノさんは、多分俺がこの学園について聞いてくると思ってるんだろう。確かにこのIS学園には、まだ分か

らない、というか納得出来ないことが沢山あるけど。

今聞きたいのはそれじゃない。

この学園に来てから、ずっと気になっていた。

いや、入学することになった時も、初めてISを動かした時も、もつと言えば、東さんと千冬姉がIS学園なんてものを設立したくらの時期から、ずっと心の中に閉じ込めてきた問いがある。

今こそ、それを問いかける時だ。箒は俺と同じで何も知らないし、千冬姉は問答無用で封じてくるだろう。東さんなんて言わずもがな、俺の質問を聞かずに蹴飛ばしてしまうに違いないけど。

でも、この人なら。

「……………どこに、いるんですか」

高町のおやつさんもおぶくろさんも、兄ちゃん姉ちゃんも、それからバニングスや月村のおねえさんも。誰も口を閉じて答えてくれなかった問い。

だけど、魔法を知り、そしてISも、東さんのことも何でも知っている物知りな人なら、きつと答えを教えてくださいるはずだ。

「あの人は……………あの人はツ……………」

「一夏……………」

ああ、あの人、だなんて冷たい呼び方は本当に嫌だ。

なまえをよびたい。

でも、呼びたくない。

言ってしまったら、認めたくない何かを、認めてしまうような気がするから。

だから、俺の言葉尻はだんだん震えてきてしまう。ユ一ノさんもそれに気付いたようで、気楽な笑みをさっ、と重苦しい表情に移し替えた。

静まり返る部屋の中、その一瞬の内に、俺は何度も何度も迷って。

「……………なのは……………なのは姉ねえは……………」

最後に会ってから三年間。

一度も口に出さなかった名前を、煮えたぎる気持ちと同時に吐き出した。

「なのは姉は、一体どこにいるんですか」

そう、俺は高町なのは——小さい頃から俺のそばにいる、もう一人の姉——が何処にいるのか、何をしているのかも、知らない。

このIS学園に来てからというものは俺は、箒、千冬姉、東さん、それからユーノさんと。今まで俺の前から姿を消していた人たちに、俺は次々巡りあうことが出来た。箒とは中学時代、いつも電話しあっていたけど、直接会うのは六年前に転校して以来だった。

世界を飛び回る千冬姉や居場所を全く明かさないう東さん、それからユーノさんだって、最後に会ったのは三年前のこと。第二回IS世界大会モンド・グロッソで千冬姉が優勝したお祝いにと、海鳴市で行われた祝勝会で、一緒におふるろさんの料理を食べたつきり、姿を表さなかった。千冬姉はIS操縦者を引退し、東さんはいつもの様に監視を潜り抜けて行方不明——その間にも、箒の所には来ていたっぽいけど。

そんな皆が、代わる代わる俺の前に現れては、IS学園という島へ俺を迎え入れてくれた。だから俺は、なのは姉だってつきり、この島のどこかにいるものだと思っていたのだが。

何処にもいなかった。

あの日あの時あの場所で、俺を助けてくれた、優しく強い、俺のヒーローは。

「……」

ユーノさんは一転黙りこみ、眼鏡を中指で押し上げる。でも、いくらだんまりを通したって、三年間、心の中で溜まりに溜まっていた想いは止められない。

「俺は今でも忘れてません。なのは姉と最後に会ったあの時のことを」

それは、第二回モンド・グロッソの決勝戦が日本で行われた、丁度

その時のことだった。それ自体は、余り思い出したくないことでもある。

——俺は誘拐された。決勝戦が行われる日の朝、家族待遇だか何だかで千冬姉と一緒に東京の会場前の宿舎で寝泊まりしていた俺は、目を覚まして優勝候補である千冬姉の応援に出かけようとした途端、何者かに連れ去られたのだ。

全身を拘束されてトラックの中に『詰め込まれ』、連れて行かれたのは港に停泊していたタンカーの中だった。黒服の男たちが物言わぬ人形のように俺をある部屋へ閉じ込めて、それからどれくらい放置されていたかは分からない。ただ、閉ざされた部屋は揺れていたから、きつとタンカーは海を渡っていたんだろう。日本ではないどこかへ、俺を連れ去るために。

連れ去って何をするのか、というのは未だに分からないが、もしかしたら、こうしてISを動かせていることが理由の一つなのかもしれない。ISに深く関わる千冬姉とも束さんとも縁のある俺は、やはり特別なのだろうか。

その内、倉庫のような船室の扉が開かれ、白衣を纏った女性が現れた。様相はとつくに忘れてしまったが、その右手に注射器を持っていたのはよく覚えている。なにせ、そいつはその針を俺に刺してこようとしたんだから。

注射器の中に何が入っていたかは知らないが、なにかヤバイ、と直感で理解できた。当然俺は必死に抵抗したが、たかが12歳の子供が暴れた所で、全身くまなく縛られているのをどうこう出来るはずもない。

残酷な笑みを浮かべた女性が、俺の右手の静脈に注射器をあてがおうとした、その時。

「なのは姉は……なのは姉は、俺を助けてくれた」

部屋全体に衝撃が走り、俺も女性もその揺れに戸惑った。すると、目の前に広がる桜色の閃光。それは一旦俺から離れて逃げようとしていた女性を飲み込み、傷ひとつつけることなく気絶させた。その光の正体を俺は知っていたし、光を放った人が誰かも一瞬で理解した。

倒れた女性を担いで保護し、俺の周りに展開する完全武装の兵士たち。だが、そいつらが穴の空いた壁に向かって銃弾を放った所で何の意味もない。再び壁の向こうから飛び出た光線により、全員まとめなぎ倒されるだけだった。

そして現れたのは、白いバリアジャケットに身を包んだ、なのは姉。子供の頃から、いつもいつも、俺の側にいる、正真正銘偽りなしの魔法使い。

俺を助けてくれたその魔法は強くてとてもかっこいいけど、何よりその優しさと心の強さこそが、なのは姉の本当の魔法なんだと俺は思ってる。

その姿、凛々しく、力強く、そして美しく。

何より優しいその笑顔を、俺は永遠に忘れやしない。

「そして、俺を抱えたまま空を飛んで——」

安全な場所まで送り届けてくれた後、またどこかへと飛んでいった。無論、その前に俺は引きとめようとしたのだが。

——ごめんね。今はまだ、いつくんのところにはいられないの。

そんなことを言われてしまって、情けなく泣き崩れていた俺を、なのは姉は何も言わずに抱きしめて。

——でも、必ず帰るから。いつくんが危ない時は、今みたいに、絶対、絶対助けに来るから。だから……ちよつとだけ、さようならするけど……また、逢おうね——

と言いつつ残してから魔法陣を作り、桜色の光と共に、空気の中へ溶けゆくように消えていった。

「……あの日何が起きたか、それまでいなくなっていたはずなのは姉が、その日に限ってどうして現れたのか。ユーノさんが知らないはずはないと思ってます」

ユーノ・スクライア。地球出身でなく、ある古代の危険な遺産とともに地球へやって来たこの人は、なのは姉の魔法のお師匠さんでもある。ならば、あの時起こったことに対して、何らかの説明はできるはずだ。

しかし、ユーノさんは俯いて頭を振った。

「君に話すことは出来ないよ」

「どうしてですか！ 東さんに止められてるんですか!? もしかして千冬姉も一緒に、グルになって俺に隠してるんですか!？」

「んー、言ってしまうえば、そう、なるかな。こういうのは、あんまりやりたくはないんだけど。でも、一夏にはまだ教えられないから」

どこまでも冷静で、此方を窘めるようなその口調。その理由は察せていた。

考えてみれば、なのは姉はあんなに優しく強い。その強さを活かして、何か危険な仕事をしていることは十分に考えられる。それを、俺が知ってしまったら、不味いことになる。

確かにそうだ。もし中学時代、なのは姉の居場所を知ってしまったら、俺は迷わず突っ走っていただろう。千冬姉のことも、海鳴の暮らしのことも投げ出して。とにかく近づきたい、そんな気持ちだけが暴走して、なにか大変なことを起こしてしまったかもしれない。それくらい、俺はなのは姉の隣にいたかった。

そういう理屈は分かっているけど、その落ち着いたはぐらかし方が鬱陶しくて、俺は思わず声を張り上げてしまう。

「俺だって、もうガキじゃないんです！ どんないことがあったとしても、受け入れる覚悟くらい……」

「そういうことじゃないんだよ、一夏」

ガキじゃない、と口で言いながら、その時の俺は年甲斐もなく、すっかり冷静さを失ってしまったらしい。一度灯った炎をますます燃え盛らせるように、拳を握り、そして。

「どうしても言えないんなら、力づくでもっ……!」

目の前の華奢な身体にのしかかって、無理矢理にでも口を開かせようとしたが、その直前で緑色の縄で全身をぐるぐる巻きにされた。

「ほら、落ち着いて。ちよっと座って話しあおうじゃないか」

見ると、ユ一ノさんの手元に魔法陣が展開されている。流石はなのは姉の師匠。極めて短時間の間に拘束魔法——バインドを設置して、発動したようだ。こうなったらどれだけ力を入れようが解けないことは分かっているの、俺は顔を思い切りしかめながら、渋々ユ一ノ

さんの言うとおりに落ち着いて、床に座ることにした。

「ユーノさん……！」

「僕らだって、なにもずっと黙り続けてるつもりはない。そんなことが出来ないのは解りきってるしね。ただ、一夏。君がもし、どうしても真実を知りたいのなら、誰かから教わるんじゃないやなくて、君自身の手で真実を確かめて欲しいんだ」

俺自身の手で？

思いがけぬ言葉にきよとんとした俺の右腕、縛られたままのそれに、ユーノさんは手を伸ばす。

そして、とんとん、と叩いた。右腕それ自体ではなく、そこに付けられているものを。

「これは、そういうことを成し遂げるための『力』だからね」

俺の I S。入学式の際に束さんから配られたそのコア・ユニットは、いつのまにやら白いガントレットになって俺の腕にあった。それはまるで、ずっと昔からそこにあるかのように馴染んでいる。今まで身につけていたのを忘れてしまっていたくらいだ。

「……ユーノさんは、俺にこいつで真実を確かめろっていうんですね。貴方も束さんも千冬姉も何も言わない。知りたきや自分で勝手に確かめてみる、ですか」

なんとも身勝手なことだと、思わなくもない。でも、相手はユーノさんであり、千冬姉であり、それから束さんである。

今まで俺になのはさんのことを言わなかったのも、こうして俺を試すようなことをしてくるのだから、きつと何かの意図があつて。更には、俺を何かから守りたいがためのことなんだろう。

だから俺は怒りを収めて、冷静になる事が出来た。

「そういうこと。ま、色々あつて有耶無耶に済まされてた、入学の筆記試験の代わりだと思えばいい……って、これは千冬の言葉だけだ」

ああ、千冬姉ならそう言いそうだな。想像して、俺もユーノさんも笑う。

「ほら、折角だから展開してご覧よ」

「展開……？ これにはまだ、コアしか無いんじゃないんですか

？」

「君のだけは特別。日本政府からの要請もあつてね。何かしらデータを取る用に専用機をすぐに用意してくれて言われてて」

「そうなんですか」

「僕らも僕らで、君のだけは特別に作るつもりだったから、渡りに船だったんだけど。そうだね、今まで渡せてなかった、誕生日プレゼント代わりに思ってくれればいい」

世界のバランスを変えうるくらい秘密兵器が、誕生日プレゼント。なんだかよくありそうな話だ。今まで秘密にしていたつてことは、サプライズプレゼントだったのか。

でも、束さんのことだし、どうせ中身は「アレ」なんだろう。

待機形態というラッピングで包まれたプレゼントの中身を、俺は容易に想像することが出来たので、ユーノさんに軽く問いかけてみることにした。

「そんなこと言つて。どうせ『お下がり』なんでしょ？」

「……あはは、ご名答」

やっぱりか。だったら丁度いい。

何も言われなくなつて、俺にはこいつがどんな機体で、どんな名前なのか理解できるし。

まっさらなのを一から与えられて、どうこうするよりも手間がかからなくて、いい。

俺は生来、面倒なことは嫌いなのだ。

「じゃ、早速やってみようか」

ユーノさんの言葉と同時に、俺は目を閉じて意識を集中させる。

「落ち着いてイメージして。君の身を守る鎧を、君の背中に生える空飛ぶ翼を」

言われた通りに想像する。白い鎧を、白い翼を。

なんで白なのかって？ 当たり前だ。こいつは多分、千冬姉のお下がりで、束さんの作ったもので。それから、なのは姉の所まで、飛んで行くためのものだから。なのは姉の服と同じで白い方がいい。そっちのほうが、一緒に並んでお似合いだと思うから。

「——来い、『白式』」

その名を呼べば、思った通り、全身へ光の粒子が広がった。バインドが押しつけられるように解け、身体が地面から持ち上がる感覚。ハイパーセンサーを含む各種センサーが俺の脳へと直接情報を送り込む。全身へ張り付く装甲の他に、バリアーも俺の身体を囲って守り始めた。

入学試験の時以来だ。あの日は試験場の中もとても寒かった。でも、こうやって触れ合えば、その寒さは消えて、逆に包み込まれるような暖かさだけが感じられるようになる。そう、まるで上着を一枚被って着たみたいに。

気づけば、部屋の中が一回り狭く感じられる。リビングの天井にぎりぎり届かないくらい浮き上がって、俺はISを展開していた。

「成功だ」

ユーノさんは満足して頷いたけど、俺からしてみれば当然過ぎて逆に不満だ。

「でも、どうして『白式』と呼ばなかったんだい？ 昔の事件を話す時はシロシキとだけ呼んでたから、そこでちよつと引つかかるかなと思っただけだ」

「当たり前じゃないですか。『白騎士』はもうあるし、だったら別の呼び方じゃないかって」

14年前の事件で白式がシロシキと呼ばれていたのは、それが白騎士の未完成品だったからだ。しかしもう既に白騎士というISは存在する。ならば、こいつは未完成のプロトタイプなんかじゃなくて、立派に一つの完成品、俺自身のIS、ということだ。

まあ、それでも姉のお下がりであることには変わりはないけど。

(とはいえ、これからよろしくな、白式)

心の中で、俺は今から共に歩いていくISへ語りかけた。

これで、俺がIS学園で過ごす上での明確な目標は全て決まった。まずひとつ、千冬姉の名前を貶めない学生生活を送ること。

もうひとつ、千冬姉や箒、束さんにユーノさん。そんな、俺の回りにいる人たちを守るだけ、強くなること。

最後に一つ。今はどこかに消えている、なのは姉の所まで、この『翼』で飛んで行くこと。

「ユーノさん。今から止めようだったってもう遅いですよ」

「そうだね。僕らがいくら止めても、君はきつと探して、飛んで行く。例えISが無くても、君は歩いて、走りだして行っただろうね……なのはの元へ」

ユーノさんの言葉は、俺にとっては至極当然の事だ。こうして翼を与えられなくても、大学を出て、大人として独り立ちできたなら、俺はなのは姉を探して、会いに行くつもりだった。それが、少し早まっただけだ。

「だから、僕らは君に白式を与えよう。守るための力であり、求めるための力。それを磨いて、君が真実に辿り着いたなら……」

「そこに、なのは姉がいる……そうですね、ユーノさん？」

その言葉に、ユーノさんは強く頷いたから。

俺も白式を格納して、生身の手でその手を握った。

これが、俺の三年間続く、愛と勇気と汗と血と、笑いと涙に溢れた学園生活。

その、始まりの終りだった。

おまけその2（対セシリア編）
IS パーツ争奪戦！

誰もいない、がらんと静まり返った廊下、その一角で。

俺と、金髪碧眼縦ロール、お嬢様という言葉を体現したような女生徒の二人。

「決闘ですわ！」

……となるまでには、まあそこそこの経緯があったりするので、まずはそれからだ。

IS 学園の授業が始まって一週間、俺の周りでは、奇跡的なまでに何も起こらなかった。箒やユーノさん、他のクラスや上の学年ではどうだか知らないが、それは俺が気を張りすぎて、自分の周り以外何も見ることをしなかったからだ。

仕方ないと思って欲しい。あの束さんが作った学園で生活することとは、恐ろしい怪物の胃袋の中で、胃液が染みだして消化される直前のように危機的な状況である。自分のことと、後はほんの周辺だけを気にするだけで精一杯だ。

しかしこの一週間は、5コマまるっと詰まった授業や山盛りの課題に悪戦苦闘するだけで済んだ。やれ何かの暴走だの、誰かさんの気まぐれによる大事故なんて起きなかったのだ。

すると、どうしても気が緩んでくる。こんなものは嵐の前の静けさ、油断してはいけないと頭では分かっているけど、無事に過ごせたと
いう成功体験からの希望的観測は止まらないものだ。

「ねえねえ、おりむー」

「ん？ どうした？」

そんな折。二週間目の初日、千冬姉にガツツリISの基礎理論を叩きこまれた後の放課後、俺はつい、のほほんさんの話に乗ってしまっただ。

おっと、のほほんさんという穏やかな渾名は、布仏本音というクラスメイトに満場一致で付けられたものだ。袖余りの制服を着ていて、どんな状況でもマイペースを崩さない彼女にはピッタリの渾名だと俺も思う。

「ちよつと、頼みたいことがあるんだけど」

「頼み？ 俺課題あるんだぞ」

「それは皆同じだよ？ 出来ればでいいからさ、話だけでも聞いてつてよ」

しかしこの人、ゆつたりとしてる割にはなんとも押しが強い。あらよあらよと、俺はのほほんさんの席の前まで連れて来られて、金属製のバインダーらしきものを手渡された。

開いてみれば、まるで飛び出す絵本のようにホログラムが現れ、腕や足を象ったような部品が投影された。他にもライフルだったり、ブレードだったり……

と、ここまで見て俺は気づいた。そこで、思いつきり胡乱げな目をして、のほほんさんを問い質した。

「……これってさ。ISパーツのカタログ？」

「そうそう、おりむー物分かりいいじゃん」

「やつぱりかあ……」

映されたパーツの傍らには、何らかの単位だと思われる数字があった。パーツの質によって上下するらしく、同じ腕でも十の位止まりのものや、高いものだと五桁の数がかくつついていたりする。何かのスペックなのかもしれないが、これを持ち込んだのがのほほんさんな時点で、多分それより面倒なものだろうと、察しはつく。

一週間このクラスで一緒に暮らしてきたが、のほほんさんはそういう、イベントやトラブルを引き寄せる側の人間だ。例えば、中学の同

級生だった五反田弾のような。ちなみにそれを更にスケールアップして膨張させたのが、東さんである。

「……これさ、いくらだ？」

俺はポケットから、メモリーカード型の電子機器を取り出す。正方形の消しゴムくらいの大きさをしたそれは、昼休みに中庭で拾ったものだ。これと同じものが校内のそこかしこに落ちているのも見たことがある。

手で差し出したそれをのほんさんはすつと手に取り、バインダーの隅つこにある端子へ差し込む。すると、ホログラムが変わり、マシンガンのような形をした腕パーツが現れた。

「ん、500くらいだね。需要そのものはあるけど、数が多いから」

「なるほどなるほど……で、その価値って、分かりやすく言うところのくらい？」

「食堂のスペシャルメニューが一食分……ねえおりむー、本当は全部分かってるんじゃない？」

「いや、適当に話合わせただけ」

そう言うと、流石織斑先生の弟だ、と溜息をつくのほんさん。そつちよりは、東さんの被害者常連と言って欲しい。

それに、こんなカタログ見せられた時点で誰だって大抵の話はお見通せるといふものだ。

「要は、いいパーツ拾ったら高値で買い取るよってことだろ？」

「その通り〜！」

そう。たつた今見せられたカタログは、俺たち新生のために用意されたISパーツ、そのトレード相場表なのだ。ちなみに、リアルタイムで変動する価格は、さつきから500と510の間を行き来している。それだけ市場が賑わっているのだろう。

自由なカスタマイズを支援するため大量に用意されるはずのパーツで、どうしてトレードなんかが行っているのかというと。我らが篠ノ之学園長が初授業の前の校内放送で、よりによって大演説をぶちあげてくれたからだ。

知識、名声、技術、その他諸々を手に入れたマッドサイエンティストが放った一言は、一年生をこぞって放課後の校舎へ駆り立てた。『新入生の諸君！ 私が作る至高のISパーツが欲しいかい!? ならば！ この校内のあらゆる所を探せ！ そして手に入れる！ ISパーツチップを！』

こうして女性達は天才特製のISパーツを目指し、授業が終わればすぐに飛び出し、ひたすら校舎に校庭に、四方八方へ走り回るのがもはや日常風景となった。

世は正に大IS時代。と言ったところか。いや、ここだけではなく世界的にISな時代なんだけれども。

「おりむーには友情価格で、ちよつと高めに引き取ってあげるよ〜?」
「……友情は安売りしない方がいいぞ」

「ええ〜? そういうつもりはないんだけどね〜」

そして目の前に居るぶかぶか袖の女の子は、夢に燃え、高性能チップと言う名の明日を追いかける少女たちの欲望を巧みに煽り利潤を得る、通称『チップバーター』の一員……と、言う訳だ。

なんとも学生らしくないけど、ある意味では学生らしいというか。正直そんなことをやって千冬姉辺りがどう受け取るかと考えたら寒気が走るけど、その弟を堂々と勧誘しているのだから、恐らく黙認されているのだろう。

他にも制服の改造が自由だったり、寮への私物の持ち込みが全面許可されていたり。このIS学園は、かなり生徒の自主性を尊重しているようだ。というか、生徒が行う多少のはみ出しや跳ねっ返りなんて、あの教師陣からすれば大したことはないはずだ。もつと凄い物と戦ってるのだから。

「まあ、それはとにかく、私としてもおりむーは特に話を通しておきたい逸材なのさ〜」

「逸材? それってどういうことだ」

こつちがそんな考えにふけていたら、のほほんさんは構わずに話を薦めてくる。

このマイペースさに、一度でも嵌ったら多分お終いなんだ。昼休み

や放課後、カタログを覗くクラスメートの顔を白黒そして一喜一憂させる器用さを、俺はその目に焼き付けている。その手練手管を見せつけるように、この後相手は意外な搦手をつけてきた。

「おりむーってさ。もう機体出来上がってたんでしょ〜？」

「あ、ああ。白式のことか？」

「うんっ。でき……白式には確か、バースロット拡張領域がほとんど存在しないんだっけ？」

「そうだけじゃ……」

のほほんさんの言うとおり、俺の『白式』には、機体武装や装備の拡張に利用するための空き領域が殆ど存在しなかった。千冬姉の武器の後継である『雪片二型』が殆どの領域を食っちゃまっている、とのことだ。

機体仕様を見た時に気づいて、軽く目眩がした。射撃に格闘、剣だけでなく槍に斧、果てはビームまで乱舞するIS同士の戦場。そんな鉄火場に、ブレード一本だけで乗り込んで一体どうしろと言うんだ!? 設計者出てこい、と言いたかったが、本当に何処から出てくるか分からない人なので口にはだすのは諦めた。貞操の危機はもう勘弁して欲しい。

「だから、信頼ある取引が出来るんだよ〜！」

「……なるほど。もう自前で揃えて拡張の余地が無いなら、例え良いパーツを手に入れても持ち逃げはされない、ってことか？」

「あつたりい」

確かに、どんなパーツを手に入れても装備出来なきや意味が無い。だから、拾った所で他人に渡す位の事しか出来ない俺は、パーツチップ集めを依頼するのに丁度いいお客さんと言うわけだ。他にも聞いてみると、既にIS本体を完成させている生徒や、お金儲けがしたい上級生は結構いて、のほほんさんのようなバーターはそんな人たちと契約してチップを収集しているのだとか。

「でも、どうして俺の白式のことまで分かったんだ？」

「整備課志望だから、一度現場を見せてもらったんだ〜。その時にちらちらっ〜」

何気に初耳の情報だ。そう言えばのほほんさん、ISの構造や知識に関する抜き打ちテストだとトップクラスの成績だったわけ。射撃も格闘もてんで駄目だけど、そういう抜きん出た取り柄があるから入学出来たって人も、この学園の中には結構いるのかもしれない。

「で、どうするのおりむー？ 私としてはぜひぜひ、いい関係を築いておきたいんだけどね〜」

詰め寄ってくるのほほんさん。多分こういう取引は彼女だけでなく、その友人、先輩方までつるんで行なっていて、彼女はその、ほんの尖兵に過ぎないんだろう。確か彼女の姉は三年生で生徒会に所属しているというから、その先輩の差金なのかもしれない。

その他、取引の是非について少し考えた後、俺は答えを出したので、わくわくしながら此方を見つめるのほほんさんにこう告げた。

「ああ、いいぜ。何か良さ気なチップを見つけたら届けるよ。のほほんさんの言う通り、俺が持ってたって大した得にはならないしな」
「おお〜」

ここで、君たちの行っているアコギな商法には一切加担しない！と跳ね除けるのがヒーローのやることだが。実際俺自身、こういう手段で収入を得られるなら、そうしたいのが現状だった。

「薦めておいてなんだけど〜、おりむー結構乗り気なんだねー、こういうの興味ないかなと思ってたけど」

「いやなあ、実を言うと俺……金欠なんだ」

情けないことだがこの織斑一夏、自由に使える金が殆ど無いのである。中学時代はバイトを精力的にやっていて、同年代の中ではちよつとした小金持ちだと自慢できるくらいだったんだけど。

「ええ〜!? 何か高いもの買って、余裕が無いとか?」

「違う違う、そういう一時的な小遣い不足とかじゃなくって、もっと根本的なやつ」

「根本的……?」

のほほんさんは理由も考えられないほど驚いてるけど、俺は落ち着いて首を横に振る。なにせこの悩みは俺限定で、他の学生なんかは殆ど何も感じない、というより気づいては居ても大して問題にはしない

ことだから。

「IS学園の物価ってな……物凄く高いだろ？」

「あぁっ、確かに！」

案の定、のほほんさんは言われて初めて意識したようで、素っ頓狂な大声を出した。

そう。日本国内に有りながらも独立自治権が認められているこのIS学園は、世界最高峰の教育が受けられる機関であると同時に、世界最高峰の物価水準をも誇っているのだ。例えばファストフードのハンバーガーのセットだけで、なんと約1000円。他の品物も軒並み日本より高くなっている。

その理由としてはまず、この大きな島に生活物資その他の生産能力が殆ど無く、ISに関連するもの以外は大体輸入するしかないのでもうしても割高になってしまいうことが挙げられる。

だがそれ以上に大きく、俺の貧乏にも係る重大な理由がもう一つ。「やっぱし、言われないと気付かないよな？ のほほんさんって、多分お金持ちの家の出だから」

「うくん？ そうだね……普通と比べたら、そうなるかなあ、確かに」

学園で暮らす学生や、技術者たちの平均所得が世界のどの国よりもぶつちぎりが高いのだ。

三億人の中で選び抜かれたエリートのは半分は、例えばセシリアのように、やんごとなき身分のお嬢様である。そうでない学生にも国家またや企業がバックアップに付いているので、経済的にはとても恵まれていると言えるだろう。技術者たちは勿論、世界最先端の技術をこの島から輸出できるので、それ相応の報酬を貰えることに間違いはない。「でも俺は違うんだよ！ ぐくぐく普通の、喫茶店やってる家に生まれ育つてさ。ここの売店の値札を見た時には、思わず目をクラクラさせちゃったくらいだ！」

「へえ、そうなんだ。でもさ？ おりむーも織斑先生の弟さんだったら、少しは」

まあ、のほほんさんの言う通り。かくいう俺も世界最強、地位も名

声も半端ない、織斑千冬の弟なのだが。

「そう思うだろ？ でも、千冬姉は金銭とかにはどうも興味が無いというか、執着が無いみたいでな。大会に優勝した賞金やら報酬なんかで大金が手に入っても、すぐ何処かへ寄付しちまうんだ」

「ええ〜……」

てなわけで、俺や高町家の生活水準はあくまで、一般市民のそれに留まっている。それがいきなり世界最高の物価に出会ってしまえば、あつという間に手持ちの金が尽きるのも当然だった。

同居人のユーノさんも轡木さんも、不足ならいくらでも頼つてくれていいと言ってくれた。更にもしこの窮状を言えば、千冬姉だけではなくあの束さんにも頼れるかもしれない。

だが、それは最後の手段だ。三人一緒の食費はともかく、衣服だのなんだの、自前のものやその他嗜好品まで他人の金で買うのは何だか罰が悪い。

だから俺は今、少なくなった預金を必死にやりくりする生活を送っていた。

そこに降って湧いてきた、臨時収入のチャンスである。これを逃す訳にはいかない！

「という訳で、引き受けるよ」

「おお。何だか予想よりも大分切羽詰まってるけど、おりむーならきっとそう言ってくれると思ったよ！ じゃ、これあげる」

そう言うとのほほんさんは、開いたまま机に置いていたバインダーを閉じて、俺にそっくり差し出した。どうやらこれを使って、高値になるパーツを選別しろということらしい。有難いことだ。何も知らない俺がただチップを見ただけだと、どのチップがどのパーツなのかさっぱり分かるものじゃない。やるなら出来るだけ、高いパーツを見つけて交換したいのだ。そうでもしないと、俺の貯金はただ節約しても半年も経たずに尽きてしまうのだから。

俺はバインダーを脇に抱えて、右腕に力こぶを作りながら力強く宣言した。

「ああ、任せろ！ 俺のために、そしてのほほんさんのためにも！

きつと凄いパーツを手に入れてやるからな！」

「……おりむー。その『のほんさんのために』って言葉は誤解を招くと思うんだけど……ああもう、聞いてないや〜」

で、その日の放課後まで時間は進み。

みつちり詰め込まれた授業から解放された俺は、早速バインダーを持って校内を駆け回った。

だだっ広い校内、そして広大な学園全体に、貴重なパーツが小さなチップとなって散らばっている。散らばっている。そう思うと何だか子供の頃やったRPGの宝探しを思い出して、俺の心は自然と弾んでいった。しかもそれが貴重な資金源になるのだから、ますますやる気が出るというものだ。

「ん〜……これは安いし、これも、これも……」

とは言え、レアで需要のあるパーツは必然的に数が少なくなるように。植木の裏や茂みの中まで丹念に探しても、ありふれて価値の低いパーツチップしか手に入らなかった。

それでもちゃんと取引はしてくるみたいだから、纏めてポケットの中に収めているものの。これでは小遣い稼ぎになっても、経済状況の打開にはとても行き着かない。

やはり狙うは大物だ。それもレアリティが高く、実際の性能もかなりのもので、だからこそ需要の多いISパーツ。俺は予め、それに目安を付けておいた。

ホログラムのパネルを操作して俺が呼び出したのは、最高ランクのレア度を誇る腕部武装の一つ。クローのように尖ったマニピュレーターと小型のガトリング砲を兼ね備え、近距離・中距離での戦闘に絶大な威力を誇るそのパーツは、『アサルト・ガトリング』と通称されていた。

「これさえ手に入れば、一攫千金なんだ」

俺は一人呟くことで、どうせならそいつを狙ってやろう、という大胆な決意を固めた。宿舎で夕飯を作らなければならぬのだから、捜索に費やせる時間は限られている。ならば、多少の小物など置いておいて、一気に本丸を狙い打つことに全てのリソースを割く。

当たれば長者、外れれば骨折り損のくたびれ儲け。だが、どうせ柵から牡丹餅を期待するような話だし、これくらい馬鹿になってもいいはずだ。

「よしっ、そうと決まればもう一度！ 行くぞ！」

意を決して、再び校舎内を一から洗い直そうとした俺が、入り口をくぐったその時。

すぐ先の廊下に、黒く輝くパーツチップが落ちていることに気づいた。

「……」

ああ、たしかに黒だ。普通のチップが灰色なのに対し、黒いチップということは明らかにレア物ということだ。だが、思いがけた矢先に会おうなんて幸運が、果たして実際に起こりえるのだろうか？ 落ちてこう、落ち着かねば。

俺は震える手でバインダーを開き、『アサルト・ガトリング』のパーツ詳細を検索する。出てくるのはスペックの詳細、現在の相場——しかし、そんなものが欲しいわけじゃない。俺は次々ページを進めていって、ついにお目当ての項目に辿り着く。

過去の入手例から分析された、チップの形状。そして映された虚像は紛れも無く、目の前のチップと同じように黒く鈍く光っていた。

「み……み……」

まるで信じられなくて、一步一步そろりと歩きながら、目はチップから離さない。全く、こんな貴重で高性能なパーツが道端に落ちているなんて。これじゃあRPGはRPGでも、あんまり出来の良くない部類じゃないか。

だが、疑いなく本物のパーツチップだ。胸の中から喜びを吐き出すように、俺は叫んだ。

「見つけたっ！」

「見つけましたわー！」

そこに僅かながら遅れて重なる、女性の声。見ると、俺とチップを挟んで正反対、つまり真正面に、屈みこんでパーツを拾おうとしている女の子がいた。

その顔には見覚えがある。俺と同じく一年生。同じクラス。昼休み、手製の弁当を食べている俺をいつも冷ややかな目で見ていた彼女の髪は、とつても目立つ金髪のロール。

「ど、どうして……どうして貴方がここにいるんですの!?! しかも私に先んじるなんて!」

びしい、と効果音がつくくらい激しく俺を指差すのは、イギリスの代表候補生、セシリア・オルコットだった。

「いや、どうして……」

唐突な出会いと問いに、チップのことしか考えてなかった俺は驚いて、暫く答えあぐねていると。

セシリアは何やら一人、状況に対して得心したらしく、とつても悔しそうな苦悶の表情を浮かべながらも、早口で言葉を並べた。

「で、ですが仕方ありませんわ。今のやりとり、見つけた、と声を出したのは、コンマ7秒ほど貴方が先だった……そう、先だった」

「え? いや、そうだけじゃ」

「正直に言えば。悔しい、ですわ……まさかこの私が、よりにもよって織斑一夏、貴方のような男に出し抜かれてしまう……この屈辱! この敗北感と言ったら!」

出し抜くも何も、俺はただ何も考えず校舎に入っただけで、運が良いか悪いかだけなんじゃないか? なんて言い返してやろうとしたが、セシリアは俺に二の句を告げる暇も与えず、再びまくし立てた。「ですが、私は由緒たる貴族。栄光あるオルコット家の末裔ですわ。それが例えどんな人物であろうと、例え勝負を分けたのが偶然であろうと……負けは負け、と認めなければ」

堪え切れない感情を、口で噛み砕くどころか顔の筋肉全体を使って抑えこむような表情を見せつつ、セシリアはチップを手に取り、俺の方へと差し出す。その手が強張り、震えながら開かれたのを見ると、

彼女はそのチップをどうしても欲しくてたまらない、自分のものにしたいののだと、簡単にに推測できた。

どうして『ブルー・ティアーズ』という専用機を持つ才女が、今更パーツを欲しがるのだろうか？と疑いもしたが。やはり彼女のような人間でも、篠ノ之束製の武装は喉から手が出るほど欲しいものなんだろう。

「さあ、私の手からお取りなさい、チップを……！　それが、勝者に与えられた、当然の、権利、です、わ……」

そんなセシリアが、多分認めたくないだろう、男性への敗北を認め。今にも無念と執着心によって握られてしまいそうな手を必死に広げ、俺の目の前へ出してくれる。

「さ、さあ！　早くなさい！　私の海よりも深く優しい慈悲の心が変わらない内に！」

ぷいと顔を背けているのは、俺の顔なんか見たくない、というか見たら悔しくなって手を引っ込めてしまうから、見ないようにしているのだろう。

「何をしているんです！　さっさとなさい……！」

そういう姿を見ると、何だか妙に気合が萎むというか。もしこのままチップを譲ってもらったとして、本気でパーツを手に入れたらと思っているセシリアの気持ちも、俺の薄汚い金儲けのための心が踏みにじっていることにはならないか、と思えてしまった。

「……………」

「へっ？」

俺はセシリアの手を取って、ゆっくり、そして出来るだけ優しく指を動かして、データチップを握らせた。自分でも意識しない内にそうしてしまったから、手入れの細かいすべすべした指の肌を触ってしまったが、そういうやらしい気持ちは一切なかったと言い訳できる。

「い、良いというのは、どうい……？」

「だから、いいんだよ。セシリアってこれ欲しいんだろ？　じゃあ、俺はまた別のを探すから」

「で、ですけどこれは何千個に一つのレアパーツで……気づいたのは、

貴方が先で……」

受け取れない、とばかりにもう一度手を開こうとするセシリア。俺はその頑固な細い手を、自分の手でぎゅっと押さえる。

「大丈夫。必死に探せば、もうひとつくらい必ずあるって。頑張ってみるよ」

「な……なな、な……っ！」

セシリアの顔はその途端に、沸騰したみたく真っ赤になってしまった。そりゃあ怒るだろうな。向こうからすれば勝利を譲られた形になるし。

でも、俺は彼女のように、本気でパーツを求めた訳じゃないのだ。もしかすると、それを言わないと納得してくれないのだろうか。あんなに本気な彼女の前では、恥ずかしいから黙っておくつもりだったけど、しょうが無いから言うことにしよう。

「それにさ、俺、実を言うところのチップ、自分で使いたいから欲しかったわけじゃ……？」

肝心の部分まで言いかけた所で、セシリアが俯きながら何事か呟いているのに気づく。

「でも……でも、私……だからそんなこと……み、みみみ……」

何を言っているのか分からなかったので、黙って耳を凝らしていれば。

「認められませんわ！ 断じてっ！ 認めたくありませんわ!!」

どっ、と火山が噴火するような大声に、俺は思わずひっくり返ってしまった。当然、彼女の手から俺の手は離れ、チップは元通りに握られたままだ。

このままではいけない。このまま彼女の言葉のまま状況を進めては、きつと不味いことになる。そう確信した俺は起き上がって再び彼女をなだめようとしたが。

「そ、そんなこと言われてもさ、俺「お黙りなさい！」は、はいっ」
有無を言わさぬ口調に、思わず背筋を伸ばして復唱してしまった。

悪い癖だ。ああ言う状態の女の子に文句を言ったら酷い目に合うことを、古くは箒と千冬姉、続いてセカンド幼馴染に、俺はすっかり覚えこまされてしまっている。

「そ、そう！　これは私、このセシリア・オルコットに対する明らかかな侮辱ですわ！」

「ぶ、侮辱う!?!　いやだから、俺は別にパーツ欲しい訳じゃなくって、ただ……」

「見苦しい嘘をつかないで下さいな！　IS学園の生徒たるもの、高性能なパーツや武器を欲しがって当然！　それを欲しくはないなどと、見え透いた嘘までついてこの私に……こ、この私を！　どこまでコケにすれば気が済むんですの、貴方は!?!」

コケにした、と言えば確かにそうだろう。だが、俺の場合はいささか訳が違う。拡張領域も何もないのに、武装なんて手に入れた所で何の意味もないのだ。

だが、そんな事情をセシリアが理解しているはずがなく。だからと言つて、こうなつた彼女に説明を挟む余地も毛頭存在しなかった。

「貴方みたいな男がいるなんて……貴方みたいな……!?!」

何だか悪夢にうなされていようような苦しい顔をして、喉に挟まった一言を言いあぐねているようなセシリアだったが。やがてその内面での戦いにケリをつけたらしく、怒りを一周回らせたような冷静さを以つて、冷えた声で呟き始めた。

「……ええ、そうですわね。所詮貴方も弱い男。私に媚びなければ生きていけない！　だからこういうことをした！　きつとそう！　そうに違いありませんわ！」

「なっ……!?!」

この言い方にはさすがの俺も少しだけ頭に来た。確かに俺は金のことしか考えられない浅はかな男だが。同い年のクラスメイトに媚びるほど情けない男でないと、それくらいは言い切れる。

「そうなんでしょう！　そうだと言いなさい！　そうだと言つてくださいましー！」

「いいや、そうじゃないー！」

で、セシリアの言い方が余りに高圧的なので、釣られて俺も強く睨みながら大声で反駁してしまった。

「っ!!……ううう……」

すると、セシリアはまた俯いて、ふるふる震えだしてしまう。

しまった、言い過ぎた。何だか良く分からないけど、俺の一言が再びセシリアを追い詰めてしまったようだ。

馬鹿だな俺は、プライドが高くて口は悪いけど、セシリアだって立派な女の子じゃないか。あの人から教わった通り、女の子に対してはなるだけ優しくしなきゃいけないというのに。

「あ、いや、ごめんな? まあ俺も、傍から見たらそんなに立派な人間じゃないだろうし、ひよつとしたら、セシリアの言う通り、なのかも……は、はは、は」

俺は慌てて、セシリアをおだてるような事を言いながら乾いた笑いを飛ばしたが。流石にそんな嘘はすぐバレるようで、彼女はますます怒りながらきつ、と顔を上向けて怒鳴った。

「巫山戯ないでくださいましっ! 貴方はそんな、ヘラヘラ笑う男ではありませんわ!」

「え、えっ?」

「もつとビシツとなさい! 背筋を伸ばして! 顎を引いて、ちゃんと私を見つめなさい!」

何を言っているんだろう、この娘は? これではさつきと言っていることがまるで正反対じゃないか。だが、直前よりますます高圧的に詰め寄ってくるので、俺も慌てて前言を撤回する。

「そ、そうだな。俺はそんな男じゃないんだ。うん……その、ありがとうな」

「なっ!? なななな……どうして礼など!?!」

「いやさ、どうあれ、褒めてくれたんだろ? 女の子に褒められて嬉しくない男はいないよ」

「……っ!!」

都合三回目の俯き。そしてプラスアルファで、顔も真っ赤に染めている。

ああ、これだから女の子というのは分からない。千冬姉も東さんもそれからあの人も、そんなに複雑じゃないから良く考えればちゃん分かる、だからもっと考えろ、なんて言ってたんだが。

だが、今回は前回ほど深刻ではないのか、それともいい加減彼女も慣れてきたのか。比較的早めに顔を上げ、それから再び、俺のことを責め始めた。

「……ええ。そうですね。コレも所詮はおだて、私に取り入るための巧妙な演技のはず！ 絶対対に！ 大体、ISを動かせる男だからと言つて、それだけで一般庶民がこのIS学園に入ってくる！ その事自体、私は認めたくありませんの！ 全くもって分不相応！ 身の程知らずの極み！」

今までなんのかんの凄く理不尽に怒られている気はするけど、この文句にだけは心の中で深々と頷けた。

そう、全くここは俺にとつて分不相応なのだ。いや、頭の出来とか操縦技術は死ぬほど頑張れば追いつけるだろうが、資本力だけはとう頑張ったって覆しようがないものだ。そういう面で言ってしまうと、出来れば海鳴に戻って再びバイト三昧の日々を過ごしたい。ここはバイト禁止だと言う事は、余りにも重く俺にのしかかって来る。

そんな懐古に浸る暇も無く、セシリアは俺にばん、と一際大きな声で言葉を叩きつけた。

「こうなったら貴方がどれだけ情けなく、惨めな男かを衆目に晒す必要がありますわ！」

なにがどうなつたらそういう結論に至るのかは知らないが、とにかくセシリアの頭の中ではそう結論したようだ。いそいそとスカートのポケットから白い手袋を取り出し、一旦右手につけてからすぐ脱いで、それをぼん、と俺の足元へ投げつけた。

ここまでくれば、彼女がやろうとしていることは俺にも分かる。

手袋を取らずに黙って逃げることも出来そうだったが、例えそうしても後できっと問い詰められたり、無理やり迫られることだろう。何しろクラスメイトとして、必ず顔を合わせなければいけないのだから。

それに、俺は誰かから戦いを挑まれて、それから逃げるほど臆病者じゃない。正々堂々と受け止めて、それで――

だから、俺は黙って手袋を拾い、見せつけた。

「受け取りましたわね……あああ、受け取り、ましたわね……本当に……」

その行為を見て、セシリアは怒り半分の表情で呟いた。残り半分が何なのか、俺にはさっぱりわからない。ただ、少しのためらいと、なぜだか喜びが入っているように感じた。

「よろしいですわ。ならば……」

そのままの表情で、仁王立ちになって此方を睨み続ける彼女。その両耳を飾る、青い涙のようなペンダントがちりん、と鳴った気がした。

「決闘ですわ！」

かくして、俺はこの学園生活で初めての厄介事を体験する羽目になった。

持つべきものは幼馴染（I）

『一週間後、ISアリーナ一番でお待ちしております』か……なるほど、それは大変なことになったな……！』

とか言ってる幼馴染の声には、まるで古い洒落を聞いた時のような失笑が満ちていた。性格上、別に真面目に聞いていないわけじゃないだろうが、それでもおかしくてたまらないらしい。

なんだか少しむかつとしてしまう。確かにあの場で何も言い返せなかったり、態々手袋を捨ててしまったのは俺の責任だが、何もそれだけが原因という訳でもないはずだ。

『そりゃないぜ箒。折角こんな場所まで来て、頭下げてお前に相談してるつてのにさ』

あの出会いと決闘申し込みから時は過ぎて、今やすっかり夕飯時。俺と箒が今いる場所は、IS学園の食堂、ずらりと並ぶ学生用テーブルの一角だ。普通なら今頃ユーノさん轡木さんと一緒に、男性用宿舎で仲良く食卓を囲んでいるのだが、今日は何より箒と水入らずで相談したいので、この食堂を使っている。ちなみに、ちよつと早めに帰ってカレーを作り置きしておいたから、二人もコンビニ弁当を買うなんて寂しい事にはなっていない。

で、二人が散々居心地悪いと言っていた女性ばかりの食堂は——正直、かなり肩が狭かった。話で聞くだけだとそんなに大したことは無いとも思っていたが、実際女性ばかりの食事空間で一人だけ男なのは、本当に針の筵だ。それに俺の場合は、ISの男性操縦者という肩書きもあつてか余計な好奇の目まで刺さってくる。

でも、ああいう突発的で、しかも女の子絡みのトラブルの場合。

多少のデメリットなんて吹き飛ばすほど、篠ノ之箒という無骨な侍娘はとつても頼りになる。

「まあ、決闘を受けたのなら今更断りも出来ないだろう」

「そうだよな……」

「だが、一夏。お前はISの操縦に関してはズブの素人だ。対する相手はイギリスの代表候補生。この勝負、期日は一週間後というが、勝

「目は限りなくゼロに近いぞ」

「仰る通りです……」

ズバズバと言葉で斬りかかってくる箒に、俺はただただ無抵抗で刻まれるまま。

でも、実際それが現状なのだから何も言い返せないし、それにただ斬るだけが箒の性格でないことも、俺には十分理解できていた。

「だからな……放課後、アリーナまで来い。私が稽古をつけてやる」

「稽古って、剣道の……じゃないよな」

「当たり前だ。これでも私は開発者の妹だぞ？　ISに関しては、お前よりもずつと知識がある」

やっぱりだ。俺は嬉しくなつて椅子から半立ちになつて、箒の手を取つてぶんぶん振った。

こういう時、箒は俺を本当に良く助けてくれる。

もう何年も前になるが、幼馴染になつてから別れるまで、箒は俺のことをずつと助けてきてくれた。例えば気の強い女の子に難癖を付けられたり、おどおどした女の子の思わぬ秘密を知つてしまつたりした時。他にも、地元の英雄である千冬姉が大好きな女の子に、弟である俺の情けなさをなじられたりとか、俺をアニメのヒーローと勘違いした女の子が付きまどつてきても。

箒はいつもいつも、俺の悩みを解決してくれた。

俺は生来どうも女の子の扱いが苦手なのか、そういう子たちを相手にしていたら、いつも事情を余計に拗らせてしまつていたが。彼女はそのこんがらがった関係を、まるで魔法のように解きほぐし、見事問題を解決してくれるものだった。

「……ありがとう、箒！　この学園にお前が居てくれて、本っ当に良かった！」

そして、今回もそうだ。セシリア・オルコットという強いIS操縦者と決闘する事になった俺を、手助けすると約束してくれる。

全く義理堅くて、とつても頼もしい。やはり、持つべきものは幼馴染だ。

「そうか……私も、頼られるのは、嬉しい、ぞ……」

箒は顔を真横に反らしながら、俺に手を揺さぶられたままにしてくれる。どうして顔を向けないのか分からないが、とにかく俺が今出来るのは感謝の一念を伝えることだけ。

「この埋め合わせは必ずする！ 本当にありがとうな！」

「……いい、埋め合わせいいから。もうこれでいい……う、ふふ」

埋め合わせはいい、だなんて、全くもって心が広い。俺の勝手に貴重な放課後を付き合ってもらうのに、本当箒の心は空よりずっと広大だと思う。

小さい頃も余りになつてばかりなので、悪いと思つた俺はいつも何かお返ししようかと言つていたのだが。彼女は決まつてこんなことを言いながら、提案をやりわり押し退けていた。

『いいよ、別に一夏のためにやった訳じゃなくて……そうしないと困る、私のためだから……なな、なんでもないっ！ とにかく、お礼はいい！ いいから！』

私のためというのは、恐らく照れ隠しが半分、トラブルにぶち当たることで己を鍛える大いなる向上心が半分、といったところなのだろう。如何にも箒らしい実直さと誠実さだ。俺にはとてもじゃないが真似できない。

そんな思いを込めて頭を下げていたら、箒が如何にもじれったそうな声で、料理が冷めるからもう止せ、と教えてくれた。俺は慌てて手を離す。考えてもみれば、幼馴染とは言え年頃の女の子の手を握り続けているのはどうもいけないことに見える。

「ご、ごめんな箒！ お互いガキじゃないのに手まで握つて、気色悪かつたよな！ もうしない！」

「なっ……いい、そういうの本当にいいから！ ……とにかく、食べよう」

「そう、だなっ、ははは……」

ああ、これは絶対に呆れられただろう。いつもしつかりもので頼れる箒に比べて、俺はなんと腑抜けていることか。こんなんじゃないままが目指すものにはほど遠いと反省しながら、俺は箒と一緒に暫く無言で夕食の鮭定食を片付けていたが。

「だが、一夏？ あのセシリアの勝負を受けるだなんて、お前も中々度胸があるな！ ほ……ではなく、見直したぞ！」

雰囲気落ち落ちてきた所で、こんな風に話しかけられた。

「度胸？ いや、そんなこと無いぞ？ 決闘って言っても模擬戦だろう？」

「それはそうだが、セシリアは一年生、いや学園の中でもかなりの強さだ」

「代表候補生だつてのは知ってるし、そりや強いだろうけど……つてか、箒」

「どうした？」

この会話、更に言えば箒の切り出した話に、俺はとてつもない違和感を感じていた。だから俺は、箒を置いてから会話だけに集中し、お吸い物を啜ろうとしていた箒に問いかけた。

「なんでセシリアが強い、つてはつきり言い切ってるんだ？ そりや強いには間違いないんだろうけど……お前、セシリアが戦っている所とか、見たことないだろ？」

「何を言っている？」

「だから、見たこともないのに、資料や情報だけで強いと言い切ってるのは、お前にしてはおかしいってこと」

普段の箒なら、絶対にそんなことは言わずに、「強いと聞く」と表現しただろう。その辺り、彼女はしっかりしている。だけど今、強い、と断言したのだから、これは明らかにセシリアの戦いを見て迷いなく言い切ったと見ていい。

俺たちクラスメイトの目の前で、セシリアは今までISを展開すらしていないはずなのに。

「見たことが無いなどと、馬鹿なこと……もしかして一夏は、セシリアの戦いを知らないのか？」

「知らないさ。模擬戦なんて授業でやったこともないし、ISの展開も見たことがないから」

「しかし……むむ、いや、まさかとは思うが……」

俺の返答を聞いた途端、色々と考え込み始めた箒は、片手の指先で

額を抑え、もう片方の手で鞆から何かを取り出し、俺に向かって投げつけた。びゅん、と思い切り高速で迫るそれを間一髪受け取ると、正体はとある電子端末。電源を入れてみたら、モニタに映し出されたのは新聞によく似た文書らしきものだった。

「箒、これなんだ!?!」

「やはり、学内新聞を読んでいなかったのか。反応から予想は出来たが、全くどうして……」

「学内新聞!? そんなのが……って、おい!」

書かれていたのは、俺の度肝を何度も引っこ抜いて余りあるセンチシヨナルな見出しの集まりだった。

——セシリア・オルコットVS更識簪! 新入生最強はどっちだ!?

——新入生のイギリス代表候補、上級生を見事撃破! 期待のスーパールーキーか!?

——イギリスから来た魔弾の射手、セシリア・オルコットの秘密に迫る!

「何だよ、これ。まるで、セシリアがスター選手か何かみたいを書いてあるけど」

「事実、あいつはスターだ。学内ISバトルの中でも、新入生の中では一二を争う実力だ。この前の日曜日、私は観客席にいて、その目で確かに見たからな!」

「あ、ISバトルう!?!」

全く初耳の単語、それに内包される意味を推測すると、俺はますます認めたくなくて大声を出したが。箒はそれに比例するかのような声のトーンを降ろして溜息を吐きながら、事情を順番に説明してくれた。

「この学校では、在校生全員がISを所有している。これは知っているな」

「ああ。東さんが配ってるから」

「だから、校内での諍いや揉め事の争いに、IS同士の模擬戦が使われ始めて……それが高じて、生徒間による興行やお祭りを兼ねたスポーツと相成った。それが学内ISバトルだ」

なるほど。確かに考えてみれば、誰もがISを持つ環境、しかもIS専門の学園内でそういったイベントが考案されない方がおかしい。「詳しいルールは既存の模擬戦とほぼ同じ、と言うよりほぼ、国際試合のルールが流用されているな。アリーナで行わなければならぬから、監視の目が届かない野試合は存在せず、全て生徒会が派遣する見届け人の元で行われる」

「そうか。生徒会が全面的にバックアップしてるから、教師陣も黙認してて……しかもこんなランキングなんざ作る事ができるのか」

箒に手渡された端末を操作していると、やれどの生徒の勝敗率だとか、戦闘スタイルなんてのも事細かに記されている。監視されない試合は存在しないって言葉は本当なんだろう。学内新聞という名前と大文字見出しの書式からして書いてるのは新聞部らしいけど、彼らも生徒会から情報を受け取って、書いているのに違いない。

「セシリアはまだ入学したてだが、既に代表候補生として第一線で活躍してるだろう？ しかも、先輩に同じイギリスの代表候補生がいて、彼女のおつてでバトルに参加し、鮮烈にデビューして周囲から着目されている」

「なるほどね……」

恐らくはどこかの記事からまるっと流用しているだろう箒の説明を聞き、俺はすっかり納得した。なるほどこれなら確かに、箒がセシリア・オルコットの強さを見ていたとしてもおかしくはない。

「……それは、分かったけど……」

だが俺が、この人心を巧みに煽って止まないだろう記事の羅列に突っ込みたいところはそれだけじゃなかった。

恐らくは上級生同士だろう、ある生徒間の対決。その記事には対決する生徒のパーソナルデータ、ISに関する情報と同時に、あるレポートが書かれていて。この半日、のほほんさんから貰ったバインダーと睨めっこし続けていた俺としては、ISパーツチップの相場とちよくちよく変動する記事のレートに、嫌な共通点を見つけざるを得なかった。

「このバトルって……賭けも、ありなのか？」

「ああ、よく分かったな。流石に実際の金銭を賭けるのはご法度だろうが、過去数年間に配布された分を含むパーツチップを使って、場外でも熱い戦いが行われている……らしい」

「さ、流石に不味いだろ、それは！」

「まあ待て。一応のめり込み過ぎ無いように、限度額やその他制限は定められている……それに、この生徒は皆セレブリティな金持ちだ。私達から見ても単位が飛び抜けていても、小遣い内の遊びで済む程度の出費にしかならんのだろう」

俺と同じく一般家庭の小市民な感覚を持つ筈は、記事に書かれている相場を覚えているのか、金持ちの遊びにはついて行けないというようにため息。

ならんのだろう、というからには、彼女は実際にギャンブルへと参加したことはないようだ。流石は品行方正、だが他の同級生はそうもいくまい。新聞にすらこんな事が書かれているのだし、高価で能力の高いパーツ欲しさについつい火遊びへ手を出す人間は後を絶たないはず。

そして利益を得るのは、見届け人なんか用意して、実質賭けの元締めと化している生徒会……と来れば、まだ見ぬ生徒会長やその取り巻きに、俺はどうにも悪どい印象しか抱けなかった。

多分、そうして手に入れた資金でクラブ活動や学園祭なんかの予算を補い、生徒に再分配しているんだろうが。そうでもなければ、千冬姉の介入する一線を超えるだろうし。

「マジかよ……」

「マジもマジ、大マジ、だ……」

余りの無法さに俺が思わず天を仰げば、箒も額を抑えて俯いた。どちらも苦笑いの表情である。それほどまでに呆れているのだ。

「なあ箒。俺ってさ、偉い人が言う『わが校の校風』って言葉、あんまり信じてなかったんだ」

「そうだな、私も半信半疑だった」

「だよな。学校の雰囲気とか空気を決めるのはあくまで大多数な俺たち生徒で、教師や偉いのは関係ない、とそう思ってたよ」

でもさ、と続けければ、箒も何を言いたいか分かっているようで、力なく笑う。

「こういう雰囲気の出処は、間違いなく……」

「ああ……姉さんが悪い！」

箒も俺も、揃って笑う。

ああ、やれISバトルだの、やれパーツチップのギャンブルだの。そういう無法で過激だけど、なんだか嫌に楽しそうな雰囲気。これは確かに、束姉のノリだ。

俺と箒が海鳴で暮らしていた頃、散々巻き込まれて振り回されたあの時から、全くもって変わっていない。大人になっても、天才束姉は不滅だつてことだろう。

これに付き合わされてるわが教師陣や、乗せられて暴走している生徒会とお祭り好きな生徒たちの面々。彼らにはもう深く同情するしかあるまい。さんざつばら踊り明かして日が沈み、誰もが疲れた時には、嗤う兎がただ一匹いるだけなんだから。

だけどそれは、幼かった俺達にとつてはよくあること。

単なる日常の1ページにしか過ぎなかった。疲れるけど、楽しく満ち足りた日常だ。

だから。

「なあ、箒」

「なんだ、一夏」

「こいつてさ……本当、無茶苦茶だよな」

「ああ、無茶苦茶だな……！」

本来なら呆れかえって落ち込むはずの俺たちの声は、なぜだか奇妙に明るく、郷愁の響きすら感じられるほど、潤っていた。

そうして、俺達は海鳴の昔話に花を咲かせつつ、再び冷めゆく晚餐を急いで食べ終わり。お互いすっかり満腹になったところで、箒の口から最後の引っかけかりを外すような質問が飛び出した。

「……で、一夏。どうして学内新聞を読んでいなかったんだ？」

「え？ 俺さ、そういうのがあること自体知らなかったんだけど」

「それが元々おかしいんだ！ 一夏の部屋にだって、新聞部が勝手に

押し入って、この端末を渡してきただろう？ 私を含め、同じ寮の人間は全員そうだと聞いたが」

箒がそう言ってくれたから、俺は自分一人だけが情報弱者になっている理由に気付くことが出来た。

「そういえば、箒には教えてなかったんだっけ。俺ってさ、男性寮というか、男性用宿舎で暮らしてるんだ。そりゃ新聞なんて届かないわけだ」

「なにっ……!? 二人部屋に一人暮らしっ……とかではないのか!?!」

「ああ、ユーノさんや轡木さんと一緒。今頃二人、俺の作ったカレーで腹拵えしてるんじゃないかなー……?」

と、適当に述べた後、箒の顔を見ると。

「ぼ、馬鹿な……それでは私の、私の作戦、詰めの詰め、夢の最終段階が……」

何やら、一筋の希望の光が目の前でぷつりと消えたような、失望と当惑に満ちた表情をしていた。いったい何があったのか、俺が慌てて問い詰めても、彼女の瞳は空を見つめ、俺の顔を見てくれない。

「ほ、箒！ 大丈夫か、一体何があったんだ!? おい、箒！」

「……どうやって、夜半、二人きりになるというのか……どちらの同居人を追い出すわけにもいくまいし、修学旅行等では尚更っ……」

何を言ってるのか全然理解できないが、とにかく不味い状況には変わりない。

だが、箒は必死に呼びかける俺を完全に無視し、何を思ったか携帯を取り出して耳に当て、何やらぶつぶつと呟き始めた。

「……姉さん、私です……ええ。ご存知でしたか。流石姉さん」

姉さん、ということとは、電話先は束さんか？ だが、プッシュもなしにどうやって繋がったのか……と、ここまで考えて俺はある恐ろしい結論へとたどり着いた。

まさか箒、天才の姉に電話するフリをして、動揺を解消しようとしているのか!?

やめるんだ、それじゃあまるで痛すぎる。なんて止めようとしても、彼女は聞く耳持たず通話を続けていた。こうして何かにのめり込

むと人の話を全然聞かないところは、もしかすると篠ノ之家が誇る美人二姉妹、揃つての特徴なのかもしれない。

「ええ。これでは作戦を変更せざるを得ません……ええ、分かっています。決して短気は出しません。正直苛つくときもありますけど、全部、あいつなりの優しさですから」

顔を綻ばせながら言ってる、あいつつて誰だ？　ますます訳がわからないし、側で見ているとすごく痛々しい。入学式の日に会ってからなんだか大人っぽくなったというか、成長したように思っていた。けどまさか、こういう方面にも成長していたとは。

というか、俺達の年代でそれはちよつとばかり遅くないか、篠ノ之箒よ。

「……では……え、言わなきゃダメですか？　え……そ、そうしないともう相談に乗ってあげない!?　わ、分かりましたよ……もう、姉さんたら」

なんだか、状況に関係ない会話すら始めた。そういうところは流石、どんなことにも真面目な箒だ。一人芝居ですら手が込んでいるのは尊敬したい。真似したくはないが。

「え……エイデン・リリカ……じゃなかった、レイデン・イリカル・クロールフル！　これでいいんですね！　じゃあ！」

そうまくし立てると、箒はぱたん、と携帯を二つ折りにして、鞆の中へ放り投げた。このご時世で二つ折りというのが彼女らしい。そしてその後、ただただ啞然としている俺の前でさっきまでの痛さは何処へやら、落ち着き払ったのを見ると。彼女にとってあの行為はかなりのストレス解消になっているようだ。

「ふう、済まない一夏。少し姉に相談事がな……何でもないから、そう気にするな」

「あ、ああ……そうだな、気にしないことにするよ」
まあ俺は、それこそ胸の中で多少苦しさこそ感じるけれど、ああいうのが本人の悩みを発散してくれるなら何も言いたくはない。なにせ箒のことだ、自ずから自分で理解して、死ぬほど後悔して元に戻ってくれるだろうから。

「俺は信じてるからな、箒……！」

「なんの事だ？」

「いや、何でもないよ」

だから俺は温かい目をして、二人分の食器を片付けてくれる大切な幼馴染をただ見つめるだけにしておくのだった。

持つべきものは幼馴染（Ⅱ）

そして、明日の放課後。俺は箒の提案通り、早速ISアリーナを借りた練習を行うことになった。アリーナを借りる、となると一見かなりの大事に見えるが、実はそうではない。試合用の大きなアリーナは常に予約でいっぱいだが、そうでない小さなアリーナは学園の敷地内に何十個もあって、場所さえ選ばなければ確実に予約が取れる仕組みになっていた。

で、俺が今居るのは小アリーナの47番。まるでスタジアムのような大アリーナよりだいぶ小さいが、それでもIS一機が自由に動き回る程度のスペースは確保されていた。

「よし、早速『白式』を展開してみろ」

ISの訓練だからと、俺も箒も学生服を脱いでISスーツに着替えている。以前受けた授業によると、体を動かす際に筋肉から出る電気信号等を増幅してISに伝達する専用衣装——だそうだが、体にフィットするそれはまるで下着のようにも感じられてしまう。

こうして自身、ウェットスーツ男性用のを着ているからだけでなく。身体のラインをびっちり目立たせる、レオタード状の女性用スーツを着た箒を見ても、目を逸らしたくなるのだ。

「どうした一夏？ まさか展開方法がわからん訳じゃないだろう？」

「そ、そうじゃないけどさ……」

しかも箒のやつ、何の躊躇いもなしに俺と正面から向き合って、発育良好すぎる胸を惜しげも無く見せつけてくれるのだから始末に終えない。

本人としてはそんな下らないことを意識してなど居ないだろうが、こっちは自分で言うのも何だが純真な青年男子なので、真ん前から見つめてしまったらどうしたって目に入ってしまう。

だから話しつつも目も顔も出来る限りそっぽを向くのだが、その度に箒はさっと移動して、俺の視界を素晴らしいスタイルで塞いで来る。

なんだこれは、新手のイジメか。天然の逆セクハラとでも言うの

か。

「おい、そんなにそつぽを向かないでくれ。私を見る。いいか、わ、た、し、を、見、ろ」

「そ、そんなこと言っただけ……お前のその服装、さ……」
「何を言っている。確かにあれかもしれないかもしれないが、ISを動かす訓練において、ISスーツはいわば正装、剣道の道着のようなものだ。まともに見れないならお話にもならんぞ！」

その理論には何だか妙なトンチンカンさも感じるけど、主張している相手が箒なのだから、返す言葉もない。彼女に限って、俺に胸を見せて気を引いてやろうだなんて、考えるはずが無いのだ。それどころか、いくらストイックな彼女でも恥ずかしいだろう状況で、俺を稽古するためにそういう気持を抑えてわざと厳しく指摘してくれる。

そういう誠実さに対し、俺だけ妙に羞恥心を引きずっては失礼だろう。だから、俺は頬を少し赤くしながらも、思い切って箒の事を真正面から見つめ返した。

「あ、ああ、分かった！　これからそういう気持ちは捨てる！　だから、訓練を初めてくれ！」

「……別に捨てなくても……まあいい。では、これよりIS操縦の特訓を行う。普通の訓練ではとても相手に追いつかないから、私流に、スパルタで行くぞ！」

「おうー！」

何やらブツブツ言った後、声を張り上げた箒に、俺も同じくらいの声量で返答した。スパルタでも何でも構わないと、予め決意している。少しでも実力を上げなければ、代表候補生相手にまともな戦いすら出来ず負けてしまうだろうしな。

「まずは基本からやる。ISを装着しろ」

「よしてきたー！」

早速、待機形態のISを展開するために意識を集中する。右腕を突き出し、装着している真っ白なガンレットを左腕で掴む。色々試してみたが、この手振りがどうやら一番展開をイメージしやすいようだ。でも、何だか変身ポーズみたいでこっ恥ずかしい。

「うし、行くぞ白式びやくしきっ！」

ひんやりした金属を握る左腕に力を込めて呼びかければ。向こうがそれに答えてくれたのか、あつという間に俺の身体が光の粒子に包まれて、そして凝固する。するとあつという間に、IS本体の完成だ。純白の鉄巨人を身に纏い、俺はゆらりと宙に浮いていた。

「……うむ、名前通り、本当にそっくりだな。『白式シロシキ』と」

「箒シロシキは白式見たことあるんだっけ？」

「ああ。と言つても、まだほんの幼い、物心も付かない時だったが」

ちなみに俺は一度も見たことがない。写真や動画なんかも残っちゃいかなかったし、気づいたら既に白騎士へと改造されていたからだ。だが、俺より一段と束さんに近い、実の妹な箒は違う。

「姉さんのラボに度胸試しで入った時、一度だけな。余り衝撃的だったので、未だ忘れていない」

「へえ、そっぴや白式シロシキは白式びやくしきと違って、近接ブレード以外にも色々武装があったらしいんだけど」

ユーノさんから聞かされた事を話すと、箒は頷きながら同意した。「そうだな、最初はブレードとレールガンだけだったが、後から任務ごとにパツケージを付け替えられたはずだ」

「だったらさ。どうして俺のはレールガンも無い、ブレード一本だけなんだ？」

「むう……どうして、だろうな……」

その事実は知っているのか、箒も問いを投げかけた俺と同じくらい、渋い顔をした。あの『白騎士』のプロトタイプから学生用のISへ変更するわけだから、色々とダウングレードしなけりや背丈に合わないのは理解できる。でもそれにしたって武装が一種類だけ、しかも近接兵装ってのはやり過ぎじゃないだろうか。

「なあ、今度、束さんに聞いてきてくれよ」

「何を言う、お前が直接聞けばいいだろう？」

「下手なこと言ったら何されるか分かんないだろ？ だからさ、その、

頼むー！」

「うっ……」

まるで急所を突かれたような声を出してもじもじする箒。それほどまで聞くのが恐ろしいのだろうか。姉妹関係にこじれが生じたなんて聞いたこともないが、最愛の妹の前でも天災は天災なのかもしれない。

と、安易に提案したことを後悔していたのもつかの間。

何故か俺に背中を向けつつ、わざとらしいほどに大声を出して答えてくれた。

「ま、全く、仕方が、ないな！　そ、そこまで言うなら、聞いてやらんでもないぞ……？」

「ああ、いや、別に面倒だったり、束さんが怖いならいいんだけど」「そんな訳あるかつ！　特に後者！」

どうやら、天災と侍少女の姉妹関係の崩壊は杞憂だったらしい。頼みを聞いてくれたことより、そっちの方を嬉しく思うのが、俺の箒に対する仄かな幼馴染心というものだ。

「と、とにかく訓練を始める！　時間は限られているからな！」

ちよつと経つてからくるり、と振り返った俺専属コーチは、いつも通りの厳しく凜々しい顔つきだった。俺もさつきまでの弛んだ雰囲気をつばと一緒に飲み込んで、真面目に次の言葉を待つ。

「まずは、センサーの8番回路をオフラインにしろ。出来るか？」

言われて、脳内でびつしり詰め込まれた回路図を想像する。ISは科学技術の結晶体と言うべき機械だが、手で入力するコンソールなんでものは搭載されていない。全てを頭の中でイメージして、IS側に入力しなければならぬのだ。

授業によると、最適なイメージは人それぞれ異なり、特定の身振り手振りを絡める事例もあるそうだが、そこに行き着くほど慣れてはいない。ひとまず俺は教わったばかりの『初心者向け』共通イメージを使つて、どうにかセンサーの設定に辿り着き、弄くり終えた。

「遅いな。もっと早く出来ないのか？」

「これでも精一杯なんだよ」

胸の前で腕を組んだ箒（威圧的だが、お陰で豊かな胸が隠れて俺としては助かる）が文句を言ってきた。こっちは今日初めてアリーナに

足を踏み入れたくらいだから勘弁して欲しいが、そこは方針がスパル
タだし、仕方ないのだろう。

「まあいい。では、その状態でまずは歩け。二本の足で、地面を踏み締
めてな」

と思つたら、いきおい難易度が急落した。そこはやつぱり初心者向
けということか。とにかく、慣れていない俺でもただ歩くだけならお
安いでご用だ。入学式の夜、初めて展開した時は部屋の中なので大した
事はできなかつたけど、本当はあのまま空を飛ぶことだつて出来た
し。

早速こなしてやろうと決意し、俺はぐつと右足を上げ——そのまま
派手にすつ転び、頭から地面に突っ込んだ。

「な、えっ!?!」

ミスつたという感覚より先に、こんな事をしてしまうなんて、とい
う驚きが来た。

『初期化』と『最適化』は初起動の時一緒に済ませたのだが。という
か束さんが新入生に配った段階で、面倒な『一次移行』をすぐに終わら
せるため、個人個人のパーソナルデータがまるっと入力されているは
ずなのに。

それでどうして、歩くだけでバランスを崩して転倒してしまうんだ
? ?

「……よし、立ち上がってみろ」

筈は顔色も変えず、矢継ぎ早に指示を出してきた。平然としている
ことから、俺がすつ転ぶことは予想の範囲内だったのだろう。

同い年の少女の目の前で顔を地面に擦り付けたままなのは流石に
情けなく、俺は急いで立ち上がろうとしたが。その度に手を滑らせ、
足を滑らせ、何度も何度も倒れ伏してしまう。

「ぬおっ! なんだこれっ! どうしてこうなるんだよっ!」

今度は生まれたての子鹿の如く四肢を震えさせて四つん這いにな
るものの、それでもやつぱり重心を崩して倒れた。地面に叩きつけら
れる衝撃からはシールドエネルギーが守ってくれるが、幼馴染の前で
無様な姿を見せる恥ずかしさは容赦なく襲ってくる。

にこりと笑いもせず、ただ厳しい目でこつちを見てくれるのが逆に救いだ。

「簡単なことだ。お前、さつき何を閉じた？」

「何って、センサーの8番……あつ！」

箒の言葉に促され、ISのハイパーセンサーがどういう仕組みになっているのか思い出してみると、答えは案外あっさりしたものだ。た。

「お前、バランスを切らせたのかよ!？」

ISのアーマーは手足を部分的に覆うものだけだが、それでもかなりの重量があり、コア無しで身につけたら一歩も歩くことが出来ないし、両腕は重みで千切れる。そこをどうにかするのがISコアのもたらず重力制御技術なのだが、これも調整を誤れば糸の切れた凧のようにあやふやと吹き飛んでしまう。

それを更に制御しているのが、目視にして全方位を把握できるほど高性能なハイパーセンサーだ。機体の状況や周囲の環境などをセンサーが分析し、諸々のシステムを制御し、調整する。それがあからISは直立出来るし、空も飛べる。

それをシャットダウンしてしまったのだから、まともに立つことが出来なくて当然だ。

「そうだが？ さあ、早く立ち上がれ」

「んなこと言われたって……」

箒は何食わぬ顔で命令するが、そんなの無理に決まってる。

なにせ、重力制御がセンサーの軛から解放されているのだ。そんな不安定な状況で、ちよつとでも右足に力を入れ過ぎたら――。

「う、あ、あああああ――」

それが踏切りになってしまい、地面から真上へ一直線に飛び上がって。

「――あああああつ！」

ごちん、と訓練領域を分ける透明なシールドに全身を強かにぶつけ、今度は真つ逆さまに落ちて地面へ頭から突っ込み、派手な土煙を上げながら墜落してしまった。

「ほ、箒い……なんだよ、これ」

そんな、まるで出来損ないのピンボールのような光景を見て、指南役が語ったのは一言だけ。

「うむ、結構派手に飛んだな」

「他人事みたいに言うな！」

まだシールドは効いているらしく、身体に痛みこそ全く感じないが。思い通りに動かない息苦しさで不自由さが俺を苛立たせ、まるで平然としている箒に思わず怒りを叫んだ。

まるで、全身に重りを貼っつけられているような感覚だ。しかもそれはただ重いだけでなく、時に異常なほど軽くなったり、別方向の重力に引っ張られて勝手気ままに動くのだから堪らない。ちよつと動かそうとしただけで、身体が駒のように振り回されてしまう。

「大体これって、一体何の訓練なんだよ！」

「ISの動作に関する基礎訓練だが？」

ISを動かすのに誰でも必須なバランスを切って、そののどろが基礎訓練なんだろう。そういう文句をありつけたけぶつけたかったが、不用意に喋ったら舌を噛みそうなので断念した。

「しかし、最初がこれだと後が大変だ……」

「ど、どういうことだよ」

「なにせこれから歩く、走る、飛ぶと、一通りの動作をやってもらわなければならない」

「に、にやにいつ!?……ってうわあっ！」

驚き、無意識にばつと立ち上がろうとしたところ、勢いで背中から真後ろへ吹っ飛び、アリーナの外壁にこれまた勢い良く激突してしまった。

真新しい壁が凹んでは居ないかと一瞬心配になり、センサーを使って振り向かず真後ろを見たが、どうやらそこにも無形のバリアーが張られているらしい。良かった良かった——などと考える間もなく、俺は再び地面へ落っこちる。

「が、ふっ……うう」

「大丈夫かー？」

「んなわけ、あるかよう……」

遠くから大声で聞き質す箒に対し、振り回され続けた俺はもうへトへト、力ない声で言い返す。その情けなさは、やはり我が幼馴染の琴線に触れてしまったようで、再び響いてきた声は明らかな怒号に変わっていた。

「だらしない！ それでも男か！ 私も同じ訓練をして、最初はそうなった！ だが弱音など一度だって吐いたこともないぞ!？」

「そ、それは関係ないだろうっ!？」

「いいや大有りだ！ 大体一夏、昔のお前なら、この程度でへこたれたりしなかつたはずだ!？」

「む、昔は昔、今は今！ お前と違って俺はもう……っ!？」

それまでの怒りは受け流せたが、その言葉を聞いて、うっ、と胸を締め付けられてしまう。そーいやあのこと、まだ箒には言つてなかつたっけ。

「……おい、一夏?？」

今度は大声ではなく、通信回路から聞こえてくるじとつとした声。再びずきん、と胸が鳴る。

「な、なんでしょう」

「お前、剣道は続けていないのか?？」

「え、えーと……」

「答えろ!？」

何も叩くものなど無いはずなのに、ばんっ、と俺を弾劾するように机を叩く幻聴すら聞こえてきた。被告席にたった一人、弁護人はここには居ない。というか、俺には弁護される権利すらないだろう。嘘をついていたのは俺なのだから。

「……箒が出て行った後も、小学校までは、何とか続けてたんだけど。中学からはバイトしてたんだ。翠屋だけじゃなくて、他にも色んな所に行つて」

「部活は?？」

「三年連続、帰宅部でした」

だから、小学校の頃やってた剣道からは、とつくのとうにリタイア

している。そこまでしてお金を稼ぐのには家計の足しにするのと、他にもちやんとした理由もあつたのだが。中学でも剣道を続け、全国大会という場で見事に大成した筈の前だと何だか言い難く。電話口で調子はどうか、なんて聞かれても思わず口を濁してしまっていたのだ。

「……」

やばい。通信機能で表示されるホログラムのモニタを見れば、無言の筈は明らかに怒り顔だった。黙ってた俺が十割悪いが、それにしても明かすタイミングが最悪すぎる。あいつは元から三年間、鍛錬を続けてきた俺を想定して、特訓の内容を考えてきたのだろう。それが一気にご破算になって、しかもその原因が俺の怠けによるものなのだ。こんな理由で筈をブチ切れさせた俺は、何されたって、文句は言えない。

しかし、それでも。

「いいだろう、ひとまず試してみるか……!」

左手首に巻かれた鈴付きの赤い紐を光らせ。

両腕に真紅の塗装が施された装甲を纏って。

明らかに真剣と分かるくらい鈍く煌めく、二つの刀を持って此方に向かうのは、流石にやり過ぎと違うのではないか。

「わああ、待て、待ってくれ筈!」

「待たん!」

「ごめん、ごめんって! 黙ってたのは悪い! 謝るから!」

「聞く耳持たん!」

問答無用、とばかりに駆ける筈に対し、俺は未だ倒れたままびくりとも動けない。まずい、これは非常に不味い。あんなデカイ二刀を食らったら、脳天がスイカ割のようにグチャグチャにされること請け合いだ。

「覚悟しろ、一夏っ!」

いけない。叫びに宿る気配と、ぎろりと固まった目が発する力。こ

いつは本気だ。こつちも何かで受け止めないと死んじゃう。

もし当たったとしてもシールド、それが仮に破られたら絶対防御がある。頭では理解できていたが、そういうのを貫き通す位の勢いを、心は感じていた。

「はあああつ!!」

——やられる！ そう思って、目を瞑る俺だったが。

「……………くっ！ やはりー！」

「う、お、おおおっ……………」

がきいいん、と、鍛えられた金属同士がぶつかる音。何も見えないけど、何かを握った両腕に、凄まじい圧力がかかっていた。これは止めなければならぬ。そう本能で理解した。

呻きを上げながら必死に両手へ力を込める。

反動制御を通じて手に響く震えを、未だに忘れないでいた。そのことに、自分で驚く。

「やるな……………」

殺気の籠った雄叫びから、同じくささくれ立っているけど少し柔らかくなった叫びの後、どんな連撃が来るかは大体予測がついていた。

そんなに難しいことじゃない。

目を閉じていてもISから頭の中に流れ込んでくる、膨大で雑多な情報を取捨選択。そうして残るは筈の挙動。息遣い、目線、筋肉一つ一つの動きまでも総合したそれが分かれば、後は昔、何百回と行なった仕合いの経験則に当てはめるだけだ。

「でやあつー！」

これは右からの斬りつけ。次に左で、それからもう一回右からの突き。

どう来るか読めてさえいれば、急場しのぎで体勢が崩れていても、どうにか受けきれぬ。

三合全てが防がれても、筈は構わず攻めに来た。二刀流に対して中段の俺は、一步でも引いたらそのまま押し切られる。これを返せば、二刀を持つ側はとにかく、押し崩して間合いを取らせないので肝心、ということになる。

では、それを凌ぐのにどうするか。

一步も引かず、逆に一步前へ出て、こつちから攻めてしまえばそれでいい。

だから俺は、箒が何度か左右交互に斬りかかった後、二回目の突きを左から仕掛けてきた所で一步、間合いを縮めた。

「ちっ……い！」

「うおおおっ！」

久々に腹から声を出し叫び、下段からの薙ぎ払いで右胸を狙う。しかし、箒は間一髪で防御を間に合わせ、もう一方の刀を切っ先と胸の隙間に割り込ませた。

そのまま跳ね除けられた後、お返しのもう一撃——は来なかった。その代わり、厳しさを剣尖に乗せて他所に出したのか、すっかり和らいだ声が聞こえてくる。

「なんだ、やはり腕は鈍っていなかったようだな」

恐る恐る目を開いたら、腕にだけ部分展開していたISと手持ちの二刀を量子に変換し、両手をぱんぱんと払う箒の姿があった。さっきまでの鬼気迫る表情はどこへやら、全く仕方のないやつだ、というように苦笑いをしている。

「んなこと言われても……俺、無我夢中だったぞ？」

「身体が覚えているだけで、あれだけの動きが出来るか？ それに、ほら。足元を見てみる」

「え？」

言われて、視線を下に移す。そうして初めて認識できた。

俺、ちゃんと立ててるじゃないか。ランサーを切ったまま、二本の足でしっかりと地面を踏み締めている。実際に付いているのは生身じゃなくて、ISの脚部装甲だけだ。

「嘘だろ……？」

信じられずについて、一步足を踏み出してしまった。しかし少し前のように無様な転倒をせず、ちゃんともう一回地に足を付けられた。ただし、普通に歩くより大分危なっかしい感じだけだ。

ついさっきまでですっ飛び吹っ飛ばばかりだったのは、一体どうして

なんだろう。

「二夏は強く思い込んでいたんだ。自分は鍛えてない。剣道もやめて体力も腕も落ちてしまったから、バランスがなしなんて出きっこない、と。だから、そういう無駄な思考をする余裕が無くなれば、この通りだ」

「え……だ、だって、三年間ひたすらバイト三昧だったのは本当だったんだぞ!? あれから竹刀を握ったこともないし、構えとか全然忘れちゃってる!」

忘れた、と聞いた筈の眉がぴくりと動く。また怒らせたかなと後悔したが、これみよがしに思いつきり吸い込んだ息を吐き出して、ぼそりと呟くだけだった、

「……そのバイト。誰に紹介された?」

「え、それは勿論おやっさん……あつ!」

自分で口に出して、気づけた。

そういえば、俺が剣道辞めると聞いて、何度も惜しいだの、残念だの口々に止めようとしていたのは、他でもないおやっさんだった。そんな人がある日からいきなり信条を変えて、妙に実入りの良いアルバイトを幾つも紹介してくれたのだ。

今考えればその時点で怪しいと思うべきだったが、俺にとっておやっさんは父親代わりだ。将来のため、必死に金を貯めようとする俺の意思を理解してくれたんだと、嬉しく思うばかりだった。

それからというもの、海鳴市の色んな場所で、同じ町で働いてるはずの同級生が誰も知らない、不思議なバイトを数々こなし。長期休暇になれば遠くに出掛けさせられ、どこと知れない山奥で木こり紛いをやったこともあった。

確かに普通とはかけ離れているバイトだったけど、ほかならぬおやっさんの紹介だし、実際凄い高収入だったので疑問は抱いても文句は無かったつけ。

しかし。

「ま、まさか」

「その通り。全部一夏の身体と心を鍛えるための差金だったんだろ

う」

「なんだよ、それ……！」

バイト終わり、疲れ果てた俺を労るようにホットミルクを出してくれたおやつさんの笑顔。綺麗な思い出だと信じてきたそれが、まるで悪魔のほくそ笑みのように見えてきてしまい、俺は肩を落としてぐくりと目を伏せた。

「まあ、あの高町師範がお前の才能を放っておくはずもない。あんなことを言われて一瞬迷ったが、結局私は、本気で打ち込んだ」

「じゃあさっきのあれは怒ってるんじゃないかって、どうするか迷ってたってこと……？」

「黙っていたことに対する多少の憤りはあったが、大体はそうだ」

俺はますます、張り詰めた気合が抜けていくように感じた。そんな気持ちから生じた殺気に怯えていただなんてとんでもない間抜けだ。それがちよつぱり悔しくて、俺は箒に対して文句を言わずにはいられなかった。

「つたくう……こっちは一瞬マジで死ぬかと思ったんだぞ!？」

「もし当たっても、絶対防御があるだろう」

「それとこれとは話が別だ!　こんにやろ、よくも……！」

素知らぬ顔で言つてのける幼馴染を、きつと睨む。すると向こうも勝ち気な目をして、再び待機形態のI Sを掲げてみせた。

「ほう?　久しぶりに、戦るか?」

「上等!」

唯一の武器である《雪片式》を中段に構え。センサーが捉えるI S展開警報に全身の感覚を逆立たせながら。

実に六年ぶりの、織斑と篠ノ之の直接対決が幕開こうとした——その直前。

「あーっ!　いたいた!」

「タレコミは本当だったのね!」

アリーナ入り口からこちらへ、ドタバタと駆け寄ってくる女生生の群れ。学年も容姿もバラバラだが、全員が手帳やカメラ、ハンディカムなんかを持ってきている。この状況では仕合は出来ず集中を解け

ば、そのほんの僅かな隙だけで俺はあつという間に囲まれた。

「織斑一夏さん！ 新入生期待のルーキー、セシリア・オルコットとのISバトルですが、果たして勝算はあるのでしょうか!？」

「こんな場所で秘密特訓を行っているということは、何か秘策があるんですか?！」

恐らく新聞部の部員たちなのだろう。ISを展開している俺を物珍しげに取り囲み、写真を取りながら次々と質問を浴びせかけてくる。

「そのISに必殺技とかありますか!？」

「どうか、ブレードだけってことは、BT兵器に対してまさかの近接オンリー!？」

「きゃあ、大胆っ……恐らく優男ぶって、その中身は牙を研ぐ野獣なのね……!？」

その内なんだか方向性が妙な感じにねじ曲がって来た。それで本当にマスコミなのかと全力で突っ込みたかったが、矢継ぎ早に大勢から言葉の濁流を流し込まれたら、あつぶあつぶと溺れることしか出来ない。

「織斑くん、趣味は!？」

「好きな女の子のタイプについて!？」

「どうか千冬様ってプライベートだどどうなの!？」

いや、それ俺関係ないだろ? とか内心思いながら、俺は蚊帳の外に居る筈へ助けを求めた。当然海鳴式ボディランゲージで、前のような旧バージョンでなく最新版だ。

『た、助けてくれ箒い!』

『仕方の無いやつだ……まあ、これでは仕合どころか、訓練も出来んな。待ってる、今行く!』

再び整理券らしき紙束を持って駆け寄る幼馴染を、俺はひたすら待つばかり。本当、女の子に詰め寄られた時は、箒がないと何も出来ないのかもしれないなあ。

結局この後、全部捌き切ったら予約時間をとつくに過ぎてしまい。

俺は決闘までの残り六日の内、貴重な一日をふいにしてしまったの
だった。

平穩無事な人間模様

リンゴン、とチャイムが鳴る。

別にアラーム等ではなくて、古めかしい学校のチャイムそのものだ。聞くものが聞けば日本の何処かの街にある小学校のチャイムと同じ音源だと分かるだろうが、終礼での教師の連絡事項に耳を傾けるセシリア・オルコットには知る由もないことだった。

「……では、今日の授業はここまでとする。各自各々の科目で、予習復習を忘れんようにしろ。日直、礼だ」
「起立！」

日直の声に合わせ、セシリアも立ち、姿勢を正して一礼した。こういう礼法日本の学校では常識らしいが、生まれた頃からイギリス暮らしだからどうにも妙な感じがして堪らない。

それにしても、どうしてこの学校はどこもかしこも日本流なのだろうか。彼女は英国人だし、その隣にはギリシヤ人、斜め後ろにはスペイン人、もう一つ後ろにはロシア人と、様々な国の人間が寄り集まっているというのに。公用語が日本語なのもおかしい。せめてアメリカ式でも構わないから、英語、もしくは中国語であるべきだろうに。

やはり、学園を管理運営する重要人物が全て日本人で占められているからだろうか。特に篠ノ之束。ISの開発者にして学園長の彼女の意向が、学園の規則へ多分に反映されていることくらいはセシリアも十分理解していた。

(それにしても……全く、情けないこと)

思い返すといつも腹が立つのは、入学式での一コマだ。束がほんの気まぐれで配っていた設計図を、来賓席にいる如何にも高貴でかつ権力を持つ男たちが顔色を変え、半ば取っ組み合いまでしながら奪い合いをしていた。確かにあの動力炉は既存の技術からかけ離れた高性能さで、国家や企業の代表として欲しがるのも当然だが、それにしても、あの醜態ぶりと言ったらない。

彼らが学園の出資者であるなら、設計図の一枚二枚、要求する権利は当たり前にあるはずだ。本来ああいう研究成果は、出資の見返りと

して与えられるものなのだから。しかし彼らは全員、篠ノ之東ただ一人の顔色を伺い、その一拳一頭足に振り回されている。これでは出資するどころか、あの時の彼女の言葉通り、金を貢いでいるだけじゃないか。

元から男性という存在に幻想など抱いていなかったセシリアだが、あの無様さは彼女の中の底値を大きく割っていた。

(……同じですわ、父と)

セシリアにとって、生まれた時から最も近い場所に居た男性は自身の父親だ。しかし彼は、名家に婿入りした引け目もあるだろうが、軟弱な態度ばかりを目立たせていた。

それだけならまだ良かった。母親やその一族だけに頭を下げているなら、立場や権力の違いもあり十分理解できる。問題はISが世界に発表された後、イギリス国内で最高レベルの適正を叩きだした自らの娘にさえ怯え、おどおどした態度で触れるようになったことだ。

そんな父など、見たくはなかった。

セシリアにとつて、強い母は憧れだったが、同時に優しく温かい父は心の癒やしになっていた。母もそういう父の一面を理解していて、だから彼女に対して思い切り厳しくいられたのだ。幼いころは分からなかったが、青年となった目線から見れば、そういう家族の構造を理解も出来る。

けれど、一瞬にして遥か強者となった自分をおだて、作り笑いで腫れ物扱いする父には、敬愛どころか心を許すこともできやしなかった。

結局、真に内面の強い人間では無かったんだろう。高家の夫として張り詰めきっていた所に、巨大な力を持つ娘が加わって、耐え切れずにぼきりと。

大事な何かが呆気無く折れて、それきり。

(三年前、事故で亡くなるまでずっとそうだった……)

自分にIS適性さえ無ければ、と何度思ったろう。しかし、不慮の事故によって両親が同時に死んでから、オルコット家の屋台骨を支え続けていたのは、紛れも無く、セシリアのIS適正と、母に言われて

必死に努力し掴んだ代表候補生になれる程の操縦技能だった。

そう考えると、父親を気遣い嫌だと拒むセシリアに、半ば無理矢理
ISを学ばせた母親には確かに先見の明があった。これからの時代、
ISを操縦できる事が世界で最も大きな価値になるのだと、早くから
気づいていたのはやはり偉大で、そういう血を継いでいる事は誇りに
思える。

でも、やっぱり心の何処かに恨めしさもあつた。この才にさえ気付
かなければ、父は優しいまま、苦しみ傷ついた娘の頭を、ただ優しく
撫でてくれ続けたのだから。

(……だからもう、あんな手を持つ男には、会えないと思っていた)
セシリアがIS操縦者として成長すればするほど。第三世代装備
ブルー・ティアーズの第一次運用試験社に選抜され、代表候補生とい
う肩書きを与えられるなど、世間で認められれば認められるほど。彼
女の周りには様々な人間が集まっていき、その中には当然、男も数多
くいた。

しかし、誰も父のように、優しい手を差し伸べることはない。時た
まパーティや食事会で挨拶と共にしつこく差し出される手は、ただセ
シリアを引っ張って、いいように使う傲慢さか。あるいはその手を繋
がりとして、彼女の活躍のおこぼれにあずかろうとする下賤な手だけ
だった。

だからセシリアは見限っていた。男という存在を。

自分に優しい触れ方をしてくれる人間など、所詮幼い日の自分が夢
想した幻で、思い出の中にしか存在しないのだと諦めきっていた。

(だけど)

だが、昨日のあの日あの時、自分の手を取って、真っ直ぐ見つめた
男は。

今、椅子に座って思い悩む自分を尻目に、長い黒髪でポニーテール
の女性に引っ張られるような勢いで教室から出て行った、クラスメイ
トは。

「織斑、一夏……」

彼はセシリアの思い出にある父の手と同じくらい、優しい手で自分

の手を包んでくれて。更に、思い出にある母の強い瞳と同じくらい、しっかりと目線で睨みを見返してきた。

不思議と、胸が熱くなる。名前を認識する度に、どうしようもなくドキドキしてくる。

何年ぶりに出会うそんな胸の昂ぶりを、セシリアはとても心地いい物だと分かっている。だから決して一時の迷いだと思いたくはなかった。

しかし、それとまた同時に。

(やっぱり、認めたくない)

とも、思ってしまう。

たかだかあの程度優しくされただけで、ころりと自分を倒してしまいたくないのだ。三年前から必死に努力し、自らの力で代表候補生として世界に認められえているセシリアに芽生えたそれは、強く硬く激しく、しかし気高い矜持だった。

だから、あの場で勢いパーツの受け取りを拒否し、更には決闘なんて仕掛けてしまったのだ。

そうする流れは完全に考えなしだったが、セシリアの心に後悔はない。

学園唯一の男性操縦者の腕前とポテンシャルを、実際に戦うことで体感したかったし。

それに、ISを利用して出来る限り高みに上り詰めるという目標を達成するためには、日本人であり尚且つ織斑千冬の弟には必ず勝たねばならない。弟を超えずにして、ブリュンヒルデ世界最強とまともに戦えるはずがないのだから。

(……そう、そうですね！ これはあくまで、私の将来の為の布石！ 織斑一夏など、所詮は私の踏み台として、目録の1ページに記載される程度の役回りしかない男！)

だからセシリアは、別に一夏が自分の信じる通りの男、いや、それ以上の男だったとしても。

決闘の結果、互いのISと技量、才能をとことんまで比べ合わせ、その結果カッコいい姿が見られたとしても。優しいだけでなく強い、と

証明されても。

これっぽっちも、嬉しくはないはず。そう、嬉しくはないはず、なのだ。

「……………う、うう……………」

しかしながら、周りが帰り支度をしているのに、ふと取り出した月刊誌から目を離さず。特にそのある人物に対する特集ページを、何度も何度も熱心に見返す動きが止まらない。そんなセシリア・オルコツトだった。

「ふうん……………織斑くんも大変だなあ……………」

同時刻。山田真耶は職員室のデスクで休憩がてら、セシリアが読んでいるのと同じ月刊誌を手に取り、急遽決まった織斑VSオルコツトと、一夏特集の記事をペラペラと斜め読みしていた。

彼女の見た感じ、外装やデザインは一般の雑誌とそう変わりなく手が込んで、しかもちゃんとしている。彼女自身学生だった時に、こういう装丁の雑誌なんて学園祭でも見たことがない。世界最高の環境と学生という高ランクっぷりは、こういうところにも現れているのだなど実感できた。

内容はまあ、上記のように学生らしく煩雑で下世話なものも多いが。それでもちゃんと毎月休まず発行している辺り、新聞部の子たちは大人になっても食いつばくれることはないだろう。IS専門の教育をしている学び舎から、マスコミ関連に就職するのもそれはそれで埒外なことだが。

そんなことを取り留めもなく考え耽っていると、背筋にすつと通る、凜として冷っこい声。

「山田先生?」

「は、はいっ!」

副担任と担任という上下関係。もつと言えば、学園始まって以来の教師コンビ。更に言えば、第二回モンド・グロツソ日本代表を（実力差が圧倒的とはいえず）争った間柄。とにかく真耶にとっては頭の上がない女傑の中の女傑、織斑千冬が後ろに立っていた。

「すいません、ちよつと休憩を……い、今終わりますから！」

「いや、構わない。それにしても、山田先生も好きだな」

わたわたと立ち上がるとうする真耶を止めた千冬は、彼女が片手に持つ雑誌に目を向け、薄く笑った。実のところ、職員室で暇をしているこの副担任は暇さえあればこういう生徒発行の雑誌に目を通しているのが日常風景なのだ。

「あ、あははは……」

「何が書いてあるんだ？」

照れるような仕草で誤魔化す彼女の片手から、千冬は雑誌をさつ、と瞬時に抜き取り、開かれていたページを読んだ。そこには自分の弟と受け持ちの生徒との決闘の記事。何処で手に入れたのやら、詳しく書かれたその顛末の下らなさに呆れ顔をしてしまう。

「全く、我が弟ながら女の扱いが下手だな」

「何だか不幸な誤解って気もしますけどね……」

「だとしても、二の句も告げずに一方的に言われるのみ、というのはいかんだろう」

その感想は、第三者として聞く真耶としては手厳しいと言わざるをえない。思春期の男子が雲の上に住んでいるようなお嬢様に詰め寄られた場合、恐らく大多数は何も言えまい。ポカンとせず、相手の言葉にそれなりの反応を返しただけ織斑一夏は立派だ、というのが彼女の私見だった。

最もそれで状況を悪化させているのだから結果的には悪手、なのかもしれないが。

「大体、決闘が嫌ならもし挑まれても、手袋を取らなければ良い話だ。それをしないのだから、実は内心こうなるのを望んでいたのかもしれない」

「え……？　　そ、そっか……」

ぱん、と雑誌を閉じてデスクに置き、腕を組みながら溜息をつく千冬。その言い方がとても気になる。

「どうして一夏くんは決闘の申し込みを受けたんでしよう？」

「それなんだ。この騒ぎに私が呆れている理由はな……一夏のやつ、この椿事にかこつけ、ISの操縦経験を積もうとしているようだ」

「経験を……？」

「私達のカリキュラムだと、一学期はほぼ実技無しだろう？ だとすれば、ISに習熟するには独自の訓練か、もしくはああ言う馬鹿騒ぎに参加する他ない」

高学年が中心となつて行かう、あくまで教師陣非公認の、学内ISバトル。そういうお祭りに堂々と参加するませた新入生たちに、教師が見て見ぬふりをする理由もそこにあつた。

ISの稼働時間が長ければ長いほど、その人物はISに慣れ、実力も高いということになる。ISの稼働効率や潜在能力に搭乗者との相性が大きく関連しているのだから、もしかするとISそのもののスペックよりも評価されるべきなのかもしれない。

そして、たがが生徒間の遊びであるISバトルだって、稼働時間の一部なのである。生徒が自習自得してくれるのならば多少の逸脱は無視してもいいだろうと、そういう結論が教師陣の中では既に決まっていた。

「あいつは強くなりたんだ。強くなって、大切な誰かの元へ飛んでいきたいのさ。我武者羅^{がむしゃら}、とまでは行かないが……それでもかなり直向^{ひたむき}に、な」

「ふうん。なんだか男の子らしいですね、そういうの」「らしい……だろうか。まあ、ある意味そうだな」

そういう事情を聞いて、真耶はその真つ直ぐさに青春の残り香を刺激され、クスツと笑いながら一夏の心に宿っているだろう熱量を羨ましく思ったが。

『なぜ強さを求めるのか』という奥底の理由に気づいている千冬としては、むしろ困るくらいが当然のようで、ますます深く溜息を吐いた。

そのまま、話題は一夏のことから、月刊誌そのものへシフトしていく。というのも、千冬が一夏の特集記事を読んでいくと、新聞部員が男子に投げかけるには極めてプライベートに関わり、かつ本人の名誉を傷つけるほど抉った質問も含まれていたからだ。

「こんなプライベートに関わることで平然と聞いてくるとは……」

「た、確かに問題……かもしれないね。男性に対して何処までセクハラになるかは、ここだと前例がないから判断難しいですけど」

まあ、答える一夏も一夏で馬鹿らしい、とどちらも斬って捨てつても、千冬の声色は厳しい。

「こんなことばかりでは、新聞部に対する呼び出しも考えねばならんな」

「えっ、そこまで行きますか?! 単純な注意喚起だけでいいかと」

「生温い! 大体ああ言う輩は、喉元過ぎれば熱さ忘れる、が常識だ。それよりはよく動く喉をちよん切ってやる方が、手間がかからなくていい」

過激な例えを聞いてやり過ぎだと思ったのか、真耶は控えめに、だがはつきりと首を横に振る。

「いいえ、新聞部にも顧問は居るんです! 私たちが下手に介入するより、彼に任せようが」

「その顧問のやり方が生温い、と言っている。前々から気にかかっているはいたが、彼も近頃校長の気風に飲み込まれつつあるかもしれない。警戒すべきだな」

「そんなっ! まさかあの人に限ってそんなこと!」

確かに千冬の意見には少々偏り気味な点がある。しかしそれにして、ばんっ、と机を叩き椅子から立って、声を張り上げるのはどう見たってやり過ぎだった。周囲で各々職務を行っていた教師たちの目が一斉に、二人のいるデスクへと向かう

行なってからそれに気づく真耶は、慌てて周りへ頭を下げるが。千冬は反駁を予測していたようで、怒りもせずただ唇を吊り上げ、笑うだけだった。

「ふっ、そうだな、スクライア先生に限って、な……」

「な、なっ……」

さつきまで続いていた千冬の暴論が、自分から何を引き出すために為されたのかを理解し。真耶は更に顔を赤くして、眼鏡越しの瞳を思い切り見開いて文句を言った。

「うう、卑怯ですよ織斑先生！」

「すまない。相変わらずだと思って、つい言い方が意地悪になった。許してくれ」

真耶と千冬のやりとりで、取り巻く教師陣も皆朗らかに笑う。花も恥じらう20代女性、巨乳に眼鏡におっとり系の山田真耶が、図書館の奥深くに根を張る司書教諭のユーノ・スクライアに懸想しているのは、学園中で周知の事実だった。

「しかし、彼が校長の毒に染まっているのは、あながち冗談でもないぞ？」

「助手だから、ですか？ そんなの昔からじゃないですか」

「それがな。最近ますます調子がいいとというか、狡っ辛くなった……織斑の部屋割りの件、知っているな？」

「はい、私が案内しましたから」

「実を言うとあれはな。スクライア先生が織斑の料理を食べたいが為に、本来私と二人暮らしの所をかつさらっていったんだ」

「ええっ！ そうだったんですか!？」

いかにも優男で、強引なことをしなさそうなユーノの、意外な独断と専行に驚く真耶。それを見た千冬は、目の前後輩の見当違いっぷりに深く嘆息した。やはり付き合いが短いと、そういう面は分からないらしい。恐らく、ユーノの人当たりが良く信頼できそうな雰囲気のところつと騙されているのだろう。恋は盲目、とも言えるかもしれないが。

十数年来の付き合いをやっている千冬からすれば、ユーノを単純な聖人君子と称することは出来ない。柔らかかそうな物腰と穏やかな態度は人を油断させるのに十分だが、その実弁舌に長けてしかも賢く、気がついたら彼の思い通りに物事が運んでしまう。

狡猾な羊。ならぬ狡猾なフェレットと言えよう。

「女性ばかりの教員寮では教育に悪いと一点張りだな……本当は私
が、翠屋仕込みの料理を堪能できるはずだったんだが……」

「お、織斑先生？」

「なんでもない。ただの独り言だ」

「は、はいっ」

最も、未練を残したような口ぶりでぶつぶつ呟いているように、この見識には手八丁口八丁で一夏を、そして一夏の美味しい料理や家事の能力を横取りされたことに対する私怨がかなり含まれていたが。

「全く、油断も隙も有りはしない。小さい頃は文字通りのクソ真面目
だったが、いつの間にもやら可愛げが無くなってきた」

「ち、小さいころ!？」

「私とスクライア先生……それから校長は、小学校の頃からの付き合
いだと話したはずだが」

「じ、じゃあ! 子供の頃のスクライアさんって、どんな人だったんで
すか!？」

妙な所に噛み付く真耶。その勢いに押されて妙な顔をしながらも、
千冬は答える。

「そうだな。苦労性で、いつも校長に振り回されっぱなしだが、あいつ
について行けるくらい、大した才能の持ち主だった。戦闘……ああい
や、いざという時にも頼りにもなった……」

「えと、そういうんじゃないんですね! こう、容姿とか! あ、写真
持ってませんか!？」

「……何が望みか分からんが、とりあえず落ち着け、山田先生」

そのままがつつきがつつかれて、他愛のないことで盛り上がる女教
師二人組。

もはや日常風景とも呼べるその掛け合いはそのまま、学園の平穩無
事を表しているの、同僚たちも止めず見守りながら職務を続けてい
た。

そう。実力においては教師陣2トップである彼女たちに、軽妙なや
りとりをするほどの余裕が無ければ。それは学園の存続に関わる緊
急事態か、もしくは東の暴走を止められなかった時と相場が決まって

いるのだから――。

決戦はアリーナの上で（I）

そして、翌週の月曜日。セシリアとの対決日当日。

俺は、学内でも一二を争う大きさを誇る3番大アリーナ、その右と左端に一つづつある操縦者用控室で箒と共に待機していた。

決闘は授業が終了して一時間後に行われる。授業から解放された学生がアリーナへと駆け込み、学内ISバトルが一番盛り上がる時間帯だ。大アリーナの殆ど生徒会の見届け人に占拠され、それぞれに胸熱くさせる白熱の試合が幕開く。

だが今日は、そんな日常と少し違い。数々のアリーナへ分散していた学生はその全てがたった一つのアリーナへ集まり、二人の新入生が行う試合へ注目していた。

『レディィイス、エン、ジェントルメンツ！ 生徒諸君お待ちかね！今年度も始まって僅か2週間、いきなり大注目のカードが揃った！ 実況は私、学内ランキング8位にしてバトル実況に命を懸ける、ダリル・ケイシーと！』

『フォルテ・サファイアでお送りするツスー』

奥まった控室まで轟々と鳴り響く大音声。

外部を写すモニタを見れば、観客席の天井付近に特設されたスペースで、陽気に叫ぶラテン系な美少女が見えた。その脇には居座っているのは、真っ青な色の髪とそれに負けないくらい青い瞳が目立つ、どこなくマイペースな雰囲気、同じく美少女。その並び立つ姿は、ひと目で名コンビだと分かるほど凹凸が噛み合っている。

『あれ？ どうしてレディィイス&ジェントルメンなんです？ 今まで単にレディィイス、って言うだけだったじゃないツスカ？』

『馬鹿だなあフォルテ。ジェントルメンなら居るだろ？ ほら、今は控室に』

『あ、そツスね！ でも観客席には居ませんよ？』

『いいのさ、細かいことは！ さあ、間もなく試合開始10分前！着々と両選手入場の時間が近づいている！ ギャラリーの諸君！』

宿題課題はほっぽって、期待のルーキーたちを迎える用意はいいか

!？」

マイクからアリーナ中のスピーカーに伝わって響く叫びに同調し、「おーっ！」という元気な歓声上がる。音響と歓声、二つの音波に震えながらも、対決の舞台はすつかり出来上がり。後は戦う二人をその広大なフィールドで待つばかりのようだった。

彼らのテンションは、初っ端から最高潮に近い。

（無理もないよな……セシリアは代表候補、そして俺は、こんな状況だし）

片や弱冠15歳の若さで、代表候補生として最新技術であるBT兵器のトライアルを任された、新進気鋭のお嬢様。

そして片や、現在世界で一人しか存在しない男性操縦者であり、ブリュンヒルデの織斑千冬、その弟である青年。特訓相手としても、IS開発者の妹にして幼馴染の剣道少女がいる。

この好カード、見逃したい生徒は居ないだろう。当の本人な俺でさえ、第三者の視点から体験できるのなら、是非とも目にしたい対決なんだし。

蛍光灯が照らす真っ白な部屋は、ロッカーとベンチの他にはモニタとコンソールが真ん中にポツンとあるだけで何だか寂しい。

俺はベンチに座りながら、腕を組んで俯いていた。今更緊張なんか柄じゃないけど、それでもあの盛り上がりの中突っ込んでいく勇気を創り出すには些か時間がかかる。

「二夏……この7日間で教えられることは、全て教えた」

厳しいながら俺の背中を押すような勢いに満ちた声が目の前、コンソールの方向から聴こえる。

即席コーチとして、そしてISの知識や操縦における先達として俺を導いてくれた筈は、直前まで俺のISのコンディションを見てくれていた。

「後は全力でぶつかるだけだ。結果がどうであろうと恐れることはない。今ある自分を真っ向から叩きつけて、勝つにも負けるにも全力で挑んでこい……む？」

小アリーナで俺を扱くときのような仏頂面と堅苦しい声を崩さず

訓示する箒を見たら、俺は思わず懐かしさとおかしさを感じて口元を歪ませてしまった。

目ざとく気づいた箒に、ツッコまれる。

「なにがおかしい?」

「あ、いや……なんかさ、箒って最近、ますます千冬姉に似てきたなと思って。俺が剣道の試合に行くときとか、同じようなこといつも言ってたし」

「むう、そ、そうか……」

俺のその一言に、箒は何故かとても残念そうな顔をする。どうしてだろう。生真面目な箒にとって千冬姉は目指すべき到達点であるはずなのに。

だから俺も、一応どころか丸つきり、褒め言葉のつもりで例えて言っただけだ。

「あ、いやごめんな、変なこと言っちゃってさ。千冬姉みたい、だなんて硬すぎて、嫌だよな!」

「いや、大丈夫だ。そういうことじゃない。それに、千冬さんのようだとおっしゃるの、なんとなく恐れ多いし身の丈に合わなくても……嬉しい。嬉しいんだ……」

その「嬉しい」は、何だか自分を無理矢理納得させる方便を、自身に言い聞かせる言葉のように思えてならない。

俺はこの状況に憤慨した。こんな顔の箒を一人残したまま戦いに望むのは、何か身勝手に、後ろ髪を引っ張られるような気分だ。

どう言えば、箒の落ち込みを慰められるだろう。

必死に考えて出した結論は、箒が憧れ、目指すもう一人の存在を引っ張り出すことだった。

「そーいや、あの人も同じようなこと言ってたな」
「ッ!?!」

「なんかさ、箒と千冬姉みたいに硬い言葉じゃないけど……『一生懸命頑張ってきたなら、後はそれをかき集めて、思いつき相手にぶつけるだけ。いつだってどんな時だって、全力全開でいこうね』って。そう言っとき、俺の頭撫でてくれたんだ」

そんな俺の言葉を聞いた途端、箒は目を浴びた向日葵のように満開の笑顔を開かせた。

「そ、そう、か！ 私、お姉ちゃんに似ているか!？」

それが正解だったのか。ほっと一安心である。

お姉ちゃん、というのは箒の『あの人』への呼び方だ。何でも生まれた時から側にいてくれて、まるでもう一人の姉のように思えてしまうからそう呼んでいるそう。

ただし、束さんには「姉さん」で、あの人には「お姉ちゃん」なのはどうなんだろうと、時折思う。姉のような人間より。実の姉への呼称の方が冷たいって例は中々見られない。

まあ、束さん本人がそれで満足してるんだから、別にどうでもいいんだけど。

「ああ、とつても似てるよ……」

俺の答えは、別におだてでも何でもなかった。頬を赤らめながら喜んで、胸の前で両手を握り締める箒の顔は、あの人束さんに褒められたりする時見せるのに、そっくりだったから。

「そうか……まだ目があるということかな……いやいや、あくまで私自身の魅力こそ……だが、箒にも棒にもかからないようでは……うん、とにかく褒められたのは喜ぼう!」

なんだかごちゃごちゃ喋っている言葉の意味は断片的で良くわからないが。

こうやって思い切り喜ぶ箒は珍しくて、普段のクールビューティーさとは違った趣きを感じ、またぞろドキドキしてしまう。

そういやこいつも、もう15歳だ。ということは、色々馬鹿やってた子供の頃と違って、ちゃんとした一人の女の子、なんだよな……

(つて、試合前に何考えてんだ俺！ 馬鹿じゃないのか!?)

いけない。雑念の入った試合をしては、それこそ箒にも千冬姉にも後で叱られてしまうし——そんなザマをあの人に見せる訳にはいかない。

だから俺は、思いつきり深呼吸して気持ちを整え。精一杯に気を張って真剣にした顔で、改めて箒に向かい宣言する。

「じゃ、箒。行ってくるよ。この一週間、本当にありがとうな！」

箒は俺の表情を見やると、一瞬思考を停止させたような顔をして。それから再起動し、緩んだ笑顔を引き締めて、真剣に向かい合ってくれた。

「……ああ。頑張れ、一夏」

その頬が赤さを引き継いでいるのと、此方を見やる真摯で曇りのない瞳。それから少し緩んで微笑む口元が、俺にはなんとも魅力的な女性のそれに見えてしまい。

振り返ってフィールドに向け走り出しながらも、その残照を振り切るために今一度深呼吸をしなければならなかった。

『さあ！ 青コーナーから挑戦者来る！ 一年一組、学園だけでなく世界唯一の男性操縦者！ 世界最強の弟の実力やいかに！ 織斑一夏だあああッ！』

『いやあ、若くてハツラツスねえ。元気元気』

ゲートから飛び出した途端、実況の絶叫と周囲からの黄色い声が俺の鼓膜を支配した。キャーキャー煩くて内容そのものは読み取れなかったが、客席の一角を見ると俺のクラスメートが纏めて陣取り、垂れ幕を吊り下げたりしている。

その気持や、声援を送ってくれる観客の熱狂はありがたいものだけれど、それを一気に全方位から浴びせかけると、やっぱり恥ずかしい。走る疲労ではなく羞恥心で、俺の心臓はバクバク音を立てていた。

『相対しては、赤コーナー！ 入学当初から6勝0敗と、破竹の勢いでバトル道を快進撃！ その戦績とビッグマウスで、早くも来年の生徒会長レースに名乗りを上げているのは高貴たるものの義務故か!?! イギリス代表候補生、エレガント・オブ・エレガント！ セシリア・オルコット！』

『今年の生徒会長も学年最強かつ大言壮語だったツスからねー。類友かも』

それに対し、俺の真正面で結構大きな胸を張るセシリアは、すっかりこの祭りに場馴れしているようだ。実況二人に好き勝手言われようが、顔色変えず振り返りもせず、腰に手を当て、ただ悠然と、フィー

ルドの中央で俺を待ち構えていた。

小煩い輩には好きに言わせておけ、という自信と気位だろうか。それはなんとも様になってて眩しくて、やっぱり生まれが違うなあ、と実感してしまう。

だが、今から行うのは、一対一の試合。生まれ育ちは関係なしに、己の腕と相手の腕だけで全てが決まる真っ向勝負。

そういう場所だから、今まで俺を嫌っていたセシリアとも何の偏見も格差も無しにぶつかり合える。その結果がどうなろうと、そうしたという事実は、きつと大事な物だと思うから。

「来たぞ、セシリア!」

相変わらず心臓を爆発させてしまうくらい激しく動かしながら。それでも俺はきちんと目を開き、これから戦う相手を見つめた。

「……ッ! 逃げずに、来ましたのね」

「当たり前だ。受けた勝負は、きちんとやらなきゃな」

「ですが、わたくしが一方的な勝利を得るのは自明の理。こんな衆人環視の前で、ボロボロの惨めな姿は晒したくないでしょう? 今ここで無礼を謝り……黙ってパーツを受け取るというのなら、許してあげないこともなくつてよ」

セシリアの高飛車な言葉を、俺はただ受け止めるが。実況の方はその不思議さに気づいたらしく、大げさに驚いてまくし立ててきた。

『ぱ、パーツを……受け取る? おおっとセシリア選手、何だか訳のわからないことを言っているぞ! 普通バトルはパーツを賭けて、勝ったほうが総取りのはずだが!』

『あー、先輩? そこん辺りなんすが、『月刊I・S』によると、何だかみよーに込み入った事情があるらしいツスけど』

『なんだと? おい、なんで始まる前に言わなかった。情報収集はお前に一任したはずだ』

『……面倒くさいからって、自分で集めないのはどうかと思うツス』
『適材適所だ』

『ええー……』

そこから続く二人の軽妙な掛け合いに笑い、ますます盛り上がる群

衆。正直気にならないと言ったら嘘になるが、とにかく今、俺が意識を集中すべきは目の前の敵手だ。

言い返さねばならない。俺が戦う理由として、パーツがどうこうとか男の面子とか、強くなるための挑戦とか、たしかにそういうのもあるけど。

でも、そういう理由だけじゃないってことを、伝えたいから。

「悪いが、そいつは無理な相談だ。俺は今、とつてもワクワクしてるんだから」

「ワクワク？ まあ。これからわたくしに斃される事が楽しみなのかしら？」

「そうじゃないよ。セシリアがどんな攻撃をしてくるか。どんな風に戦うか。そいつを全部受け止めて——その後、俺に何が出来るか」

「な、何を訳のわからないことを……」

「変な理由から始まった決闘だけどき。セシリアの戦い方を思いつきり叩きつけられて、それから……俺も自分の全部、セシリアにぶつける。そういうのつてき、俺、なんだか分かんないけど、すつごく燃えるんだよ」

そう。この戦いが、俺とセシリアの全てをぶつけ合う場だと意識してみると。

何だか胸が高鳴って、心のボルテージがどんどん上がっていく。後先考えずに、些細な事なんて頭からポイして、今この瞬間に全力を尽くそうって、思ってしまう。

だから、耳鳴りのようにガンガン響いていた騒ぎも、さつきから遙か後ろで俺を見つめる筈の目線も。

意識し始めた途端、何もかもあっさりと消え行き。

俺の意識にあるのは今、セシリアと自分自身、それから二つのISのみ。

「……織斑、一夏……貴方は……！」

「さあ、やろうぜセシリア。最初で最後……か、どうかは分かんないけど。本気の勝負だ！」

その言葉と同時に、俺は右腕を掲げ、精一杯に強く念じ。

セシリアはイヤーカーフスをチリン、と鳴らし、瞳を閉じて。

「やるぞ！ 俺に力を貸してくれ、『白式』！」

「行きますわよ、『ブルー・ティアーズ』！」

ごうっ、とフィールド四方へ拡散するように吹き荒れる風。

それが収まった時、四角形のフィールド中央で睨み合うのは、単なる少年と少女ではなく。

純白に染まり、二枚の堅牢な羽根を背中から左右に浮かべる鎧騎士と。

青き衣に身を包み、雫のような青い粒子をまき散らす、四枚羽の天使だった。

決戦はアリーナの上で（Ⅱ）

『さあ、いよいよ始まるぞ！ 今日勝利の栄冠を手にするのは果たしてどちらか!? セシリア・オルコット対織斑一夏！ 互いのIS着装を経て、いざ、試合開始だ!』

試合場の真中、それぞれにISを着装した一夏とセシリアへ歓声が湧き上がる。この試合を見ているのは学生だけではなく、ISに関わる研究員の多くも見に来ていた。

なにせ、世界初の男性操縦者の為だけに逃えられた、篠ノ之束製作のISと。イギリスが国家の威信に賭けて送り出した新型兵器の実験ISとの模擬戦だ。

生徒たちが厳しい課題や宿題のことを一旦脳内から投げ出すように、仕事を放り出してまで見物する大人が続出しても、それはごく当然のことだった。

『オルコットの「ブルー・ティアーズ」はいつもとお変わりなしの装備。対する織斑の「白式」は……いやあ、名前の通り見事に白いツスね』
『武装は確認する限りブレード一本のみ！ これはどうしたことか？』

「I内蔵兵装で勝負するタイプなのか？」
『うーん、ちよつとわからないツスね』

実況席で語り合う二人。今まで試合で強さを見せてつけている『ブルー・ティアーズ』に関してなら十分にデータを得ているものの、一夏の『白式』については何ら公表されていないし、実際に見てもいない。

その他この場にいる殆どの人物にとっても、未知数の機体だ。だからこそ、衆目も一点に集中する。

だが肝心の本人は、それらに見向きもせず意識を向けもせずただ正面、ライフルを構えた敵手にしか注意を向けていない。

セシリアはにいに、と笑った。

純白の地面にまだ昼間の白い太陽が映えるこの場所で、ああいう好戦的な瞳で睨みつけられる心地は、決して悪いものではないのだ。

「行きますわよー!」

宣言と同時に撃鉄が引かれ、エネルギーがISのコアから、手持ちの武器へと流れ、装填され。

長銃身のレーザーライフル『スターライトMkⅢ』から、一条の蒼い光線が走った。

——ロックオン警告 敵IS射撃体勢 初弾エネルギー装填 熱源警報

『白式』のセンサーが、そうしたメッセージを音声ではなく情報として脳内へ直接がなり立ててくる、その遥か以前に、一夏は重心を傾け、回避行動をとっていたが。

——シールド作動 ダメージ値8 シールドエネルギー消費量極小

次の瞬間、代わり映えのしない人口音声が告げたように。

一夏は射撃を避けそこね、左肩の装甲へ引つかかるように被弾してしまっていた。

その失敗から、セシリアは一夏の移動速度と反応速度をあらかじめ予測し、今度は心の中でより深く唇を吊り上げた。

問題はない。こいつも今まで、この学園のアリーナで戦ってきたのと同ほ同じ中身、ほぼ同じ技量。ISという兵器に一応は習熟し、それなりに適応出来ているだけの、素人だ。

何年もの厳しい訓練や、蹴落とされれる国内選出への争いを潜り抜け、代表候補生として既に大成している己とは訳が違う。ならば、勝利は万全極まりない。

僅かな失望も、感じているけれど。

戦いの場ではそれよりも、はつきり見えた勝利への喜びが勝った。ふわり、とゆっくり浮き上がった後、セシリアは更にライフルを三連射した。

その間、前後左右には微動だにしていない。回避など必要なく、そもそも相手が攻撃してくる余裕もないだろうという楽観的にも見える分析だ。

だがそれは、概ねにして正しかった。

「うお、お、おっとー！」

ひらり、そろりと、まるで風に煽られる落ち葉のように危なげたつぷりな挙動で、蒼い射撃を躲していく一夏。

それに合わせて視線を動かす観衆は未だ目を離さないものの、既にそこから熱は消え失せてしまっているようだった。彼らが男性操縦者、篠ノ之東ご謹製、そして世界最強の姉という肩書きに抱いた仄かな期待。それを取り消してしまいたくなるくらい、その避けつぷりは慌しく、如何にも不器用で不慣れに思える。

大体、どうして彼は空を飛んでいないのか。飛行して華麗にかわしているならまだしも、今の一夏はアリーナを走り回りながら、正確な狙撃をどうにかこうにか逃げ回っている。まるで飛べないアヒルのようで、誰が見ても不格好な様子だった。

「あらあら、避けているだけでは勝てませんわよ?」

気を緩ませず昇順を合わせ続けるセシリアの口も、得意げな挑発を吐き出してしまうくらい緩んでいた。今は自分の機体にセットされている、「ブルー・ティアーズ」の特殊兵装など使わずとも制圧出来る、とすら考えてしまう。

だが、それは流石に手を抜きすぎ、気を緩めすぎであり。尚且つ、付け焼き刃としても精一杯に挑んでくる相手へ余りにも礼を失する行いだ。

なにより、自信満々に挑んできたにしては情けない、嘲笑すべき慌ただしきのその奥に。

何か、ずれているような違和感を感じる。

「わたくしとブルー・ティアーズの奏でる円舞曲ワルツ、踊る資格がありますわね」

遙か高所から放たれた言葉には、僅かながらの賞賛も含まれていた。

セシリアの肩部近くに浮遊していたプレートから、フィン状のパーツが左右それぞれ2つずつ分離する。と同時に狙撃銃が降ろされ、量子に変わって掻き消えた。

空いた右腕が高く掲げられ、指揮者がタクトで拍を刻むように振り下ろされた。

「行きなさい、『ブルー・ティアーズ』！」

機体名との元として同名を持つ4つの遠隔操作兵器は、その一つ一つが意思を持っているかのような不規則さでもって一気に一夏へ接近し、四方からレーザーを浴びせかけ始めた。

「やっぱし来るか……！」

箒とともに行なった過去の対戦記録のリサーチで、その武器の存在と情報を見知っていた一夏は、さほど驚くこともなく回避しようとしたが。

四方向から次々と襲い掛かり、尚且つその射線も射撃タイミングも定まっていない銃火を全て避けきる事など、出来るはずもなく。

「くっ、そおー！」

一撃、二撃と被弾し、その度にシールドエネルギーを少しずつ減らしていく。手持ちのライフルほど一発の威力は高くないが、それでも速射性、何より三次元攻撃による回避の難しさが、素人の一夏を段々と追い詰める。

一旦距離を離そうとしても、4つのビットが移動を妨げる位置へ的確にレーザーを打ち込んでいくので出来ない。まるで青く冷たい檻の中に囚われ、そこから出ようと必死にもがく鳩のようだ。

『オルコットのブルー・ティアーズ、今日も対戦相手を見事な動きで追い回す！ これは早くも打つ手無しかあ!?!』

『うーむ、ああなるとブレードだけじゃ、どうしようも無いツスからねえ』

実況する二人が揃って指摘するように、例え一夏が素人以上にISを使いこなせたとしても、この状況へ持ち込まれた時点で打開を図るのはかなり難しい。射撃で弾幕を張るなどが出来ればビットの一つを撃ち落とし、レーザーの完璧な包囲網にも穴が空く。そこまで上手く行かずとも、回避行動をとるビットから、隙を創り出す事が出来るはずだ。

しかし、『白式』が現在携行している武装は『雪片二型』のみ。長剣なので間合いこそ広いのだが、いくら振り回そうと遠くからカトンボのようにすばしっこく動き回るビットを落とせるはずもなく、結局一

夏は回避に専念するしかやれることがない。

「こりゃ、不味いな」

口の中で呟いても、何も変わらない状況と連続する攻撃にその場その場で対処するしか無い。

この時、セシリアは後先考えず、と形容できるほど積極的にブルー・ティアーズを動かし、連射していた。無論ビットに内蔵されたエネルギーは無限ではないので、敵の動きを封じられるくらいに撃ち続けているとは何時か限界が来るはずなのだ。

それを無視して、ひたすらに撃ちまくる。その意図とは何か。

セシリアは、一夏を動かしたくなかった。もう少し言えば、一夏に流れを渡したくなかった。

序盤の速攻から始まって、今でこそブルー・ティアーズにより対戦相手をキリキリ舞いさせているが。彼女の鋭敏な感覚、もしくは戦闘巧者としての勘は、ひたひたと後ろから近づいてくる逆転の悪寒を、はつきりと捕まえていた。

この優位性は、薄氷の上に置かれているのと同じだ。ふとしたきっかけで、簡単に変わり得る。

何の根拠もなしにそう感じたからこそ、セシリアはこのバトルにおいて短期決戦でかかろうと決心し、最初から手札を思い切り良く切ってきた。

今のところ、その決断は成功裏に終わり、一夏は何も出来ずにシールドエネルギーを削られ尽くし、敗北する——かに、見えたが。

『この、大馬鹿者っ!!』

ピコン、と通知音が鳴った後、一夏の目に映る白式のホログラム・ディスプレイから、怒号が吹き出てきた。

「ほ、箒か？ どうしたんだ、一体」

『どうしたんだ、ではないっ！ いつまで間抜けなことをやっている！』

そんな事を言われながらも、一夏は迫り来るレーザーの光をセンサーで拡張された視覚越しに「見て」からその射線を察知し、しかしその数と包囲からどうしても逃れられず、どうにか掠る程度で済ませ

ている。

だから、本来その他の事に気をやる暇など存在しないのだが。その単純な頭の何処で処理しているのか、必死な口調で喧嘩の買い言葉を返した。

「間抜けだ!? こっちは身体が……うおっ! レーザーにおつつかなくって、必死なんだよ!」

『なっ……お前、まさか……いや、そんなことが……』

ディスプレイにぴったり映って離れない顔は、一瞬これ以上ない程の怒りに歪んだが、その後何かとても迂闊なことに気づいたように焦り、そして唇をひくつかせながら尋ねてきた。

『……一夏。8番回路、どうしてる? 昨日の特訓の後、私が調整してから弄ったか?』

「え? ああ! そういや今朝、最後に慣らしをしたくてちよびつと動かした……あつ!」

箒と同じくらい焦る一夏。お互い鏡写しのように冷や汗を流すそれを見て、箒の方は一足先にパニックから脱し、深々と溜息を付いた。

『……お前という奴は、全くどうしようもない大馬鹿者だな……』

「ち、違う! 確かに忘れてたけど! そこはほら、試合前に直してくれるものじゃないのか!? ほら、ちよつと前なんか、気を効かせた面してチエックなんかしてさ!」

『昨日の訓練後も、点検は入念に行なった! ついさつきやったのは念のための、稼働に関するエラーチェックだ! センサーの回路まで見てはいない!』

「なんだよそれ!」

それから始まる、喧々諤々の言い争い。二人共互いの顔しか見えず、思いつきりの罵倒と怒気を叩きつけ合う。片方は頬を膨らませて地団駄を踏みながら、もう片方は迫り来るレーザーの雨に意識を向けながら。

『なにせ、まさか試合前にそんな重要な部分に手を付けるバカが居るなんて、考えてすらいなかったからな!』

「そんな! 俺はただ、箒が剣道部で朝練やるからって早めに切り上

げたのを、少しは見習おうかなーってだけで……それをお前、なにもバカなんて言わなくてもいいだろ!？」

朝練を見たから、という文句を聞いた箒の顔は一瞬きよんと静止したが、この場においては腑抜けた一夏への怒りの方が強いらしく、再び猛然と怒鳴り始めた。

『う、うるさい一夏のバカ！ 大体お前は昔からこうだ！ いつも肝心な所で間抜けなことを！』

「あーっ！ またバカって言った！ お前なー、バカって言った方がバカなんだぞ!？」

『ふんっ、だったら12年前、姉さんの作ったおもちゃでびっくりした私に初めて「ばーか」と言って笑ったあどけなくてかわいい一夏はどうなんだ、ええ!?!』

「いつの話だよー!」

ひよっとすると物心ささえていないほど昔の話をm平然と切り出してくる幼馴染へツツコミ返す一夏。それと同時に、休まず襲い来るレーザー攻撃に対して、両手両足を巧みに動かし被弾を最小限に抑えている。

だから、周囲の観客からすると、相も変わらずセシリアの弾幕に苦戦しているようにしか感じられないが。それより少しばかり近い場所から聞けば、会話の内容はともかく大声で罵り合っている状況ぐらいは把握出来た。

だから。

堂々とした笑みを浮かべつつ空中に鎮座している自分が、まるきり無視されたような雰囲気にも怒ったセシリアが。

「……ふざけないでくださいまし!」

突如ブルー・ティアーズを戻し、それと同時に狙撃銃を顕現させて乱射したのも極々当たり前のことだったと言えよう。

「うおっ、とと!」

いきなりの攻撃パターン変化に慌てながら、側転の要領で身体を動かした一夏は、すんでの青い銃弾を回避する。さつきまでホログラム越しの喧嘩へ意識を傾けていたようにしか見えなかったのだが、その

反応は異様に早く、鋭い。

それを意識すると、脳裏でまた悪寒が広がっていく。

「つぶねー、唐突過ぎて当たる所だった。ビットと違って、ライフルの方は威力高いしなあ」

続いて発せられる緊張感皆無な感想を聞いて、やはり戻すべきではなかったかもしれない、と心の何処かで後悔しながらも、セシリアの余裕はまだ崩れていなかった。

「試合中に口喧嘩とは、素人の割に随分と余裕ですこと」

「う……だよなあ。ごめんな」

そこから挑発を目論み放たれた言葉。

一夏はそれに、素直な受け取り方で頭を下げた。

「なっ!?」

「ちよつと他所に気、取られすぎてた。本気の勝負だつて俺から言い出したのに。ほんとごめん」

「……戯言を」

ここまで真面目に謝意を示されると一瞬困惑させられるが、此方の挑発を煙に巻く為の的外れな言葉だと解釈して平静を取り戻す。

再び構えられた長銃。そして、一旦帰還したブルー・ティアーズが肩部パーツごと、その銃口を44つ揃って一夏へ向けた。

「とにかく、雑談はここまでといたしましょう」

「ああ。無駄話は終いだ」

怒り心頭のまま、耳元で色々と喚いてくる筈との通信をカットした一夏は、それから指摘された通りオフラインになっていた8番回路をオンラインへ戻した。本来それなりに時間がかかり、同時に隙を見せる行為を僅かな会話の間にしれつとやってのけている。

「決闘の最中、悠長に通信するなんて浅ましい油断、たつぷりと後悔なさい！」

ブルー・ティアーズが再び切り離された。こちらも、会話によって生じた短いインターバルの合間にエネルギーチャージを終えて準備万端、先程の包囲攻撃よりも早いスピードで一夏へと飛来し、また散開してレーザーを打ち込もうとして――

その瞬間、一夏の姿がふっ、と消え失せた。

「……っ!？」

こういう時、人体の視覚のみに頼るほど、セシリア・オルコットは愚かではない。

攻撃対象が消えたと同時にハイパーセンサーを最大効率で稼働。

熱源、電磁波、重力波、その他あらゆる要素を分析し『白式』の所在を探知。

同時にブルー・ティアーズの操作を探知結果に連動させる。この広い戦闘空間の何処へ逃げようとも瞬時に追いかけて、追撃する体勢を整えた。

この複雑な操作が終わるまでコンマ2秒も掛かっていないのは、セシリアの技量をよく表している。一見実力の低い対戦相手に得体の知れない脅威を感じたからこそ即応出来たと考えれば、その戦闘センスも評価されてしかるべきだろう。

だがしかし、そんな彼女にも予想外、想定外は往々にして存在するのだ。

例えば、センサーが探知結果を出す直前。

ブレードを振り上げた一夏が、すぐ目の前に現れ出るということ。

「……!!!」

インターセプター。間に合わない。

ブルー・ティアーズ5番6番、同時発射。

一夏がブレードを振り下ろし、加速の勢いとISのパワーアジャストによる強い力でセシリアのシールドを半分削り取れる程の一撃を発する直前。

『ブルー・ティアーズ』の腰部に携行されていたもう2つのブルー・ティアーズが、レーザーではなくミサイルを発射して迎撃した。

「のわあああっ!」

既に剣を大きく振りかぶっていた一夏は、当然ながら回避出来ず、二発のミサイルをまともに食らい、シールドを損耗しながらよろけて後退していった。

『あああーつと！ 織斑選手撃墜！ 正面からの奇襲が、思わぬ隠し手によって敢え無く迎撃された！ あれは何だ！ ミサイルか、それともグレネードか!?』

『ミサイル装備のブルー・ティアーズ……噂には聞いてたツスけど、実際見るのは初めてツスね』

実況も観客席も、直前のコミカルなやりとりから一転した、十分の一秒単位の戦闘行動に揃って息を飲み、そして驚いた。

それは、先程まで初心者同然の挙動だった一夏が行なった唐突な^{イグニッション・ブースト}瞬間加速——に、見える急加速——だけではなく、セシリアの取った迎撃手段によるものでもある。

実のところ、セシリアは今まで両肩にある4つのブルー・ティアーズとスターライトMkⅢのみを使い、学内バトルを勝ち抜いていた。だから、客席やモニターで観戦している人間の殆どはその存在を知らなかったのだ。

入学にあたり、持ち込むISのデータを提出されている教師陣や、バトルを運営するに辺り参加機体を把握せねばならない生徒会上層部には周知のことだったが、だからこそ広くは公言されてはいない。生徒同士の、半ば娯楽にいちいち口を出す余裕が教師陣には存在せず。黙っていればこのようにバトルが盛り上がるのなら、委員会にだってわざわざ隠し武装を公言する必要もないのだから。

『思わぬ隠し玉に会場は騒然。とはいえ、むしろ今驚くべきは、見事な反応速度での迎撃ツスね。いやあ、流石代表候補生って所ツス』

解説はこう補足し、セシリアの機転と、意表を突かれたにも関わらず見事に相手をカウンターで撃墜した巧緻さを褒めたが。

「……なん、ですの。今のは」

実のところ、セシリアの表情は驚愕と戸惑いで真っ青に染まっていた。

視覚によってセンサーより早く敵を捉えたその次に、彼女が知覚したのはミサイルによって吹き飛ばされる姿だった。

つまり、思考と意識が驚愕に彩られて、機能不全に陥るまでのほんの僅かな瞬間。訓練と実戦で鍛えられた反射神経が、身体を勝手に動

かしてくれたのだ。

だから彼女は、自分がどうして接近戦用ショートブレードであるインターセプターを使わず、いぎという時の隠し手として内心で強く禁じてきた実弾装備のブルー・ティアーズを利用できたか、全くもって覚えていない。

ただひとつ明らかだったのは、もし理性に従ってインターセプターを使っていれば、意識のフィルムからコマ落ちする程の一瞬では装備と防御はまず間に合わず。仮に間に合ったとして、勢いのある一撃を押し返し切れるかどうかは甚だ疑問であることくらいだった。

「……いけると思っただけけど、やっぱ無理か。流石だなあ」

ミサイルの直撃と爆風を、シールド越しではあるがモロに食らった一夏だが、もうリカバリを果たし、今度はセシリアと同じ高度で浮かび、真正面から向かい合っていた。

そう、空を飛んでいる。今まで地を這うことしかしてこなかった相手が、当然のように。

セシリアは回想する。

確か、あの会話はなんと saying していたか。大半は聞こえなかったが、8番回路、という言葉覚えていて。センサーの8番といえば、ISの本体の制御やバランスに関わる重要な部分だったはずだ。

——まさか今までバランスを切って、それで戦っていたというのか。

(ありえませんか、そんなこと……！)

二輪の自転車から二輪とも外して、その代わりに四角い鉄板を付けて乗るくらいの無謀、というより不可能事である。

それで、不器用かつ不完全ながらもブルー・ティアーズのオールレンジ攻撃に対応して見せて、なおかつ音より早いレーザーに対応出来る。と、言うことは。

恐らく自分との会話のうちに設定しなおした、バランスの介助さえあれば。

ハイパーセンサーの探知すら掻い潜る超スピードで移動することも、不可能ではない。……の、だろう。多分。誰もやったことのない、

むしろ正気ではとてもやれないことだが。

どちらにしろ『白式』は、『ブルー・ティアーズ』の反応速度を超えて稼働した。これは紛れも無い現実であるから、セシリアとしてはそれを考慮して戦わねばならない。

もはや、目の前のISは素人の操る、地を這う出来損ないではなかった。それどころか、セシリアが今まで、学内バトルで戦ってきた同級生とは格が違う。彼らは皆、ブルー・ティアーズの織りなす弾幕に屈服し、セシリアの眼前まで近づくことすらままならなかったのだから。

(これは……油断、出来ませんわね)

明確な脅威を認識し、胸の奥に重苦しさと緊張を秘めて、今一度戦いに臨むセシリア。

その脳裏に、ある選択肢が浮かび上がった。

これほどまでに早い相手だ。自らの技量と『ブルー・ティアーズ』の全力でもって挑まなければ負けてしまう。

だから、もしかすると「あの武装」も使わなければならないのかも、しれない――

そこまで考えて、セシリアは大きく頭を振った。

「あれ」だけは使わないと、肝に銘じてきたのではないか。確かに武装としての登録も、量子化も済ませてはいるが。

だが、もし「あれ」を使えば。

この決闘が台無しになってしまう。

それだけは避けなければならない。セシリア・オルコットのプライドを守るためにも。

何より、今再びブレードを構え、此方に向かい猛然と迫り来る男への、せめてもの礼儀として。

あくまで手持ちの札のみで戦う決意を固めたセシリアは、愛銃を両手で構え、接近する白い影にスコープで照準を合わせた。

決戦はアリーナの上で (Ⅲ)

今、サッカーグラウンド数十個分の広さを誇るアリーナと、それを取り囲む観客席は異様な熱狂に包まれていた。全開で機動を行なっている二機のISの膨大な排熱と、二機の織りなす舞踏のように凄まじい戦闘によって。

『さあああ皆さん！ ご覧頂けているでしょうかこの大一番！ 私もハイパーセンサーによる感覚強化を使わなければ、付いていくのが精一杯のハイスピード・バトル！』

実況席でダリルが叫ぶように、『白式』と『ブルー・ティアーズ』の織りなす機動戦はもはや肉眼では捉えられない程に加速していた。IS学園放送部に属し、ISバトルの実況を三年間勤め上げてきた彼女でさえ、何の助けも借りなければ白と青の帯が舞い動く様しか見えない。

観客席に座る学生も各々ISを限定的に展開し、ハイパーセンサーによって漸く現状を把握する。それを持たない他の観客は只々実況に耳を澄まし、両機のシールド残量・残弾を表示するモニタにかじりつくしか無かった。

『オルコット選手離れた！ 相手は接近型、距離を取りさえすれば封殺出来るが!?!』

一夏から距離を離す機動を終えたセシリアは、躊躇いなくブルー・ティアーズを全て解き放ち左右に展開。4つの光線で網を張り迎撃の体制を整える。だが一夏は、常に動きつつ四方八方から放たれる光線の僅かな隙間を一瞬で見切り、くぐり抜けた。

細かく体を制動しなければならず「瞬時加速」こそ使えないが、その動きの素早さは尋常でなく、気づいたセシリアが自衛の為にブルー・ティアーズを戻すより早く『雪片二型』の短いリーチに辿り着けるはずだった。

だが、そんな一夏の行く手を遮るもう一つの光線が、正面から雨あられと降り注ぎ軌道を逸らす。『スターライトMKⅢ』の連射だ。

大型ライフルである『スターライトMKⅢ』は本来速射性が低く、だ

が、セシリアは反動の制御と身体の微調整で無理矢理照準を修正し連射している。

セシリアの高い技量と経験の賜物であった。

『織斑選手、後一步で後退！ 此処で被弾はしたくない！』

『なんだかんだ言つて、危ないツスからね』

一夏としてはこの状況、敢えて青い光弾の束に突っ込んでいくことも出来ただろう。『白式』にはそれくらいの突破力がある。だが危険を避けて接近を諦めたのは、シールドエネルギーの残量が残り少ないからだ。

試合序盤の危うい動き、そして真正面からのミサイル被弾。これらのダメージは確かにシールドを削っており、そのままセシリアとの差になっている。

具体的に言えば、エネルギー残量はセシリアが五割で一夏が三割といったところか。二割の差は大きく、三割の残量はもし大きな攻撃の直撃を喰らえばあっという間に消し飛んでいくものだ。

『ツスけど、オルコット選手も大分焦つてると思うツスよ？』

しかし、解説のフォルテが付け加えたように、セシリアから見た情勢もとても旗色が良いとは言えなかった。

そもそも、初心者であるはずの一夏に『ブルー・ティアーズ』の全開機動とオールレンジ攻撃を使用すること自体が異常である。国家代表候補生の全力は、本来IS学園の中でも上位に区分けされるというのに。それを一年生で、ISに触れてまだ二週間の、しかも男子が受け止めている。この異常性を理解出来ないセシリアではない。

更にセシリアのシールドエネルギーの残量は、今や残り半分になっている。

『今までのバトルでは、ダメージ量は常に四分の一以下だったツスけど……今は、半分も削られてしまっているツスから』

そう、残り半分。もう半分の消耗は無論、一夏の近接攻撃によるものである。

つまり、完全な遠距離戦用の『ブルー・ティアーズ』が、完全な近接戦用の『白式』に何度か接近を許し、攻撃を受けてしまっているの

だ。

これを危地と呼ぶずして何と言うか。

とはいえ、セシリアの回避行動やブルー・ティアーズのレーザーでのカットにより、直撃を避けて最小限のダメージに抑えられてはい

る。そうして交わし続けていけば、三割の差で一夏のエネルギーが先に切れ、セシリアの勝ちだ。

だが。

幸運にもミサイルで迎撃出来た最初の一撃。

文字通り一夏の全力であるだろうあの攻撃は、セシリアのシールドを半分削ることが出来る程、強力なものだった。

あれを食らっていたら。そう考えるだけで、セシリアの脳裏は冷え冷えと凍りついていく。

あの時の彼女はノーガードで、まともに喰らえばその衝撃で地面に叩き落とされていた。

もしそうなれば、それから続く追撃を躲すのは難しいだろう。弱々しく倒れ伏せた所で、それが身を守る免罪符にはならない。

辛うじて躲せた所で、五割を削る一撃から情勢を逆転させるのは不可能に近い。現に今、セシリアが辛うじて優勢を保っていられるのも、最初に稼いだ三割のアドバンテージがあつてこそだ。

もし、織斑一夏が最初からランサーをセットしていれば。

もし、奇襲じみた強烈な一撃を受けていたら。

自分は果たして、勝ちの目を残せていたのだろうか。それどころか、今のような互いにしのぎを削る、ギリギリの状況まで持ち込めていたのだろうか？

想像がセシリアにもたらすのは、恐怖。

国家代表候補生たる自分がずぶの素人に何も出来ず、見るも無残に撃ち落されて罵られる屈辱と、その結果によって今までの強者たる、誇り高い自分を否定される恐怖だ。

だが、それだけでないもう一つの感情も、彼女の揺さぶられる脳裏からジワリと、絞られ出る果汁のように溢れていく。

それは淡く、しかし苦くも酸っぱくもない、不思議な味がした。

織斑一夏は強い男だ。男であれば誰もが道を譲る自分に慄かず、自然体で向かい合う。そんな心の強さだけでなく、戦えばこうして自分を追い込む力をも持っている。

そして、優しい。

我欲どころか、この学園で努力している同世代の人間全員を踏みこむような理由でパーツを求めた自分を気遣い、譲ってくれるくらいに。

(織斑、一夏)

心の中で名前を呼べば、また、じわりと湧き出てくる。

感情の奔流。彼のことを、一夏のことをもつと知りたい、自分を知ってもらいたいという欲求。

浸かりたくなる。誰にも気を許さず戦って乾いた自分の心を、この熱くて甘い感情に浸してみたら、どれだけ心地良いだろう。

そして多分、水溜りの中でどれだけ力を抜いたって、溺れて苦しみはしないのだ。

強い自分を受け入れてくれる強さ。

弱い自分を包み込んでくれる優しさが、そこにはあるのだから——
——警告 敵 I S 接近 到達まで後 5. 8309 秒

柔な想像を唐突に掻き消したのは、センサーの甲高く耳障りな警告音だった。

はっと気づいたセシリアは気を引き締めながら、自分の心情の軟弱さに口を歪ませ歯を食い縛り、頬を染めた。

既に、一夏は体制を建て直して再度の突撃へと移行している。

セシリアとしては対応しなければならぬので、一先ずさつきと同じように四枚のブルー・ティアーズを射出。制御に集中しつつ、どのような機動であつても一夏の前進を防ぎ得るように配置する。

だが、一夏の行動はセシリアの予想を裏切り、単純な突撃に終始しなかった。

『おおーっとおお!?!』

実況の喚きにも似た驚きと同時に、セシリアの感覚の一部が削ぎ取

られるように喪失した。

走る頭痛。これは——3番がやられた。

『織斑選手、オルコット本人ではなくビットを！　ビットを狙っている！』

目標そのものでは無く、まずは障害物を叩き潰す戦術。予想していない訳ではなかった。

しかし、転換が早過ぎる。加速の方向も自分に定められていた。それを曲げることは、鉄パイプを素手で直角に折り曲げるくらい強引なことだ。

それに何より、『白式』のロックは撃ち落としたブルー・ティアーズではなく、『ブルー・ティアーズ』に向けられていた。

（あり得ませんわ……ロックを外さずに、別の目標を狙うだなんて……！）

ISはパワードスーツとして限りなく人体と親和するように作られているが、あくまで機械であり、戦う時は武器でもあるから、何かを狙うにはロックオンという機械的な処理を挟まなければならない。例えば操作者が意識していなくとも、ISは攻撃対象を認識してロックする。

それを探知出来るからこそ、警告や警報が成り立つ。だが、一夏は『白式』に『ブルー・ティアーズ』を狙わせながら、BT兵器のブルー・ティアーズを撃破した。

それは本来、右を見ながら左へ向かい、左を見ながら右を叩くように理不尽な行動だ。

故に、セシリアの反応は一步遅れ。その一步から、歯車は崩れだしていく。

（恐らく次は2番。一旦離して1番と4番で迎撃を……っ!?）

意識し考え、退避させる前に再び喪失感。

先手を取られ、どんどん詰められている焦りが、思考を鈍らせ——る前に、セシリアはそれを思い切り振りきった。

どうせ、落とされるならば。

（1番をおとりに4番、その後5、6番……いいえ、同時につ！）

切り捨てるか一度決めたなら、思考はスムーズに働き、行動も一夏に追いついた。

まずは1番に命令し、いつもの様に「死角」を狙わせる。

しかし、人間にとっては死角でも、ハイパーセンサーを備えたIS着用者にとってはただ反応が遅い角度でしか無く、だからあつさりとして迎撃された。

これで、セシリアと一夏の間には障害物は無くなった。今度こそ真つ直ぐセシリアへ向かう一夏。

だがその前に、青い板状の物体が割り込んでくる。最後の『ブルー・ティアーズ』だ。

これを切り倒す隙にライフルで撃つてくると思ったのか、一夏はそれを相手にせずひらりと避けた。所詮小型のレーザーが1基。真後ろから撃たれても大したダメージにはならないのだから、理に適った判断である。

しかし、セシリアの狙いは、回避行動を誘発することにあつた。

「……かかりましたわねっ!!」

歓喜に弾み、吼えるような叫びが、一夏の目を見開かせる。その左右から迫るのは、弾道型のブルー・ティアーズ。一夏が1番を攻撃している間に予め射出しておいて、弾速を可能な限り早めて迂回させていた二発のミサイルだ。

これが直撃すれば『白式』のシールドエネルギーは間違いなくゼロになる。どちらかが迎撃されても、残り一枚のブルー・ティアーズと、自身のライフルで挟み撃ちにすればいい。

(今度こそ、追い詰めたっ!)

その確信は、しかし三度、裏切られることとなる。

大上段に構えられていた『雪片二型』が、真つ二つに別れ。

そうして一夏の両手に握られたのは小太刀。二刀流。

そのまま、左右のミサイルを同時に切り裂く。爆風が広がったが、その時にはもう『白式』と一夏は、遙か先へ、セシリアの眼前、数メートル手前にまで進んでしまっていた。

(そん、なっ……!)

セシリアにはもう、何の手段も残されていない。ミサイルは装填中。インターセプターもこの攻撃には意味を成さない。

「うおおおー！」

一夏の全身から搾り出された必殺の叫びが、セシリアの顔面から脳髓へがつんと響き。その目その顔、そして握られた刀から発される、強烈で激しい気迫。

セシリアの、極限まで張り詰めていた精神が、それをまともに受けた時。

(…………い、や…………)

彼女の頭の中に、ISバトルの危険性が想起される。

シールドエネルギーがゼロになっても、ISには絶対防御という防衛機構が存在し、パイロットを負傷から守ってくれるが——極めて強力な一撃の前では、その限りではない。

そして、一夏が突き出す小太刀の一撃は、少なくとも今のセシリアにとって『極めて強力な一撃』と判断出来るものだった。

(あれを受けたら——死ぬ——?)

そう確信出来る何かが、剣先に宿っているように、思えてしまった。

「あ…………あ…………いやあああああっ!!」
だから。

セシリアは何も考えずに右手を突き出し、心でも、機構としても硬く封印しているはずの拡張領域から、それを引き出した。

右腕の青い装甲が量子に変換されたと思えば、光沢の目立つ黒に変色し、マニピュレーターが銃器を持つにはふさわしくない爪型へと変形する。

そして、一拍後。

ドルルルルルッ——!

『ブルー・ティアーズ』の右腕としてセットされた黒い砲塔が、唸りを上げて高速の弾丸をまき散らす。

狙いも付けずに放たれた機関砲は、しかしその大半がゼロ距離で

『白式』に直撃し——

「ぐっ、あっ……………」

そのシールドエネルギーを、きっかり全て削り切った。そして、絶対防御こそ発動したものの、強い衝撃に意識を失った一夏は墜落し、アリーナの地平に白い機体を墜落させた。

『なっ……!?!?』

『え……』

試合の終わりを告げるブザーが鳴り響く。観客席、実況席、そしてベンチに座って見つめていた箒も静まり返る。

〈試合終了 勝者 セシリア・オルコット〉

アリーナの巨大スクリーンが、その場に唯一つ存在する、厳正なる事実を告げた。

つまり、セシリア・オルコットは学内バトルの連勝記録を伸ばし、自らの目標にまた一步近づいた訳なのだが――

その瞳は、本来そこにあつてはいけないものを装備している右手と同じく震え。

自らのプライドと誠実さを、自分自身で打ち破ってしまった絶望に染まっていた。

なまえをよんだら

……目が覚める。それまでは気にもならなかった観客席の大歓声が、今はがんと耳に響き脳ミソを揺らす。多分、試合の時は溢れるくらい放出されていた脳内のアドレナリンが、いつの間にやら切れてしまっていたんだらう。

「一夏ー」

駆け寄る箒。ハイパーセンサーがその歩調と息遣いまで俺に伝えてくれるが、そんな物がなくなつて幼馴染の心情くらい読み取れる。心配してくれているんだ。初めての戦いで見事なまでに敗北し、地面に叩き落とされた俺を。

その心配を拭うべく、俺は立ち上がった。若干ふらつくが別にすつ転ぶ程ではない。身体には全力疾走した後の心地良い疲れと、多少の痛みがあるだけだ。

あれだけレーザーやミサイルを食らつたのにこれくらいしか傷つかないと考えたら、やっぱしISって、世界最高のパワードスーツなんだと実感できる。

それを単なる学生同士の試合に使うつてのは、かなりの贅沢なんじゃないだろうか。

「大丈夫か……？」

「ああ、なんとか。流石に無傷って訳じゃないけど、ちゃんと立てる」「そ、そうか……」

俺の言葉に首肯しつつ、それでも不安が解けないのか、箒は付かず離れずの距離で、胸を抑えるように両手を組み、心配そうな表情のまま俺を見つめてくる。こういう振る舞いをされるとなんだか気恥ずかしいというか、こそばゆくつていけない。

つい昨日までは半分鬼の形相で俺を扱ってきたつていうのに、こういう時だけ妙に女の子の子供の子してくるのは、なんというか卑怯に思えてしまう。

だから、俺は箒を安心させる為にちよつと無理してニカつと笑つてみた。

「ほら、この通り。負けはしたけど、ピンピンしてるよ」

「……っ、そうか、そうだな……」

いや、なんで素早く目線を逸らすのさ。

ますますこつ恥ずかしいし、しかも何だか、自信満々で挑んで負けたことに、気を遣われてるみたいに思えてくる。

ちくしよう、んなことされると情けなくって胸が痛むじゃないか。

「ごめんな。折角お前と特訓したのに、負けちまった」

だから俺はまず、今日までの七日間頑張ってくれた箒へ頭を下げることにした。試合序盤の体たらくも含めて、色々頑張ってくれたことに応えられてなかったな、とも思っていたから。

けれど、箒の答えはあくまで優しく、俺の健闘を称えるものだった。

「なに、そう気を落とすな。素人が代表候補に彼処まで喰らいつけた、それだけで十分、立派なことだよ」

「でも、さ……」

「言つたろう。勝つにも負けるにも、全力で挑んでこいと。お前は間違いない、お前なりの全力でセシリアに挑んだんだろう?」

俺はその問に対して、何も言わず首を縦に振った。

戦う時に手を抜いたつもりはない。だいたい、それでどうにかなる相手でもない。向こうのあれが本気かどうかは決め付けられないけど、自分自身に限っては、間違いなく本気の全力で試合をしたという自負がある。

「なら、いいさ。お前は良く戦った」

そんな俺の強い断定を受け取ったのか、箒はそれを認めるように微笑んでくれた。俺がISに乗って立っているから、自然と見上げられる形になるんだけど、なんだか見下されてお姉ちゃんぶられてるような気分だ。

同じ年で、同じくらいの生まれなのに。いや、細かく言えば箒の方が二ヶ月だけ年上だけど。

なんだかやっぱし、千冬姉に似ている——けど、それだけじゃなかった。

「それに、その、なんだ——か、かつこよかった、ぞ」

「お、おうっ」

箒さん、箒さん、思春期の男の子に、上目遣いしながらその台詞は反則です。なんというかこう、消耗しきった『白式』より先に俺の顔面がオーバーヒートしちやいますよ!?

いやその、別に他意はなくて、素直に褒めてくれてるだけなんだと思っけど!

「……しかしな」

それから暫く互いにそっぽを向きつつ微妙な時間を過ごしていたのだが、箒の一言と同時に揃って同じ方向——一人きりでスタジアムから退場していくセシリアの方を見た。

「なあ一夏、あれはやはり」

「ああ。『アサルトル・ガトリング』で間違いない」

試合の最後の最後、完全に取ったと確信した俺を襲った大量の弾丸。それを発したのは右手の黒い後付武装イコライザだった。

あれは間違いなく、『ブルー・ティアーズ』の基本兵装ではない。形も色も合わないそれは、まだセシリアの右手に接続されていて、青く整えられたISから一際目立つ。まるで呪いで変貌した異形の手のようだ。

「いやあ、あそこまで追い込んで、まだ手があったってのは予想外だったな。腕部武装だけに」

「そういうことを言ってるんじゃない!」

思いつきり怒鳴られた。俺が試合後じゃなかったら、竹刀をちらつかせていたかもしれない。

まあ俺も、この事態がどれほど意外で、かつ本来あり得てはいけななことなのかは理解している。流石に少し軽口が過ぎたかもしれない。

俺とセシリアが戦うことになったそもそもそのきっかけは『アサルトル・ガトリング』のチップを譲る譲らないから始まった諍いである。それから侮辱だの、男のプライドだのまでもつれ込んだりしてきて、根っこにあるのはパーツの問題だ。

勝った方が譲るといふのを別にして、ISバトルとしては実に正統

な理由だ。

だけど。

セシリアは既に『アサルト・ガトリング』を手にしていて、しかも自分のISに量子変換インストールしていた。

「彼女が約束を破って、あのチップを使ったというのは」

「考えられない」

箒の懸念を否定する時、俺は何故か、いつもより少しだけ強い口調で、断言していた。

「だって、あのプライドの高さだぜ？ 勝負するのに不義理を働くなんてことは無いさ」

「……随分はつきり言うんだな」

「まあな。こうして戦ったんだし」

何が気に触ったのかしらないが、唇を少し尖らせる箒に対し、俺はきつちり首肯した。

一度空を飛んで戦えば、その人のことは大体分かっちゃう。

そんな、いつか聞いた言葉。今まで空を飛んだことがないから本当か嘘か分からなかったけど、あれはやっぱり本当だ。

なんとなくだけどそう告げている第六感を、俺は否定しなくなかった。

「両手装備する、つてのも考えられないよな」

「そうだ。お前の専用機の『白式』は拡張領域パススロットが無いだろう？ 私の

『紅椿』も殆ど無い」

「で、セシリアの『ブルー・ティアーズ』も専用機だからなあ」

しかも、あれは確か、最新の第三代兵器であるBT兵器の実験機だったはず。そんな機体の拡張性が高いはずもない。『アサルト・ガトリング』は便利だけど、そのメリットに応じてかなり領域を専有する。恐らくだが、専用機に装備するのはせいぜいもって片腕が限界だろう。

「……」

二人仲良く、余り嬉しくもない考えにふけっていると、セシリアはISを解除し、アリーナの小さい出口へ小走りで駆け込んでいった。

その要素と言ったら、勝者に向かつて駆け寄る新聞部の女の子たちを
まるきり無視しているの、傍目から見たら勝者というより逃亡者
だ。

何か負い目を持っている、というのは、言われなくても明らかだっ
た。

「おい、箒」

「ああ、一夏」

俺はISを解除し、今やすつかり履き慣れた革靴で地面を踏みしめ
た。箒はそんな俺の隣で、きつと正面を見つめている。試合で疲れた
俺に肩を貸すとか、そういう考えはないようだ。

まあ、俺だつてそれでいいし、そうして欲しい。これくらいで音を
上げる男じゃないし、女の子の肩に寄りかかったまままでいるほど、プ
ライドの無い男でもない。

それに。決闘こそもう終わったが、まだ決着が付いていないのだから、
自分の足で歩かなきゃ。

俺たちは同時に駆け出して、同じく群がってくる報道陣の群れを強
引に突き抜け、アリーナから脱出した。

それから、一時間くらい後。女子寮の近くで黄昏れていたというセ
シリアを箒が発見し、校舎の屋上まで連れ出してきた。その、刑場に
引き出されたようにずうんと沈んでいる雰囲気を見た所、どんな言い
方をしたのかは知らないが、我が幼馴染はかなり強引だったようだ。

「……一夏、さん、わたくしは」

「おーっとストップ。まずはこつちの話からだ」

先手を取って懺悔しようとしたお嬢様を、やんわりと押し留める。

「ごめん。実は、俺……」

それから、一週間前に語れなかった此方の事情を、何一つ隠さず述
べた。俺がパーツを求めているのは、ただの金目当てだった、という
こと。勿論セシリアは信じずに否定したが、『白式』の拡張領域が皆無
であることを見せてやったら、戸惑いながらも納得してくれた。

「……では、今までのことは全て……わたくしの、勘違い？」

「あー、そうなる、かも」

震えながら言ったセシリアは、ますます雰囲気を落ち込ませて、申し訳無さそうな表情になる。

彼女からしてみれば、最初からパーツが欲しいわけじゃないと繰り返し返していた俺の言葉を、つまらない嘘と断じてきた訳だ。更に、そんなしようもない過失から、あれだけ盛り上がった決闘騒ぎと相成った。

「まあ、俺んち貧乏……って程じゃないけど、ここの皆と比べたらお金持っていないし。ほら、別にセシリアみたいな日本代表候補、って訳でもないし」

「そん、な……わたくし、そんなことで織斑さんを……」

穴があつたら入りたい、って諺がイギリスにもあるのかどうかは分からないけど。もしあるんだつたら、セシリアの脳裏にあるのは間違いないくそれだろう。

「いや、他所から口を挟むのもなんだが、あながちそれだけでもないぞ？」

だが、そこで意外な助け舟が入った。あんまり落胆しているのを見かねたのか、箒が割り込んできたのだ。

「こいつも、別に拘る理由がないのだから、決闘を断ることは出来たはずだ。それを受けたんだから、戦いたかったのさ」

「……へ？ 戦いたかった？ どういうことですか？」

「男子特有の悪癖さ。強い奴がいたら戦いたくなる。そのために、お前の悲しい誤解を良い口実だとして放置し、大事にした。そうだろう？」

「う、それ、は……」

失敬な、と言いたい気分だったが、俺は言葉を失った。実際あの時、セシリア・オルコットと戦いたくなかったのか、と言われたら——嘘になる。

いや、もうはつきり決めつけよう。俺は戦いたかった。

ISって力がどんなものか、何が出来るのかを掴むために。

「全く、誤解を解くなら他にも方法はあるだろうに……」

呆れて肩を竦めた筈に、二三言言い返したくもあつたが、如何せん正論なのでどうしようもなかった。ちくしょう、あれだけノリノリで扱いておいて。

「そういう訳で、だ。今度はそちらの理由についても聞きたいものだな、セシリア」

「え、あ……」

「心配するな。新聞部や委員会には知らせない。私たちだけの秘密だ。だからここまで連れてきた」

そのまま話の進行役まで持つていこうとする幼馴染の、一々強いけれど信頼出来る口調に促され、セシリアはほつり、ほつりと口を開き始めた。

「あの試合の時、わたくしが使った『アサルト・ガトリング』は。私達の間で争われていたものとは、また別の物ですわ」

その言葉と同時に、セシリアは制服のポケットからパーツのチップを取り出す。使われたチップは自動的に回収されるから、ここに差し出されたものは間違いなく未使用だ。

「既に持つて、量子化も済ませていたんだな？　ならなぜ、パーツを欲しがったんだ？」

「それ、は……」

流星に躊躇いが残っているのか、10秒程無言のまま口をまごつかせていたセシリアだったが、ついには決然として口を開いた。

彼女によれば。最初は純粹に、『ブルー・ティアーズ』の弱点である接近戦をカバーするため『アサルト・ガトリング』を求めていたという。確かにあれは効果的だった。俺が予測していなかったというのものもあるが、仮に分かつていたとしても、あの弾幕を回避するのは難しい。

そして、彼女は授業が終わると、毎日校内を歩き回って——時には情報や交換用のパーツを巡り、何回かのバトルを通して——ようやくと、『アサルト・ガトリング』を手に出来た。

しかし。

「わたくしの国から、要請があつたのです。そのパーツを此方に送れ、と」

篠ノ之束の作ったパーツなのだから、能力は勿論、使われている技術、そして設計思想も世界の三步先に進んでいる。セシリアを国家代表候補生として育成しIS学園に送り込んだイギリスからしてみれば、喉から手が出るほど欲しい物だ。

だから、セシリアがパーツを手に入れ、『ブルー・ティアーズ』の拡張領域に入れた時。同時にそれを管理していたイギリス本国からある『主張』が為された。

そのパーツは——イギリス政府が所有する『ブルー・ティアーズ』の追加武装となつたパーツは——等しく我が国の所有物であると。

「なんだよ、それ……断るとか出来ないのか？」

「そんなことが出来るか。なあ、セシリア？」

俺の疑問を即座に退ける筈の一言に、セシリアもこくん、と頷く。一般市民の俺にはちよつと想像も出来ない話だったが、ISがらみの国家機関、と言うものにそこそこ関わりのある筈は大体の事情を察しているらしい。

「でもさ。専用機つてのは自分だけのものだ」

「何を言う。国家代表の専用機は、そのまま国家のものに決まってるだろうが。ISを一個人が所有する、なんてことが出来るものか」「え、俺の『白式』と、筈の『赤椿』、それに、ここで配ってるのは全部」

「……織斑さん？ その、しよみ……貴方にも分かるように言いますと……わたくしたちのようなIS適正の高い人間は、その殆どが国家機関、あるいは企業に所属しています」

それからセシリアは、比喻を使ってここの学生と国家・企業との関係の説明してくれた。

「言うなれば、わたくしたちの保護者、扶養者は国家そのものなのです。ですから、織斑さんが考えている経済的なサポートだけでなく……国家の利益のため、その要求を飲まなければいけないこともあるんですの」

「そ、そうなのか……なんていうか、大変なんだな」

「一夏。お前は訓練中も『お金持ちついでいいよな』等と言っていたが……金持ちには金持ちなりの、代表候補には代表候補なりの苦労もあるんだ。理解しろ」

何でお前が偉そうにしてるんだよ……と突っ込みそうになったけど。考えてみれば箒も、小さい頃からISと姉絡みで「そういう世界」に入り込んでいたんだよな。俺とたまに会う時はおくびにも出さなかつたけど、考えてみればそれは気遣いだったのかもしれない。

知らぬは自分ばかりなり、か。

俺だつて姉さんがブリュンヒルデ世界最強なんだから、ちよつとはその辺の空気を分かつてたつていいはずなんだが……

ううむ、考えてるとなんだか、小遣い程度で真剣に悩んでた自分が小さく感じてしまうぞ。

「……で、肝心のパーツの処遇についてだが。私に一つ提案がある」
「提案？」

「これの所有者は一夏だ。先に見つけて、しかも決闘に負けたんだからな。そこで、一夏とイギリスの当局でパーツを取引する」

俺もセシリアも、感心して首を縦に振った。

なるほど、それならセシリアは自分の『アサルト・ガトリング』を送らなくて済むし、俺は俺でイギリスから謝礼を貰える。どちらの角も立たない解決法だ。

「でも大丈夫なのか？ 学園のパーツを勝手に送っちゃつて」

「問題ない。手に入れた以上、そのパーツの所有権は個人にある……というのが姉さ、いや校長の姿勢だ」

「それに……余り大きい声では言えませんが、どの学生も……余分にパーツを確保して、自分の国に送っていると聞いています」

セシリアが小声で付け足した事実を聞いた時、俺の脳裏に浮かんだのはあのマイペースな、のほほんさんの顔だった。

自分で使うだけでなく、「保護者」に恩返しや点数稼ぎをするためにチップが必要なら、それだけ需要は高い。道理で楽しそうに『チップバーター』をやっていた訳だ。

IS学園に通う人なんて、皆が皆お嬢様で「あらあらうふふ」とか言いつつ紅茶を楽しむ、世俗から乖離して清楚な女の子だと思っただけだ。

「なんだか急にボールが剥がれたというか、俗っぽさが見えてきたというか。うーむ、複雑。」

「そして、セシリアには取引の仲介をやってもらう。それで、一夏を誤解で決闘に巻き込んだ件のお返しという形にもなるぞ？　どうだ」

「そういうことでしたら、喜んでお引き受けいたします！　わたくしも交渉事には多少自信がありますから、必ず成功させてみせますわ！」

箒の提案に対し、セシリアは手をがちり取って承知した。なんだかその目がいやに燃えているんだが、そこまで気合を入れるような事なのか？

「当然ですわ！」

恐る恐る聞いてみると、これまた強気な返事が帰ってきた。

ところでどうも俺、なんだか気が強い女性ばかりと出会う気がする。千冬姉も箒もそうだし、東さんもあの人もおねーさんたちも大体芯が強い。そして、たまに俺の話を聞いてくれない。

「貴方には今回色々ご迷惑をお掛けしました。わたくしも少々大人げない振る舞いをして、貴方を危ない所へ引きずりこんでしまった、と反省しております」

「いや、いいんだ。もう気にしてない。誤解なんて、誰にだっただけさ」

「あつ……ありがとうございます」

「それに、俺だって貴重な経験をさせてもらったし。セシリア、強かったから」

「なぜかって？」

「翻ってしおらしい態度で謝罪してきたので、気にしないでという意味で返事を返したら。」

「って、何をおっしゃるんです！」

途端にぐぐいつと近づいて、そう叫んできたからだ。

「あなたって人はどうしてそう……！ 代表候補生であるわたくしが！ このセシリア・オルコットが！ 互角の……戦いを強いられたというのに！」

「いや、褒めてくれるのは有難いんだけどさ……互角だなんて、そんなに言われるくらいか？」

悔しさに顔を歪ませ、でも何故か頬をほんのり赤くしながら噛み付くセシリアに、俺は怪訝な顔で言い返す。

「だって、そっちのシールド半分しか削れなかったんだぞ？ 拳句、虚を突いたはずの奇襲はミサイルで撃ち落とされるし、ブルー・ティアーズの囿にはまんまと引つかかっちゃってるし……」

「なっ!? 遠距離型にブレード一本でダメージを与えることがどれだけ難事か……！ だいたい、ランサー無しでISを起動させるなんて狂気の沙汰！ ともすれば身体に大きな負担が掛かるというのに、一体どういう鍛え方を」

「そこまでしろ」

ヒートアップしたセシリアを抑えてくれたのは箒だった。流石は俺の幼馴染、いい仕事をしてくれる。小さい頃からいつもそうだった。俺はこうして良く女の子に絡まれ、どうすればいいか分からず困惑する正にその時、箒が現れて解決してくれるのだ。

……まあ今回は、自分の教練法に文句を言われたから、なのかもしれないけど。

「とにかく、双方これで話はついた。後腐れなく一件落着、めでたしめでたしだ。な？」

「お、おう」

「……」

そのまままとめに繋る箒へ、俺は返事を返す。ちよつと強引な気もするが、何か他に急ぎの用事でもあるんだろうか？

「よし、では解散だ。明日も授業があるし、お互い忙しいぞ。一夏も早く寮に戻って……」

「お待ちなさいー！」

屋上の乾いた空気に、凜と響く高い声。俺も箒もびたつ、と足を止

めたが、セシリアが呼び止めたのは俺一人のようだ。

「なんだよ、セシリア」

「……一夏さん」

あれ？ セシリア、今、俺のこと名前で——

「よろしければ、その……あなたのように強くて、あと、優しい殿方とは初めてお会いしましたし……わたくし、一夏さんと……」

——って、なんだ。そうか。名前を呼ぶって、やっぱり、そういうことか。

気づいた途端、心の中から嬉しさが泉のように湧き出てくる。試合で疲れている俺の重い体が、思わずスキップしてしまいそうになる程に舞い上がる。

セシリアも、今まで見た中で一番明るい顔だ。そうだな。こういう時は互いに笑顔でいないと駄目だもんな。

「ああ、皆まで言うなよ、セシリア。分かってる、分かってるって」

「え……あ、そ、そうなんですの……？」

「おう。そつちから言わせるなんてのは失礼だからな。こつちから、ちやんと言うよ」

それにしても、ああ、戦ってよかった！

経験とか、ISに慣れるとか、そういうことはまた別に！

いや、ある意味それだって些細な事かもしれない。この期待と、高揚感に比べれば！

「あ……あ……ダメですわ、一夏さん！ ここには他の人だって」

「恥ずかしがることあるかよ。箒だって分かってくれるさ」

大丈夫。戦ったんだから、俺にははつきり分かる。

セシリアはプライドが高いし、ちよつと高圧的だけど。それは何かに——ISに、全身全霊で打ち込んだことの裏返しで。凄く生真面目で真剣な、凄い女の子なんだ。なら、同じく実直で真剣な箒とも仲良くなれるし、大丈夫。

だから——

「俺と友達になろうぜ！ セシリア！」

「はい、一夏さ……えっ？」

沈黙。春先に似合わぬからっ風が、俺とセシリア、箒の間にひゆうつと流れた。

「お、おともだち……？ ああつ、最初はお友達から始めましょうというテンプレートのな！」

「へ？ いや、友達から何になるんだ？ 別に俺は、セシリアと友達になりたいだけだぞ？」

「え……？」

「ほら、こうして戦って、互いに名前も呼びあつたんだし。それにクラスメートだから、少しは仲良く行きたいじゃんか」

俺の言葉がどう作用したのか、愕然とした表情のセシリア。そのままかくり、と90度横を向いて、そこにいる箒と何やら無言で目線を交わす。

あ、箒が首を振った。なんだか、死刑宣告を告げる医者のように見えるのはどうしてだろうか。

「う、ぐ……！」

さつきまでの可愛らしい笑顔から一転して、苦虫を百匹噛み潰したような顔をしながら、セシリアは俺から離れていく。そして。

「一夏さん！」

「は、はいっ」

「お友達にはなつてあげますわ、けど！ これで終わりだと思わないでくださいまし！」

と、何やら歯切れの悪い捨て台詞を返し、ぷいっとそっぽを向いて脱兎の如く走り去っていった。

なんだか、最初に俺を馬鹿にした時よりも不機嫌な様子だが、一体どうしたんだろう？

というか、何が終わらないんだろう。また、決闘でも申し込まれるのかな。

——ところで箒よ。

「……はい。また犠牲者です、姉さん。止められませんでした……はい。追いかけて、後できつちり、あいつの罪深さについて教えてやる

つもりです。え？ 敵に塩を送る？ いえ、彼女もまた、あいつの愚かさには踊らされただけの、犠牲者の一人に過ぎませんから……今のこところは「

不安になるような電話をしながら、冷たい目で俺を見るのは止めてくれ。